

中国東南海岸地区における伝統的民家建築の特質
に関する研究

A Study on the Characteristics about Traditional Vernacular
Architectures in Southeast Coast of China

横浜国立大学、都市イノベーション学府
建築史・建築芸術研究室
12WA907 周易知

目次

目次.....	1
序説.....	5
研究背景	5
既往研究	8
研究目的と範囲.....	9
論文構成	10
第一章 東南海岸地区の伝統的民家.....	11
1.1 中国東南海岸地区	11
1.1.1 地理と気候.....	12
1.1.2 歴史と人口移動.....	13
1.1.3 方言系統.....	16
1.1.4 東南海岸地区の特有的な文化.....	17
1.1.5 東南海岸地区の地域集団.....	18
1.2 伝統的集落.....	19
1.2.1 東南海岸地区の伝統的集落.....	19
1.2.2 形態	21
1.2.3 歴史と現状.....	22
1.2.4 主な生業.....	22
1.2.5 氏族集住.....	23
1.3 伝統的民家.....	24
1.3.1 東南海岸地区の伝統的民家.....	24
1.3.2 歴史	31
1.3.3 建築形態.....	33
1.3.4 家族構成.....	34
第二章 東南海岸地区伝統的民家における平面的特徴	35
2.1 平面の類型.....	35
2.1.1 基本概念	35
2.1.2 「一」字式平面.....	37
2.1.3 合院式平面.....	37
2.1.4 囲屋式平面.....	40
2.1.5 方言と平面空間.....	41
2.2 平面の分布と形式	42
2.2.1 各平面類型の分布	42
2.2.2 間取り	47
2.2.3 建築空間の機能とヒエラルキー	55
2.3 平面に関する特徴	60

2.3.1 横方向展開.....	60
2.3.2 対等的な生活空間.....	63
2.3.3 合院式に関する時代考察.....	65
第三章 東南海岸地区伝統的民家の構造的特徴.....	71
3.1 軸部.....	71
3.1.1 フレーム.....	71
3.1.2 木造フレームの建造方法.....	73
3.1.3 梁貫.....	77
3.1.4 柱と礎石.....	82
3.1.5 軸部作法の地域性.....	87
3.1.7 軸部に関するいくつかの考察.....	102
3.2 外壁.....	104
3.2.1 板壁と真壁.....	104
3.2.2 版築壁とレンガ壁.....	105
3.2.3 壁構造の地域性.....	107
3.3 軒.....	113
3.3.1 吊束.....	113
3.3.2 斗拱と挿肘木.....	115
3.3.3 方杖とコーベル.....	118
3.3.4 その他.....	119
3.3.5 軒構造のヒエラルキー.....	120
3.3.6 軒構造の地域性.....	125
3.3.7 軒構造の時代性考察.....	132
第四章 東南海岸地区民家建築の系譜.....	142
4.1 東南海岸地区民家の地域性.....	142
4.1.1 地縁条件と民家特徴分布の関連.....	142
4.1.2 特徴の地域分布.....	147
4.1.3 東南海岸地区民家の組み分け.....	153
4.2 東南海岸地区民家の地域性の特徴.....	155
4.2.1 方言区から東南海岸地区民家の地域性を見る.....	155
4.2.2 人口移動から東南海岸地区民家の地域性を見る.....	156
4.2.3 川流域から東南海岸地区民家の地域性を見る.....	157
4.3 東南海岸系民家.....	157
4.3.1 東南海岸系民家の特質.....	158
4.3.2 東南海岸系民家の形成と衰退.....	159
4.3.3 東南海岸系民家の位置づけ.....	161
4.3.4 東南海岸系民家の系譜.....	163
まとめ.....	164
各章のまとめ.....	164
結論.....	165
これからの展望—東南海岸地区伝統的民家と日本中世建築の繋がり.....	165
参考文献.....	167

付録 東南海岸地区伝統的民家データベース	170
----------------------------	-----

序説

研究背景

(1) 中国における伝統的民家の現状

「住まい」は人類永遠のテーマである。厳しい自然環境を乗り越えるため、人類は様々な資源を利用して、「住む場所」を創造した。その様々な「住む場所」があるからこそ、様々な文化が誕生することが出来るだろう。しかし近代化と共に伝統的な住む場所は存続の危機がある。

伝統的民家の現状を論ずる時、浅川滋男氏は「住宅は住むための機械であるというル・コルビジエの宣言から、20 世紀の建築界は、あらゆるたぐいの建築を機械化・産業化することに終始してきた。現実には、工場・商店・官庁などだけではなく、われわれ自身が住む住まいにさえ産業化の波が押し寄せ、住居環境は大きく変貌を遂げている。住居という複雑な文化要素の集合体は、その背景にある社会制度と共に解体し、大量工業製品としてのプレファブ住宅や集合住宅に置き換えられ続けているのである。」¹と、近代社会の伝統文化喪失指摘した。

西洋の建築世界は、1970 年代以降活発になったポスト・モダニズムの運動と共に、地域建築と伝統建築の地域性を再び重視するが、後進する現代中国において、1979 年の改革開放によって近代化と都市化が進展し、大量の伝統的民家を取り壊されていて、まさにこの「住居文化解体」の最中である。産業化された住宅は、まるで工場のような味気ない均質的空間で、歴史的環境や伝統的町並みの混乱を助長する主要な担い手となった。特に、中国のような西洋文化を吸収し近代化した国には、地域の建築文化を失い、「千城一面」²という状態になってしまう。浅川氏も指摘するように P・L・バーガーによれば、これら「安住の地」を失い人々は「故郷喪失感」にさいなまれている。³

幸い、近年、伝統的民家建築の調査が行われる機会が増え、住居環境に対する伝統的住宅・町並みの保存と活用も現れ始めた。今回研究対象とする南東中国においても、これまで蓄積された大量のデータを活用し、様々な角度から、住居のあり方の多様性や普遍性を考察することができるようになった。そして、地域の伝統的民家を体系化して、従来よりも一歩進んだ東南海岸地区伝統的民家の建築様式を把握することもできる。

(2) 日本中世の新しい建築様式と南中国の関連性

一方、日本建築史上、鎌倉時代に中国から伝来した宋の建築様式は大仏様・禅宗様として大きな役割を果たした。この宋様式は、田中淡氏によると福建地方の様式と指摘された。⁴大仏様は平重衡らによる南都焼討で焼け落ちた東大寺の再建の際、入宋経験のある僧重源によってもたらされた建築様式である。そして禅宗様は鎌倉時代中期から禅宗寺院を中

¹ 浅川滋男『住まいの民族建築学』建築資料研究社、1994、第 18 頁

² 「千城一面」は都市化とともに、文化的な特徴を失い、すべての都市が同じコンクリートの林になることを批判する中国学界の表現である。最初は袁行霈「基層居民組織対社区伝統文化保護的作用」中国文物学会伝統建築園林学術研究会論文集、1998 から始め、2007 年の江明「千城一面与自主文化」人民論壇、2007、第 60 頁に中国学界で広く利用する。

³ 浅川滋男『住まいの民族建築学』建築資料研究社、1994、第 19 頁

⁴ 伊東隆一、松岡高弘「大仏様の源流を求めて」、『建築雑誌』、Vol.114, No.1433, 1999.2、第 46 頁の中に記す田中淡の指摘。

心に導入され、武士の帰依を受けたことで 13 世紀後半から盛んになった様式で、当時の中国建築の直写が目指された。大仏様は禅宗様と共通する部分も多く、あわせて鎌倉新様式または宋様式と総称される。

宋の時代は日宋貿易が盛んで、当時の宋側の貿易拠点は、明州（今の寧波）・福州・泉州など全部東南海岸地区にある。⁵宋国からの建築技術は、陳和卿などの宋人工匠たちや日本からの留学僧によってもたらされが、その技術交流の中で南宋における寺院造営や造船、棺桶製作のための木材を周防国などの日本産木材の大量輸入でまかなうこともあった。東大寺再建で知られる重源が阿育王寺舍利殿造営に日本産木材を提供したことや、臨濟宗を日本に伝えた栄西が天童寺千仏閣再建に日本産木材を提供した事跡はよく知られている。⁶資料は多くないが、日宋の建築文化における交流と影響は確かに存在していた。そして、東南海岸地区の地域文化は、この交流の担い手となる。

このように、南東中国と日本の建築文化の交流が中世以来存在していたことは確実であるが、そのことを証する中国側の中世遺構は少ない。ただし、東南海岸地区を対象として、現存する地域の伝統的民家建築を研究すれば、伝統的民家に継承された建築要素を通して、中国中世の建築様式と日本の鎌倉時代新建築様式に関する有用な知見を得る可能性がある。

（3）南中国の歴史と伝統文化をめぐって

北穴居、南巢居

『礼記・礼運』に記載された「昔者先王未有宮室、冬則居營窟、夏則居橧巢」⁷から、中国原始社会の住みかたを理解することができる。多数の考古学の証拠から、中国の原始社会には、二種類の住み方式が存在したことを証明できる。その一つの住み方式は、黄河流域の堅穴住居で、もう一つは長江流域の巢住居（後の高床住居）である。⁸

北方堅穴住居文化の代表は「半坡遺跡」である。。この新石器時代の遺跡は、西安市の東にあり、約 3000～5000 年の歴史を持っている。楊鴻勳の研究によると⁹、半坡遺跡の堅穴住居は平面的に四角と円形二つの種類がある。その建造方法は、最初に約 20 平米（大きいのは 40 平米まで）、深さ 50～80 センチの穴を掘って、穴の周りに木製短柱が緊密に並んでいる。短柱は藤や藁などに結ばれ、壁となる。防寒のため、壁外は草と泥の混合物を塗りこめていた。壁の上に草屋根があり、屋根は四角錐や円錐の形とする。一方、円形平面の小屋は、堅穴を掘らず直接地面の上に建造されていた場合が多く、壁は同じく木骨泥面とし、には、1～4 本の柱がある。

半坡遺跡の住居形式は、①早期：堅穴式、②中期：半堅穴式と地面式の混用、③晩期：多部屋式の地面住居、の三時期に分類され、およそ堅穴住居文化は堅穴住居—半堅穴住居—地面多部屋住居という発展ルートを経ていた。

一方、南方の巢住居文化は「河姆渡遺跡」が注目される。この新石器時代の遺跡は、浙江省余姚市にあり、6000～7000 年の歴史を持っている。河姆渡遺跡の住居建築は高床式住居である。基本的な作法は掘立柱の上に板のプラットフォーム（床）を作って、更に上に別の柱を立て、屋根を作る。発掘された河姆渡高床式住居の遺構は、13 列の掘立柱が残って、三つ以上の建物があると推定されている。復原したものは長さ 23m、奥行き 7m、

⁵ 森克己『日宋貿易の研究』、1975

⁶ 岡元司『宋代沿海地域社会史研究』汲古書院、2012

⁷ 後漢の鄭玄注、唐の孔穎達疏『礼記正義』第九編

⁸ 安志敏「干闥式建築的考古研究」『考古』、1963.2

⁹ 楊鴻勳『楊鴻勳建築考古学論文集』清華大学出版社、2008 所収、「仰韶文化住居建築發展問題的探討」

前に1 mの廊があって、全体の建物は地面から約1 mを離れて、建物自体の柱高さは約2.5 mである。柱梁の上に垂木を直接架け、その上に茅の屋根がある。掘立柱プラットフォームの構造は掘立柱を立て、大引と根太を取り付け、その上に板を敷く。¹⁰

しかし、中国の原始社会における巢住居遺跡は未だ発見されていない。楊氏の研究と推測によると¹¹、巢住居の原始形態は一本の木上に巢のような小屋を建造する。すなわち、木の枝の間に小枝を敷いて、住む場所を作る。そして、上の枝の間に屋根を作る。これは古代文献の中の「繒巢」の原型である。この「繒巢」に基づいて、4本の木の間に、梁を張って、より大きい部屋を作る。さらに、高床式住居（干欄式住居）になっていた。とにかく、巢住居の発展経路は一本の木の巢住居—多数の木の巢住居—高床式住居である。

古代の人たちは、厳酷の自然環境を乗り越えるため、南方の巢住居と北方の穴住居二つの系統を生み出した。そして、今の住居建築も、基本的にこの地域性を保っている。

「夷夏」説と南中国土着文化¹²

中国の漢族統治者は古代から「夷夏の別」を重視し、自分（諸夏）と周辺の少数民族（四夷）を区別する。しかし、歴史と人類学の研究は、定住農業文化が東アジアから起源し、中国文化の下地になり、青銅の騎馬遊牧文化は中央アジアあるいは西アジアから伝入し、中国文化の表となることを示した。すなわち、中国文化の実体は「夷」と「夏」の混合である。

日本の縄文文化、韓国の土器文化および中国の新石器時代文化は、いずれも青銅と騎馬文化を生み出した跡がない。日本の騎馬文化は中国や東北アジアから伝入したことを主張する日本人学者がおり、韓国の学者も本国の青銅・騎馬文化は中国や中央アジアから伝入することを認める。中国の学界では、青銅文化の起源に対して未だ諸説あるが、近年に至り4000年前の文化要素が次々と発見・確認されている。それは青銅・飴牛・馬・ヤギ・羊・小麦・レンガ・黄金の信仰及び火葬・天神信仰などである。

石器・土器・稲・アワ・豚・犬・堅穴や高床住居・土葬など定住農業文化の要素は、東アジアで8000～10000年の歴史を遡ることができる。しかし、青銅・小麦・飴牛・羊・馬・火葬・黄金器など騎馬文化の要素は、4000～5000年の歴史しかない。これらの考古学の研究から導かれるのは、「中国の新石器時代の定住農業文化は本土起源で、青銅時代の騎馬遊牧文化は外来要素である」という考え方、すなわち中国文化の融合説である。

ゆえに、中国文化の融合説が始まる。傅斯年は『夷夏東西説』の中で「夏というものの実は西方の帝国あるいは国の同盟であり、なんども東方を攻め込んだ。殷商は逆に東方の帝国であり、夏と鬼方を滅ぼす」という説を主張し、凌純生も中国文化の下地が東の海岸部の海洋文化すなわち夷文化であり、「華夏」民族は大陸文化の代表であることを指摘する：「1、アジア地中海（黄海と東シナ海）の大陸海岸は環太平洋古文化の起源地であり、中国古代からこれを『夷』の文化と呼ぶ。これは海洋文化で、その民族は、北にいるのは『貊』と呼び、南にいるのは『蛮』あるいは『越』と呼ぶ…2、チベット高原と黄土高原からの大陸文化の民族は『華夏』である。彼らが東へ行き、海洋文化と接触のあと、約二千年の融合を経て、中原文化になってきた。今考古学が証明できる殷商朝はその融合文化の代表である…3、華北平野に華夏文化と東夷文化が融合した中原文化は、江南と嶺南の南夷文化より優位に立つとはいえ、南夷文化との融合は今も完成していない…」。

南方系住居の存続

中国文化は騎馬遊牧文化（夏）と定住農業文化（夷）の融合から生みだされたものだから

¹⁰ 浙江省文物管理委員会・浙江省博物館「河姆渡発見原始社会重要遺址」『文物』1976.8

¹¹ 楊鴻勳『楊鴻勳建築考古学論文集』清華大学出版社、2008所収、「中国早期建築の発展」

¹² 本節の内容は易華『夷夏先後説』民族出版社、2012を参照する

ら、住居文化も同じ影響を受けたはずである。中原文化は主流になったあと、中原漢族から、周辺土着民族への文化輸出の止まったことは一度もない。南夷文化との融合は今も完成していないとはいえ、長い歴史の中でも、中原漢人が南への移動とともに、南方稲作文化は中原文化と何回も重ね合わせていた。

南方系住居もこの文化の重畳からの産物である。近世の南方系住居は、古代南方土着住居が中原の住居文化・建造技術の影響を何度も繰り返し受けた結果である。この時間軸の上の段階的な様式変化は、南方の複雑な地理状況と多様な土着文化を原因として、今の建築形式の地域性特徴に転化する。つまり、現在の南方系住居文化は、北方建築文化からの影響を様々に伝えながらも、土着建築文化要素も引き続き継承し、両方の交流・混合を経て生み出された要素も大量に存在している。これは、今南方系住居の豊富な建築表現の原因である。

現在の東南海岸地区には、明時代以降の伝統民家がまだたくさん残っており、その中に地縁・気候・文化圏（方言区）の違いによる多様多彩な民家形式が認められる。その民家の多様性は、いくつかの条件の相違性からである。つまり、東南海岸地区の文化差や地域性がある原因は、先史から古代までその土地に住むいろいろな土着民である。それらの地域には、土着文化の下地を持って、漢民族の征服より漢文化を受け取った。そして土着文化と漢文化の融合程度の差は文化・建築の地域差としてあらわれた。

既往研究

（1）中国人における民家の研究

中国人による民家研究は 1930 年代から始まる。建築史家の龍非了は河南、陝西、山西などの地区の窑洞という洞窟住居を研究し、『穴居雜考』を書いた。1940 年代、劉致平教授は雲南省の古い民家を調査して、論文『雲南一隅印』を書いた、これは、平民社会の伝統民家研究のはじめである。その後、劉氏は四川各地の古い建物を調査し、『四川住宅建築』一文を書く、本『中国住居建築簡史—都市、住宅、園林』に所収した。陸元鼎によると、中国建築界に、住居建築専門の研究は、は 1940～1941 年間、中国雲南、四川、西康などの地区に大量の調査をまとめた劉敦楨教授からである。劉氏は『西南古建築調査状況』一文を一文を書き、その序論において住居建築を独立的な分類に認定していた。¹³

中華人民共和国が成立した後、劉敦楨教授は過去 of 古建築古民家研究に基づいて、中国建築研究室を創立した。そして農村地方において多くの調査を行い、たくさんの伝統民家を発見し、劉敦楨教授は 1957 年に『中国住宅概説』を執筆した。その著書は、平面や間取りから、中国各地の伝統民家を論じたもので、過去 of 古建築研究が宮殿寺院などしか重視していない状態を改変した。このように中国住宅建築史は、はじめに中国国内の建築界から注目される。

1960 年代から始め、中国国内では、大量の伝統民家調査が展開した。調査からより多くの類型相違・組合自由・作法豊富な伝統民家を発見した。この時期、民家の歴史年代・生活使用状況・建築構造作法・内外空間・造形・装飾など細かい部分までの研究も始まる。代表的な成果は、中国建築科学研究院編集の『浙江民居調査』である。この本は全面的に浙江地区の平野・水郷・山地民家の類型・特徴と民家の外観・空間・材料・構造などの作法をまとめていた。

近年、中国国内の民家研究は、さらに成長し、以下の 3 つの傾向を強めている。①国際的な学術交流。②民家研究が単純の建築史研究から社会学・歴史学・文化地理学・考古学・

¹³ 陸元鼎「中国民居研究五十年」『建築学報』2007.11、第 66-69 頁

人類学・民族学・民俗学・言語学・美学を総合した研究を指向する。③民家の研究は特定の村や町だけを集中することに限定せず、より大きい範囲のなかで民家を分類研究する傾向もある。¹⁴

具体的な調査報告は、主に省別の民家調査報告書である。早期の成果は：『浙江民居』中国建築工業出版社（1984）・『吉林民居』張馭寰（1985）・『雲南民居』雲南省設計院（1986）・『福建民居』王乃香とほか（1987）・『広東民居』陸元鼎と魏彦鈞（1990）・『雲南民居続編』王翠蘭と陳謀徳（1997）・『陝西民居』張璧田と劉振亜（1993）・『新疆民居』嚴大椿（1995）など。近年には中国建築工業出版社編集の『中国民居建築叢書』シリーズ（2009）、18冊がある。

（2）日本や海外から中国民家建築の研究

西洋の研究：Paul Olive の『Encyclopedia of Vernacular Architecture』三冊が代表的成果で、世界中の民家建築を紹介する中に、中国民家の記述もある。ただし、中国民家のいくつかの特徴を指摘しただけにとどまり、詳しい内容はなかった。

日本の研究：日本人による中国民家研究は、西南少数民族住居への研究が多い、南中国の漢族住居に触れるのは浅川滋男の『住まいの民族建築学—江南漢族と華南少数民族の住居論』である。浅川氏は詳しい現地調査に基づいて、いくつかの特徴から、建築史学・民族学・考古学の方法をまとめて利用し、南中国民家の系譜を検討する。そして、茂木計一郎などの『中国民居の空間を探る』は、中国南部において三つの特徴ある地域の民家を選び、その構成・風土環境と機能性・素材やデザイン・住居性・歴史などの諸問題を比較研究する。他には吉田桂二氏の『日本人の住まいはどこから来たか—韓国・中国・東南アジアの建築見聞録』など、南中国と日本の民家を比較研究した。

（3）現在の民家研究理論と発展方向

中国は幅広く、数え切れない伝統住宅を生み出してきた。その一方で伝統的住宅は常に取り壊しの危機に瀕することが多い。そのため以前の民家研究は、資料収集を重心にして、地域別の民家を資料集的にまとめたものが多い。民家建築の地域性と比較研究は、「平面から分類」（劉敦楨『中国住宅概説』）、「構造から分類」（劉致平『中国住居建築簡史』）、「外形から分類」（龍炳頤『中国伝統民居建築』）、「気候・地理から分類」（汪之力『中国伝統民居建築』）など、簡単化の分類研究しかない。

近年は建築学と人類学・民俗学の総合的な研究へ拡がりをみせている。「文化・言語・自然条件からの分類研究」（陸元鼎『中国伝統民居的類型与特徴』）と「文化・地理からの分類研究」（蔣高宸『四大譜系説』）と共に、民家建築の文化的・地域的な比較研究が開始する。今、前人が集めた大量の資料をもって、もっと広い視角から、民家建築の文化的・地域的の特徴を比較研究することこそ、未来の中国伝統住居研究の方向だろう。

研究目的と範囲

（1）研究目的

現代中国においては、近代化と都市化の進展とともに大量の伝統的民家に取り壊されている。福建と浙江はまだ大量の伝統的民家が残っているが、ほとんど空き家状態である。このままだと伝統的建築文化の存続は危うい。しかし中国建築学界における伝統的民家に関する研究蓄積はまだ十分でない。特に一省一地を越える建築様式の地域性研究は極めて

¹⁴ 陸元鼎「中国民居研究五十年」『建築学報』2007.11、第 66-69 頁

不足している。ここに民家における地域的特質の検討が中国建築史の重要な課題となったのである。

一方、日本建築史上、鎌倉時代に中国から伝来した宋の建築様式は大仏様・禅宗様として大きく役割を果たした。この宋様式は、田中淡氏によると福建地方の様式と指摘されたが、宋代の遺構の数は少ない。しかし、現存する福建の伝統的民家は大仏様建築と同様の挿肘木構造を使用している。この構法は民間において普及継承された可能性が高いので、福建を対象として、地域の伝統的民家建築を研究すれば、中国中世の建築様式と日本の鎌倉時代新建築様式に関する有用な知見を得る可能性がある。

この二つの問題認識から、本論文は、既往研究に基づいて浙江中南部・福建・広東東部にわたる、東南海岸地区における伝統的民家に関する特質を捉えること目的として、伝統的民家の特徴を整理・検討し、南東中国の海岸部に、独特な住居文化が存在するかという課題に取り組むものである。

(2) 研究範囲

本論文は、近年中国の研究者が発表した東南海岸地区の伝統的民家建築 251 件の資料を収集整理し、これに自身の実地調査成果による伝統民家 42 件を加えて、分析・検討を行う。この 293 件の伝統民家は、すべて 1400 年代以降（中国の明・清と民国の時代）の遺構で、住宅や民家博物館として活用され続けている。現在これらの民家に住んでいる人は、主に普通の農民や社員であるが、建造された時の家主は大商人、地主、退職官僚など地域の有力者である。つまり基本的に民間の高級住宅であり、地域差以外の建築格式、経済背景の上の相違点は少ない。それゆえ地域差を中心にして伝統的民家の特色等を分析することが可能である。

論文構成

本論文は以上に記した東南海岸地区を中心とする伝統的民家建築の問題点、すなわち①東南海岸地区の伝統的民家建築を網羅してその建築の特徴を検討すること、②検討した建築的特徴から中国における伝統的民家建築の中でどのような位置付けとなりえるのかを検討する。という二つの検討考察からなる。考察内容は概説、平面、構造、地域性の四章に分けて記述した。

第一部は第一章から第三章までであり、東南海岸地区の伝統的住宅に関する建築学的・民族誌的記述と分析である。第一章は、対象となる東南海岸地区の伝統的民家における集落・建造年代・生業・家族構成などに関する基本的な状況を検討する。

第二章は、平面の考察で、伝統的民家の平面配置・間取りと部屋名前・空間の利用・人のルートから住居論を展開し、伝統的民家の平面的な特質を検討する。

第三章は、構造の考察で、伝統住宅の軸部・壁・軒出・床構造から、分析する。

第一部の対象となる東南海岸地区伝統的民家は、明・清時代の住宅で、ここではその現代的の生活、あるいは、生きている現代的状態を描写し、その中に、特徴と地域分布をまとめて、さらに復元的・建築史的な考査を行うことが第一部の目的である。

第二部は第四章であり、第一部の内容を総合させながら、東南海岸地区伝統的民家の地域的特質を検討し、地理的条件、言語条件、歴史的條件を加味して、東南海岸地区の各地域（市の行政区画）別住居文化の特徴と地域性・時代性を検討する。そして、明清時代の駅路・官道を参照し、人口移動、方言区、川流域などの角度から東南海岸地区の伝統的民家の地域性をさらに限定する。東南海岸地区特有な住居文化圏の範囲と東南海岸地区の伝統的民家の特質を把握したうえで、東南海岸地区の伝統的民家の系譜を検討する。

第一章 東南海岸地区の伝統的民家

1.1 中国東南海岸地区

中国東南海岸部の浙江省・福建省と隣接する江西省・広東省の一部は本論文の研究範囲である。この東南海岸地区は、地理的に江南地区の南、嶺南地区の北にあり、長江と珠江という南中国における二つ大きな川の流域範囲に属していない地区である。地理的にも、文化的にも閉鎖的で、特有な外向的経済特徴と複合文化を持っている。

「東南海岸地区」を定義するのは、G・W・スキナー教授 (G.William Skinner) からである (1977『中華帝國晩期の都市』The City in Late Imperial China)¹⁵。スキナーは各地域の「都市化」と「人口移動」を比較する時、行政区画を使って区域を分界するのは無理であることを発見した。だから、川流域などの自然、経済などの条件を使って、中国の漢民族が集住する区域を「北部中国」、「西北部中国」、「長江上流」、「長江中流」、「長江下流」、「東南海岸」、「嶺南」、「雲貴」という八つの地区を分けた。その「東南海岸」(Southeast Coast) というのは中国東南部の錢塘江・長江・珠江流域以外の地方である。この区域は主に山地と谷地で、大きな川は甬江・椒江・甌江・閩江・晉江・九龍江・韓江である。

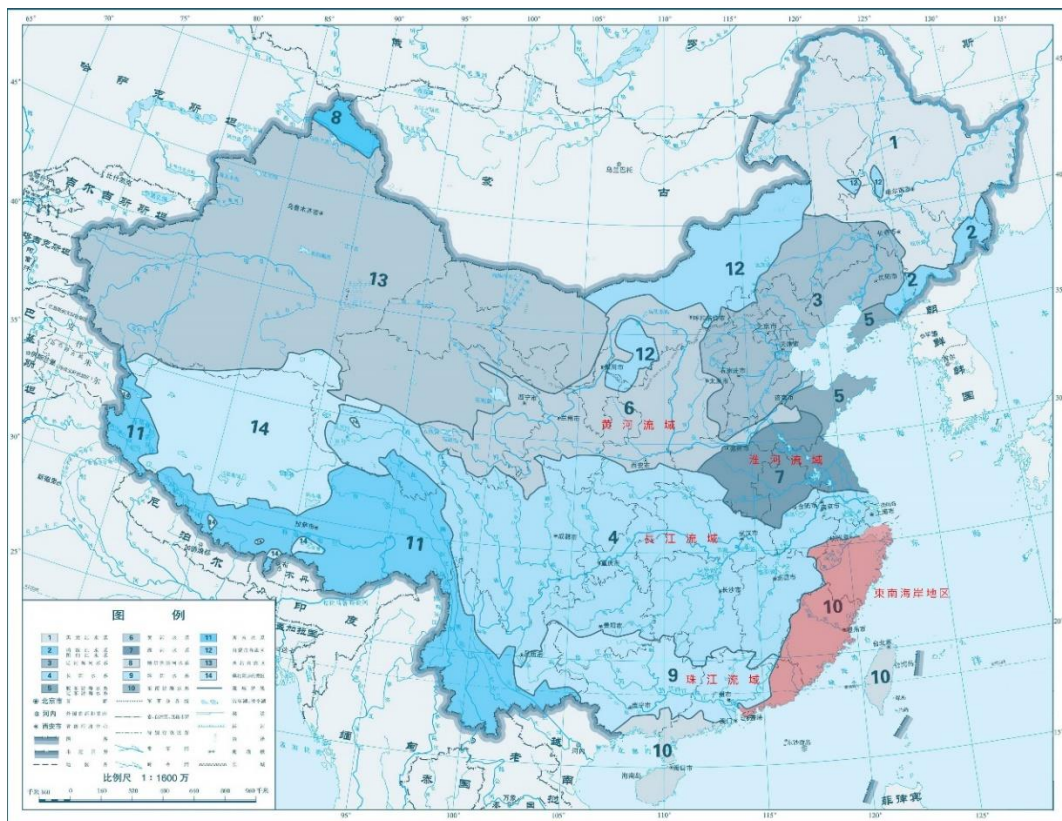


図 1.1 川流域からの東南海岸地区¹⁶

「東南海岸」という大きい地区のなかに、いろいろ『次地域』(sub-region) が存在して

¹⁵ スキナー『中華帝國晩期の城市』葉光庭と他訳、中華書局、2000

¹⁶ 中国国家測繪局「中華人民共和國地圖—河流水系版」、2006 より

おり、この次地域の区切りは上述の川流域と緊密な関連性をもっている。そして、東南海岸地区にも、その中の次地域にも、人口や資源密度がより高い核心区と対応する辺境区域が存在している。この同じ地域範囲内の人たちは、ある程度共通の感情と文化的アイデンティティを共有している。

1.1.1 地理と気候

浙江省は長江デルタの南、東経 $118^{\circ} \sim 123^{\circ}$ 、北緯 $27^{\circ} \sim 31^{\circ}$ の間にある。東シナ海に面す、南が福建、西が江西・安徽、北が上海・江蘇と隣接する。省都は杭州市。浙とは省内最大の河川・銭塘江を指す。銭塘江は蛇行が激しいことから曲江・之江・折江・浙江などと呼ばれてきた。全省の陸面積は 10.18 万平方キロメートル、中国で最も小さい省の一つである。¹⁷

福建省は略称を「閩」と称する。東経 $115^{\circ} \sim 120^{\circ}$ 、北緯 $23^{\circ} \sim 28^{\circ}$ の間にある。北は浙江省、南西は広東省、西は江西省と隣接している。また台湾海峡を挟み、台湾と接している。省内に武夷山脈と戴雲山脈があり、武夷山脈が江西省との境となっている。多くを山間地が占めるが、3751.5 kmに及ぶ入り組んだ海岸線を持つなど、省内の地域差が大きい。宋代に福州、建州、泉州、漳州、汀州、南劍の六州と邵武、興化の二軍（軍事拠点）に分かれていたことから、「八閩」とも称される。全省東西幅 480 km、南北幅 530 km、陸面積は 12.14 万平方キロメートル。福建には東南アジア、西アジア、オセアニアへの距離が近いこと、古代から中国と世界の海路貿易の要である。¹⁸

多山の丘陵地帯：浙江省は複雑な地形をもって、山地と丘陵地帯が 70.4%、平野と谷地は 23.2%、川と湖が 6.4%の面積に占め、「七山二水一分田」ということわざがある。耕地の面積は 208.17 万ヘクタール（1996 年の統計情報より、2009 年は 198.67 万ヘクタールまで減少する）、一人当たりの耕地面積は 0.048 ヘクタール（1996 年、2009 年は 0.037 ヘクタール）。地勢は西南が高い、東北が低い。浙北平野、浙西丘陵、浙東丘陵、中部金衢谷地、浙南山地、海岸平野と近海島々などの区域に分ける。

福建省も多山地の地区であり、「八山一水一分田」ということわざがある。全省山地と丘陵は土地面積の 89.3%を占め、海拔 80m 以下の平野はただ約 10%にとどまる。平野は主に海岸地方にあり、福州・漳州・泉州・興化四つの平野がある。1998 年の統計情報より、耕地の面積は 117.818 万ヘクタール、一人当たりの耕地面積は 0.036 ヘクタール。

多風雨の気候：東南海岸地区は亜熱帯モンスーン気候、季節鮮明、気温適中、日射充実、降水豊富、空気湿潤である。年平均気温は $15 \sim 21^{\circ}\text{C}$ 、年平均降水量は 1100~200 mm。一年降水 140~170 日、梅雨季節（福建は春、浙江は 5~6 月）の降水量は 300~700 mm、8~9 月の台風季節の降水量は 200~300 mmである。

海洋文化：長い海岸線と、山多く平地が少ない特徴から、東南海岸地区は古代から海洋国家の特性を持っている。その隔離された環境から他の地域の影響が及びにくく、地域の団結力を維持し、海上交通力と制海権を握ることで、貿易によって地域の発展と存立に必要なエネルギーを取得できるとされる。宋代の宋日貿易にも、近世福建人の東南アジア進出にも、現代世界中に活躍している温州商人にも、貿易を重視し、規則を守り、開拓精神に富むこの地域の民族性を反映している。同時に、彼らは、新しい文化を受け入れやすい。これは今東南海岸地区建築文化の重要な文化背景の一つである。

¹⁷ 浙江省人民政府公式サイト（www.zhejiang.gov.cn）から、下同じ

¹⁸ 福建省人民政府公式サイト（www.fujian.gov.cn）から、下同じ

1.1.2 歴史と人口移動

(1) 漢文明の拡張

地方の土着文化を融合して、中原地方で発生した漢文明は、間もなく周辺へ拡張を始める。李済は、この拡張の過程を、城壁都市の分布と盛衰を指標として把握した。¹⁹その方法は、『古今圖書集成』の中に記載された 4487 の都市を対象に、前 722 年から 1644 年までの分布を省（民国時代の省）ごとに追跡する。その結果、漢族の定住期間の長い順に各省をグルーピングすると、

第一群：甘肅、河南、陝西、江蘇、山東、安徽、河北、湖北、山西

第二群：雲南、湖南、江西、四川、浙江

第三群：広西、広東、福建、貴州

となり、数量的に見ると、第一群→第二群→第三群の順に、漢民族による植民地化が進められたことが推定できる。²⁰李済の方法に見られるように、漢民族による周辺領土の「植民地化」は、土着民族地域の「都市化」もしくは「文明化」である。このように、漢族は、拡張する過程において、さまざまな土着文化を吸収しつつ、成長を遂げてきた。

東南海岸地区に所属する浙江省と福建省は、第二と第三群に属し、漢民族文化圏に入る時間が遅い。秦の始皇帝が華南地区を征服し、東南海岸地区が会稽郡と閩中郡に属した。漢の時、閩中郡を廃止し、東南海岸地区全域は、ただ一つの会稽郡に所属して、福建に冶県（今の福州）という都市だけで、浙江の南部にも回浦（今の台州）という都市だけである。当時、景気の高い会稽郡の北部の人口密度は 4.45 人/平方キロメートル（在籍の人口）。これは、中原地区京兆郡の 1/12、河南郡の 1/30。²¹葛剣雄が秦漢時代人口分布を研究するとき、「長江以南の大部分の地域は人口過疎で、特に浙江南部・福建・両広・貴州がほとんど未開の地である」と指摘している。²²つまり、東南海岸地区の土地はほとんど漢族中央政府が届かない場所である。

三国から南北朝までの時代。中原が戦乱頻発、大量の漢人は江南へ移動して、さらに東南海岸地区に進出する。しかし、全国に比べて、東南海岸地区の人口は少ない。『晋書・地理誌』は「建安郡（今の福建省とほぼ一致している）、七県所属し、戸数四千三百」と記載する。

唐の後期から、東南海岸地区には社会の急速な発展を始めた。そして南宋まで、漢族中央政府の南遷と経済中心が南への移動をきっかけに、東南海岸地区が急に盛んである。北宋太平興国（976 年～983 年）年間、福建に 467815 世帯がいる。崇寧元年（1102 年）に 1061759 世帯、南宋紹興三十二年（1162 年）に 1390566 世帯、嘉定十六年（1223 年）に 1599214 世帯まで増加した。こういう人口の激増が、東南海岸地区の「植民地化」を完成することを示す、[閩海系]・[越海系]という漢族の地域集団もこの時代から形成する。

23

(2) 東南海岸地区の民族史

李済の分析から見ると、華南は華北より漢民族の植民地化過程はより遅いので、華南地方で長い間に、土着集団が膨大な勢力範囲を維持している。実際、先史・古代の華南には、各地に多種多様な土着的民族がいた。これらの多彩な南方土着民は、中原漢人によって、「南蛮」もしくは「百越」などと総称された。「百越」とは「数えきれないほど多い（＝

¹⁹ 李済『中国民族的形成』江蘇教育出版社、2005、原文は李済 1923 年の博士論文である

²⁰ 李済『中国民族的形成』（前注と同じ）第三章「我群的演進」より

²¹ 班固『漢書・地理誌』より

²² 葛剣雄『中国移民史』福建人民出版社、1997、第 48 頁

²³ 戴志堅『福建民居』中国建築工業出版社、2009、第 23 頁

百) 遠い向こうの国 (=越) の民族」という意味である。『漢書・地理誌』の「粵」(「越」と同じ意味) の描写に関する唐の顔師古の注に、「交趾 (今のハノイ) より会稽 (今の紹興) に至る七〜八千里には、百越が雑処し、各々に種姓がある……」とあり、ベトナムから浙江に至る南方各地には、さまざまな「越族」が住んでいた。しかも、その種姓 (民族の呼称) は多様で、呉越・楊越・于越・甌越・閩越・南越・山越・駱越などの種姓が諸文献に見る。多彩な民族があるから、多様な土着文化もあるはずで、中原漢族において、ここは未開な辺鄙の地であるかもしれないが、決して誰もいない無人区ではない。

漢族の移民が文明を持ってきて、土着民を同化し、南北文化を融合して南方特有な文化を創造した。そして、こういう南北人口移動と文化融合の有名な歴史事件は、五つである。

閩越国の滅亡：

閩越、あるいは無諸国と称する。国土範囲は今の福建と浙江の南あたりである。主体民族は閩越族。存在時間は前 333 年から前 110 年くらいである。閩越王無諸の後継ぎ東越王余善は、自分を皇帝と称し、漢朝へ反乱を起こす。漢の武帝は何十万人の部隊を派遣して、閩越国に攻め込む。最後に閩越の越繇王居股と一部の貴族は余善を殺し、漢に降伏した。

武帝は「東越狭多阻、閩越悍 (人は凶暴)、数反復 (反乱)」、「終為後世患」のため、閩越の人々を江淮 (今の江蘇省) に遷移させた。²⁴その後、繁栄した閩地は廃棄された。しかし、このことをきっかけとして、中原漢族政権は東南海岸の閩越へ影響を及ぼし始めた。つまり、閩越国の滅亡は、南北文化融合のはじめであるといえる。

晋代の衣冠南渡：

西晋の懷帝・愍帝の時期、八王の乱 (291 年〜306 年) のため、中原地方に戦乱が続く。北方の遊牧民族は南下し、政権を建立すると共に、最後に永嘉の乱 (311 年) になる。晋元帝は洛陽から建康 (今の南京) に遷都し、中原の漢族貴族臣民も一緒に南方へ避難する。この時、東南海岸地区はまだ人口がすくないとはいえ、政治中心が南へ移った結果として、東南海岸地区の土着民と中原漢族の文化交流は加速した。

唐末の混乱と五代の南唐国・閩越国：

唐安史の乱の後、国勢衰退。後に藩鎮割拠・黄巢の反乱・北方の遊牧民族の侵入の結果、中原地方は再び混乱になって、朱温が皇位を篡奪するとともに、唐朝は滅亡し、五代の時期になる (906 年)。中原の混乱に対して、東南海岸地区で李昇と王審知が治める南唐国 (937 年〜975 年) と閩越国 (909 年〜945 年) は、しばらくの間、平和を守る。同時に政府は税率を下げ、農商を励ます。社会は急速に発展し、経済と文化が盛んになる。²⁵この平和的な場所は、戦乱の痛みに厭きる中原の文人が憧れ、大量の北方移民が再び南方へ避難する。この時から、南方地方と中原地方の差は縮小し、南北人口はすでに同じくらいになったようである。

唐末から五代のこの南への人口移動は、今の東南海岸地区の経済と人文の基礎を築くことに一定の貢献を果たす。「閩海系」という地域集団 (詳しい説明は後ほど) もこの時期に定着する。

宋の南遷：

1126 年 (靖康元年) 金の軍隊は北宋の都汴梁 (今の開封) を攻め落とし、北宋を滅ぼす。その後、趙構は臨安 (今の杭州) に遷都し、南宋を建立した。この時、中原漢族はもう一度南方へ避難する。後の元代には、モンゴル人が中原を占拠し、中原地方の経済文化

²⁴ 司馬遷『史記・東越列伝』と班固『漢書・閩粵伝』より

²⁵ 欧陽修『新五代史・南唐世家』「(李) 昇独好学, 接礼儒者, 能自励為勤儉, 以寛仁為政, 民稍誉之。」薛居正『旧五代史・卷百三十四・僭偽列伝一』「(王) 審知起自隴畝, 以至富貴。每以節儉自処, 選任良吏, 省刑惜費, 輕徭薄斂, 与民休息。三十年間, 一境晏然。」

の発展は停止した。それに対して、南宋時代は南方はるかに発展し、中国の経済中心が中原から江南へ変化した。

宋の南遷の影響で、東南海岸地区における特有な文化も定着するに至る。今東南海岸地区の建築にも、宋代官式建築作法の要素をたくさん残している。

朱棣の遷都：

従前の人口移動は、北方の漢族移民が南へ移住し、中原の文化が南へ影響を与えるものであった。一方、1421年（永楽十九年）明の成祖朱棣が都を南京から北京へ遷都するのは、南方の文化が逆に北方へ影響を与える契機になった。

明朝の初期、北中国は南中国よりはるかに貧困し、技術も後れていた。北京の宮殿を建造する大工たちは、みな江南出身である。²⁶ゆえに、南方の文化が逆に北方へ影響を与えることになる。しかし、この時の南方文化は、すでに昔の衣冠南渡時代の中原文化ではなく、南北融合した新たな文化である。そのため、この時中国政治中心の北への回帰は、漢族主体文明の中に、南方土着の遺伝子をも注入した。

この南北文化の影響と融合は、今中国伝統建築文化複雑な地域性を形成する。南方文化が逆に北方へ影響を与えたことによって、この文化の伝播する過程を具体的に確認することは難しくなった。

(3) 閩越

約3000年前、東南海岸地区に住む原始人は独特な「閩文化」を創造した。後の周朝のとき、七つの大きな部族が形成し、「七閩」と呼ばれる。「七閩」と緊密つながるのは浙江の「于越族」。越の王允常の時代、于越族人が福建に定住し始める。于越のリーダー無諸は「七閩」を統一し、自分を閩越王と称する。于越族と七閩が融合した閩越族の勢力範囲は、今の福建・台湾・浙江南部（古代温・台・処三州）・江西東部および広東の潮州梅州地区であり、東南海岸地区の地域範囲と重なっている。²⁷

東南海岸地区で最も古い土着民族の閩越族は、漢代の武帝が閩越国を滅亡してから、だんだん漢族に同化された。今、閩越族はすでに存在しておらず、東南海岸地区も閩越への民族認可は存在しない。

(4) シェ族

シェ族（畬族、あるいはショ一族、シャ族）は中国の少数民族のひとつであり、中華人民共和国が公式に規定する漢族を含む56の民族のひとつである。今、東南海岸地域に唯一存続している少数民族である。シェ族は福建省における最多の少数民族である。また、浙江省、江西省、広東省、安徽省にも居住している。シェ族の人たちは自分を「山ハ」と称す山からの客の意味である。南宋の末から、史書に「畬民」「拳民」の名が現れ、「畬」（シェ）の意味は焼畑農業であり、古代シェ族の人たちは焼畑農業生活をしていた。シェ語はミャオ・ヤオ語族に属する。ただし、現在シェ族の大部分は近隣にいる客家と同じように中国語諸語の客家語を話す。

シェ族の起源に対して、施聯珠・雷文先氏の研究によると、いろいろな説がある。²⁸

シェ・ヤオ族は同じく、漢晋時代長沙の「武陵蛮」から起源したという説：この説より、シェ族とヤオ族が共有する「盤瓠」の伝承は史料の中に残した漢晋時代長江中下流にいる

²⁶ 江南出身の蒯祥・徐杲が明代北京故宮を営造した大工棟梁であった、劉敦楨『中国古代建築史』中国建築工業出版社、1980などの本より

²⁷ 楊琮『閩越国文化』福建人民出版社、1998

²⁸ この節は施聯珠、雷文先『畬族歴史与文化』浙江人民出版社、1995を参照する

「武陵蛮」の「盤瓠」の伝承と近いから、シェ族・ヤオ族と「武陵蛮」がつながると指摘する。

東夷説：この説はシェ・ヤオ族は同じく「武陵蛮」から起源した説に基づいて、さらに、シェ族の祖先を春秋時代淮河と黄河の間に生活する「東夷」の中の西南一部「徐夷」まで遡る。シェ・ヤオ族は同じく「武陵蛮」から起源し、その「武陵蛮」は、「東夷」が湖北、湖南辺りに移住した後、他民族と融合した民族であった。

越人の末裔説：この説は、シェ族が古代越人の末裔と認識している。史料の中の古代越人が今のシェ族人の地域分布と比べて、民間の伝承と歴史の記録の中で発見されたシェ族と越族の同じ「盤瓠」の伝承、同じ農業生産手段および同じ風習などもシェ族が古代越人の末裔の説を支持する。

福建土着「閩族」末裔説：この説は、閩と越は、古代南中国二つの古い民族であり、閩族が福建の土着、シェ族の祖先、越族が後に来た福建の客族、シェ族の祖先ではないと指摘している。

とにかく、シェ族は、東南海岸地区唯一の少数民族として、東南海岸地区の土着文化を引き継ぐ。同時に、この土地に住む漢族と同じ、シェ族の人たちも、外来文化の影響を受け、周辺の多様な文化との融合を続けている。

1.1.3 方言系統

東南海岸地区に土着の百越民族の言葉と歴代来た中原漢族移民が招来した古い漢語と融合して、多様な方言文化を発生した。方言系統は、基本的に呉語・閩語と客家語三種類に分けている。呉語系の中にはさらに太湖・台州・甌江・婺州・処衢と宣州六つの次方言区があり、福建の閩語系統の中にも閩南・閩東・莆仙・閩北・閩中と邵将六つの次方言区がある。そして、東南海岸地区西南部の山岳地帯に客家方言を話す地域がある。

呉語は、古代漢語に近い、その八つの声調は、古代漢語から直接に引き継いだ。現代中国標準語より、現代呉語のほうは多くの古代発音をもって、発音と文法は古代の『切韻』『広韻』など辞書と一致している。呉語の発音・声調・文法は現代中国標準語とは大きな差があるから、呉語と中国標準語は互いに理解することができない。しかも、呉語の次方言区の間においても通じない場合がある。北呉（太湖・台州）方言と婺州方言は互いに少しは理解することができるが、温州辺りの甌江方言は、他の次方言区と大きく異なり、古代百越語と楚語の下地を持って、他の呉語方言による意思の疎通が完全に不可能である。

閩語は古代呉語から起源し、古代漢語と古代閩越語の融合である。そして、長い歴史の間に、北方漢族移民において、歴代漢語要素を繰り返して付け加える。現代の閩語は、古代中国のある時期の漢語との対応関係が存在しなかった。閩語とその他の中国語の方言との隔たりは大きい。王育徳の研究 (1960)²⁹ によれば、閩南語アモイ方言の場合では、スワデッシュの基礎単語 200 語で比較した場合、北京方言との類似性（同源語）は 48.9% に過ぎず、これはドイツ語と英語の 58.5% よりも少ない、つまり遠い。また、呉語蘇州話とでは 51.40%、広東語とでは 55.31%、比較的近い客家語とでも 58.65% しか類似性はない。中国の言語学者の研究（鄧曉華、李如龍、倪大白など）でも、漢語が単一の言語ではなく、特に閩語がその中でも特異な性質を持っていることが指摘されている。³⁰

また、閩語はさらに主に 5 方言に分かれ、他に明確に分類できない 邵将区方言グループがある。これらは、たとえ語彙が同じでも発音の差も大きく、会話するのには困難が大

²⁹ 王育徳「中国五大方言の分裂年代の言語年代学的試探」『言語研究』第 38 卷、1960、33-105 頁

³⁰ 鄧曉華「古南方漢語的特徴」『古漢語研究』、2000、李如龍『漢語方言的比較研究』商務印書館、2001、倪大白『侗台語概論』中央民族学院出版社、1990 などの南方漢語方言に関する比較研究より

きく、一般に相互に通じないとされる。このため、別々の言語とすることもある。

閩北語 - 建甌、松溪、政和、建陽、崇安など

閩東語 - 福州、福清、古田、福安、蛸講 など

莆仙語 - 莆田、仙游など

閩南語 - 廈門、泉州、漳州、竜岩、潮州、雷州、海口、台南など

閩中語 - 永安、三明、沙県など

邵将区 - 邵武、光泽、建寧、泰寧。江西省の贛語との混合方言。さらに、順昌、将楽、明溪は、閩、贛、客家の三方言が混合した過渡的方言とされる。

閩南語は、福建省以外でも話されており、広東省の東部沿岸で話される潮州語、広東省西南部の雷州語(海南語、潮州語に近い)、海南省で話される海南語、浙江省南部で話される浙南閩語がある。また、閩東語に属し、浙江省南部で話される蛸講などがある。逆に、福建省西部の長汀、上杭、連城、武平、永定、寧化、清流などでは、客家語が用いられており、南平には北方方言の方言島がある

1.1.4 東南海岸地区の特有的な文化

(1) 東南海岸地区漢族の文化

華南各地に居住した様々の土着民たちが、漢文化の影響を受け入れ、同化や混血の過程をへて、いつしか漢族そのものになってしまう。そして、華南漢族の文化は、こういう南方土着の文化を下地にして成育されたものなので、華北の漢族とは大きく異なった言語的・文化的独自性を生み出した。³¹

言語・文化の違いが大きいから、中国の研究者は、漢族をいくつかの地域集団[民系]に分ける。東南海岸地区は、福建地域集団[閩海系]と浙江地域集団[越海系]に属するとはいえ、同じ福建でも、更にいくつかの方言区に分割されて、互いの言語を理解しあうことができない。この強烈的な地域差は、取りも直さず、漢族に同化・吸収された土着民族の文化がきわめて多様であり、なおかつ根強かったことを反映している。

近年、華南漢族の地域集団(閩東人・閩南人・客家人など)は **ethnic group** と呼ばれて、人類学の視点から論じようとする研究が活発になっている。それは、ある集団に共有される「民族意識」と自己集団と他集団を弁別する指標となる概念を検討して、**ethnic group** の **ethnic identity** を研究する。その地域集団が、中国で「民系」と呼ばれる。

漢民族は黄河流域から興り、周囲に拡張や植民し続けてきた。各地の土着民との融合とともに、お互いに独立した地域集団(民系)を生み出した。現在の漢族は、七つの民系が存在している(北方二つ、南方五つ)。羅香林は 1920 年代から、漢民族を南系と北系に分け、「北系」は北方人で、あるいは中原の漢人で、「南系」は漢人の南への移住とともに形成した南方各民系の総称である。「南系」漢人は五つの分枝—越海系(呉語)・湘贛系(湘語と贛語)・広府系(粵語)・閩海系(閩語)と客家系(客家語)がある。³²

この五つの南方民系が形成する時代において、羅氏は全部唐末から五代のときに形成したと指摘したが、王東の研究より、越海系が一番早く(南北朝時代)、客家系は最後(明中期)、他は五代のときに形成した。そして、林嘉書は南方民系の同源を指摘し、同じ中原から南への移民史があると示した。³³

³¹ 浅川滋男『住まいの民族建築学』建築資料研究社、1994、第 34 頁

³² 羅香林『客家研究導論』台北古亭書店、1975

³³ 王東『客家学導論』上海人民出版社、1996 と林嘉書『対「客家遅来」説的再研究』『国際客家学研究会論文集』香港中文大学、1994 より

(2) 越海系と閩海系

越海系と閩海系はさらに小さい地域集団に分けることができる。

越海系において、浙東と西の相違点は、史料から明白である。明代浙江台州出身の地理学家の王士性（1547～1598 年）は『広志繹』に「兩浙東西以江（錢塘江）為界而風俗因之」と³⁴、錢塘江の東西の風土の違いを示して、さらに杭・嘉・湖（杭州・嘉興・湖州）平野と川沼の国、金・衢・嚴（金華・衢州・古い嚴州は今杭州の西南部である）の丘陵と谷の国、寧・紹・台・溫（寧波・紹興・台州・温州）の山脈と海辺の国三つの地域と区切る。

閩海系は、北方漢人が福建に入る時代とルートより、東の海岸部と西の内陸部に区切ることができる。前者は閩東（寧徳・福州）、閩南（泉州・アモイ・漳州）と莆仙（莆田・仙遊）の地域を含み、後者は閩北（南平）、閩西（龍岩）と閩中（三明）などの地域を含む。海岸部と内陸部の境界は晋代晋安郡と建安郡の境界と同じ、歴史的な交通ルートとつながっている。福建への植民は二つの方向からで、海路から進出する北方移民は、各河口に定住し始め、城壁都市を建造して、晋安郡になる。そして、河口から川に沿い、内陸へ拡張する。もう一つの方向は陸路で江西・浙江から、武夷山・仙霞嶺を越え、福建に入る。そして閩江の上流に城壁都市を建造し、建安郡となる。両郡の間に、長い時間で大規模な接触はなかった。³⁵

浙東と西の違いから、閩東と西の違いまで、南北に横断する浙閩丘陵は東南海岸地区を海岸部と内陸部に組み分け、越と閩の大地に多彩な文化を生み出した。

1.1.5 東南海岸地区の地域集団

本論文が利用する東南海岸地区の区切り方法は二つある。一つは現在中国の行政区画を利用する。中国は、省・自治区・直轄市→市→県・県級市・区→鎮・郷・街道→村、の順で行政区画が置かれる。東南海岸地区に所属する市級行政区画は、浙江省の紹興市・寧波市・台州市・温州市・金華市・麗水市・衢州市、福建省の寧徳市・福州市・南平市・三明市・龍岩市・莆田市・泉州市・アモイ市・漳州市と広東省の潮汕都市圏（潮州市・汕頭市・揭陽市）である。

もう一つは、自然条件と方言や文化の条件などの要素を考えながらの区切り方法である。すなわち

福建の

閩東：閩東方言を話す福州と寧徳

莆仙：莆仙方言を話す莆田

閩南：閩南方言を話す泉州・漳州・アモイと龍岩の一部

閩中：閩中方言を話す三明の一部

閩北：閩北方言・邵将方言と江西方言を話す南平と三明の一部

閩西客家：客家方言を話す三明の一部と龍岩の一部

広東の

潮汕：閩南方言を話す広東潮汕地域

浙江の

浙東：吳方言を話す寧波と台州

浙南：吳方言を話す温州と麗水の一部

浙西：吳方言を話す衢州

³⁴ 「明」王士性『広志繹』卷四、江南諸省、1597

³⁵ 戴志堅『福建民居』中国建築工業出版社、2009、第 35 頁

浙中：呉方言を話す金華と麗水の一部
などの地域集団と区切って、一つの地域集団の間に、近い自然・方言・伝統をもち、建築文化も類似する。

1.2 伝統的集落

1.2.1 東南海岸地区の伝統的集落

伝統的民家は、独立農家も少なくないが、大部分は集落の中の民家である。しかし、集落の歴史的な景観が近代化と共に破壊されて、現存する歴史的集落は少ない。本論文の研究対象となる東南海岸地区の伝統的民家が所属する集落は、今も歴史的集落として、政府から「伝統村落」「歴史文化名村」³⁶として指定されて、観光地となって保存されている。その一覧は以下のとおりである（表 1.1）。

表 1.1 歴史的集落

地域	番号	集落や町並み	形態	創立年代	当初の生業	何時何処から移住	氏族
閩東	S01	福州市三坊七巷	都市町並み	宋	高級住宅区	*	
	S02	福安楼下村	盆地平野村落	清	農業（茶）	五代江蘇徐州から隣村蘇陽へ、清の時蘇陽から	劉氏
	S03	寧徳霍童鎮	川沿い町並み	隋唐	商売、水運物流	隋大業九年（613）固始（今河南固始）から	黄氏など
	S04	霞浦半月里村	溪谷村落	清中期	外出行商	県内の塩田郷から	雷氏
	S05	福安坦洋村	溪谷村落	明末	農業（茶）	不明	王、施など
	S06	福安廉村	川沿い村落	南北朝	漁業、貿易	南朝梁天監年間（502-519）江南から	陳氏
	S07	尤溪桂峰村	山地村落	南宋	宿場	南宋淳祐七年（1247）興化（莆田）仙遊から	蔡氏
	S08	羅源梧桐村	溪谷村落	清初	農業（稲）	宋代固始から（寧徳）古田、清初古田から	黄氏
	S09	周寧浦源村	盆地平野村落	南宋	物流貿易	南宋嘉定二年（1209）（河南）開封から	鄭氏
	S10	屏南漈頭村	溪谷村落	876 年	宿場	不明	張氏
	S11	屏南漈下村	溪谷村落	1437 年	宿場	不明	甘氏
	S12	永泰嵩口鎮	川沿い町並み	宋	市場、水運物流	不明	混雑
閩南	S13	南安漳里村	平野村落	1862 年	海外行商	フィリピンから帰国	蔡氏
	S14	徳化承澤村	山地村落	宋	農業（稲） 木材	南宋紹興年間（1131-1162）莆田から	黄氏
閩	S15	永安貢川鎮	川沿い村落	741 年	タケノコ	唐開元二十九年（741）呉	陳氏

³⁶ 中国住房建設部と国家文物局 2003 年 10 月 8 日発布した「中国歴史文化名村鎮選択方法」より、国家と省級政府から指定した歴史的集落である。集落の状況に関する情報も、公表した「歴史文化名村鎮」リストの説明を参照する。

中					貿易	興（浙江湖州）から	
閩 西 客 家	S16	連城芷溪村	川沿い村落	元明	市場、水 運	不明	客家
	S17	連城培田村	川沿い村落	1344 年	官道駅、 宿場	元至正八年（1344）浙江か ら	客 家 の 呉氏
	S18	南靖石橋村	溪谷村落	明	農業（稲）	明正統八年（1443）潮州大 埔から	張氏
閩 北	S19	浦城觀前村	川沿い村落	宋	水運物流	不明	周、張、 葉など
	S20	武夷山下梅村	平野村落	唐宋	農業（茶） 茶葉貿易	江西、浙江からの氏族が 多い	混雑
	S21	邵武平和鎮	都市町並み	唐	昔県庁所 在地	*	
	S22	光澤崇仁郷	川沿い村落	唐	水運物流	江西からの氏族が多い	混雑
浙 東	S23	諸暨斯宅村	溪谷村落	不明	外出行商	不明	斯氏
	S24	寧波市月湖町	都市町並み	唐	商家町	*	
	S25	黄岩区司庁巷	都市町並み	唐宋	高級住宅 区	*	
浙 南	S26	永嘉埭頭村	溪谷村落	元末	農業（稲）	不明	陳氏
	S27	永嘉芙蓉村	川沿い村落	宋	農業（稲）	南宋時（河南）開封から	陳氏
	S28	景寧小佐村	山地村落	南宋	林業	嚴州（浙北）	嚴氏
	S29	文成梧溪村	溪谷村落	1209 年	農業（稲）	宋の時河南から隣の泉谷 へ、後梧溪へ	富氏
	S30	樂清黄檀洞村	溪谷村落	宋	染料作物 の栽培	不明	盧氏
	S31	平陽県坡南街	都市町並み	283 年	商家町	*	
	S32	平陽青街鎮	溪谷村落	明	農業（稲）	明萬歴（1573-1620）時、 福建から	池、李氏 など
	S33	蒼南碗窰村	山地村落	明末	製磁	明末福建連城から	巫、朱氏 など
	S34	泰順百福岩村	溪谷村落	清中期	不明	隣の景寧県から	周氏
浙 西	S35	江山廿八都鎮	盆地平野町 並み	1071 年	物流貿易 宿場	全国各地から	混雑
	S36	衢州峡口鎮	盆地平野町 並み	不明	物流貿易 宿場	不明	混雑
浙 中	S37	武義俞源村	溪谷村落	南宋	農業（稲）	隣の松陽から	俞氏
	S38	武義郭洞村	溪谷村落	元末	農業（稲） 林業	武義県城から	何氏
	S39	縉雲河陽村	盆地平野村 落	932 年	農業（稲）	温州永嘉から	朱氏

*都市の町並みは一般的に氏族集住をしない

1.2.2 形態

東南海岸地区の山と川が多いの自然条件によると、集落も地形を利用して、自由な平面配置がよくあり、北方の平野集落のようなすべての住宅が南向きの場合は少ない。東南海岸地区歴史的集落の形態によると、平野集落、川沿い集落、溪谷集落と山地集落に分けることができる。

平野集落は盆地にある集落を含めて、格子状に整備された街路が多い、住宅もほとんど同じ方位へ向かう。川沿い集落は川に沿って、街路も川と一緒に曲がっているが、住宅はほとんど平地に位置して、全部近い方位へ向かう場合が多い。

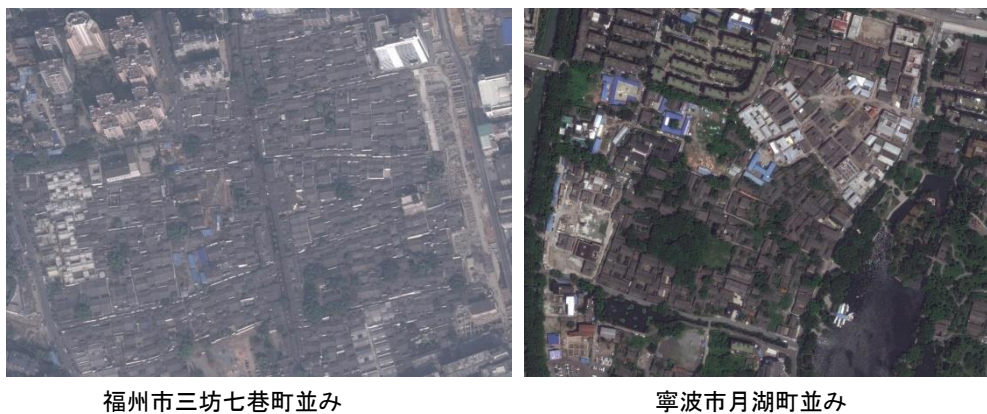


図 1.2 都市町並みの形態³⁷



図 1.3 平野と川辺の集落

溪谷集落は小さい川沿いて道と建物を配置する。溪谷には平地が少ないのため、平地を農耕用地として利用し、建物を斜面に配置する場合が多い。だから、道と建物の配置はより自由で、住宅も地形によって違う方位へ向かう。山地集落は急斜面地を利用して、道と建物を配置する。斜面への人工的な改造を行い、山を削って小さい平地を造り、そして建物を建てる場合が多い。山地集落は平面・配置とも最も自由な集落といえる。

しかし、東南海岸地区の歴史的集落を見ると、集落の中の住宅の平面・配置は必ずしも地形に相応するものではない。斜面地に無理に奥行き深い屋敷を作る場合もよくあり、これは中国伝統文化の影響と考えられる。つまり、東南海岸地区の歴史的集落の形態は、自

³⁷ 航空写真は全部グーグルマップより、下も同じ。

然条件と文化伝統二つの方面から、共に影響した結果と認められる。



羅源県梧桐村



尤溪県桂峰村

図 1.4 溪谷集落と山地集落

1.2.3 歴史と現状

東南海岸地区の歴史的集落は、唐宋の時代に、中原漢族地区からの移民によって、建立したものが多い。そして、明清の時代、東南海岸地区内部の人口移動による集落の建立も少なくない。現存するの歴史的集落の歴史を見ると、すべて同じ創建→繁栄→衰退という過程を経て、今は貧しい集落で、近代化する余裕がないため、古い景観を守ることができる。

東南海岸地区の歴史的集落の創立年代によると、城壁都市以外の集落は、唐宋の間に漢族移民から建立したのは一番数が多い。これは、唐宋時期の移民潮及び東南海岸地区の人口増加と一致している。つまり、東南海岸地区の歴史的集落は中国中世の景観・文化伝統をあらわす可能性もある。

東南海岸地区に現存する歴史的集落は、近世東南海岸地区で盛んであった貿易によって発展して、数多く立派な家を建てた。そして近代の衰退によって、貧しいから新築ができなかったため、古い景観が残った。民国時期、欧米との接触は、東南海岸地区の貿易中心は全部海岸部の港へ移行し、内陸の貿易ルートは迅速に衰退し、古い宿場、市場、商会も共に衰退した。1949 年以降、共産党政府の政策より、都市部の町家は政府が没収し、貧しい人たちに配ったため、町家も衰退する。最後の 1978 年の改革開放から、都市と農村の格差が拡大して、農民としての稼ぎが困難で、都市へ出稼ぎにする農民工がたくさんいるから、農業をやっている村も衰退した。東南海岸地区現存する歴史的集落の現状は、わずかな老人と子供が住んでいる過疎状態である。

しかし、村が衰退したからこそ、古い景観が残り、伝統的民家の研究もできる。そして、繁栄した過去を持っているため、集落の歴史に関する記録が多く、歴史の研究としても、便利である。

1.2.4 主な生業

東南海岸地区に現存する歴史的集落は、近世東南海岸地区で盛んであった貿易と関わっている。東南海岸地区には山が多く、耕地が少ない。中世から増加し続ける人口によって、糧食生産の自給自足ができない。このため、東南海岸地区の貿易が繁栄していた。集落の

人々も、貿易をめぐる、いろんな生業をする。³⁸

農林業

近世の東南海岸地区は全体として、糧食が不足している。東南海岸地区内部主な糧食産地は浙江東南部の温州・台州と閩西北の南平・三明である。温州と台州が余った糧食は寧波に集めて、海路で福建へ輸出する。明の人王士性は「台・温二郡、……稲麦菽粟尚有余饒……閩福齒繁、常取給于温」と指摘した。³⁹そして、閩江上流の南平・三明（古代の延平・邵武・建寧・汀州四府）も主な糧食産地で、主に閩江沿い、糧食を福州に供給する。

そして福建北部には、山地を利用して茶葉栽培をする地域も多い。有名な武夷山の紅茶と福安坦洋を中心とする閩東の紅茶は、フランス、イギリスまで輸出されていた。

東南海岸地区は山が多いから、木材・竹・製紙に関する産業も盛んであった。福建は近世中国の主要な木材産地で、人工的に杉・松を植える記録もよく見る。

商業貿易

東南海岸地区には、商業貿易が繁栄していた。現代中国でも有名な温州商人、寧波商人、閩南商人は世界各地に活躍している。明清時期にも、龍游商帮、寧波商帮、福建商帮、潮州商帮という全国的に有名な商人組織が存在して、東南海岸地区と日本・朝鮮・東南アジア諸国へ行商する。

東南海岸地区の商業は、主に糧食・布など生活必需品を輸入して、木材・茶葉・糖・磁器・紙と竹木製品を輸出する。つまり、東南海岸地区は自給自足の農業社会ではない、高度な商品経済社会であると考えられる。

商品経済のため、物流・宿場・市場のための集落が盛んで、これらの集落も、東南海岸地区現存する歴史的集落の一番多い模式である。

行商

村の人が一緒に外出行商して、金持ちになったら故郷へ戻り屋敷を建てるのも、東南海岸地区においてよく見る模式である。寧波・福州の人は、主に日本・朝鮮・台湾へ行商し、閩南・客家の人は、主に東南アジアへ行商する。閩南地域は、近世から現代まで、東南アジアへ行商する人が多く、家を新築して、もしくは外国の建築様式をもらえる場合が多いため、閩南地域に現存する歴史的集落は少ない。

1.2.5 氏族集住

東南海岸地区伝統的な村落は、基本的に氏族集住の模式である。すなわち、一つの集落は、一つの苗字しかなく、みんな同じ祖先の末裔である。同じ祖先を祀るため、村の中心地には一族の祖廟が位置し、時々家譜を編集し、村の歴史を記録する。そして規模が多い集落には、複数の氏族があり、それぞれの祖廟がある。

その氏族集住を維持するため、各村落に一族から共有する財産、いわば「族産」がある。族産は一般的に土地・山林・建物・橋梁・渡し場を含めて、それらに関する収入は、一族の共有財産として、氏族事務のため、もしくは貧困な族人を援助するためである。そして、最も重要な氏族事務は祖廟における祖先の祭祀と家譜の編集である。つまり、東南海岸地区伝統的な氏族集住は「祖廟」「族産」「家譜」に基づいた集住模式である。こういう模式は非常に安定しているので、東南海岸地区はより多くの伝統的民家が存続できる。

³⁸ 福建省地方誌委員会『福建省誌』科学文献出版社、2012の商業誌と糧食誌を主に参照する。

³⁹ 「明」王士性『广志繹』卷四、江南諸省、1597

1.3 伝統的民家

1.3.1 東南海岸地区の伝統的民家

本論文において抽出した東南海岸地区伝統的民家の事例は、1400年代から1940年代の近世中国に建造された293処で、その293処の事例の中より、42処は実地調査を行い、残った251処は既往研究における事例である（表1.2及び付録を参照する）。

表 1.2 東南海岸地区民家事例の一覧

地域	番号	事例	建造年代	当初の所有者	建築類型	家族形態	現状
閩東地域	001	福州埕宅	-	-	町家	-	-
	002	福州揚岐遊宅	民国	-	独立農家	-	-
	003	福州宮巷劉宅	清	文人官僚	町家	-	資料館
	004	福州ある住宅	-	-	-	-	-
	005	永泰李宅	-	-	独立農家	-	-
	006	古田松台ある住宅	-	-	-	-	取壊
	007	古田張宅	-	-	-	-	-
	008	古田利洋花厝	-	-	-	-	-
	009	古田沽洋陳宅	-	-	-	-	-
	010	古田吳厝里ある住宅	-	-	-	-	-
	011	古田鳳埔ある住宅	-	-	-	-	-
	012	古田于宅	-	-	-	-	-
	013	福安茜洋橋頭ある住宅	-	-	村落住宅	-	住宅
	014	閩清東城厝	-	-	-	-	-
	015	福安楼下保合太和宅	清中期	農民	村落住宅	家族集住	住宅
	016	福安楼下兩兄弟住宅	清中期	農民	村落住宅	家族二つ	住宅
	017	福安楼下王炳忠宅	清中期	農民	村落住宅	家族集住	住宅
	018	福州宮巷沈宅	明末	文人官僚	町家	家族集住	住宅
	019	福州文儒坊陳宅	清	文人官僚	町家	家族集住	住宅
	020	福州衣錦坊歐陽宅	1890	塩商人	町家	家族集住	住宅
	021	福鼎白琳洋里大厝	1745	商人吳氏	独立農家	大氏族集住	資料館
	022	閩清坂東岐廬	1853	郷紳	独立住宅	大氏族集住	-
	023	寧徳霍童下街陳宅	清中期	-	村落住宅	家族集住	住宅
	024	寧徳霍童黄宅	清中期	-	村落住宅	家族集住	住宅
	025	寧徳霍童下街72号	清中期	-	村落住宅	家族集住	住宅
	026	霞浦半月里雷世儒宅	1848	郷紳	村落住宅	家族集住	住宅
	027	霞浦半月里雷位進宅	清中期	郷紳	村落住宅	小家族集住	住宅
	028	福安坦洋王宅	清末	-	村落住宅	家族集住	住宅
	029	福安坦洋郭宅	清末	-	村落住宅	家族集住	住宅
	030	福安坦洋胡宅	清末	-	村落住宅	小家族集住	住宅
	031	福安廉村就日瞻雲宅	清中期	郷紳	村落住宅	家族集住	住宅
	032	福安廉村甲算延齡宅	清末	郷紳	村落住宅	家族集住	住宅
	033	尤溪桂峰楼坪大厝	清初期	商人	村落住宅	家族集住	住宅

	034	尤溪桂峰後門山大厝	明末	商人	村落住宅	家族集住	住宅
	035	尤溪桂峰後門嶺大厝	1747	－	村落住宅	家族集住	住宅
	036	福清一都東閣磬	1736	一族共有	独立住宅	大氏族集住	住宅
	037	閩清ある住宅	－	－	－	－	－
	038	閩清宏琳厝	1795	菓商人	独立住宅	大氏族集住	部分活用
	039	尤溪ある農家	－	－	－	－	－
	040	羅源梧桐五魚厝	清初期	農民	村落住宅	家族集住	住宅
	041	羅源梧桐水仙閣	清中期	農民	村落住宅	家族集住	住宅
	042	羅源梧桐孔照厝	清中期	郷紳	村落住宅	家族集住	住宅
	043	羅源梧桐旗竿里	民国	郷紳	村落住宅	家族集住	住宅
	044	周寧浦源鄭宅	清末	－	村落住宅	家族集住	部分活用
	045	屏南漈頭張宅	清	－	村落住宅	家族集住	住宅
	046	屏南漈下甘宅	明末	郷紳	村落住宅	家族集住	住宅
	047	屏南漈下ある住宅	明末	－	村落住宅	－	空き家
	048	尤溪桂峰蔡宅	清	農民	村落住宅	家族集住	住宅
	049	永泰嵩口ある住宅	1768	商人	村落住宅	家族集住	住宅
	050	福鼎西陽陳宅	－	農民	村落住宅	家族集住	住宅
莆 仙 地 域	051	涵江林宅	1940	商人	－	家族集住	住宅
	052	莆田江口ある住宅	－	－	－	－	－
	053	仙遊陳宅	明末	－	－	－	－
	054	仙遊榜頭仙水大庁	1446	郷紳	独立住宅	大氏族集住	住宅
	055	涵江江口余宅	－	－	－	－	－
	056	仙遊仙華陳宅	－	－	－	－	－
	057	仙遊楓亭陳和發宅	－	－	－	－	－
	058	仙遊坂頭鴛鴦大厝	1911	華僑商人	村落住宅	家族二つ	住宅
	059	莆田大宗伯邸	1592	－	町家	－	住宅
閩 南 地 域	060	永春鄭宅	1910	－	－	－	－
	061	漳平上桂林黃宅	清中期	－	－	－	－
	062	漳平下桂林劉宅	民国	－	－	－	－
	063	泉州吳宅	清中期	－	独立住宅	大氏族集住	－
	064	泉州蔡宅	1904	華僑商人	町家	家族集住	住宅
	065	泉州ある住宅	－	－	町家	－	－
	066	泉州黃宅	－	－	－	－	－
	067	晉江青陽庄宅	1934	華僑商人	－	－	－
	068	晉江ある住宅	－	－	－	－	－
	069	晉江大倫蔡宅	－	－	－	－	－
	070	集美陳宅	－	華僑商人	－	－	－
	071	集美陳氏住宅	－	－	－	－	－
	072	漳州南門ある住宅	－	－	－	－	－
	073	龍岩新邱厝	1888	－	町家	－	資料館
	074	泉州亭店楊阿苗宅	1894	華僑商人	村落住宅	－	資料館
	075	南安官橋蔡資深宅	清	華僑商人	村落住宅群	大氏族集住	住宅
	076	泉州泉港黃素石樓	1741	－	村落住宅	大氏族集住	住宅

	077	南安石井中憲邸	1728	商人	村落住宅	大氏族集住	住宅
	078	漳浦湖西藍廷珍宅	清中期	將軍	独立住宅	大氏族集住	住宅
	079	漳州官園蔡竹禪宅	清中期	—	—	—	—
	080	アモイコロンス大夫邸	1796	—	—	—	—
	081	漳浦湖西趙家堡	明末	前朝皇室	独立住宅	大氏族集住	住宅
	082	德化碩傑大興堡	1722	商人	独立住宅	大氏族集住	住宅
	083	華安岱山齊雲樓	1862	—	—	—	—
	084	華安大地二宜樓	1740	—	独立住宅	大氏族集住	住宅
	085	漳浦深土錦江樓	1791	—	独立住宅	大氏族集住	住宅
	086	晉江石獅鎮ある住宅	—	—	—	—	—
	087	晉江大倫郷ある住宅	—	—	—	—	—
	088	龍岩適中太和樓	—	—	—	—	—
	089	龍岩毛主席旧居	—	—	—	—	—
	090	龍岩適中典常樓	1784	一族共有	独立住宅	大氏族集住	住宅
	091	南 Anh 湖内村土樓	清末	—	独立住宅	—	住宅
	092	南 Anh 湖中村土樓	1857	—	独立住宅	—	空き家
	093	南 Anh 南庁映峰樓	明末	—	独立住宅	—	住宅
	094	南 Anh ド橋聚奎樓	清中期	—	独立住宅	—	部分活用
	095	南 Anh 舖前慶原樓	清	—	独立住宅	—	空き家
	096	安溪玳子德美樓	民国	—	独立住宅	大氏族集住	住宅
閩 中 地 域	097	安溪山後村土樓	清	—	独立住宅	—	空き家
	098	安溪玳子聯芳樓	清末	—	独立住宅	—	空き家
	099	德化承澤黃宅	民国	農民	村落住宅	小家族集住	住宅
	100	德化格頭連氏祖厝	1508	郷紳	村落住宅	—	祖廟
	101	永安西洋邢宅	—	—	—	—	—
	102	三明莘口陳宅	—	—	—	—	—
	103	三明魏宅	民国	—	—	—	—
	104	三明列西羅宅	—	—	—	—	—
	105	三明列西吳宅	—	—	—	—	—
	106	永安小陶ある住宅	—	—	—	—	—
	107	永安安貞堡	1885	商人	独立住宅	大氏族集住	資料館
	108	沙県茶豊峽孝子坊	1829	郷紳	—	—	—
	109	三元シンロ松慶堡	清中期	—	独立住宅	—	—
	110	沙県建国路東巷 29 号	清末	—	町家	—	—
	111	沙県東大路 72 号	清末	—	町家	—	—
	112	永安貢川機垣楊公祠	1778	—	—	—	—
閩 西 客	113	永安貢川金魚堂	1624	—	村落住宅	—	—
	114	永安貢川嚴進士宅	明末	郷紳	村落住宅	—	—
	115	永安福庄ある住宅	—	—	—	—	—
	116	永安青水東興堂	1810	一族共有	独立住宅	家族集住	住宅
	117	上杭古田八甲廖宅	—	—	—	—	—
	118	新泉張宅	—	—	—	—	—
	119	新泉芷溪黃宅	—	—	—	—	—

家 地 域	120	新泉張氏住宅	-	-	-	-	-
	121	新泉望雲草堂	-	-	-	-	-
	122	連城テュ溪羅宅	-	-	-	-	-
	123	長汀洪家巷羅宅	-	-	-	-	-
	124	長汀新耕別荘	-	-	-	-	-
	125	上杭古田張宅	-	-	-	-	-
	126	連城培田双善堂	清中期	-	村落住宅	-	-
	127	連城培田敦樸堂	-	-	村落住宅	-	-
	128	連城培田双灼堂	清末	商人	村落住宅	大氏族集住	住宅
	129	連城培田継述堂	1829	商人	村落住宅	大氏族集住	住宅
	130	連城培田濟美堂	清末	商人	村落住宅	家族集住	住宅
	131	南靖石橋村永安樓	16世紀	-	独立住宅	大氏族集住	住宅
	132	南靖石橋村昭徳樓	-	-	独立住宅	大氏族集住	住宅
	133	南靖石橋村長藍樓	清	-	独立住宅	大氏族集住	住宅
	134	南靖石橋村逢源樓	-	-	-	-	住宅
	135	南靖石橋村振徳樓	-	-	-	-	住宅
	136	南靖石橋村順裕樓	1927	華僑商人	独立住宅	大氏族集住	住宅
	137	南靖田螺坑歩雲樓	清初期	一族共有	独立住宅	大氏族集住	住宅
	138	南靖梅林和貴樓	1926	-	独立住宅	大氏族集住	住宅
	139	平和西安西爽樓	1679	一族共有	独立住宅	大氏族集住	住宅
	140	永定高陂遺経樓	1806	-	独立住宅	大氏族集住	住宅
	141	永定高北承啓樓	1709	一族共有	独立住宅	大氏族集住	住宅
	142	永定湖坑振成樓	1912	-	独立住宅	大氏族集住	住宅
	143	平和蘆溪厥寧樓	1720	一族共有	独立住宅	大氏族集住	住宅
	144	南靖梅林懷遠樓	1909	華僑商人	独立住宅	大氏族集住	住宅
	145	永定高陂大夫邸	1828	一族共有	独立住宅	大氏族集住	住宅
	146	永定洪坑福裕樓	1880	-	独立住宅	大氏族集住	住宅
	147	連城培田官庁	明末	-	-	-	住宅
	148	連城培田都クン府	-	-	-	-	焼失
	149	連城芷溪集鱸堂	清初期	-	村落住宅	-	-
	150	連城芷溪凝禧堂	清末	-	村落住宅	-	-
	151	連城芷溪紹徳堂	清中期	-	村落住宅	-	-
	152	連城芷溪培蘭堂	清末	-	村落住宅	-	-
	153	連城芷溪ネ雲山房	清末	-	村落住宅	-	-
	154	永定撫市ある住宅	-	-	-	-	-
	155	永定鵲嶺村長福樓	民国	-	-	-	-
閩 北 地 域	156	建瓯伍石村馮宅	-	茶農	-	-	-
	157	建瓯朱宅	-	-	-	-	-
	158	浦城中坊葉氏住宅	-	-	村落住宅	家族集住	住宅
	159	浦城上坊葉氏大厝	清	-	村落住宅	家族集住	住宅
	160	浦城觀前饒加年宅	-	-	村落住宅	小家族集住	住宅
	161	浦城觀前余天孫宅	-	-	村落住宅	小家族集住	住宅
	162	浦城觀前余有蓮宅	-	-	村落住宅	小家族集住	住宅

	163	浦城観前張宅	-	-	村落住宅	家族集住	住宅
	164	武夷山下梅鄒邸	1754	茶商人	村落住宅	大氏族集住	部分活用
	165	武夷山下梅儒学正堂	清中期	郷紳	村落住宅	家族集住	部分活用
	166	武夷山下梅参軍邸	清中期	郷紳	村落住宅	家族集住	住宅
	167	崇安郊区藍湯応宅	-	-	独立農家	-	-
	168	南平洛洋村ある住宅	-	-	-	-	-
	169	邵武中書邸	明末	-	町家	-	資料館
	170	邵武和平廖氏大夫邸	清末	文人官僚	町家	家族集住	住宅
	171	邵武金坑儒林郎邸	1632	郷紳	村落住宅	-	-
	172	邵武金坑 16 号李宅	-	-	村落住宅	-	-
	173	邵武金坑中翰邸	-	-	村落住宅	-	-
	174	邵武大埠岡中翰邸	-	郷紳	-	-	-
	175	邵武和平李氏大夫邸	清末	文人官僚	町家	家族集住	住宅
	176	寧化安遠ある住宅	-	-	-	-	-
	177	建寧丁宅	-	-	-	-	-
	178	泰寧尚書邸	明末	文人官僚	町家	大氏族集住	資料館
	179	光澤崇仁裘宅	明末	-	村落住宅	-	-
	180	光澤崇仁ゴン氏宅	明末	-	村落住宅	-	-
	181	邵武和平黄氏大夫邸	明	-	町家	家族集住	住宅
広 東 潮 汕 地 域	182	潮州弘農旧家	-	-	町家	-	-
	183	揭陽新亨北良ある住宅	-	-	-	-	-
	184	潮陽棉城ある住宅	-	-	-	-	-
	185	棉城義立庁ある住宅	-	-	-	-	-
	186	揭陽錫西郷ある住宅	-	-	-	-	-
	187	潮州許氏邸	伝説宋	-	町家	-	資料館
	188	潮州三達尊黄府	明末	退職官僚	町家	-	住宅
	189	潮陽桃溪図庫	-	-	-	-	-
	190	普寧洪陽新砦	-	-	-	-	-
	191	潮安坑門郷揚厝砦	-	-	-	-	-
	192	潮安象埔砦	伝説宋	一族共有	村落住宅群	大氏族集住	住宅
	193	潮州辜厝巷王宅	-	-	-	-	-
	194	潮州王厝饒宅	-	-	-	-	-
	195	普寧泥溝ある住宅	-	-	-	-	-
	196	澄海城関安慶巷ある住宅	-	-	-	-	-
	197	潮州梨花夢処書斎	清末	-	-	-	取壊
	198	澄海樟林ある住宅	-	-	-	-	-
浙 東 地 域	199	寧波張煌言旧居	-	-	-	-	-
	200	寧波庄市鎮葛宅	-	-	-	-	-
	201	庄市鎮大樹下ある住宅	-	-	-	-	-
	202	奉化岩頭毛氏旧居	-	-	-	-	-
	203	寧波走馬塘老流房	-	-	-	-	-
	204	慈城甲第世家	明末	郷紳	-	-	資料館
	205	慈溪龍山鎮天叙堂	1929	商人	-	-	-

	206	諸暨斯宅斯盛居	清中期	商人	独立住宅	大氏族集住	住宅
	207	諸暨斯宅發祥居	1790	商人	独立住宅	大氏族集住	住宅
	208	諸暨斯宅華國公別荘	－	－	独立住宅	家族集住	住宅
	209	天台妙山巷懷德樓	－	－	－	－	－
	210	天台城関茂宝堂	－	－	－	－	－
	211	天台城関張文郁宅	明末	退職官僚	町家	家族集住	住宅
	212	天台街頭余氏住宅	－	－	－	－	－
	213	紹興倉橋直街施宅	－	－	－	－	－
	214	紹興題扇橋ある住宅	－	－	－	－	－
	215	紹興下大路陳宅	－	－	－	－	－
	216	鄞県鄞江鎮陳宅	－	－	－	－	－
	217	黄岩黄土鎮虞宅	－	－	－	－	－
	218	黄岩天長街ある住宅	－	－	－	－	－
	219	天台紫来楼	清	－	－	－	－
	220	寧波月湖中宮巷張宅	清	－	町家	小家族集住	開発中
	221	寧波月湖天一巷劉宅	民国	－	町家	家族集住	開発中
	222	寧波月湖青石街関宅	清	郷紳	町家	小家族集住	開発中
	223	寧波月湖青石街張宅	清	郷紳	町家	家族集住	開発中
	224	黄岩司庁巷汪宅	民国	－	町家	家族集住	取壊し予定
	225	黄岩司庁巷 16 号張宅	清末	－	町家	家族集住	取壊し予定
	226	黄岩司庁巷 32 号洪宅	清	－	町家	家族集住	取壊し予定
浙 南 地 域	227	永嘉ダイ頭陳宅	清末	－	村落住宅	家族集住	住宅
	228	泰順上洪黄宅	－	－	－	－	－
	229	平陽順溪戸侯邸	清	－	－	－	－
	230	平陽騰蛟蘇宅	民国	農民	独立農家	小家族集住	資料館
	231	永嘉芙蓉村北甲宅	－	－	村落住宅	－	住宅
	232	永嘉芙蓉村北乙宅	－	－	村落住宅	－	住宅
	233	永嘉水雲十五間宅	清末	郷紳	独立農家	家族集住	住宅
	234	永嘉花壇「宋宅」	伝説宋	－	村落住宅	－	－
	235	永嘉ダイ頭松風水月宅	清	－	村落住宅	家族集住	住宅
	236	永嘉蓬溪村謝宅	－	－	－	－	－
	237	永嘉林坑毛步松宅	－	－	－	－	－
	238	永嘉東占坳黄宅	－	－	－	－	－
	239	景寧小佐巖宅	民国	農民	村落住宅	小家族集住	住宅
	240	景寧桃源ある住宅	清	－	村落住宅	家族集住	住宅
	241	文成梧溪富宅	清末	－	村落住宅	大氏族集住	住宅
	242	永嘉林坑ある住宅	－	農民	村落住宅	家族集住	住宅
	243	永嘉ダイ頭陳賢楼宅	清	－	村落住宅	家族集住	住宅
	244	樂清黄檀洞ある住宅	－	農民	村落住宅	家族集住	住宅
	245	平陽坡南黄宅	清	－	町家	家族集住	住宅
	246	平陽青街李宅	清	－	村落住宅	大氏族集住	住宅
	247	蒼南碗窯朱宅	清	手工業者	村落住宅	小家族集住	住宅
	248	泰順百福岩周宅	清	－	村落住宅	家族集住	住宅

浙 西 地 域	249	龍遊丁家ある住宅	-	-	-	-	-
	250	龍遊若塘丁宅	-	-	-	-	-
	251	龍遊脈元ゴン宅	-	-	-	-	-
	252	蘭溪長楽村望雲楼	明	-	-	-	-
	253	龍遊溪口傅家大院	-	-	-	-	-
	254	松陽望松黄家大院	-	-	-	-	-
	255	江山廿八都丁家大院	-	-	村落住宅	家族集住	住宅
	256	江山廿八都楊宅	-	-	村落住宅	家族集住	住宅
	257	松陽李坑村 46 号	-	-	-	-	-
	258	衢州峡口徐開校宅	1910	-	村落住宅	家族集住	住宅
	259	衢州峡口徐瑞陽宅	清末	-	村落住宅	家族集住	住宅
	260	衢州峡口徐文金宅	-	-	村落住宅	家族集住	焼失
	261	衢州峡口鄭百万宅	清	退職官僚	村落住宅	家族集住	住宅
	262	衢州峡口劉文貴宅	清	退職官僚	村落住宅	家族集住	住宅
	263	衢州峡口周樹根宅	民国	-	村落住宅	小家族集住	住宅
	264	衢州峡口周朝柱宅	民国	-	村落住宅	小家族集住	住宅
	265	遂昌王村口ある住宅	-	-	村落住宅	小家族集住	住宅
浙 中 地 域	266	東陽白坦郷務本堂	清	郷紳	村落住宅	小家族集住	住宅
	267	東陽史家庄花庁	-	-	-	-	-
	268	武義ユ源声遠堂	明末	-	村落住宅	家族集住	住宅
	269	武義郭洞燕翼堂	-	-	村落住宅	家族集住	住宅
	270	磐安樺溪余慶堂	-	-	-	-	-
	271	縉雲河陽循規映月宅	-	-	村落住宅	家族集住	住宅
	272	縉雲河陽廉讓之間宅	-	-	村落住宅	家族集住	住宅
	273	東陽黄田ハン前台門	-	-	-	-	-
	274	義烏雅端容安堂	-	-	-	-	-
	275	金華雅ハン七家庁	明	-	-	-	-
	276	東陽紫微山尚書邸	-	-	-	-	-
	277	東陽六石鎮肇慶堂	明	-	-	-	-
	278	武義ユ源裕後堂	1785	-	村落住宅	家族集住	住宅
	279	武義ユ源上万春堂	-	-	村落住宅	-	住宅
	280	東陽湖溪鎮馬上橋花庁	清	-	-	-	-
	281	東陽盧宅	明	-	独立住宅	大氏族集住	資料館
	282	浦江鄭氏義門	清	-	独立住宅	大氏族集住	資料館
	283	建德新葉花萼堂	明	-	村落住宅	家族集住	住宅
	284	建德新葉種徳堂	民国	-	村落住宅	小家族集住	住宅
	285	建德新葉是亦居	民国	-	村落住宅	小家族集住	住宅
	286	武義ユ源玉潤珠輝宅	-	-	村落住宅	-	住宅
	287	武義郭洞新屋里宅	明末	-	村落住宅	-	住宅
	288	武義郭上萃華堂	-	-	村落住宅	-	住宅
	289	武義郭下慎徳堂	-	-	村落住宅	-	住宅
	290	東陽巍山鎮趙宅	-	-	-	-	-
	291	東陽水閣庄葉宅	-	-	-	-	-

292	東陽城西街杜宅	-	-	町家	-	-
293	縉雲河陽朱宅	清	-	村落住宅	家族集住	住宅

不明の場合「-」と表記する

出典・年代考察に関する情報は付録に参照する。

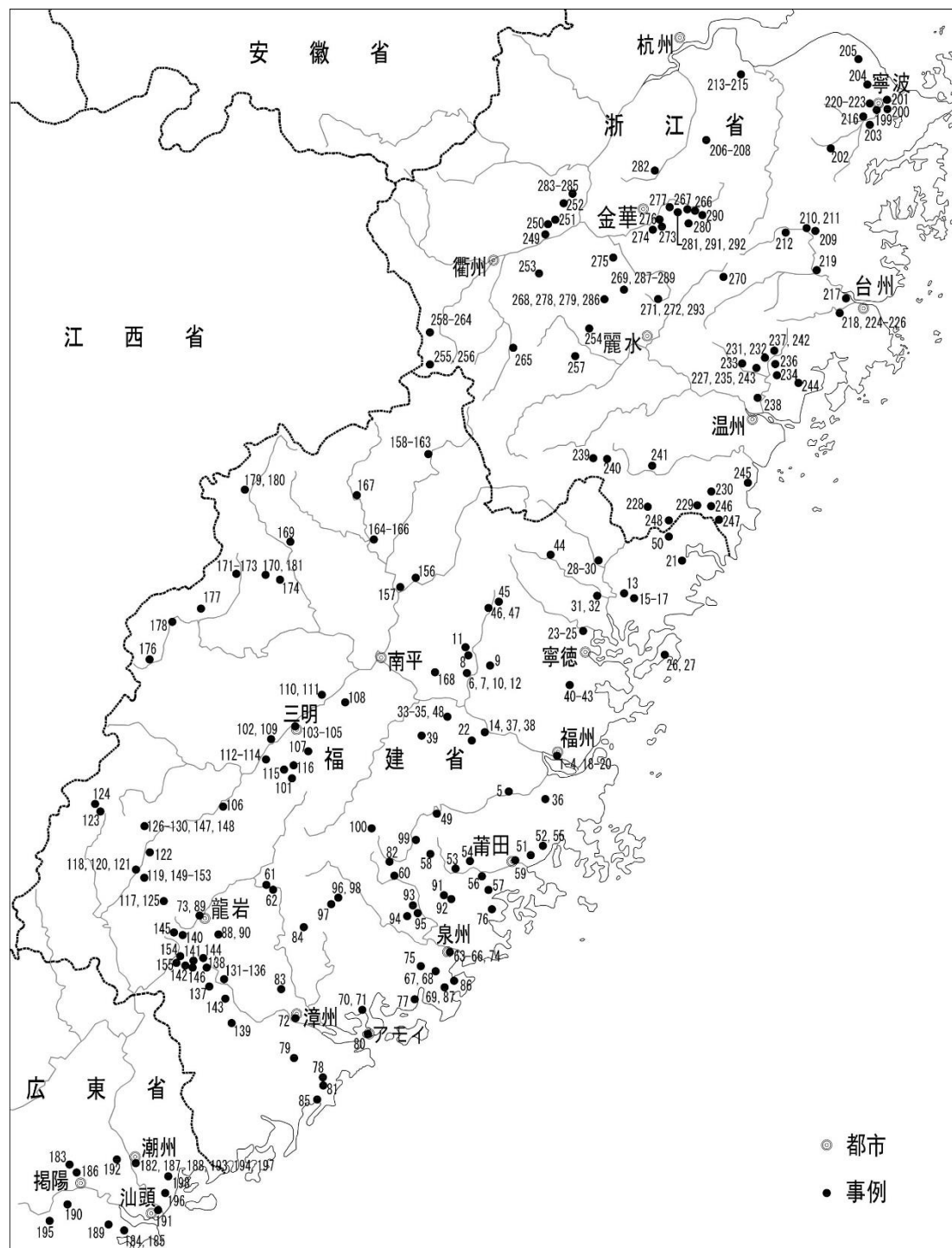


図 1.5 研究対象となる東南海岸地区民家とその地域分布

1.3.2 歴史

東南海岸地区に唐宋の間に遡れる歴史的集落は多いが、建物の歴史として明確な年代は明代しか遡れない。その中に、明確な建造時代が残されていた事例は 159 件である。そのうち、明代（1368-1643 年）の遺構は 30 件、清代（1644-1910 年）の遺構は 108 件、民

国（1911-1949 年）の遺構は 21 件である。その中、建造年代が一番早いのは 1446 年に建造された仙遊榜頭仙水大庁。一番遅いのは 1940 年に建造された涵江林宅である。それ以外に、宋の時代に建造した伝承を持っている住宅 3 件があるが、確証できないので、宋の住宅として検討しない。

これは、東南海岸地区明清の繁栄と衰退に関連している。一つの集落として、残した建物は大部分繁栄していた時に建造したもので、そして衰退して、建て替える財力がないので今まで存続してきた。

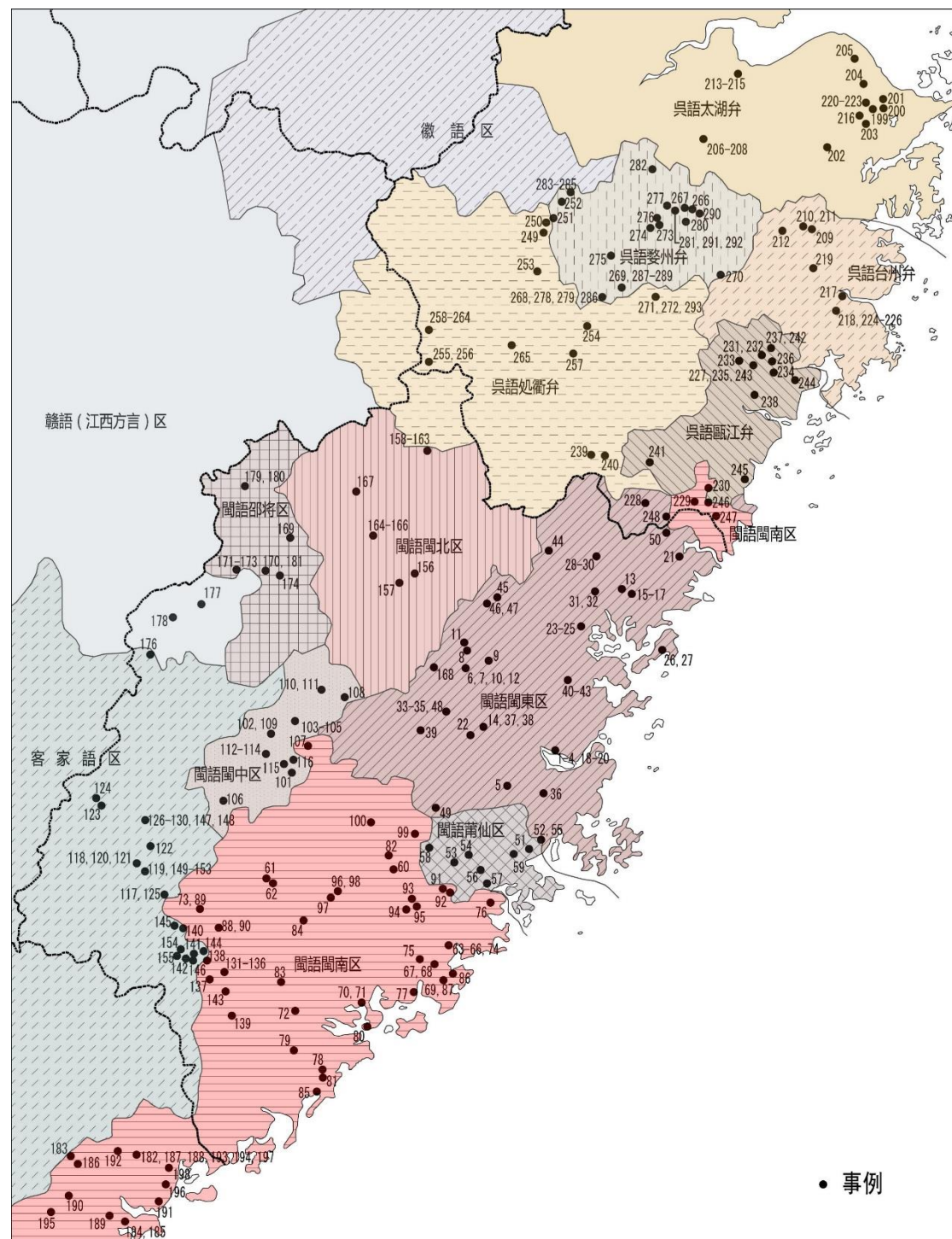
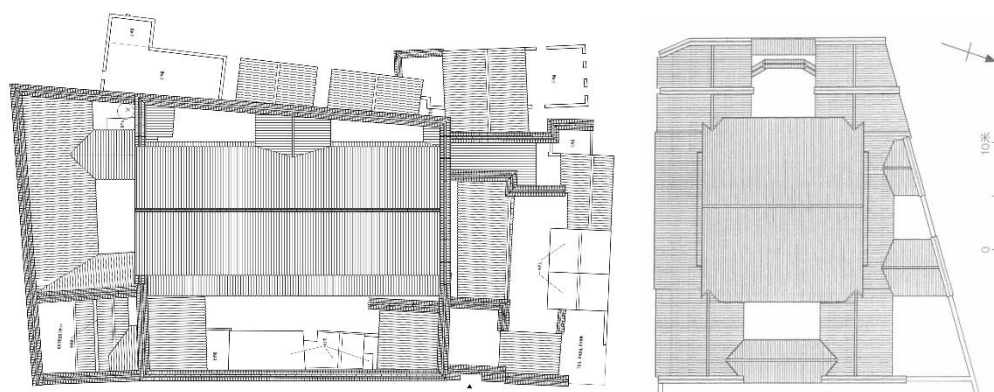


図 1.6 研究対象となる東南海岸地区民家とその文化的（方言区）の分布

1.3.3 建築形態

東南海岸地区民家は、集落の中の位置付けを考えると、町家、集落住宅と独立住宅という三つの類型に分けることができる。町家は都市の狭い用地に対応して、細長い形である場合が多く、隣の家と壁を共有することもよく見る。集落住宅は集落の中に位置して、用地は窮屈ではないが、道路・既存建築を考えた上で、家を建てる。集落住宅は現存する東南海岸地区民家の数が一番多い形式である。そして独立住宅は、集落に所属しなく、農地の中に建てる独立な住宅である。となりに既存建築がないので、最大限の自由を持っている。この場合、大規模な屋敷ができるので、住宅自身が集落的構成を持つ場合も少なくない。

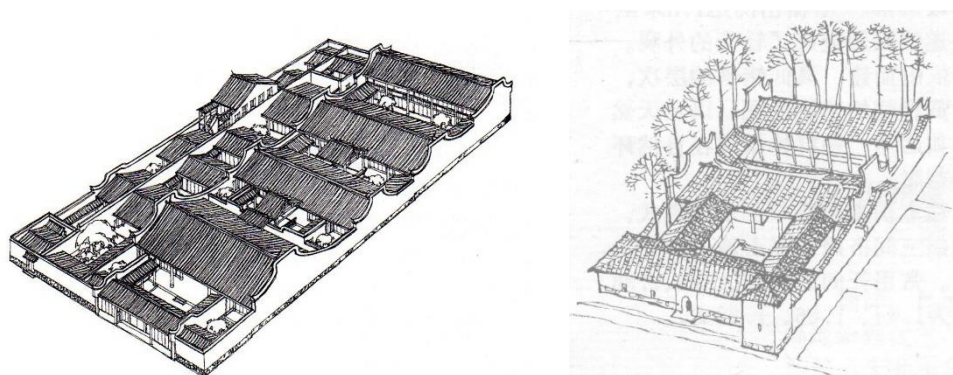
しかし東南海岸地区民家は町家、集落住宅と独立住宅という類型が存在しているとはいえ、建築形式、いわば平面・配置と構造作法としての相違性は民家の位置と余り関連していない。すなわち都市、田舎、町家、独立住宅のいずれであっても、地域によって平面・配置と構造作法が近い。



寧波月湖青石街閨宅⁴⁰

福安楼下保合太和宅⁴¹

図 1.7 小規模な町家（左）と村の農家（右）



福州宮巷沈宅⁴²

閩清東城厝⁴³

図 1.8 大規模な町家（左）と村の農家（右）

⁴⁰ 図面は同済大学「寧波月湖歴史街区調査報告」（未公開）より

⁴¹ 図面は李秋香『福建民居』清華大学出版社、2010、第 261-265 頁より

⁴² 図面は戴志堅『福建民居』中国建築工業出版社、2009、第 182 頁より

⁴³ 図面は黄為雋『閩粵民宅』天津科学技術出版社、1992、第 192 頁より

1.3.4 家族構成

東南海岸地区民家の家族構成は、氏族集住の伝統と繋がっている。しかし、建築の規模によって、一つの三世代家族を中心とする家族構成があり、複数の三世代家族が集住する構成もある。

中国の伝統的家族は、老親・男性子供夫婦とその子・未婚女性子供が世帯を共に構成する。子供夫婦の家族は経済の独立がなく、すべての収入を老親に渡して、老親から改めて配分する。老親がなくなると、子供が分家する。一般的には長男が家を引き継ぎ、それ以外の兄弟は新しい家を建てる。この場合兄弟が一緒に新しい家を建てる場合があって、東南海岸地区に両兄弟住宅として残る民家も時にある。もしくは、分家をしない、同じ住宅の中に住んで、別にかまどを建て、経済を独立する場合もある。この時、家を増築して、規模を拡大し、元々老親が住んでいた空間は祖廟となる。そうして、小さい住宅から、大規模な氏族集住の住宅になるものも少なくない。

東南海岸地区には、上述の氏族集住の住宅以外に、氏族集住のために作った大規模住宅もある。たとえば福建土楼のような大規模な住宅は、複数の三世代家族が集住することができる。この場合、建物における家族構成は、集落における氏族の構成と一致している。つまり、土楼のなかにも、祖廟があり、共有財産としての廊下・階段・にわもある。

第二章 東南海岸地区伝統的民家における平面的特徴

2.1 平面の類型

2.1.1 基本概念

調査・文献から、各地の方言語彙を収集し、その現地の方言の呼称と標準中国語（普通話）及び日本語と区別するために、以下のような表記の原則を設ける。

標準中国語からの言葉は傍線 を引く

方言からの言葉は二重傍線 を引く

日本語はそのまま

たとえば、中庭に当たる言葉を日本語、標準語中国語、南方方言の順に並べると

中庭 院子 天井

となる。

(1) 「間」に関する概念

中国伝統建築の「間」の概念は、日本の柱間の概念とちょっと違って、桁行方向だけの柱間を指すものである。間数は奇数で、左右対称で、真中の一間は「明間」と称する。「明間」の左右は「次間」であり、一番外側の間は「尽間」である。もし「次間」と「尽間」の間にまだ別の間があるなら、それらは全部「稍間」と呼ぶ。

尽間	稍間	稍間	次間	明間	次間	稍間	稍間	尽間
----	----	----	----	----	----	----	----	----

図 2.1 「間」の概念

そして、桁行方向の柱間の数は、「開間数」という概念になる。たとえば「三開間」「七開間」という表現は、建物の規模を体現する。中国歴代の政府が、「開間数」を制限して、民間建築の規模を制限する。庶民の建物は「不過三間五架」⁴⁴（三間・五桁を超えてはいけない）、一般の官僚も五間以上のものがないから、中国の伝統民家は、ほとんど三間・五間の建物から組み合う。しかし、東南海岸地区の民家に、七間を超える住宅が、たくさん存在する。これは、東南海岸地区の民家の特徴であり、後で詳しく説明する。

ただし中国北方の伝統住宅は、一般的に、「院落」を住宅の基本単位とする。「院」は中庭（院子）で、「落」は、中庭四面の建物である。四合院屋敷は、そういういくつかの「院落」を組み合わせて、家族が集住する。しかし、南方の住宅は、「間」を基本単位として、いくつかの「間」を組み合わせて、家族が集住する。だから、北方の合院住宅は、「何院の正房」「何院の東/西廂房」を具体的な部屋を指していたが、南方住宅の各部屋には、自分の名前を付けている。

(2) 「正」と「廂」

⁴⁴ 『唐会要・輿服制』に「庶人所造堂舎、不得過三間四架」、『宋史・輿服制』に「庶人舍屋許五架」、『明史・輿服制』に「不過三間五架」など。それぞれの史料によると、各代には、庶民の建物の規模を制限する。

中国の伝統建築の平面配置について、最も重要なのは、方位の概念である。南北軸対称の住宅配置に、中央にある南向きの空間―「正」と両脇にある―「廂」（周辺の意味）に分け、「正房」「廂房」という概念を生み出した。

(3) 「進」と「路」

「進」と「路」は、合院式住宅の規模を表記するための単位である。「進」は南北軸に沿い、「院子」の数で、「路」は、左右に並べている「院子」の数である。たとえ「三進二路」のは、南北に三つの「院子」と建物を組み合う「三進院落」を二つ並列する住宅である。

南方には、北方のような「院子」がないから、南北軸にある庁（堂）の数を、「進」の数になる。だから南方の三進住宅は一般のに門庁・大庁・後庁三つの庁がある。

(4) 「天井」(中庭)

南中国の住宅は、夏の日射、大雨を対応するため、建物と建物、建物と塀が互いに近づくで、コンパクトになる。つまり、建物と建物、建物と塀の間に、井戸のような暗深い中庭が出現した。南方で、こういう小さなにわを「天井」と呼び、南方系住宅特有な空間となる。

陳綱倫氏が、南方住宅の「天井」空間の特徴をまとめた：一、天井空間は建物と連結し、一般的に、庁・堂の前後にある。二、天井は建物と建物、建物と塀から囲まれて形成する。三、天井の縁に沿いで、建物と塀の軒が連続でループになる。四、天井の地面が、回りより低くて、排水口がある。五、天井空間の高さは、幅より長くなる。⁴⁵

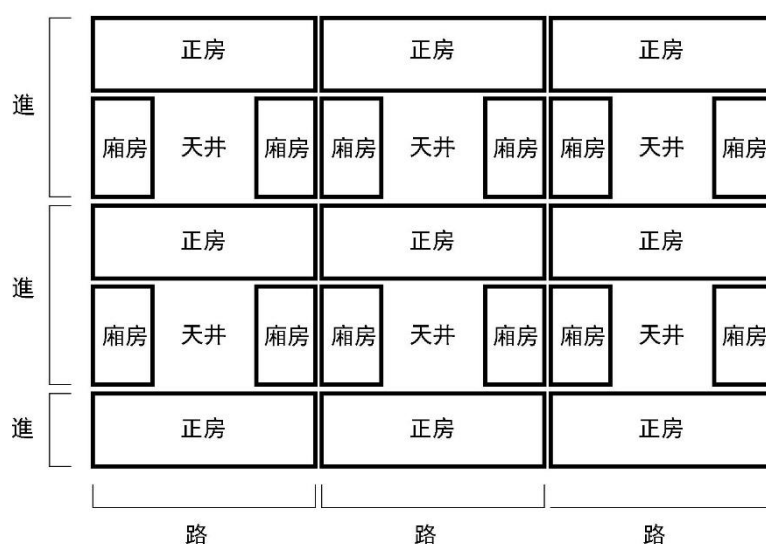


図 2.2 「院落」の概念

(5) 空間の組合せ

南方の四合院民家は、北方の南北単軸対称の配置ではなく、多軸の配置がよくある。劉致平氏は『雲南一隅印』において「我が国（中国）建築常用の配置の形式は「井」字式と「十」字式の二つがある：「井」字式は九室式と名付けて、「十」字式は五室式と名付ける」

⁴⁵ 陳綱倫「陰性文化与中国伝統建築井空間」『营造』1998、第 21-28 頁

と提唱し、北方の四合院は五室式に属し、南方の四合院は九室式に属すると論じた。⁴⁶南方九室式の代表的な四合院形式は「対合式」合院である。

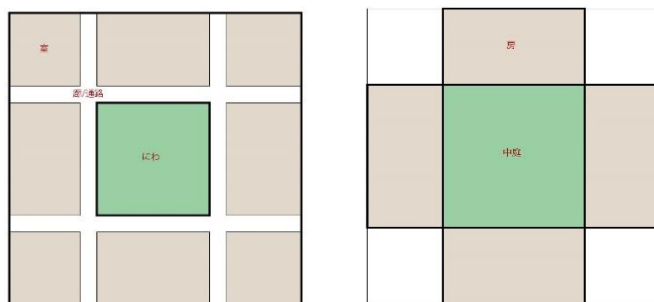


図 2.3 「井」字式（左）と「十」字式（右）

東南海岸地区民家の平面は、「間」から「正房」・「廂房」を構成し、その「正房」・「廂房」は「天井」と「井」字空間を組合せて、基本的空間単位「一進院落」とする。そして、いくつかの「院落」を組合せて、大規模な住宅を構成する。

2.1.2 「一」字式平面

桁行方向に展開した「一」字式平面民家は、福建では「一条龍」と呼ばれる。簡単な「一」字式民家は、桁行三間であり、真中は庁（堂屋）、隣は部屋（室）である。すべての「一」字式民家はこの三間型を基本とする。両側に部屋を加えて、五間・七間と拡張し、大型のものは十三・十五間までである。

「一」字式民家は一番外側から、前へ何間の部屋を増築して、「L」形の平面になった場合もある。そして、両側同時に前へ部屋を増築し、左右対称になった「冂」形平面もよくある。「L」と「冂」形の平面は、だいた「一」字式平面から増築し、両脇の部屋と正面の部屋が基本的に差別はなく、正面明間の庁以外はみな「廂房」である。つまり、「L」と「冂」形の平面は、「一」字式平面の変種であって、後述の合院式平面とは異なる。

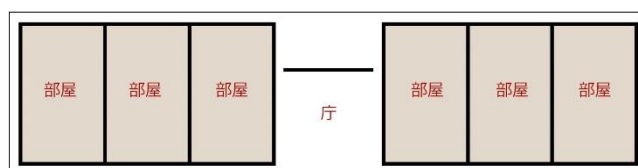


図 2.4 「一」字式平面

2.1.3 合院式平面

合院式住宅は、漢民族の代表的な住み方である。合院式住宅の中心に庭があり、庭を三面や四面の建物で囲み、三合院や四合院になる。通常、合院式住宅は正房、東西廂房及び倒座房（四合院しかない）と組み合わせ、中庭を囲む。その特徴は、①中軸対称、②建物の平面構造は中央の庁と両側の部屋、③主次関係がはっきり、④基本単位は院落（中庭と四面建物）であり、漢民族の社会制度・家庭構成・文化風俗を反映している。

(1) 三合院

三合院は四合院より簡単で、農村地方によく使われる住宅平面様式である。東南海岸地区の基本的な三合院式平面は、天井（中庭）およびそれを囲む建物と組み合わせる。建物

⁴⁶ 劉致平『中国居住建築簡史：城市、住宅、園林』2000.9、第二版、第 367 頁

と天井の関係より、「前天井」「後天井」「前後天井」の三種類に分けることができる。普通は「前天井」型三合院で、両脇の廂房は正房の前にあり、天井も正房の前にある。「後天井」型三合院の両脇の廂房は正房の後ろにあり、天井も正房の後ろにある。そして建物の前に、もう一つの庭（埕）がある。最後の「前後天井」三合院は、正房の前後両方に廂房と天井がある、全体に「H」形となる。

三合院の平面は、廂房の形式から分類すれば、「堂廂型」と「堂廡型」二種類に分ける。「堂廂型」も「三間搭兩廂」と呼ばれる。正房は三間で、廂房は一間や二間であり、廂房は正房の前後に展開している。「堂廡型」の廂房は正房の外側に前後展開し、廂房の間数がより多い。

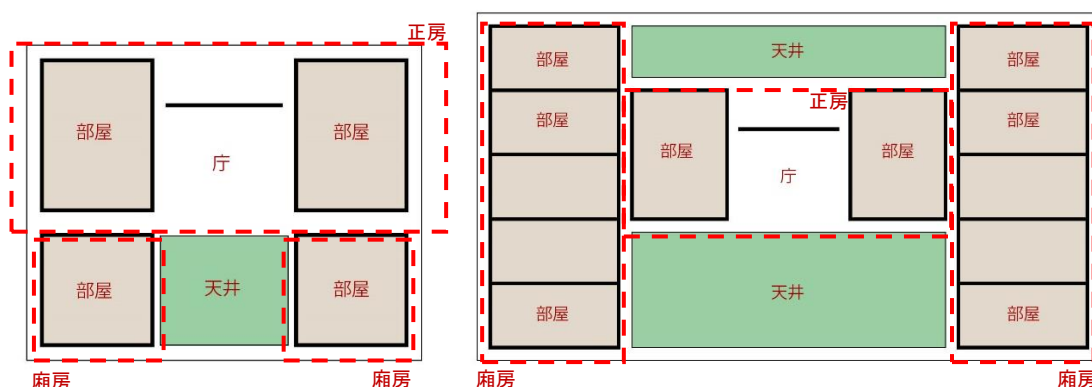


図 2.5 簡単な三合院（堂廂型・左）と H 型三合院（堂廡型・右）

前天井堂廂型：大部分の三合院はこの類型であり、有名な雲南一顆印民家はこの前天井堂廂型である。東南海岸地区には、前天井堂廂型が広がっている。閩南地域には、三合院を「爬獅」や「下山虎」と呼ぶ。浙江には、正房三間、左右廂房各五間で、「十三間頭」と呼ばれる。

後天井堂廂型：天井が主屋の後部に配置し、廂房も後ろへ展開していく平面配置である。一般的には、主屋の前に、土塀に囲まれているにわがある。そして、主屋の後ろに、小さな天井と二三間の廂房が配置していた。

堂廡型「H」平面：「堂廡型」の平面配置は、中央の正房の両脇に、奥行方向で、各一列の部屋（廡）を配置して、「H」型の平面になる。だから、「H」型三合院は前後二つの天井がある。前の天井には、植物が茂って、庭園のような空間であり、後ろの天井の周りには、物置・家畜・台所・便所などの付属空間が配置している。

(2) 四合院

北方系の四合院：

北京の四合院は、遼代に基本的な構造が形成されており、その後の金、元、明、清代を経て現在のような構成となった。四合院の「院」とは中庭「院子」のことで、中庭を中央に設け、中庭の中央に「十」文字の通路を作り、その東西南北の突き当たりに、それぞれ一棟ずつ建物を配置する。そのため四合院と呼ばれるようになった。北側に設けられるのが、「正房」であり、主人夫婦が住む。そのため屋根も他の棟より高い。「正房」の両脇には、「廂房」がある。東側に設けられるのは「東廂房」で、主人の両親や長男が住む。西側に設けられるのは「西廂房」で、次男が住む空間である。中庭の南側に設けられるのが、「倒座房」であり、逆向きの建物である。使用人住みと厨房や廁が設けられる。これらの

4 棟はそれぞれ独立して建てられており、中央の十文字の通路を通らなければ、訪問できない。四合院の大門（表門）は胡同に面し、外部からの客は大門（表門）を入れて、狭い通路を通り、影壁に突き当たって左に折れ、前庭に出る。前庭は中庭とは「垂花門」（短い柱条の飾りの付いた中門）で区切られている。前庭に面しているのが、倒坐房である。

東南海岸地区の四合院：

官式大厝：福建泉州辺りに、多進の四合院を「官式大厝」と呼ぶ。「官式大厝」の合院式平面は、北方系四合院平面に近い、「正房」「東廂房」「西廂房」「倒座房」と囲まれた中庭から構成した合院住宅である。

「官式大厝」の名前も、北方官式建築から真似た平面配置と示唆する。主な平面配置は近いとはいえ、相違点も二つある。一つは前述のよう、「官式大厝」の隅も部屋があり「井」字式の合院平面を持って、4 棟の建物が連結し、それぞれ独立しない。一つは「官式大厝」の大門は住宅の中央に位置する、影壁もなくして、門庁の中の「屏門」（屏風のような扉）に変更する。

廊院式：「廊院式」の合院は「正房」以外の部屋はなく、「東廂房」「西廂房」「倒座房」の代わりに、回廊が中庭を囲む。「廊院式」の合院は中国中原地区漢代から唐代まで存在する合院平面の形式で、宋代から北方には見えなくなる。東南海岸地区の「廊院式」合院は、「正房」＋「回廊」式の平面配置が存在しており、それから発展した「正房」＋「廂房」＋「前廊」の平面配置もある。

対合式：四合院の「正房」「東廂房」「西廂房」「倒座房」四つの建物は、全部中央に庁堂をつけ、四つの庁が中庭に向かう平面配置である。「対合式」合院は南方の多進四合院より、中庭が大きく、平面も正方形に近い。南北軸を強調する北方四合院と違い、東西軸も存在する平面配置である。

(3) 大型合院

大型の合院住宅は、上述の三合院や四合院を単位として、複数の合院を組み合わせて、南北軸に展開して、「多進合院」となる。さらに複数の「多進合院」が左右展開して組み合うと「多進多路合院」で、大型の合院になる。

大型合院は大家族集住のための存在で、一路の四合院は、一つの分家である。その「多進多路合院」もさらに組み合わせて、超大型の氏族集住になる。

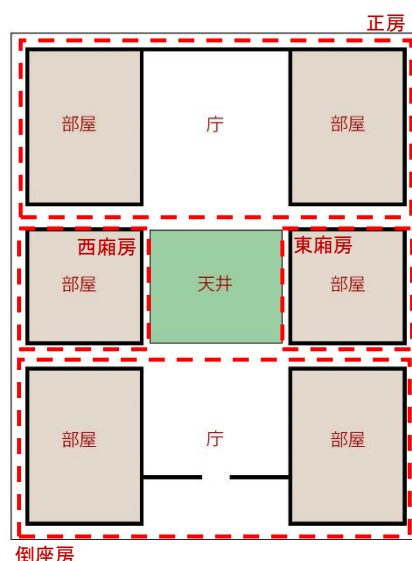


図 2.6 南方の四合院

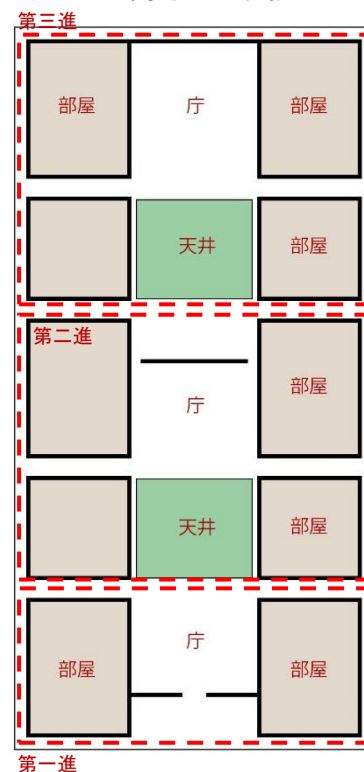


図 2.7 南方の多進四合院

2.1.4 囲屋式平面

囲屋式平面は合院式住宅に基づいた東南海岸地区に特有な平面様式で、「囲屋」という独特な建築空間が存在するからである。「囲屋」、地方によって「横屋」「扶屋」「扶厝」「護厝」「護龍」も呼ばれ、多間の部屋が並べてから構成した建物である。「囲屋」の形式から、囲屋式平面を三種類に分けていくことができる。

(1) 囲屋式

合院式住宅の両脇（三面や四面の場合も）に「囲屋」があると囲屋式合院住宅になる。囲屋式合院の中心は二・三進の四合院で、四合院の周りに、「囲屋」に囲まれている。規模によって、中心合院の左右各一や二列の「囲屋」から、前後左右四面全部「囲屋」が配置するものがあり、全部二階建て以下の木造建築である。

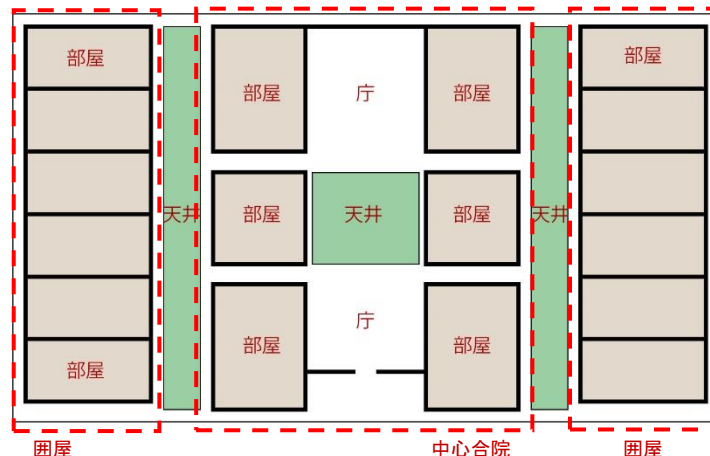


図 2.8 囲屋式平面

中央の四合院は、儀式的空間と、家族長が住む空間であり、両脇に中軸から第一列の「囲屋」は家族の一般成員が住む空間であり、第二列の「囲屋」は台所・便所・物置や家畜小屋などの付属空間である。

(2) 砦式

四合院住宅の周りを版築で基礎を高く構えだ「囲屋」により囲むと、大型家族向きの「砦式」集合住宅になる。「砦式」は閩東から閩中辺りまでの山岳地域に存在する。12世紀から19世紀にかけて、武装した盗賊団が中国南部を跳梁し、福建の人々は、防御の砦を山頂に建設した、こういう砦が「寨堡」と呼ばれ、防御性の高い住宅である。

「砦式」住宅の平面配置は囲屋式住宅と近い、中央の四合院は、儀式的空間と、家族長が住む空間であり、「囲屋」は家族の一般成員が住む空間である。しかし、防御のため、「砦式」住宅の「囲屋」は二階以上の版築土壁建築で、最上階には、盗賊を防御するため、狭間が設けてある。

(3) 土楼

人は全部土の版築の「囲屋」に住み、中央の合院が祖廟になると、「土楼」である。土楼は大規模な集合住宅であり、世界遺産の福建土楼として知られる。一般的には4階建以上で、長方形と円形二種類の形を持って、木造の骨組の外に版築土壁から囲まれる場合があり、直接に版築土壁造りもよく見る。長方形の土楼は「五鳳楼」とも呼ばれ、平面が囲屋式平面と近く、階数多い立体化した囲屋式住宅と考えられる。円形の土楼は「囲屋」を円環のように設け、中庭を囲む。円形の直径は40メートル以上で、規模を拡張するため、土楼を同心円状に建て増すこともできる。

土楼は「砦式」と同じ外敵を防御するために形成した住宅形式で、軍事的な性格を持つため、土楼の部屋は中央の祖廟以外に、すべて同じ平面を持っている。その結果、土楼も、

砦も、囲屋式住宅も、対等的生活・共同的防衛という性質を持っている。

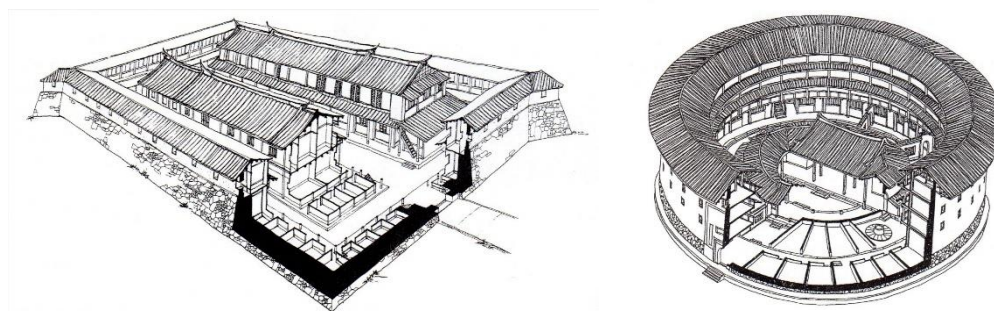


図 2.9 砦（左）と土楼（右）⁴⁷

2.1.5 方言と平面空間

(1) 「房」と「屋」

建物（house）と部屋（room）は違う概念であるが、中国の南北方言の中には、ぜんぜん逆の使い方がある。例えば北方では、建物を「房」と称し、部屋を「屋」と呼ぶ。しかし、南方方言では、建物を「屋」と称し、部屋を「房」と呼ぶ⁴⁸。また、北方方言（官話）の中に、「正房」「厢房」「倒坐房」など、建物を指す言葉があり、「堂屋」（大庁）「里屋」（奥の部屋）「小屋」（小さい部屋）など、部屋を指す言葉がある。そして南方方言に、「大屋」（屋敷住宅）「横屋」「围屋」など、建物を指す言葉があり、「大房」「厅边房」など、部屋を指す言葉がある。

(2) 「厝」

閩語を話す地域では、建物から住宅・村まで、全部「厝」と称す。「厝」は一般的に建物と訳したが、「厝」の意味が複雑だ。地名に「洪厝」（温州平陽県）、「康厝」（福安市）、「楊厝」（アモイ集美区）などの「厝」は「村」の意味をもっている。住宅の名前に「武拳厝」（尤溪桂峰村）、「洋里大厝」（福鼎翠郊村）、「厝边」（近所の人という意味）などの「厝」は「住宅」の意味をもっている。最後に、「厝」は一つの建物を指す「祖厝」（祖先を祀る建物）、「主厝」（主屋）、「護厝」の言葉もたくさんある。

こういう「村」「住宅」「建物」の意味の混合は、東南海岸地区の先史時代に「村」「住宅」「建物」三つの概念が統合した可能性を示唆している。河姆渡遺跡で出土した、百人が住める住宅を考えると、こういう氏族集住の状態に、一つの建物は、住宅であり、村もある。

(3) 「厅」・「堂」と「房」・「間」

中国が「厅堂に上がることができ、厨房に下ることもできる」ということわざがあり、婦人が家族外と家族内の事務を両立できると褒めてる。つまり、「厅堂」は住宅の中に公的な空間である。「厅堂」は「厅」と「堂」から複合していた言葉で、「厅」は南方の方言で、「堂」は北方の方言であり、建物の中央明間における半室外的なオープンスペースを指している。

「厅堂」に対して、住宅の私的な空間は「房間」である。「房間」も「房」と「間」か

⁴⁷ 戴志堅『福建民居』 中国建築工業出版社、2009、第 150 頁德化碩傑大興堡（左）と同じ本の第 252 頁南靖梅林懷遠樓（右）

⁴⁸ 北京言語大学言語研究所『漢語方言地図集・語彙巻』、商務印書館、2008、第 101-102 頁

ら複合した言葉で、それらは同じく南方の方言で、部屋の呼称の中に出現する。たとえば「大房」（閩南語で大庁の隣の部屋）、「正間」（温州語で大庁の隣の部屋）などは、人が住んでいた寝室である。

「庁堂」と「房間」を組み合わせ、公的な空間と私的な空間を備えた典型的な中国伝統住宅になった。

2.2 平面の分布と形式

2.2.1 各平面類型の分布

表 2.1 にある各タイプの省略表現は以下の通りである。一字長屋式は「一」、その中、一字式「一」、一字式の変形は「一＋」。合院式は「合」、その中、三合院は「三合」、四合院は「四合」、複合型合院は「合＋」。囲屋式において、護厝式囲屋は「厝」、砦式は「砦」、土楼は「土楼」。その他は「他」、不明や未調査は「不明」とした。

表 2.1 地域別平面配置各タイプの一覧

地域	番号	事例	年代	平面のタイプ	番号	事例	年代	平面のタイプ
閩東地域	001	福州埕宅	－	四合	002	福州揚岐遊宅	民国	合＋
	003	福州宮巷劉宅	－	合＋	004	福州ある住宅	－	合＋
	005	永泰李宅	－	厝	006	古田松台ある住宅	－	砦
	007	古田張宅	－	合＋	008	古田利洋花厝	－	合＋
	009	古田沽洋陳宅	－	合＋	010	古田吳厝里ある住宅	－	四合
	011	古田鳳埔ある住宅	－	合＋	012	古田于宅	－	合＋
	013	福安茜洋橋頭ある住宅	－	三合	014	閩清東城厝	－	合＋
	015	福安楼下保合太和宅	－	三合	016	福安楼下兩兄弟住宅	－	合＋
	017	福安楼下王炳忠宅	－	三合	018	福州宮巷沈宅	明末	合＋
	019	福州文儒坊陳宅	清	合＋	020	福州衣錦坊歐陽宅	1890	合＋
	021	福鼎白琳洋里大厝	1745	合＋	022	閩清坂東岐廬	1853	砦
	023	寧徳霍童下街陳宅	清中期	三合	024	寧徳霍童黃宅	清中期	合＋
	025	寧徳霍童下街 72 号	清中期	合＋	026	霞浦半月里雷世儒宅	1848	三合
	027	霞浦半月里雷位進宅	清中期	三合	028	福安坦洋王宅	清末	三合
	029	福安坦洋郭宅	清末	三合	030	福安坦洋胡宅	清末	三合
	031	福安廉村就日瞻雲宅	清中期	三合	032	福安廉村甲算延齡宅	清末	三合
	033	尤溪桂峰樓坪序大厝	清初期	厝	034	尤溪桂峰後門山大厝	明末	厝
	035	尤溪桂峰後門嶺大厝	1747	厝	036	福清一都東関砦	1736	砦
	037	閩清ある住宅	－	四合	038	閩清宏琳厝	1795	厝
	039	尤溪ある農家	－	三合	040	羅源梧桐五魚厝	清初期	一
	041	羅源梧桐水仙関	清	一＋	042	羅源梧桐孔照厝	清	四合
莆仙	043	羅源梧桐旗竿里	民国	合＋	044	周寧浦源鄭宅	清末	三合
	045	屏南漈頭張宅	清	三合	046	屏南漈下甘宅	明末	四合
	047	屏南漈下ある住宅	明末	三合	048	尤溪桂峰蔡宅	清	不明
	049	永泰嵩口ある住宅	1768	三合	050	福鼎西陽陳宅	－	三合
	051	涵江林宅	1940	三合	052	莆田江口ある住宅	－	一＋
	053	仙遊陳宅	明末	厝	054	仙遊榜頭仙水大庁	1446	厝

地域	055	涵江江口余宅	－	囲	056	仙遊仙華陳宅	－	囲
	057	仙遊楓亭陳和發宅	－	四合	058	仙遊坂頭鴛鴦大厝	1911	囲
	059	莆田大宗伯邸	1592	囲				
閩南地域	060	永春鄭宅	1910	四合	061	漳平上桂林黃宅	清中期	囲
	062	漳平下桂林劉宅	清	囲	063	泉州吳宅	清中期	囲
	064	泉州蔡宅	1904	囲	065	泉州ある住宅	－	他
	066	泉州黃宅	－	合+	067	晉江青陽庄宅	1934	囲
	068	晉江ある住宅	－	四合	069	晉江大倫蔡宅	－	四合
	070	集美陳宅	－	囲	071	集美陳氏住宅	－	囲
	072	漳州南門ある住宅	－	囲	073	龍岩新邱厝	1888	囲
	074	泉州亭店楊阿苗宅	1894	囲	075	南安官橋蔡資深宅	清	囲
	076	泉州泉港黃素石樓	1741	土樓	077	南安石井中憲邸	1728	囲
	078	漳浦湖西藍廷珍宅	清中期	囲	079	漳州官園蔡竹禪宅	清中期	囲
	080	アモイコロンス大夫邸	1796	囲	081	漳浦湖西趙家堡	明末	合+
	082	德化碩傑大興堡	1722	砦	083	華安岱山齊雲樓	1862	土樓
	084	華安大地二宜樓	1740	土樓	085	漳浦深土錦江樓	1791	土樓
	086	晉江石獅鎮ある住宅	－	四合	087	晉江大倫郷ある住宅	－	四合
	088	龍岩適中太和樓	－	土樓	089	龍岩毛主席旧居	－	囲
	090	龍岩適中典常樓	1784	土樓	091	南安湖内村土樓	清末	土樓
	092	南安垵中村土樓	1857	土樓	093	南安然厝映峰樓	明末	土樓
	094	南安卜橋聚奎樓	清中期	土樓	095	南安舖前慶原樓	清	土樓
	096	安溪琰子德美樓	民国	土樓	097	安溪山後村土樓	清	土樓
	098	安溪琰子聯芳樓	清末	土樓	099	德化承澤黃宅	民国	一
	100	德化格頭連氏祖厝	1508	一+				
閩中地域	101	永安西洋邢宅	－	砦	102	三明莘口陳宅	－	一+
	103	三明魏宅	民国	四合	104	三明列西羅宅	－	囲
	105	三明列西吳宅	－	四合	106	永安小陶ある住宅	－	囲
	107	永安安貞堡	1885	砦	108	沙県茶豊峽孝子坊	1829	合+
	109	三元シン口松慶堡	清中期	砦	110	沙県建国路東巷 29 号	清末	合+
	111	沙県東大路 72 号	清末	合+	112	永安貢川機垣楊公祠	1778	合+
	113	永安貢川金魚堂	1624	囲	114	永安貢川嚴進士宅	明末	合+
	115	永安福庄ある住宅	－	砦	116	永安青水東興堂	1810	囲
閩西客家地域	117	上杭古田八甲廖宅	－	囲	118	新泉張宅	－	囲
	119	新泉芷溪黃宅	－	他	120	新泉張氏住宅	－	囲
	121	新泉望雲草堂	－	他	122	連城テュ溪羅宅	－	他
	123	長汀洪家巷羅宅	－	一+	124	長汀新耕別荘	－	三合
	125	上杭古田張宅	－	囲	126	連城培田双善堂	清中期	砦
	127	連城培田敦樸堂	－	囲	128	連城培田双灼堂	清末	砦
	129	連城培田継述堂	1829	囲	130	連城培田濟美堂	清末	囲
	131	南靖石橋村永安樓	16 世紀	土樓	132	南靖石橋村昭德樓	－	土樓
	133	南靖石橋村長藍樓	清	土樓	134	南靖石橋村逢源樓	－	土樓
	135	南靖石橋村振德樓	－	土樓	136	南靖石橋村順裕樓	1927	土樓
	137	南靖田螺坑步雲樓	清初期	土樓	138	南靖梅林和貴樓	1926	土樓

	139	平和西安西爽楼	1679	土楼	140	永定高陂遺経楼	1806	土楼
	141	永定高北承啓楼	1709	土楼	142	永定湖坑振成楼	1912	土楼
	143	平和蘆溪厥寧楼	1720	土楼	144	南靖梅林懷遠楼	1909	土楼
	145	永定高陂大夫邸	1828	土楼	146	永定洪坑福裕楼	1880	土楼
	147	連城培田官庁	明末	厝	148	連城培田都クン府	-	厝
	149	連城芷溪集鱸堂	清初期	厝	150	連城芷溪凝禧堂	清末	厝
	151	連城芷溪紹徳堂	清中期	厝	152	連城芷溪培蘭堂	清末	厝
	153	連城芷溪ネ雲山房	清末	厝	154	永定撫市ある住宅	-	土楼
	155	永定鵲嶺村長福楼	民国	土楼				
閩北地域	156	建瓯伍石村馮宅	-	合+	157	建瓯朱宅	-	四合
	158	浦城中坊葉氏住宅	-	合+	159	浦城上坊葉氏大厝	清	合+
	160	浦城觀前饒加年宅	-	合+	161	浦城觀前余天孫宅	-	四合
	162	浦城觀前余有蓮宅	-	合+	163	浦城觀前張宅	-	四合
	164	武夷山下梅鄒邸	1754	合+	165	武夷山下梅儒学正堂	清中期	合+
	166	武夷山下梅参軍邸	清中期	合+	167	崇安郊区藍湯応宅	-	一+
	168	南平洛洋村ある住宅	-	四合	169	邵武中書邸	明末	合+
	170	邵武和平廖氏大夫邸	清末	合+	171	邵武金坑儒林郎邸	1632	四合
	172	邵武金坑 16 号李宅	-	合+	173	邵武金坑中翰邸	-	合+
	174	邵武大埠岡中翰邸	-	合+	175	邵武和平李氏大夫邸	清末	合+
広東潮汕地域	176	寧化安遠ある住宅	-	厝	177	建寧丁宅	-	合+
	178	泰寧尚書邸	明末	合+	179	光澤崇仁裘宅	明末	合+
	180	光澤崇仁ゴン氏宅	明末	合+	181	邵武和平黄氏大夫邸	明	合+
	182	潮州弘農旧家	-	厝	183	揭陽新亨ある住宅	-	厝
	184	潮陽棉城ある住宅	-	合+	185	棉城義立庁ある住宅	-	厝
	186	揭陽錫西郷ある住宅	-	厝	187	潮州許氏邸	伝説宋	厝
浙東地域	188	潮州三達尊黄府	明末	厝	189	潮陽桃溪図庫	-	砦
	190	普寧洪陽新砦	-	合+	191	潮安坑門郷揚厝砦	-	土楼
	192	潮安象埔砦	伝説宋	砦	193	潮州辜厝巷王宅	-	合+
	194	潮州王厝饒宅	-	四合	195	普寧泥溝ある住宅	-	他
	196	澄海城関安慶巷ある住宅	-	他	197	潮州梨花夢処書齋	清末	他
	198	澄海樟林ある住宅	-	四合				
	199	寧波張煌言旧居	-	三合	200	寧波庄市鎮葛宅	-	三合
	201	庄市鎮大樹下ある住宅	-	三合	202	奉化岩頭毛氏旧居	-	三合
	203	寧波走馬塘老流房	-	一	204	慈城甲第世家	明末	厝
	205	慈溪龍山鎮天叙堂	1929	合+	206	諸暨斯宅斯盛居	清中期	厝
	207	諸暨斯宅発祥居	1790	厝	208	諸暨斯宅華国公別荘	-	合+
	209	天台妙山巷懷徳楼	-	三合	210	天台城関茂宝堂	-	厝
	211	天台城関張文郁宅	明末	四合	212	天台街頭余氏住宅	-	合+
	213	紹興倉橋直街施宅	-	四合	214	紹興題扇橋ある住宅	-	他
	215	紹興下大路陳宅	-	他	216	鄞県鄞江鎮陳宅	-	他
	217	黄岩黄土領虞宅	-	厝	218	黄岩天長街ある住宅	-	一
	219	天台来紫楼	清	三合	220	寧波月湖中営巷張宅	清	三合
	221	寧波月湖天一巷劉宅	民国	三合	222	寧波月湖青石街関宅	清	三合

	223	寧波月湖青石街張宅	清	三合	224	黄岩司庁巷汪宅	民国	三合
	225	黄岩司庁巷 16 号張宅	清末	四合	226	黄岩司庁巷 32 号洪宅	清	四合
浙南地域	227	永嘉ダイ頭陳宅	清末	一	228	泰順上洪黄宅	－	三合
	229	平陽順溪戸侯邸	清	囲	230	平陽騰蛟蘇宅	民国	一
	231	永嘉芙蓉村北甲宅	－	一	232	永嘉芙蓉村北乙宅	－	一
	233	永嘉水雲十五間宅	清末	一十	234	永嘉花壇「宋宅」	伝説宋	一
	235	永嘉ダイ頭松風水月宅	清	一	236	永嘉蓬溪村謝宅	－	一十
	237	永嘉林坑毛歩松宅	－	一十	238	永嘉東占坳黄宅	－	一
	239	景寧小佐巖宅	民国	一	240	景寧桃源ある住宅	清	一十
	241	文成梧溪富宅	清末	囲	242	永嘉林坑ある住宅	－	一十
	243	永嘉ダイ頭陳賢楼宅	清	一十	244	樂清黄檀洞ある住宅	－	三合
	245	平陽坡南黄宅	清	一	246	平陽青街李宅	清	四合
	247	蒼南碗窯朱宅	清	一	248	泰順百福岩周宅	清	一
浙西地域	249	龍遊丁家ある住宅	－	三合	250	龍遊若塘丁宅	－	四合
	251	龍遊脈元ゴン宅	－	三合	252	蘭溪長楽村望雲楼	明	合十
	253	龍遊溪口傅家大院	－	囲	254	松陽望松黄家大院	－	合十
	255	江山廿八都丁家大院	－	合十	256	江山廿八都楊宅	－	四合
	257	松陽李坑村 46 号	－	三合	258	衢州峡口徐開校宅	1910	合十
	259	衢州峡口徐瑞陽宅	清末	合十	260	衢州峡口徐文金宅	－	四合
	261	衢州峡口鄭百万宅	清	四合	262	衢州峡口劉文貴宅	清	三合
	263	衢州峡口周樹根宅	民国	四合	264	衢州峡口周朝柱宅	民国	四合
	265	遂昌王村口ある住宅	－	一				
浙中地域	266	東陽白坦郷務本堂	清	合十	267	東陽史家庄花庁	－	三合
	268	武義ユ源声遠堂	明末	囲	269	武義郭洞燕翼堂	－	三合
	270	磐安樺溪余慶堂	－	四合	271	縉雲河陽循規映月宅	－	囲
	272	縉雲河陽康讓之間宅	－	囲	273	東陽黄田ハン前台門	－	囲
	274	義烏雅端容安堂	－	囲	275	金華雅ハン七家庁	明	四合
	276	東陽紫微山尚書邸	明末	囲	277	東陽六石鎮肇慶堂	明	囲
	278	武義ユ源裕後堂	1785	囲	279	武義ユ源上万春堂	－	囲
	280	東陽湖溪鎮馬上橋花庁	清	囲	281	東陽盧宅	明	囲
	282	浦江鄭氏義門	清	囲	283	建德新葉花萼堂	明	他
	284	建德新葉種徳堂	民国	三合	285	建德新葉是亦居	民国	三合
	286	武義ユ源玉潤珠輝宅	－	囲	287	武義郭洞新屋里宅	明末	囲
	288	武義郭上萃華堂	－	三合	289	武義郭下慎徳堂	－	四合
	290	東陽巍山鎮趙宅	－	他	291	東陽水閣庄葉宅	－	三合
	292	東陽城西街杜宅	－	三合	293	縉雲河陽朱宅	清	囲

表 2.2 平面配置各タイプにおける地域別統計

	一	一十	三合	四合	合十	囲	砦	土楼	他
閩東	1/49	1/49	17/49	5/49	17/49	5/49	3/49	0	0
莆仙	0	1/9	1/9	1/9	0	6/9	0	0	0
閩南	1/41	1/41	0	5/41	2/41	16/41	1/41	14/41	1/41
閩中	0	1/16	0	2/16	5/16	4/16	4/16	0	0

閩西	1/39	0	1/39	0	0	14/39	2/39	18/39	3/39
閩北	0	1/26	0	5/26	19/26	1/26	0	0	0
潮汕	0	0	0	2/17	3/17	6/17	2/17	1/17	3/17
浙東	2/28	0	11/28	4/28	3/28	5/28	0	0	3/28
浙南	11/22	6/22	2/22	1/28	0	2/28	0	0	0
浙西	1/17	0	4/17	6/17	5/17	1/17	0	0	0
浙中	0	0	7/28	3/28	15/28	17/28	0	0	2/28

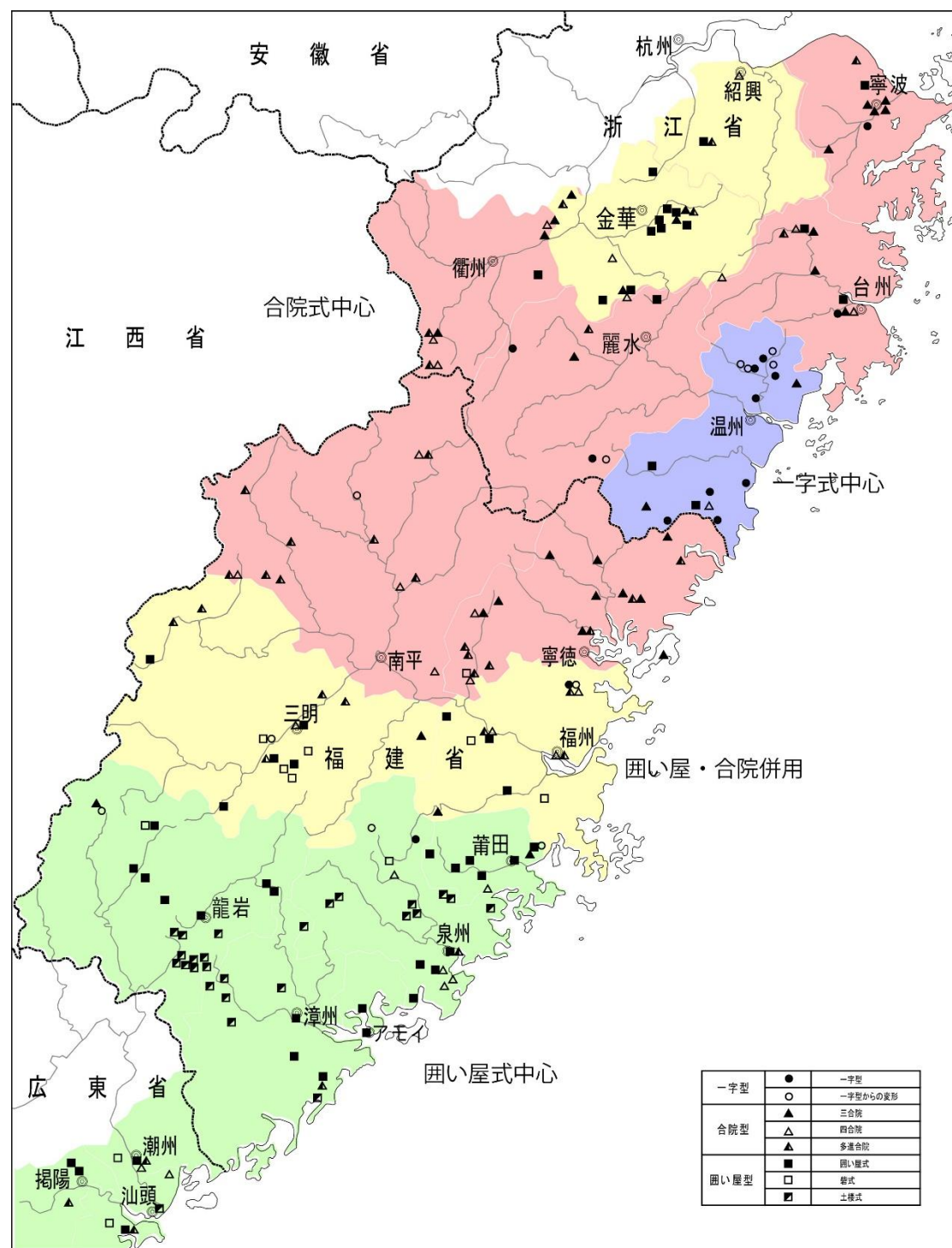


図 2.10 平面類型の地域分布

東南海岸地区民家の平面配置の分布によって、一字式平面は浙江温州辺りに集中し、他には山岳地帯に散在して数が少ない。合院式平面は、浙江と福建の北部に多い。その中で、閩北・閩東北部・浙西は合院式平面が集中している地域である。囲屋式平面が集中しているのは閩南・莆仙・閩西・潮汕地域である。そして、閩東の南部・閩中と浙東・浙中の一部は、囲屋式平面と合院式平面を併用する地域である。

2.2.2 間取り

東南海岸地区の明清民家の主屋は大部分桁行き三間～五間、奥行き二間くらいである。真中は「正」で、開放的な空間であり、両脇は部屋である。大規模の屋敷はいくつかの四合院が複合し、土塼・「天井」（中庭）・「正」（正房）・「廂房」などを構成する。明の時代の建物は一階木造住宅が多く、レンガ・石・木材混用する住宅は少ない。清の時代は主に一階や二階建ての木造住宅である。清末と中華民国の時代になると、レンガ・土壁、木梁・木屋根の住宅が民家の主流になる。旧誌は、福建中部について次のように伝える「屋多木建、壁以塼（レンガ）・泥築之。規模普通為上下三正、左右輔以廂房、間有構層樓者」⁴⁹。

福州辺りに、よくある住宅の形式は一字型の長屋であり、「一条龍」と呼ばれる。その特徴は、①小型の住宅の主屋の三室は一行に並べる、正庁の両脇に「正身」と呼ばれる部屋がある。②主屋の周りに、増築する「護龍」と呼ばれる廂房がある。③大型の屋敷は正庁の前に庭があり、この庭が「埕」と呼ぶ。④埕は赤いレンガに舗装され、もの干しや日常の活動に利用される。⑤桁行六間の住宅もある。⑥二つの大庁があつて、前庁・後庁に分ける。⑦大庁の両脇も廂房があるなどである。

閩南（福建の南部）地方は、「厝」と呼ばれる住宅建築がよくある。その特徴は、①真中は正庁、屋根は最も高く、左は「大房」（部屋）、右は「二房」（部屋）、屋根はちょっと低くなる。②正庁から前に伸びる付属建物は「護龍」（または「伸手」）と呼ぶなどである。正庁と大・二房三間に左右「護龍」各一間を加えると、閩南によくある「五間起」住宅になる。五間の部屋はもの干し用の中庭・「埕」を囲み、その外もさらに廂房を増築することができる。この三合院住宅は、前に見ると、くねくね曲がって、龍と似ているから「護龍」と呼ばれる。

(1) 「一」字式平面

呉語甌江弁の方言を話す温州市永嘉県埭頭村陳賢樓宅（243番）はL形の長屋である。⁵⁰全体は七間の一階建ての主屋と四間の二階建ての東廂である。二階建ての東廂は陳さんによると後期増築の部分であるが、年代がある古いものである。今、陳宅は陳賢樓氏とお母さん二人しか住んでいない。彼らは東廂の南部の二間に住み、他の部屋は全部空いている。陳さんから聞き取りによると、主屋の真中の一間は「上間」（イェカ）と呼ぶ。「上間」は堂屋で、結婚・葬儀などの儀式や家族重大な活動しか使えない空間である。「上間」の両側は親と長子が住む場所で、「正間」もしくは「一間」と呼ぶ。「正間」の外側は「二間」で、地位は「正間」より低い。一番外側の両間は「辺間」と称す、あるいは「倒立」（ドーリ）と呼ぶ。一般的には物置の付属空間であり、現代は居室に改造することも少なくない。「二間」と「辺間」の間に、もし別の何間があるなら、「三間」「四間」…と呼ぶ。陳宅は増築した東廂があり、東廂四間の北二間分を「三間」と呼び、陳賢樓氏自分が住む南の二間分は「四間」と呼ぶ。

⁴⁹ 「民国」王維梁、劉孜治『明溪県誌』アモイ大学出版社、2008、巻11『礼俗誌』より

⁵⁰ 実地調査と地元の陳賢樓氏からの聞き取り調査より。後の中舎堂も実地調査と地元の黄氏からの聞き取り調査よりである。

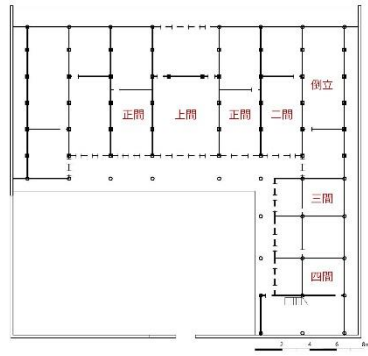


図 2.11 永嘉県埭頭村陳賢樓宅（平面と写真）

閩語閩南区の方言を話す、泉州市徳化県の承沢村の「中舎堂」（99 番）は、大庁の「太師壁」上に「中舎堂」の横額を掲げることが名前の由来である。主人は黄氏、中舎堂は家族の屋号である。今は八間の長屋で、西の両間は近年改築したものである。全体は二階建てで、中央の堂屋は二階の吹抜け空間で、先祖を祭る空間である。当地の人から「頂厅」（ドアティアノー）と呼ぶ。「頂厅」と隣接するのは「太房」（ドバンロ）と呼び、格式高い部屋で、今は空室である。現在使用している部屋は、外側の「辺房」である。

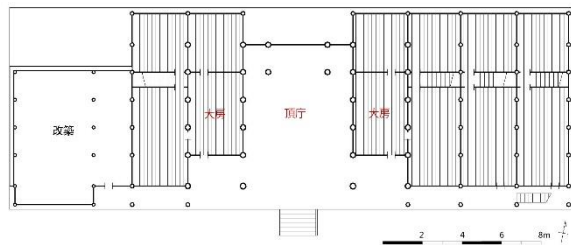


図 2.12 徳化県承沢村黄宅（中舎堂）（平面と写真）

(2) 合院式平面

呉語処衢弁の方言を話す麗水市縉雲県河陽村の朱宅（293 番）は、三進の四合院である。伝統の四合院と異なり、朱宅の生活空間は第一進のにわを囲む建物に集中している。そして後ろの二進の院は素朴で、使用人生活や物置であり「伙社」と呼ばれる。朱宅の大門は東向きで、大門を入ると小さな袋小路がある、袋小路の果ては便所で、小路の真中の右手に中門があり、中門は「閭門間」と呼ばれる。中門を入ると、第一進の院である。ここは、普段の生活空間であり、各部分には名称がある。中央の中庭は「道壇」と称する。「道壇」の北は三間の正房で、「師間」（シガン）と呼び、家族の応接室である。普段は、家族の公共活動もここで行う。一進のうち「道壇」へ向かう「師間」以外の部屋は「堂前」（ドヤー）である。「堂前」は大家族を構成する各核家族の日常生活空間である。「師間」と「堂前」は前廊があり、この廊が「路堂」（ロドー）と呼ばれる。最後に、各進の隅にある部屋は「挿屋間」（サーウガン）と呼ばれ、厨房や階段室である。全体は二階建である

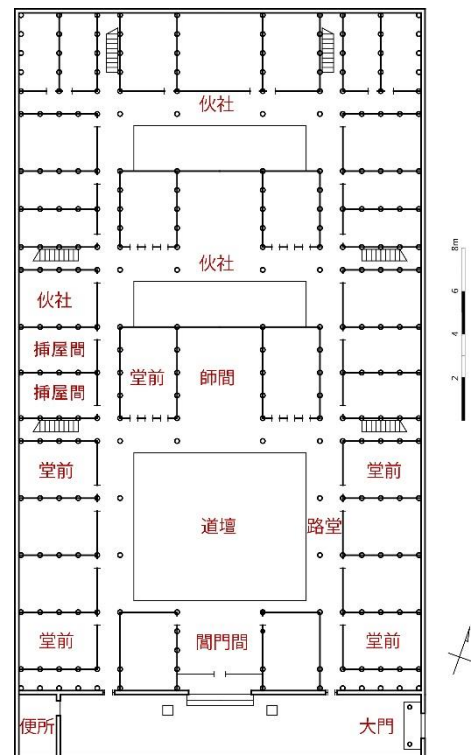


図 2.13 縉雲県河陽村朱宅平面

し多進の合院なら、一般的に五間の中門があり、「下座」と呼ばれる。「下座」の中央の門庁は「下堂」で、門庁の中の扉は「下庭壁」と呼ばれる。これに対して、主屋後ろの両脇には一般的に廂房がある。基本的に両間であり、主屋に近いのは食事の庁で「通行庁」と呼ばれる。他の一間は台所で、台所と「通行庁」を「伙廂」と呼ばれる。

同じく閩語閩東区の方言を話す福州市羅源県梧桐村の「孔照厝」黄宅は『羅源黄氏族譜』より、18世紀中期に建造したと推測する。孔照厝は四合院であり、後部の主屋は「後落」と呼ばれ、前部の入口がある建物は「前照」で、東西の廂房は「書院」と呼ばれる。主屋は七間で、明間が前後二つの庁があり、前庁は二階吹き抜け、家族集会の堂屋である。次間も前後二つの部屋があり、前の「庁辺房」は寝室、後ろの「後房」は台所である。稍間は「六扇房」と呼ばれ、尽間は「八扇房」あるいは「撤舍」と呼ばれる。稍間と尽間の配置は出入り口位置によって変化自由である。吹き抜けの前庁を除き、全体的に二階建てである。二階はもともと物置で、人口が増えるとともに、屋根を入母屋へ改造し、二階も生活空間として使用した。

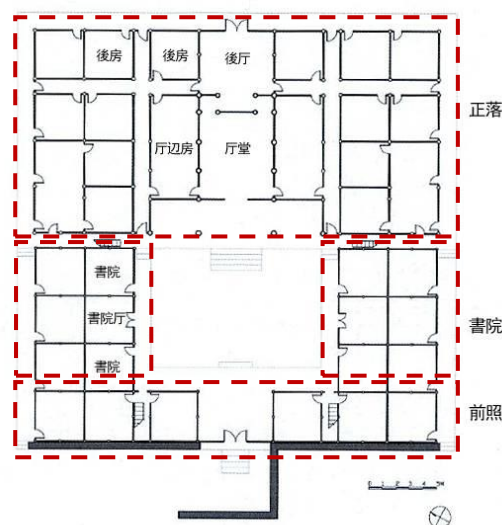


図 2.15 羅源県梧桐村「孔照厝」平面

「書院」は三間で、奥行き二間の建物である。「書院」の真中は「書院庁」で一般的には応接室とする。「書院」も二階で、一階の部屋は「庁辺房」に及ばないとはいえ、日当たりが良いから、孔照厝全体の中で一番快適な住空間である。「書院」の二階は窓がなく、物置である。⁵⁴

閩語閩南区の方言を話す潮州の「四点金」住宅は二つの三間建てを「対合」している四合院である。出入りの大門は「門庁」あるいは「前庁」と呼ばれ、「門庁」両側各一間の「下房」がある。「下房」は一般的に子供や使用人の居室である。「門庁」に入ると中庭で、左右各一間の廂房の一つは台所で「八尺房」と呼ばれ、もう一つは柴房で「厝手房」と呼ばれる。中庭の後ろは主屋で、真中は「上庁」、両側は「大房」、大房は親の部屋である。もう一つの「四点金」住宅の配置は、中庭左右を廊や庁になり、隣に小さい部屋を台所などにする。こういう小さい部屋を「格仔」と呼び、「格仔」と「大房」の間に出入りの側門がある。この側門が多子孫を祈るため「子孫門」と呼ばれる。⁵⁵

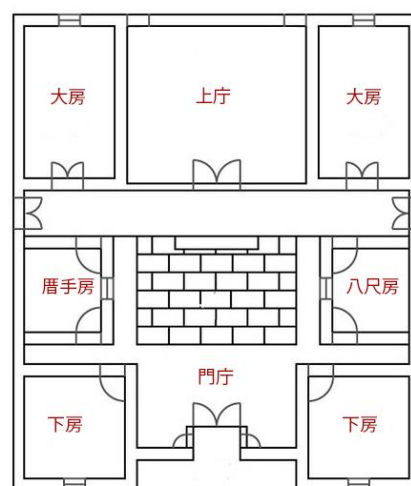


図 2.16 潮州の「四点金」平面

⁵⁴ 黄曉雲『閩東伝統民居大木作研究』中央美術学院博士論文、2013、第 26 頁、図 2.15 も同じ文献の第 28 頁より

⁵⁵ 陸琦『広東民居』中国建筑工業出版社、2009、第 103 頁、図 2.16 も同じ文献の第 103 頁より

閩語閩南区、泉州辺りに三間と五間の住宅がよくあり、「三間張」(サンクインデュウン)「五間張」(ゴクインデュウン)(図 2.17)⁵⁶と呼ばれる。一般的には二進の四合院で、入口から第一進は門庁の建物と廂房であり、「下落」(エーロッ)と呼ばれ、中央の大門は「下庁」と呼ばれ、「下庁」の両側は順に「下間」「角間」がある。第二進は主屋で「頂落」(チンロッ)あるいは「上落」(シオンーロッ)と称する主屋は前後二部があり、前部の中央は堂屋、「上庁」あるいは「頂庁」と呼ばれる。両側の次間は「大房」(ドオバンロ)と呼ばれ、下手へ向かって左の地位が右より高いから、左側の「大房」も「上大房」と呼ばれる。一番外側は「辺房」。主屋後部の部屋は「房」と呼ばない。真中は「後萱」、両側は「後間」、さらに外側は「角脚間」である。二進の建物の間の中庭である。中庭は一般的に、南中国で「天井」とよばれ、閩南人はここを「深井」(ツイムツイン)と呼ぶ。「深井」の両側は各一間の部屋があり、「樺頭」(キッタオー)「崎頭」(カッタオー)「角頭」(カクタオー)と呼ばれる。「樺頭」間は一般的には客人が休憩する部屋で、「上落」と「下落」を連結する機能もある。⁵⁷

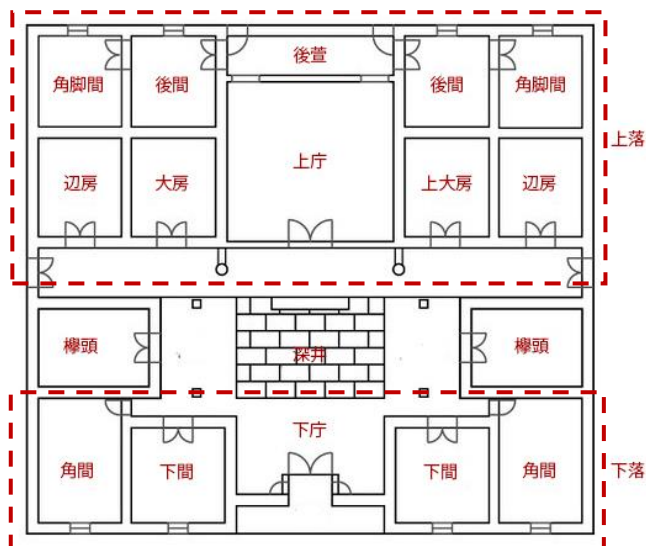


図 2.17 閩南の「五間張」平面

(3) 囲屋式平面

閩語閩南区の方言を話す泉州亭店村の楊阿苗宅(74番)(図 2.18)⁵⁸は「囲屋」付きの四合院である。当地はこういう住宅を「官式大厝」と呼ぶ。主体建築は二進の四合院で「主厝」と称し、平面配置は、上述「五間張」四合院と同じである。

主体以外の「囲屋」は「護厝」と呼ばれる。「護厝」の間の小さい天井は「護厝井」で、「護厝」と「主厝」を連結する部屋は「過水間」(あるいは「過水廊」)と呼ばれる。「護厝」前部入口の「過水間」も「護厝頭」と呼ばれ、「護厝」の門庁である。「護厝」後部の「過水間」も「護厝尾」と呼ばれ、中の

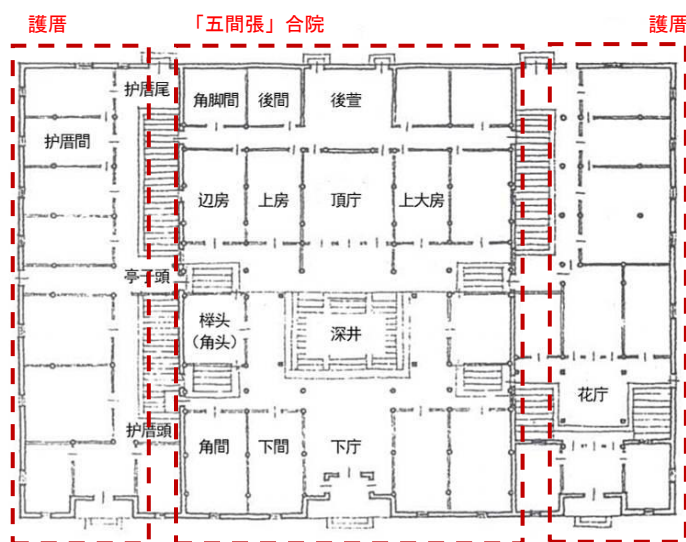


図 2.18 泉州亭店村の楊阿苗宅平面

⁵⁶ 図 2.17 は戴氏『福建民居』前注と同じ、第 129 頁より

⁵⁷ 関瑞明「泉州伝統民居官式大厝与楊阿苗故居」『新建築』、2011.5、第 114-117 頁

⁵⁸ 図面は戴氏『福建民居』前注と同じ、第 134 頁より

「過水間」も「亭子頭」と呼ばれる。「護厝」は付属空間で、一般的には物置・使用人の部屋や客室となる。「護厝」の位置で、書斎や花庁を建造することもある。楊阿苗宅は東の「護厝頭」から「亭子頭」までの「護厝」を三進三間の建てになり、第二進には「花庁」があり、接客と娯楽の機能をもっている。

「主厝」と「護厝」の前に、庭がある。この庭が「厝埕」（ツーチャン）と呼ばれる。王建設氏の研究より、閩南方言のなかで、「埕」は「庭」である。「厝埕」は「官式大厝」前の「庭」である。「厝埕」も「埕頭」と称し、農村地方で物干しの機能がある。

閩語閩中区の方言を話す三明市永安の西華片の住宅も「厝屋」付きの四合院である。⁵⁹ 主体は二～三進の四合院で、左右対称に「厝屋」を配置する。二進の四合院は「両堂」と呼ばれる。前に大門がある建物は「下房」で、主屋は「上房」と呼ばれる。「下房」の中央明間は「下堂」で、「上房」は「上堂」である。三進の四合院は「三堂」と呼ばれ、「両堂」の間に「中房」と「中堂」がある。上・中・下房の間には、天井である。天井の側面には、廂房がある。合院外側に廂房と並行しているのは「厝屋」で、「扶屋」あるいは「扶厝」と呼ばれる。一列の「扶屋」は「一横」と呼ばれ、一般的には左右対称として配置する。西華片の住宅のよくある形式は「二堂二横」と「二堂四横」である。

一般的に「上房」は五間で、奥行きが深い。「上堂」は祭祀・接客・結婚・葬儀・祭り宴会などの時使用する儀式的空間である。「上房」の次間は「一直」、「上堂」に隣接するから、地位一番高い部屋である。「一直」の外側は「二直」で、「一直」と「二直」をまとめて「上堂間」と呼ばれる。ここは小さい窓しかないので、日当りは良くない。「一直」と「二直」の間に出入りのため「子孫巷」という廊下がある。「上堂間」の後ろに桁行方向の廊下がある。廊下の外壁に 60 cm くらい出した張り出し窓がり、当地で「掛寮」と呼ばれる。「下房」も五間で、奥行きは「上房」より浅い、「下堂」は開放できない門庁である。「下堂」の次間と稍間は「下堂間」と呼ばれる。廂房は大部二間の寝室であり、日当りは良いから、地位においては「上堂間」に及ばないとはいえ、主要な寝室である。

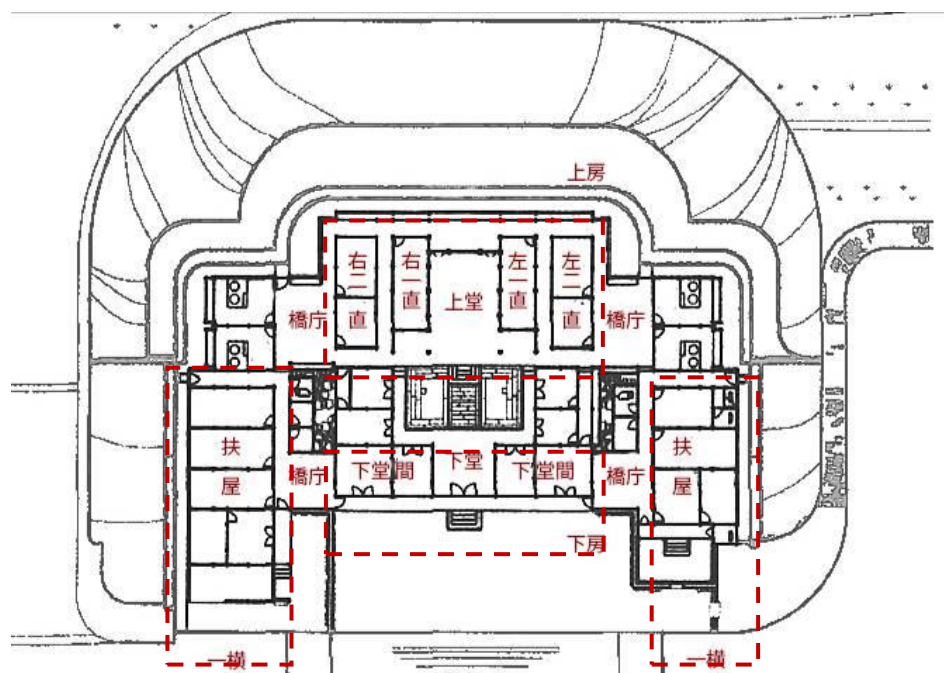


図 2.19 永安西華片の住宅平面⁶⁰

⁵⁹ 薛力「福建永安青水民居東興堂初探」『建築学報』2011.S1、第 112-118 頁

⁶⁰ 賀從容「福建永安西華片民居の布局、形式及建房習俗」『建築史論文集』Vol.16、2002、第 145-154 頁

この地域に砦式住宅もある。有名なのは安貞堡（107 番）⁶¹で、版築の「扶屋」の中心に、三進三路の四合院が囲まれた。基本的な平面配置は、上述の「囲屋」付きの四合院と同じく、一階の廂房は三間で、明間を「自修室」と名付け、当初は書斎として使用し接客機能もある。「扶屋」は 3×4 の部屋を並べて組み合わせており、一般的には付属空間である。上・中・下房と「扶屋」が連携している空間は「橋庁」である。側天井の排水が「橋庁」のしたに経るから、「過水廊」とも呼ばれる。「橋庁」の下に、地面から 30～60 cm 離れ、庁内日当たり・通風よい、快適な生活環境である。台所に近いから、常にダイニングルームとして、祭りの時も重要な宴席の場所である。

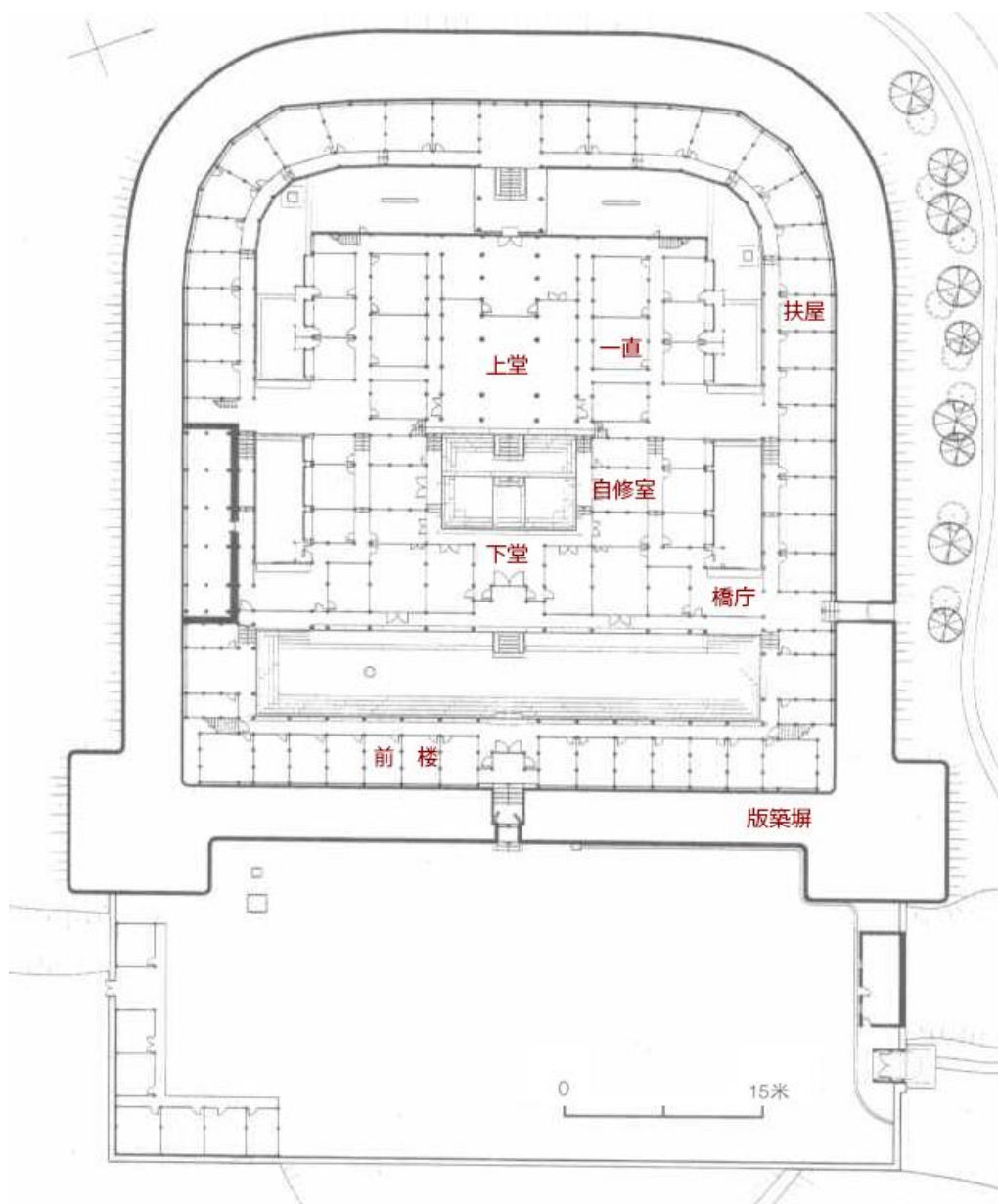


図 2.20 安貞堡の一階平面⁶²

⁶¹ 李秋香『福建民居』清華大学出版社、2010、第 178-255 頁

⁶² 李秋香『福建民居』前注と同じ、第 202 頁より

閩語閩東区の方言を話す永泰県嵩口の成厚庄はもう一つの砦式住宅である。⁶³平面は四角形であり、隅に四つの櫓がある。一般的な砦式住宅と違い、成厚庄は二重の版築城壁がある。本丸は元々四合院であり、東の3間廂房は現在倒壊している。東向きの正房はもと五間、今三間正房プラス二間廂房の形式になる。正房の中央一間は「大庁」と呼ばれ、両側の部屋は「庁辺房」と称し、家族長の部屋である。南北の二階建ての廂房の一階は二の丸への門庁であり、南廂房の二階は観音菩薩を供養する「神庁」で、北廂房の二階は、祖先祀るの「祖庁」である。この三面庁の配置も、「対合式」平面の意匠を持っていた。二の丸には、「護厝」であり、城壁の上に築く。二階建ての「護厝」は家族成員の住む空間で、二階が防御するため、狭間を設けている。成厚庄は明末に盗賊を防衛するために、町からちょっと離れた丘の上に建造された。最盛期に2000人ぐらいが住んで、今は、交通不便のため、みんな引っ越して、ただ一世帯が最近まで住んでいた。

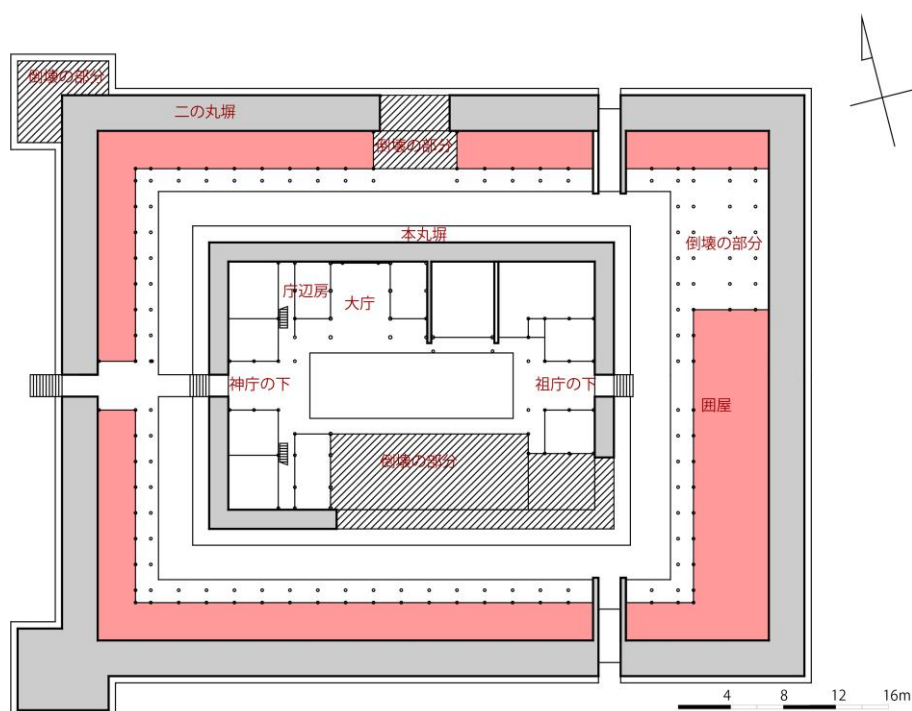


図 2.21 成厚庄の一階平面

閩語閩南区の方言を話す南靖県石橋村の順裕楼は土楼である。⁶⁴順裕楼は南靖県最大の土楼で。平面には、二つの同心円と組み合わせて、外環のは直径74mの四階建てで、毎階72間、総計288の部屋がある。内環は二階建て、四分の一しか建てなかった、そして中庭の中に「祭庁」がある。順裕楼は一間の柱間に一階から四階までに一つの单元となり、一階は台所とダイニングルームで、ダイニングルームは接客の機能も持っている。二階は物置、三階と四階は寝室である。

⁶³ 実地調査より、方言や部屋名前などは当地人の陳氏より聞き取った。

⁶⁴ 李秋香『福建民居』前注と同じ、第105-115頁

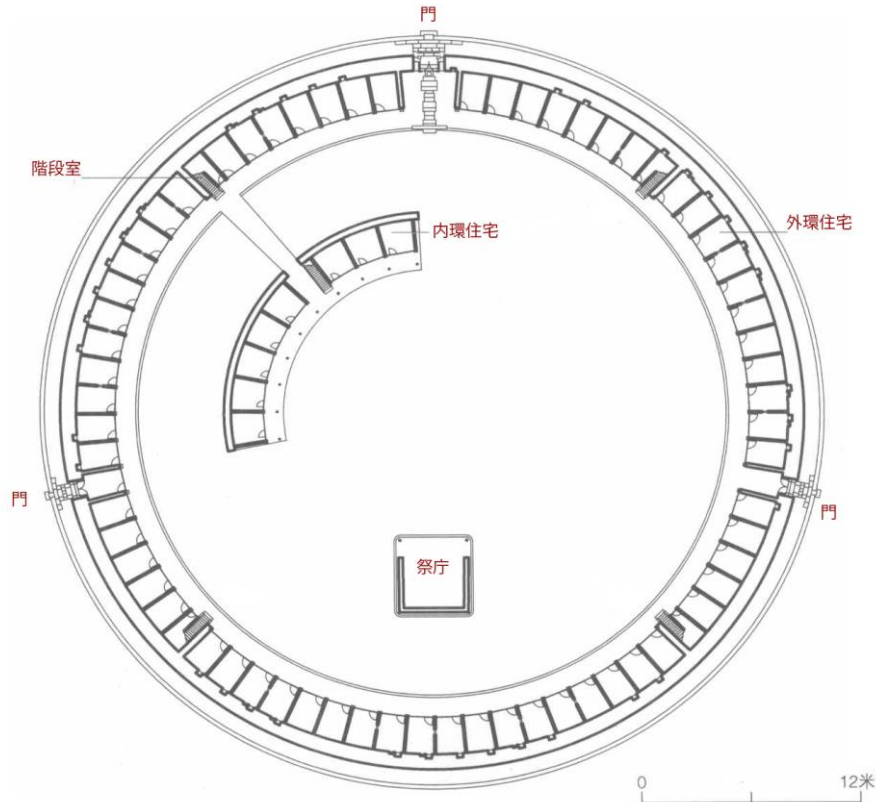


図 2.22 順裕楼の一階平面⁶⁵

2.2.3 建築空間の機能とヒエラルキー

(1) 堂屋

「堂屋」は、北方民家において、「正房」中央の庁、あるいは「正房」そのものを指す。『晋書・芸術伝・淳于智』に「家人既集、堂屋五間拉然而崩」や唐の詩人顧非熊『下第後寄高山人』の「我家堂屋前、仰視大茅巔」の句などの中の「堂屋」は、「正房」のことを指している。

南方民家の中にも、「堂屋」空間が存在している。地方によって様々な呼び方があり、基本的に「正房」中央の庁を指している。呉語方言の中には、「堂屋」を「師間」（縉雲県）・「上間」（温州市）と呼び、閩語方言の中には、「頂庁」（泉州市）・「庁頭」（徳化県）・「庁中」（閩清市）・「客廂」（邵武市）などの呼び方がある。

「堂屋」は庭に向かってる部分（あるいは前部だけ）に扉がなく、半室外の空間である。広義的な「堂屋」は、合院式住宅における「進」の正房の中央一間を指して、狭義上、住宅の主屋の中央一間を指している。ここで狭義的な「堂屋」空間を検討すると、東南海岸地区には一階建て、二階建てと二階吹き抜け三種類の「堂屋」がある。

すべての「堂屋」は、①平面配置が近い、②前後二部があり、③前の前庁は公的な空間で、④後ろの後庁は私的な空間、なのである。前後庁を区切るのは折り目の板壁で、壁の中央外向きの扉があって、その両脇に、外向きあるいは左右向きの扉がある。普段利用するのは、両脇の扉だけ、中央の扉は神と亡霊のためなので、重大な祭りや葬式の時しか使わない。

二階建ての「堂屋」は、前庁と後庁全部に二階があり、一階の部分は前述と同じく、二階中央の板壁は直線で、両脇に外向きの扉がある。一般的に、二階の前庁は祖先を祀るた

⁶⁵ 李秋香『福建民居』前注と同じ、第 105 頁より

めの「祖堂」で、後部の部屋は物置である。

吹き抜け式の「堂屋」は、前庁が二階吹き抜け、後部が二階建てである。基本的な平面配置は、一階建ての「堂屋」と同じ、後庁の上には、二階部屋を連結するための廊下が通じている



一階建ての堂屋



二階吹き抜けの堂屋



二階建ての堂屋

図 2.23 堂屋

伝統的な「堂屋」: 伝統的な「堂屋」は家族の重大な儀式しか使えない空間である。結婚式・葬式・祭り時の家族宴会、祖先祀り……その中で、最も重要なのは、結婚・葬儀の儀式である。

老人の最期の時、寝台を「堂屋」に置き、この過程は、「搬舖」あるいは「徙舖」「出庁」「入庁堂」と呼ばれる。中国の古い民俗には、死んだ場所にこだわっている事例がある。自分の家の「堂屋」に死ぬなら良い、いわば「適の室に死す」あるいは「寿終正寝」である。東南海岸地区も「寿終正寝」にこだわる。重態の人を早めに寝室から、「堂屋」(正寝)へ移り、「疾篤(重態)遷居正寝」⁶⁶と称する。民間信仰の中、正庁は住宅の中に一番神聖な場所で、ここに死んでしまえば、良い死に場所を得て、死後に祖先、親族とあの世で再会することができる。もし別の部屋の中に死んだら、死者の亡霊は寝台に足止め、済度することも難しくなると認識されている。

例えば寧徳市誌⁶⁷における葬式の民俗記録によると：①老人が息を引き取った後爆竹を三回鳴らす。②この時、台所に灯かりをつけて、水ガメに井戸水をいっぱい入れるように手配している。③そして、紙の輿と錫箔を燃えて、車とお金を象徴して、亡霊を出発させる。④その同時に、死体を入浴させ、髪を切られ、着替させる。⑤着替えた後、「堂屋」の中壁門を開き、死体を前庁から、後庁の死体用の寝台へ運ぶ。この過程は「遷兜案」と呼ばれる。⑥その後、前庁に、弔うための霊堂を設置する。という流れである。

結婚式においても、いろいろな儀式が「堂屋」空間にて行われる。『泉州市誌』⁶⁸における結婚式前の記録によると、①結婚する前に、仲人を通じて、庚帖(名前・生辰八字・出身地と祖先の三世代の状況などを書く札)を交換し、庚帖を自分の家の「堂屋」の神棚の中に置き、占って、吉凶を問う。これは民間で「提生月」と呼ばれる。②そして、婚約を定める時、「戴手指」という儀式がある。男の家は、指輪二枚を準備して、結納・赤い絹・花・お菓子などの贈り物(俗称「面前」)を準備し、祖母、母あるいは他の女性の家族長二人で、従者を率いて、女の家に行く。③儀式の時、嫁さんは「堂屋」の中に外向き座って、男の家の女性の家族長から、婚約指輪をはめられて、結納を受け、拝謝の後に部屋へ戻る。というものがある。

⁶⁶ 「民国」蘇鏡潭『南安県誌』上海書店、2000

⁶⁷ 寧徳地区地方志編纂委員会『寧徳地区誌』方志出版社、1998、巻 33 風俗

⁶⁸ 泉州市地方志編纂委員会『泉州市誌』中国社会科学出版社、2000、巻 49 風俗

正式の結婚儀式は三日かかる。第一日は、男の家の「堂屋」に三跪九叩の礼を使い天地を礼拝して、結婚する。翌日の朝早く、花婿は花嫁と一緒に、「堂屋」に祖先を礼拝する。そして年齢の順で、男の家の親族を花嫁に紹介する。そして第三日のお昼は、お嫁さんのために「堂屋」で「上厅卓」と俗称するの宴会を行う。同日の夕方に、女の家は婿を招待する。先に、婿は「堂屋」に女の家祖先を祀り、その後宴会を行う。



図 2.24 儀式の堂屋（左）と日常の堂屋（右）

日常で使用する「堂屋」：浙江中西部と、福建西北部・南部には、「堂屋」を日常生活のリビングルームとして利用する場合も少なくない。閩北邵武市和平鎮の人は、「堂屋」を「客廂」と呼び、日常に接客とご飯を食べる場所である。浙中縉雲河陽村の「堂屋」は、食事で集まる場所以外にも、家族一緒に、トランプ・囲碁などの娯楽が行っている。当然、これらの「堂屋」は、伝統的な儀式的機能も持っている。

『泉州市誌』の中に、泉州辺りの民家の「堂屋」について、記録がある：「清代・民国の時期、厅堂（「堂屋」）の中央壁寄りに、長方形のテーブル（案）があり、その上に神棚を置き、神と祖先を祀る。案の前に、正方形のテーブル（八仙卓）がある。接客のために厅堂の両脇にいくつかの椅子（太師椅と交椅）を置き、椅子の間に、お茶飲むための机がある。1950年代以後、厅の中に神棚の姿がだんだん消えて、厅の中壁には毛沢東の画像や年賀の絵画などを掛かっている。80年代になって、厅堂の置物はさらに変化して、中央に、玩具や芸術品を展示する厨子があつて、あるいは、テレビ・ラジオなどの電気製品がある。厅の両脇にソファを置き、両側の壁に書画やカレンダーを掛け、現代のリビングルームに近いものとなっている。⁶⁹

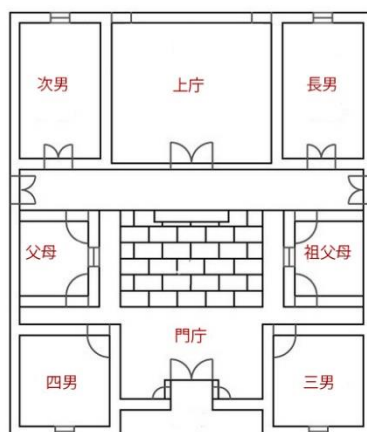
（2）廂房

東南海岸地区民家の廂房は、北方民家のような、正房の両脇にある東西向きの建物だけを指すことがなく、広義的に合院の中、南北軸にある厅以外の部屋を指している。つまり、北方の「正一廂」の概念に対して、東南海岸地区民家は「堂（厅）一廂」の概念のほうが一般的である。

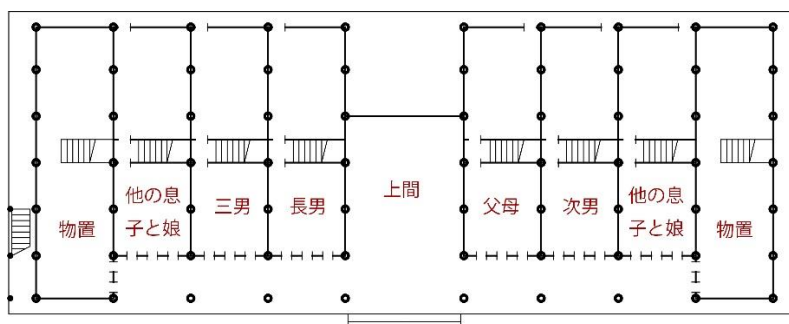
「廂」は「偏」の意味で、格式が低い場所である。北方の四合院によると、老親は正房に住み、長男は東廂房に、次男は西廂房に住む。しかし、東南海岸地区民家によると、廂房と正房の格差が存在しなく、むしろ「廂房」空間のほうが東南海岸地区の人たちに好ま

⁶⁹ 泉州市地方志編纂委員会『泉州市誌』前注と同じ、巻 49 風俗

戴志堅の閩南「四点金」住宅の調査によると⁷⁰、閩南地域の「四点金」住宅の廂房は「樓頭」と呼び、老親の住む所である。「上落」の東「大房」は長男の部屋で、西「大房」は次男の部屋である。つまり、「正房」の空間は、息子の部屋である。そして、「下落」門庁の両脇にある部屋は、三男と四男の部屋である。そのように、家族が集住する。



浙南の一字式住宅は、外観を見れば、「正房」と「廂房」の空間を区分することができないが、実際には「正房」と「廂房」のヒエラルキーがある。すなわち、その一字式住宅の中央三間は「正房」で、中央の大庁―「上間」と両脇の部屋―「正間」から構成し、「正間」は長男と老親の部屋である。そして、横へ展開する「二間」「三間」などの部屋は、次男、三男などの子供たちの部屋で、いわば「廂房」空間である。



　　関東地域における合院住宅は、正房の中央三間を「庁堂」と「庁堂間」（「庁辺房」）と呼び、「正房」の機能を持っていて、「庁堂間」は長男が住んでいる空間である。それ以外の空間は基本的に全部「廂房」である。三合院のような、「厦間」と呼ばれる廂房空間を一字式住宅と同じく「正房」と同じ屋根の下にはいる場合があり、四合院のような「書院」と呼ばれる廂房空間を両脇の前に建てる場合もある。しかし、「書院」（「厦間」）空間は、日当たりも通風も「庁堂間」より有利で、快適な住空間から、老人に好まれる。故に、「庁堂間」の格式が高いとはいえ、老親が「書院」空間に住む場合が多い。

58

正房の次間

「堂屋」と隣接する部屋は「正房の次間」であり、標準語の中に正式な名前がないが、東南海岸地区の各方言区に、「正房の次間」はさまざまな名前があり、民家の中の重要な空間である。

「正房の次間」は閩東で「庁堂間」「庁辺房」、閩南で「大房」、閩西で「大屋間」、閩中で「一直」、浙中・浙東で「堂前」、浙南で「正間」と呼ばれる。前述のように、「正房の次間」は老親や長男が住んでいる部屋で、格式が高い空間である。

李秋香による閩西連城培田村の調査から見ると⁷¹、建物が建造された時、「大屋間」は年長の老親が住んでいたが、息子が結婚すると「大屋間」を息子たちに配分する。第二進の中堂の東「大屋間」は長男に配って、西「大屋間」は次男に分配する。そして第三進の庁堂の東「大屋間」は三男に、西「大屋間」は四男に配る。老親は廂房へ移住する。もし「大屋間」の数が足りない場合、それを中央から前後二分して、倍になる。つまり、長幼の順序というヒエラルキーは東南海岸地区民家の間に確実に存在する。

しかし、閩東地域によると、正房（庁堂）は儀式的空間で、普段は誰も入らない場所である。正房の次間は軒出が深く、奥行きも深いので、暗い空間になり圧迫感がある。李秋香などの研究者の研究者によるも、実地調査の時も、住宅の中に住んでいる人たちは例外なくみな廂房空間に住んでいた。閩東の廂房空間は「書院」と呼ばれ、普段生活と接客の場所である。

書院

市町村誌の記載によると、⁷²閩東地域では、正房を「官房」「正厝」と呼び、廂房を「書院」と呼ぶ。日本の書院造り住宅と関連するかどうかはまだ確定されていないが、日本の黒白書院と同じ普段生活と接客の機能を持って、正房庁堂（日本の場合は大広間）のような儀式空間と分離する。

一般的に、書院は東西向きとはいえ、住宅の中の日当たりが一番良い空間である。東南海岸地区の緯度が低いので、年中の太陽高度は高い。軒出深い木造建築に対して、南向きのほうが日当たりが悪くなる。つまり、緯度高い北方の民家が冬の日当たりと夏の日射遮断のための正房前庇は、東南海岸地区で不適用になる。しかし、前庇の深い軒出は、雨に対抗する不可欠な構造である。そして、住宅全体の南向きは風水の文化伝統によって決定したもので、変更が不吉である。故に、部屋は小さいが明るい快適な書院空間のほうが東南海岸地区の主な生活空間であると考えられる。

(3) 囲屋

囲屋は「護厝」「扶厝」「護龍」「扶屋」「囲屋」「横屋」などの呼び方が有り、主屋や中心合院の回りに位置して、中心部分を囲む建物である。囲屋も、一種の廂房で、一般的な家族成員が集住する空間で、時には物置などの付属空間として使用する。

囲屋空間は、廂房空間の利点を持って、格式が低いとはいえ、主な集住空間である。特に、建物が創建から何代を経て、人口が増えると、「正房の次間」も、ある分家の祖庁となる。この時、もし各分家がそれぞれに新しい家を建てると、元の旧宅は一族の祖廟になる。もし、各分家が囲屋を増築し、旧宅を拡張すれば、囲屋式平面が成立する。

⁷¹ 李秋香『福建民居』前注と同じ、第38頁

⁷² 『永泰県誌』『福清市誌』などに「書院」は廂房を指すことに記載された。福建省人民政府公式サイト（www.fujian.gov.cn）より

囲屋は、庁堂や廂房のような格式の差別が一切ない。各部屋も平等である。つまり、囲屋式平面にも、柴・土楼にも、その囲屋空間が反映しているのは、対等的な生活、氏族成員が一緒に暮らして、一緒に一族を守るという家族観である。これは、北方漢族の長幼の順序を重視する家族観と違いから、北方には存在しない東南海岸地区特有な建築空間であると考えられる。

2.3 平面に関する特徴

2.3.1 横方向展開

(1) 「一」字式展開

河姆渡遺跡のような長大な「一」字式長屋は、今では極めて珍しいであるが、浙江南部から福建までの山岳部（浙閩丘陵）に、庁堂付きの「一」字式長屋が残っている。「一」字式長屋は桁行方向に展開して、間数が多く、ほとんどが五間以上である。浙南永嘉・泰順に、十五間の「一」字式長屋がある。福建における「一」字式長屋は、時には九～十一間になる。温州市泰順県百福岩村の周宅（248番）は二階建ての九間長屋である。一階中央明間は堂屋であり、「太師壁」から前後二部に分け、前庁が結婚・葬儀などの儀式や家族の重大な活動しか使えない空間である。いま、「徳寿無涯」の横額があるが、堂屋は物置になる。両側「尽間」以外他の六間は家族の住む空間である。各間は独自の出入り口があり、前廊は各間唯一の繋ぎである。両側「尽間」は前廊なしに、台所と物置として使用する。二階の中央は「祖堂」で先祖を祀る厨子がある。しかし先祖を祀る用具はすべて文化大革命の時壊され、今は観音菩薩を供養する。二階の各部屋は、一階への階段がある。つまり、周宅は、六つの独立した二階建てに居室がある、そして、一階と二階の廊は、六つの居室を連結し、堂屋と祖堂は共用空間であり、現代のマンションに似ている。この大きな住宅は、今お婆さん一人で住む、お婆さんの長子周さんは、隣に新しいレンガの家を建て、母さんの世話をする。でもお婆さんは古い木造住宅を大事にして、旧宅に住み続ける。お婆さんが住む空間は、西から第二間である。他の部屋は、すでに空き家である。お婆さんによると、この老宅は200年ぐらい前建造したもので、堂屋と隣接する二間は、親と長子の部屋、他のは別の息子の部屋である。最近、老宅に住む親せきは、亡くなった人や都市へ引っ越した人もあり、現在はお婆さん一人で住むに至っている。

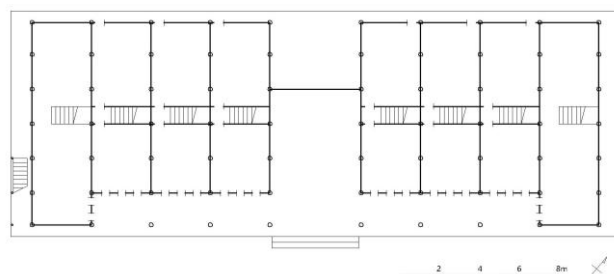


図 2.26 泰順県百福岩村周宅（平面と写真）

そして「L」型と「n」型の民家は、「一」字式長屋の変形である。三合院式と近いとはいえ、建物から囲まれた天井空間がないから、合院式平面とはいえない。敷地条件によって、無限延長の「一」字式配置は無理で、家族人口が増えてによる増築は、主屋の両脇に前へ展開して「L」型と「n」型になる。上述の陳宅のような増築した東廂は陳賢楼氏の兄がすむ「三間」と陳さん自分が住む「四間」があり、明白に主屋の「正間」「二間」の続くである。

(2) 合院中の横方向要素

「対合式」合院：

「対合式」合院は、面對面に（「対合」の意味）、各三間の建物を配置し、両脇に廂房があり、全体は正方形にちかい。「対合式」合院の第一進の中央は大門で、大門も門庁である。門庁の中央には、扉がある。扉は照壁の機能を兼ねて、三つの部分がある。すなわち、①普段に、両側の小さい扉が人出入りの口であり、中央の部分は祭りなどの活動しか使用しない。②大門を入ると中庭で、中庭の両側は廂房門庁と主屋を連結する。③中庭の後ろは主屋で、主屋の明間は大庁（「堂屋」と呼ぶ）である。

大規模な「対合式」合院は廂房も三間になり、中央に庁を配置する。全体を四つの三間建物にて囲み、十字対称の形になる。たとえば温州市平陽県青街の李氏二分大屋は代表的な例である。

閩南・潮汕によくある「四点金」住宅も「対合式」合院の一種である。「四点金」は中庭を中心として、前後左右四つの十字形の庁が対面し、十字形になる。そして、四つの隅は部屋であり、全体に「井」字の配置である。大規模なのは、奥行方向へ多進の合院になり、あるいは横方向へ展開し、主屋を五間・七間になる（「五間張」「七間張」）。

「対合式」合院は、北方系多進合院に比べて最も重要な特徴として南北軸対称の弱化がある。平陽青街李宅（246 番）の平面は、方形に近い。四合院の配置によって、中庭へ向く四面の建物は全部庁堂を持っている。こういう四面庁の配置は、天台城関茂宝堂（210 番）江山廿八都楊宅（256 番）にも見られ、南北軸を弱化して、四面とも重要な建物によって中庭を囲む形式を示す。

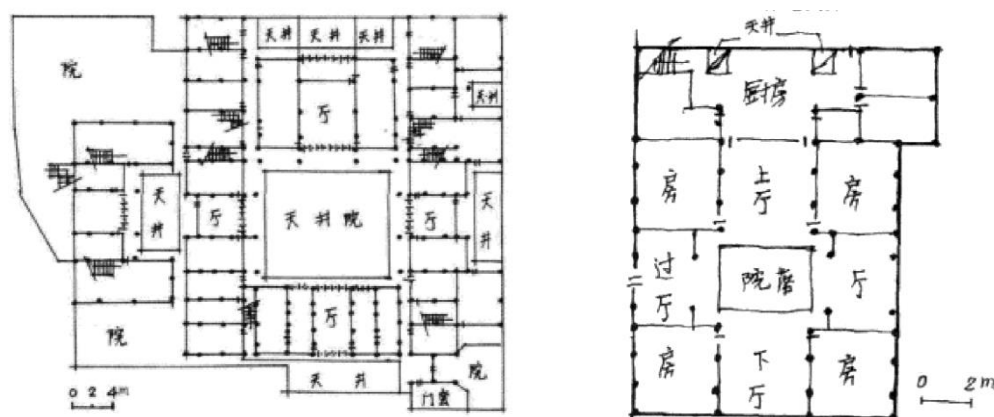


図 2.27 天台城関茂宝堂⁷³（左）と江山廿八都楊宅（右）⁷⁴

連体合院：

合院を「一」字式平面のように横方向沿いに展開すると、連体合院になる。福建では、こういう形式を「連体大厝」と呼び、浙江では「套屋」と呼ぶ。福鼎白琳洋里大厝（21 番）、仙遊榜頭仙水大厝（54 番）、泉州吳宅（63 番）などはこういう連体合院に基づいた住宅である。

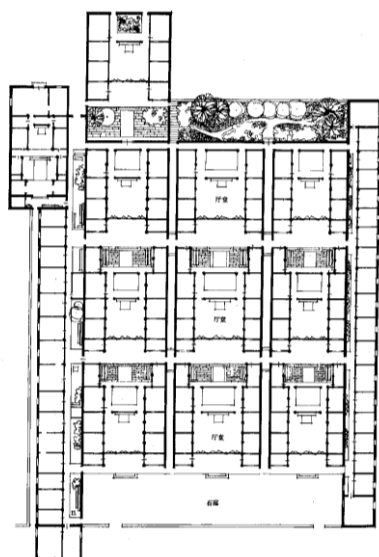
泉州吳宅は簡潔な連体合院である。中央に 3×3 の庁堂を展開している。回りに、囲屋と増築の二つの合院があつて、大規模な住宅になる。こういう 3×3 の庁堂配置は、白琳洋里大厝と榜頭仙水大厝にも見られる。

⁷³ 丁俊清『浙江民居』中国建築工業出版社、2009、第 165 頁

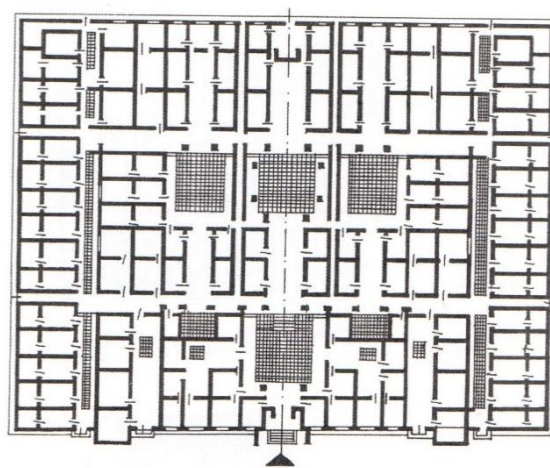
⁷⁴ 丁俊清『浙江民居』前注と同じ、第 202 頁

連体合院は、囲屋式平面の中心となる場合が多い。上述の榜頭仙水大庁は代表的な事例である。仙水大庁の 3×3 の庁堂の両脇に、各二列の囲屋を配置する。そして、土楼の中にも、この形式が見られる。平和西安西爽楼（139 番）の中央庭に、 2×3 の庁堂組があり、一つの庁堂組は門庁と中庁により構成する。

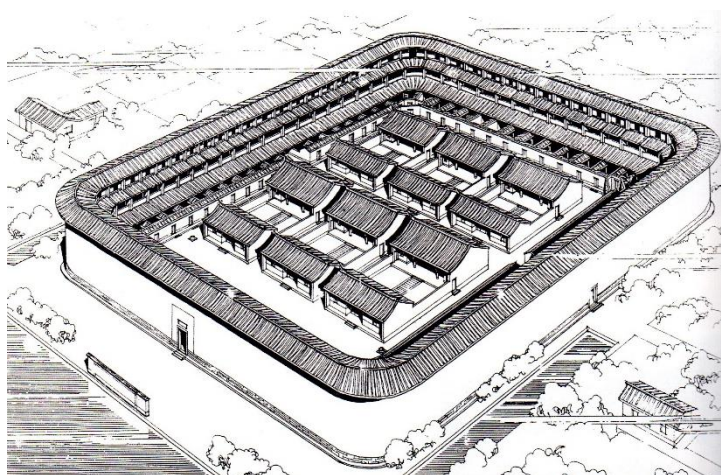
連体合院の形成は、氏族集住と関係している。大氏族集住の場合、各分家には独自の儀式空間・祭祀空間の必要がある。そして各分家是对等的で、格差が存在しないため、その儀式・祭祀空間を住宅の中心に並列することは、一番たやすい作法と考えられる。この庁堂を並列する連体合院構成は、東南海岸地区民家の横方向展開の特徴を反映する。



泉州吳宅⁷⁵



榜頭仙水大庁⁷⁶



平和西安西爽楼⁷⁷

図 2.28 連体合院配置

(3) 横展開から囲い住むまで

「囲屋」合院式住宅にも、砦式住宅住宅にも、家を建てる家族長が死んだとき、息子た

⁷⁵ 王乃香『福建民居』中国建築工業出版社、1987、第 155 頁

⁷⁶ 戴氏『福建民居』前注と同じ、第 163 頁

⁷⁷ 戴氏『福建民居』前注と同じ、第 242 頁

ちが、家族長が住む合院正房の次間を息子たちへ配分する。しかし、息子たちは自分の家族をもって、既に「囲屋」に住んでいた。だから、配分された正房の次間を空き家として、自分の分家の祖廟とする。時間的経過により、家族の成員が増えて、中央合院に住む人がだんだんいなくなった。最後に中央合院は純粋な祭祀空間となり、土樓の祖廟と一緒にになる。

東南海岸地区の家族は、北方のような厳しい身分制度へのこだわりがなく、北方系家族関係を反映する合院式平面配置も、「囲屋」からデコンストラクトされる。「囲屋」合院から、「砦」を経て、土樓までの変化は、大家族の家族長支配体制の崩壊を反映する。単なる建築平面配置の特徴要素から見れば、これは人々が合院から囲屋へ移住の過程である。「囲屋」合院の「囲屋」空間は、家族の子供・使用人の部屋と物置から、家族全員が集住する空間になっていて、逆に、これは家族全員が集住する空間（河姆渡遺跡のような）から、子供・使用人の部屋と物置の空間へ衰退すると言える。囲屋式住宅は、防御性の環形長屋（「一」字平面の変種かも）から、北方家族長制度と四合院平面の影響を受けて、四合院付きの囲屋式住宅へ変化した可能性がある。

いずれにせよ、囲い住むの特徴は「一」字長屋の集住と繋がりがあって、東南海岸地区の特有な住宅平面配置を体現しており、そこでは北方漢族民家のような南北軸線重視傾向よりも、横方向の並列配置のほうが好まれる傾向を示す。

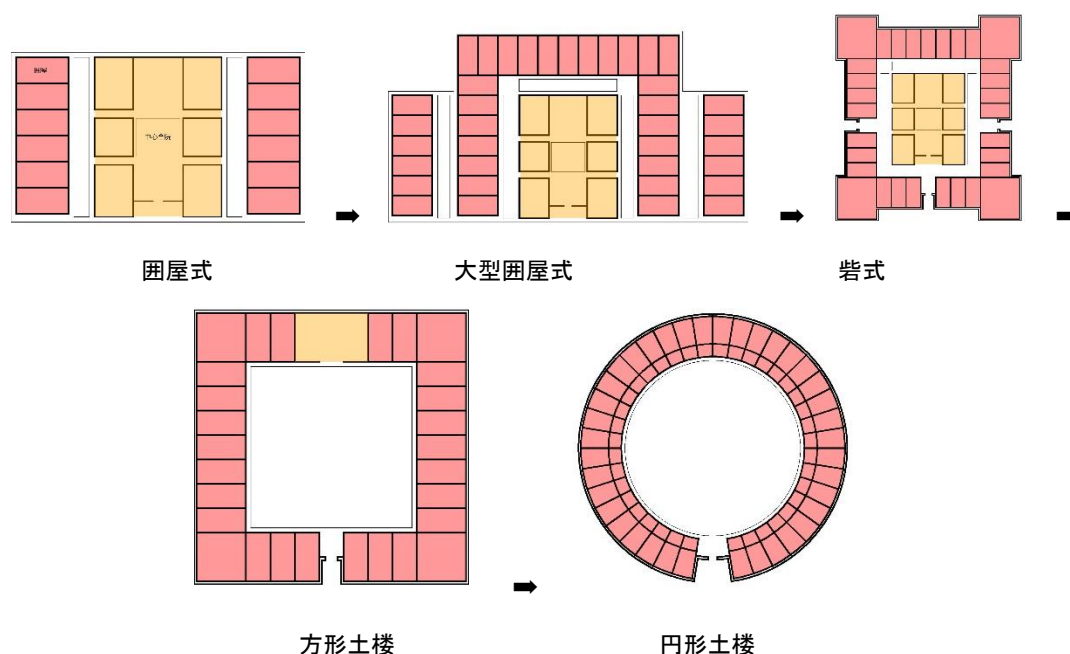


図 2.29 囲屋式、砦式と土樓の繋がり

2.3.2 対等的な生活空間

(1) 合院式の長幼の順序と農耕科挙文化

中国伝統的な合院式住宅の平面配置における尊卑・長幼関係は、中国の伝統的な農耕科挙文化と繋がっている。地方の有力者は、農業をやりながら儒教学問を勉強して、科挙試験を受け、挙人・進士の称号を得て出仕することが究極の目的である。この儒教的思考・信仰体系による「君 君たり、臣 臣たり、父 父たり、子 子たり」の国家・家族の尊卑関係に従い、住居文化に反映する結果、合院式平面と「正」「廂」のヒエラルキーを生み出した。

現在、合院式住宅の分布を見ると、合院式住宅が集中している閩北地域は東南海岸地区の農耕科挙文化が一番盛んだった場所である。南宋の大儒朱熹が講学を行ったとされる紫陽書院は武夷山に位置する。朱熹の弟子に福建人が多く、「閩学」という儒教の学派が形成した。そして朱子学は身分制度の尊重、君子権の重要性を強調して、当地の文化へ強い影響を与えたことが認められる。

合院式住宅の分布が次に集中していた浙江の一部と閩東の北部も、農作業を生業とする地域である。台州平野、温州平野、金衢州平野は東南海岸地区の主要な糧食産地で、閩北も、明以前に福建の重要な糧食産地である。清の時代になると、閩北と閩東は茶葉栽培が盛んとなり、山地の棚田を茶園に変える場合が多いが、基本的には農耕・科挙の生活をする。武夷山の下梅村、霞浦の半月里村など合院式住宅が集中した村は、歴史の中に数多い挙人・進士が誕生し農耕科挙文化を反映した。

(2) 長幼の順序の弱化

「一」字式の長屋は、合院式住宅と違い、廂房と正房は同じ屋根の下にあって、横方向展開の特徴を持っている。住宅の部屋は二階の垂直区分を核家族が所有し、大家族が集住する。原則としては、「一」字式の長屋の各部屋は対等的であるが、部屋の名前付けには、「正間」から、「二間」「三間」などの順があり、中庁に近いほうが、格式が高いである。つまり、「一」字式の長屋は、尊卑・長幼関係が比較的緩やかな平面配置である。「一」字式の長屋が最も集中していた温州地域は農耕科挙文化を守り、明清時代においても東南海岸地区主要な糧食産地であった。しかし現在の温州は、温州商人が世界中に活躍して、中国最も有名な商人組織である。温州商人の発足は清の時、水運物流をやっていた温州人である。その時、寧波港の貿易が盛んであったが、船が足りないため、温州人は自分の船に乗って、寧波へ運輸業をする。「一」字式長屋は、その農耕―商売の中間状態とつながっている。

同じく、閩東の「書院」空間も、合院式の正房から離れて、廂房に生活することで尊卑・長幼関係を弱化する。「書院」空間の発展は、自然条件と関連しているが、閩東地域に盛んでいる茶葉物流・商売と繋がっているかもしれない。

農耕の場合、家族の中の人々の間の経済的な差は少なく、尊卑・長幼の家族関係を守るも簡単である。しかし、商業に従事すると、経済的な差別が簡単に大きくなる。その結果家を建てる時、商業で潤い四男金を一番多く出すとすれば、一番良い部屋を貧困な長子に譲ることは当然無理だろう。その結果、尊卑・長幼関係を弱化する平面配置を採用することも理解できる。

(3) 囲屋と商人屋敷

囲屋式平面になると、完全に尊卑・長幼関係がなくなる。中央の合院は、家族長が住んでいる場合もあるが、より多く場合、家族の祖廟になる。人々が囲屋に集中して、対等な共同生活をする。

福建の土楼は、対等な共同生活の究極版といえる。すべての部屋は同じサイズ、同じ材料、同じ内装で造られており、小さな家族は地階から最上階の狭間まで垂直区分で所有する一方、大きな家族は2つか3つの垂直区分を所有する。すべての親族が1つの屋根を共有し、一族を守る。部屋以外の空間は、全部共有空間で、掃除、修復のことも各家族から分担する。一族が大きくなると、土楼を同心円状に増築、もしくは近くに新しい土楼を建て土楼群を構成する。こうして、どれほど大きな氏族も集住することができる。

東南海岸地区民家の横方向展開の特徴は、南方多山の自然条件と無関係とは言えない。

斜面地に家を建てる場合、横方向への展開よりも奥行き方向の展開は難しい。しかし、東南海岸地区民家の横方向展開の特徴は、単なる自然条件に従うのではなく、対等的な生活空間に求める文化的な傾向と繋がっている。そして、その傾向は、商品経済が発達し、行商貿易を生業とする東南海岸地区の経済状態と関連している。

囲屋式平面配置の分布は、福建の中南部、浙江の中部に多い。これは、明清時代、東南海岸地区に活躍する商人組織の故郷と一致している。すなわち、浙江中西部の龍遊商帮、浙江中東部の寧波商帮、広東の潮汕商帮、福建中南部の福建商帮である。

それらの商帮の中に龍遊商帮は陸路貿易を行い、他の商帮は主に海洋貿易を生業とする。彼らは日本、朝鮮と東南アジア諸国へ行商し、金持になると故郷に戻り大屋敷を建造する。そして、一緒に海外へ行商する同郷たちは、同じ氏族からみんなお金を集めて、住宅を建てる場合も多い。その結果、漢族伝統的家族構成に基づいた尊卑、長幼の区別は弱まって、商業共同体に基づいた対等的な生活空間のほうを優先することとなる。

たとえば、浙江諸暨斯宅斯盛居（206 番）、俗称「千柱屋」で、建築面積 6850 平米、約 40 世帯が住んでいる。村の伝承は「小さい船に乗って行商し、金持になったら、大きい船に乗って帰る」で、外出稼ぎの伝統がある。斯盛居の大庁は一つしかない、中軸線沿いの一番奥の部屋は葬儀用である。他は全部普段生活の部屋で、みんな平等に集住する。

福建泉州市亭店楊阿苗宅（74 番）も同じ状況である。楊阿苗は幼い時から父とフィリピンへ行商し、富商になる。1894 年帰国して住宅を建造する。楊宅は囲屋式平面の代表で、平等に集住する平面意匠もあらかず。

最後に、福建土楼もこういう対等的な集住を体現する。南靖県石橋村順裕楼（136 番）は 1927 年に、張啓根など東南アジアへ行商した人たちが資金を集めて建造した土楼である。しかし資金が足りないのが原因で、内環のたてものはできなかった。順裕楼の直径は 74 メートル、四階建てで、毎階 72 間、最盛期は約 900 人が住んでいた。順裕楼の部屋の所有権は、完全に出した資金と繋がっている、だから張啓根は、7 間の部屋を持って、他の金主・張対陽も 4 間を持っている。他の村人は、抽選で部屋を選ぶ。つまり、民国時期になって、伝統的家族の尊卑関係は完全に崩壊し、経済関係の主導になる。

（4）生業と平面配置

表 2.3 生業と平面配置の関係

	一字・合院式平面	囲屋式平面
農業・出仕を主業とする	40	7
手工業・商業を主業とする	4	28

全体的に東南海岸地区民家の生業と平面配置を比較に見ると、農業・出仕—一字・合院式、手工業・商業—囲屋式という関連性が明確である。（表 2.3）東南海岸地区に生まれた囲屋式平面と対等的な生活空間は、儒教の尊卑関係が商売の経済関係へ移行することを表現し、海洋国家の特性も反映した。

2.3.3 合院式に関する時代考察

（1）「一」字式長屋

先史時代の住居は、「一」字式平面を利用する場合が少なくない。7000 年前の浙江余姚河姆渡遺跡から見られる。⁷⁸河姆渡遺跡第一回発掘調査より、13 列の木杭を発見した。この木杭が並ぶ方向から見ると、三棟以上の建物がある。その中、第 8・10・12・13 列の木

⁷⁸ 浙江省文物管理委員会「河姆渡遺址第一期発掘報告」『考古学報』1978.1

杭の方向は一致している。一番長い 13 列の長さは 23m 以上、第 8 と 12 列の間の距離は 7m くらい、第 12 と 13 列の間の距離は 1.3m。つまり、この遺構は桁行 23m、奥行 7m、そして幅 1.3m の前廊が付いていると推測する。第二回の発掘調査はさらに 16 列の木杭を発見し、その中の 4 列は、上述第一回の 4 列と連結して、全体の桁行長さは 100m 以上である。屋内の柱の間の距離は 2～5m、40 以上の部屋がある。大氏族が集住する家である可能性が高い。

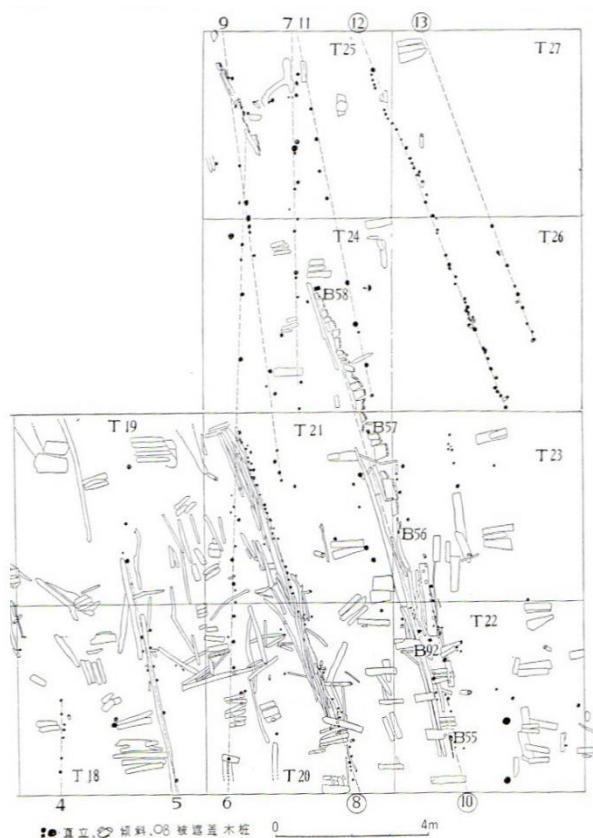


図 2.30 河姆渡に発見した木杭配置⁷⁹

前述の河姆渡の住宅遺跡以外に仰韶文化に属する河南淅川下王崗でも「一」字式平面住宅が出土した。淅川の住宅遺跡は、河姆渡のような高床式ではなく、全部平地住居である。そして仕切壁によって何十間の部屋があって、大家族集住の住宅しか考えられない。

先史時代における中原地区の「一」字式平面ロングハウスは、時間をへて、四合院平面住宅に変化していった。現在の北中国は、ごく一般的な農家も、ほとんど合院平面をもっている。しかし南方の普通の農家は、「一」字式平面を利用するが多い。これは、南方住居文化の相違性からであろう。

現存する伝統的漢族住宅の「一」字式平面意匠は、東南海岸地区に集中している。高級な住宅も「一」字式平面をもつ場合は、東南海岸地区しかない。浙南温州市辺りと福建の山岳地帯に集中した「一」字式平面は、ほとんど五間以上である。浙南永嘉・泰順に、十五間までの「一」字式長屋がある。中央の間は「堂屋」で、両脇へ展開する部屋は、全部家族メンバーの居室で、一間の単位に、一世帯の核家族が生活する。こういう大氏族が集住する形式は河姆渡遺跡の建物と同じである。これは、土着文化の影響であると推定で

⁷⁹ 浙江省文物管理委員会「河姆渡遺址第一期発掘報告」『考古学報』1978.1

きる。あるいは、家族集住の習俗と強くつながっているといえる。東南海岸地区には、中国伝統的な家の中における尊卑、長幼の区別をつけ、上下の秩序を厳守することはそんなにこだわりがなく、家族全員にいい住環境がほしいから、「一」字式平面のような「アパート」を利用するに至るのではないか。

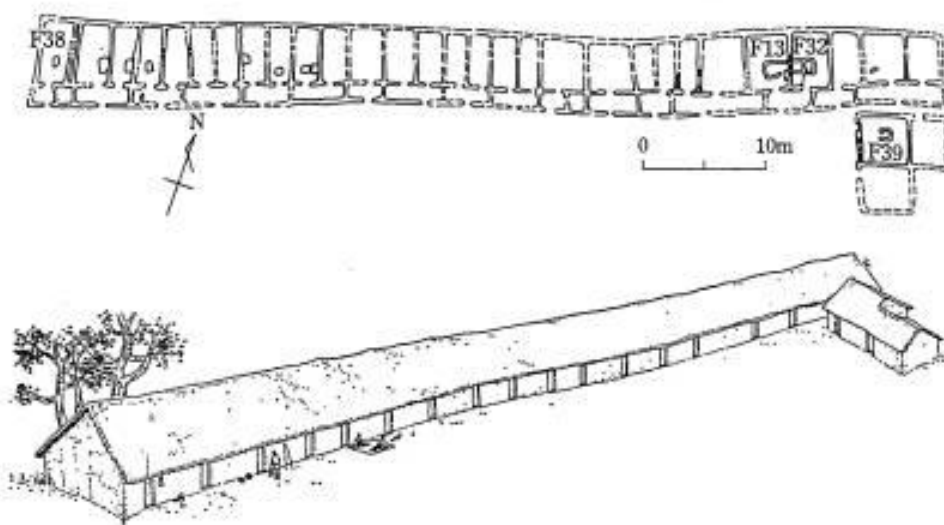


図 2.31 河南淅川下王崗仰韶文化住居⁸⁰

決定的な証拠はまた不足しているが、先史と古代の東南海岸地区民家の平面配置は「一」字式である可能性が高い。そして、廊院式・対合式などの四合院と共に、中世の移民が持ってきた合院式の平面配置は東南海岸地区においても普及が始まった。しかし、元の「一」字式平面は見捨てられるわけではなく、依然として存続するとともに、合院式平面と融合して、東南海岸地区特有な「対合式」「囲屋式」平面を生み出したといえる。

(2) 古代・中世合院式の伝入

中原漢族四合院の歴史

方形の中庭を囲んで、1棟3室、東西南北4棟を単位とする北方中国伝統的家屋建築である。四合院の歴史が長い、3500年前の商の時代に、四合院の雛形が出現した。殷の遺跡北徐家橋村は2002年に大型の版築建築群が出土した、その中に、四合院に近い平面配置を持っている建物は15軒。⁸¹そして3000年前の西周時代に、四合院の平面配置は成熟した。陝西岐山鳳雛村周原遺跡から出土した二進四合院の遺跡は、典型的な早期四合院建築である。この遺跡は南北長さ45m、東西長さ32m。中軸に、南から順序に、照壁・大門・前堂・後堂があり、前後堂の間に、廊がある。両脇には、連続8間の廂房がある。⁸²

漢～唐の時代に、四合院はさらに発展して、平面配置によって前は狭くて、後ろは四角い。この時代の四合院は「廊院式」の合院で、中庭の北は主屋、ほかの三面は回廊である。時に左右に廂房があり、中庭四面に部屋を建てる訳ではない。唐の末、正・廂房付きの四

⁸⁰ 河南省文物研究所『淅川下王崗』文物出版社、1989

⁸¹ 孟憲武「殷墟四合院式建築基址考察」『中原文物』、2004.5、第26-31頁

⁸² 楊鴻勳「西周岐邑建築遺址初步考察」『文物』、1981.3、第23-33頁

合院が出現し、「廊院式」の合院はだんだん消えた。⁸³明清の時代、北方には、「廊院式」の合院の跡を絶ってしまった。そして元代からはじめ、明清を経て、北京の四合院を代表として北方系四合院が定着した。

「対合式」四合院：

「対合式」合院平面は浙南から、広東潮汕まで広がっている。「対合式」平面の最大の特徴は四面の庁が中庭に向かって、十字の空間になる。これは北方の四合院と最大相違点である。しかし、こういう十字軸の空間も、文献と考古学の資料によると、中原地区古代の建築文化とつながっていた。

1926 年、漢代長安遺跡の南に、漢代礼制建築—明堂の遺跡が発見された。その中心は大きな版築土台で、平面配置は「亜」字に近い、東西南北四面に十字に建物の遺跡がある。王国維は古代文献から建築の平面配置を分析し「古宗廟、明堂、宮寝皆為四屋相對、中涵一庭或一室」と云う⁸⁴、大昔の宮殿建築の平面特徴を示した。楊鴻勳氏も、古代文献と考古学の発見をまとめて、周人と漢代の明堂の平面配置を復元した(図)。楊氏の復元図も、古代明堂「四面宮室」の形を示した。中国古代こういう四面相對の合院配置は、後世の四合院のような正房廂房の格差概念がなく、四面の建物が対等の地位で、まさに「対合式」平面の祖型であろう。

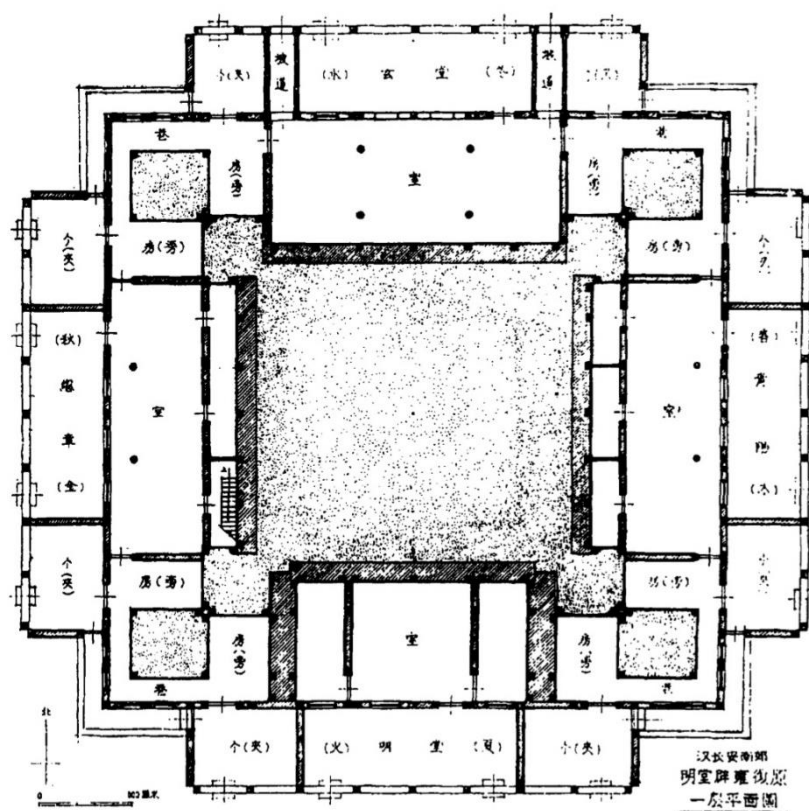


図 2.32 楊鴻勳による漢代の明堂の平面配置の復元図⁸⁵

しかし、「一」字式平面と同じく、中原地区に「対合式」平面は消えた。そして当時辺鄙な東南海岸地区に伝えた「対合」の文化は、今まで存続してきた。当然、庶民の住宅は、

⁸³ 劉致平『中国居住建築簡史：城市、住宅、園林』中国建築工業出版社、2000

⁸⁴ 「清」王国維「明堂廟寝通考」『觀堂集林』1923

⁸⁵ 楊鴻勳「明堂汎論・明堂的考古学研究」『營造』1998、第 62 頁

国家レベルの儀式を行う建築と決して一緒ではない。しかし、この「四屋相對」の思想は、古代宮殿から持ってきたではないか。文明の頂点にいたる雄大な建物の意匠を借りて、自分の家を建てる古人のロマンがあるからこそ、何千年にわたって東南海岸地区に「対合式」平面の意匠が今も活躍して、東南海岸地区民家の重要な特徴になる。

中世の四合院：

東南海岸地区民家の平面配置は、古代中原漢族地区合院式の特徴を持っているだけではなく、中世の中原漢族の合院式平面配置も真似した。唐の末から北方に「廊院式」の合院はだんだん消えたが、東南海岸地区に、「廊院式」の合院は残っている。東南海岸地区は唐の末の北方移民から開発され、急速な発展が始まる。故に、ここに残った「廊院式」の合院は四合院屋敷の北方伝来のもう一つの証拠であった。

故宮博物院蔵の張昉端『清明上河図』(宋) が表現した宋の都には、簡単な四合院と「一」字式長屋をたくさん表現したが、多進の四合院は全くない。他の宋代の絵画も、多進の四合院への表現がほとんどない。そして明代の絵画は、多進の四合院への表現が多く出てくる。遼寧省博物館蔵の仇英『輞川十景図』(明) が表現した山林農家は、全部多進の四合院の平面配置を持っている。

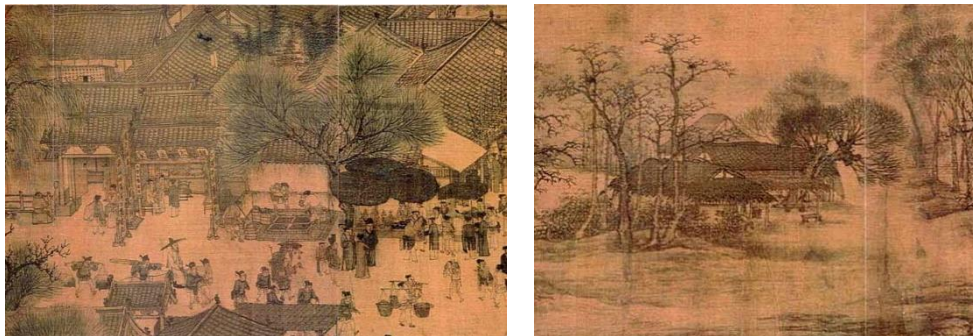


図 2.33 『清明上河図』による住宅表現⁸⁶



図 2.34 『輞川十景図』による住宅表現⁸⁷

つまり、東南海岸地区に存在する「対合式」、「廊院式」、「四点金」など簡単な四合院配置は、中世中原地区の移民と共に、東南海岸地区へ伝入し、そして、近世になると、多進四合院は同じルートで伝入したと考えられる。

⁸⁶ 「宋」張昉端『清明上河図』北京故宮博物院蔵

⁸⁷ 「明」仇英『輞川十景図』遼寧省博物館蔵

(2) 近世多進四合院の伝入

福建泉州辺りでは、多進の四合院を「官式大厝」と呼ぶ。戴志堅の『福建民居』に、これは、北京の四合院を模倣するからで、「宮廷式」をも称すると解説し。⁸⁸『泉州民居』の中に「宮殿式」「皇宮式」「皇宮起」、1993年版の『南安県誌』に「官式大厝」「漢式大厝」といくつかの呼び方を記録している。⁸⁹関瑞明の研究より「皇宮起」は惠安県と泉港区で多進の四合院の俗称で、「漢式大厝」は南安市での俗称、そして「官式大厝」は泉州市内の呼び方である。各地域に、四合院屋敷にさまざまな呼び方があるが、基本的に「宮殿」「漢式」「官式」という意味が繰り返して出現し、東南海岸地区の四合院屋敷は北方の四合院を模倣した外来の建築様式を示唆している。⁹⁰

東南海岸地区に残る明清住宅の建造年代を見ると、最も注意すべきは多進四合院である。閩北・浙西に残された清中期以前の多進四合院の数は一番多く、次に多いのは閩中と福州市である。そして他の地域の多進四合院はほとんど清中期以降のものである(表 2.4)。

表 2.4 多進四合院の年代別地域分布

多進四合院	閩北・浙西	閩中	福州	他の地域
清初期以前	6	1	1	1
清中期以降	8	4	4	5

もう一つ重要な証拠は福州市羅源県の梧桐村である。この村に現存する民家によると、一番年代が古い五魚厝(40番)は一字式平面で、ちょっと遅い水仙関(41番)も一字式平面の変型である。次に、孔照厝(42番)のような四合院式住宅はほとんど清中期以降のもので、最後の旗竿里(43番)のような多進四合院の建造年代は一番遅い、民国時期の建物である。

まとめて考え見ると、多進四合院は近世から閩北・浙西→閩中→閩東の順で、つまり閩江沿いに福建へ伝入する可能性が高い。これは、元明時代から北京四合院(三進四合院を代表として)の繁栄は、各地方で帝都の住宅を真似する風潮に従い、多進四合院を建造することが原因であると考えられる。

⁸⁸ 戴志堅『福建民居』中国建築工業出版社、2009、第130頁

⁸⁹ 『南安県誌』、福建省人民政府公式サイト(www.fujian.gov.cn)より

⁹⁰ 関瑞明、陳力「泉州官式大厝の詞源及其読音辨析」『福建建築』、2006.1、第20-22頁

第三章 東南海岸地区伝統的民家の構造的特徴

3.1 軸部

3.1.1 フレーム

中国の木造建築のフレーム構造は、地方によって、南方系の「穿斗」式と北方系の「抬梁」式に分類できることが知られる。南方の伝統的民家は、「穿斗」式と「抬梁」式両方の影響から、穿斗抬梁混合式を創造する。

「穿斗」式構造の本質は、柱がすべての荷重に耐え、梁や組物などを通じないことである。張十慶教授は「井幹」式と「穿斗」式構造を比較研究し、両方の特徴を指摘した。⁹¹すなわち「井幹」式構造の特徴は、柱の概念がなく、横材を積み重ねて、壁になる。それに対して、「穿斗」式構造の特徴は、梁の概念がなく、貫を利用し、柱を連結する。この区別は、中国南北建築技術の主要な相違点である。

穿斗抬梁混合式は、「穿斗」式フレームの中に、抬梁の要素を加えることである。つまり、部分的に貫を梁へ変更する。穿斗抬梁混合式は主に二種類がある。「明間抬梁」式は建物の中央明間のフレームを全部抬梁手段によって建造し、他の部屋は穿斗のままである。「挿梁」式は、「穿斗」式フレームの柱を抜いて、貫を梁に変更し、束柱を利用する形式である。

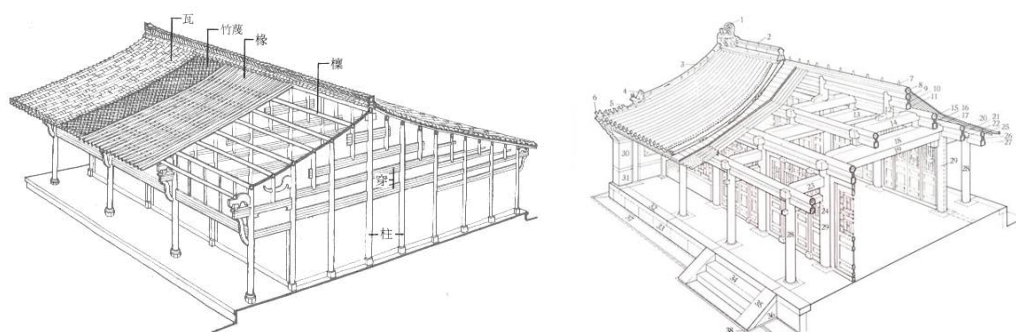
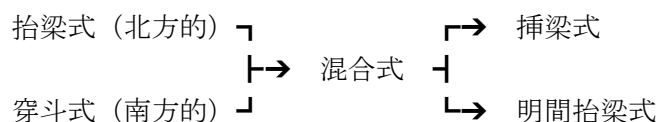


図 3.1 穿斗式（左）と抬梁式（右）⁹²

(1) 基本の「穿斗」式

「穿斗」式のフレーム構造の柱は奥行きに沿って立ち、柱の上端に桁が乗る、柱がすべての荷重に耐える。梁をつかわなくて、「穿」を利用して、柱を連結し、安定化させる。「穿」はいわば奥行方向の貫である。屋根の荷重は、垂木・桁を経て、直接に柱へ力を与える。「穿」は荷重に耐えなく、柱の安定を保つだけに存在している。柱の数を減らすため、内柱抜きの作法もよくある。そのとき、抜かれた柱は「穿」の上に乗る束となり、「穿」も部分的に梁になる。「穿斗」式構造技術は、漢代から相当に成熟し、南中国でよく使われている。

⁹¹ 張十慶「從建構思维看古代建築結構的類型与演化」『建築師』、2007.2、第 76-79 頁

⁹² 劉致平『中国居住建築簡史：城市、住宅、園林』2000.9、第二版、第 139 頁

基本的な「穿斗」式構造は、東南海岸地区の最も普通な構造で、広く使われている。福建の大工たちは「穿斗」式を話すとき、「何間何扇何柱（何廊）」の方法を利用して、フレーム構造を定義する。たとえば「三間四扇五柱」「三間四扇七柱前廊出す」など。「間」は桁行方向柱間を指す。「扇」は奥行方向一列の柱と貫などの付属部材から構成したを指す。何本の「扇」を桁行方向に並べて、「穿斗」式のフレームとなる。浙江の大工たちは、「穿斗」式を「立帖」式と称し、その「帖」は「扇」と同じ意味である。⁹³「柱」の数は同じ「扇」・「帖」の中、地面に落とす柱の数である。抜いた柱と束の数は、「穿斗」式構造の物理特性を決定し、いろんな「穿斗」式の変形を生み出す。



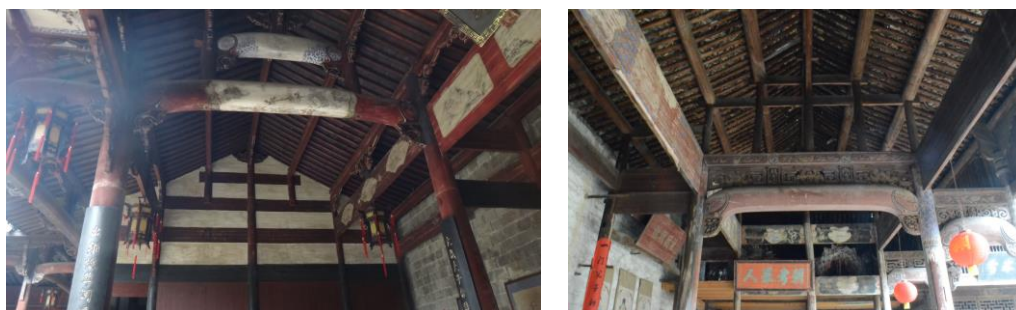
図 3.2 「穿斗」式

(2)「穿斗」と「抬梁」混合式

「抬梁」式構造は二本の柱の間に梁を建て、梁の上に、桁を乗せている。屋根の荷重は垂木・桁から梁へ与え、そして、梁から柱へ伝える。張十慶教授は「抬梁」式構造が「井幹」式技術と「穿斗」式技術を混合した作法であると指摘した。⁹⁴

東南海岸地区には純粋な「抬梁」式構造はほとんど存在していない。高級な住宅は、一棟建物の中の何間の部屋（一般的には中央の庁）が「抬梁」式構造を利用し、それ以外の部屋には、「穿斗」式構造を使用する。

もう一つの作法は一つの「扇」の中で「穿斗」と「抬梁」の技術を混用する。この作法は、「抬梁」の梁の上に「穿斗」式のトラスを建て、「穿斗」式のトラスが柱を抜くため、その中に梁を導入する二種類に分ける。



明間抬梁、次間穿闘（江山廿八都）

下抬梁、上穿闘（縉雲河陽）

図 3.3 「穿斗」と「抬梁」混合式

⁹³ 「扇」の概念は張玉瑜『福建伝統大木匠師技芸研究』東南大学出版社、2010 より、「帖」の概念は姚承祖、張至剛、刘敦楨『营造法源』中国建筑工业出版社、1986 より

⁹⁴ 張十慶「從建構思维看古代建築結構的類型与演化」前注と同じ

(3) 挿梁構造

孫大章は⁹⁵、挿梁構造は荷重を受ける梁を柱の中に挿入しており、「抬梁」式の柱の上に梁が乗っていることとは違い、「穿斗」式の全部の横材は荷重を受けないこととも違うと指摘する。具体的にいえば、挿梁構造はすべての桁の下に、柱や束がある。束（「瓜柱」と呼ぶ）は下の梁に乗って、梁は両端の「瓜柱」に挿す。その両端の「瓜柱」はさらに下の梁に乗っている。一番下の大梁は側柱のなかに挿す。一般的に「穿斗」式構造は一つの「扇」の柱間距離が短くて、建築空間の使用を邪魔する状況があるから、柱を抜く。その結果、内部空間が広くなれば、貫としての「穿」の断面も膨らんで、だんだん梁としての「挿梁」になる。そのとき、「穿斗」式のフレームに「抬梁」式の意匠が現れ、それは「挿梁構造」となる。⁹⁶



図 3.4 挿梁構造

挿梁構造は東南海岸地区によく見る構造であり、特に浙江省に多い。「抬梁」式と「穿斗」式両方の特徴を持っている。梁を利用し、上部荷重を柱へ伝えることは「抬梁」式構造の手法で、桁が柱や束の上に乗っていることは「穿斗」式構造の手法である。故に、挿梁構造は「抬梁」と「穿斗」式両方の影響をうけて、生み出された作法である。詳しく言えば、挿梁構造は北方系の「抬梁」式技術を南方系の「穿斗」式構造へ導入することによって生まれ変わり、室内空間の増大に適応するために、柱を抜き、貫断面を拡大した。

3.1.2 木造フレームの建造方法

東南海岸地区には豊かな建築文化が存在している。土地の選択から上棟礼まで、様々な民家建造の習俗がある。ここで検討したいのは、民家建造の習俗のなかの木造フレームの建造方法である。

(1) 「穿斗」式フレームの建造方法

閩東地域を代表する「穿斗」式フレームの建造方法⁹⁷は、最初に一つの「扇」を地面で組み立てる。そこでは、人々を二組に分け、一組が引いて、一組が押して、できた「扇」を垂直に立てる。この「扇」を立てる手順は「推扇」（扇を押すの意味）と呼ぶ。

閩東地域の「穿斗」式フレーム建造の一番重要な手順は「推扇」である。「推扇」と上棟礼は一日で終えなければならないので、「推扇」には人力が重要で、大工たちのほかに 50 人くらいが必要となる。そのため一般的に村の全員は「推扇」に参加している。

「推扇」はさらに「穿扇」「推扇」「抬扇」「梁貫の組立」四つの手順がある。「穿扇」と

⁹⁵ 孫大章「民居建築的挿梁架浅論」『小城镇建設』2001.09、第 26-29 頁

⁹⁶ 張十慶「从建構思維看古代建築結構的類型与演化」前注と同じ

⁹⁷ 張玉瑜『福建伝統大木匠師技芸研究』東南大学出版社、2010、第 101-106 頁

「推扇」は一端から順番にする、一つの「扇」を「穿扇」完了すること、押し立てる。そしてもう一つの「扇」を組み立てる。体力の消耗が大きいから、二つの「扇」の押し立ては一つの段階として、二つ段階の間に、休憩をして、お菓子を食べる。

a. 穿扇

みんなは事前にできた部材を組立の位置まで調達し、地面に扇を組む。この扇を部材から組む手順は「穿扇」と呼ぶ。扇を組む仕事は大工が担当する、場合によって、すぐに仕口への修正をする。「穿扇」をできた後、扇を全体的にひもでくくりつける。これは一方で、小さい束・貫などの部材が落ちることを阻止し、一方で、柱の下に後の「推扇」・「抬扇」の支点となる木の杭とよく締める。

b. 推扇

地面で扇をできた後、全員が協力して「推扇」をする。大工は最初に扇の上に登って、「推扇」の途中も扇の上に立て、「推扇」の状況を把握し、押し立ての程度をコントロールする。各扇は柱の下に斜めの杭から支えられ、明間から、両側へちょっと傾いて、固定する。すべての扇を「推扇」完了したら、フレームの建造の半分をした、ちょっと休憩した後、「抬扇」をする。

c. 抬扇と梁貫の組立

「抬扇」は明間を構成する扇からである。いわば、中央から両側へ「抬扇」する。礎石の隣の扇を合力持ち上げ、礎石の上に置く、これは「抬扇」である。その後、大工たちは四人一組、扇の上に登って、桁行方向の貫を下から上に組み立てる。他の人たちは、この両扇を支えている。部材の組立が完了したら、ひもで両扇を張り切る。

最初には明間の両扇の貫を組立、次は、同じく次間の貫を組立てる。その後フレームの建造は一旦中断して、全員が食事と休憩をして、夜の上棟礼の準備をする。尽間の貫の組立は翌日朝に、大工たち自分でやるから、村人の手伝いは必要ない。桁と垂木の組立も上棟礼の後にする。

閩中地域の「穿斗」式フレームの建造方法は閩東地域と同じである。最初に地面で扇を組む。次は「推扇」して、扇の間に貫（当地で「游」と呼ぶ）を組み立てる。そして貫の位置を修正し、くぎで固定するの手順は、「連游」と呼ばれる。最後に、下から上に「線横」（桁）を置き、垂木を組む。

(2) 挿梁構造と「穿斗」・「抬梁」混合式フレームの建造方法

閩南地域を代表としての「穿斗」・「抬梁」混合式フレームの建造方法は閩東地域の「穿斗」式と大きな違いがある。閩南地域の木造フレームの組立⁹⁸は、最初に地面で、予備組立をする。予備組立はすべてのフレームをゆるいと組み立ててみる、そして仕口や部材を修正し、修正した部材を番号を付ける。番号をつけた部材は外して、類型によって積んで。正式組立のとき、部材を一つ一つ組めばよい、人力を節約した。

正式組立のとき、一般的に足場を先に建て、そして明間・次間・尽間の順でフレームを組む。

a. 柱を立て

明間の四つの柱から順番に柱を立てる。木の柱がもし7m以下なら、大工たちが直接に柱を礎石の隣に置く。7～8mの柱は、ロープを利用して、柱を引き立てる。10m以上の柱はクレーンなどの設備が必要である。

b. 柱の垂直を修正

柱を礎石の上に置き、垂直に修正する。そのとき、現場に鉄の鍋を用意する。大工は柱

⁹⁸ 張玉瑜『福建伝統大木匠師技芸研究』東南大学出版社、2010、第106-111頁

を垂直になり、柱の下端と礎石の間の隙間を見て、鉄の鍋の一部を取って、柱の下端と礎石の間に打ち込む。鉄片は日によって酸化し、柱と礎石をしっかりと接着する。

c. 足場を組む

足場は、修正した柱を中心として組み合う。一本の柱の周りに、2～4本の木の梁を仮設し、上に板を敷いたと、足場を完了する。部材と部材の間に板を敷くも、簡単な足場となる。

d. もし柱の下部が石上の部分は木柱なら、この段階で木柱を立て、垂直を修正する。

e. 梁貫の組立

最初に、明間の桁行方向の「楣枋」（頭貫）を組む。次は、下から上に、奥行方向の梁貫を組む。最後に、次間などの楣枋を組立てる。

挿梁構造は浙江中部から、江蘇南部までの地域によく見る、東南海岸地区の北部もこの範囲の中である。この江南地区に近世からの木造技術が高い、「香山組」という大工組織を生み出した。

「香山組」の木造フレーム組立技術⁹⁹は閩南地域の技術と近い。フレームを立てる前に、「会樑」の手順がある。「会樑」は閩南地域の予備組立と同じで、部材と柱の仕口を修正する。

フレームを立てる手順は「堅屋」と呼ぶ。「堅屋」の先に、レンガや石の基壇を築き、礎石も置いていた。そして、閩南地域の技術と違い、足場を先に組み、後で柱を足場の傍に置いて、梁貫などの部材も、敷地内に運ぶ。

本番の「堅屋」は、一番右奥から始まる。最初に右側尽間の後ろ側柱を立て、礎石の上に置く。柱は、始めにちょっと外側へ傾く。下部の貫を挿した後、柱を内側へ引き、仕口をあわせて、下部の貫を組立てる。そして同じ方法で入側柱を立て、下部の貫を挿し込む。そして側柱と入側柱の間に、下部の「穿」を挿し込む。最後に、上部の貫と「穿」を挿し込み、右側尽間の後ろの四本の柱は組立完了する。次は、右側尽間の中柱を立て、「挿梁」、「雙歩梁」を組み、「雙歩梁」の上に、束、貫などを組み立てる。次は、同じく右側尽間の前の四本の柱を立て、梁貫を挿し込む。そして、右側尽間のフレームの組立は完了する。このように一間一間と組立を行い、全部の組立を完成させる。

右側尽間のフレームを完成したと同時に、フレームの較正（「坐直」と呼ぶ）を開始する。較正したフレームを木の杭で先に支え、次の較正に移る。大部分のフレームが組立完了したら、桁を組むことが始まる、明間の棟木以外すべての桁を組立完了した後、上棟礼を取付け、フレームの建造は完了する。

(3) 東南海岸地区民家のフレームの組立技術の地域性

北中国の「抬梁」式木造フレーム組立技術は、東南海岸地区の技術と比べると、たくさんの相違点がある。北中国の「抬梁」フレームの組立は、中央の明間からはじめる。「抬梁」式のため、柱以下のフレームは「下架」と呼び、以上のフレームは「上架」と呼ぶ。組立の第一歩は「下架」の組み立てである。「下架」が全部組立完了してから、較正して、フレームを固定する。そして、「上架」を同じく組み立てる。

⁹⁹ 潘黎『香山帮』同济大学博士論文、第 200-213 頁



穿孔式（足場なし）



挿梁式（足場ある）¹⁰⁰

図 3.5 組立現場

「下架」と「上架」を分段して施工することは、「抬梁」技術と繋ぎ、東南海岸地区には見えない。でも、北中国の「抬梁」式木造フレーム組立技術は閩南・浙中の「穿斗」・「抬梁」混合式フレームおよび挿梁構造のフレーム組立技術と関連性はあるかもしれない。予備組立でも、足場の組みでも、閩南・浙中の技術は北中国と共通している。

閩東・閩中の「穿斗」式フレームの組立技術は特別で、北中国の技術と大きく異なる。閩東の「推扇」技術は、足場が必要なく、一日で大分の組立仕事を完了する。しかし大量の人力と準備が必要である。閩南・浙中と北中国のフレーム組立技術は足場が必要で、時間もかかる。しかし、二三人の大工が、組立の仕事に堪える。閩東・閩中のフレームの組立技術も、中国南方系「穿斗」式構造の特性を反映する。「穿斗」式構造は、各「扇」の「穿」が前後を貫き通すから、整体性がよい。北方系の梁と貫は、柱を貫かないので、地面で組立すると、「推扇」の時崩壊して、ばらばらになりやすい。

東南海岸地区の木造フレーム組立技術は、地方によって、完全に違う。閩東と閩南の年寄りの大工によると、彼らの師匠から技術は変わらない。故に、この二種類の技術は、少なくとも 100 年以上の歴史がある。しかし、古文献より、閩東の「推扇」技術はもっと長い歴史がある。

明代の本『魯班經匠家鏡』の中にも民間の住宅建造手順を紹介した。¹⁰¹この本は主に、長江中下流域以南の地域によく伝わって、大工向きの、各建造段階の吉日を紹介する。『魯班經匠家鏡』の中に住宅建造手順は以下である：①木を伐採する、②起工、③線を描き仕口を作る、④基礎を平らげる、⑤定礎扇架、⑥柱を立て、⑦上棟、⑧折屋（垂木を組立て）、⑨蓋屋（屋根を作る）、⑩泥屋（ペンキを塗る）、⑪排水溝を作り、⑫地面舗装、⑬にわへの階段を築く。そして、元明の時代、日常生活にかかわる本も、住宅建造に関する吉日選択などを紹介する。当時最も有名な『便民図纂』であり、その中にも「起工動土」「基礎造り」「起工破木」「定礎扇架」「堅造」「上棟」「折屋」「蓋屋」「泥屋」の手順を言及して、たくさんの内容が『魯班經匠家鏡』と同じである。古代の文献により、元明時代中国南方系の木造技術は、「定礎扇架」を先にして、その後柱を立てる。これは閩東・閩中の「穿斗」式フレームの組立技術の「穿扇」＋「推扇」の技術と一致する。それに対して、閩南・浙中と北中国の技術によると、柱を立てる手順は扇架の先にする。

『魯班經匠家鏡』と『便民図纂』は長江以南の地域に広まる本である。現存最も古い『魯班經匠家鏡』は明萬曆三十四年（1606 年）杭州の彙賢齋の初版であり、『便民図纂』の初版は明の弘治（1488～1505）の時呉県（今の蘇州）に完成した¹⁰²。故に、元明の時、長江

¹⁰⁰ 沈黎『香山帮』前注と同じ、第 205 頁

¹⁰¹ 「明」午栄『魯班經匠家鏡』明萬曆三十四年（1606 年）杭州彙賢齋『平砂玉尺経』本

¹⁰² 「明」鄭璠『便民図纂』弘治十六年（1502 年）蘇州に初版

以南、つまり東南海岸地区の民家はみんな閩東地域と同じ「推扇」技術を使って「穿斗」式フレームを組み立てるかもしれない。そして、時代によって、北方系の「抬梁」式木造フレーム組立技術は南方へ影響を与え、今の挿梁構造などになる。北方系の技術は人力への要求が低く、技術の専門化程度が高く、南方への普及もしやすい。現在、辺鄙の閩東・閩中山岳地帯しか「推扇」技術が存在しないこともおかしくないだろう。

3.1.3 梁貫

東南海岸地区民家の梁（挿梁も含む）は基本的に直梁（直線の梁）と虹梁（曲る梁）二種類があり、それぞれに断面丸いと断面四角いものがある。

東南海岸地区民家がフレームを安定化のため、いろいろな繋ぎ材も利用する。特色あるのは海老虹梁の形を持つ繋ぎ梁「割牽」であり、そして装飾のため、頭貫・飛貫を虹梁化・組物化した「闌額」の虹梁造りと「看架」構造である。

(1) 直線状の梁

丸い直梁：断面が丸い直線状の梁（直梁）である。両端は魚尾のように彫刻し、柱の中に挿す。梁の上に乗っている束も丸い断面である。梁の下に一般的には断面四角・彫刻豊富の「枋」（「通随」「束随」と呼ぶ）がある。閩南の漳州・泉州から、西の龍岩・北の莆田まで、丸い直梁はよく見る。たとえば泉州市南安の石井村中憲邸（77番）の大庁の主梁は丸い直梁であり、両端は魚尾のような形になり、柱の中に挿す。もう一つの例は泉州德化县格頭村の連氏祖厝（100番）である。連氏祖厝の主梁は丸い直梁で、魚尾状の先端と彫刻の「通随」が代表的である。



南安石井村の中憲邸¹⁰³



德化县格頭村の連氏祖厝

図 3.6 直線の丸梁

四角い直梁：断面四角形の直梁である。四角い直梁は主に壁沿い、付属している「枋」（貫）と束も断面四角形である。彫刻はすくない、全体の雰囲気は素朴であり、束と梁が連結した場所に付いた持ち送りや臺股は数少ない装飾である。閩東地域には、四角い直梁は挿肘木と併用して、挿梁構造になる。福州・寧徳辺りによく現れ、閩中・閩北も影響を与える。たとえば邵武和平黄氏大夫邸（181番）の主屋主梁は四角い断面で、壁と組み合う。梁の両端はちょっと曲げで、柱の中に挿す、梁の上に壺形の束に乗っている。福州市三坊七巷の劉宅（3番）大門梁構造もこれに近く、方形の束を使用する。もう一つの例は福州市永泰県嵩口のある住宅（49番）である。この住宅の中門は四角い直梁を採用し、方形の束もついている。しかし、壁沿いではないから、梁の底に切欠きをする。福州市三坊

¹⁰³ 戴志堅『福建民居』前注と同じ、第140頁

七巷の鄭宅大庁梁構造も同じである。



邵武和平黄氏大夫邸



福州三坊七巷劉宅



永泰県嵩口のある住宅



福州市三坊七巷鄭宅

図 3.7 直線の角梁

(2) 虹梁

虹梁は「月梁」とも称す、虹のような曲線状形態に由来する。形によって、虹梁は五つの類型に分ける：①断面四角、側面はちょっと膨らんで、「琴面」と呼ぶ。「营造法式」にも記載される。明の時代がよく使われていたが、民家のなかで使われる場合は少ない。②断面は楕円である。「冬瓜梁」や「眠梁」と呼ぶ、一般的に明の末から現れ、清の初めから中期まで普及すると認識される。③「闌額」の虹梁造り。「闌額」（頭貫）を虹梁の形に仕上げる、これは東南海岸地区特有な作法である。¹⁰⁴以下、民家によく使う②と③の形式について、述べる。

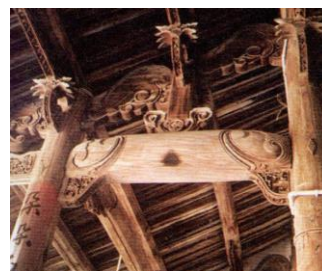
「冬瓜梁」：断面は楕円であるものと、四角いもので二種類ある。丸い断面の虹梁は、贛皖地方（江西と安徽）によく見る¹⁰⁵。東南海岸地区には、壁と組合の挿梁になり、断面は一般的に四角いである。虹梁の両端は、ほとんど渦巻の模様がある。



安徽黄山宏村ある祖廟



平陽坡南黄宅（245 番）



福鼎洋里大厝（21 番）¹⁰⁶

図 3.8 「冬瓜梁」

¹⁰⁴ 丁俊清『浙江民居』中国建築工業出版社、2009、第 240 頁

¹⁰⁵ 潘谷西『中国建築史』中国建築工業出版社、2009

¹⁰⁶ 戴志堅『福建民居』前注と同じ、第 185 頁

「闌額」の虹梁造り：頭貫は見やすい位置にあるから、常に装飾されていた。頭貫を虹梁のように曲げたのは、東南海岸地区民家における選択枝といえる。

現存する民家の中の「闌額」の虹梁造りは主に温州市辺りである。たとえば平陽県青街の池氏大屋は門庁の頭貫を「琴面」の虹梁形とする。池氏大屋は明の時代に建造した住宅と言われ、頭貫を採用した虹梁の形式も古い。また蒼南県碗窯村のある住宅の大庁は、奥行方向の挿梁と桁行方向の頭貫が全部虹梁の形になる。そして、大庁後部「太師壁」の上の三つの貫も虹梁に作る。



図 3.9 「闌額」の虹梁造り



永嘉県埭頭村の松風水月宅



蒼南県碗窯村の朱宅



樂清市黄檀洞のある住宅



文成県梧溪村の富宅

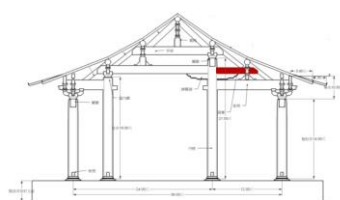
図 3.10 明間の頭貫を省略し、他の間の頭貫を虹梁に作る

「闌額」の虹梁造りのもう一つの面白い作法は、明間の頭貫を省略し、他の間の頭貫を虹梁に作る。明間の頭貫を省略すると、明間の高さが増加し、広く見る。たとえば永嘉県埭頭村の松風水月宅（235 番）は七間の「一」字形長屋であり、明間の裳階において頭貫

を省略する。他の間の頭貫は虹梁造りになり、断面が四角で、整体弓形である。蒼南県碗窯村の朱宅（247 番）も明間の頭貫を省略する。次間の頭貫は虹梁造りになり、尽間の頭貫は貫のままにする。または乐清市黄檀洞のある住宅で、三合院の三間正房も、明間の頭貫を省略し、次間の頭貫は虹梁造りである。この住宅の虹梁造り頭貫は、直線に近い、「琴面」の虹梁の形に似てゐる。最後の例は文成県梧溪村の富宅（241 番）である。富宅の虹梁造り頭貫の両端には彫刻の模様があり、富宅は清末に建造された住宅で、清の後期の作法である。

（3）「割牽」（海老虹梁）

軒部の梁の上に入側柱と連結し、桁を支える繋ぎ梁がある。南方には、曲った形に作り、一端は細く前に出で、一端は太く柱の中身に挿す。『营造法式』はこの繋ぎ材を「割牽」と呼び、日本の海老虹梁と同じである。¹⁰⁷浙南の民間で、この部材を「大頭梁」「泥鰌梁」と称し、閩東に「割牽」は猫がねずみを捕えている姿と似ているから「猫枕」（「枕」は梁の意味）と名付け、閩南に「割牽」は入側柱と桁の間に連結の機能があるから、「束木」と呼ぶ。「割牽」の作法は南中国に普遍的に存在している。蘇州の玄妙觀三清殿・金華の延福寺などの寺院建築は「割牽」を使用し、東南海岸地区民家も「割牽」がよく見る。



『营造法式』による「割牽」構造¹⁰⁸



閩東の「猫枕」



浙南の「泥鰌梁」

図 3.11 「割牽」と海老虹梁

東南海岸地区の北部、浙江の東陽・衢州辺りの「割牽」は「水梁」と呼び、曲りが大きく、唐草形に近い。そして構造の意味を失い、装飾の部材になる。しかし浙南・福建の「割牽」は彫刻模様が付いているとはいえ、構造材としての機能がまだ残っている。



図 3.12 装飾化した「水梁」

（4）「看架」

閩東地域において、室内の楣・頭貫は常に飛貫・束・組物などと複合して、装飾性が強

¹⁰⁷ 梁思誠「营造法式注釈」『梁思誠全集・第7巻』中国建築工業出版社、2001、第125頁

¹⁰⁸ 梁思誠「营造法式注釈」『梁思誠全集・第7巻』中国建築工業出版社、2001、第425頁

い骨組みになっている。この骨組を閩東では「看架」と呼ぶ。見せる骨組の意味である。「看架」は宋の「扶壁栱」とつながっていると言われている。「看架」は一般的に楣・頭貫の上に、一斗三升の秤肘木を配置する。あるものは一斗三升を中備組物のような独立配置し、あるものは一斗三升を連結して一体化する、あるものは楣・頭貫の上に、先に曲げる小梁があり、その上に一斗三升を置く。「看架」は基本的に、装飾の機能だけだから、いろいろな変形もある。

「看架」は閩東地域における特有な作法で、広く使われている。たとえば寧徳市屏南県漈下村のある住宅（47 番）の「看架」は曲げる小梁とその隣の一斗三升から組み合う。全体は彫刻がなく、素朴な造形である。漈下村に近い漈頭村の住宅（45 番）は類似の「看架」とするが、相違点は一斗三升が曲げる小梁の上に乗っていることである。福安市廉村の「甲算延齡」宅（32 番）の「看架」は二層構造であり、上部は一斗三升、下部は連続の曲げる小梁である。「甲算延齡」宅の「看架」の部材は、装飾性のため変形して、上部一斗三升の秤肘木はお互い連結して、連続の構造になっている。福州市内三坊七巷の小黄樓の「看架」はもっと装飾化して、三層の構造になり、組物の連結もより複雑である。三坊七巷の嚴復旧宅の「看架」は単なる彫刻の積み重ねである。最後の寧徳市周寧県浦源のある住宅一階大庁の「看架」は、小梁・組物などの意匠は全部退化し、花瓶と蝙蝠のような吉祥の模様の彫刻になる。



屏南県漈下村のある住宅

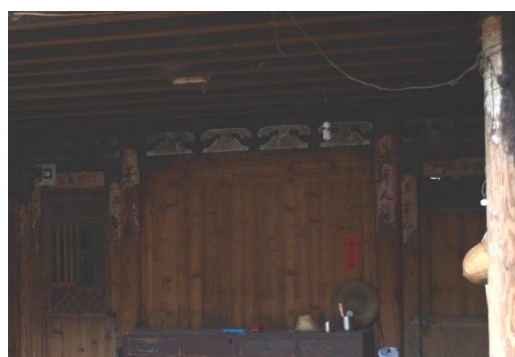


漈頭村の住宅



福安市廉村の「甲算延齡」宅¹⁰⁹

図 3.13 「看架」



周寧県浦源のある住宅



漳浦県湖西の藍廷珍宅¹¹⁰

図 3.14 「看架」の変形と活用

閩東以外の地域には、数少ない「看架」の例が残っている。たとえば漳州市漳浦県湖西の藍廷珍宅（78 番）入口大門の頭貫は「看架」構造を使用し、装飾の部分が多いとはい

¹⁰⁹ 戴志堅『福建民居』前注と同じ、第 197 頁

¹¹⁰ 戴志堅『福建民居』前注と同じ、第 144 頁

え、原始的な「扶壁栱」の要素がまた残っている。

3.1.4 柱と礎石

東南海岸地区の木造建築の柱は、丸柱と角柱二種類が存在している。丸柱は断面が丸い、あるいは楕円の柱で、中国の伝統的な木造建築において最もよく使われる柱作法である。そして、角柱は、断面が四角い、面取りをする柱である。面取りの方法によって、簡単な切り落とした部分が両辺とも同じ長さで二辺が 45° となる角面と、切り落とした部分を丸いに面取りする複雑な銀杏面もある。

礎石については、東南海岸地区民家はほとんど基壇礎石建築であるが、礎盤の形はいろいろある。礎盤の形としては、四角形・太鼓形・半球面形・複雑彫刻形などがあり、材料としては、石の礎盤と下石上木の礎盤もある。そして、礎盤を使わない民家も、存在している。

(1) 柱

中国の伝統民家の柱は、主に丸柱である。しかし、東南海岸地区は丸柱以外に角柱も存在している。そして、同じ建物の中にも丸柱と角柱を混用している。温州の泰順県辺りには、一般的に明間の側柱と入側柱が丸柱で、他の角柱より太い。温州の平陽県辺りでは、全部角柱を使っている場合が多い。閩東地域は逆に側柱が角柱、他の柱が丸柱の場合が多い。最後に閩南地域は、石の角柱がよく使われる。

丸柱は柱身が細長く、柱の上が細く、下部がちょっと太い。角柱は角の部分を取り取って面を作る。この面取りの作法は削り取った斜面以外の部分を東南海岸地区で「面」と呼ぶ。孔磊の研究によると、「面」の寸法は福建と浙江によって、別の作法とする。すなわち福建の大工たちは、柱断面の寸法を問わず、「面内寸法」を魯班尺三寸（約 82.5 mm）に統一する、残した部分を面取る。これに対して、浙江金華の大工たちは柱の太さによって、面取りの寸法を確定する。¹¹¹



図 3.15 角柱の面取り

(2) 柱の使い方

柱の使い方は、角柱の配置によって①全部丸柱、②側柱が丸いで、その他が四角、③側柱四角で、その他が丸い、④全部角柱、の四種類がある。

①全部丸柱：

全部丸柱の作法は東南海岸地区で一番よく使われている作法である。浙江東南部と閩東地域には角柱と丸柱が併存するとはいえ、全部丸柱作法は主流である。

②側柱丸い、その他が四角：

温州北部（甌江の北）の民家によく使っている作法で、側柱（あるいは真ん中の何本の側柱だけ）を丸柱で、他の壁の中の柱は四角いである。たとえば、温州市永嘉県埭頭の陳宅（243 番）は、こういう作法を利用する。この場合、角柱は板壁・建具との組合をしやすいため、角面を面取りするだけ、格式が丸柱より低いと考えられる。

③側柱四角、その他が丸い：

¹¹¹ 孔磊「泰順伝統建築木作技術研究」『華中建築』2008.7、第 157-164 頁

温州南部（甌江の南）と閩東地域の大部の民家は、側柱（あるいは真ん中の何本の側柱だけ）を角柱に作り、それ以外の柱は、丸柱とする。たとえば寧徳市屏南県濤頭村の張宅（45号）はこの類型に属する。この場合は銀杏面取りする角柱を見せるため側柱とすることが考えられる。つまり、この地域に角柱の格式が高いと認められる。

④全部角柱：

温州辺りの年代が古い家の中に、全部角柱の例がある。たとえば温州南部平陽県青街の李氏二分大屋は、階段室が丸柱を使用する以外に、四合院全部の柱は角柱である。同じ町の明代建造した池氏大屋も、すべて角柱である。もう一つの例は温州北部永嘉県花壇の馬湾村の「宋宅」（234番）である。宋代に建造したとの伝承があるから「宋宅」と呼ぶ。全体は「一」字形の長屋で、すべて角柱である。「宋宅」の隣にもう一つの「一」字形の長屋いと一進の四合院があり、これらの建物すべての柱も例外なく角柱である。



永嘉県埭頭の陳宅



屏南県濤頭村の張宅



平陽県青街の李氏二分大屋

図 3.16 角柱の使い分け

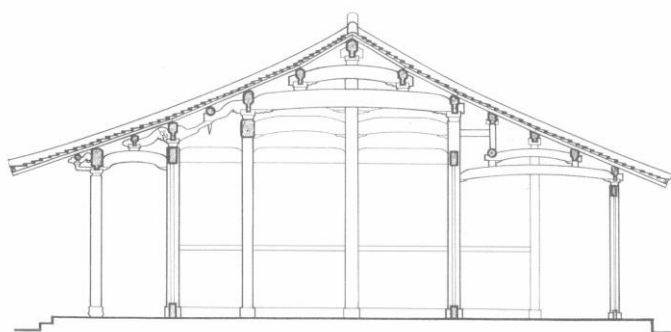
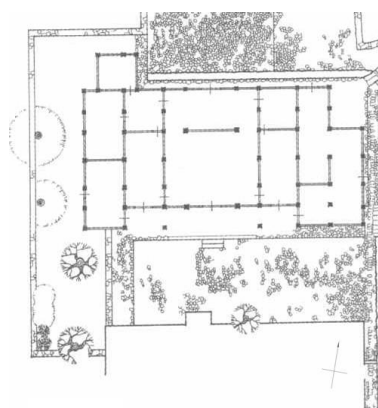


図 3.17 永嘉県花壇郷馬湾村の「宋宅」¹¹²

¹¹² 李秋香『浙江民居』前注と同じ、第 21-22 頁

(3) 礎盤

中国伝統建築の礎石は「礎墩」と「柱礎」（日本における「礎石」と「礎盤」）上下二段構成である。下の部分は「礎墩」、一般的には立方体の石であり、一般的に地面の下に嵌め込む。上の部分は「柱礎」、地面の上に露われる。礎盤は柱の下端にあり、湿気の上昇を防ぐ、柱の腐ることを阻止するための部材である。大昔の礎盤は柱の木目の方向と違う木材を利用していた。そして銅の礎盤も河南安陽殷の遺跡から発見された。早期の木や銅の礎盤は主に逆さまの鉢の形である。後世の礎盤はだんだん石の材料を利用し、様々な彫刻をして、複雑な礎盤になる。いま、民家のなかに木材の礎盤はまた残って、それ以外のは、基本的に石の礎盤を利用する。

東南海岸地区の伝統民家はほとんど礎石がある。礎盤は大部分石造、柱の形式によって、四角や円柱または彫刻の礎盤がある。木造礎盤は福建の西北部に集中している。注意すべきは、東南海岸地区の各地には、個別の礎盤を使わない民家がある。

木造礎盤：

木柱の木目は縦である。もし木柱の下に、横の木目の木部材を放置すれば、水分を木目に沿いで上昇することができなくて、柱も腐りにくい。今木造礎盤の作法はほとんど福建の西北部に集中している。たとえば邵武市和平の黄氏大夫邸（181 番）。その主屋の礎石は石の「礎墩」と木造の礎盤から組み合う。「礎墩」の大部は八角柱、下端が四角柱である。面白いのは黄氏大夫邸の「礎墩」は地面の下に嵌め込まない、レンガ舗装の地面の上に乗っている。「礎墩」の上には木造の礎盤である。礎盤の下部は逆さまの鉢の形で、上部は楕円体である。上部楕円体の上に彫刻の模様がある。



図 3.18 木造礎盤

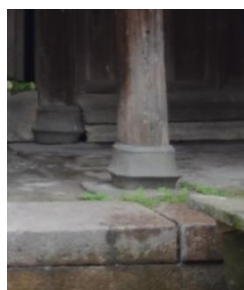
四角の礎盤：

四角の礎盤は主に浙南と閩東地域に集中して、ほとんど角柱と組み合わせて使用するが、少数の丸柱との組み合わせも存在している。簡単な形は立方体であるが、もっとも一般的な作法は底面がちょっと膨らんで、四角錐台の形になる。そして、一般的に縁を柔らかく見せるため、礎盤が面取りする。たとえば温州市平陽県青街の李氏大屋（246 番）の礎盤は立方体に近い四角錐台であり、面取りして、杵線のような簡単な彫刻をしている。

四角の礎盤は彫刻されていたものもある。たとえば温州平陽県坡南町の黄宅（245 番）の礎盤は四角体に基づいて、腰の部分に縁を突出し、全体カーブな姿になる。もう一つの例は福州市永泰県嵩口のある住宅（49 番）の中門の礎盤で、全体は大斗のようになる。最後の例は、寧徳市霞浦県半月里村の雷位進旧宅（27 番）の四角の礎盤で、腹部が膨らんで、中国一般的なトラム形の礎盤と似ている。



李氏大屋



坡南町の黄宅



嵩口のある住宅



雷位進旧宅

図 3.19 方形の礎盤

円筒形の礎盤：

福建の山岳地帯の一部の民家建築の礎盤は柱の断面と同じく丸であり、彫刻も一切ない。まるで腐った柱底を石に代わるように。この継石造の柱は閩中・閩東・閩南の山岳地帯によく見る。たとえば泉州徳化県格頭村の連氏祖厝（100 番）は、すべての柱は円筒形の礎盤を利用する。礎盤の円柱の断面は、柱の断面の円の直径よりちょっと長いで、全体は素朴な円柱で他ならない。



図 3.20 連氏祖厝による円筒形の礎盤

彫刻礎盤：

ドラム形や蓮の形の彫刻礎盤は中国全土に普及する。東南海岸地区の伝統民家もこの影響を受けて、様々な彫刻礎盤を使用する。



埭頭の虎爪形礎盤



安貞堡の彫刻礎盤



武夷山下梅の彫刻礎盤

図 3.21 彫刻礎盤

礎盤なし：

今、東南海岸地区の伝統民家の中、少数の礎盤なしの事例がある。たとえば龍岩市連城県芷溪村の紹徳堂（151 番）は、清嘉慶年間（1760～1820 年）建造された四進三間二直（護厝）の大型住宅である。紹徳堂の大庁と下庁の明間の前側柱がドラム形の礎盤を利用する以外には、すべての柱は礎盤なしである。

もう一つの例は永安市貢川の金魚堂（113 番）である（図 3.22）¹¹³、金魚堂は明天啓四年（1624 年）から建造し、主体は二進七間の四合院である。大庁明間の中柱がドラム形の礎盤を利用する以外には、すべての柱は礎盤なしである。面白いのは、一般的に、礎盤は柱の下端が湿気によって腐ることを阻止するための構造なので、金魚堂は雨などの影響を受けやすい側柱ではなく、逆に内柱において礎盤を使用する。



図 3.22 金魚堂による礎盤なしの例

¹¹³ 戴志堅『福建民居』前注と同じ、第 229 頁、写真は第 230 頁

これは、このドラム形の礎盤を装飾としてつかうからだろう。

(4) 礎盤の変遷考察

今の東南海岸地区で、礎盤を使用する伝統民家は多数であるが、礎盤を使わない民家も存在している。七千年前の河姆渡の住宅遺跡は掘立柱の住宅で、礎盤はない。だから、東南海岸地区の伝統民家は礎盤なしから礎盤あるの過程を経ている可能性がある。

この礎盤の変遷の説を証明する証拠は二つがある。一つは、幾つかの村中で、建物を修復する時、礎盤を加えていた伝承がある。たとえば福州市羅源县梧桐村の五魚厝（40 番）は、村人によると、以前は礎盤がなく、今の礎盤は後世修復の時加えたという。¹¹⁴つまり、東南海岸地区民家の中に、一部現在礎盤がある建物は当初建造したとき、礎盤がない可能性もある。

もう一つの証拠は円筒形の礎盤である。上述の格頭村の連氏祖厝は、今すべての柱は円筒形の礎盤が付いているから、円筒形の礎盤は後世修復の時加えたことをまだ証明ができない。しかし、現存するいくつかの民家は、部分的に円筒形の礎盤を使用し、それ以外んは礎盤を使わない。たとえば福州市尤溪県桂峰村のある住宅は、「一」字形の長屋で、いま複数の家庭が共有する。注意すべきのは、この建物の八本の側柱の中、三本が礎盤を付いて、それ以外の側柱が礎盤なしである。八本の側柱の風化程度が近い、そして、礎盤が付いている柱は、両側妻面に近い位置にあり、風雨からの腐食が強い位置である。故に、礎盤が付いている柱は元々礎盤なくて、修復の時、腐食した柱の下端を切断し、礎盤をくわえていた可能性が高い。つまり、円筒形の礎盤は元々修復時に腐食した柱の下端の代わりといえる、そして時代によって、円筒形の礎盤は地域の作法によって作られるようだ、すべての柱の下に付くようになったのかもしれない。



図 3.23 桂峰村のある住宅による礎盤部分的あるの例

東南海岸地区民家は礎盤を使わないかもしれないが、全部石の基壇の上に乗っているから、日本や河姆渡のような掘立柱の構造は存在していた可能性は低い。そして、「穿斗」式フレームの組立技術の「穿扇」＋「推扇」の技術も、掘立柱の構造と矛盾する。

つまり、東南海岸地区民家は石の基壇の上に直接に「穿斗」のフレームが乗っている早期作法と、石の基壇の上に先に礎盤を並べ、さらに礎盤の上に「穿斗」のフレームが乗っている後期作法があるかもしれない。しかし、河姆渡遺跡の掘立柱の上に敷いた板のプラットフォームがどうやって石の基壇に変化していたか、後の床の節に詳しく説明しよう。

¹¹⁴ 黄曉雲『閩東伝統民居大木作研究』中央美術学院博士論文、2013、第 16 頁

3.1.5 軸部作法の地域性

(1) フレーム構造の地域性

表 3.1 にある各類型の省略表現は以下の通りである。木造穿斗式は「穿」。木造抬梁式は「抬」。木造穿斗抬梁混合式「混」、その中、挿梁式は「混-1」、当心間抬梁式とその他穿斗式は「混-2」。レンガ造は「レ」。不明や未調査のは「-」である。

表 3.1 地域別フレーム構造各類型の一覧

地域	番号	事例	年代	類型	番号	事例	年代	類型
閩東地域	001	福州垵宅	-	混-1	002	福州揚岐遊宅	民国	穿
	003	福州宮巷劉宅	-	穿	004	福州ある住宅	-	混-1
	005	永泰李宅	-	-	006	古田松台ある住宅	-	穿
	007	古田張宅	-	穿	008	古田利洋花厝	-	穿
	009	古田沽洋陳宅	-	混-1	010	古田吳厝里ある住宅	-	混-1
	011	古田鳳埔ある住宅	-	-	012	古田于宅	-	穿
	013	福安茜洋橋頭ある住宅	-	-	014	閩清東城厝	-	-
	015	福安楼下保合太和宅	-	穿	016	福安楼下両兄弟住宅	-	-
	017	福安楼下王炳忠宅	-	穿	018	福州宮巷沈宅	明末	穿
	019	福州文儒坊陳宅	清	穿	020	福州衣錦坊歐陽宅	1890	穿
	021	福鼎白琳洋里大厝	1745	穿	022	閩清坂東岐廬	1853	-
	023	寧徳霍童下街陳宅	清中期	穿	024	寧徳霍童黄宅	清中期	混-1
	025	寧徳霍童下街 72 号	清中期	混-2	026	霞浦半月里雷世儒宅	1848	穿
	027	霞浦半月里雷位進宅	清中期	穿	028	福安坦洋王宅	清末	穿
	029	福安坦洋郭宅	清末	穿	030	福安坦洋胡宅	清末	穿
	031	福安廉村就日瞻雲宅	清中期	穿	032	福安廉村甲算延齡宅	清末	穿
	033	尤溪桂峰楼坪大厝	清初期	穿	034	尤溪桂峰後門山大厝	明末	混-2
	035	尤溪桂峰後門嶺大厝	1747	混-1	036	福清一都東関砦	1736	-
	037	閩清ある住宅	-	穿	038	閩清宏琳厝	1795	-
	039	尤溪ある農家	-	穿	040	羅源梧桐五魚厝	清初期	穿
	041	羅源梧桐水仙関	清	混-1	042	羅源梧桐孔照厝	清	混-1
莆仙地域	043	羅源梧桐旗竿里	民国	混-1	044	周寧浦源鄭宅	清末	混-1
	045	屏南漈頭張宅	清	混-1	046	屏南漈下甘宅	明末	混-1
	047	屏南漈下ある住宅	明末	混-1	048	尤溪桂峰蔡宅	清	穿
	049	永泰嵩口ある住宅	1768	穿	050	福鼎西陽陳宅	-	穿
	051	涵江林宅	1940	レ	052	莆田江口ある住宅	-	レ
閩	053	仙遊陳宅	明末	穿	054	仙遊榜頭仙水大厝	1446	-
	055	涵江江口余宅	-	レ	056	仙遊仙華陳宅	-	穿
	057	仙遊楓亭陳和發宅	-	-	058	仙遊坂頭鴛鴦大厝	1911	混-2
	059	莆田大宗伯邸	1592	混-2				
	060	永春鄭宅	1910	穿	061	漳平上桂林黄宅	清中期	混-2
閩	062	漳平下桂林劉宅	清	混-2	063	泉州吳宅	清中期	-
	064	泉州蔡宅	1904	混-1	065	泉州ある住宅	-	-
	066	泉州黄宅	-	混-1	067	晋江青陽庄宅	1934	混-1

南 地 域	068	晉江ある住宅	－	混-1	069	晉江大倫蔡宅	－	－
	070	集美陳宅	－	混-1	071	集美陳氏住宅	－	レ
	072	漳州南門ある住宅	－	レ	073	龍岩新邱厝	1888	抬
	074	泉州亭店楊阿苗宅	1894	混-2	075	南安官橋蔡資深宅	清	－
	076	泉州泉港黃素石樓	1741	－	077	南安石井中憲邸	1728	混-2
	078	漳浦湖西藍廷珍宅	清中期	混-1	079	漳州官園蔡竹禪宅	清中期	－
	080	アモイコロンス大夫邸	1796	－	081	漳浦湖西趙家堡	明末	抬
	082	德化碩傑大興堡	1722	－	083	華安岱山齊雲樓	1862	－
	084	華安大地二宜樓	1740	レ	085	漳浦深土錦江樓	1791	－
	086	晉江石獅鎮ある住宅	－	レ	087	晉江大倫郷ある住宅	－	レ
	088	龍岩適中太和樓	－	レ	089	龍岩毛主席旧居	－	レ
	090	龍岩適中典常樓	1784	レ	091	南安湖内村土樓	清末	レ
	092	南安炉中村土樓	1857	穿	093	南安南庁映峰樓	明末	穿
	094	南安卜橋聚奎樓	清中期	穿	095	南安舖前慶原樓	清	穿
	096	安溪玳チ德美樓	民国	穿	097	安溪山後村土樓	清	レ
	098	安溪玳チ聯芳樓	清末	穿	099	德化承澤黃宅	民国	混-1
	100	德化格頭連氏祖厝	1508	混-1				
閩 中 地 域	101	永安西洋邢宅	－	穿	102	三明莘口陳宅	－	穿
	103	三明魏宅	民国	穿	104	三明列西羅宅	－	穿
	105	三明列西吳宅	－	混-2	106	永安小陶ある住宅	－	穿
	107	永安安貞堡	1885	混-1	108	沙県茶豊峽孝子坊	1829	－
	109	三元シンロ松慶堡	清中期	－	110	沙県建国路東巷 29 号	清末	混-1
	111	沙県東大路 72 号	清末	穿	112	永安貢川機垣楊公祠	1778	混-2
	113	永安貢川金魚堂	1624	混-2	114	永安貢川嚴進士宅	明末	混-1
閩 西 客 家 地 域	115	永安福庄ある住宅	－	穿	116	永安青水東興堂	1810	混-1
	117	上杭古田八甲廖宅	－	混-1	118	新泉張宅	－	穿
	119	新泉芷溪黃宅	－	混-1	120	新泉張氏住宅	－	穿
	121	新泉望雲草堂	－	混-1	122	連城チヨ溪羅宅	－	－
	123	長汀洪家巷羅宅	－	穿	124	長汀新耕別荘	－	穿
	125	上杭古田張宅	－	穿	126	連城培田双善堂	清中期	－
	127	連城培田敦樸堂	－	穿	128	連城培田双灼堂	清末	穿
	129	連城培田継述堂	1829	－	130	連城培田濟美堂	清末	混-1
	131	南靖石橋村永安樓	16 世紀	穿	132	南靖石橋村昭德樓	－	穿
	133	南靖石橋村長藍樓	清	穿	134	南靖石橋村逢源樓	－	穿
	135	南靖石橋村振德樓	－	穿	136	南靖石橋村順裕樓	1927	穿
	137	南靖田螺坑步雲樓	清初期	レ	138	南靖梅林和貴樓	1926	穿
	139	平和西安西爽樓	1679	－	140	永定高陂遺經樓	1806	レ
	141	永定高北承啓樓	1709	レ	142	永定湖坑振成樓	1912	－
	143	平和蘆溪厥寧樓	1720	－	144	南靖梅林懷遠樓	1909	穿
	145	永定高陂大夫邸	1828	穿	146	永定洪坑福裕樓	1880	－
	147	連城培田官庁	明末	穿	148	連城培田都クン府	－	－
	149	連城芷溪集鱸堂	清初期	穿	150	連城芷溪凝禧堂	清末	混-2
	151	連城芷溪紹德堂	清中期	混-2	152	連城芷溪培蘭堂	清末	混-2

	153	連城芷溪茅雲山房	清末	混-2	154	永定撫市ある住宅	-	レ
	155	永定鵲嶺村長福楼	民国	レ				
閩北地域	156	建瓯伍石村馮宅	-	混-1	157	建瓯朱宅	-	混-1
	158	浦城中坊葉氏住宅	-	混-1	159	浦城上坊葉氏大厝	清	混-1
	160	浦城觀前饒加年宅	-	混-1	161	浦城觀前余天孫宅	-	混-1
	162	浦城觀前余有蓮宅	-	混-1	163	浦城觀前張宅	-	混-1
	164	武夷山下梅鄒邸	1754	混-1	165	武夷山下梅儒学正堂	清中期	混-1
	166	武夷山下梅参軍邸	清中期	混-1	167	崇安郊区藍湯応宅	-	穿
	168	南平洛洋村ある住宅	-	混-2	169	邵武中書邸	明末	混-1
	170	邵武和平廖氏大夫邸	清末	混-1	171	邵武金坑儒林郎邸	1632	混-1
	172	邵武金坑 16 号李宅	-	混-1	173	邵武金坑中翰邸	-	穿
	174	邵武大埠岡中翰邸	-	穿	175	邵武和平李氏大夫邸	清末	穿
広東潮汕地域	176	寧化安遠ある住宅	-	穿	177	建寧丁宅	-	穿
	178	泰寧尚書邸	明末	混-1	179	光澤崇仁裘宅	明末	混-1
	180	光澤崇仁ゴン氏宅	明末	混-1	181	邵武和平黄氏大夫邸	明	混-1
	182	潮州弘農旧家	-	レ	183	揭陽新亨北良ある住宅	-	レ
	184	潮陽棉城ある住宅	-	レ	185	棉城義立庁ある住宅	-	レ
	186	揭陽錫西郷ある住宅	-	レ	187	潮州許氏邸	伝説宋	混-1
浙東地域	188	潮州三達尊黄府	明末	混-2	189	潮陽桃溪図庫	-	レ
	190	普寧洪陽新砦	-	-	191	潮安坑門郷揚厝砦	-	レ
	192	潮安象埔砦	伝説宋	-	193	潮州辜厝巷王宅	-	レ
	194	潮州王厝饒宅	-	レ	195	普寧泥溝ある住宅	-	レ
	196	澄海城関安慶巷ある住宅	-	レ	197	潮州梨花夢処書齋	清末	レ
	198	澄海樟林ある住宅	-	レ				
	199	寧波張煌言旧居	-	-	200	寧波庄市鎮葛宅	-	-
	201	庄市鎮大樹下ある住宅	-	-	202	奉化岩頭毛氏旧居	-	-
	203	寧波走馬塘老流房	-	-	204	慈城甲第世家	明末	-
	205	慈溪龍山鎮天叙堂	1929	-	206	諸暨斯宅斯盛居	清中期	-
	207	諸暨斯宅登祥居	1790	抬	208	諸暨斯宅華国公別荘	-	抬
	209	天台妙山巷懷徳楼	-	抬	210	天台城関茂宝堂	-	混-2
浙南地域	211	天台城関張文郁宅	明末	-	212	天台街頭余氏住宅	-	-
	213	紹興倉橋直街施宅	-	穿	214	紹興題扇橋ある住宅	-	穿
	215	紹興下大路陳宅	-	穿	216	鄞県鄞江鎮陳宅	-	穿
	217	黄岩黄土領虞宅	-	穿	218	黄岩天長街ある住宅	-	穿
	219	天台来紫楼	清	混-2	220	寧波月湖中営巷張宅	清	混-1
	221	寧波月湖天一巷劉宅	民国	穿	222	寧波月湖青石街関宅	清	穿
	223	寧波月湖青石街張宅	清	穿	224	黄岩司庁巷汪宅	民国	穿
	225	黄岩司庁巷 16 号張宅	清末	混-1	226	黄岩司庁巷 32 号洪宅	清	混-1
浙南地域	227	永嘉ダイ頭陳宅	清末	穿	228	泰順上洪黄宅	-	穿
	229	平陽順溪戸侯邸	清	-	230	平陽騰蛟蘇宅	民国	穿
	231	永嘉芙蓉村北甲宅	-	穿	232	永嘉芙蓉村北乙宅	-	穿
	233	永嘉水雲十五間宅	清末	穿	234	永嘉花壇「宋宅」	伝説宋	混-2
	235	永嘉ダイ頭松風水月宅	清	混-1	236	永嘉蓬溪村謝宅	-	穿

	237	永嘉林坑毛步松宅	—	穿	238	永嘉東占坳黃宅	—	穿
	239	景寧小佐巖宅	民国	穿	240	景寧桃源ある住宅	清	穿
	241	文成梧溪富宅	清末	穿	242	永嘉林坑ある住宅	—	穿
	243	永嘉ダイ頭陳賢樓宅	清	混-1	244	樂清黃檀洞ある住宅	—	混-1
	245	平陽坡南黃宅	清	穿	246	平陽青街李宅	清	混-1
	247	蒼南碗窯朱宅	清	穿	248	泰順百福岩周宅	清	穿
浙 西 地 域	249	龍遊丁家ある住宅	—	—	250	龍遊若塘丁宅	—	—
	251	龍遊脈元ゴン宅	—	—	252	蘭溪長樂村望雲樓	明	混-1
	253	龍遊溪口傅家大院	—	—	254	松陽望松黃家大院	—	—
	255	江山廿八都丁家大院	—	混-2	256	江山廿八都楊宅	—	—
	257	松陽李坑村 46 号	—	—	258	衢州峡口徐開校宅	1910	穿
	259	衢州峡口徐瑞陽宅	清末	混-2	260	衢州峡口徐文金宅	—	混-2
	261	衢州峡口鄭百万宅	清	混-2	262	衢州峡口劉文貴宅	清	穿
	263	衢州峡口周樹根宅	民国	混-2	264	衢州峡口周朝柱宅	民国	穿
	265	遂昌王村口ある住宅	—	穿				
浙 中 地 域	266	東陽白坦鄉務本堂	清	抬	267	東陽史家庄花庁	—	混-2
	268	武義ユ源声遠堂	明末	混-2	269	武義郭洞燕翼堂	—	抬
	270	磐安樺溪余慶堂	—	—	271	縉雲河陽循規映月宅	—	—
	272	縉雲河陽廉讓之間宅	—	—	273	東陽黃田ハン前台門	—	—
	274	義烏雅端容安堂	—	—	275	金華雅ハン七家庁	明	混-2
	276	東陽紫薇山尚書邸	明末	—	277	東陽六石鎮肇慶堂	明	—
	278	武義ユ源裕後堂	1785	混-2	279	武義ユ源上万春堂	—	—
	280	東陽湖溪鎮馬上橋花庁	清	—	281	東陽盧宅	明	混-2
	282	浦江鄭氏義門	清	—	283	建德新葉花萼堂	明	混-2
	284	建德新葉種德堂	民国	混-2	285	建德新葉是亦居	民国	混-2
	286	武義ユ源玉潤珠輝宅	—	穿	287	武義郭洞新屋里宅	明末	混-2
	288	武義郭上萃華堂	—	—	289	武義郭下慎德堂	—	—
	290	東陽巍山鎮趙宅	—	穿	291	東陽水閣庄葉宅	—	混-2
	292	東陽城西街杜宅	—	—	293	縉雲河陽朱宅	清	穿

表 3.2 地域別フレーム構造類型の使用率

	穿	抬	混-1	混-2	レ
閩東	27/42	0	13/42	2/42	0
莆仙	2/7	0	0	2/7	3/7
閩南	7/32	2/31	8/31	4/31	10/31
閩中	7/14	0	4/14	3/14	0
閩西	18/31	0	4/31	4/31	5/31
閩北	6/26	0	19/26	1/26	0
潮汕	0	0	1/15	1/15	13/15
浙東	10/18	3/18	3/18	2/18	0
浙南	16/21	0	4/21	1/21	0
浙西	4/10	0	1/10	5/10	0
浙中	3/15	2/15	0	10/15	0

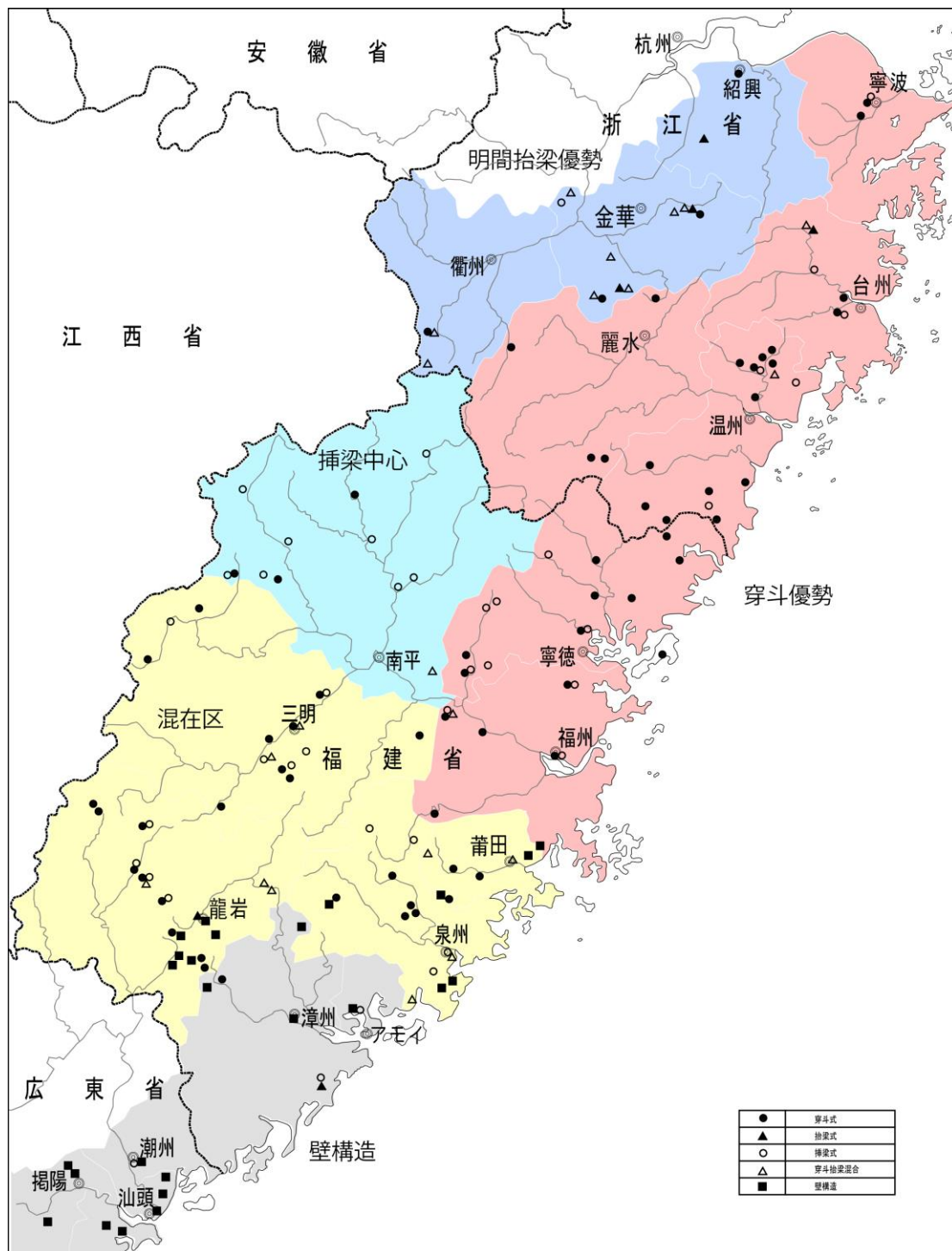


図 3.24 フレーム構造の地域分布

フレーム構造について、明確であるのは「穿闘」式の高い使用率で、純粋な抬梁式がほとんど存在しない。閩東・閩中・閩西・浙東・浙南には、純粋な「穿闘」式の使用率が高く、閩北には挿梁構造のほうがよく使われていた。

そして浙西と浙中には、大庁を抬梁フレームを採用するケースが多くで、「穿闘」「抬梁」混合式の方が主流になる。最後に、閩南・潮汕と莆仙地域は、柱梁の軸部構造を捨てて、レンガ壁構造をたくさん採用していた。

(2) 梁貫の地域性

表 3.3 にある各類型の省略表現は以下の通りである。梁構造は、事例の主屋入側柱間の梁（穿闘式構造であれば、その入側柱間幅が最も大きな「穿」の形を考査する。）を標的にして、直梁（直線）は「直」、その中、断面丸い直梁は「直-丸」、断面四角い直梁は「直-角」。鴻梁（曲線）は「曲」、その中断面丸い鴻梁は「曲-丸」、断面四角い鴻梁は「曲-角」。レンガ造梁なしの場合は「無」。そして、各柱（束）の上端に海老虹梁があるのは「○」、海老虹梁が部分的にあるのは「△」、ないのは「×」。不明や未調査のは「-」である。

表 3.3 地域別梁構造各類型の一覧

地域	番号	事例	年代	梁	海老虹梁	番号	事例	年代	梁	海老虹梁
閩東地域	001	福州埕宅	-	直-角	○	002	福州揚岐遊宅	民国	直-角	△
	003	福州宮巷劉宅	-	直-角	×	004	福州ある住宅	-	直-角	○
	005	永泰李宅	-	-	-	006	古田松台ある住宅	-	直-角	△
	007	古田張宅	-	直-角	×	008	古田利洋花厝	-	直-角	△
	009	古田沽洋陳宅	-	直-角	○	010	吳厝里ある住宅	-	直-角	○
	011	古田鳳埔ある住宅	-	-	-	012	古田于宅	-	直-角	×
	013	茜洋橋頭ある住宅	-	-	-	014	閩清東城厝	-	-	-
	015	楼下保合太和宅	-	曲-角	○	016	楼下兩兄弟住宅	-	-	-
	017	福安楼下王炳忠宅	-	曲-角	○	018	福州宮巷沈宅	明末	直-丸	○
	019	福州文儒坊陳宅	清	-	-	020	福州衣錦坊歐陽宅	1890	-	-
	021	福鼎白琳洋里大厝	1745	曲-丸	○	022	閩清坂東岐廬	1853	-	-
	023	寧徳霍童下街陳宅	清中期	直-角	△	024	寧徳霍童黃宅	清中期	直-角	△
	025	霍童下街 72 号	清中期	直-角	△	026	半月里雷世儒宅	1848	直-角	△
	027	半月里雷位進宅	清中期	直-角	△	028	福安坦洋王宅	清末	直-角	×
	029	福安坦洋郭宅	清末	直-角	×	030	福安坦洋胡宅	清末	直-角	×
	031	廉村就日瞻雲宅	清中期	直-角	△	032	廉村甲算延齡宅	清末	直-角	△
	033	桂峰樓坪亨大厝	清初期	直-角	△	034	桂峰後門山大厝	明末	直-角	△
	035	桂峰後門嶺大厝	1747	直-角	△	036	福清一都東閩厝	1736	-	-
	037	閩清ある住宅	-	直-角	○	038	閩清宏琳厝	1795	-	-
	039	尤溪ある農家	-	-	-	040	羅源梧桐五魚厝	清初期	曲-角	○
	041	羅源梧桐水仙閣	清	直-角	○	042	羅源梧桐孔照厝	清	直-角	○
	043	羅源梧桐旗竿里	民国	直-丸	○	044	周寧浦源鄭宅	清末	曲-角	○
	045	屏南漆頭張宅	清	直-角	○	046	屏南漆下甘宅	明末	直-角	○
	047	屏南漆下ある住宅	明末	直-角	○	048	尤溪桂峰蔡宅	清	直-角	○
	049	永泰嵩口ある住宅	1768	直-角	○	050	福鼎西陽陳宅	-	直-角	○
莆仙地域	051	涵江林宅	1940	無	×	052	莆田江口ある住宅	-	無	×
	053	仙遊陳宅	明末	曲-丸	○	054	仙遊榜頭仙水大厝	1446	-	-
	055	涵江江口余宅	-	無	×	056	仙遊仙華陳宅	-	-	-
	057	仙遊楓亭陳和發宅	-	-	-	058	仙遊坂頭鴛鴦大厝	1911	-	-
	059	莆田大宗伯邸	1592	-	-					
	060	永春鄭宅	1910	直-丸	△	061	漳平上桂林黃宅	清中期	直-丸	×

閩南地域	062	漳平下桂林劉宅	清	直-丸	○	063	泉州吳宅	清中期	-	-
	064	泉州蔡宅	1904	曲-丸	△	065	泉州ある住宅	-	無	×
	066	泉州黃宅	-	直-角	×	067	晉江青陽住宅	1934	直-角	△
	068	晉江ある住宅	-	直-丸	△	069	晉江大倫蔡宅	-	-	-
	070	集美陳宅	-	直-丸	×	071	集美陳氏住宅	-	無	×
	072	漳州南門ある住宅	-	無	×	073	龍岩新邱厝	1888	直-丸	△
	074	泉州亭店楊阿苗宅	1894	曲-角	△	075	南安官橋蔡資深宅	清	-	-
	076	泉州泉港黃素石樓	1741	-	-	077	南安石井中憲邸	1728	直-丸	△
	078	漳浦湖西藍廷珍宅	清中期	-	-	079	漳州官園蔡竹禪宅	清中期	-	-
	080	アモイ大夫邸	1796	-	-	081	漳浦湖西趙家堡	明末	直-丸	×
	082	德化碩傑大興堡	1722	-	-	083	華安岱山齊雲樓	1862	-	-
	084	華安大地二宜樓	1740	直-丸	×	085	漳浦深土錦江樓	1791	-	-
	086	石獅鎮ある住宅	-	-	-	087	大倫郷ある住宅	-	無	×
	088	龍岩適中太和樓	-	-	-	089	龍岩毛主席旧居	-	-	-
	090	龍岩適中典常樓	1784	無	×	091	南安湖内村土樓	清末	無	×
	092	南安炉中村土樓	1857	-	×	093	南安南庁映峰樓	明末	-	×
	094	南安卜橋聚奎樓	清中期	-	×	095	南安舖前慶原樓	清	-	×
	096	安溪玳斉德美樓	民国	-	×	097	安溪山後村土樓	清	無	×
	098	安溪玳斉聯芳樓	清末	直-丸	×	099	德化承澤黃宅	民国	直-角	○
	100	德化格頭連氏祖厝	1508	直-丸	○					
閩中地域	101	永安西洋邢宅	-	直-角	△	102	三明莘口陳宅	-	直-角	×
	103	三明魏宅	民国	直-角	×	104	三明列西羅宅	-	直-角	×
	105	三明列西吳宅	-	曲-角	△	106	永安小陶ある住宅	-	直-角	△
	107	永安安貞堡	1885	直-角	△	108	沙県茶豊峽孝子坊	1829	-	-
	109	三元シンロ松慶堡	清中期	-	-	110	沙県東巷 29 号	清末	曲-丸	○
	111	沙県東大路 72 号	清末	曲-丸	○	112	貢川機垣楊公祠	1778	曲-丸	×
	113	永安貢川金魚堂	1624	曲-角	△	114	永安貢川嚴進士宅	明末	曲-丸	△
	115	永安福庄ある住宅	-	-	-	116	永安青水東興堂	1810	曲-丸	△
閩西客家地域	117	上杭古田八甲廖宅	-	直-角	△	118	新泉張宅	-	曲-角	△
	119	新泉芷溪黃宅	-	曲-角	△	120	新泉張氏住宅	-	直-角	×
	121	新泉望雲草堂	-	曲-角	△	122	連城チヨ溪羅宅	-	-	-
	123	長汀洪家巷羅宅	-	直-角	×	124	長汀新耕別荘	-	-	-
	125	上杭古田張宅	-	-	×	126	連城培田双善堂	清中期	-	-
	127	連城培田敦樸堂	-	曲-角	×	128	連城培田双灼堂	清末	-	×
	129	連城培田繼述堂	1829	-	-	130	連城培田濟美堂	清末	曲-角	×
	131	南靖石橋村永安樓	16 世紀	直-丸	×	132	南靖石橋村昭德樓	-	直-丸	×
	133	南靖石橋村長藍樓	清	直-丸	×	134	南靖石橋村逢源樓	-	直-丸	△
	135	南靖石橋村振德樓	-	直-丸	×	136	南靖石橋村順裕樓	1927	直-丸	×
	137	南靖田螺坑步雲樓	清初期	無	×	138	南靖梅林和貴樓	1926	直-丸	×
	139	平和西安西爽樓	1679	-	-	140	永定高陂遺經樓	1806	無	×
	141	永定高北承啓樓	1709	無	×	142	永定湖坑振成樓	1912	-	-
	143	平和蘆溪厥寧樓	1720	-	-	144	南靖梅林懷遠樓	1909	直-丸	△
	145	永定高陂大夫邸	1828	直-丸	△	146	永定洪坑福裕樓	1880	-	-

	147	連城培田官庁	明末	－	－	148	連城培田都クン府	－	－	－
	149	連城芷溪集鱸堂	清初期	直-角	×	150	連城芷溪凝禧堂	清末	曲-丸	×
	151	連城芷溪紹徳堂	清中期	曲-丸	×	152	連城芷溪培蘭堂	清末	曲-丸	×
	153	連城芷溪霅雲山房	清末	曲-丸	×	154	永定撫市ある住宅	－	無	×
	155	永定鵲嶺村長福楼	民国	無	×					
閩北地域	156	建瓯伍石村馮宅	－	曲-角	○	157	建瓯朱宅	－	曲-角	○
	158	浦城上坊葉氏住宅	－	直-角	×	159	浦城上坊葉氏大厝	清	直-角	×
	160	浦城觀前饒加年宅	－	直-角	×	161	浦城觀前余天孫宅	－	直-角	×
	162	浦城觀前余有蓮宅	－	直-角	×	163	浦城觀前張宅	－	直-角	△
	164	武夷山下梅鄒邸	1754	直-角	×	165	下梅儒学正堂	清中期	直-角	×
	166	武夷山下梅参軍邸	清中期	直-角	×	167	崇安郊区藍湯応宅	－	直-角	×
	168	洛洋村ある住宅	－	直-丸	○	169	邵武中書邸	明末	直-角	△
	170	和平廖氏大夫邸	清末	曲-丸	×	171	邵武金坑儒林郎邸	1632	曲-丸	×
	172	金坑 16 号李宅	－	直-角	×	173	邵武金坑中翰邸	－	曲-角	△
	174	邵武大埠岡中翰邸	－	曲-角	×	175	和平李氏大夫邸	清末	－	－
	176	寧化安遠ある住宅	－	－	×	177	建寧丁宅	－	－	×
	178	泰寧尚書邸	明末	曲-角	△	179	光澤崇仁裘宅	明末	曲-丸	△
	180	光澤崇仁ゴン氏宅	明末	曲-丸	×	181	和平黄氏大夫邸	明	－	－
広東潮汕地域	182	潮州弘農旧家	－	無	×	183	揭陽北良ある住宅	－	無	×
	184	潮陽棉城ある住宅	－	無	×	185	義立庁ある住宅	－	無	×
	186	錫西郷ある住宅	－	無	×	187	潮州許氏邸	伝説宋	曲-角	×
	188	潮州三達尊黄府	明末	直-丸	×	189	潮陽桃溪図庫	－	無	×
	190	普寧洪陽新砦	－	－	－	191	潮安坑門郷揚厝砦	－	無	×
	192	潮安象埔砦	伝説宋	－	－	193	潮州辜厝巷王宅	－	無	×
	194	潮州王厝饒宅	－	無	×	195	普寧泥溝ある住宅	－	無	×
	196	澄海城関ある住宅	－	無	×	197	潮州梨花夢処書齋	清末	無	×
	198	澄海樟林ある住宅	－	無	×					
浙東地域	199	寧波張煌言旧居	－	－	－	200	寧波庄市鎮葛宅	－	－	－
	201	庄市鎮ある住宅	－	－	－	202	奉化岩頭毛氏旧居	－	－	－
	203	寧波走馬塘老流房	－	－	－	204	慈城甲第世家	明末	－	－
	205	慈溪龍山鎮天叙堂	1929	－	－	206	諸暨斯宅斯盛居	清中期	－	－
	207	諸暨斯宅登祥居	1790	－	－	208	斯宅華国公別荘	－	－	－
	209	天台妙山巷懷徳楼	－	曲-角	×	210	天台城関茂宝堂	－	曲-丸	○
	211	天台城関張文郁宅	明末	－	－	212	天台街頭余氏住宅	－	－	－
	213	紹興倉橋直街施宅	－	直-角	×	214	紹興題扇橋住宅	－	直-角	×
	215	紹興下大路陳宅	－	直-角	×	216	鄞県鄞江鎮陳宅	－	直-角	×
	217	黄岩黄土鎮虞宅	－	直-角	×	218	黄岩天長街住宅	－	直-角	×
	219	天台来紫楼	清	曲-丸	△	220	月湖中宮巷張宅	清	曲-角	△
	221	月湖天一巷劉宅	民国	直-角	×	222	月湖青石街聞宅	清	直-角	×
	223	月湖青石街張宅	清	直-角	×	224	黄岩司庁巷汪宅	民国	直-丸	△
	225	司庁巷 16 号張宅	清末	直-丸	×	226	司庁巷 32 号洪宅	清	曲-丸	×
浙南	227	永嘉ダイ頭陳宅	清末	－	－	228	泰順上洪黄宅	－	－	－
	229	平陽順溪戸侯邸	清	－	－	230	平陽騰蛟蘇宅	民国	曲-角	△

地域	231	永嘉芙蓉村北甲宅	-	曲-角	×	232	永嘉芙蓉村北乙宅	-	-	-
	233	永嘉水雲十五間宅	清末	-	-	234	永嘉花壇「宋宅」	伝説宋	曲-丸	○
	235	ダイ頭松風水月宅	清	曲-角	△	236	永嘉蓬溪村謝宅	-	-	×
	237	永嘉林坑毛步松宅	-	直-角	×	238	永嘉東占坳黃宅	-	-	×
	239	景寧小佐巖宅	民国	直-角	×	240	景寧桃源ある住宅	清	直-角	×
	241	文成梧溪富宅	清末	曲-丸	×	242	永嘉林坑ある住宅	-	曲-角	-
	243	ダイ頭陳賢樓宅	清	曲-角	×	244	黄檀洞ある住宅	-	曲-角	△
	245	平陽坡南黃宅	清	曲-角	×	246	平陽青街李宅	清	曲-角	○
	247	蒼南碗窯朱宅	清	曲-角	×	248	泰順百福岩周宅	清	直-角	×
浙西地域	249	龍遊丁家ある住宅	-	-	-	250	龍遊若塘丁宅	-	-	-
	251	龍遊脈元ゴン宅	-	-	-	252	蘭溪長樂村望雲樓	明	曲-丸	×
	253	龍遊溪口傅家大院	-	-	-	254	松陽望松黃家大院	-	-	-
	255	廿八都丁家大院	-	曲-丸	△	256	江山廿八都楊宅	-	直-角	×
	257	松陽李坑村 46 号	-	-	-	258	衢州峡口徐開校宅	1910	-	×
	259	衢州峡口徐瑞陽宅	清末	直-角	×	260	衢州峡口徐文金宅	-	直-角	△
	261	衢州峡口鄭百万宅	清	曲-丸	△	262	衢州峡口劉文貴宅	清	-	×
	263	衢州峡口周樹根宅	民国	曲-丸	△	264	衢州峡口周朝柱宅	民国	-	×
	265	王村口ある住宅	-	直-角	-					
浙中地域	266	東陽白坦郷務本堂	清	曲-丸	△	267	東陽史家庄花庁	-	-	×
	268	武義ユ源声遠堂	明末	曲-丸	△	269	武義郭洞燕翼堂	-	曲-丸	○
	270	磐安擲溪余慶堂	-	-	-	271	河陽循規映月宅	-	-	-
	272	河陽廉讓之間宅	-	-	-	273	黄田ハン前台門	-	-	-
	274	義烏雅端容安堂	-	-	-	275	金華雅ハン七家庁	明	曲-角	△
	276	東陽紫薇山尚書邸	明末	-	-	277	東陽六石鎮肇慶堂	明	-	-
	278	武義ユ源裕後堂	1785	曲-丸	△	279	武義ユ源上万春堂	-	-	-
	280	東陽湖溪鎮花庁	清	-	-	281	東陽盧宅	明	曲-丸	-
	282	浦江鄭氏義門	清	-	-	283	建德新葉花萼堂	明	直-角	×
	284	建德新葉種徳堂	民国	曲-角	×	285	建德新葉是亦居	民国	曲-角	×
	286	ユ源玉潤珠輝宅	-	曲-角	×	287	武義郭洞新屋里宅	明末	-	×
	288	武義郭上萃華堂	-	-	-	289	武義郭下慎徳堂	-	-	-
	290	東陽巍山鎮趙宅	-	直-角	×	291	東陽水閣庄葉宅	-	-	×
	292	東陽城西街杜宅	-	-	-	293	縉雲河陽朱宅	清	曲-丸	×

表 3.4 地域別梁構造類型の使用率

	梁構造					海老虹梁		
	直一丸	直一角	曲一丸	曲一角	無	ある	部分ある	なし
閩東	2/39	32/39	1/39	4/39		20/39	13/39	6/39
莆仙			1/4		3/4	1/4		3/4
閩南	11/23	3/23	1/23	1/23	7/23	3/28	7/28	18/28
閩中		6/13	5/13	2/13		2/13	7/13	4/13
閩西	9/27	4/27	4/27	5/27	5/27		7/29	22/29
閩北	1/22	12/22	4/22	5/22		3/24	5/24	16/24
潮汕	1/15			1/15	13/15			15/15

浙東	2/16	9/16	3/16	2/16		1/16	3/16	12/16
浙南		4/15	2/15	9/15		2/16	3/16	11/16
浙西		4/8	4/8				4/10	6/10
浙中		2/12	6/12	4/12		1/14	4/14	9/14

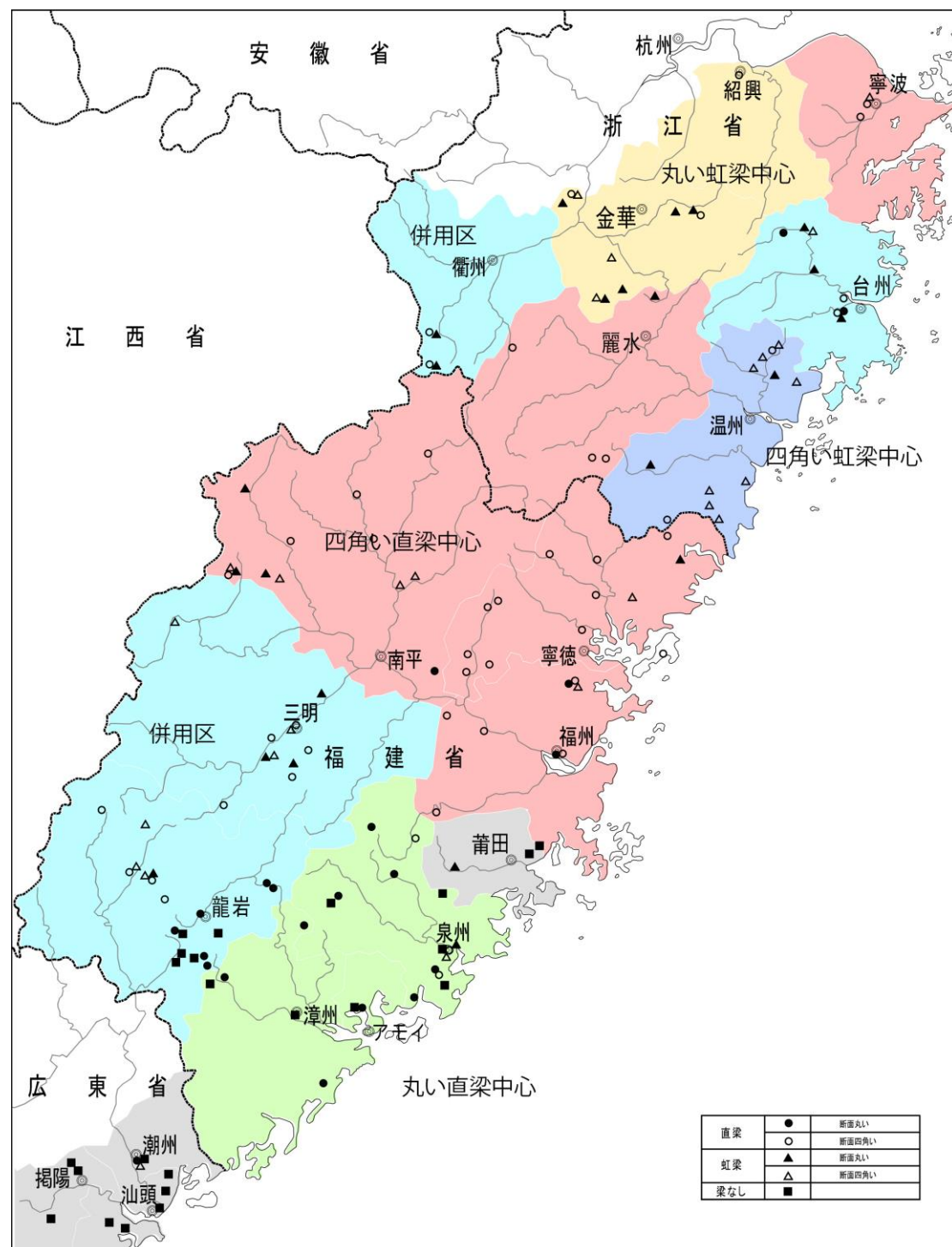


図 3.25 梁構造の地域分布

梁構造の分布は、地域の性格を表す。直線の梁は、福建に集中して、曲る梁は、浙江のほうが多くである。そして、断面四角い梁は、閩東・浙南・浙東・閩北に集中して、断面

丸い方は閩南・閩西・浙中に集中している。

海老虹梁は、まさに閩東地域の特徴であって、**84.6%**の事例が採用する。後述の挿肘木構造と一緒に、閩東特有な軸部構造を形成した。ちなみに、海老虹梁がないのは、「割牽」構造がないのとは異なり、曲る「割牽」がないの意味である。

(3) 角柱の地域性

表 3.5 にある各類型の省略表現は以下の通りである。丸柱は「丸」、角柱は「角」、丸柱と角柱併用は「併」、石柱は「石」、レンガ造柱なし場合は「無」で、不明や未調査のは「-」である。

表 3.5 地域別柱各類型の一覧

地域	番号	事例	年代	類型	番号	事例	年代	類型
閩東地域	001	福州埕宅	-	丸	002	福州揚岐遊宅	民国	丸
	003	福州宮巷劉宅	-	-	004	福州ある住宅	-	-
	005	永泰李宅	-	丸	006	古田松台ある住宅	-	併
	007	古田張宅	-	-	008	古田利洋花厝	-	丸
	009	古田沽洋陳宅	-	-	010	古田吳厝里ある住宅	-	-
	011	古田鳳埔ある住宅	-	-	012	古田于宅	-	併
	013	福安茜洋橋頭ある住宅	-	-	014	閩清東城厝	-	-
	015	福安楼下保合太和宅	-	丸	016	福安楼下兩兄弟住宅	-	丸
	017	福安楼下王炳忠宅	-	丸	018	福州宮巷沈宅	明末	併
	019	福州文儒坊陳宅	清	角	020	福州衣錦坊歐陽宅	1890	角
	021	福鼎白琳洋里大厝	1745	丸	022	閩清坂東岐廬	1853	-
	023	寧徳霍童下街陳宅	清中期	-	024	寧徳霍童黃宅	清中期	併
	025	寧徳霍童下街 72 号	清中期	併	026	霞浦半月里雷世儒宅	1848	併
	027	霞浦半月里雷位進宅	清中期	併	028	福安坦洋王宅	清末	丸
	029	福安坦洋郭宅	清末	丸	030	福安坦洋胡宅	清末	丸
	031	福安廉村就日瞻雲宅	清中期	丸	032	福安廉村甲算延齡宅	清末	丸
	033	尤溪桂峰樓坪序大厝	清初期	丸	034	尤溪桂峰後門山大厝	明末	丸
	035	尤溪桂峰後門嶺大厝	1747	丸	036	福清一都東関磐	1736	-
	037	閩清ある住宅	-	-	038	閩清宏琳厝	1795	-
	039	尤溪ある農家	-	-	040	羅源梧桐五魚厝	清初期	丸
	041	羅源梧桐水仙関	清	丸	042	羅源梧桐孔照厝	清	丸
莆仙地域	043	羅源梧桐旗竿里	民国	丸	044	周寧浦源鄭宅	清末	丸
	045	屏南漈頭張宅	清	併	046	屏南漈下甘宅	明末	併
	047	屏南漈下ある住宅	明末	丸	048	尤溪桂峰蔡宅	清	丸
	049	永泰嵩口ある住宅	1768	併	050	福鼎西陽陳宅	-	併
	051	涵江林宅	1940	石	052	莆田江口ある住宅	-	丸
	053	仙遊陳宅	明末	丸	054	仙遊榜頭仙水大庁	1446	併
	055	涵江江口余宅	-	丸	056	仙遊仙華陳宅	-	-
	057	仙遊楓亭陳和發宅	-	-	058	仙遊坂頭鴛鴦大厝	1911	-
	059	莆田大宗伯邸	1592	-				

閩南地域	060	永春鄭宅	1910	-	061	漳平上桂林黃宅	清中期	丸
	062	漳平下桂林劉宅	清	-	063	泉州吳宅	清中期	-
	064	泉州蔡宅	1904	丸	065	泉州ある住宅	-	-
	066	泉州黃宅	-	丸	067	晉江青陽庄宅	1934	石
	068	晉江ある住宅	-	石	069	晉江大倫蔡宅	-	石
	070	集美陳宅	-	-	071	集美陳氏住宅	-	無
	072	漳州南門ある住宅	-	-	073	龍岩新邱厝	1888	丸
	074	泉州亭店楊阿苗宅	1894	丸	075	南安官橋蔡資深宅	清	-
	076	泉州泉港黃素石樓	1741	-	077	南安石井中憲邸	1728	丸
	078	漳浦湖西藍廷珍宅	清中期	-	079	漳州官園蔡竹禪宅	清中期	-
	080	アモイコロンス大夫邸	1796	-	081	漳浦湖西趙家堡	明末	丸
	082	德化碩傑大興堡	1722	-	083	華安岱山齊雲樓	1862	-
	084	華安大地二宜樓	1740	-	085	漳浦深土錦江樓	1791	-
	086	晉江石獅鎮ある住宅	-	石	087	晉江大倫郷ある住宅	-	石
	088	龍岩適中太和樓	-	-	089	龍岩毛主席旧居	-	-
	090	龍岩適中典常樓	1784	丸	091	南安湖内村土樓	清末	丸
	092	南安垵中村土樓	1857	角	093	南安南厝映峰樓	明末	併
	094	南安卜橋聚奎樓	清中期	併	095	南安舖前慶原樓	清	併
	096	安溪玳疋德美樓	民国	丸	097	安溪山後村土樓	清	丸
	098	安溪玳疋聯芳樓	清末	丸	099	德化承澤黃宅	民国	丸
	100	德化格頭連氏祖厝	1508	丸				
閩中地域	101	永安西洋邢宅	-	丸	102	三明莘口陳宅	-	-
	103	三明魏宅	民国	-	104	三明列西羅宅	-	-
	105	三明列西吳宅	-	-	106	永安小陶ある住宅	-	-
	107	永安安貞堡	1885	丸	108	沙県茶豊峽孝子坊	1829	-
	109	三元シン口松慶堡	清中期	-	110	沙県建国路東巷 29 号	清末	-
	111	沙県東大路 72 号	清末	丸	112	永安貢川機垣楊公祠	1778	丸
	113	永安貢川金魚堂	1624	併	114	永安貢川嚴進士宅	明末	丸
	115	永安福庄ある住宅	-	-	116	永安青水東興堂	1810	丸
閩西客家地域	117	上杭古田八甲廖宅	-	-	118	新泉張宅	-	丸
	119	新泉芷溪黃宅	-	併	120	新泉張氏住宅	-	-
	121	新泉望雲草堂	-	併	122	連城チュ溪羅宅	-	-
	123	長汀洪家巷羅宅	-	-	124	長汀新耕別荘	-	-
	125	上杭古田張宅	-	-	126	連城培田双善堂	清中期	-
	127	連城培田敦樸堂	-	-	128	連城培田双灼堂	清末	-
	129	連城培田繼述堂	1829	併	130	連城培田濟美堂	清末	丸
	131	南靖石橋村永安樓	16 世紀	-	132	南靖石橋村昭德樓	-	-
	133	南靖石橋村長藍樓	清	-	134	南靖石橋村逢源樓	-	-
	135	南靖石橋村振德樓	-	-	136	南靖石橋村順裕樓	1927	-
	137	南靖田螺坑步雲樓	清初期	無	138	南靖梅林和貴樓	1926	-
	139	平和西安西爽樓	1679	-	140	永定高陂遺経樓	1806	無
	141	永定高北承啓樓	1709	無	142	永定湖坑振成樓	1912	無
	143	平和蘆溪厥寧樓	1720	無	144	南靖梅林懷遠樓	1909	併

	145	永定高陂大夫邸	1828	-	146	永定洪坑福裕樓	1880	併
	147	連城培田官庁	明末	-	148	連城培田都クン府	-	-
	149	連城芷溪集鱸堂	清初期	丸	150	連城芷溪凝禧堂	清末	丸
	151	連城芷溪紹徳堂	清中期	丸	152	連城芷溪培蘭堂	清末	丸
	153	連城芷溪ネ雲山房	清末	-	154	永定撫市ある住宅	-	-
	155	永定鵲嶺村長福樓	民国	無				
閩北地域	156	建瓯伍石村馮宅	-	-	157	建瓯朱宅	-	-
	158	浦城中坊葉氏住宅	-	丸	159	浦城上坊葉氏大厝	清	丸
	160	浦城觀前饒加年宅	-	丸	161	浦城觀前余天孫宅	-	丸
	162	浦城觀前余有蓮宅	-	丸	163	浦城觀前張宅	-	丸
	164	武夷山下梅鄒邸	1754	丸	165	武夷山下梅儒学正堂	清中期	丸
	166	武夷山下梅参軍邸	清中期	丸	167	崇安郊区藍湯応宅	-	-
	168	南平洛洋村ある住宅	-	丸	169	邵武中書邸	明末	丸
	170	邵武和平廖氏大夫邸	清末	丸	171	邵武金坑儒林郎邸	1632	丸
	172	邵武金坑 16 号李宅	-	丸	173	邵武金坑中翰邸	-	丸
	174	邵武大埠岡中翰邸	-	丸	175	邵武和平李氏大夫邸	清末	丸
	176	寧化安遠ある住宅	-	-	177	建寧丁宅	-	丸
	178	泰寧尚書邸	明末	丸	179	光澤崇仁裘宅	明末	-
広東潮汕地域	180	光澤崇仁ゴン氏宅	明末	丸	181	邵武和平黄氏大夫邸	明	丸
	182	潮州弘農旧家	-	角	183	揭陽新亨北良ある住宅	-	石
	184	潮陽棉城ある住宅	-	石	185	棉城義立庁ある住宅	-	石
	186	揭陽錫西郷ある住宅	-	石	187	潮州許氏邸	伝説宋	石
	188	潮州三達尊黄府	明末	石	189	潮陽桃溪図庫	-	-
	190	普寧洪陽新砦	-	-	191	潮安坑門郷揚厝砦	-	-
	192	潮安象埔砦	伝説宋	-	193	潮州辜厝巷王宅	-	石
	194	潮州王厝饒宅	-	石	195	普寧泥溝ある住宅	-	無
	196	澄海城関安慶巷ある住宅	-	無	197	潮州梨花夢処書斎	清末	-
浙東地域	198	澄海樟林ある住宅	-	-				
	199	寧波張煌言旧居	-	-	200	寧波庄市鎮葛宅	-	-
	201	庄市鎮大樹下ある住宅	-	-	202	奉化岩頭毛氏旧居	-	-
	203	寧波走馬塘老流房	-	-	204	慈城甲第世家	明末	-
	205	慈溪龍山鎮天叙堂	1929	丸	206	諸暨斯宅斯盛居	清中期	-
	207	諸暨斯宅発祥居	1790	-	208	諸暨斯宅華国公別荘	-	-
	209	天台妙山巷懷徳樓	-	丸	210	天台城関茂宝堂	-	丸
	211	天台城関張文郁宅	明末	丸	212	天台街頭余氏住宅	-	丸
	213	紹興倉橋直街施宅	-	丸	214	紹興題扇橋ある住宅	-	丸
	215	紹興下大路陳宅	-	丸	216	鄞県鄞江鎮陳宅	-	丸
	217	黄岩黄土領虞宅	-	-	218	黄岩天長街ある住宅	-	-
	219	天台来紫樓	清	丸	220	寧波月湖中宮巷張宅	清	丸
	221	寧波月湖天一巷劉宅	民国	丸	222	寧波月湖青石街関宅	清	丸
	223	寧波月湖青石街張宅	清	丸	224	黄岩司庁巷汪宅	民国	丸
	225	黄岩司庁巷 16 号張宅	清末	丸	226	黄岩司庁巷 32 号洪宅	清	丸
浙	227	永嘉ダイ頭陳宅	清末	併	228	泰順上洪黄宅	-	-

南 地 域	229	平陽順溪戸侯邸	清	-	230	平陽騰蛟蘇宅	民国	角
	231	永嘉芙蓉村北甲宅	-	併	232	永嘉芙蓉村北乙宅	-	併
	233	永嘉水雲十五間宅	清末	-	234	永嘉花壇「宋宅」	伝説宋	角
	235	永嘉ダイ頭松風水月宅	清	併	236	永嘉蓬溪村謝宅	-	併
	237	永嘉林坑毛歩松宅	-	併	238	永嘉東占坳黃宅	-	併
	239	景寧小佐巖宅	民国	丸	240	景寧桃源ある住宅	清	丸
	241	文成梧溪富宅	清末	丸	242	永嘉林坑ある住宅	-	併
	243	永嘉ダイ頭陳賢樓宅	清	併	244	樂清黃檀洞ある住宅	-	角
	245	平陽坡南黃宅	清	角	246	平陽青街李宅	清	角
浙 西 地 域	247	蒼南碗窰朱宅	清	併	248	泰順百福岩周宅	清	丸
	249	龍遊丁家ある住宅	-	-	250	龍遊若塘丁宅	-	-
	251	龍遊脈元ゴン宅	-	-	252	蘭溪長樂村望雲樓	明	丸
	253	龍遊溪口傅家大院	-	-	254	松陽望松黃家大院	-	-
	255	江山廿八都丁家大院	-	丸	256	江山廿八都楊宅	-	丸
	257	松陽李坑村 46 号	-	-	258	衢州峡口徐開校宅	1910	丸
	259	衢州峡口徐瑞陽宅	清末	丸	260	衢州峡口徐文金宅	-	丸
	261	衢州峡口鄭百万宅	清	丸	262	衢州峡口劉文貴宅	清	丸
	263	衢州峡口周樹根宅	民国	丸	264	衢州峡口周朝柱宅	民国	丸
浙 中 地 域	265	遂昌王村口ある住宅	-	丸				
	266	東陽白坦郷務本堂	清	丸	267	東陽史家庄花庁	-	丸
	268	武義ユ源声遠堂	明末	丸	269	武義郭洞燕翼堂	-	丸
	270	磐安樺溪余慶堂	-	丸	271	縉雲河陽循規映月宅	-	-
	272	縉雲河陽廉讓之間宅	-	-	273	東陽黃田ハン前台門	-	-
	274	義烏雅端容安堂	-	-	275	金華雅ハン七家庁	明	丸
	276	東陽紫微山尚書邸	明末	-	277	東陽六石鎮肇慶堂	明	丸
	278	武義ユ源裕後堂	1785	併	279	武義ユ源上万春堂	-	-
	280	東陽湖溪鎮馬上橋花庁	清	-	281	東陽盧宅	明	-
	282	浦江鄭氏義門	清	丸	283	建德新葉花萼堂	明	併
	284	建德新葉種徳堂	民国	丸	285	建德新葉是亦居	民国	丸
	286	武義ユ源玉潤珠輝宅	-	丸	287	武義郭洞新屋里宅	明末	丸
	288	武義郭上萃華堂	-	-	289	武義郭下慎徳堂	-	-
	290	東陽巍山鎮趙宅	-	丸	291	東陽水閣庄葉宅	-	丸
	292	東陽城西街杜宅	-	-	293	縉雲河陽朱宅	清	丸

表 3.6 地域別柱類型の使用率

	丸	角	併	石	無
閩東	23/36	2/36	11/36		
莆仙	3/5		1/5	1/5	
閩南	14/24	1/24	3/24	5/24	1/24
閩中	6/7		1/7		
閩西	6/17		5/17		6/17
閩北	21/21				
潮汕		1/11		8/11	2/11

浙東	17/17				
浙南	4/19	5/19	10/19		
浙西	11/11				
浙中	15/17		2/17		

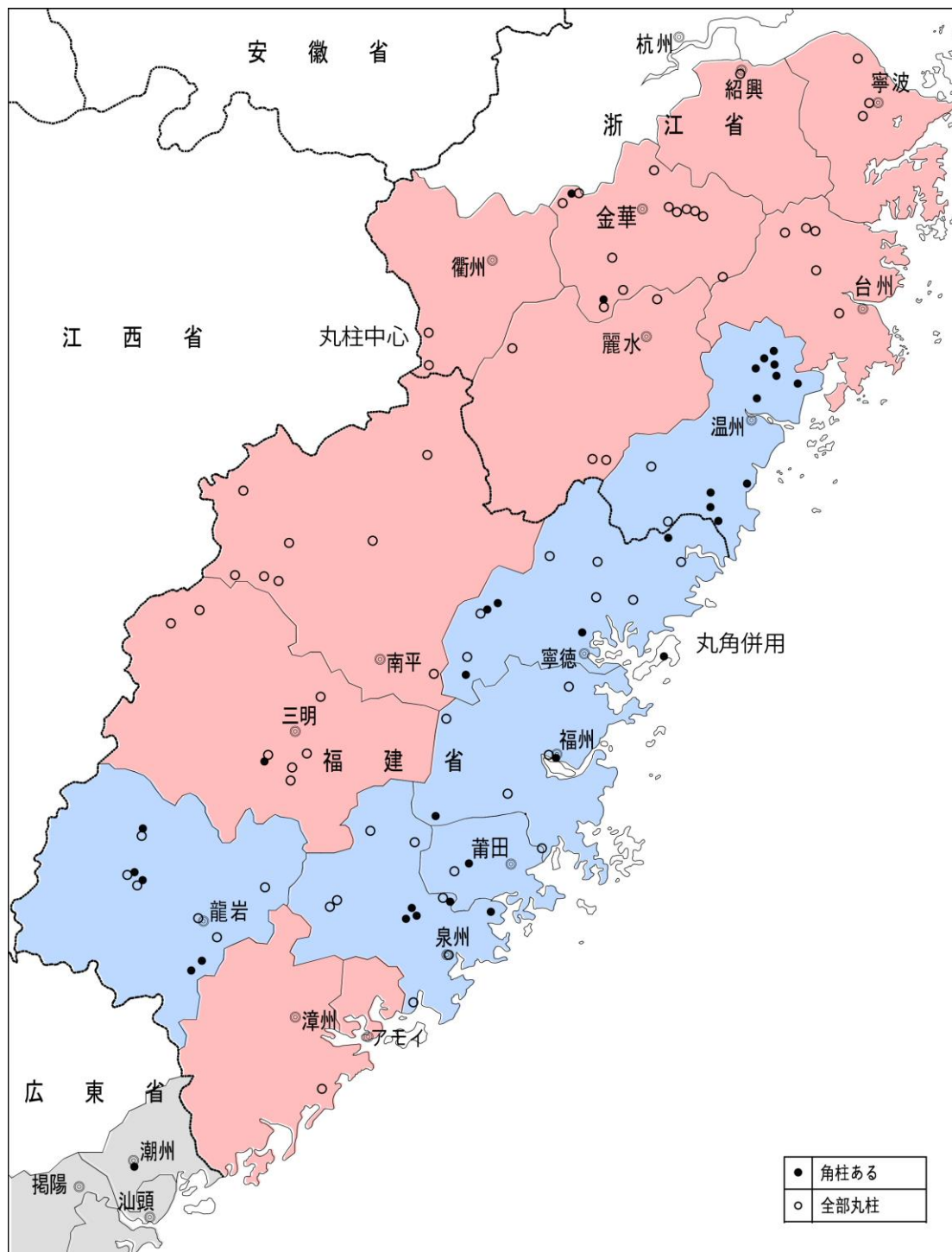


図 3.26 柱作法の地域分布

柱の種類の分布によると、丸柱は圧倒的な優位にとる。しかし、角柱と角丸併用の事例も一定の量をもって、閩東と浙南に集中している。その中に浙南地域の角柱を持つ事例は

78.9%（15/19）に到達し、東南海岸地区で唯一の角柱優位地域である。そして閩東地域に36.1%（13/36）の比率も低くない。最後に、閩西客家地域に、丸、角、柱なしと三種類の作法はバランスが取れている。それは、閩西客家地域多種文化融合の結果である可能性がある。

3.1.7 軸部に関するいくつかの考察

(1) 海老虹梁の時代性

東南海岸地区民家の軸部において地域的と時代的な特性を同時に備えるのは、海老虹梁である。海老虹梁は、東南海岸地区の方言文化の中に、「大頭梁」「泥鱸梁」「猫杓」「束木」「水梁」など様々な呼称があり、その重要性を示唆する。

海老虹梁の時代性については、表 3.7 によると、明から民国までの時期に海老虹梁の使用率は、少しでも低下する傾向がある。明時代の民家は、大部（70%）海老虹梁を用いる。清中期（18 世紀）までの清代民家は、半分ぐらいに海老虹梁を使う。そして清末以降の民家は、海老虹梁を使う事例は既に半分以下になる。つまり、近世の東南海岸地区民家においては、海老虹梁作法が衰退している。

表 3.7 海老虹梁の時代性

	海老虹梁を使用する	海老虹梁を使用しない
明の時代	13	7
清代（初期と中期）	19	20
清末以降	19	24

海老虹梁は、日本中世の禅宗様建にもみられ、中国東南海岸地区と関連していた。しかし、東南海岸地区には、近世から海老虹梁を使わない新しい様式が伝入すると考えられる。すなわち閩北地域に注目すると、明代の事例 4 件のうち、3 件が海老虹梁を使用し、清代・民国の事例 5 件のうち海老虹梁を使用する例がない。前章で検討する平面配置と比較すると、閩北の 18 件多進四合院の事例の 5 件は海老虹梁を使用し、その中の 3 件は明代の遺構である。そして多進四合院ではない 7 件の事例の 3 件は海老虹梁を使用する。多進四合院平面ではない民家のほうが、海老虹梁を使う傾向が高い。

つまり、近世東南海岸地区に伝入する海老虹梁がない新住宅様式は、東南海岸地区民家木造体系へ影響を与えて、土着の海老虹梁作法へ衝撃を与えると考えられる。

(2) 角柱への考察

中国に現存する伝統木造建築はほとんど丸柱を使用する。しかし角柱、特に木造面取る角柱の使用は様々な歴史の隅に散在する。現存する最古の木造角柱イメージは、北宋張先（990-1078 年）の絵画『十詠図』¹¹⁵であった。『營造法式』は角柱の形を言わず、ただ卷十九「大木作功限」の中に「或用方柱、每一功減二分功」¹¹⁶（もし角柱を使うなら、人力の計算は、丸柱より 2 割減らす）という記録がある。

東南海岸地区以外に角柱を使う事例はほとんど宮殿建築である。明代に蕭洵が編集した『元故宫遺録』は「由午門内、可数十步、為大明門……中為大明殿……殿楹四向皆方柱，大可五六尺……」¹¹⁷と記し、元代北京の宮殿建築において角柱を使用することがわかる。

¹¹⁵ 「宋」張先『十詠図』北京故宫博物院藏
¹¹⁶ 梁思誠「營造法式注釈」『梁思誠全集・第 7 卷』、中国建築工業出版社、2001 年、第 303 頁
¹¹⁷ 蕭洵『元故宫遺録』商務印書館、1932。編集者蕭洵は明初江西吉安出身。このほんは洪武年間工部

そして現存する清瀋陽故宮大清門の側柱、北京故宮寧壽宮・御花園の部分建築の側柱は角柱を利用し、それ以外の柱は丸柱のままである。面白いのは故宮養心殿で、すべての柱は角柱である。

東南海岸地区の角柱について、皇帝の宮殿の角柱との関連性を論じることが、今はまだできない。これ以上の証拠と史料が必要である。ただし、住居建築による角柱の使用は、東南海岸地区しかない。数は少ないとはいえ、これは東南海岸地区建築意匠の重要な特徴である。



図 3.27 故宮博物院蔵『十詠図』の一部



図 3.28 北京故宮の角柱

(3) 礎盤と掘立柱

漢族官式建築は早くから礎石・土台建物になって、住居建築においても古代から普及していた。中国の掘立柱建物は先史時代に集中して、商周から段々消えていく。日本の民家建築においては 18 世紀頃まで掘立柱建物が主流であったことと違い、中国民家（特に南方民家）による掘立柱の衰退は、「穿闘」技術が原因であると推定する。

すなわち、「穿闘式」建物は柱と貫が一体化することにより地震や台風の横力を分散させる柔構造の建築である。それに対して掘立柱建物は柱の足元を地中に固定している剛構

郎中就任し、元代の宮殿を取り壊すときの私人記録である。

造であり、この構造は柱の太さに関係なく地震・台風にある程度耐えることができる。「穿闘式」フレーム構造は、地震・台風に強い、建築費も高くない、そして足場が必要なくて、村人たち自ら建てできる簡略な建造方法による大量生産も可能である。穿闘技術があるからこそ、掘立柱建物が速やかに中国において衰退したものと考えられる。

しかし、南方民家、特に東南海岸地区民家に、北方建物のような礎盤・礎石・土台完備と違い、時には、礎盤を省略する。東南海岸地区の人々は礎盤・礎石へのこだわりがなく、礎盤を省略し、或いは簡単な形の礎盤を使用する原因は、根拠がないとはいえ、掘立柱建物の伝統と関係があるかもしれない。そして、東南海岸地区に、風雨が多いので礎盤があっても防水の役に立たない、豊富な木材の資源があるから柱の交換も安くできる。上記のような利点があるから東南海岸地区が北方のような礎石建物を建てないものと理解される。

3.2 外壁

壁構造については、基本的に木造壁、版築土壁、レンガ壁の三種類がある。木造壁は、さらに、板壁・竹骨の真壁と木骨の真壁三種類がある。壁構造は、現地で資材の調達の難易度と関係があるが、文化伝統のこだわりも見られる。

3.2.1 板壁と真壁

(1) 板壁

東南海岸地区の民家は板を使って、壁・門・窓などを作る。こういう板の構造は、施工が簡単で、通風に有利であり、取り外しも便利である。民家の板壁は、基本的に豎て並べて固定するが、取り外しや引き押しができる場合もある。

板壁は民家内部の部屋の仕切りをするときよく使われている構造であるが、防火性が弱いから現代の外壁構造としての利用は少ない。しかし木材資源豊かな山岳地帯の村落には、外壁が板壁の民家がまだ残っている村落もある。



図 3.29 文成梧溪富宅の板壁

(2) 真壁

竹骨の真壁：竹を籬のように編み、梁柱や貫と固定し、両面に泥（モルタル）を塗り、そして漆喰で仕上塗する。経済条件がよくない家は、泥も漆喰もなく、竹の籬を直接に外壁とする。

木骨の真壁：木骨の真壁は実に板壁の外に、泥を塗り、漆喰で仕上塗する。泥を塗るため、板表面を先に線を刻み、泥の接着に配慮する。



安貞堡の竹骨真壁



平陽青街の竹の籬壁



霞浦半月里木骨の真壁

図 3.30 真壁

(3) 真壁と板壁の混用

建物外壁の下部は板壁、上部は真壁の作法である。一般的に切妻の屋根の妻面の上の三角形の部分が真壁構造を使って、下の部分は板壁を使う。これは、妻面の上部分は形が複雑で、板張の施工が難しいからで、板壁が雨に強い、土塗壁が雨に弱いという原因もある。



平陽青街の住宅



永安槐南の住宅

図 3.31 真壁と板壁の混用

3.2.2 版築壁とレンガ壁

(1) 版築壁

土で版築の壁はレンガ壁を採用する以前の中国北方系民家においてよく使われていた外壁構造である。黄漢民氏の研究によると、土を突き固め、壁を作る技術は、北方漢族の移民が南方へ移動する歴史の中で東南海岸地区に伝わり、その版築壁技術は福建民家に伝承されているという。土を突き固めた壁は荷重に強い、断熱性・吸湿性が良く、外壁材として良質である。版築壁を築くために、粘度が高い、少し砂を含む黄土は適材である。少量の砂が版築壁の収縮を防ぎ、割れも起きにくい。新しい黄土は一年から二年くらい放置して、「熟化」させ、「熟化」した黄土のワーカビリティは良いとされる。黄土の粘度が足りないなら、石灰を混ぜる。もっと贅沢な作法は、版築壁の硬さのため、土の中に黒砂糖水ともち米を混ぜる。粘度が良好なら壁を築き始める。先に長さ 1.5m の木の型枠を築き、その中に黄土を締固める。コンクリート造りの技術と近い。一定の厚さの黄土を締固めた後、竹・木の枝を土の上に（つまり二層の版築の間に）置き込み、割裂防止や引張強度を高める。型枠の中の壁施工ができれば、型枠を上を移動し、上述の手順を繰り返して、壁を築き上げる。こうして築いた版築壁は、十分に丈夫で、百年以上の風霜に堪える。



周寧浦源鄭宅



霞浦半月里のある住宅

図 3.32 版築壁

(2) レンガ壁

元の時代以前では、レンガは贅沢な材料として認識されており、高級建物の下部のみレンガを使って、「隔咸」（塩分や湿気を切断する）されていた。明の時、レンガを作る技術が発展して（レンガ窯容量の拡大と石炭の利用）、レンガの産量が激増した。レンガは防火・防水性優良の材料で、レンガ壁は迅速に全国まで普及する。しかし、レンガは南方高湿の季節においては、結露しやすい。そして、東南海岸地区多山少田の自然条件にレンガを作るための粘土は足りなかったから、東南海岸地区民家のレンガ壁の使用は、平野部しか集中していない。

A、「封火山牆」：

レンガ壁は防水性以外には、最も重要な特性は防火性である。だから、防火のため、南中国の民家の妻壁は屋根より高い、「封火山牆」と呼ぶ。『古今圖書集成・火災部』の中に、こういう記載がある：「由居民皆編竹之壁、久則乾燥易発火、又有用板壁者、竹木皆釀火之具、而周回無墻垣之隔、宜乎比屋延焼、勢不可止。一嘗見江北地少林木、居民大率疊磚為之、四壁皆磚、罕被火患、間有被者、不過数家而止。一今後若有火患、其用磚石者必不壞、其延焼者、必竹木者也、久之習俗既変、人不知有火患矣、此万年之利也。」つまり、レンガ壁は真壁と板壁より防火性が良いことは、古人がすでにしっていた。

「馬頭牆」：安徽省の南部・江西省東北部（古代の徽州）と太湖回りの地域は「封火山牆」が最も有名な場所である。この地域に「馬頭牆」とも呼ばれる。「馬頭牆」構造を使用する建物の妻壁は、一般的な切妻建物の妻壁のような上部三角形、下部四角形ではなく、「馬頭牆」構造の妻壁の上部は、階段のような形になる。階段の階数によって、一階・二階・三階・四階の「馬頭牆」があって、よく見るのは三階と四階である。東南海岸地区民家のなかに「馬頭牆」構造は浙江と閩北に集中して、他の地域には少ない。

曲線の「封火山牆」：曲線の「封火山牆」は福建によく見る。弓形・鞍形・折れ線形など様々な形式がある。鞍形の「封火山牆」は福建全土める、地方によって「観音兜」、「鍋耳」と呼ばれる。折れ線形の「封火山牆」は閩東地域に集中し、形は中国伝統の五行風水観とつながる。



浙中の「馬頭牆」



閩東の「封火山牆」

図 3.33 「封火山牆」

B、切妻壁：

妻壁は屋根より高くなる「封火山牆」を使わなくて、単なる切妻壁を使用する例も、東南海岸地区にある。有名なのは閩南地域の赤レンガ壁である。赤レンガの切妻壁は閩南地域一般的な作法である。赤レンガだけではなく、赤瓦・赤レンガの棟・室内の赤レンガ地面、閩南地域には特有な赤レンガ文化が持っている。そして閩南の泉州辺りには、赤レンガと石を混合して作る壁があり、地域の特徴を体現している。



漳浦湖西藍廷珍宅（78 番）¹¹⁸



泉州蔡宅（64 番）¹¹⁹

図 3.34 切妻のレンガ壁

(3) 南方系の土・レンガ壁

「空斗」レンガ壁：レンガを壁体の外縁部のみに積んでいる作法は、「空斗」レンガ壁と呼ぶ。この作法は壁体に中空部を作るので、材料節約・重量軽減・断熱性向上・防音性向上などのメリットがある。「空斗」レンガ壁は江南地区から始め、南方特有な作法であり、東南海岸地区の、その影響を受けていた。

壁と木造フレームの分離：版築壁もレンガ壁も、北方民家において、官式建築と違い、屋根の荷重を受けている壁構造である。しかし、南方の民家は大部分、梁柱の木構造を保持して、版築壁やレンガ壁を使っても、自重しか受けなかった構造になる。もっと工夫する作法は、レンガ壁を木造フレームから完全に分離して、レンガ壁に防火性だけを保持して、二重壁構造になる。

二重壁：閩東地域には、建物の切妻壁を竹骨真壁とレンガ壁同時に使う二重壁構造があった。二重壁構造の内部には、竹骨真壁で、外部には防火のレンガ壁で、その間に、15 センチから、60 センチまでの空間を空いている。その空いている空間は屋根があり、時には、通路として利用し、二階への階段を設けた場合もある。たとえば、福州三坊七巷の住宅は、竹骨真壁と「封火山牆」の二重壁がある。寧徳市霞浦県半月里村の雷位進旧宅も、同じく竹骨真壁と「封火山牆」の二重壁があって、二つの壁の間に、二階への階段を設ける。二重壁構造は、レンガ壁防火性良いの特徴を利用したが、結露しやすいので、住む空間から離して、もう一段の竹骨真壁を設ける。こういう工夫は閩東の人々の智慧を反映する。



図 3.35 「空斗」レンガ防火壁と真壁の二重壁構造

3.2.3 壁構造の地域性

表 3.8 にある各類型の省略表現は以下の通りである。版築壁は「土」、版築壁の中、[切妻] 作法は「土-1」、[封火山牆] 作法は「土-2」。真壁は「真」、板壁は「板」、レンガ壁は「レ」。レンガ壁の中、[切妻] 作法は「レ-1」、[封火山牆] 作法は「レ-2」、石壁は「石」

¹¹⁸ 戴志堅『福建民居』前注と同じ、第 143 頁

¹¹⁹ 戴志堅『福建民居』前注と同じ、第 136 頁

不明や未調査のは「-」である。

表 3.8 地域別壁構造各類型の一覧

地域	番号	事例	年代	類型	番号	事例	年代	類型
閩東地域	001	福州埕宅	-	土-2	002	福州揚岐遊宅	民国	レ-2
	003	福州宮巷劉宅	-	レ-2	004	福州ある住宅	-	レ-2
	005	永泰李宅	-	レ-2	006	古田松台ある住宅	-	土-2
	007	古田張宅	-	レ-2	008	古田利洋花厝	-	レ-2
	009	古田沽洋陳宅	-	レ-2	010	古田吳厝里ある住宅	-	レ-2
	011	古田鳳埔ある住宅	-	レ-2	012	古田于宅	-	レ-2
	013	福安茜洋橋頭ある住宅	-	土-1	014	閩清東城厝	-	土-2
	015	福安楼下保合太和宅	-	土-2	016	福安楼下両兄弟住宅	-	土-2
	017	福安楼下王炳忠宅	-	土-2	018	福州宮巷沈宅	明末	レ-2
	019	福州文儒坊陳宅	清	レ-2	020	福州衣錦坊歐陽宅	1890	レ-2
	021	福鼎白琳洋里大厝	1745	真	022	閩清坂東岐廬	1853	土-1
	023	寧徳霍童下街陳宅	清中期	レ-2	024	寧徳霍童黄宅	清中期	レ-2
	025	寧徳霍童下街 72 号	清中期	土-1	026	霞浦半月里雷世儒宅	1848	レ-2
	027	霞浦半月里雷位進宅	清中期	レ-2	028	福安坦洋王宅	清末	レ-2
	029	福安坦洋郭宅	清末	レ-2	030	福安坦洋胡宅	清末	レ-2
	031	福安廉村就日瞻雲宅	清中期	レ-2	032	福安廉村甲算延齡宅	清末	レ-2
	033	尤溪桂峰樓坪序大厝	清初期	真	034	尤溪桂峰後門山大厝	明末	真
	035	尤溪桂峰後門嶺大厝	1747	真	036	福清一都東閩砦	1736	土-1
	037	閩清ある住宅	-	レ-2	038	閩清宏琳厝	1795	レ-2
	039	尤溪ある農家	-	板	040	羅源梧桐五魚厝	清初期	板
	041	羅源梧桐水仙閣	清	真	042	羅源梧桐孔照厝	清	真
莆仙地域	043	羅源梧桐旗竿里	民国	レ-1	044	周寧浦源鄭宅	清末	土-1
	045	屏南漈頭張宅	清	土-1	046	屏南漈下甘宅	明末	土-1
	047	屏南漈下ある住宅	明末	板	048	尤溪桂峰蔡宅	清	真
	049	永泰嵩口ある住宅	1768	真	050	福鼎西陽陳宅	-	真
	051	涵江林宅	1940	レ-1	052	莆田江口ある住宅	-	レ-1
閩南地域	053	仙遊陳宅	明末	レ-1	054	仙遊榜頭仙水大庁	1446	レ-1
	055	涵江江口余宅	-	レ-1	056	仙遊仙華陳宅	-	土-1
	057	仙遊楓亭陳和發宅	-	土-1	058	仙遊坂頭鴛鴦大厝	1911	レ-1
	059	莆田大宗伯邸	1592	レ-1				
	060	永春鄭宅	1910	レ-1	061	漳平上桂林黄宅	清中期	レ-1
閩南地域	062	漳平下桂林劉宅	清	レ-1	063	泉州吳宅	清中期	レ-1
	064	泉州蔡宅	1904	レ-1	065	泉州ある住宅	-	レ-1
	066	泉州黄宅	-	レ-1	067	晉江青陽庄宅	1934	レ-1
	068	晉江ある住宅	-	レ-1	069	晉江大倫蔡宅	-	レ-1
	070	集美陳宅	-	レ-1	071	集美陳氏住宅	-	レ-2
	072	漳州南門ある住宅	-	レ-1	073	龍岩新邱厝	1888	レ-1
	074	泉州亭店楊阿苗宅	1894	レ-1	075	南安官橋蔡資深宅	清	レ-1

	076	泉州泉港黄素石楼	1741	石	077	南安石井中憲邸	1728	レ-1
	078	漳浦湖西藍廷珍宅	清中期	レ-1	079	漳州官園蔡竹禪宅	清中期	レ-1
	080	アモイコロンス大夫邸	1796	レ-2	081	漳浦湖西趙家堡	明末	レ-1
	082	德化碩傑大興堡	1722	土-1	083	華安岱山齊雲樓	1862	土-1
	084	華安大地二宜樓	1740	土-1	085	漳浦深土錦江樓	1791	土-1
	086	晉江石獅鎮ある住宅	-	レ-1	087	晉江大倫郷ある住宅	-	レ-1
	088	龍岩適中太和樓	-	土-1	089	龍岩毛主席旧居	-	レ-1
	090	龍岩適中典常樓	1784	土-1	091	南安溪内村土樓	清末	土-1
	092	南安炉中村土樓	1857	土-1	093	南安溪南映峰樓	明末	土-1
	094	南安溪橋聚奎樓	清中期	石	095	南安溪前慶慶樓	清	土-1
閩 中 地 域	096	安溪戒子德美樓	民国	土-1	097	安溪山後村土樓	清	土-1
	098	安溪戒子聯芳樓	清末	土-1	099	德化承澤黃宅	民国	真
	100	德化格頭連氏祖厝	1508	真				
	101	永安西洋邢宅	-	土-1	102	三明莘口陳宅	-	-
	103	三明魏宅	民国	真	104	三明列西羅宅	-	-
	105	三明列西吳宅	-	真	106	永安小陶ある住宅	-	-
閩 西 客 家 地 域	107	永安安貞堡	1885	土-1	108	沙縣茶壠峽孝子坊	1829	レ-1
	109	三元シンロ松慶堡	清中期	土-1	110	沙縣建国路東巷 29 号	清末	土-1
	111	沙縣東大路 72 号	清末	レ-2	112	永安貢川機垣楊公祠	1778	レ-2
	113	永安貢川金魚堂	1624	レ-1	114	永安貢川嚴進士宅	明末	真
	115	永安福庄ある住宅	-	土-1	116	永安青水東興堂	1810	真
	117	上杭古田八甲廖宅	-	-	118	新泉張宅	-	レ-1
閩 北	119	新泉芷溪黃宅	-	レ-1	120	新泉張氏住宅	-	レ-1
	121	新泉望雲草堂	-	レ-1	122	連城チュ溪羅宅	-	-
	123	長汀洪家巷羅宅	-	レ-2	124	長汀新耕別荘	-	板
	125	上杭古田張宅	-	-	126	連城培田双善堂	清中期	-
	127	連城培田敦樸堂	-	レ-1	128	連城培田双灼堂	清末	レ-1
	129	連城培田繼述堂	1829	レ-1	130	連城培田濟美堂	清末	レ-1
	131	南靖石橋村永安樓	16 世紀	土-1	132	南靖石橋村昭德樓	-	土-1
	133	南靖石橋村長藍樓	清	土-1	134	南靖石橋村逢源樓	-	土-1
	135	南靖石橋村振德樓	-	土-1	136	南靖石橋村順裕樓	1927	土-1
	137	南靖田螺坑步雲樓	清初期	土-1	138	南靖梅林和貴樓	1926	土-1
	139	平和西安西爽樓	1679	土-1	140	永定高陂遺經樓	1806	土-1
	141	永定高北承啓樓	1709	土-1	142	永定湖坑振成樓	1912	土-1
	143	平和蘆溪厥寧樓	1720	土-1	144	南靖梅林懷遠樓	1909	土-1
	145	永定高陂大夫邸	1828	土-1	146	永定洪坑福裕樓	1880	土-1
	147	連城培田官庁	明末	レ-1	148	連城培田都クン府	-	-
	149	連城芷溪集鱸堂	清初期	レ-1	150	連城芷溪凝禧堂	清末	レ-1
	151	連城芷溪紹德堂	清中期	レ-1	152	連城芷溪培蘭堂	清末	レ-1
	153	連城芷溪雲山房	清末	レ-1	154	永定撫市ある住宅	-	土-1
	155	永定鵲嶺村長福樓	民国	土-1				
閩 北	156	建甌伍石村馮宅	-	レ-1	157	建甌朱宅	-	レ-1
	158	浦城中坊葉氏住宅	-	土-2	159	浦城上坊葉氏大厝	清	土-2

地域	160	浦城観前饒加年宅	-	土-2	161	浦城観前余天孫宅	-	レ-2
	162	浦城観前余有蓮宅	-	土-2	163	浦城観前張宅	-	レ-2
	164	武夷山下梅鄒邸	1754	レ-2	165	武夷山下梅儒学正堂	清中期	レ-2
	166	武夷山下梅参軍邸	清中期	レ-2	167	崇安郊区藍湯応宅	-	土-1
	168	南平洛洋村ある住宅	-	-	169	邵武中書邸	明末	レ-2
	170	邵武和平廖氏大夫邸	清末	レ-2	171	邵武金坑儒林郎邸	1632	レ-2
	172	邵武金坑 16 号李宅	-	レ-2	173	邵武金坑中翰邸	-	レ-2
	174	邵武大埠岡中翰邸	-	レ-2	175	邵武和平李氏大夫邸	清末	レ-2
	176	寧化安遠ある住宅	-	-	177	建寧丁宅	-	-
	178	泰寧尚書邸	明末	レ-2	179	光澤崇仁裘宅	明末	レ-2
広東潮汕地域	180	光澤崇仁ゴン氏宅	明末	レ-2	181	邵武和平黄氏大夫邸	明	レ-2
	182	潮州弘農旧家	-	-	183	揭陽新亨北良ある住宅	-	-
	184	潮陽棉城ある住宅	-	-	185	棉城義立庁ある住宅	-	-
	186	揭陽錫西郷ある住宅	-	-	187	潮州許氏邸	伝説宋	土-2
	188	潮州三達尊黄府	明末	土-2	189	潮陽桃溪図庫	-	-
	190	普寧洪陽新砦	-	-	191	潮安坑門郷揚厝砦	-	土-2
	192	潮安象埔砦	伝説宋	土-2	193	潮州辜厝巷王宅	-	-
	194	潮州王厝饒宅	-	土-2	195	普寧泥溝ある住宅	-	-
	196	澄海城関安慶巷ある住宅	-	-	197	潮州梨花夢処書齋	清末	-
	198	澄海樟林ある住宅	-	-				
浙東地域	199	寧波張煌言旧居	-	-	200	寧波庄市鎮葛宅	-	-
	201	庄市鎮大樹下ある住宅	-	-	202	奉化岩頭毛氏旧居	-	レ-2
	203	寧波走馬塘老流房	-	レ-2	204	慈城甲第世家	明末	レ-2
	205	慈溪龍山鎮天叙堂	1929	レ-2	206	諸暨斯宅斯盛居	清中期	レ-2
	207	諸暨斯宅癸祥居	1790	レ-2	208	諸暨斯宅華国公別荘	-	-
	209	天台妙山巷懷徳楼	-	レ-1	210	天台城関茂宝堂	-	-
	211	天台城関張文郁宅	明末	-	212	天台街頭余氏住宅	-	-
	213	紹興倉橋直街施宅	-	レ-2	214	紹興題扇橋ある住宅	-	真
	215	紹興下大路陳宅	-	真	216	鄞県鄞江鎮陳宅	-	板
	217	黄岩黄土鎮虞宅	-	板	218	黄岩天長街ある住宅	-	真
	219	天台来紫楼	清	レ-1	220	寧波月湖中営巷張宅	清	レ-1
	221	寧波月湖天一巷劉宅	民国	レ-1	222	寧波月湖青石街関宅	清	レ-2
	223	寧波月湖青石街張宅	清	レ-1	224	黄岩司庁巷汪宅	民国	レ-2
	225	黄岩司庁巷 16 号張宅	清末	板	226	黄岩司庁巷 32 号洪宅	清	真
浙南地域	227	永嘉ダイ頭陳宅	清末	真	228	泰順上洪黄宅	-	真
	229	平陽順溪戸侯邸	清	真	230	平陽騰蛟蘇宅	民国	板
	231	永嘉芙蓉村北甲宅	-	板	232	永嘉芙蓉村北乙宅	-	板
	233	永嘉水雲十五間宅	清末	-	234	永嘉花壇「宋宅」	伝説宋	板
	235	永嘉ダイ頭松風水月宅	清	レ-1	236	永嘉蓬溪村謝宅	-	板
	237	永嘉林坑毛歩松宅	-	板	238	永嘉東占坳黄宅	-	真
	239	景寧小佐巖宅	民国	板	240	景寧桃源ある住宅	清	板
	241	文成梧溪富宅	清末	板	242	永嘉林坑ある住宅	-	真
	243	永嘉ダイ頭陳賢楼宅	清	真	244	樂清黄檀洞ある住宅	-	石

	245	平陽坡南黄宅	清	-	246	平陽青街李宅	清	板
	247	蒼南碗窯朱宅	清	真	248	泰順百福岩周宅	清	真
浙 西 地 域	249	龍遊丁家ある住宅	-	-	250	龍遊若塘丁宅	-	-
	251	龍遊脈元ゴン宅	-	レ-2	252	蘭溪長楽村望雲楼	明	レ-2
	253	龍遊溪口傳家大院	-	-	254	松陽望松黄家大院	-	レ-2
	255	江山廿八都丁家大院	-	レ-2	256	江山廿八都楊宅	-	レ-2
	257	松陽李坑村 46 号	-	レ-1	258	衢州峡口徐開校宅	1910	レ-2
	259	衢州峡口徐瑞陽宅	清末	レ-2	260	衢州峡口徐文金宅	-	レ-2
	261	衢州峡口鄭百万宅	清	レ-2	262	衢州峡口劉文貴宅	清	レ-2
	263	衢州峡口周樹根宅	民国	レ-2	264	衢州峡口周朝柱宅	民国	レ-2
	265	遂昌王村口ある住宅	-	レ-1				
浙 中 地 域	266	東陽白坦鄉務本堂	清	レ-2	267	東陽史家庄花庁	-	レ-2
	268	武義ユ源声遠堂	明末	レ-2	269	武義郭洞燕翼堂	-	レ-2
	270	磐安樺溪余慶堂	-	-	271	縉雲河陽循規映月宅	-	-
	272	縉雲河陽廉讓之間宅	-	-	273	東陽黄田ハン前台門	-	-
	274	義烏雅端容安堂	-	-	275	金華雅ハン七家庁	明	レ-2
	276	東陽紫薇山尚書邸	明末	レ-2	277	東陽六石鎮肇慶堂	明	-
	278	武義ユ源裕後堂	1785	レ-2	279	武義ユ源上万春堂	-	レ-2
	280	東陽湖溪鎮馬上橋花庁	清	-	281	東陽盧宅	明	-
	282	浦江鄭氏義門	清	-	283	建德新葉花萼堂	明	レ-2
	284	建德新葉種德堂	民国	レ-2	285	建德新葉是亦居	民国	レ-2
	286	武義ユ源玉潤珠輝宅	-	レ-2	287	武義郭洞新屋里宅	明末	レ-2
	288	武義郭上萃華堂	-	レ-2	289	武義郭下慎德堂	-	レ-2
	290	東陽巍山鎮趙宅	-	板	291	東陽水閣庄葉宅	-	レ-2
	292	東陽城西街杜宅	-	レ-2	293	縉雲河陽朱宅	清	レ-2

表 3.9 地域別壁構造各類型の使用率

	土-1	土-2	真	板	レ-1	レ-2	石
閩東	7/50	6/50	9/50	3/50	1/50	24/50	2/41
莆仙	2/9				7/9		
閩南	13/41		2/41		22/41	2/41	
閩中	5/13		4/13		2/13	2/13	
閩西	18/34			1/34	14/34	1/34	
閩北	1/23	4/23			2/23	16/23	
潮汕		5/5					1/20
浙東			4/21	3/21	5/21	9/21	
浙南			8/20	10/20	1/20		
浙西					2/14	12/14	
浙中				1/19		18/19	

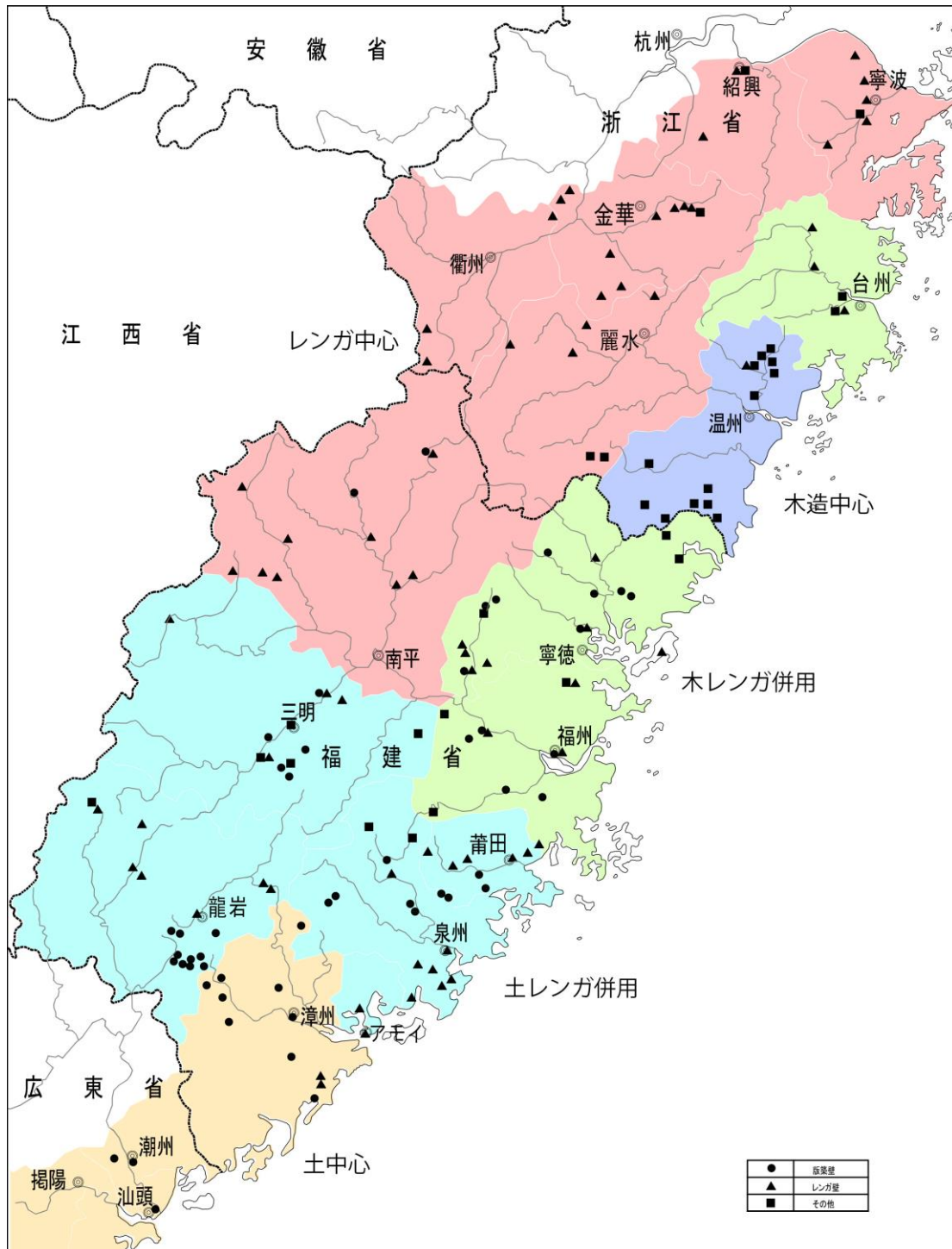


図 3.36 外壁構造の地域分布

現在の東南海岸地区で、土やレンガの壁構造が主流である。しかし、注意すべきは伝統的民家における真壁と板壁の分布である。閩東と浙南における真壁と板壁の比率は高く、そして浙東と閩中もすこし真壁と板壁構造が残る。最後の莆仙・潮汕・浙西などの地域は、全部土やレンガ壁構造で、真壁と板壁構造が余り存在していなく、おそらく本来から木質壁の構造はなかった。

そして、土の版築壁について、福建は浙江より多く使用する。閩東→閩中→閩南→閩西の順に、版築壁の使用率は高くなる。最後のレンガ壁について、浙江の方がよく使用する。

閩東→閩北→浙西→浙中の順に、レンガ壁の使用率は高くなる。

つまり、東南海岸地区民家の壁構造分布によると、浙江 - 閩北のレンガ壁区、広東 - 閩西南の版築土壁区、浙東・浙南・閩東の木造壁区という区分が認められる。

3.3 軒

木造の建物は、風雨による木質部材の腐食を防ぐため、軒出の確保が必要である。深い軒出を創出するためには優秀な軒構造が重要で、古人が様々な技術を利用して、軒出を実現してきた。同時に、軒は正面において一番目に留まる部分なので、軒部には装飾集中する。故に、軒出の構造が伝統木造建物の一重要なものといえる。千年における変化・発展によって、官式の建築は、斗拱作法を中心として、軒部構造を展開した。民間のほうは、様々な面白い軒部作法が出てくる。今、東南海岸地区民家の中に残る軒出の構造は、主に吊束・方杖・組物（斗拱と挿肘木）・コーベル・出桁などである。

東南海岸地区伝統民家の軒部にはいろいろな作法があり、様々な技術と建築意匠が現れる。これらの構造作法の中には、広範囲に使われてるものがある一方で、一定の地域だけに集中しているものもある。そして違う構造が通時的（diachronic）な特徴と共時的（synchronic）な特徴として同時に現れることも認められる。このように東南海岸地区民家の軒部構造の検討は難しいが、とても重要である。

3.3.1 吊束

出桁の下に、地面に達しない短柱があり、この短柱は本論で「吊束」と名付ける。吊束は軒の荷重を受けると共に、装飾も常に付いている。装飾が付いた吊束が「垂花柱」で、北方系合院住宅の中によく見る。福建方言では、一般的に吊束を「吊筒」と呼ぶ。「吊筒」の下端がしばしば花かごや蓮の花のように彫刻されているから、「吊籃」（吊り花かごの意味）とも呼ばれる。

A、「垂花柱」型：

「垂花柱」の作法は中国の木造建築のなかによく見る作法である。しかし、地方によって、「垂花柱」の機能は異なる。張力智氏は中国の「垂花柱」の機能を研究して、六つの種類にまとめる¹²⁰：①中国北方合院住宅中門の前軒装飾で、「垂花門」とも呼ばれる。②北方合院住宅照壁の装飾。③仏教建築の厨子・経蔵・塔などの中の装飾。④木造建物柱抜きの際、柱抜きの位置に「垂花柱」を採用する。⑤中国西南地方の木楼の片持ち梁の先端に「垂花柱」がある。⑥閩南木造建築の軒部の装飾、である。

「垂花柱」の作法はよく見るとはいえ、軒部の構造としては東南海岸地区、特に閩南地域の特徴である。たとえば泉州市亭店の楊阿苗宅の大門の「垂花柱」は、装飾性を強化するため異常に太くなる。さらに、細かい彫刻の模様も付いている。福州市内三坊七巷の劉賢齊旧宅（3番）の主屋後ろ軒構造も「垂花柱」の作法である。劉宅の「垂花柱」構造は代表的な構造で、全体には、側柱・「垂花柱」と二つの穿（貫）が四角形の枠になり、軒を支える。上部の穿は建物の内部を貫き、主要な構造材となる。下部の穿の断面が細いので、主体を安定させる補強材である。もう一つの例は永安市槐南の安貞堡（107番）である。安貞堡は当地の紳士池占瑞・池連貫父子が清光緒十一年（1885年）に建造し始め、14年後に竣工する。安貞堡は大型の囲屋住宅であるから、軒出の構造もさまざまである。でも基本的には「垂花柱」の作法である。回りの囲みの建物は、劉宅と近い四角形の枠の「垂花柱」構造を利用して。面白いのは、劉宅と異なり、安貞堡の「垂花柱」構造の下部の穿

¹²⁰ 張力智「垂花柱小史」『中国建築史論叢刊・第九輯』清華大学出版社、2014

は室内まで貫く、構造材で、上部の穿は連結の補強材である。



図 3.37 「垂花柱」構造（左は劉宅、右は安貞堡）

「垂花柱」の安定性を守るため、出てくる穿の下に、時には挿肘木や方杖などの補強構造を備える。たとえば温州市平陽県騰蛟の蘇歩青旧宅（230 番）の後ろ軒構造は、「垂花柱」と方杖の組合せである。こういう「垂花柱」構造は、本格的な「垂花柱」構造下部の穿を方杖に変わる。同じ作法は、平陽県青街の住宅にも見られる

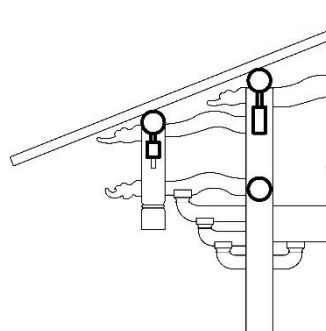


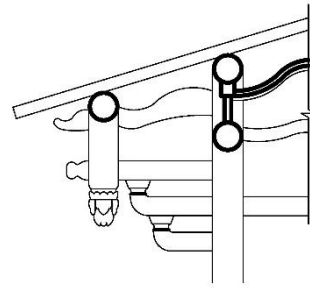
図 3.38 「垂花柱」と方杖の混合的作法（左は騰蛟、右は青街）

「垂花柱」と挿肘木の組合せは、広い範囲で使う。たとえば三明市尤溪県桂峰村の蔡氏祖廟は、宋元から建造し始め、清乾隆五十五年（1790 年）六月廿二日の夜焼失し、現存遺構は翌年再建したものである。蔡氏祖廟主屋一階の前軒の構造は、代表的な「垂花柱」と挿肘木の組合せである。全体が上下两部分に分かれて、上部は、前述の本格的な「垂花柱」の四角形構造、下部は、全体構造の安定を補強しなおかつ、軒構造の高さを増加し、より雄大に見せるため、三手先挿肘木を利用する。前述の安貞堡の主屋の軒出構造も「垂花柱」と挿肘木の組合せである。そして、構造の安定性のため、挿肘木第二層の肘木の後ろが室内に貫く。



蔡氏祖廟主屋一階の前軒





安貞堡の主屋一階の前軒

図 3.39 「垂花柱」と挿肘木の混合的作法

B、「束」型：

吊束の下に何の装飾もなく、穿の上に乗っているだけでの構造を、ここでは「束」型と称する。一般的には「束」型構造は主屋の側面・後面や付属建物に使用し、原始的で、簡単な作法である。たとえば泉州市德化县格頭村連氏祖厝の側面と両脇の裳階に、「束」型構造を使用する。福州三坊七巷の住宅も、主屋の背面軒に簡単な束を使う。「束」型構造は、装飾はないとはいえ、構造の物理原理は本格的な「垂花柱」構造と同じである。ただし、「束」型の構造は時々安定性のための補強材も省略し、一本の穿だけ吊束と連結する。



格頭村連氏祖厝



福州三坊七巷の住宅

図 3.40 「束」型構造

3.3.2 斗栱と挿肘木

(1) 斗栱

一般的に、斗栱は唐宋以後に成熟した一定の仕様の小さな木材から組み立てる軒支えの装置である。東南海岸地区の斗栱は、官式建築の斗栱と似ているが、構法がより柔軟で、いろいろな変形がある。中国古代建築には、斗栱を使うことが政府から制限され、民間人は出組以上の複雑な斗栱の使用は禁止されていた。しかし、東南海岸地区には中国政治の中心から遠く離れ、基本的にこの制限を無視しており、複雑な構造の斗栱がたくさんある。

浙東の寧波市辺りの斗栱はまだ簡易で、肘木を前に出すことがない。一般的な斗栱は出組なので、桁行方向は二重秤肘木である。面白いのは、寧波の斗栱の大斗はほとんど円形で、正統な方形の大斗ではない。

寧波の南の台州市や温州市に行くと、斗栱がもっと複雑になる。たとえば黄岩区司庁巷32号の洪宅は二手先斗栱を利用する。温州辺りでは二手先斗栱はごく一般的である。



台州黄岩区司斤巷 32 号の洪宅¹²¹



温州平陽坡南のある住宅



温州蒼南碗窯の朱宅



温州平陽の蘇歩青旧宅

図 3.41 斗拱作法

(2) 挿肘木

中国の文献の中で挿肘木に直接対応する言葉はなく、ここでは仮に「挿拱」と呼ぶ。「挿拱」は、『中国营造学社彙刊』第三卷第三期（梁思成訳、1932 年）における田辺泰「大唐五山諸堂図考」説明文「第十一図為靈隠鼓台、其上層使用挿拱」が初出で、日本の研究事例から訳した言葉である。¹²²

挿肘木構法は三つの類型に分けることが出来る。第一類型は標準型の挿肘木（類型イ）である。これは「柱に挿入され積み重なる」肘木挿肘木の定義にもっとも相応しい類型で、肘木を三本出し、斗も三つで軒を支えるのが標準である。すなわち類型イは三手先挿肘木と言える。例えば永泰嵩口のある住宅（49 番）屏南漈下甘宅（46 番）など、側柱の外に挿肘木を三段に延ばし重ねる事により深い軒出が可能である。その三段の肘木の各先端上に斗を乗せ、一番上の斗が海老虹梁を支え、海老虹梁上に軒桁を載せる。この海老虹梁は閩東地区で「猫梁」と呼ぶ。猫がねずみを待ち伏せる姿勢に似ているからである。「猫梁」は、周寧浦源鄭宅（44 番）のように曲率の大きいものから、永泰嵩口のある住宅のように曲率の少ない場合もある。表 3.9 によると、「猫梁」は類型イに採用される場合が多いようである。

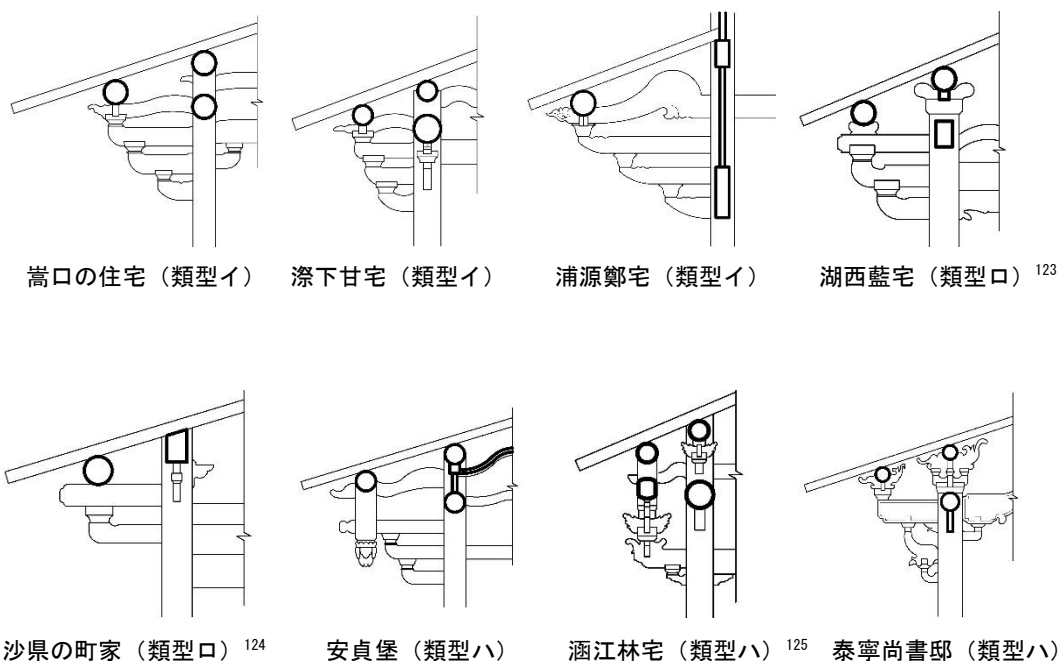
第二類型は簡素化した挿肘木（類型ロ）である。すなわち、形を少し簡素化して、二本や一本の肘木で構成する。つまり、二手先以下の挿肘木である。例えば漳浦湖西藍廷珍宅（78 番）は二手先の挿肘木だが、類型イの作法と近い。そして例沙県建国路東巷 29 号

¹²¹ 同済大学建築系伝統建築調査隊『黄岩老町建築遺産』2003、（未公開）

¹²² 訳者である梁思成の原文は「訳者注、挿拱乃重叠之拱、後端挿于柱内、非載于座斗之上、如奈良東大寺中門」で、その日本語の意味は「挿拱は積み重なる肘木であり、肘木は大斗の上に載せず、肘木尻は柱の中に挿す。奈良東大寺中門（著者注：南大門のこと）の如く」というものである。

(110 番) は、更に簡単化して、肘木と斗が一つしかいなく、海老虹梁も直線となってしまう。

最後の類型は変形した挿肘木（類型ハ）である。この類型は挿肘木と別の作法が折衷した結果、純粹の挿肘木形式を失ったといえる。具体的に変形は二種認められる。一つは挿肘木と吊束の折衷である。前述した永安市槐南の安貞堡は、吊束を利用し挿肘木の先端に載って軒桁を支えて、挿肘木は出で来た横材の安定性を守るために使われている。涵江林宅（51 番）も同じく吊束を用いて軒桁を支える形式で、類型イ、ロとは異なる。もう一種は、肘木形の変形である。もう一つの例は泰寧尚書邸（178 番）の肘木はすごく変形し装飾化している。このように、類型ハは、挿肘木構法と別の作法が同時に影響を受けた結果である可能性があり、この類型ハが存在する地域は、挿肘木構法影響圏の外辺と考えられる。



126

図 3.42 挿肘木作法



永泰嵩口



德化承澤

¹²³ 図面は戴志堅『福建民居』前注と同じ、第 143 頁より作成

¹²⁴ 図面は戴志堅『福建民居』前注と同じ、第 226 頁より作成

¹²⁵ 図面は王乃香『福建民居』中国建築工業出版社、1987、第 144 頁より作成

¹²⁶ 図面は王乃香『福建民居』中国建築工業出版社、1987、第 239 頁より作成



屏南際下



泰順百福岩

図 3.43 いろいろな挿肘木

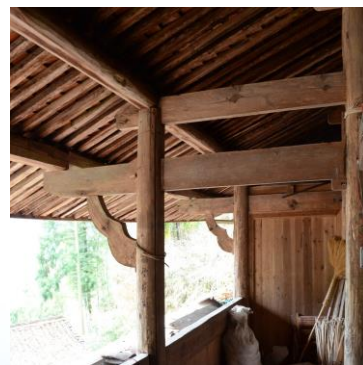
3.3.3 方杖とコーベル

(1) 方杖

斜めの部材を利用して、出桁を支える構造は、単純であり、古式と考えられる。方杖は、直線なものがある、少し曲げるものもある。



王村口ある住宅（265 番）



景寧小佐村嚴宅（239 番）

図 3.44 方杖作法

(2) コーベル

コーベルは中国語で「牛腿」と呼ぶ。牛の太ももに似てるからである。コーベルは柱頭から前へ出す直角台形の片持ち梁である。コーベル構造は、コーベルを軒支えの核心として、コーベルの上に梁を伸ばして、梁の先端の上にさらに束を立て、軒桁を支える。

コーベル構造はほとんど浙江中西部と福建の西北部に集中している。一般的には二種類がある。一つは直角台形の片持ち梁のような部材を作り、その上に彫刻している。もう一つは木材の原料を直接に獅子・鹿・仙人・鳳・松・花などの形に彫って、コーベルになる。そして、出した梁（「琴枋」と呼ぶ）も物語の彫刻をして、梁のうへの束も彫刻して「花籃（簾）柱」と呼ぶ。最後に側柱と花簾束の両側に持ち送りがあり、持ち送りも彫刻の重点である。

丁俊清の研究より、コーベルの彫刻装飾は簡単な画線から複雑な透かし彫りになってくる過程がある。明代初期のコーベルは大工が担当する構造部材であり（今のコーベルは専門の彫刻師が担当する）、装飾も簡単な画線である。明代中期に、彫刻は浅い浮き彫りになった。明末が人物・山水・動物の彫刻が出現し、清の乾隆年間になると唐草紋の龍・山水楼閣・人物物語など豊かな彫刻が現れた。¹²⁷

コーベル構造はある程度で斗栱の構造意匠を引き継ぐ。たとえば金華市東陽の史家庄花

¹²⁷ 丁俊清『浙江民居』前注と同じ、第 252 頁

桁（267 番）のコーベル構造は直角台形のコーベルがあり、「琴枋」の上に花籠束があつて、さらに上には透かし彫りの「割牽」があり、桁を支えている。側柱と花籠束の両側に、持ち送りがあり、桁の安定性を確保する。すべての部材には目まぐるしい彫刻があるが、基本的な構造特性は、斗拱と同じである。



縉雲河陽のコーベル



東陽史家庄花桁のコーベル¹²⁸

図 3.45 コーベル作法

3.3.4 その他

(1) 出桁造

軒桁造は、迫り出した梁の上に軒桁が乗っている作法である。とても簡単な構造で、余り深い軒出には向かない。出桁造は一般的には建物の側面・背面と付属建物に使用する。

ちょっと工夫をした出桁造は出梁先を彫刻している。たとえば寧徳市周寧県浦源の鄭応文旧宅の廂房の軒出は出桁造を使用する。鄭氏旧宅は二階建ての四合院であり、正房と廂房の一階の軒出は挿肘木構造で、二階の廂房の軒構造は出桁造である。注意すべきは出梁はまっすぐなものではなく、先端は下に曲がって桁を載せている。この工夫は美感を増加して、構造の安定性も増加した。

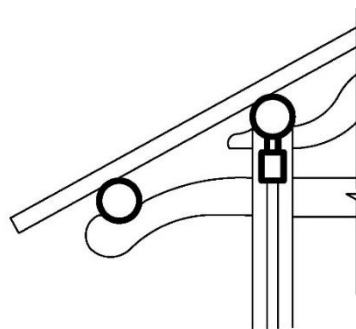
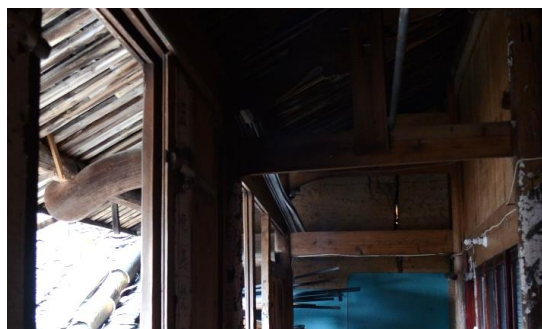


図 3.46 鄭氏旧宅の出桁造

¹²⁸ 丁俊清『浙江民居』前注と同じ、第 178 頁

(2) 軒構造なし

一般的に、小規模の民家は経済条件によって、複雑な軒出の構造を省略し、側柱の上に、軒桁が直接に載っている。福建西南部と広東潮汕地域の客家人の住宅は、よく軒出の構造を省略し、軒出も短い。たとえば龍岩市長汀県の辛耕別荘（124 番）は、二進四合院であり、主屋の周りに土塼がある。外壁材は全部板壁なので、軒構造をつかわなくて、軒桁を直接側柱のうえに乗せている。

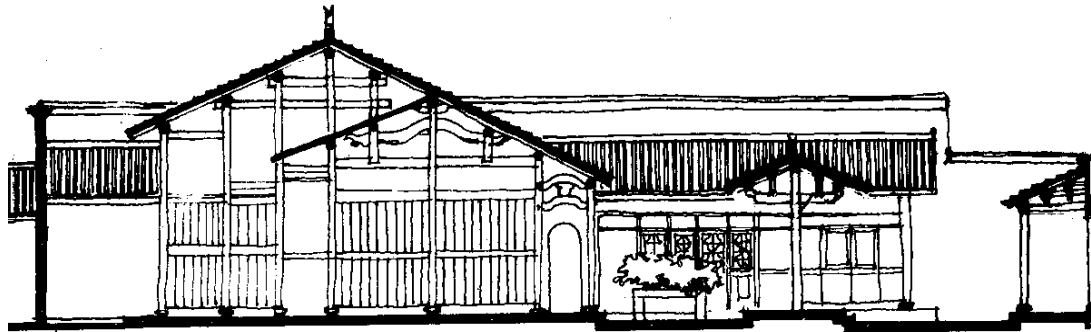


図 3.47 軒構造なしの辛耕別荘¹²⁹

3.3.5 軒構造のヒエラルキー

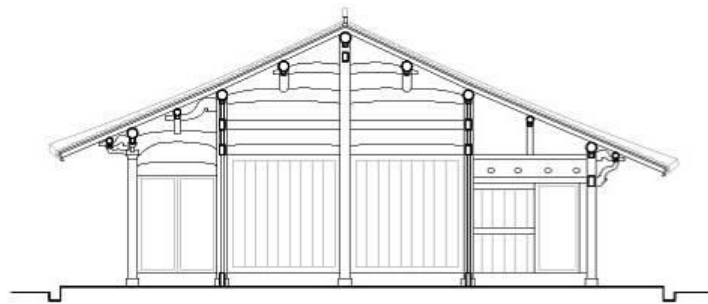
中国は階層社会である。そのため身分や地位を示すため、建築の作法も異なる。官式建築は、組物の複雑性からヒエラルキーを体現し、民間の建物も軒構造から身分や地位を体現する。しかし、民間の軒構造は地方によって、様々なヒエラルキーがある。

(1) 浙東・浙南地域の軒構造のヒエラルキー

浙東・浙南に存在している軒構造のなか、一番上品なのは斗栱である。民間において斗栱の使用は、制限されているとはいえ、裕福な人たちはできるかぎり複雑な斗栱を利用したがつている。次はコーベル構造である。コーベルは、豊かな彫刻ができるから、民間の有力者から愛用されている。最後の方杖構造は、基本的には単純な構造材となり、ランクは一番低い構造である。とはいえお金がある家は、方杖に模様を彫刻し、財力を見せびらかしている。

軒構造のヒエラルキーは、違う財力・地位の住宅において体現するだけではなく、同じ住宅の違う部位でも、違う軒構造を使い分けている。たとえば温州市平陽県騰蛟蘇歩青旧宅（230 番）の正面軒は斗栱を使用し、側面や背面の軒は方杖構造を使う。もう一つの例は台州市黄岩区司序巷の 20 号王宅である。王宅の平面は三合院＋四合院の配置で、東の廂房は改築されているが、正房の軒出は二手先の斗栱で、西の廂房の軒出は平三斗である。そして改築した東の廂房はコーベル作法を使用する。同じく司序巷の 32 号洪宅の正房と廂房の正面の軒出は全部二手先の斗栱であり、倒座房の内側軒出は方杖構造である。つまり、斗栱（二手先）＞斗栱（平三斗）≒コーベル＞方杖というのは浙東・浙南における一般的な軒構造のヒエラルキーである。

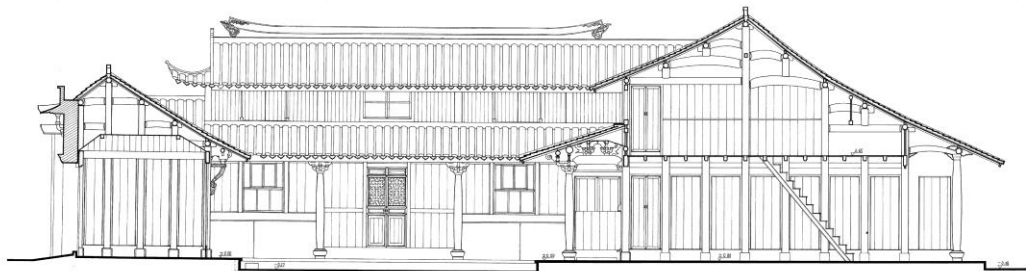
¹²⁹ 王乃香『福建民居』中国建築工業出版社、1987、第 238 頁



平陽県騰蛟蘇宅



台州市黄岩区司厅巷の20号王宅¹³⁰



司厅巷の32号洪宅¹³¹

図 3.48 浙東・浙南地域の軒構造のヒエラルキー

浙東地域には、少量の挿肘木が残っている。たとえば寧波市月湖町青石街の聞宅（222番）正房の軒出は出組の斗拱であり、廂房は挿肘木の変型を使用する。台州市黄岩区黄土嶺村の虞宅（217番）は、外側への軒出は方杖構造を利用し、中庭向きの軒出は挿肘木を利用する。つまり、挿肘木は浙東地域で方杖構造より高級で、斗拱までは及ばない軒構造である。これも浙東地域の挿肘木構造は斗拱構造に移行していくことを示唆するかもしれない。

¹³⁰ 同済大学建築系伝統建築調査隊『黄岩老町建築遺産』2003、（未公刊）

¹³¹ 同済大学建築系伝統建築調査隊『黄岩老町建築遺産』2003、（未公刊）



聞宅正房軒



聞宅廂房軒



寧波市月湖町の聞宅¹³²



台州市黄岩区黄土嶺村の虞宅¹³³

図 3.49 浙東地域に残した挿肘木構造

(2) 浙西・浙中と閩北地域の軒構造のヒエラルキー

浙西・浙中と閩北地域の軒構造のなか、一番高級なのはコーベル構造である。コーベルの彫刻と木材料の選択は、直接に世帯主の財力や身分を反映する。豊かでない家は、方杖構造を利用する。面白いのは、この地域に、住宅の中で同時にコーベルや方杖構造を使用する例はあまりない。つまり、同じ村落のなかで家の格式に応じて、コーベルや方杖構造が使い分けられている。たとえば江山市廿八都の民家は、同じく正面中庭向きの軒構造において、コーベル構造と方杖構造（図 3.41 より）を使い分ける。これは、コーベルと方杖構造の格差を反映する。

¹³² 同済大学建築系『寧波月湖歴史街区調査』未公開

¹³³ 中国建築技術発展中心建築歴史研究所『浙江民居』中国建築工業出版社、1984、第 270-273 頁



コーベルを使った民家



方杖を使った民家

図 3.50 江山市廿八都における軒構造のヒエラルキー

(3) 閩東・閩中地域の軒構造のヒエラルキー

閩東・閩中地域の軒構造のなか、挿肘木構造は一番高級なものである。挿肘木構造のなか、閩東地域で、挿肘木手先の数は家主の財力や身分を反映する。つまり三手先の挿肘木以上の挿肘木は上品なもので、二手先以下のは、やや簡素な雰囲気を感じられる。閩中地域には挿肘木と「垂花柱」の混合作法が愛用される。ランクが低い作法は吊束・出桁などの構造で、一般的に正面には使わない。

たとえば泉州市徳化県格頭村連氏祖厝は、主屋の正面軒に挿肘木を使う。両脇のまこしと側面の軒は吊束と出桁構造を利用する。また三明市尤溪県桂峰村の蔡氏祖廟である。蔡氏祖廟は大門・主屋と回廊三つの部分から構成する。主屋は二階建て、一番見やすい主屋一階の軒は挿肘木と「垂花柱」の組合せで、大門の正面軒は三手先の挿肘木で、主屋の二階は二手先の挿肘木である、そして、付属回廊と主屋の側面軒には、吊束構造を利用する。



床下の玄関



正面



正面両脇



側面

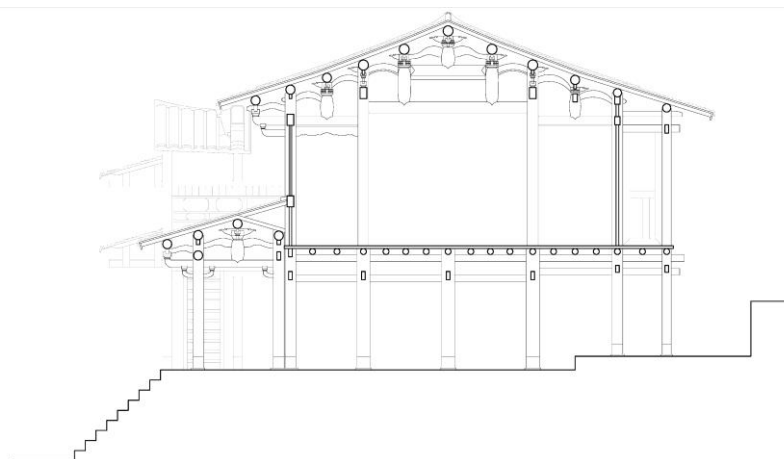


図 3.51 徳化県格頭村連氏祖厝

同じ主屋でも、部屋の地位によって、軒構造が違う場合もある。たとえば福州市永泰県嵩口のある住宅の主屋は明間に三手先の挿肘木を使い、次間の軒は吊束構造である。

閩中地域の民家は挿肘木より「垂花柱」の形式をもっとも注意する。たとえば、永安市槐南の安貞堡は内部合院と回りの囲屋とお見合わせる。囲屋は「垂花柱」構造を利用し、内部合院は挿肘木と「垂花柱」の組合構造を利用する。面白いのは、主屋明間の正面の軒には、「垂花柱」と二手先挿肘木の組合せであり、次間の正面の軒には、「垂花柱」と三手先挿肘木の組合せである。ただし、明間の「垂花柱」の彫刻はより複雑である。つまり、安貞堡には「垂花柱」の彫刻の重要性は挿肘木の複雑性より優先する。

要するに、閩東地域には、三手先以上の挿肘木⇨挿肘木と「垂花柱」の組合せ>二手先以下の挿肘木>吊束⇨出桁造りのヒエラルキーがある。閩中地域には挿肘木と「垂花柱」の組合せ>挿肘木>「垂花柱」>吊束⇨出桁造りのヒエラルキーがある。



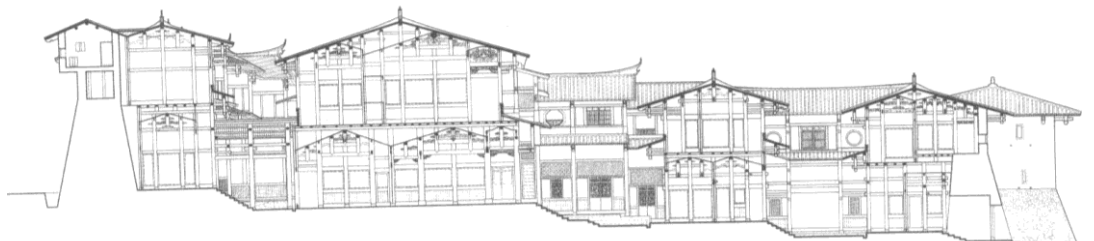
第一進の前庭



第二進の主屋と廂房



城壁と囲屋



断面図¹³⁴

図 3.52 安貞堡による軒構造のヒエラルキー

¹³⁴ 李秋香『福建民居』前注と同じ、第 201 頁

(4) 莆仙・閩南と客家地域の軒構造のヒエラルキー

莆仙・閩南と客家地域の軒構造のなか、最も愛用されるのは、「垂花柱」構造であり、次は挿肘木である。簡素な作法は出桁造りで、あるいは、軒構造を使わない。この軒構造のヒエラルキーを反映した代表的な例は龍岩市連城県芷溪村の凝禧堂（150 番）である。凝禧堂は清光緒年間（1871～1908 年）に建造され、平面配置は四進三間の四合院である。中軸には倒座・埕（にわ）・下庁・大庁・後庁がある。断面図より、倒座から後庁まで、建物の高さは順序に高くなり、後庁（祖堂）の地位を示す。面白いのは、各建物の軒構造も違う。倒座は軒構造なしで、下庁の前後軒は出桁造りである。そして大庁の前の軒は挿肘木構造の変型であり、後ろの軒は出桁造りである。最後の後庁の正面は、「垂花柱」構造を使用する。見えない後庁の後ろの軒はレンガ壁で軒構造なしである。

つまり福建南部には「垂花柱」構造＞挿肘木構造＞出桁造り＞軒構造なしというヒエラルキーがある。

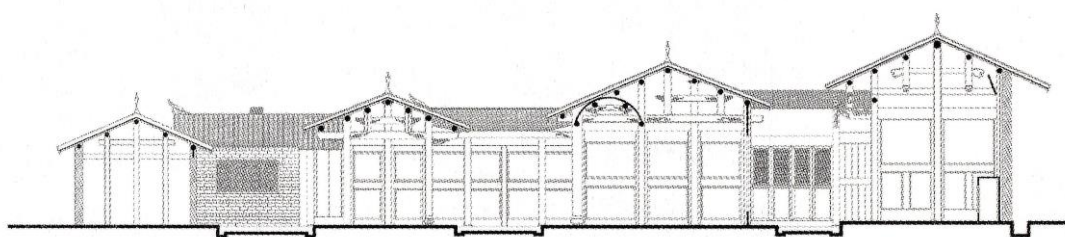


図 3.53 凝禧堂の断面図¹³⁵

3.3.6 軒構造の地域性

表 3.10 にある各類型の省略表現は以下の通りである。軒部構造において、挿肘木構造は「挿」、その中三手先以上の挿し肘木（類型イ）は「挿-1」、二手先挿肘木（類型ロ）は「挿-2」、挿肘木の変形は「挿-3」。斗拱作法は「拱」。吊束作法は「束」、その中、普通の吊束作法は「束-1」、垂花柱作法は「束-2」、吊束と挿肘木の混合形は「束-3」。コーベル作法は「コ」。方杖作法は「方」。出桁造は「出」。軒部構造がないのは「無」、不明や未調査のは「-」である。

表 3.10 地域別軒構造の各類型一覧

地域	番号	事例	年代	表	裏	番号	事例	年代	表	裏
閩東地域	001	福州埕宅	-	挿-1	挿-1	002	福州揚岐遊宅	民国	出	無
	003	福州宮巷劉宅	-	束-2	出	004	福州ある住宅	-	挿-1	挿-1
	005	永泰李宅	-	-	-	006	古田松台ある住宅	-	-	-
	007	古田張宅	-	-	-	008	古田利洋花厝	-	束-2	無
	009	古田沽洋陳宅	-	挿-1	挿-2	010	古田吳厝里ある住宅	-	-	-
	011	古田鳳埔ある住宅	-	-	-	012	古田于宅	-	挿-1	無
	013	茜洋橋頭ある住宅	-	-	-	014	閩清東城厝	-	束-3	挿-1
	015	楼下保合太和宅	-	挿-1	出	016	福安楼下両兄弟住宅	-	-	-
	017	福安楼下王炳忠宅	-	挿-1	束-2	018	福州宮巷沈宅	明末	挿-1	出

¹³⁵ 戴志堅『福建民居』前注と同じ、第 261 頁

	019	福州文儒坊陳宅	清	-	-	020	福州衣錦坊歐陽宅	1890	-	-
	021	福鼎白琳洋里大厝	1745	コ	方	022	閩清坂東岐廬	1853	挿-2	-
	023	霍童下街陳宅	清中期	挿-1	挿-1	024	寧徳霍童黃宅	清中期	挿-1	挿-1
	025	霍童下街 72 号	清中期	挿-1	挿-1	026	霞浦半月里雷世儒宅	1848	挿-1	無
	027	半月里雷位進宅	清中期	挿-1	出	028	福安坦洋王宅	清末	挿-1	出
	029	福安坦洋郭宅	清末	挿-1	出	030	福安坦洋胡宅	清末	挿-1	出
	031	廉村就日瞻雲宅	清中期	挿-1	出	032	福安廉村甲算延齡宅	清末	挿-1	挿-1
	033	桂峰樓坪亨大厝	清初期	挿-1	束-1	034	尤溪桂峰後門山大厝	明末	挿-1	束-1
	035	溪桂峰後門嶺大厝	1747	挿-1	挿-2	036	福清一都東閩砦	1736	-	-
	037	閩清ある住宅	-	-	-	038	閩清宏琳厝	1795	-	-
	039	尤溪ある農家	-	-	-	040	羅源梧桐五魚厝	清初期	挿-1	出
	041	羅源梧桐水仙閣	清	挿-1	出	042	羅源梧桐孔照厝	清	挿-1	出
	043	羅源梧桐旗竿里	民国	挿-1	出	044	周寧浦源鄭宅	清末	挿-1	出
	045	屏南漈頭張宅	清	挿-1	出	046	屏南漈下甘宅	明末	挿-1	-
	047	屏南漈下ある住宅	明末	挿-2	出	048	尤溪桂峰蔡宅	清	挿-1	-
	049	永泰嵩口ある住宅	1768	挿-1	束-1	050	福鼎西陽陳宅	-	挿-1	-
莆 仙 地 域	051	涵江林宅	1940	束-3	無	052	莆田江口ある住宅	-	束-3	無
	053	仙遊陳宅	明末	束-3	無	054	仙遊榜頭仙水大庁	1446	-	-
	055	涵江江口余宅	-	束-3	無	056	仙遊仙華陳宅	-	-	-
	057	仙遊楓亭陳和發宅	-	-	-	058	仙遊坂頭鴛鴦大厝	1911	束-2	-
	059	莆田大宗伯邸	1592	-	-					
閩 南 地 域	060	永春鄭宅	1910	束-3	挿-2	061	漳平上桂林黃宅	清中期	挿-2	無
	062	漳平下桂林劉宅	清	挿-2	挿-2	063	泉州吳宅	清中期	-	-
	064	泉州蔡宅	1904	挿-1	無	065	泉州ある住宅	-	挿-2	出
	066	泉州黃宅	-	束-2	出	067	晉江青陽庄宅	1934	挿-3	束-2
	068	晉江ある住宅	-	挿-3	無	069	晉江大倫蔡宅	-	-	-
	070	集美陳宅	-	出	出	071	集美陳氏住宅	-	挿-2	無
	072	漳州南門ある住宅	-	挿-2	出	073	龍岩新邱厝	1888	挿-2	出
	074	泉州亭店楊阿苗宅	1894	挿-2	束-2	075	南安官橋蔡資深宅	清	-	-
	076	泉州泉港黃素石樓	1741	-	-	077	南安石井中憲邸	1728	-	-
	078	漳浦湖西藍廷珍宅	清中期	挿-2	束-1	079	漳州官園蔡竹禪宅	清中期	-	-
	080	アモイ大夫邸	1796	-	-	081	漳浦湖西趙家堡	明末	-	-
	082	德化碩傑大興堡	1722	-	-	083	華安岱山齊雲樓	1862	出	-
	084	華安大地二宜樓	1740	-	-	085	漳浦深土錦江樓	1791	-	-
	086	石獅鎮ある住宅	-	挿-1	無	087	晉江大倫郷ある住宅	-	挿-2	無
	088	龍岩適中太和樓	-	出	-	089	龍岩毛主席旧居	-	-	-
	090	龍岩適中典常樓	1784	束-1	出	091	南安湖内村土樓	清末	挿-2	無
	092	南安炉中村土樓	1857	挿-2	無	093	南安南厝映峰樓	明末	挿-2	無
	094	南安卜橋聚奎樓	清中期	挿-2	無	095	南安舖前慶原樓	清	挿-2	無
	096	安溪玳疋德美樓	民国	挿-2	出	097	安溪山後村土樓	清	出	出
	098	安溪玳疋聯芳樓	清末	出	出	099	德化承澤黃宅	民国	挿-1	-
	100	德化格頭連氏祖厝	1508	挿-2	束-1					
閩	101	永安西洋邢宅	-	束-3	出	102	三明莘口陳宅	-	出	出

中 地 域	103	三明魏宅	民国	-	-	104	三明列西羅宅	-	-	-
	105	三明列西呉宅	-	出	無	106	永安小陶ある住宅	-	-	-
	107	永安安貞堡	1885	束-3	束-2	108	沙県茶豊峽孝子坊	1829	-	-
	109	三元シンロ松慶堡	清中期	-	-	110	沙県建国路東巷 29 号	清末	挿-2	出
	111	沙県東大路 72 号	清末	出	出	112	永安貢川機垣楊公祠	1778	挿-3	出
	113	永安貢川金魚堂	1624	挿-1	挿-1	114	永安貢川嚴進士宅	明末	挿-1	出
	115	永安福庄ある住宅	-	-	-	116	永安青水東興堂	1810	挿-2	無
閩 西 客 家 地 域	117	上杭古田八甲廖宅	-	挿-2	束-1	118	新泉張宅	-	出	無
	119	新泉芷溪黃宅	-	挿-3	無	120	新泉張氏住宅	-	挿-3	無
	121	新泉望雲草堂	-	コ	無	122	連城テュ溪羅宅	-	-	-
	123	長汀洪家巷羅宅	-	無	無	124	長汀新耕別荘	-	無	無
	125	上杭古田張宅	-	挿-3	出	126	連城培田双善堂	清中期	-	-
	127	連城培田敦樸堂	-	コ	無	128	連城培田双灼堂	清末	コ	無
	129	連城培田繼述堂	1829	-	-	130	連城培田済美堂	清末	コ	無
	131	南靖石橋村永安樓	16 世紀	出	出	132	南靖石橋村昭德樓	-	出	出
	133	南靖石橋村長藍樓	清	出	出	134	南靖石橋村逢源樓	-	挿-2	出
	135	南靖石橋村振德樓	-	挿-2	出	136	南靖石橋村順裕樓	1927	挿-2	挿-2
	137	南靖田螺坑步雲樓	清初期	-	-	138	南靖梅林和貴樓	1926	出	出
	139	平和西安西爽樓	1679	-	-	140	永定高陂遺經樓	1806	出	出
	141	永定高北承啓樓	1709	挿-3	出	142	永定湖坑振成樓	1912	-	-
	143	平和蘆溪厥寧樓	1720	-	-	144	南靖梅林懷遠樓	1909	挿-3	出
	145	永定高陂大夫邸	1828	挿-3	出	146	永定洪坑福裕樓	1880	-	-
	147	連城培田官庁	明末	挿-3	出	148	連城培田都クン府	-	-	-
	149	連城芷溪集鱸堂	清初期	出	出	150	連城芷溪凝禧堂	清末	出	無
	151	連城芷溪紹德堂	清中期	コ	出	152	連城芷溪培蘭堂	清末	コ	無
	153	連城芷溪芥雲山房	清末	出	無	154	永定撫市ある住宅	-	挿-3	-
	155	永定鵲嶺村長福樓	民国	出	出					
閩 北 地 域	156	建瓯伍石村馮宅	-	コ	コ	157	建瓯朱宅	-	-	-
	158	浦城中坊葉氏住宅	-	出	無	159	浦城上坊葉氏大厝	清	出	無
	160	浦城觀前饒加年宅	-	出	無	161	浦城觀前余天孫宅	-	コ	出
	162	浦城觀前余有蓮宅	-	出	出	163	浦城觀前張宅	-	コ	無
	164	武夷山下梅鄒邸	1754	コ	無	165	武夷山下梅儒学正堂	清中期	コ	無
	166	武夷山下梅參軍邸	清中期	コ	無	167	崇安郊区藍湯応宅	-	-	-
	168	洛洋村ある住宅	-	挿-2	-	169	邵武中書邸	明末	挿-3	出
	170	和平廖氏大夫邸	清末	コ	出	171	邵武金坑儒林郎邸	1632	コ	出
	172	金坑 16 号李宅	-	コ	出	173	邵武金坑中翰邸	-	無	無
	174	邵武大埠岡中翰邸	-	コ	出	175	邵武和平李氏大夫邸	清末	コ	出
	176	寧化安遠ある住宅	-	-	-	177	建寧丁宅	-	挿-2	出
	178	泰寧尚書邸	明末	挿-3	無	179	光澤崇仁裘宅	明末	無	無
	180	光澤崇仁ゴン氏宅	明末	コ	出	181	邵武和平黃氏大夫邸	明	-	-
広 東 潮	182	潮州弘農旧家	-	-	-	183	新亨北良ある住宅	-	無	無
	184	潮陽棉城ある住宅	-	-	-	185	棉城義立庁ある住宅	-	出	無
	186	錫西郷ある住宅	-	無	無	187	潮州許氏邸	伝説宋	挿-3	束-1

汕 地 域	188	潮州三達尊黃府	明末	-	-	189	潮陽桃溪図庫	-	-	-
	190	普寧洪陽新砦	-	-	-	191	潮安坑門鄉揚厝砦	-	-	-
	192	潮安象埔砦	伝説宋	-	-	193	潮州辜厝巷王宅	-	-	-
	194	潮州王厝饒宅	-	-	-	195	普寧泥溝ある住宅	-	無	無
	196	澄海城関ある住宅	-	無	無	197	潮州梨花夢処書齋	清末	出	無
	198	澄海樟林ある住宅	-	無	無					
浙 東 地 域	199	寧波張煌言旧居	-	-	-	200	寧波庄市鎮葛宅	-	-	-
	201	庄市鎮ある住宅	-	-	-	202	奉化岩頭毛氏旧居	-	コ	-
	203	寧波走馬塘老流房	-	-	-	204	慈城甲第世家	明末	-	-
	205	慈溪龍山鎮天叙堂	1929	-	-	206	諸暨斯宅斯盛居	清中期	-	-
	207	諸暨斯宅癸祥居	1790	-	-	208	諸暨斯宅華国公別荘	-	-	-
	209	天台妙山巷懷德樓	-	棋	棋	210	天台城関茂宝堂	-	棋	棋
	211	天台城関張文郁宅	明末	-	-	212	天台街頭余氏住宅	-	棋	-
	213	紹興倉橋直街施宅	-	無	無	214	紹興題扇橋ある住宅	-	無	無
	215	紹興下大路陳宅	-	無	無	216	鄞縣鄞江鎮陳宅	-	無	無
	217	黄岩黄土嶺虞宅	-	挿-3	方	218	黄岩天長街ある住宅	-	方	無
	219	天台来紫樓	清	棋	無	220	寧波月湖中営巷張宅	清	棋	無
	221	月湖天一巷劉宅	民国	棋	無	222	寧波月湖青石街関宅	清	棋	無
	223	月湖青石街張宅	清	棋	挿-3	224	黄岩司庁巷汪宅	民国	棋	無
	225	司庁巷 16 号張宅	清末	棋	方	226	黄岩司庁巷 32 号洪宅	清	棋	方
浙 南 地 域	227	永嘉ダイ頭陳宅	清末	-	-	228	泰順上洪黄宅	-	挿-2	束-1
	229	平陽順溪戸侯邸	清	-	-	230	平陽騰蛟蘇宅	民国	棋	方
	231	永嘉芙蓉村北甲宅	-	棋	出	232	永嘉芙蓉村北乙宅	-	-	-
	233	永嘉水雲十五間宅	清末	-	-	234	永嘉花壇「宋宅」	伝説宋	棋	棋
	235	ダイ頭松風水月宅	清	棋	無	236	永嘉蓬溪村謝宅	-	棋	方
	237	永嘉林坑毛歩松宅	-	無	無	238	永嘉東占坳黄宅	-	棋	無
	239	景寧小佐嚴宅	民国	方	方	240	景寧桃源ある住宅	清	コ	挿-2
	241	文成梧溪富宅	清末	棋	方	242	永嘉林坑ある住宅	-	棋	無
	243	ダイ頭陳賢樓宅	清	棋	方	244	樂清黄檀洞ある住宅	-	棋	-
	245	平陽坡南黄宅	清	棋	-	246	平陽青街李宅	清	棋	方
	247	蒼南碗窯朱宅	清	棋	方	248	泰順百福岩周宅	清	挿-2	方
浙 西 地 域	249	龍遊丁家ある住宅	-	-	-	250	龍遊若塘丁宅	-	-	-
	251	龍遊脈元ゴン宅	-	-	-	252	蘭溪長楽村望雲樓	明	コ	無
	253	龍遊溪口傅家大院	-	-	-	254	松陽望松黄家大院	-	-	-
	255	廿八都丁家大院	-	コ	コ	256	江山廿八都楊宅	-	コ	-
	257	松陽李坑村 46 号	-	-	-	258	衢州峡口徐開校宅	1910	コ	無
	259	衢州峡口徐瑞陽宅	清末	方	無	260	衢州峡口徐文金宅	-	コ	無
	261	衢州峡口鄭百万宅	清	コ	無	262	衢州峡口劉文貴宅	清	無	無
	263	衢州峡口周樹根宅	民国	コ	無	264	衢州峡口周朝柱宅	民国	コ	無
	265	王村口ある住宅	-	コ	方					
浙 中 地	266	東陽白坦郷務本堂	清	コ	コ	267	東陽史家庄花庁	-	コ	無
	268	武義ユ源声遠堂	明末	コ	無	269	武義郭洞燕翼堂	-	無	無
	270	磐安樺溪余慶堂	-	-	-	271	縉雲河陽循規映月宅	-	コ	無

域	272	河陽廉讓之間宅	-	コ	無	273	東陽黃田ハン前門	-	-	-
	274	義烏雅端容安堂	-	-	-	275	金華雅ハン七家庁	明	-	-
	276	東陽紫微山尚書邸	明末	-	-	277	東陽六石鎮肇慶堂	明	-	-
	278	武義コ源裕後堂	1785	コ	無	279	武義コ源上万春堂	-	-	-
	280	東陽湖溪鎮花庁	清	-	-	281	東陽盧宅	明	栢	コ
	282	浦江鄭氏義門	清	コ	-	283	建徳新葉花萼堂	明	コ	無
	284	建徳新葉種徳堂	民国	コ	無	285	建徳新葉是亦居	民国	コ	無
	286	コ源玉潤珠輝宅	-	コ	無	287	武義郭洞新屋里宅	明末	方	無
	288	武義郭上萃華堂	-	-	-	289	武義郭下慎徳堂	-	-	-
	290	東陽巍山鎮趙宅	-	無	無	291	東陽水閣庄葉宅	-	コ	無
	292	東陽城西街杜宅	-	-	-	293	縉雲河陽朱宅	清	コ	無

表 3.11 表の軒による各類型地域分布

	挿-1	挿-2	挿-3	斗栱	束-1	束-2	束-3	コ	方杖	出桁	無
閩東	30/37	2/37				2/37	1/37	1/37		1/37	
莆仙						1/5	4/5				
閩南	3/29	16/29	2/29		1/29	1/29	1/29			5/29	
閩中	2/10	2/10	1/10				2/10			3/10	
閩西		4/30	8/30					6/30		10/30	2/30
閩北		2/22	2/22					12/22		4/22	2/22
潮汕			1/8							2/8	5/8
浙東			1/18	11/18				1/18	1/18		4/18
浙南		2/18		13/18				1/18	1/18		1/18
浙西								9/11	1/11		1/11
浙中				1/17				13/17	1/17		2/17

表 3.12 裏の軒による各類型地域分布

	挿-1	挿-2	挿-3	斗栱	束-1	束-2	束-3	コ	方杖	出桁	無
閩東	7/33	2/33			3/33	1/33			1/33	15/33	4/33
莆仙											4/4
閩南		2/26			2/26	2/26				9/26	11/26
閩中	1/10					1/10				6/10	2/10
閩西		1/29			1/29					15/29	12/29
閩北								1/21		10/21	10/21
潮汕					1/8						7/8
浙東			1/16	2/16					3/16		10/16
浙南		1/16		1/16	1/16				8/16	1/16	4/16
浙西								1/10	1/10		8/10
浙中								2/16			14/16

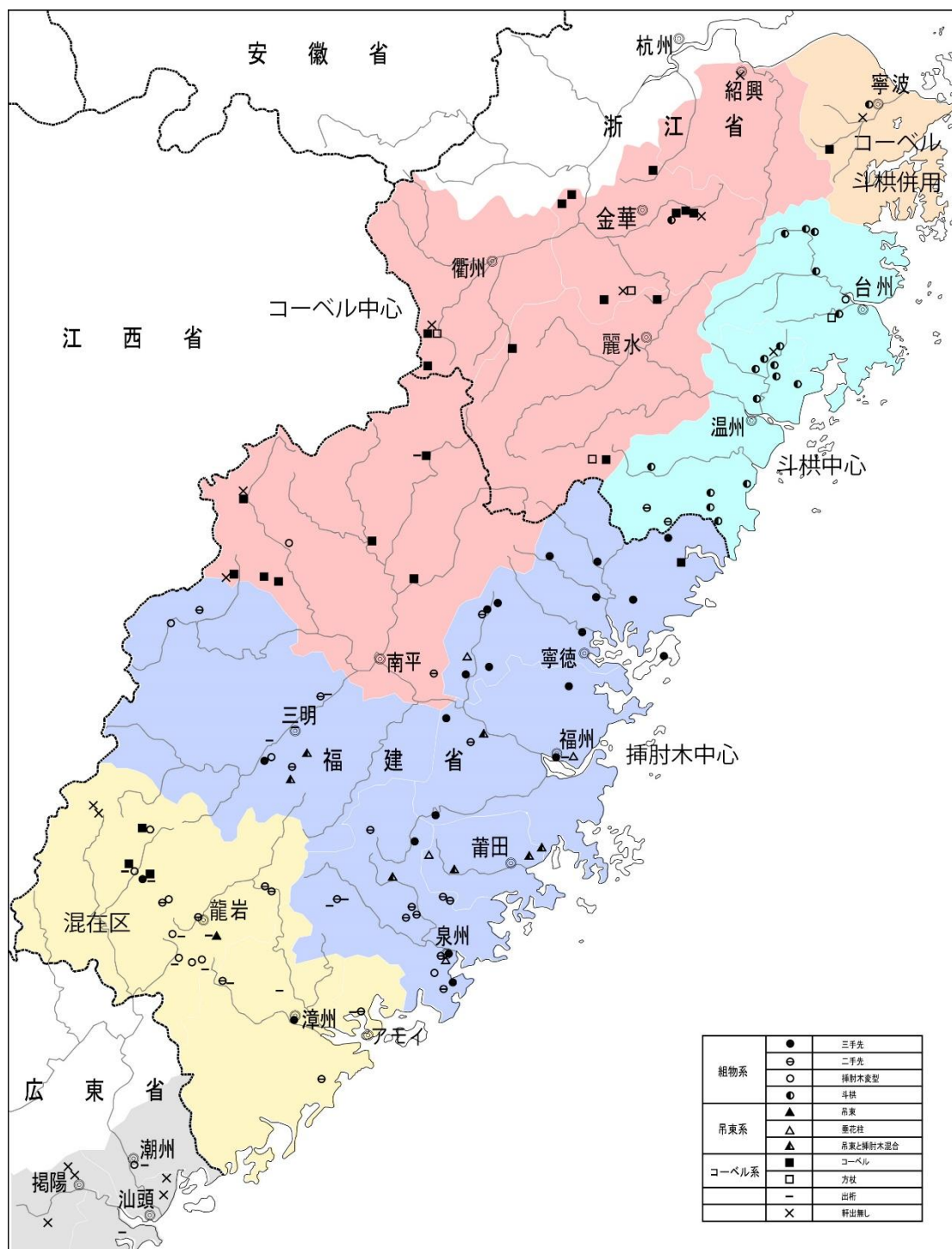


図 3.54 軒構造の地域分布

東南海岸地区の軒構造は千変万化とはいえ、その分布はある程度のルールをまもる。上述の表によると、吊東・挿肘木は福建の東部に現れる傾向があり、斗拱は浙江の東部と南部によく現れる。それに対して、コーベルは浙江中西部から、福建西南部まで広がっている。全体から見れば、東南海岸地区の軒構造は四つの区域に分けることができる：これは浙東南核心区・閩東南核心区・浙江影響区と福建影響区である。

浙東南区：浙東と浙南の寧波・台州と温州を含め、呉語を話す区域で、海岸沿いの区域である。軒構造はほとんど斗拱＋方杖であり、コーベル構造も時々ある。その中、北の寧

波辺りに、斗拱は出組しかなく、コーベル構造の数が平均以上である。南の台州と温州には、斗拱+方杖の組み合わせが多い、斗拱も二手先のような複雑な形がある。つまり、浙東南核心区の本格的な軒構造は、台州と温州にある。

閩東南区：閩東の寧徳・福州と閩南の莆田・泉州・アモイ・漳州を含め、閩語を話す区域で、海岸沿いの区域である。注意すべきのは、浙江南部福建と隣接する泰順・平陽・蒼南県の一部は、閩語を話し、閩東南核心区に属する。軒構造は吊束と挿肘木を主流として、閩東の地域には挿肘木構造が絶対な優位を持つ、閩南地域には、「垂花柱」と挿肘木が両立する。

江南影響区：東南海岸地区に属する浙江中西部の金華・衢州と閩北の南平を含めている。この地域には、北方にある長江下流の徽州・環太湖区域（江南地区）から強い影響を受けた。軒構造はコーベル構造と方杖構造が主要である。

客家影響区：福建西南部の龍岩と広東の潮汕地域の潮州・汕頭・揭陽を含めている。この地域には、客家文化からの影響が強く、大量の客家人がこの地域に集住している。土・レンガの構造を多用し、軒構造は簡単な出桁造で、多くの家は軒構造を使用しない。

（1）挿肘木構造の分布

挿肘木構法の類型も方言区と関連している。90%くらいの事例が挿肘木構法を利用する閩語閩東区は、三手先挿肘木（類型イ）が主流である（表 3.9～3.11 によると）。ここでは変形（類型ハ）は一つもない。つまり、挿肘木構法の複雑性・完全性・純粋性のいずれも高い閩東区はまさに挿肘木構法の中心地域と考えられる。

そして、挿肘木構法の影響が比較的強い閩語閩南区と閩語閩中区は、主に単純化した挿肘木（類型ロ）を主体とし、三類型が一緒に存在する。客家方言区、閩語莆仙区と江西方言区は、三手先挿肘木（類型イ）が存在せず、挿肘木構法の影響が比較的弱い地域といえる。以上により、挿肘木構法と方言による地域性との関連をまとめると、以下ようになる。まず、閩語閩東方言を話す福建東部地区（福州—寧徳）は、挿肘木構法が圧倒的地位を占め、しかも三手先挿肘木が主流である。したがって閩東地区は福建地区挿肘木構法の中心区といえる。福建の中西部と南部は、挿肘木の様々な簡素形と変形が存在し、挿肘木構法を使用しない民家もある。この閩中、閩西と閩南地区は、挿肘木構法の影響を受けていた地域といえる、この影響は、浙江省温州の南部と広東省潮汕地区まで及んでいる。これに対して閩北地区は、挿肘木構法の影響が及ばない地域である。

挿肘木構造と吊束・出桁造との関連性は、表 3.9-3.11 から分かる。挿肘木構造の分布は吊束・出桁造の分布と一致している。多くの民家は建物の違う部位で挿肘木と吊束・出桁造を同時に使う。前述の軒構造のヒエラルキーの中の例は、こういう特徴をよく体现する。

（2）斗拱構造の分布

東南海岸地区民家の中、斗拱構造は浙東・浙南地域しか普遍存在しない（他の地域には、少数の官僚の屋敷と家族の祖廟も斗拱を使用する）。具体的には寧波・台州・温州辺りであり、南に行けば行くほど斗拱構造の使用率は高い。寧波で、斗拱構造の分布は市街の金持ちの家に集中して、斗拱構造の形式は出組しかないである。そして、寧波辺りには、コーベル構造も少なくない。

台州辺りには、斗拱構造は複雑になり、使用率も高くなる。二手先の斗拱もよく使われる。しかし、台州辺りにも北方からの要素が侵入して、コーベル構造が時々ある。

浙南の温州地域は、斗拱構造はもっと普遍的である。前軒斗拱構造・後軒方杖構造の組合せも定着する。そしてコーベル構造の姿は、温州辺りでほとんど消えてしまう。浙東・

浙南地域の斗拱構造の使用は北から南へ段々増加している現象がある。これは北方江南地区の強い文化の影響を反映する。

斗拱構造と方杖構造の関連性は、浙南地区半分（8/16）の裏軒方杖使用率から見る。斗拱構造の分布も方杖の分布と一致している（浙江省に集中している）。多くの民家は建物の違う部位で斗拱と方杖を同時に使う。前述の軒構造のヒエラルキーの中の例は、こういう特徴をよく体现する。

（3）組物からの変型の分布

挿肘木変型や挿肘木と垂花柱の混合型は閩中・閩西と莆仙地域に分布する。その中に、閩西客家地域は、変型挿肘木の利用が多く、莆仙地域のほうは、挿肘木と垂花柱の混合型を愛用する。

（4）コーベル構造の分布

コーベル構造は江南影響区（浙中・浙西と閩北）に集中している。その中、浙中で 76.5%（13/17）、浙西で 9/11（81.8%）の事例がコーベルを使用して、コーベル作法は絶対的優位である。閩北も半数以上（12/22）の事例がコーベルを使用する。以上から考えると、コーベル構造は北からの影響であることが明白である。

（5）東南海岸地区軒構造の核心区域と影響範囲

閩東地域と浙南地域は軒出の組物構造の使用頻度と構法の複雑性・完全性・純粋性が相当高く、遺構において組物構造の核心区である。そして、東南海岸地区は閉鎖的な地理条件と複雑な方言系統があるとは言え、近隣地域からの影響も受けるはずで、閩東から隔たっている福建の北部、中西部と南部には、挿肘木構造が別の建築文化圏の影響を受け、様々な簡素形と変形が認められ、挿肘木構造を使用しない民家もある。そして、浙南・浙東の斗拱構造は、江南建築文化圏の影響を受け、斗拱構造のかわりに、コーベルを使用する民家もある。その中で、斗拱構造において、浙南地域は斗拱を使用した民家も多く、その影響が強いといえる。浙東地域は斗拱の使用頻度は半分以下に低下し、その影響が弱くなってくる。挿肘木構造において、閩中・閩南地域は挿肘木を使用した民家も多く、その影響が強いといえるが、簡素化や変形も少なくない。客家方言を話す閩西地区は、挿肘木の使用頻度は半分以下に低下し、その影響が弱くなってくるが、浙江省温州地区の南部と広東省潮汕地区まで分布が認められる。これに対して閩北地区（南平）は、挿肘木構造の影響が及ばない地域である。

3.3.7 軒構造の時代性考察

（1）斗拱起源の説

青銅器、石窟寺院・壁画などにみられる例によると、既に中国戦国時代には組物の原型と考えられる柱上に横材を受ける緩衝構造が確認できる。後世の斗拱は軒出を延ばすための構造で、優美な形も備えて東アジア伝統建築意匠の重要な特徴である。『礼記・礼器』の中に「山節藻梲」（唐の孔穎達注「山節，謂刻柱頭為斗拱，形如山也」）の記載は斗拱へ最も古い記録である。斗拱の起源に関しては、楊鴻勛教授は「軒出のハイレベルな構造—前後に肘木を出す斗拱は、軒出のローレベルな構造—軒を支える柱から変遷した。」楊氏は殷の遺跡などの考古学の資料・古代の文献と山東・湖北の民家の軒部の方杖構造から、下図のような斗拱起源・変遷の説をまとめる。¹³⁶

¹³⁶ 楊鴻勛「斗拱起源考察」『1980 年全国科学技術史学術会議論文集』1980、第 5-16 頁

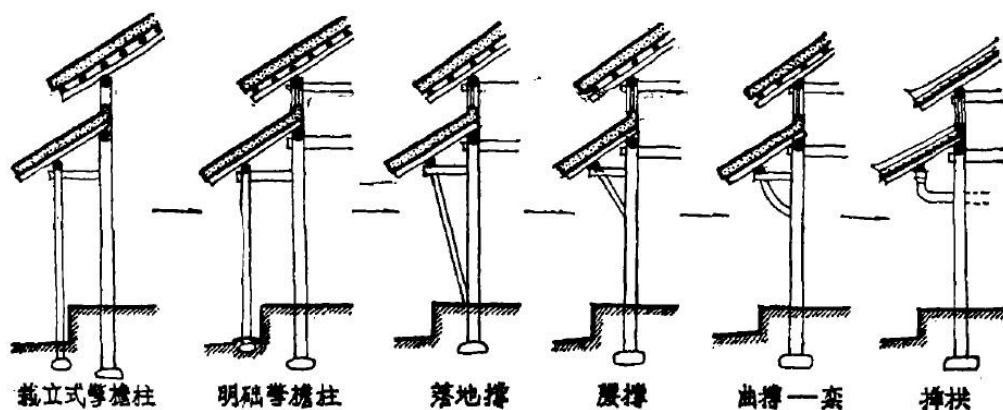


図 3.55 楊氏の説による斗拱の起源¹³⁷

こういう軒構造の変遷の説は、ある程度の考古学の証拠を持っている。早期（3000 年前）の土木構造の宮殿は軒出のため、軒を支える柱を利用する。1970 年代の考古学の発見より、早期宮殿の側柱遺跡の周りに、側柱穴より小さな柱穴が存在している。楊鴻勛はこの小さな柱穴を軒を支える柱と認定する。

軒を支える柱の配置にたいして、河南偃師二里頭の早商遺跡と湖北黄陂盤龍城商早期宮殿遺跡は一つの側柱と二つの軒を支える柱の組である。商中期の河南安陽小屯の遺跡「乙十三基址」の側柱と軒を支える柱は一对一、及び一对一と一对二交代二つの配置がある。最後の小屯「乙八基址」は、単純的一对一配置になる。早期の軒を支える柱は掘立柱なので、一番外側の位置において、腐りやすい。しかし、太い側柱を守るため、軒を支える柱の犠牲が意味がある。

河南安陽小屯殷の遺跡からもう一つの重要な発見は銅の礎盤（礎）。銅礎の出土位置は基壇の外縁であり、そして出土の時、その上に直径 10 cm の柱の跡を残っている。これは軒を支える柱の礎盤に違いない。銅礎は半楕円体で、出土の時、漆喰の模様が残っているから、この時の軒を支える柱はすでに掘立柱ではない。

軒を支える柱数の減少にも、銅礎の出現にも、軒を支える柱が腐りやすいという弱点を改善するための古人の努力である。ここで、考古学の手がかりは途絶える。楊氏はこれまでの軒を支える柱の防水改造のロジックから、現存する民家軒部の方杖構造と比較して、軒を支える柱が防水するため、柱底を側柱まで後退し、ななめの部材になっている可能性がある」と指摘する。さらに、ななめの軒を支える柱の下端が地面から離れ、側柱に挿し込んで、方杖構造になってくるのも自然だろう。最後に、楊氏は「方杖構造は軒を支える柱から変化した」と論じる

(2) 挿肘木の発生

「丁頭栱」＋平三斗は漢代建築に普及する構造であるが、挿肘木のような「丁頭栱」が連続して重なる構造は、漢代の画像石と埴輪の建築イメージの中にはまだ見えない。しかし、今江蘇徐州市に残した民家の軒出構造は、漢代建築「丁頭栱」＋平三斗の構造・挿肘木構造両方と繋がりがあるかもしれない。徐州市戸部山町の鄭家大院の中門の軒構造は、二手先の挿肘木の上に、平三斗が載って、さらに桁を支える。そして同じ鄭家大院の廂房には、二手先の挿肘木を利用する。徐州市だけではなく、隣接する連雲港市灌雲県伊山の正和たばこ店も、挿肘木構造を利用する。江蘇省北部の挿肘木構造は、全部肘木が壁の中

¹³⁷ 楊鴻勛「斗拱起源考察」前注と同じ、第 9 頁

に挿さって、木柱を使わない、東南海岸地区の挿肘木構造と異なる。だが、徐州は漢代初代皇帝劉邦の故郷で、重要な漢代の画像石の出土地で、漢代建築の意匠はいまだ徐州地域の伝統民家の中に残っている可能性がある。そして今徐州地域の伝統民家の軒構造は挿肘木構造にすごく似ている。漢代「丁頭栱」と挿肘木の関係も微妙である。



図 3.56 徐州地域の伝統民家の軒構造

現存する一番古い挿肘木に似ている多重肘木構造は、現在河南博物館に収蔵する隋代の建物埴輪と日本の玉虫厨子である。隋代陶楼と玉虫厨子の軒出構造は、挿肘木に似てるとはいえ、肘木は大斗の上に乗っているから、肘木は柱の中に挿し込まない。

唐末から、大量の北方移民が南方へ流入した。そのため北方文化が南方系文化へ影響したことが必然である。つまり、挿肘木構造の原型は、唐末移民とともに、東南海岸地区へ伝わった可能性が高い。そして隋代陶楼と玉虫厨子のような軒出構造は、南方系建造技術に適応するため、挿肘木構造になるかもしれない。



図 3.57 隋代陶楼¹³⁸

北方系と南方系建築構造の区別に対して、日本の宮本長二郎は北方系が「長押」系統、南方系が「貫」系統とまとめ、中国の張十慶は北方系の「積層型」構造と南方系の「連枅型」構造を区別する。¹³⁹この二種類の分け方は実に同じ意味である。北方の「積層型」構

¹³⁸ 画像は河南博物院公式サイト www.chnmus.net より、図面は楊鴻勳「斗栱起源考察」前注と同じ、第 13 頁より

¹³⁹ 張十慶「從建構思惟看古代建築結構的類型与演化」前注と同じ

造は、部材を幾層にも層を重ね、「長押」のように部材の間に柱同志を直接つなぐものではない。斗拱はこの「積層型」構造の代表である。これに対して、南方の「連栿型」構造は「貫」を利用して、「栿」（木造フレーム）を連結する。つまり、南方の「穿斗」式フレーム構造は北方系の斗拱作法に矛盾する。これを解消するため、挿肘木が発生する。

北方系の組物は、唐宋から段々十字の肘木構造が普及し、今よく知られている斗拱になる。そして近世になって、斗拱構造はもう一度南方へ影響を与え、浙南民家の斗拱構造が形成される。

この挿肘木の発生と北方系斗拱技術の伝播過程を証明する最も有力な証拠は、斗の「皿板」構造である。「皿板」は簡単に言えば斗の下敷板である。「皿板」は一般的に大斗と升の下にあり、厚さが 3 cm ぐらいである。四川省三台县郪江崖墓群に漢代彫刻の組物は発見された。¹⁴⁰この組物の大斗の下に、「皿板」を敷いている。唐の敦煌莫高窟木造の窟檐の中の三手先斗拱の斗と升の下はみな「皿板」を敷いている。同時に、日本の玉虫厨子と法隆寺金堂の雲形斗拱の中には、「皿板」が使用される。「皿板」運用事例は、漢代から唐代まで、いろんな例があり、宋の『营造法式』にも「皿板」が記載されている。しかし、遼・金・元の時代になって、北方に「皿板」の作法が消えた、後世の官式建築の中に、「皿板」の姿もなくなった。ただし、福建の挿肘木構造の升の下に、「皿板」あるいは「皿板」の意匠がまだ残っている。



図 3.58 三台崖墓の「皿板」作法¹⁴¹

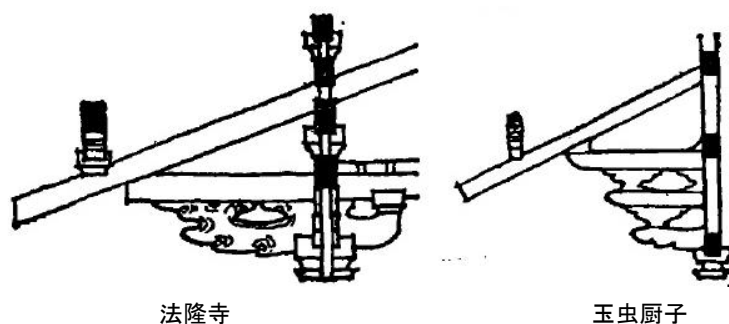


図 3.59 北方による「皿板」の作法¹⁴²

福建地域の挿肘木構造はほとんど「皿板」の意匠を保っている。今閩東挿肘木の「皿板」はすでに独立した板ではなく、斗や升と融合して、その下端に突き出した縁になる。図 3.48

¹⁴⁰ 四川省文物考古研究院「四川三台郪江崖墓群柏林坡 1 号墓発掘簡報」『文物』2005.9、第 14-35 頁

¹⁴¹ 写真と図面は四川省文物考古研究院「四川三台郪江崖墓群柏林坡 1 号墓発掘簡報」第 19 頁より

¹⁴² 図面は楊鴻勳「斗拱起源考察」前注と同じ、第 13 頁より

より、「皿板」の意匠ははっきりである。この「皿板」は漢から唐までの北方系組物構造の中の「皿板」と同じものである可能性は高い。福建の「皿板」が北方から伝われる可能性もたかい。言い換えれば、福建の挿肘木構造は、北方からの影響を受けて、土着の作法と融合したものであるかもしれない。そして、こういう作法は、浙江の軒出の斗拱構造の中には見えない。つまり、浙江の斗拱構造は閩東地域の挿肘木構造より時代が遅い。



図 3.60 福建、浙江による升の「皿板」構造の意匠

「皿板」を手がかりとして、挿肘木構造の発生をまとめると、挿肘木構造は東南海岸地区の土着的作法ではなく、北方技術の影響と土着技術の融合である。発生の時代は唐末北方移民南遷の時である可能性が高い。

(3) 挿肘木の衰退

今現存する挿肘木構造は、大部分がすでに衰退した。衰退という意味は、挿肘木の構造的意味が弱化して、装飾性が強化することをしめす。軒を支える構造材としての挿肘木は、使用者の地位・身分を顕示する手段としての挿肘木に変化した。

挿肘木構造自身の衰退だけではなく、挿肘木構造を使う範囲も収縮している。これは今浙江、江西各地に残存した挿肘木構造から証明できる。鎌倉時代日本へ大仏様の技術を伝える陳和卿は、明州（今の寧波）で生まれ、本論文の地域区分によると浙東の人となる。つまり、軒の挿肘木の作法は宋の時、浙江にも広まる。しかし、今浙江南部以外に残存する挿肘木構造は珍しい。寧波市月湖町青石街の聞宅（222 番、図 3.40 より）は少数の挿肘木構造を残存する浙東の民家の一つである。張宅は清代に建造し、平面は三合院である。正房は出組も斗拱作法を利用し、廂房は挿肘木の変型を使っている。

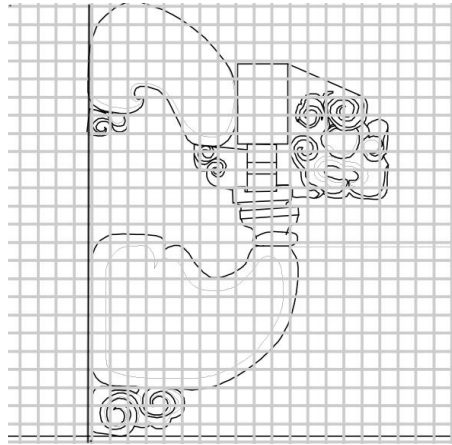


図 3.61 閨宅の挿肘木の変型¹⁴³

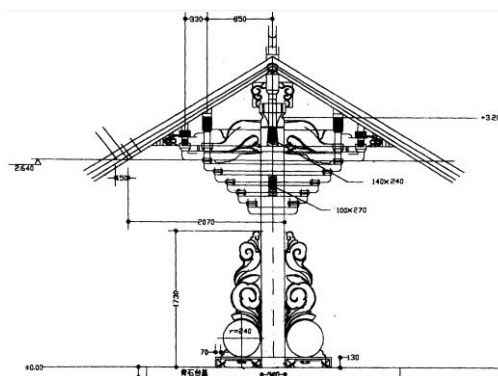
浙江省に現存する一番多い挿肘木構造は、大門の挿肘木構造である。民家にも、寺院にも、大門は二本の柱を立て、柱の前後に挿肘木を展開して、屋根を支える。たとえば永嘉県花壇村の「溪山第一」門、この門は明中期の建造で、六手先の挿肘木を使用する。同じものは景寧県大漈の時思寺山門である。現存する時思寺の大殿は元代の建物で、山門は三間で、明代に再建したものである。山門明間中柱から前後に五手先の挿肘木を出して、両側の次間の軒は方杖と挿肘木の混合構造を使用する。普通の民家の門も挿肘木構造が残っている。景寧県桃源村のある住宅（240 番）の側門には、四手先の挿肘木を使う。



時思寺の大殿山門



桃源村住宅の側門



花壇村の「溪山第一」門¹⁴⁴

図 3.62 浙江の門における挿肘木残存

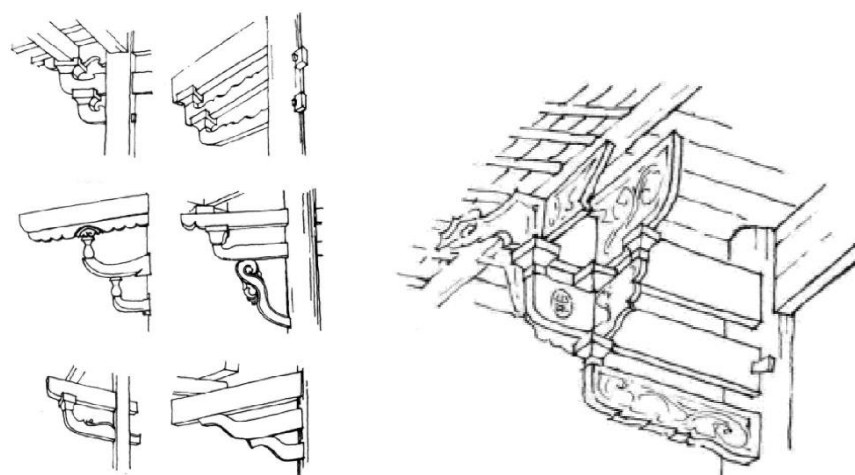
¹⁴³ 同済大学建築系『寧波月湖歴史街区調査』未公開

¹⁴⁴ 路秉傑「日本大仏様与中国浙江『溪山第一』門」『营造・第一輯』1998、第303頁

浙東・浙南地域の斗拱構造のなかにも、挿肘木の意匠が残存する。たとえば円形の大斗であり、大斗の上に短柱があることもある、肘木が柱に挿し込む意匠が強い。そして、南方系の斗拱は北方官式斗拱のようなはっきりした層状の構造でない。このことが自らの特徴となっている。

浙江だけではなく、浙江・福建と隣接する江西省も、少量の挿肘木構造が残っている。たとえば福建西部客家地域に隣接する瑞金民間の祖廟は、三手先の挿肘木を利用する。そして江西東北部浙江・福建と隣接する上饒市にも、挿肘木構造が残っている。景德鎮の浮梁県英溪の金林成宅と湘湖の毛仔宅は、出桁を支えるため、二手先の挿肘木を利用する。それに対して、上饒市鄱陽県金禄村の徐宅は上部の梁を使わなくて、二手先の挿肘木が直接に桁を支える。

今浙江と江西に残る挿肘木構造は決して当地主流の作法ではない。しかし、この地域における挿肘木構造の残留は、浙江中東部と江西東部がある時代に挿肘木構造を利用していたことを示唆する。これらは報告例が少ないから地域性を明らかにすることは出来ないが、挿肘木構法がかつて南中国まで展開したことを示唆する点は重要である。つまり、挿肘木構法はかつて南中国まで広まったが、時代を経てこの構法が衰退して、閩東地区だけが強く保持して来た可能性が高い。



上饒と景德鎮部分民家の挿肘木

瑞金民間祖廟の軒出構造

図 3.63 江西における挿肘木残存¹⁴⁵

(4) コーベル構造の伝入

北方民家の軒出に対して、妻壁の先端が「墀頭」の作法によって、軒を支える。「墀頭」は妻壁の両端上部から、レンガを積み出して、軒桁を挟む。基本的に、三部分と組み合わせて、一番上は、レンガの積み出し構造や石の片持ち梁を利用して軒を支える部分である。中央は「炉口」とよばれ、方形の形で装飾が集中している場所である。下は「炉腿」で、須弥壇みたいな形が多い、「炉口」を支える構造である。「墀頭」は、レンガ造のコーベルともいえる。現存する「墀頭」は単なるレンガの積み出しもあるが、ほとんど南方木造コーベルのように、彫刻によって装飾する。

「墀頭」と南方木造コーベルとの関連性が名乗ることができないとは言え、それらの共通性が多いと考えられる。つまり、東南海岸地区以外の漢族地域は、ほとんど、コーベル構造を利用してのきを支える。北方はレンガ造コーベル―「墀頭」で、江南は木造コー

¹⁴⁵ 黄浩『江西民居』中国建築工業出版社、2009、第 102-103 頁

ペルー「牛腿」である。



図 3.64 「壻頭」作法

レンガ造の「壻頭」は、南方で木造コーペルー「牛腿」になって、東南海岸地区へ影響することが考えられる。浙江の中部には、「牛腿」「壻頭」の併用がある。すなわち、レンガ防火壁などの場所で、「壻頭」を利用して、木造の部分でコーベルを利用する。そして、閩北地域のコーベルは、膨らんでいる肘木の形を持って、浙江のコーベルの形とちょっとした異なりがある。この閩北コーベルは、福建の挿肘木作法と外来のコーベル作法の影響を同時に受けた結果と考えられる。

つまり、東南海岸地区のコーベル作法は、北方はレンガ造コーペルー「壻頭」と、江南の木造コーペルー「牛腿」の影響を受けた外来作法である。



図 3.65 閩北「牛腿」変形と「壻頭」の併用（武夷山下梅鄒邸）

(5) 東南海岸地区軒部構造の時代性考察

吊束と方杖の分化：

前述の推論が成立すれば、軒出の挿肘木構造は、唐宋の時に北方移民とともに東南海岸地区に伝ったと考えられる。そして斗拱構造はさらに遅れて、明の時代に浙東南へ伝わった。その場合、一つ問題がある。すなわち、挿肘木伝入以前に、東南海岸地区における主流の軒構造は何であるか。今の遺構・考古学資料や古文獻の中に、この問題解決の直接的な証拠はない。ただし、唯一に確定できるのは、この構造は南方系土着の「穿斗」式フレ

ーム構造と関わりが深いと考えられることである。そして今東南海岸地区民家において主体的な軒構造は「穿斗」式フレーム構造で、その中で上記の推察に一番重要なのは吊束構造である。

軒出構造は軒を支える柱から始める、これは考古学の資料から証明することができる。しかし、軒を支える柱は腐りやすいため、効率的な軒構造ではなく、革新が必要であった。北方系の「積層型」木構造は横材が柱を貫かないから、軒を支えるため三角形のような安定の構造が必要である。つまり、楊鴻勛氏の推論のように北方系建築においては正統的な方杖構造を選択することも必然だろう。これに対して、南方系「連枅型」の「穿斗」式フレーム構造は、横材が柱を貫き、フレームの全体性がよい。この場合、軒を支える柱の下部を切断し、吊束にすると、十分安定する。その原因は、側柱の両端へ伸ばす穿はレバレッジとして、軒の荷重と内部屋根の荷重を平衡することができる。そうした軒出における吊束構造は、現在中国西南の少数民族の住宅の中にも残る。そしてこの吊束構造は南方系原始的な土着構造である可能性が高い。



図 3.66 広西チワン族の吊束

東南海岸地区民家もこうした装飾のない束型吊束構造の原始性のある程度体现する。つまり、①東南海岸地区民家のなか、大量の家が建物の側部・後部と付属建物の軒構造を吊束構造を使う。②「垂花柱」構造は、今は東南海岸のなかだけにおいて、民家の軒出構造として利用されている。この「垂花柱」構造も、素朴な吊束構造とつながる可能性がある。

挿肘木の発生・発展：

そして、唐宋の時北方移民とともに、東南海岸地区に伝わった挿肘木構造は、現時点で閩東地区を中心に展開し、閩北以外の福建全域に影響を与えた。これは二つの可能性を持つと考えられる。一つは、挿肘木構法が閩東地区から発生し、周辺に影響を与える過程で、大仏様として日本に影響を与えた可能性である。もう一つは、閩東地区だけが本格的な挿肘木構法をよく伝えている、地域的特色の可能性である。李向東や崔ゴウンの研究成果を加えてみると¹⁴⁶、南中国の四川、広西、広東、江西、浙江、安徽、江蘇においても、挿肘木構法を採用する寺院や住宅建築の存在がいくつか認められる。これらは報告例が少ないから地域性を明らかにすることは出来ないが、挿肘木構法がかつて南中国まで展開したことを示唆する点は重要である。つまり、挿肘木構法はかつて南中国まで広まったが、時代を経ても閩東地区だけがこの構法を強く保持して来た可能性が高い。

この二つの可能性（挿肘木構法の発生源、挿肘木構法を強く保持してきた点）に関しては、閩東地区の閉鎖的な地理条件と複雑な方言系統があったからと考えられる。福建地区には山が多く、「八山一水一分田」ということわざがあって、昔から交通が不便である。閩東地区はもっと閉鎖的で、「九山半水半分田」と言われる。こういう地域は外界の影響を受け難く、特有の建築文化の発生と伝承が行われやすいであろう。そして複雑な方言は、福建と中国中原の民間建築文化交流を妨げる要因であったろう。福建省は次方言区間において話が通じ難いことを考えると、閩東地区は更に文化的に閉鎖しており、挿肘木構法が

¹⁴⁶ 李向東「挿肘研究」『古建園林技術』1996.1、第 10-14 頁、崔ゴウン「韓国、中国、日本の挿肘木に関する研究その 1」『日本建築学会計画系論文集』No.556、2002.6、第 321-326 頁

継承される条件は備えていたといえる。

外来軒構造の影響と挿肘木構造の衰退：

以上をまとめて見ると、現在福建でよく見る「垂花柱」構造は、宋元以降に禅宗寺院とともに、福建へ伝わった可能性があり、浙江と閩北に普及するコーベル構造は明の時代から方杖と斗栱の中に分化する可能性が高い。そして浙東・浙南に使用する斗栱作法は、挿肘木により、穿闘式貫構造との関係が薄く、より遅く浙江省に伝入する（挿梁作法と一緒にかもしれない）可能性がある。

表 3.13 地域別挿肘木の時代性考察

閩東・莆田・閩南・浙東・浙南

	挿肘木	挿肘木変形	斗栱	その他
明代	6	1	なし	なし
清代（清末除く）	18	1	9	3
清末以降	15	3	5	5

その他の地域

	挿肘木	挿肘木変形	斗栱	その他
明代	2	3	1	8
清代（清末除く）	なし	2	なし	12
清末以降	2	4	なし	19

現存する東南海岸地区民家の地域分布と建造年代をまとめて見ると、近世から全体として、挿肘木構造が衰退していた（表 3.13）。挿肘木構造が集中している閩東・莆田・閩南・浙東・浙南地域によって、現存する明代の民家の軒構造は全部挿肘木を使用した。清代から全部挿肘木を使用しない民家が増えてきた。そして現在挿肘木構造の分布が集中していない地域によると、明代民家の挿肘木使用率も低くない。

前述の多進四合院と海老虹梁のことを参照すると、挿肘木構造も近世から衰退したといえる。つまり、「垂花柱」・コーベル・斗栱などの軒出構造は、近世の初めから東南海岸地区に伝わった新しい技術である可能性があり、それらの技術の影響によって、本来の挿肘木構造が衰退したことが考えられる。

第四章 東南海岸地区民家建築の系譜

4.1 東南海岸地区民家の地域性

東南海岸地区民家の特徴に関する地域分布を考察すると、各特徴が地域性を有することが明らかとなった。本章では、各特徴の地域分布毎に、地理条件・人口移動・交通線路の条件を踏まえて地域性を検討する。

4.1.1 地縁条件と民家特徴分布の関連

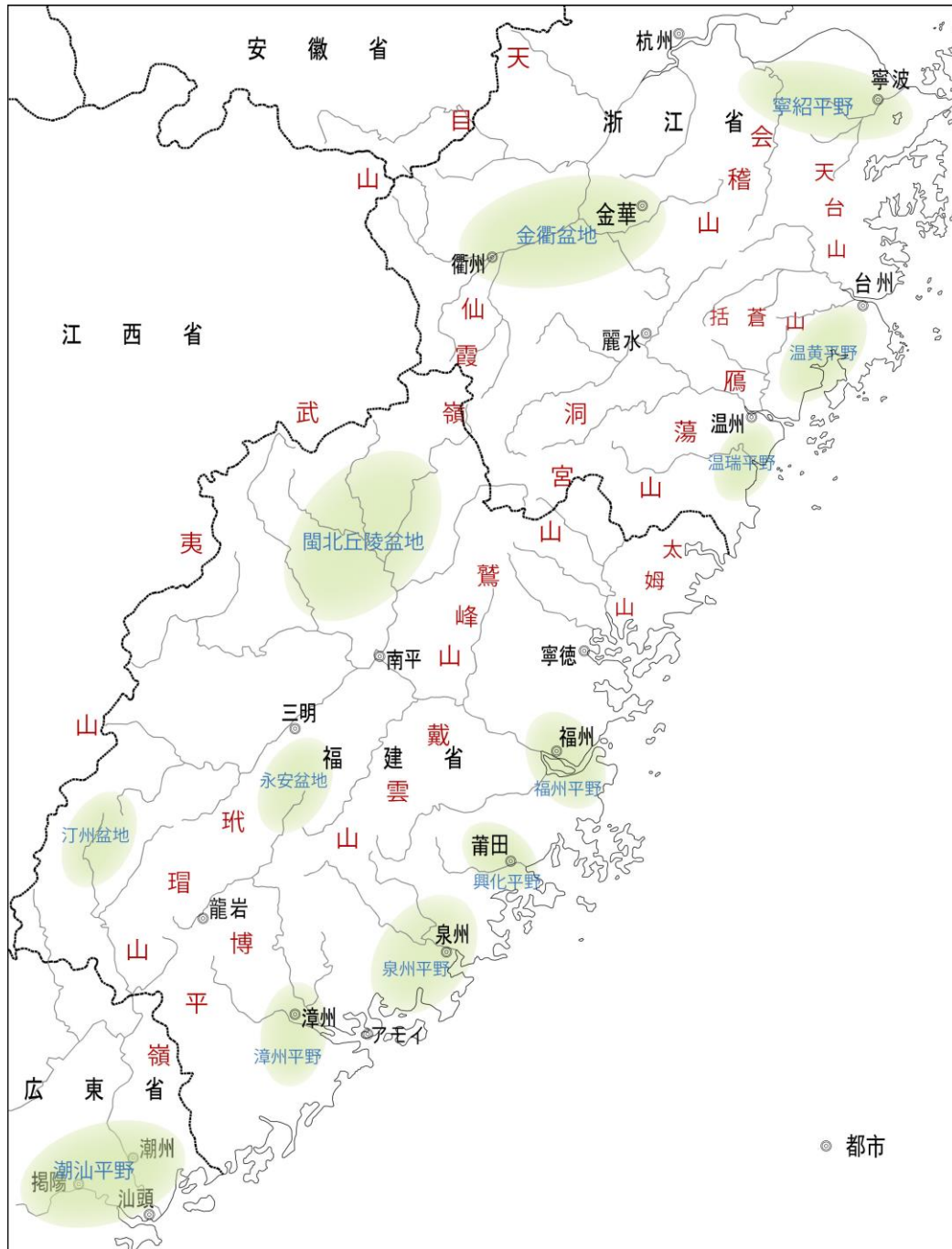


図 4.1 東南海岸地区の地理条件

(1) 地理条件

連綿と続く山脈は、東南海岸地区地理の最大な特徴であり、その「七山二水一分田」(浙江)と「八山一水一分田」(福建)のことわざも強いイメージを与えた。東南海岸地区を孤立する連峰は北から南で、浙江と安徽の境界となる天目山・仙霞嶺から、福建と江西の境界となる武夷山まで連続し、東南諸川と長江・珠江自然の分水嶺になる。

そして、東南海岸地区の内部は、もう一つ連峰がある。すなわち浙東地域と銭塘江流域の分水嶺となる会稽山・天台山から、浙南の括蒼山・雁蕩山、浙閩境の洞宮山、福建の鷺峰山・戴雲山を経て、閩西と広東の境にある玳瑁山・博平嶺までである。この南北連続の連峰は、東の海岸部と西の溪穀丘陵を二分して、東南海岸地区もう一つ重要な境界線になる。

(2) 人口移動

漢の武帝が閩越を滅亡し、閩越の人々を江淮に遷移させた同時に、呉越の(今の浙江省)の人々の南遷を命じ、数少ない呉人が閩へ引っ越した。当時の人口移動ルートは主に二つある。一つは海路で、山陰(今の紹興)から出発し、句章(今寧波に属する)に船を乗って、東冶(今の福州)までである。一つは陸路で、山陰から出発し、上虞(今の上虞)で南へいて、川沿いに今の福建浦城辺りに入閩して、漢陽(今浦城に属する)と閩越故都崇安(今の武夷山市に属する)までである。

西晋から南北朝の時代に、中原地区が五胡(騎馬民族)に蹂躪され、漢人は第二回の大規模南遷が始まった。今回のルートは、漢時代のルートと同じく、違うのは福建への目的地は大幅に広まった。陸路ルートの目的地は建安(今の建甌)、沙村(今の沙県)、新羅(今の長汀)と綏城(今の建寧に属する)であり、江西から進出のルートも始めた。海路は晋安郡(今の福州)を主な目的地とともに、南安(今の泉州に属する)、龍溪(今の漳州に属する)も加えて、さらに今の広東潮州辺りに到達する。

南北朝以前に福建へ引っ越した人々はほとんど呉越(浙江)の人である。呉越文化と閩文化のつながりが分かるようになったようである。

唐と五代から、福建へ引っ越した漢人は、長江の北の中原人を集中していた。そして前代陸海二つのルート以外に、江西から福建へのルートを利用し始める。武夷山の各峠の関所を越えて、福建へ行く移民潮はこの時期の主流である。この江西ルートは主に二つの選択がある。一つは江西の南部から武夷山を越え、汀州(今の長汀)に行き、そして南へ向き、南州(今の漳州)を経て泉州までである。もう一つは浙江から江西の広信(今の上饒)を経て武夷山を越え、今の武夷山市と浦城県にいて、そして建州(今の建甌)を経て泉州までである。この時期も福建人口が大幅に増加したときで、閩の各地域集団が形成したときもある。

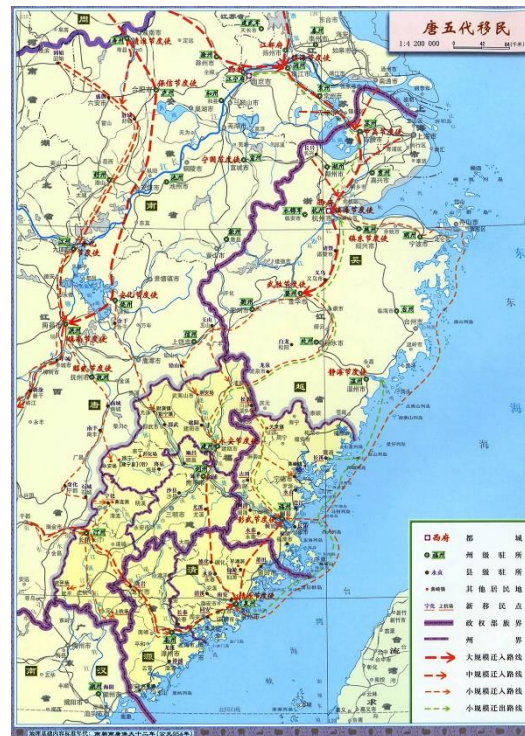
最後宋元の際、金の国の侵入によって中原人が再び南下する。そしてモンゴルは南宋を滅亡するとともに、福建へ侵入した。閩人もやむを得ず故郷から離れ、人口移動の潮に巻き込む。この時期の人口移動は唐と五代のルートと同じであるとは言え、東南海岸地区最後の大規模移民から、近世東南海岸地区各地域集団の形成に基礎を築いた。ちなみに、この時期の人口移動に注意すべきのは閩人の移動で、この時から、閩人は海路を利用して梅州(今広東の梅州)・高州(今広東の茂名)・雷州(今広東の湛江)・海南島と温州(今浙江の温州)まで渡って、閩の文化を拡散した。



漢の時代¹⁴⁷

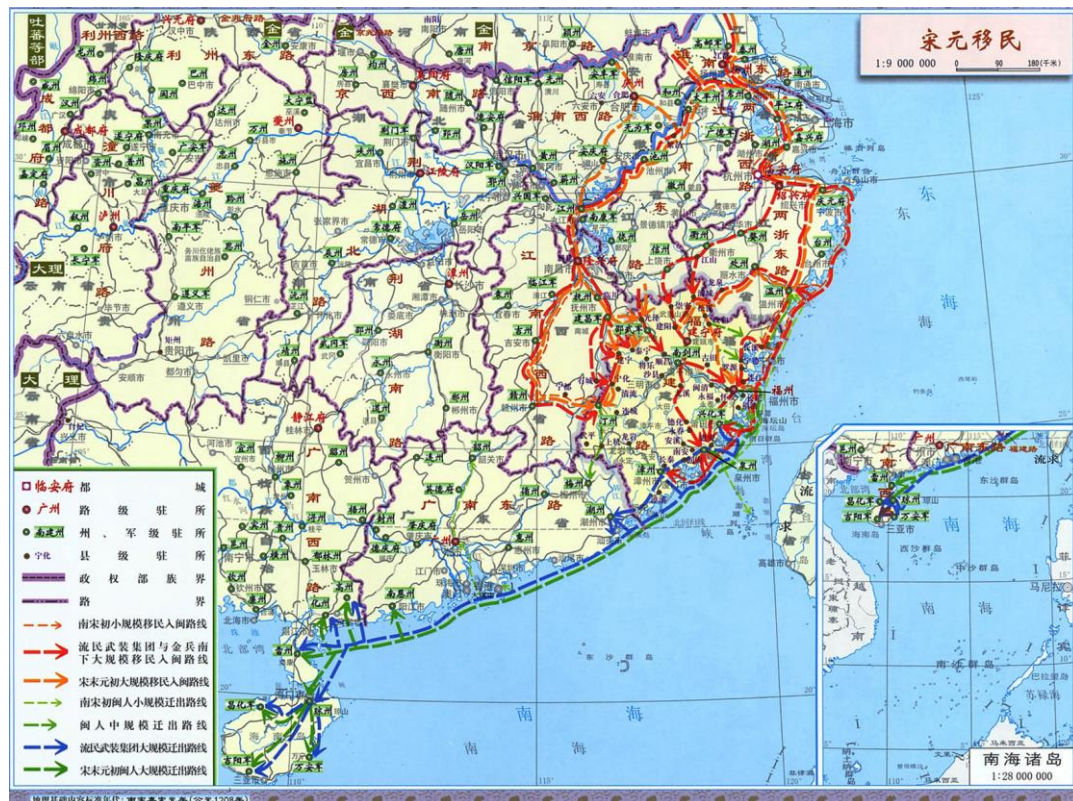


南北朝時代



唐と五代

¹⁴⁷ 赤い断線は移民が福建へ遷入のルート、緑の断線は福建の住民の遷出ルートである。下も同じ。



宋元時代

図 4.2 歴代東南海岸地区への人口移動¹⁴⁸

(3) 交通線路

陸路と内陸河川航路：

人口移動は一時的な行動しかない、歴代の官道・駅路は各地域の間に経済文化交流の命脈である。東南海岸地区への道路は山々を越えるしかなく、不便である。しかし耕地が少なく、人口は多いため、長江中下流平野から大量の米を輸入するのみである。同時に東南海岸地区は木材資源が豊富で、それ以外に竹・茶などの作物も主要な輸出品である。ゆえに、東南海岸地区は貿易のための陸路交通が常に盛んであった。

『邵武県誌』は「入閩有三道、建寧為險道、兩浙之所窺也。邵武為隘道、江西之所趨也。広漳航海為間道、奇兵之所乘也」と記載されて¹⁴⁹、入閩の三つの陸路官道を紹介する。浙江から楓嶺関を経て建寧まで、江西から杉関を経て邵武まで、及び広東から分水関を越えて漳州までという三つの駅路は、みな崎嶇たる山路である。

明清の時、福州への官道は、北京から大運河に沿い、山東德州、兗州を経て、江蘇の徐州に行く。そして安徽の鳳陽と、南京・蘇州を経て、杭州への航路をたどる。杭州から衢州までは钱塘江航路で、そのあと仙霞嶺を越えて、福建の浦城に行つて、再び船にのつて閩江を下つて福州まで至る。この道も「進京道路」と呼ばれる。『読史方輿紀要』によると¹⁵⁰「浙江から福建への旅人は、清湖駅に船から上陸し、崎嶇たる山路を越え浦城県の西に到着し、そこから閩海まで再び船を乗ることができる。二つの航路の間に、二百里ぐら

¹⁴⁸ 福建省地方誌編纂委員会『福建歴史地図集』福建省地図出版社、2004、福建省政府公式サイト <http://www.fujian.gov.cn> より

¹⁴⁹ 『邵武市誌』群衆出版社、1993、福建省政府公式サイト <http://www.fujian.gov.cn> より

¹⁵⁰ 「清」顧祖禹『読史方輿紀要』、清康熙三十一年（1692）、歴史地理、地誌の本である。

い（約 115 キロ）の山路はいわば仙霞嶺路」と記録した。つまり、こういう「進京道路」は二百里の陸路以外に船に乗ることができ、商人はほとんどこの道を選ぶ。もう一つの「進京道路」は鳳陽で南進して合肥を経て長江沿い遡行し、九江から贛江を遡行し、南昌を経て建昌で上陸し、杉関を越えて、光沢で再び船に乗り、南平で前のルートと合流する。

東南海岸地区内部の駅路は二つある。海岸部の平野に、杭州から紹興・寧波・台州を経て、温州までの陸路と、福州から莆田・泉州・漳州を経て、潮州までの陸路二段がある。温州と福州の間に、浙閩分水関を越える道もあるとは言え、険しい道なので官道ではない。内陸部の溪谷沿いの官道は、先述の南平までの航路を含めて、南平から西へ白蓮駅に上陸し、陸路で汀州へ行って、広東の大埔から船行でき、後南へ韓江沿い潮州までである。

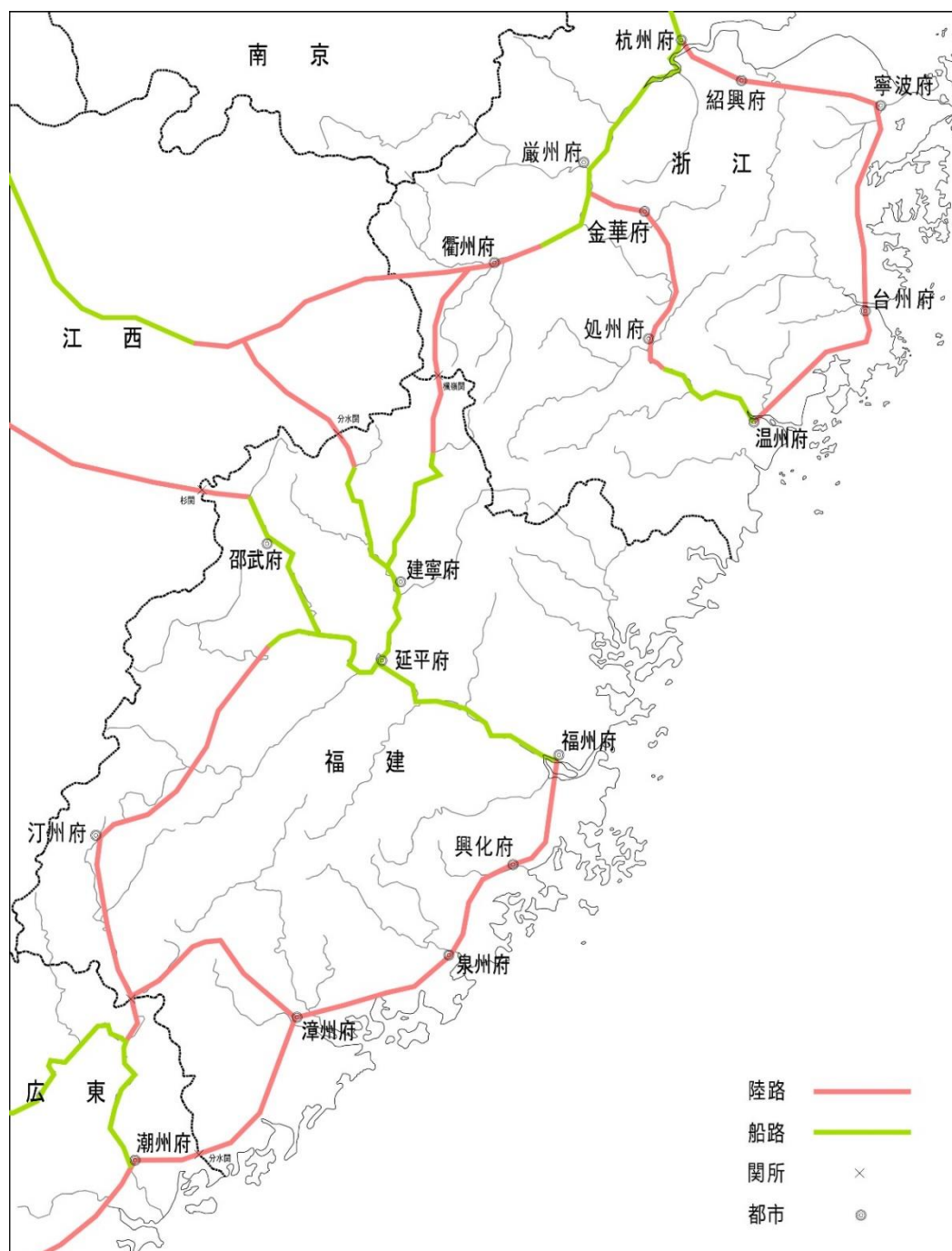


図 4.3 東南海岸地区の官道・駅路

港と海外貿易：

隋唐以前は、中国の海外貿易は主に陸路である。有名なシルクロードは西アジア諸国まで連結した。唐の時代は、自由な貿易政策によって、海陸貿易は同時に繁栄していたが、宋の時代になって、シルクロードは北方騎馬民族から切断され、東南海岸からの海外貿易は中心となっている。

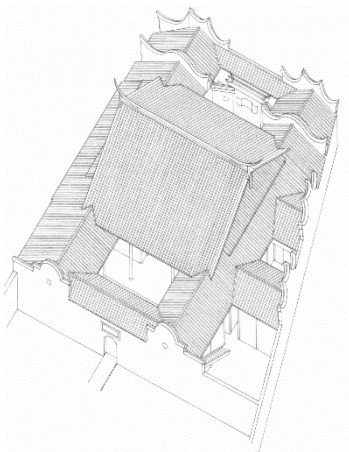
東南海岸地区の海路交通は、大昔から盛んである。三国の時代に、呉の船隊は南の台湾島から北の遼東半島まで活躍していた。そして唐宋から海外貿易の発展によって、東南海岸地区は寧波・温州・福州・泉州・漳州月港など重要な港を生み出した。そして磁器と茶の貿易とともに、東南海岸地区に茶葉（武夷紅茶・烏龍茶）と磁器（龍泉磁・徳化磁）の生産も繁栄した。海外貿易のルートによると、閩南の港は東南アジア諸国・西アジア北アフリカまでつながって、閩東と浙江の港は主に、当時の琉球（台湾と沖縄）・日本・朝鮮半島と貿易する。

4.1.2 特徴の地域分布

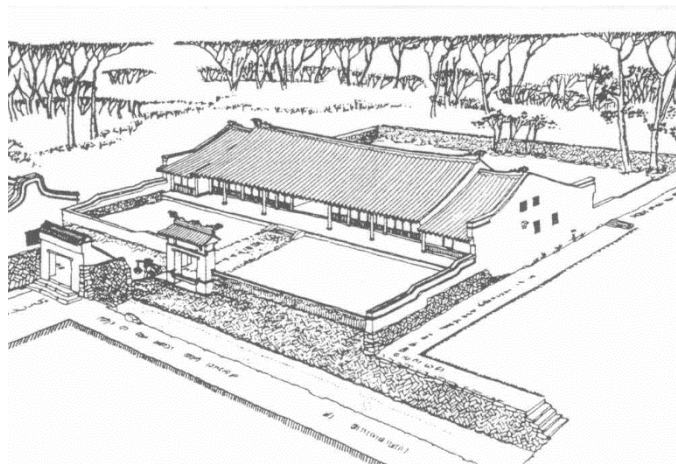
(1) 平面配置

前述のように、「一」字式平面配置は東南海岸地区の特色であると考えられる。囲屋式平面も、「一」字式平面と繋がっているはずである。しかし、東南海岸地区に残した「一」字式平面は数が少ない、浙南の温州市しか集中していない。

そして、東南海岸地区、特に閩東と浙東地域に存在しているもう一つの面白い平面配置は三合院である。三合院は基本的に四合院の変型と見られるが、東南海岸地区に存在する三合院の主屋は廂房や付属建物よりはるかに大きい。そして住む機能はほとんど主屋に集中して、合院式平面と「一」字式平面の融合と言える。



福安楼下保合太和宅¹⁵¹



永嘉ダイ頭松風水月宅¹⁵²

図 4.4 三合院住宅と「一」字式長屋

すなわち、「一」字式平面と三合院式平面の分布を重ね合わせると、「主屋式」配置は東南海岸地区での分布は面白くなる。「一」字式平面と三合院式平面の使用率によると（図 4.5 を参照する）、寧波 83%、温州 85%、麗水 87%、寧徳 56%で、浙東から閩東まで集中し

¹⁵¹ 李秋香『福建民居』清華大学出版社、2010、第 261-265 頁

¹⁵² 李秋香『浙江民居』清華大学出版社、2010、第 25 頁

ている。つまり、東南海岸地区の海岸沿い地域に「一」字式平面と三合院式平面の使用率は高い。

ちなみに、福建の中南部には、「一」字式平面と三合院式平面の使用率は低いとは言え、中部の戴雲山脈地帯の事例（尤溪ある農家 39 番、永泰嵩口ある住宅 49 番、徳化承澤黄宅 99 番、徳化格頭連氏祖厝 100 番）は全部こういう「主屋式」配置に属する。

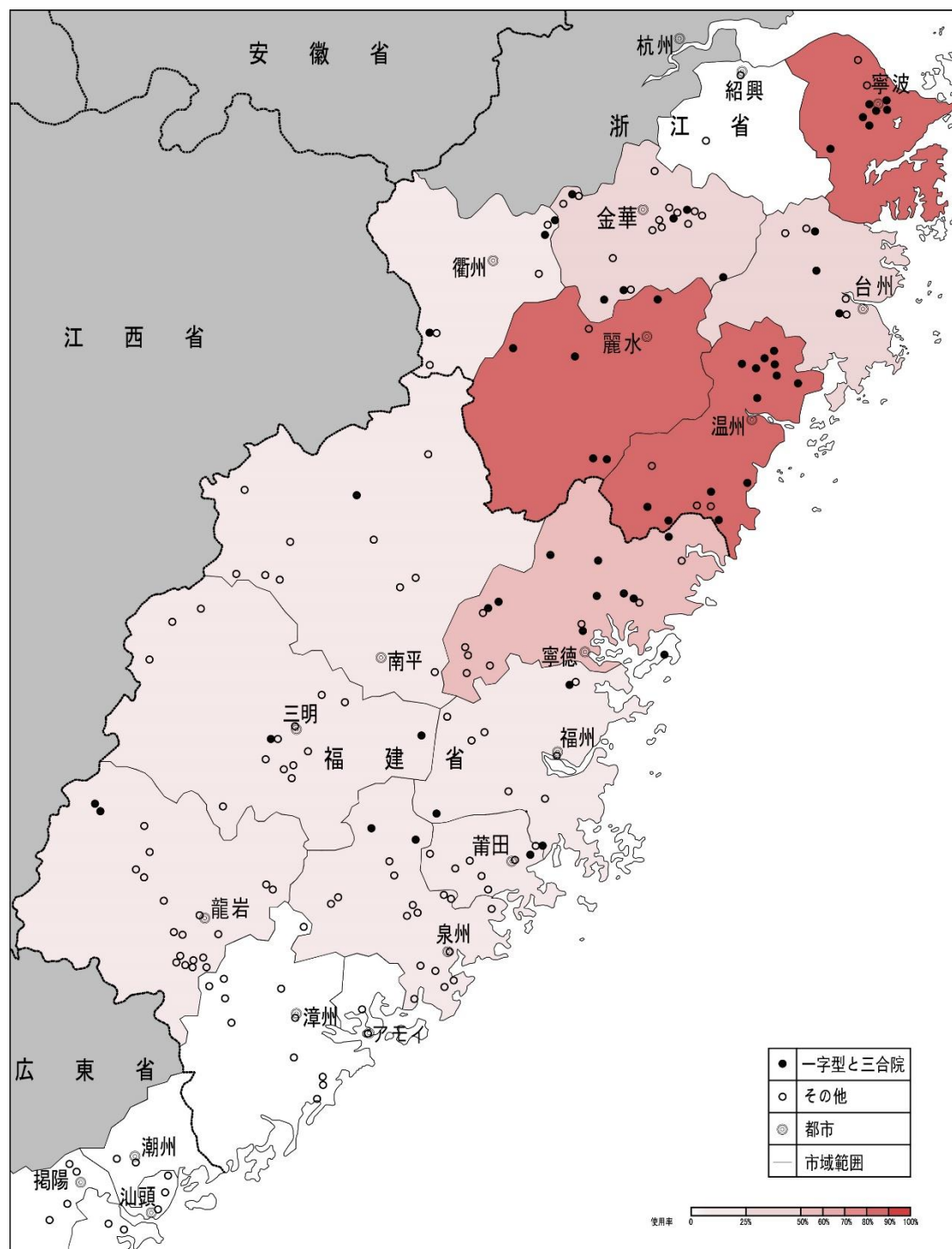


図 4.5 「一」字式平面と三合院式平面の使用率における地域分布

(2) 海老虹梁

梁貫構造について、面白い事実は海老虹梁の使用率である。高い使用率を持つ福州 93%、寧徳 80%、三明（閩中）67%、泉州 50%は、何れも東南海岸地区の海岸沿い地域に集中する。

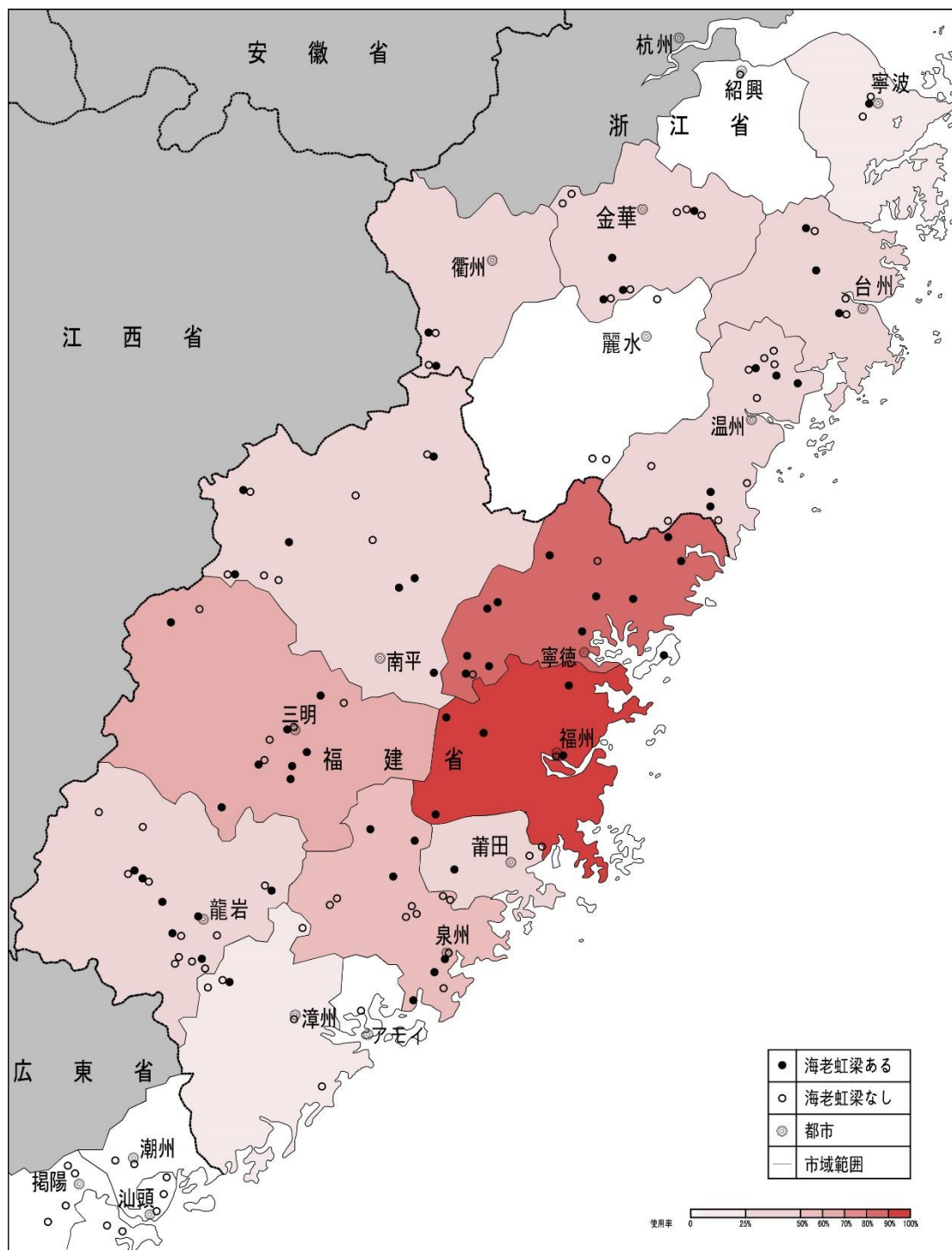


図 4.6 海老虹梁の使用率における地域分布

(3) 角柱

東南海岸地区に残されていた角柱は少なく、ほとんど温州に集中している（88%）。他の地域によると、角柱の使用率は50%を超える場合はないとは言え、いくつかのデータが面白くなる。寧徳 40%、福州 28%、泉州 30%で、これらの地域には、角柱の存在は無視することができない。以上をまとめて見ると、東南海岸地区の海岸沿い地域により多くの角柱作法が見られる。

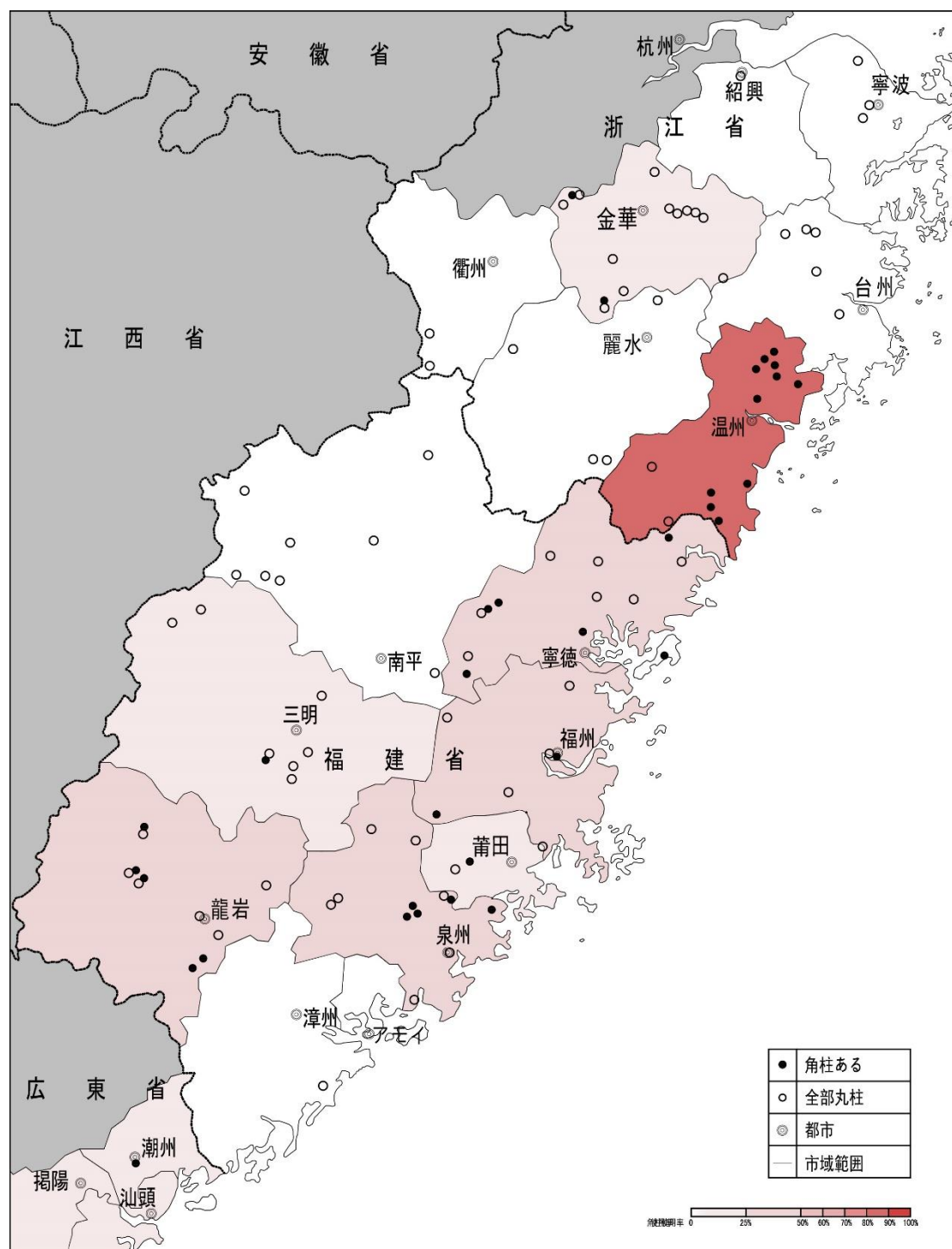


図 4.7 角柱の使用率における地域分布

(4) 封火山牆

封火山牆は江南地区から伝わった防火壁構造で、江南地区の建築文化である。そして、東南海岸地区の防火壁構造の使用率によると、もっとも高いのは、衢州 100%、金華 95%、南平（閩北）86%である。いずれも東南海岸地区山沿いの内陸部に集中していた。（広東潮州辺りの版築防火壁は広州の建築文化にかかわるのでここに検討しない）

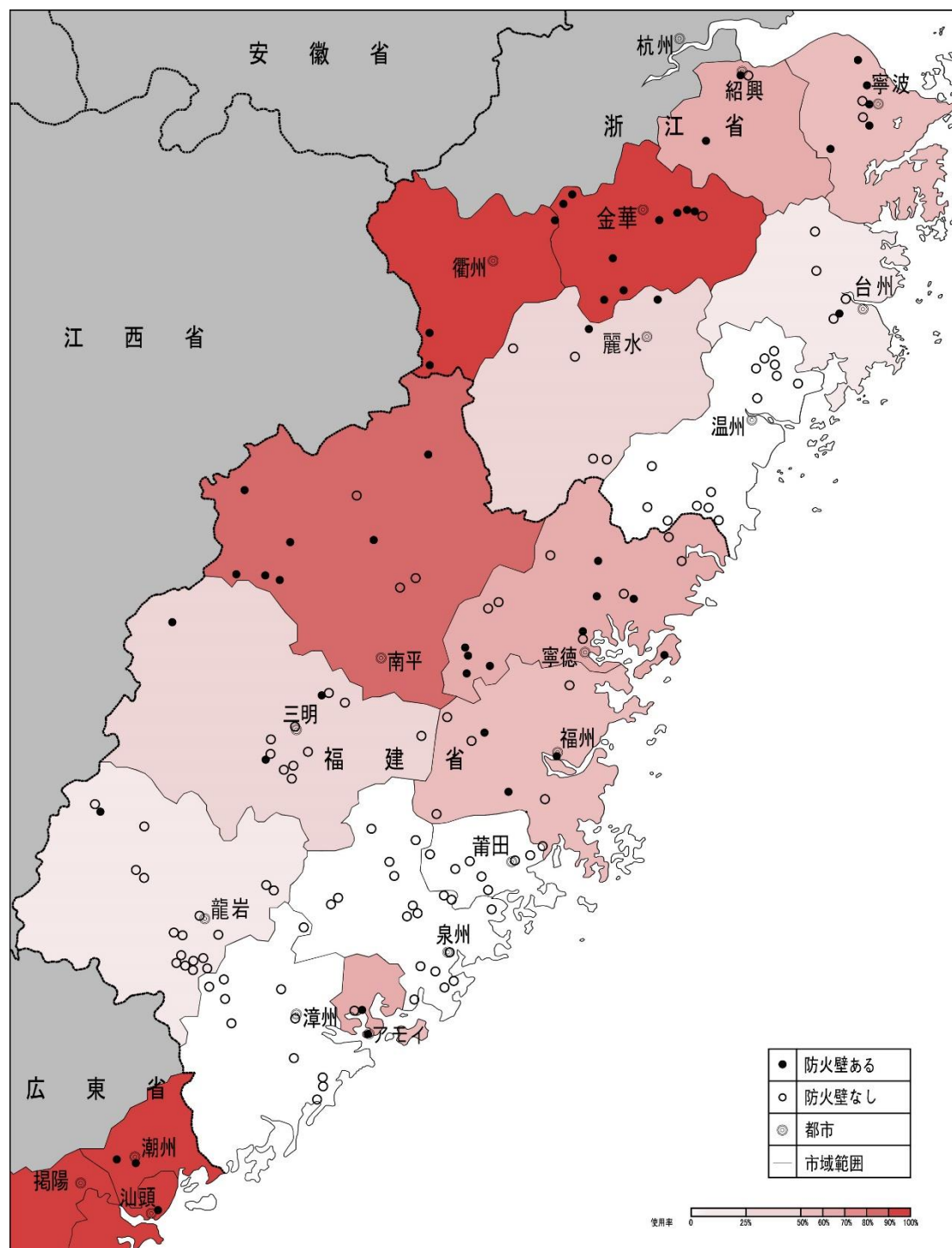


図 4.8 防火壁の使用率における地域分布

そして、閩東地域は、防火壁構造の使用率も低くない（寧徳 62%、福州 57%）とは言え、閩東に存在する二重壁を考えると、閩東地域は、封火山牆文化を導入しながらも自分の真壁構造文化を守る。

つまり、封火山牆という防火壁構造にこだわりがないことが東南海岸地区の特徴である。そして、こういう特徴を持つ地域は、東南海岸地区の海沿い地域に集中していた。

ちなみに、防火壁構造が東南海岸地区へ伝わるルートも、図 4.8 からわかる。まさに「福州官道」沿い、金華・衢州から、仙霞嶺を越えて、閩北に行く、そして閩江沿い福州へ伝わると考えられる。

（4）軒構造

軒構造の中に、挿肘木構造は東南海岸地区特有な住居建築軒出の構造（現時点）であるが、前章が検討した、①浙江に存在する斗栱構造は挿肘木構造と関係があり（円形大斗）、②浙江に存在する挿肘木の残存、③浙江の斗栱構造が発生する時代が遅い（皿板なし）、であるので、浙江に存在する斗栱構造を挿肘木の発展形と考えられる。つまり、挿肘木と斗栱構造をまとめて（組物構造）みると、東南海岸地区民家の独自性がより明確に現れる。故に、組物構造を指標として東南海岸地区民家の地域性を検討する。

前章が検討したように、組物構造は東南海岸地区の土着文化と伝わった中原文化が融合した結果で、東南海岸地区構造的な特質を反映する最も重要な点である。そして、東南海岸地区の人々は、軒出構造が自分の文化を体現するものと認識し、軒出構造を重視して今まで存続し続ける。ゆえに、軒出の組物構造は東南海岸地区で一番地域性が強い特徴である。

図 4.9 を参照すると、組物構造の使用率における地域分布は明確で、東南海岸地区民家の地域性をきわめて明確に反映する。

すなわち、まず組物構造の使用率が 90%以上に及ぶ地域が、東南海岸地区の海岸部中央に集中する（福州 94%、寧徳 91%、温州 90%、台州 90%）。ここでは建築の格式・年代・規模などの要素を問わず、標準要素として深く根付いているとみてよい。

次に、上記地域の南端の海岸部に組物構造の使用率が 80%以上の地域が存在する（泉州 86%、莆田 80%）。これはほぼ上記の傾向に準ずるものといえる。

さらに、組物構造の使用率が 94%の福州と 86%の泉州に接する三明は、内陸でありながら 75%という高い数値を示す、これは 3 者が閩江流域という共通条件にあるための影響関係と考えられる。

なお、寧波 66%、漳州 56%、アモイ 50%、龍岩 46%に関しては、東南海岸地区の海岸部中央における組物構造の強い影響力が、北端と南端に波及しているものと考えられる。

一方、組物構造の比率が極めて低い地域が、東南海岸地区の中央連峰より西側地域に集中する（麗水 13%、潮汕 12%、南平 10%、金華 4%、衢州なし、紹興なし）。この地域に関しては、組物構造について全く別の建築文化圏に属するものといえる。

以上をまとめると、組物構造の地域性は、組物構造を積極的に用いる系統が、東南海岸地区の海岸部中央を核として南北に展開する傾向を示す。これに対して、東南海岸地区西端の仙霞嶺—武夷山と中部に縦貫する連峰を挟んだ西北の内陸部に関しては、組物構造がほとんど用いられなかった地域である。

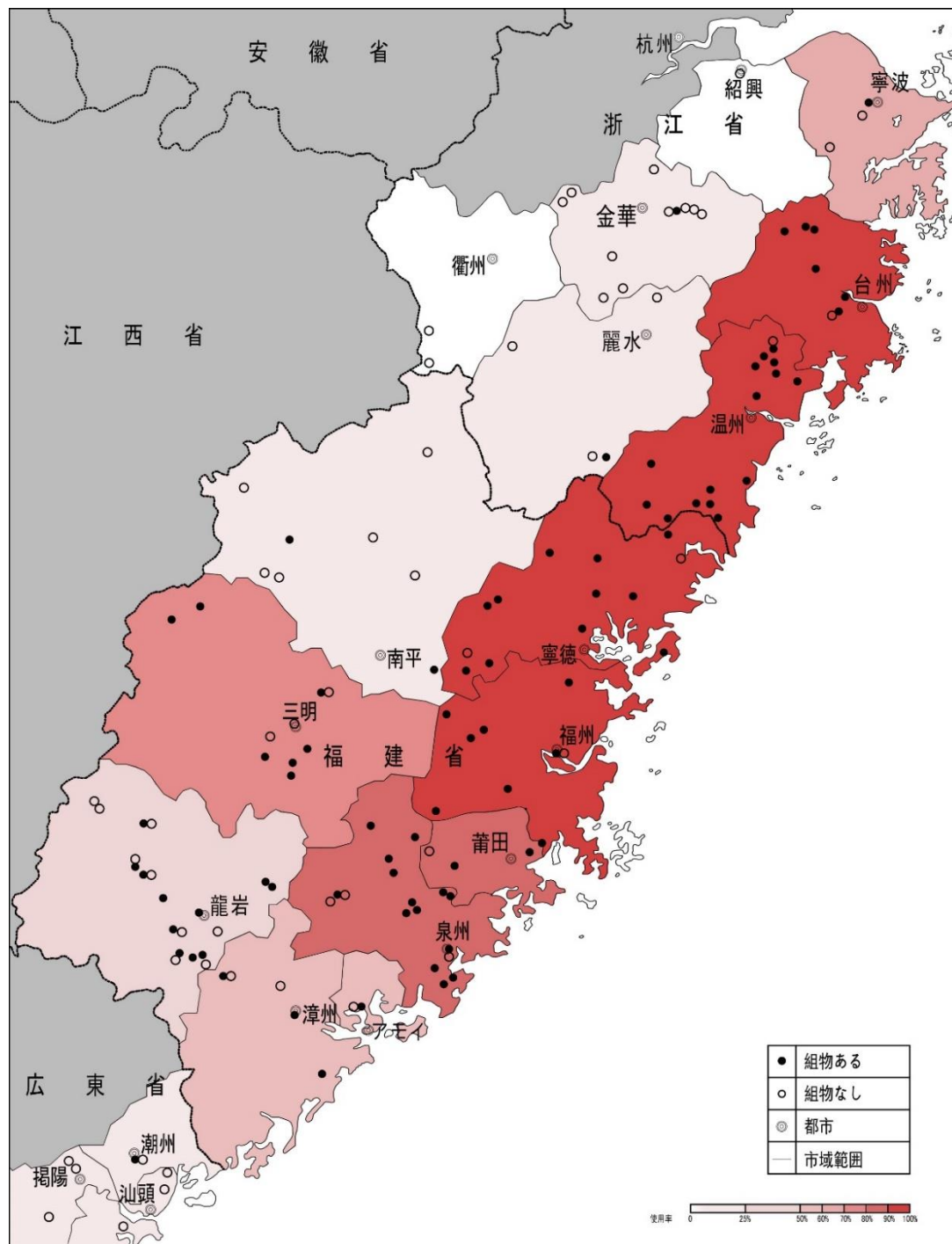


図 4.9 組物構造の使用率における地域分布

4.1.3 東南海岸地区民家の組み分け

すべての特徴要素をまとめてみると、東南海岸地区という大きな区域の下に、さらに二つの区域に分けることができる。これは東南海岸地区の中央に縦貫する連峰から二分して、東の海岸部と西の内陸部である。東南海岸地区民家の特質をもつ区域、いわば東南海岸地区に特有な住居文化圏はまさにこの東の海岸部である。そして、内陸部は、複数の文化から共通に影響する区域といえる。

明清時代の駅路・官道を参照するとよりわかりやすくなる。閩北浙西を中心とする内陸部は、古代から福建と外の世界を連結するかなめである。故に、ここは外部文化侵入の第

一步である。そして海岸部は、陸路の官道は難航で、閩東と浙南の間にさらに何の官道もない状態になる。ここはさすがに中原文化が入りにくいだろう。しかし、盛んである海洋貿易によると、東南海岸地区海岸部は航路で繋がって、民間の交流はよりやすくなる。つまり、東南海岸地区海岸部に特有な文化圏を形成することも自然だろう。

ちなみに、東南海岸地区海岸部の両端（閩南と浙東）には、別の文化圏と近隣するから、少しでも別文化の影響を受け、建築文化に関する特質もすこし変更したことがある。海岸部には、一番山が多く、辺鄙な浙東・閩東地域は逆に、東南海岸地区住居文化圏の核心区域と考えられる。

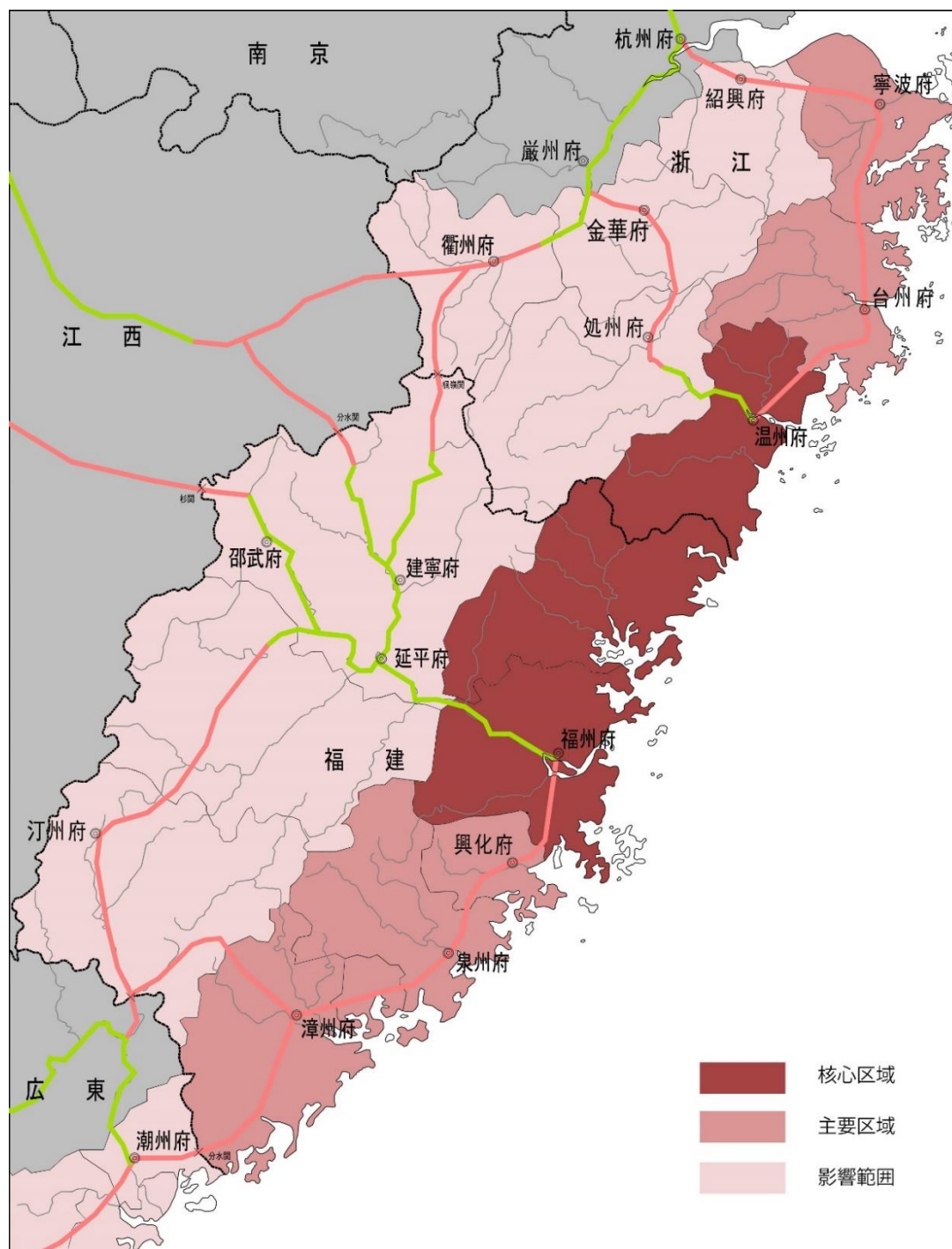


図 4.10 東南海岸地区民家の組み分け

4.2 東南海岸地区民家の地域性の特徴

4.2.1 方言区から東南海岸地区民家の地域性を見る

言語は民族の発展によって、重大な影響と作用がある。言語は人類社会交流の道具で、共通する言語がなければ、同一な民族や地域集団を形成することができない。民族共通言語はいわば民族を形成する過程の方言に基づくと同時に、他の方言のよい部分を吸収して形成したものである。特定の歴史条件（戦争・国家分裂など）から、民族内部の各区域の交流を遮断されることがある。この現象が続けば、方言と地域集団（民系）が生み出される。地域集団による方言は、集団内部の文化が自ら発展する結果である。中国の各方言が、互いに理解することができないという事実も、中国各地の土着下地と各地の交流程度の差があるからである。

そして、東南海岸地区の特殊な地縁条件から、各方言区は、さらに各次方言区の中に、言語による直接な交流すらできない。こういう極端な地域性は、住居文化の地域性を生み出す。東南海岸地区建築特徴の分布は、方言区と一致していることも、こういうことである。ここからは、いくつかの建築特徴の地域性から、方言と民家地域性のつながりを検討する。

（1）浙南にある閩語地域

近世に福建から浙江へ引っ越した人々は、福建と浙江の境に定住した。だから現在は、温州の南部に閩南方言を話す地域（蒼南県と平陽県の一部）と閩東方言を話す地域（泰順県の大部）がある。この地域は、閩南・閩東の建築文化を持っている。泰順県辺りに、挿肘木構造を利用する民家が多い、平陽県の南には閩南建築の棟飾りを持っている。



泰順民家の挿し肘木



平陽民家の閩南風立面と棟飾り

図 4.11 浙江温州民家の福建要素

（2）閩北にある江西方言地域

閩北方言は、言語研究者によると、実は福建方言と江西方言の融合である。両方の語彙をそれぞれに持ち込んだ結果として、建築文化も両方の要素を同時に存在する。平面の多進四合院、軒出のコーベル、防火壁の構造は江西的で、穿斗挿梁、海老虹梁などの特徴要素は東南海岸地区的である。

（3）潮汕の閩南方言地域

潮汕地域は変化した閩南方言を話しながら、客家文化を大量受け入れる。だから潮汕地域は、閩南建築文化の特徴より、客家文化的な軒出なし、版築壁構造が多くある。しかし、年代が古い建物は、挿肘木をもって、閩文化と繋がっていた証拠が存在する。たとえば潮州の許氏邸（宋から建造した伝承がある）は、挿肘木構造を持つ。そして寺院建築として

の潮州開元寺天王殿（一部の部材は宋の時代のもの）も挿肘木と穿斗式貫構造をたくさん使用する。



潮州の許氏邸

潮州開元寺天王殿

図 4.12 潮州の挿肘木構造残存

4.2.2 人口移動から東南海岸地区民家の地域性を見る

しかし方言は地域集団（民系）を生み出す唯一の条件ではない。地域集団誕生を推進させる歴史事件が必要である。戦乱・外族侵入などで、漢人を中原地区から押し出す。新しい過酷な住環境に対する中原人は、団結して外敵を抵抗し、生存空間を求めるしかない。こうしたことを長年繰り返していくと、独立な地域集団（民系）を生み出すのも自然だろう。

（1）漢人の入閩ルート

北方漢人が福建に入る時代とルートより、東の海岸部と西の内陸部に区切ることができる。前者は閩東（寧徳・福州）、閩南（泉州・アモイ・漳州）と莆仙（莆田・仙遊）の地域を含み、後者は閩北（南平）、閩西（龍岩）と閩中（三明）などの地域を含む。海岸部と内陸部の境界は晋代晋安郡と建安郡の境界と同じ、歴史的な交通ルートとつながっている。福建への植民は二つの方向からで、海路から進出する北方移民は、各河口に定住し始め、城壁都市を建造して、晋安郡になる。そして、河口から川に沿い、内陸へ拡張する。もう一つの方向は陸路で江西・浙江から、武夷山・仙霞嶺を越え、福建に入る。そして閩江の上流に城壁都市を建造し、建安郡となる。

つまり、漢人の入閩ルートも海岸部と内陸部から二分して、これは今東南海岸地区民家があらわす地域性と一致している。

（2）閩人は外へ

宋元の際、閩人は戦乱を避けて、広東・海南島・浙江温州へ移動した。この閩人の移民潮は、東南海岸文化の拡張へ協力した。具体的には前の方言に関する節を参照する。

4.2.3 川流域から東南海岸地区民家の地域性を見る

前述のように、古代交通によって、最も重要なのは川の航路である。東南海岸地区の川が短くて、独自に海へ流す場合が多い。そして二つの川の間に、人が立ち難い山々がある。ゆえに、同一の川流域に住む人々は、社会・交通・経済・文化など様々な要素に独自性をあらわす。こういう独自性があるこそ、福建という北宋から成立した行政区域の範囲は今まで大きな変化はしなかった。

ただし、大きな川は地域文化の形成を推進するだけではなく、平和の時代に貿易物流とともに、外来文化を持ち込むことも常にある。つまり、その大きな川から離れた地域は、より原始的な文化性格を反映することができる。

(1) 汀江（韓）江流域と九龍江流域

閩西・潮汕に汀江、閩南南部に九龍江という二つ大きい川をもって、東南海岸地区のしたにさらに自分の地域文化を持っている。その原因はこの二つの川がもつ貿易物流と文化交流である。建築の特徴要素によって、面白い点二つある。

まずは平面配置にいついては、この地域は囲屋式平面の使用率が一番高い。特に土楼は一番多い。世界遺産となる福建土楼も、この地域に集中している。

次は版築壁の利用である。浙江には、レンガ壁が多くて、版築壁はほとんどないのに対して、この地域はほとんど版築壁である。

土楼にも、版築壁にも、この地域の特色は、おそらく客家文化と繋がっている可能性が高い。

(2) 閩江流域

閩江は東南海岸地区最大の川であるが、閩江流域の住居文化は一樣ではない。閩江上流の閩北地域は、東南海岸地区民家の特質をあまり保持していない。閩江中流の閩中地域は、様々な特徴要素が混在する地域である。まさに、この大きな川は地域文化の形成を推進するだけではなく、平和の時代に貿易物流とともに、外来文化を持ち込んできたのだろう。

そして閩東地域に属しながら閩江沿いの古田県、福州市は、閩東地域他の縣市より建築文化の混在が見られる。古田県の民家は、多進四合院の平面をもち、防火壁を使用し、さらに組物構造も使用しない（古田利洋花厝 8 番）。同じ事例は、福州市も存在している（福州揚宅 2 番）。これは、外来文化の影響と考えられる。

(3) 大きな川の流域に属しない地域

こういう大きな川の流域に属しない地域に注目して見ると、面白い傾向が認められる。つまり、古田県以外の寧徳、戴雲山地帯、温州の三地域はお互いに隣接関係がないが、平面配置（一字式と三合院）、構造パターン（木質壁・海老虹梁・組物構造）が類似する。

すなわち、大きな川の流域に属しない山岳地帯は、より原始的な文化性格を遺存・継承している可能性が高い。こちらの地域こそ、東南海岸地区民家の核心区域であるだろう。

4.3 東南海岸系民家

東南海岸地区民家は、特に、東南海岸地区海岸部の伝統的民家は、近い特徴を持って、他の近隣区域と大きな相違点がある。つまり、「東南海岸系民家」という概念が成立したと認められる。

4.3.1 東南海岸系民家の特質

(1) 平面と構造的な特質

東南海岸系住居は中国南方系住居文化の一つの分枝であり、同時に自分の特色を持っている。建築学の角度から、東南海岸地区の 290 の事例を分析・検討し、東南海岸系住居文化の六つの特徴をまとめた。

正廂自由：平面配置においては、東南海岸系民家は北方系民家のような南北軸対称、正房廂房の差別明白にこだわってなく、もっと自由な平面配置に気に入るように：桁行方向に展開して、正房・廂房を同じ軒下に入る「一」字式平面；中心主屋が周りの囲屋から囲まれている「囲屋式」平面；及び十字中心対称し、四面に庁がある「対合式」四合院平面配置が主に採用されている。つまり、東南海岸系民家は自由な平面配置と柔軟な建築空間の組合があって、平面の多様性が生み出した。

穿闘構造：柱が穿（貫）から連結され、一体化した「穿闘式」フレーム構造は嶺南・客家地区以外の南中国・西南中国民家に最もよく採用されたフレーム構造である。東南海岸系民家も「穿闘式」フレーム構造を主体として、これから生み出した挿梁構造と穿闘抬梁混合式構造も、多元文化融合のことを体現していた。

海老虹梁：海老虹梁は、高さが違い柱と束柱の間の繋ぎ梁で、東南海岸系民家は、この梁を曲る虹梁の形に造り、独特な意匠を現れる。海老虹梁は、斜めの繋ぎ材として、穿斗フレームの構造を補強することができる。そして、海老虹梁は、禪宗様の意匠として日本まで伝わり、東南海岸地区重要な構造作法と示唆する。

角柱簡礎：丸柱が樹木本来の状態をあらわすに比べて、面取りの角柱は東南海岸地区独特な建築文化を体現した。柱への工夫に対して、東南海岸系民家の礎盤への彫刻は、北方系民家より遥かに素朴である。東南海岸系民家の礎盤は主に簡単な方形・円柱形・太鼓形などで、彫刻や模様がすくない。東南海岸地区に礎盤に重視しないことは、この地区がもと礎石なく掘立柱の伝統があったからかもしれない。

挿肘木造：軒出の構造は屋根を支えると身分を見せびらかすという構造・装飾両方の機能を持っていて、住宅の最も重要な部位の一つである。閩東地域に、都市の家にも農村の家にも、金持ちの家にも貧しい家にも、挿肘木構造を使っている。挿肘木は東南海岸地区文化のシンボルになっていた。外来文化の影響によって、いろんな変型や単純化があっても、挿肘木構造が頑強に存続していた。東南海岸系民家の挿肘木構造がいわば東南海岸地区建築文化の最も重要な特徴である。

木造の壁：レンガが普及する前に、嶺南・客家地区と北方漢族地区の板築土壁に対して、南中国の木造民家は主に木造の壁である。木造の壁は板築土壁より、防火性が悪いだが、良い防湿・防結露の性能をもって、南方多雨高湿の気候を対応する。レンガが中国全土に普及する後、東南海岸地区に板壁・竹壁・竹骨真壁及び木造の壁とレンガ防火壁一緒に使う二重壁が残っていた。現存する木造の壁が多くないが、東南海岸地区建築文化の不可欠な特徴である。

(2) 地域的な特質

海岸部：

東南海岸地区の中、海沿いの浙東（寧波・台州・温州）、閩東（福州・寧徳）と閩南（莆田・泉州・アモイ・漳州）地域は、東南海岸地区の核心地域である。そして、さらに閩東地域の農家を代表として、東南海岸系民家建築文化を反映している。

浙東区：浙東地域の住居文化の主な特徴は：一字型平面、穿闘フレーム構造、斗栱の軒出構造、板壁と竹骨真壁などである。斗栱の軒出構造という近世発生した新しい技術以外

には、東南海岸系民家要素をたくさん保っている。ちなみに、浙東地域が北方の江南地区からの影響を多少受けて、コーベル構造や封火山牆などの作法も採用している。

閩東区:広義的な閩東区は閩東方言を話す福州・寧徳と浙江温州南部地域を含んでおり、その民家の特徴は、東南海岸系民家の六つの特徴と一致している。閩東区は、東南海岸系民家建築文化圏の核心地域の核心である。

閩南区:閩南地域は近世の海外貿易による東南アジアから帰国の華僑はたくさんいると客家文化の影響二つの原因から、多元文化融合の区域である。しかし、挿肘木構造と、「囲屋」式の平面など東南海岸系民家特徴要素もたくさん保っている。

内陸部:

東南海岸地区内陸部の平野と溪谷地帯である。その中に、江南地区に近い浙中—閩北（金華・衢州）地域と客家地区に近い閩西—潮汕（龍岩・潮州・汕頭）地域は、東南海岸地区文化と江南文化あるいは客家文化の影響を同時に受けて、さまざまな混合的な構造形式が生み出した。これらの地域は東南海岸系民家建築文化の影響範囲であり、東南海岸系民家文化圏に入ることができない。

浙中—閩北区:東南海岸系海岸地区建築文化と江南地区民家建築文化の影響を同時に受けて、主要な多進四合院・挿梁構造・コーベル構造・封火山牆などの特徴はみな江南地区住居文化である。そして、閩北の挿肘木変型と浙中の囲屋式平面は、東南海岸系民家建築文化とかかわって、その影響が明白であった。

閩西—潮汕区:東南海岸系民家建築文化と客家地区民家建築文化の影響を同時に受けて、主要なレンガ/土壁造り・軒出の木構造なしなどの特徴は客家系の住居文化である。そして、少しでも残した挿肘木構造は、東南海岸系民家建築文化の影響の証拠であった。

4.3.2 東南海岸系民家の形成と衰退

現存する東南海岸系民家は、決して永久に不変ではなく、一方的に影響を受けて変化することもない。東南海岸系民家建築文化は、「越人」の住居文化を下地、中原漢族移民文化を表層として、長い歴史の中にお互いに影響と融合を繰り返した。だから、東南海岸地区民家の各作法の時代性を検討し、別の角度から東南海岸地区民家の独自性と地域性特徴をまとめることができる。

(1) 百越の建築伝統

河姆渡などの先史遺跡にも、現存する西南中国少数民族住居にも、あるいは江南から華南の漢族住居にも、穿闘式フレーム構造やその痕跡を見られる。この柱と貫を基づいての一体化フレーム系統は南中国住居文化の最も重要な特徴である。

そして、南方多雨高湿の気候に対応するため、百越の人々は、先史時代から、高床式住居—「干欄式」構造を創造し、南中国住居文化のもう一つの核心特徴になる。河姆渡・馬家浜・良渚など、長江下流の遺跡から、江西清江營盤里・四川成都二十四橋など長江中上流の遺跡まで、出土した掘立柱の断片とその上にある床を支える大引・板などの部材と、史書に繰り返して記録した「人居其上、畜居其下」の木造楼阁は先史・古代の高床式住居の長い歴史を証明する。

(2) 中世の民族融合と東南海岸系民家の成型

唐宋時代の東南海岸地区は急速に発展して、「越海系」と「閩海系」の地域集団もこの時代から形成していた。その同時に、東南海岸系民家建築文化もこの時代に、民族融合とともに成型した。

合院と長屋の融合：決定的な証拠がまた不足しているが、先史と古代の東南海岸地区民家の平面配置は「一」型である可能性が高い。そして、東南海岸地区民家にずっと存続する廊院式の四合院は、中世の移民が持ってきた合院式の平面配置は東南海岸地区に普及が始まった。しかし、元の「一」型平面は見捨てられるわけにはいかなく、依然として存続するとともに、合院式平面と融合して、東南海岸地区特有な「対合式」「囲屋式」平面を発生した。

斗拱と穿闘の融合：組物は東アジア木造建築の最も重要な特徴要素の一つで、軒を支える構造的、見せられる装飾的な機能を同時にもっていて、さらに身分の象徴となる。「皿板」などの証拠において、組物も中世の移民とともに東南海岸地区へ進入する。ただし、東南海岸系民家の貫構造に適応するために、大斗を省略し、挿肘木になるしかない。そして、挿肘木の登場は北方系の美学と南方系の技術との傑作という、東南海岸系民家建築文化の頂点でも言い過ぎではない。

(3) 近世中原文化の再伝入と東南海岸系民家の衰退

明清時代の東南海岸地区民家は、北方漢族との技術的・文化的な交流によって、新たな変化が生み出した。この時期あら発生した重要な変化はレンガ壁の普及と木造部材の衰退・装飾化である。

多進四合院の伝入：多進四合院は、元代以後帝都北京に発生した新しい住宅建築平面形式である。この平面配置は東南海岸地区も伝入して、上流民家の平面形式へ影響を与える。第二章の検討によって、東南海岸地区明代多進四合院の数は清代より少ない、閩北、浙西など、中原地区に近い地域の多進四合院の数もより多くである。つまり、東南海岸地区の多進四合院は近世から閩江沿い西北から、東南への伝播ルートが見られる。

レンガ壁の普及：明の時、レンガを作る技術が発展して、産量が激増した。レンガは防火・防水性優良の材料で、レンガ壁が迅速に全国まで普及する。東南海岸地区もレンガ壁を広く利用し、特に平野部などの地域には、レンガ壁がよく見る。しかし、外来の他の技術と同じく、レンガ壁も東南海岸地区の土着作法と融合し、木材の軸部構造の外に、上部荷重が全然受けないレンガ壁を築く。そして、もっと極端的な作法は、竹骨真壁の切妻壁の外で一定の距離を離れて、さらに防火専用のレンガ壁を築く。これらのさまざまなレンガ壁本土化の事例は近世東南海岸地区の文化融合を反映した。

木造部材の衰退：東南海岸系民家の特徴である海老虹梁・挿肘木などの作法は、清代から衰退が始める、地域性を少しずつ失うことになった。一つは海老虹梁作法の衰退で、明代遺構の海老虹梁使用率は清・民国遺構の海老虹梁使用率より高い。一つは挿肘木の衰退で、清代遺構の使用率が低下と共に、影響範囲も縮小した。

装飾化の傾向：清以前の建築彫刻と装飾は素朴で、唐草の模様と浅い浮き彫りしかなかった。明末が人物・山水・動物の彫刻が出現し、清の乾隆年間になると回紋の龍・山水樓閣・人物物語など豊かな彫刻が現れた。建築部材の装飾化の傾向は、中国全土に広まって、東南海岸地区も巻き込んだ。つまり、より装飾が豊かになると、時代はより遅くなっていた。

まとめて見ると、近世によって、「多進四合院」「レンガ防火壁」などの外来作法の抬頭と共に「海老虹梁」「挿肘木」などの特徴の衰退が見られ、「部材装飾化」の傾向もみられ、東南海岸系民家文化圏の衰退が認められる。そして東南海岸地区の各次文化圏の中、各地方集団と各種の外来文化の融合によって、東南海岸系民家の変型が出現し、伝統の引き継ぎとともに、新しい改変が生み出した。

(4) 東南海岸系民家の特徴による時空分布

東南海岸系民家建築文化は、「越人」の住居文化を下地、中原漢族移民文化を表層として、長い歴史の中にお互いに影響と融合を繰り返したから、東南海岸地区の各次文化圏の間に、文化融合の程度の差が現れた。つまり、東南海岸地区の現存民家の中に、各地域・各時代・各文化融合の程度の異なりから、東南海岸系民家の時空的な分布が把握できる。

まず、閩東地域から北と南へ、民家の各作法の成型の時間がより遅くなる。たとえば軒出の構造のなか、閩南の垂花柱構造と浙南の斗栱構造は、挿肘木構造より遅い、そして閩北―浙中のコーベル構造はさらに遅くなった。そして、山岳地帯・農村部・交通線路から離れた区域の民家の作法は、もっと原始的、文化融合はより不完全である。代表的な例は、山岳地帯の高床式住居遺存と、木材の壁の使用が多い。福州のような大都市、桂峰村のような交通線路のかなめには、封火山牆・垂花柱などの外来作法はよくみえる。

4.3.3 東南海岸系民家の位置づけ

(1) 東南海岸系民家と北方系民家の区別

東南海岸系民家は北方系民家と大きな相違性がある。平面としては、四合院平面を変化して、北方漢族文化のような尊卑・長幼觀念が薄い、対等的な生活空間のほうが望む。軸部としては、東南海岸系民家は、南方木造穿斗式貫構造を中心にして、北方の抬梁式構造と違う。最後に、壁構造については、北方系の版築壁→レンガ壁構造は、一定の程度に東南海岸系民家自分の真壁構造を影響して、東南海岸系民家が今も版築壁→レンガ壁構造は主流である。

(2) 東南海岸系民家と南方系民家の異同

東南海岸系民家は、南方系民家（南中国漢民族住宅）の分枝である。南中国は、先史から古代まで百越の民が住んで、自らの土着文化を持っている。そして漢民族から征服し植民地化され、文化の融合を行う。だから南方民家の間に共通点はその同じであった土着文化要素である。まず同じ南方木造穿斗式貫構造系統に属し、そして同じ北方系からの影響を受けて木質の壁構造から北方系の版築壁→レンガ壁構造へ変更する。

しかし、東南海岸系民家は、より多くの土着文化要素を保っている。平面配置による多進四合院を中心にした南方系民家と違い、独自の横方向展開自由平面配置を守る。最後に軒構造に対して、南方系民家にはコーベル構造がよく見られ、東南海岸系民家のほうが組物構造を利用する。

東南海岸系民家は南方系民家の中に、漢民族政治中心から一番離れた地域を持ちながら、より多くの土着文化特色を守ってきた。南方系民家の中の一番特徴が多い住居様式と言える

(3) 東南海岸系民家の位置づけ

羅香林が民系の概念を創造した後、建築史家が民系の概念を利用し、民家の系譜を検討し始めた。その後、陸元鼎・余英のほか建築史家は民系別の漢族民家建築を研究して、北方家系と南方系を二分して、そして南方系民家を更に南方五民系に対応し、五つの漢族南方民家様式を分けられた。

越海系—浙江を中心にして

閩海系—福建を中心にして

湘贛系—湖南と江西を中心にして

南漢系（広府系）—広東・広西を中心にして

客家系—江西南部と広東東部を中心にして

本論文、この越海系と閩海系をあらためて検討し、これらの間の境界を再定義することができる。すなわち、越海系民家の範囲は、钱塘江流域と钱塘江以北の浙江である。東南海岸地区の海岸部の越海系・閩海系の人々が住んでいる住居は、近い建築、文化の特徴を持って、東南海岸系民家を構成する。

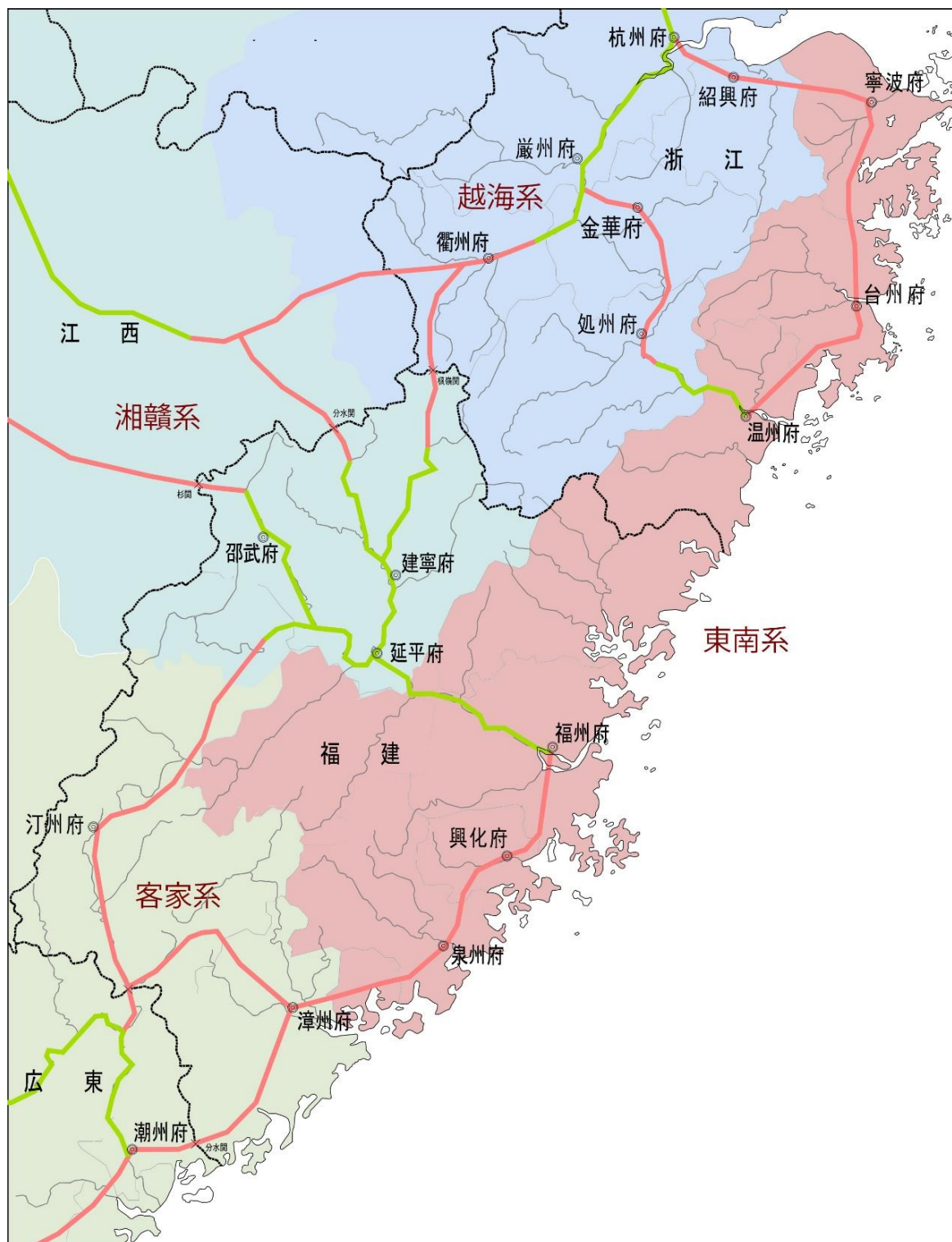


図 4.13 東南海岸系民家の範囲

4.3.4 東南海岸系民家の系譜

上述のように、東南海岸系民家の特質には以下にある：

- 平面配置によって、主屋式配置を使用する
- フレームによって、穿斗の貫構造を使用する
- 軸部によって、角柱・海老虹梁を使用する
- 壁構造によって、防火壁を使用しない
- 軒構造によって、組物を使用する

そして、それらの特徴の地域分布は一致している。閩東・浙南地域を核心として、浙東・福建中南部海岸部を主要区域となる。これ以外の浙中・浙西・閩西・閩北は東南海岸系民家文化の影響範囲となり、様々な建築特徴が混在する。

東南海岸地区の伝統的民家の本来的な特徴（建築形式の特徴と地域性）全部備える「理想的な東南海岸地区民家」すなわち「東南海岸系民家」の原形といえる。その結果、東南海岸地区の伝統的民家の体系化が可能となり、「東南海岸系民家」は「北方系」「客家系」と違い、「南方系」民家と共通しながらも独自の特質を持っている独特な民家系統であるという位置付けが明らかとなった。東南海岸系民家文化圏は中国南方系民家文化圏の一つの分枝として、その独特の住居文化を持っている。そして、正廂自由・穿闘構造・海老虹梁・角柱簡礎・挿肘木造・木造壁という六つの特徴生み出したことが東南海岸地区民家の特質といえる。この六つの特徴は中原漢族文化と東南海岸地区土着文化の融合によって、中世期に形成され最高潮に達したと判断することができる。そして、近世において「多進四合院」「レンガ防火壁」などの外来作法の抬頭と共に「海老虹梁」「挿肘木」などの特徴の衰退が見られ、東南海岸地区民家の衰退が認められる。

一方、東南海岸地区の各次文化圏の中、各地方集団と各種の外来文化の融合によって、東南海岸地区民家の特質が出現し、伝統の継承とともに新しい改変も生み出された。東南海岸系民家は、東南海岸地区閉鎖的多山の地理条件を基盤に、中原文化と地方文化の融合をきっかけに形成した。そして、東南海岸地区特有な外向的、商業貿易的性格をもって、様々な建築作法を吸収しながら、海外貿易をするとき世界へ伝わる。近世の台湾、東南アジア、そして日本の川崎まで、福建・浙江の商人によって、東南海岸系民家文化の種を撒き散らしていた。

まとめ

各章のまとめ

第一章は研究対象となる東南海岸地区・東南海岸地区の歴史的集落及び東南海岸地区伝統的民家における背景としての自然的・歴史的・経済的・文化的な状況をそれぞれに検討する。

第二章は東南海岸地区に現存する伝統的民家を規模平面形式から分類し、各型の特徴と地域分布を検討し、互いの関連性を論じた。東南海岸地区民家の平面配置は、おもに①「一」字式平面、②合院式平面、③囲屋式平面の三つの類型が認められる。「一」字式平面は横方向展開の特徴を持って、東南海岸地区民家平面配置の重要な特徴と考えられ、東南海岸地区に存在する三合院式平面、囲屋式平面は、すべて「一」字式平面との関連性が見られる。つまり三合院の主屋、囲屋式住宅の囲屋は皆「一」字式長屋の変形と考えられる。そして多進の四合院式平面は、中国における伝統的民家建築の一般的な作法であり、外来の作法と認められるので、東南海岸地区の伝統的民家建築特質とは言えない。最後に、東南海岸地区民家の時代性・地域分布・主な生業をまとめて検討し、東南海岸地区民家中の合院式配置と農耕文化・囲屋式配置と商売文化という相互関連を明らかにし、東南海岸地区民家平面配置の特徴は地域経済と繋がりが深いことを示した。

第三章は東南海岸地区の伝統的民家の構造的な特徴を抽出・整理し、その地域分布及び中国北方民家構造との相違点を検討した。まず、①軸部に関する梁・柱構造は、貫構造を中心にする穿斗式フレームであること、②海老虹梁の形に近い繋ぎ材、③そして時にある面取り角柱、以上は東南海岸地区の伝統的民家の著しい特徴である。

次に壁構造によって、レンガが普及する以前について、北方漢族地区の版築土壁に対して、南中国の木造民家は主に木造の壁を設ける。木造壁は板築土壁より防火性が低い、防湿・防結露の性能を有するので、南方の多雨高湿の気候に対応する。明代以降レンガが中国全土に普及するため、外来のレンガ造防火壁の影響が次第に広がる、そのため東南海岸地区の伝統的民家独自の板壁・真壁構造は少なくなり、折衷の二重壁構造（木造軸部の外周壁にレンガ壁を設ける）の使用が現れる。

最後に、軒構造は東南海岸地区の伝統的民家の最も重要な特徴と思われる。福建東部は、都市にも農村の家にも、金持ちの家も貧しい家も、挿肘木構造を使っている。そして浙江の斗栱作法にも、福建の挿肘木作法にも、顕著な地域的特色が認められる。すなわち、①浙江東部の出組斗栱、②浙江南部の二手先斗栱、③福建東部の三手先挿肘木、④福建南部の二手先斗栱、⑤他の地域に存在している挿肘木の変形、という分布傾向である。そして、斗栱と挿肘木をまとめて考える組物構造は、長い歴史・強い地域性を持ちながらも中国中世以前の建築軒出構造が変化しながら継承されてきた結果と思われる。

第四章は東南海岸地区の伝統的民家の著しい特徴である、①横に展開する主屋式平面、②海老虹梁、③角柱構造、④防火壁構造を利用しないこと、⑤組物構造という五つの特徴をまとめて、地理的条件、言語条件、歴史的条件を加味して、東南海岸地区の各地域（市の行政区画）別各特徴の使用率を分析検討した。その結果、以下のことが明らかとなった。

まず東南海岸地区は大きく二つの区域に分けることができる。これは東南海岸地区の中

央に縦貫する連峰をもって二分される東部（海岸部）と西部（内陸部）である。東南海岸地区の伝統的民家の特質をもつ区域、すなわち東南海岸地区に特有な住居文化圏はまさにこの東の海岸部であると認められる。そして、内陸部は、複数の建築文化が相互に影響し合う区域であるといえよう。

次いで、明清時代の駅路・官道を参照し、人口移動、方言区、川流域などの角度から東南海岸地区の伝統的民家の地域性をさらに限定した。その結果、駅路・官道から離れて、大きな川流域に属しない閩東北部山岳地帯、浙南南部山岳地帯と福建中部戴雲山地帯にさらなる固有の建築文化が残存する可能性を認めるに至った。

結論

以上のように東南海岸地区の伝統的民家の本来的な特徴（建築形式の特徴と地域性）全部備える「理想的な東南海岸地区民家」すなわち「東南海岸系民家」の原形といえる。その原形に最も近いのは閩東北部・浙南の山岳地帯の民家で、それに次ぐのが浙東・福建中南部海岸部の民家である。つまり東南海岸系民家の源流は、閩東・浙南を核心として、浙東・福建中南部海岸部を主要地域としていたと考えられる。これ以外の浙中・浙西・閩西・閩北は東南海岸地区民家文化の影響範囲となり、様々な建築の特徴が混在する。

東南海岸系民家文化圏は中国南方系民家文化圏の一つの分枝として、その独特の住居文化を持っている。そして、正廂自由・穿闘構造・海老虹梁・角柱簡礎・挿肘木造・木造壁という六つの特徴生み出したことが東南海岸地区民家の特質といえる。この六つの特徴は中原漢族文化と東南海岸地区土着文化の融合によって、中世期に形成され最高潮に達したと判断することができる。そして、近世において「多進四合院」「レンガ防火壁」などの外来作法の抬頭と共に「海老虹梁」「挿肘木」などの特徴の衰退が見られ、東南海岸系住居文化圏の衰退が認められる。そして東南海岸地区の各次文化圏の中、各地方集団と各種の外来文化の融合によって、東南海岸系民家の特質が出現し、伝統の継承とともに新しい改変も生み出された。

東南海岸地区民家の特質とその特質をとどめる地域性が存在する以上、「東南海岸系民家」という概念は成立する。その結果、東南海岸地区の伝統的民家の体系化が可能となり、「東南海岸系民家」は「北方系」「客家系」と違い、「南方系」民家と共通しながらも独自の特質を持っている独特な民家系統であるという位置付けが明らかとなった。また東南海岸地区の伝統的民家の祖型は宋以前中国中原建築様式と東南海岸地区土着建築要素の融合した新様式と推定され、従来より一歩進んで東南海岸地区の伝統的民家独自の建築様式を限定できた。福建福州・寧徳から浙江温州までの東南海岸地区の核心には、強い様式の統一性が認められる。穿斗式貫を中心するフレーム構造、角柱と海老虹梁など特有な部材を持ち、一つの主屋を中心とする平面配置、深い軒出や視覚的整備感も目指した組物構造（斗拱と挿肘木）が主要な特質と認められる。そして方言によって分断された東南海岸地区各地域の差を見ながら、東南海岸地区の伝統的民家の特質を持つ海岸部と様々な様式要素が混在する内陸部を分け、海岸部こそ東南海岸地区の伝統的民家の核心区域と特定した。また、東南海岸地区の伝統的民家の研究により、東南海岸地区の伝統的民家と中国中世建築様式、そして日本の大仏様、禅宗様とのかかわりに関して示唆を与えることができた。

これからの展望—東南海岸地区伝統的民家と日本中世建築の繋がり

東南海岸地区の社会・経済・文化は唐宋時代から成立していた。その後、宋日貿易が、

東南海岸地区を拠点として盛んとなった。陳和卿と大仏様、あるいは禅宗各派の日本伝来などの事件は東南海岸地区と日本の広い経済的・文化的な交流を示しているので、東南海岸地区の建築様式は日本の中世建築とつながるのも自然だろう。「大仏様は福建地方の建築様式を基本としている」という理解は定説化しているとはいえ、東南海岸系住居文化と日本中世建築新文化の間の関連性は、未知の領域がまた大きくて、もっと具体的に検討する余地がある。

まず、大仏様の代表的な作法―挿肘木は、福建特に閩東地域の民家の中に広く普及している。この点が「大仏様の源流が福建地方の建築様式」という結論の有力な根拠である。しかし、民家と寺院建築の比較は、あくまでも一つの視点でしかない。東南海岸系住居と日本の住居の間に、関連性があるかどうか、筆者が今後注目するのは、書院造り住宅である。

周知のとおり、書院造り住宅は中世以降、寝殿造り住宅を母体に変化発展した上層階層住宅である。その変化発展の重要な担い手として武士階層が存在する。そしてその変化発展時期は禅宗様の導入時期と近い。そのため書院造り住宅の形成と東南海岸系民家は関連性があるかもしれない。たとえば閩東方言の中に、日常生活の廂房空間を「書院」と呼ぶ。今のところ、東南海岸系住居と書院造との関連性を論証することはできないが、それらの関係は研究すべき課題と言わざるを得ない、本論文で示した成果をもとに、新たな日中建築文化の関係解明に努めていきたい。

参考文献

著作

- 1) 王乃香, 陳瑜ほか: 福建民居, 中国建築工業出版社, 1987
- 2) 戴志堅: 福建民居, 中国建築工業出版社, 2009
- 3) 李秋香, 羅德胤, 賀從容ほか: 福建民居, 清華大学出版社, 2010
- 4) 中国建築技術発展中心歴史研究所: 浙江民居, 中国建築工業出版社, 1984
- 5) 丁俊清, 楊新平: 浙江民居, 中国建築工業出版社, 2009
- 6) 黃為雋, 尚廓, 南舜薰ほか: 閩粵民宅, 天津科学技術出版社, 1992
- 7) 陸琦: 広東民居, 中国建築工業出版社, 2008
- 8) 黃浩: 江西民居, 中国建築工業出版社, 2009
- 9) 陸元鼎: 中国民居建築, 華南理工大学出版社, 2003
- 10) 余英: 中国東南系建築区系類型研究, 中国建築工業出版社, 2001
- 11) 潘谷西: 中国建築史, 中国建築工業出版社, 2009
- 12) 張玉瑜: 福建伝統大木匠師技芸研究, 東南大学出版社, 2010
- 13) 劉致平: 中国居住建築簡史: 城市, 住宅, 園林, 中国建築工業出版社, 2000.9
- 14) 姚承祖, 張至剛, 刘敦楨: 营造法源, 中国建築工業出版社, 1986
- 15) 梁思誠: 营造法式注积, 梁思誠全集・第7卷, 中国建築工業出版社, 2001
- 16) 楊鴻勳: 楊鴻勳建築考古学論文集, 清華大学出版社, 2008
- 11) 易華: 夷夏先後説, 民族出版社, 2012
- 17) 羅香林: 客家研究導論, 台北古亭書店, 1975
- 18) 李濟: 中国民族的形, 江蘇教育出版社, 2005
- 19) 葛劍雄: 中国移民史, 福建人民出版社, 1997
- 20) 楊琮: 閩越国文化, 福建人民出版社, 1998
- 21) 李如龍: 漢語方言的比較研究, 商務印書館, 2001
- 22) 平井聖: 日本人のすまい, 市ヶ谷出版社, 1988
- 23) 宮川英二: 風土と建築, 彰国社, 1979
- 24) 橋本萬太郎: 民族の世界史 5: 漢民族と中国社会, 山川出版社, 1983
- 25) 浅川滋男: 住まいの民族建築学, 建築資料研究社, 1994
- 26) 吉田桂二: 日本人の住まいはどこから来たか—韓国・中国・東南アジアの建築見聞録, 鳳山社, 1986
- 27) 茂木計一郎: 中国民居の空間を探索, 建築資料研究社, 1991
- 28) 施堅雅 (G.W. Skinner), 葉光庭と他訳: 中華帝國晩期的城市, 中華書局, 2000
- 29) Paul Olive: Encyclopedia of Vernacular Architecture, Cambridge University Press, 1997
- 30) 河南省文物研究所: 浙川下王崗, 文物出版社, 1989
- 31) 泉州市鯉城区建設局: 閩南古建築作法, 香港閩南人出版有限公司, 1998
- 32) 福建省地方誌委員会: 福建省誌, 科学文献出版社, 2012
- 33) 北京言語大学言語研究所: 漢語方言地図集・語彙卷, 商務印書館, 2008
- 34) 中国社会科学院: 中国言語地図集, 商務印書館, 2012
- 35) 福建省地方誌編纂委員会: 福建歴史地図集, 福建省地図出版社, 2004
- 36) 寧徳地区地方志編纂委員会: 寧徳地区誌, 方志出版社, 1998
- 37) 泉州市地方志編纂委員会: 泉州市誌, 中国社会科学出版社, 2000
- 38) 蘇鏡潭: 南安県誌, 上海書店, 2000

-
- 39) 王士性: 广志釋, 1597
 - 40) 顧祖禹: 讀史方輿紀要, 1692
 - 41) 午榮: 魯班經匠家鏡, 1606
 - 42) 鄭璠: 便民圖纂, 1502

學位論文

- 43) 黃曉雲: 閩東傳統民居大木作研究, 中央美術學院博士論文, 2013
- 44) 潘黎: 香山幫, 同濟大學博士論文, 2010
- 45) 趙傑: 福建土樓適中典常樓初探, 同濟大學碩士論文, 2006
- 46) 洪石龍: 泉州土樓及其類住宅設計模式, 華僑大學碩士論文, 2001
- 47) 陳楠: 邵武傳統建築形態與文化研究, 華僑大學碩士論文, 2012

雜誌論文

- 48) 薛力: 福建永安青水民居東興堂初探, 建築學報, 2011.S1, 第 112-118 頁
- 49) 賀從容: 福建永安西華片民居的布局、形式及建房習俗, 建築史論文集, No.16, 2002, 第 145-154 頁
- 50) 鄭偉鋒: 南平洛洋村傳統民居研究, 福建建築, 2001.4, 第 19-21 頁
- 51) 陳俊華: 八閩地域鄉土建築大木作營造體系再探析, 建築學報, 2012.7, 第 82-88 頁
- 52) 關瑞明: 泉州傳統民居官式大厝與楊阿苗故居, 新建築, 2011.5, 第 114-117 頁
- 53) 安志敏: 干欄式建築的考古研究, 考古, 1963.2, 第 65-85 頁
- 54) 孟憲武: 殷墟四合院式建築基址考察, 中原文物, 2004.5, 第 26-31 頁
- 55) 楊鴻勳: 西周岐邑建築遺址初步考察, 文物, 1981.3, 第 23-33 頁
- 56) 楊鴻勳: 明堂汎論・明堂的考古學研究, 營造, 1998, 第 1-98 頁
- 57) 楊鴻勳: 斗拱起源考察, 1980 年全國科學技術史學術會議論文集, 1980, 第 5-16 頁
- 58) 浙江省文物管理委員會・浙江省博物館: 河姆渡發見原始社會重要遺址, 文物, 1976.8, 第 6-14 頁
- 59) 浙江省文物管理委員會: 河姆渡遺址第一期發掘報告, 考古學報, 1978.1, 第 39-94 頁
- 60) 四川省文物考古研究院: 四川三台鄭江崖墓群柏林坡 1 號墓發掘簡報, 文物, 2005.9, 第 14-35 頁
- 61) 張玉瑜: 福建民居木構架穩定支撐體系與區系研究, 建築史, 2003.1, 第 26-36 頁
- 62) 張玉瑜: 福建民居挑檐特徵與分區研究, 古建園林技術, 2004.2, 第 6-10 頁
- 63) 張十慶: 從建構思惟看古代建築結構的類型與演化, 建築師, 2007.2, 第 76-79 頁
- 64) 孫大章: 民居建築的插梁架淺論, 小城鎮建設, 2001.09, 第 26-29 頁
- 65) 陸元鼎: 中國民居研究五十年, 建築學報, 2007.11, 第 66-69 頁
- 66) 王育德: 中國五大方言の分裂年代の言語年代學的試探, 言語研究, No.38, 1960, 第 33-105 頁
- 67) 陳綱倫: 陰性文化與中國傳統建築井空間, 營造, 1998, 第 21-28 頁
- 68) 孔磊: 泰順傳統建築木作技術研究, 華中建築, 2008.7, 第 157-164 頁
- 69) 張力智: 垂花柱小史, 中國建築史論叢刊・第九輯, 清華大學出版社, 2014
- 70) 路秉傑: 日本大仏様與中國浙江「溪山第一」門, 營造・第一輯, 1998, 第 195-304 頁
- 71) 李向東: 插拱研究, 古建園林技術, 1996.1, 第 10-14 頁
- 72) 崔ゴウン: 韓國, 中國, 日本の挿肘木に関する研究その 1, 日本建築學會計畫系論文集,

No.556, 2002.6, 第 321-326 頁

- 73) 崔ゴウン: 韓国,中国,日本の挿肘木に関する研究その 2, 日本建築学会計画系論文集,
No.565, 2002.6, 第 343-347 頁

その他

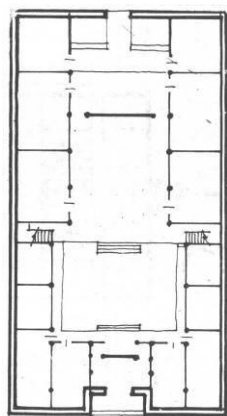
- 74) 北京故宮博物院公式サイト (www.dpm.org.cn)
75) 河南省博物院公式サイト (www.chnmus.net)
76) 浙江省人民政府公式サイト (www.zhejiang.gov.cn)
77) 福建省人民政府公式サイト (www.fujian.gov.cn)
78) 同済大学建築系: 寧波月湖歴史街区調査, 未公刊
79) 同済大学建築系: 黄岩老街建築遺産, 未公刊

付録 東南海岸地区伝統的民家データベース

001 福州埕宅

出典：王乃香『福建民居』中国建築工業出版社、1987、第 139 頁¹⁵³

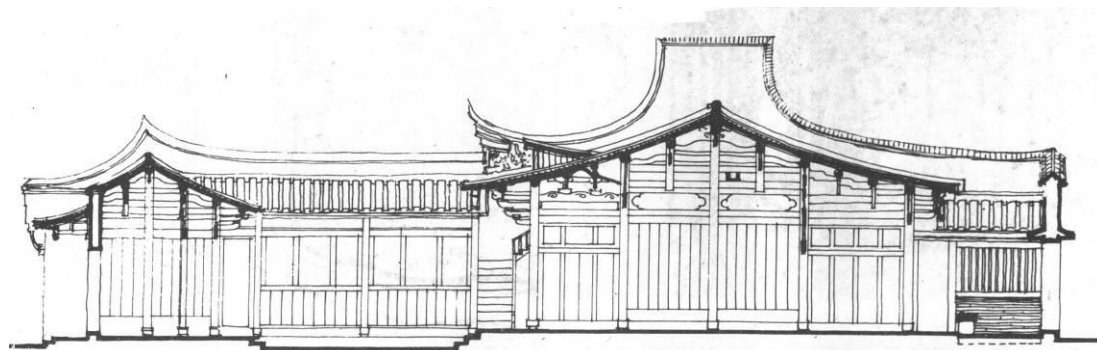
福州市内にある、詳しい説明はない。



平面図



外観

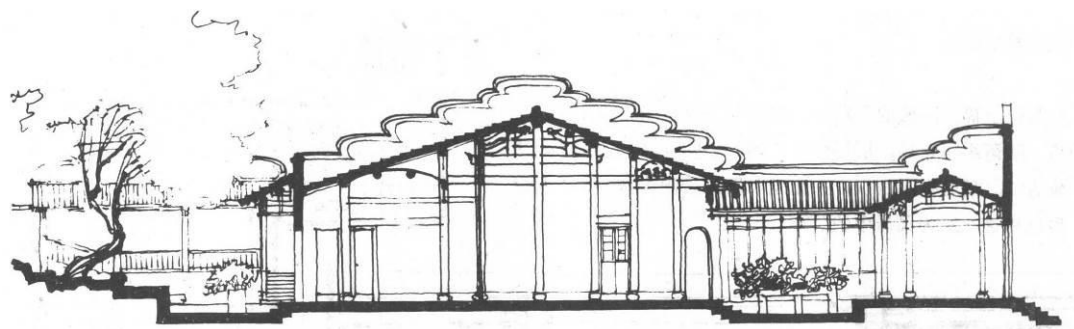


断面図

002 福州揚岐遊宅

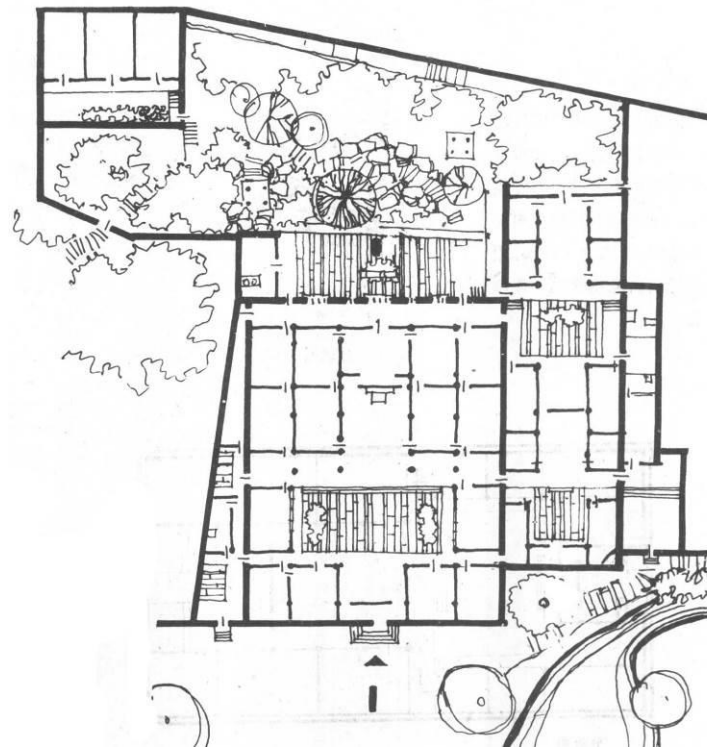
出典：王乃香『福建民居』中国建築工業出版社、1987、第 140 頁

福州郊外の揚岐（この地名は現存せず）にある、遊氏の住宅で、民国時期に建造された。



断面図

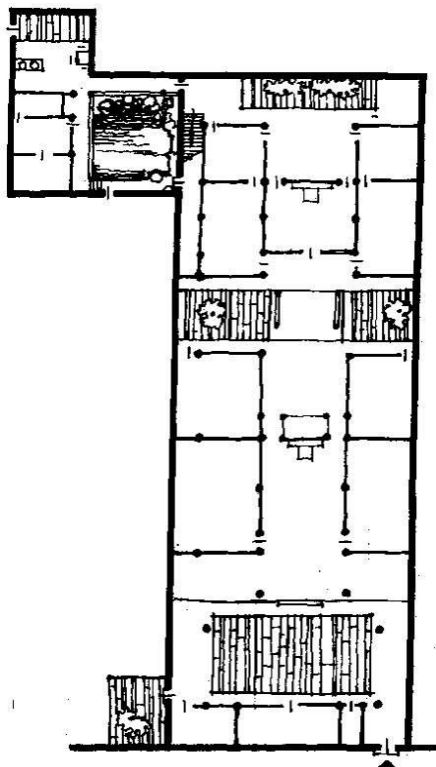
¹⁵³ 具体的な説明がなければ、図面と写真の出典は同じである。



平面図

003 福州宮巷劉宅

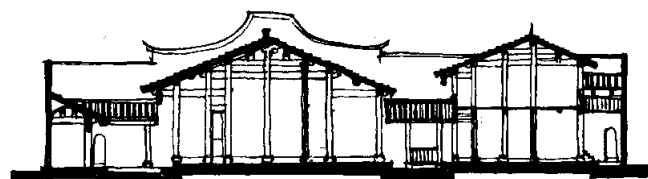
出典：王乃香『福建民居』中国建築工業出版社、1987、第 142 頁
 文物保護単位、福州市三坊七巷歴史町並み保護区、宮巷 14 号。清の時代建造された。現在、民俗文化資料館として活用する。



平面図



宮巷からの
外観

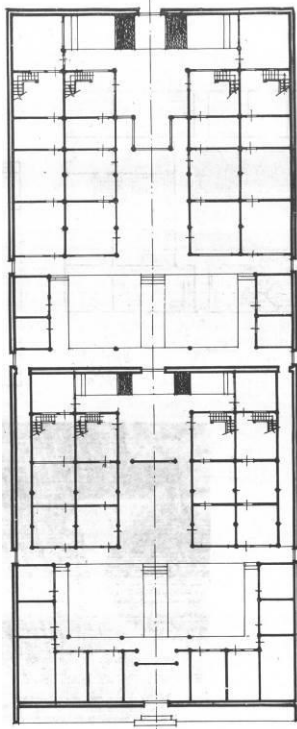


断面図

004 福州ある住宅

出典：王乃香『福建民居』中国建築工業出版社、1987、第 148 頁

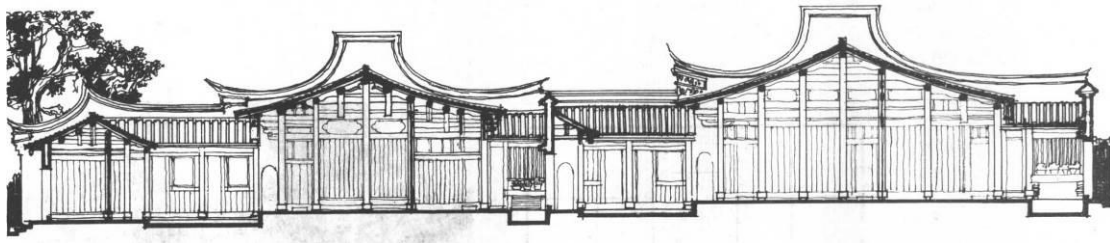
大規模な家で、詳しい説明はない。



平面図



外観

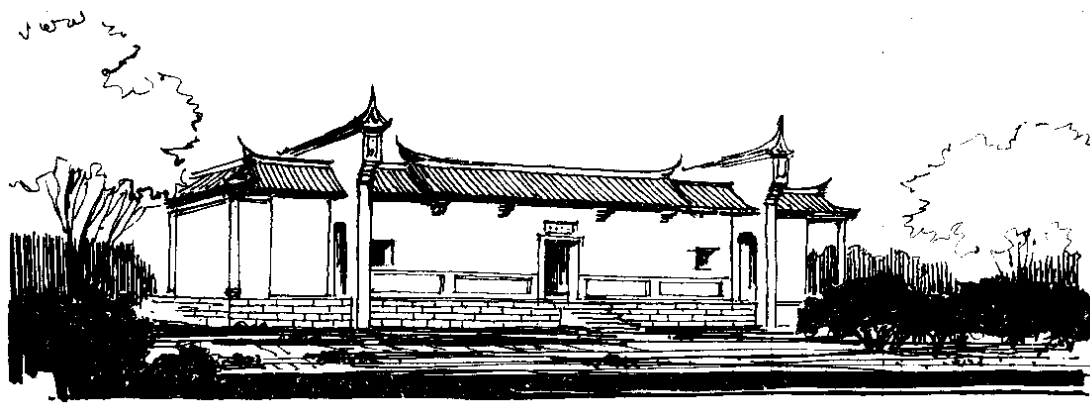


断面図

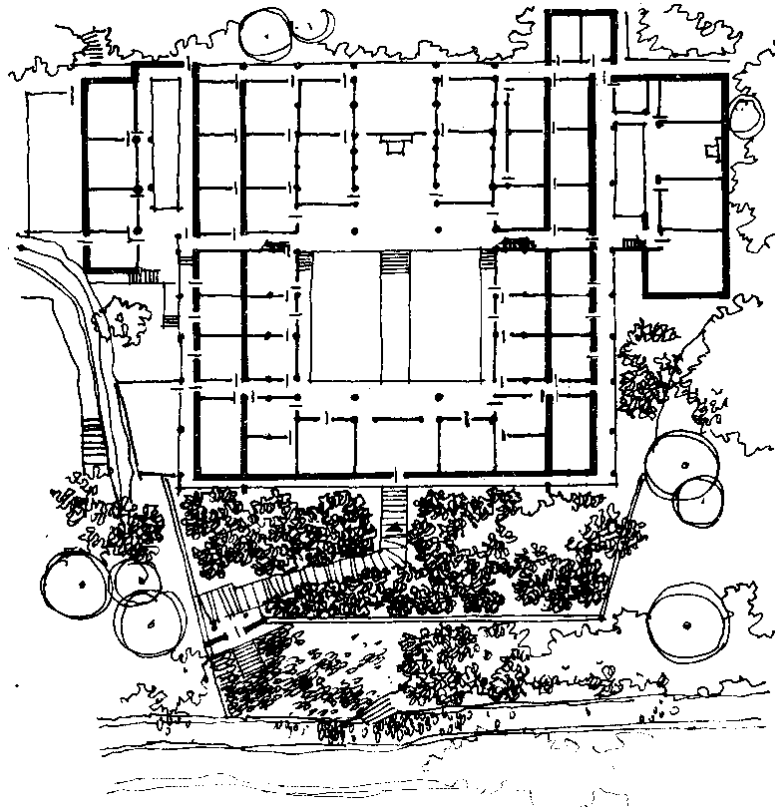
005 永泰李宅

出典：王乃香『福建民居』中国建築工業出版社、1987、第 152 頁

川辺の高地に位置する。詳しい説明はない。



外観

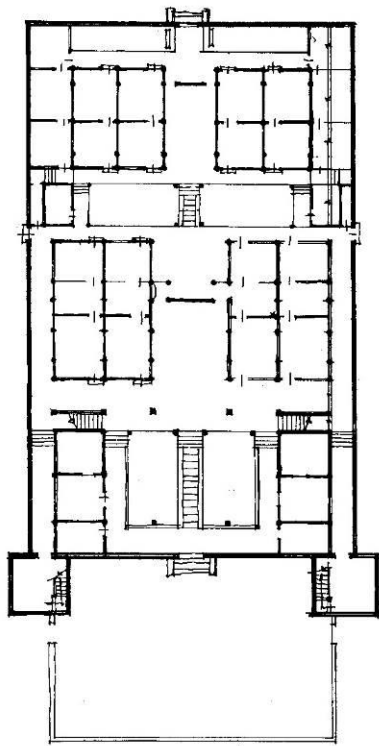


平面図

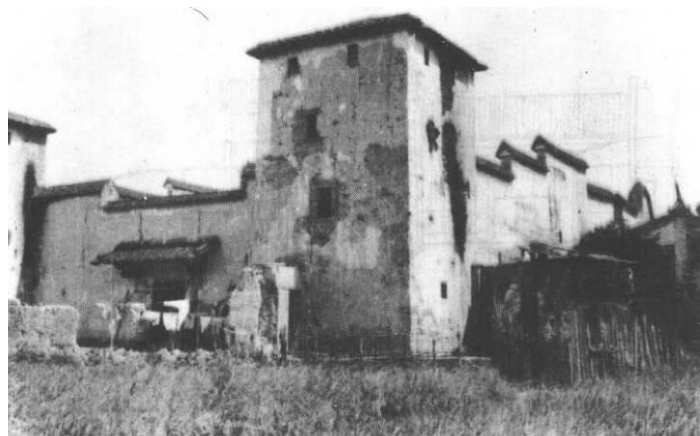
006 古田松台ある住宅

出典：王乃香『福建民居』中国建築工業出版社、1987、第 256 頁

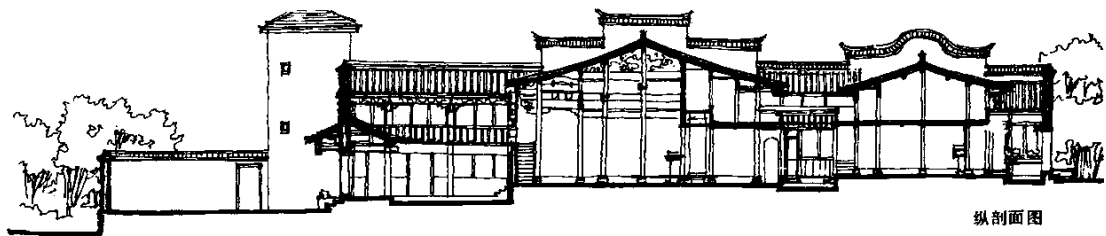
古田県松台村（現在は都市から呑まされる）に位置する大型住宅。現存しない。



平面図



外観



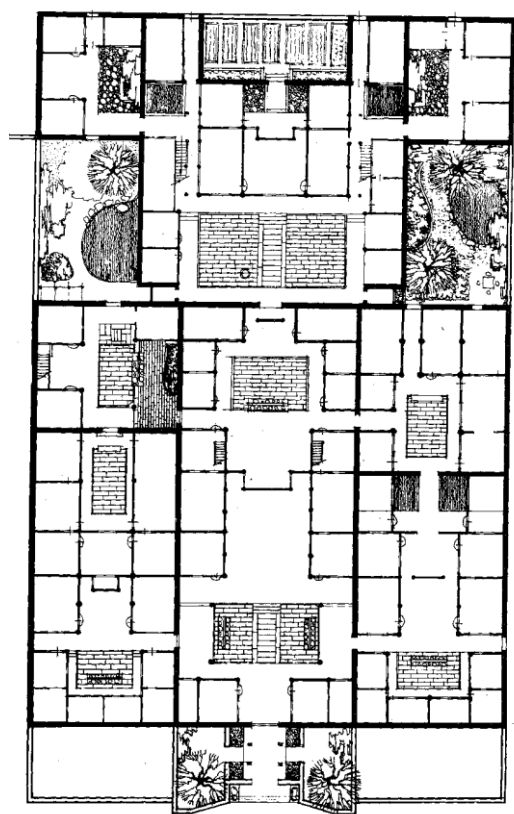
縦剖面図

断面図

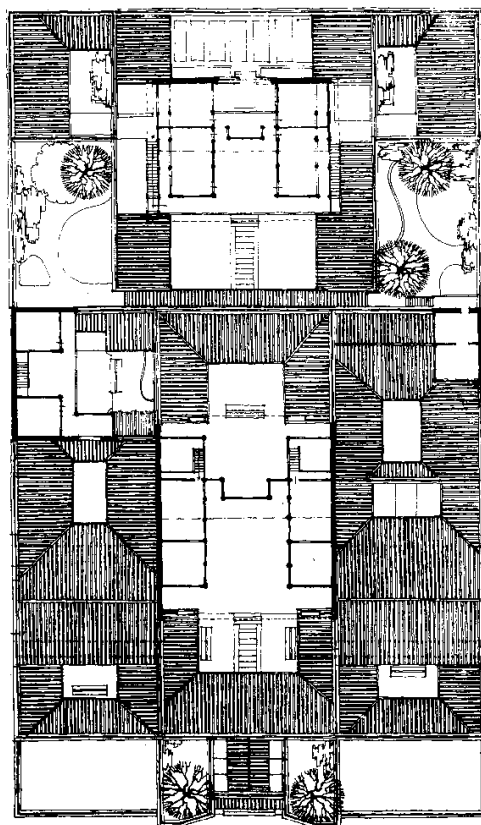
007 古田張宅

出典：王乃香『福建民居』中国建築工業出版社、1987、第 258 頁

大規模住宅、詳しい説明はない。



一階平面図



二階平面図

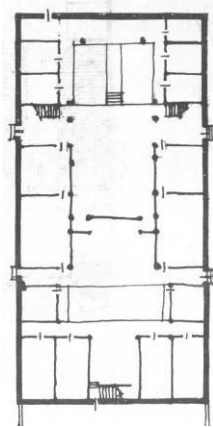


断面図

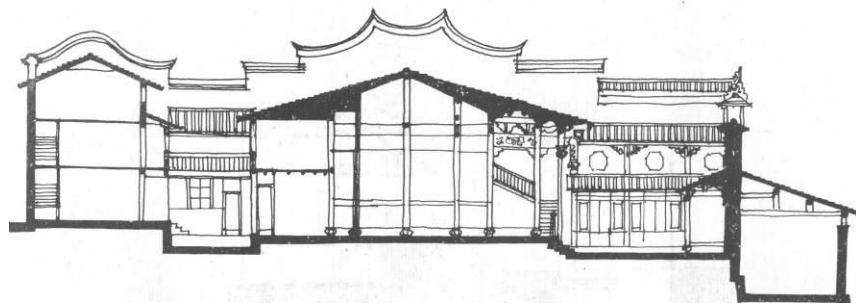
008 古田利洋花厝

出典：王乃香『福建民居』中国建築工業出版社、1987、第 260 頁

古田県利洋村に位置し、装飾が多いから「花厝」と呼ばれる、詳しい説明はない。



平面図

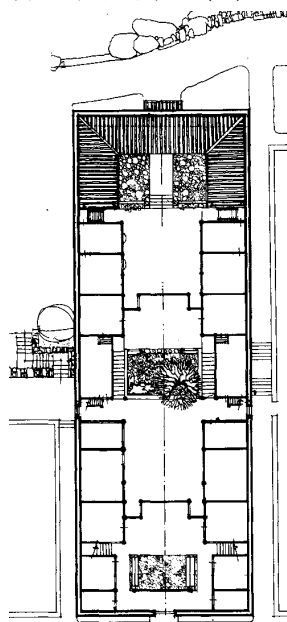


断面図

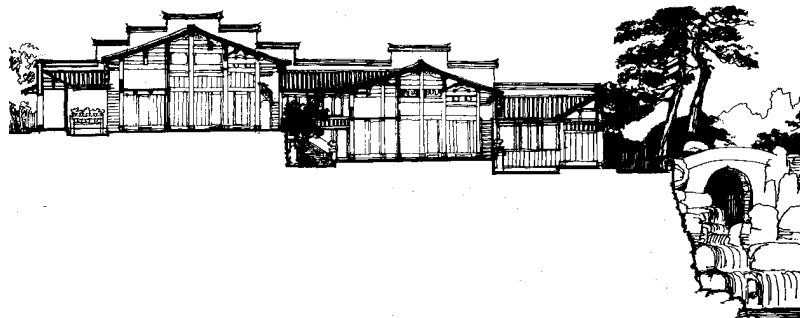
009 古田沽洋陳宅

出典：王乃香『福建民居』中国建築工業出版社、1987、第 263 頁

古田県沽洋村に位置し、川沿いの斜面に位置する住宅で、詳しい説明はない。



平面図

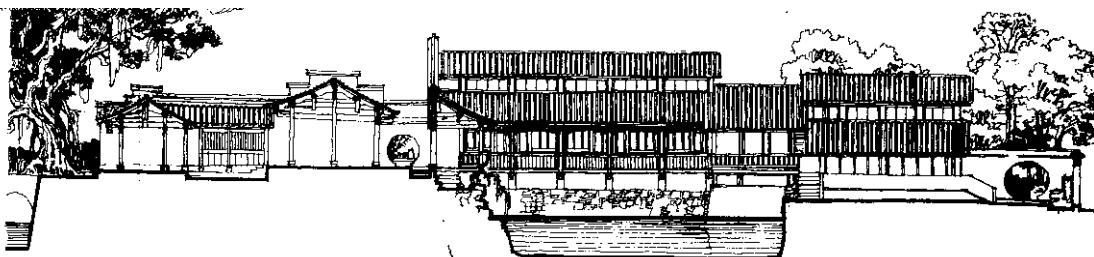


断面図

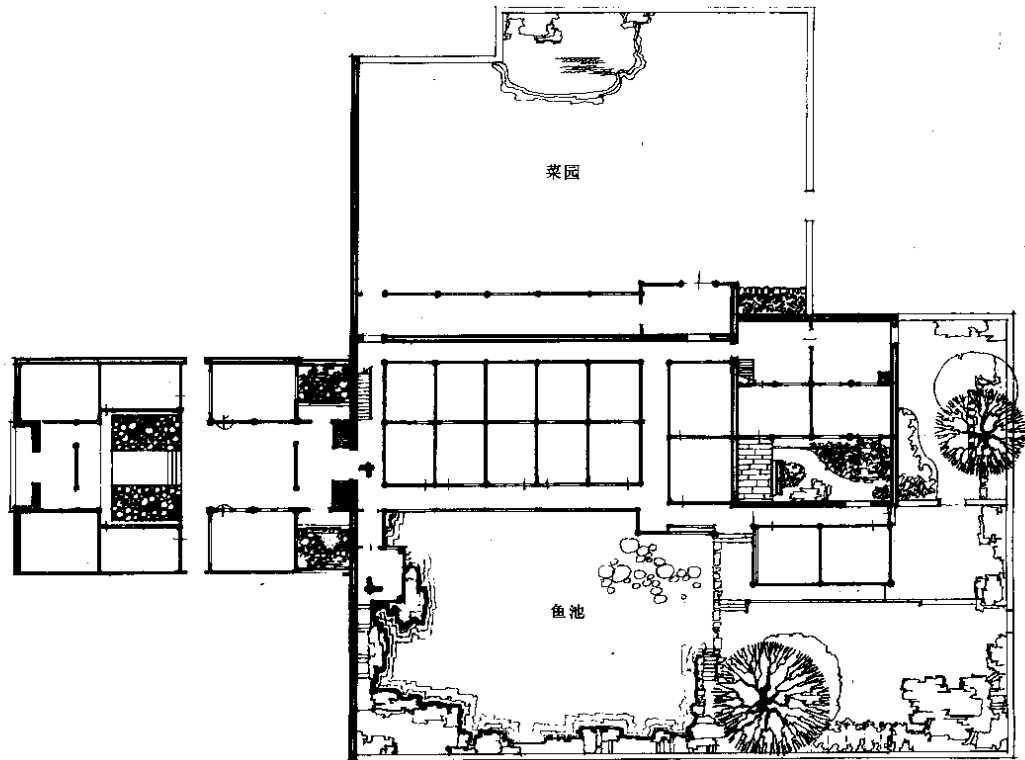
010 古田呉厝里ある住宅

出典：王乃香『福建民居』中国建築工業出版社、1987、第 264 頁

古田県呉厝里村（この村は現存しない）に位置し、詳しい説明はない。



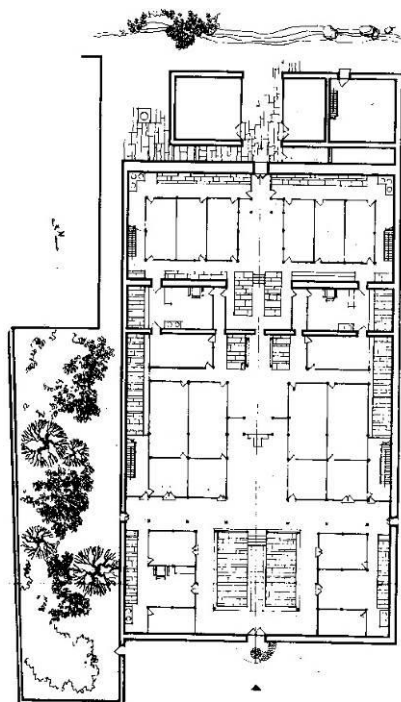
断面図



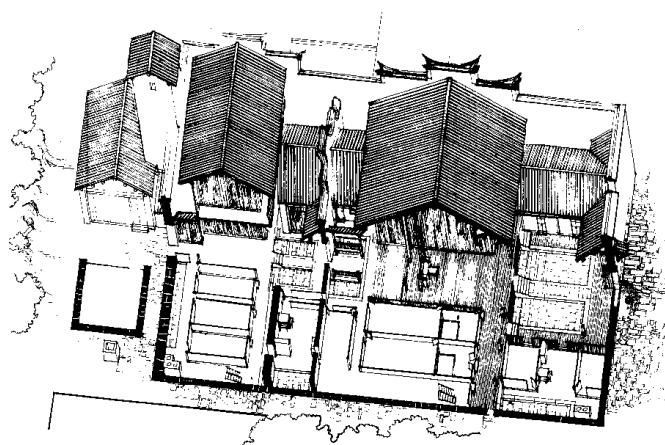
011 古田鳳埔ある住宅

出典：王乃香『福建民居』中国建築工業出版社、1987、第 265 頁

古田県鳳埔村に位置し、詳しい説明はない。



平面図

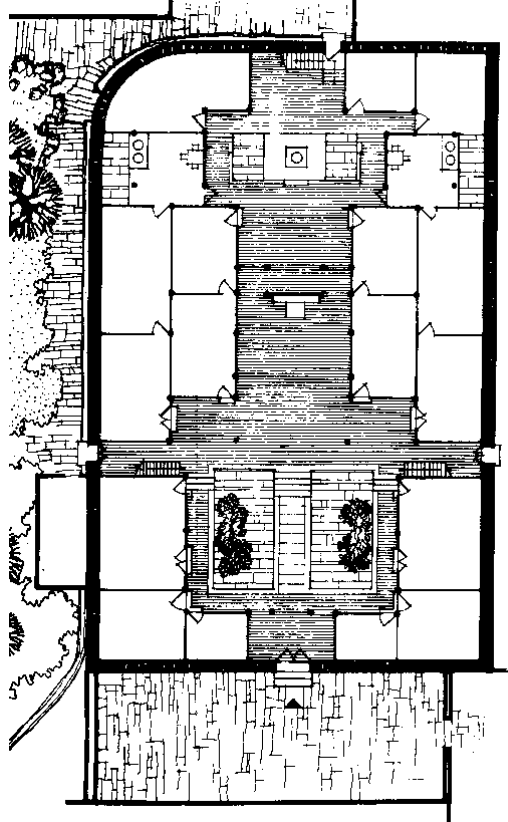


断面軸測

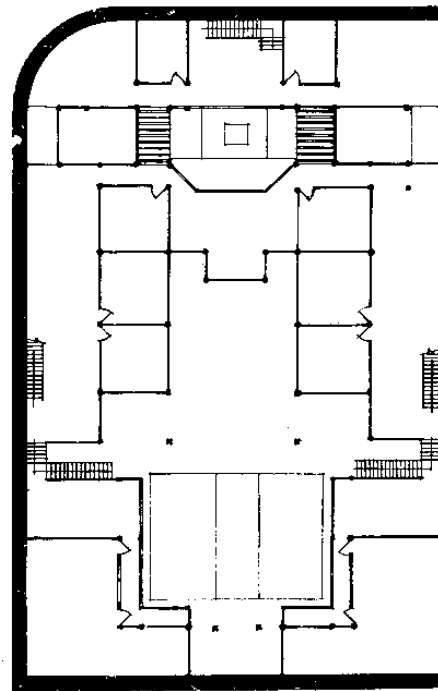
012 古田于宅

出典：王乃香『福建民居』中国建築工業出版社、1987、第 266 頁

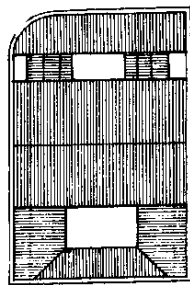
ごく普通の農家で、詳しい説明はない



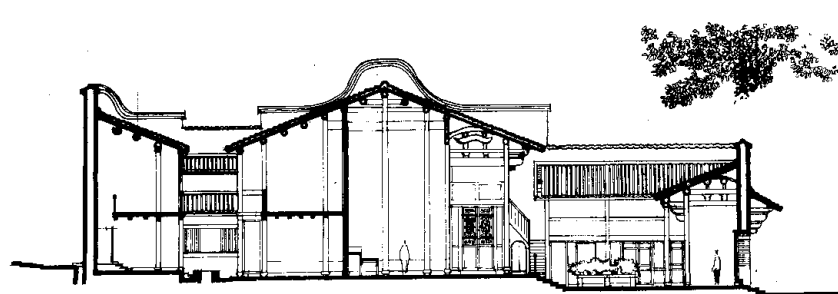
一階平面図



二階平面図



屋上平面図

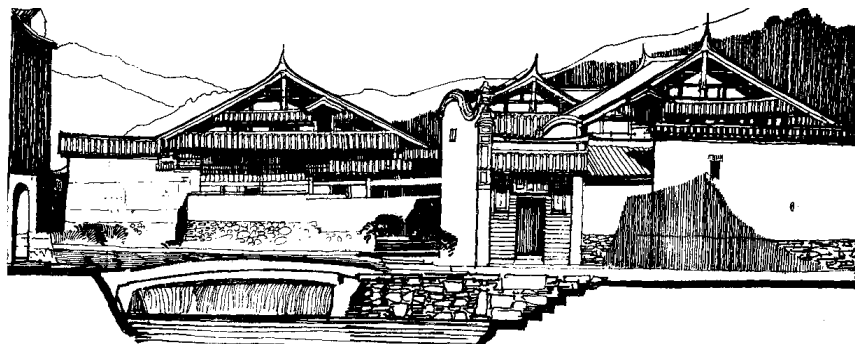


断面図

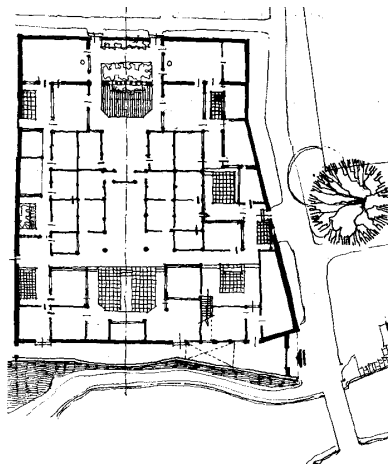
013 福安茜洋橋頭ある住宅

出典：王乃香『福建民居』中国建築工業出版社、1987、第 268 頁

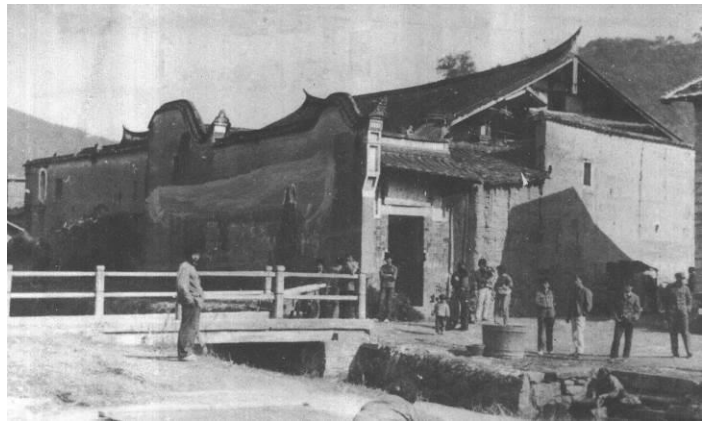
福安の茜洋村の川辺に位置する、詳しい説明はない、グーグルマップより現存を確認。



側面図



平面図



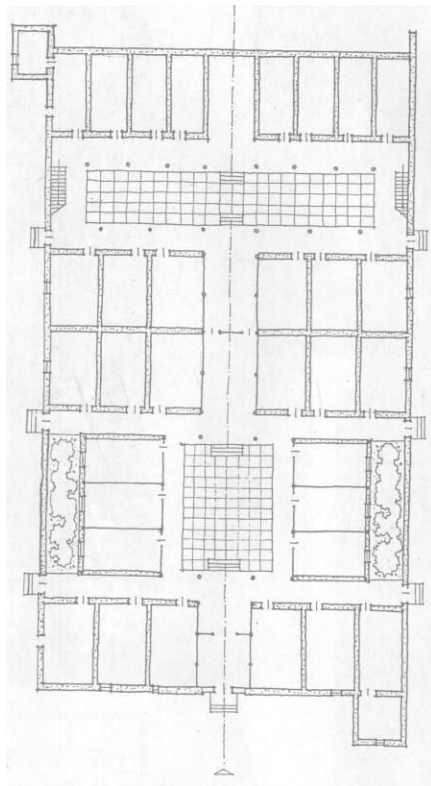
外観

014 閩清東城厝

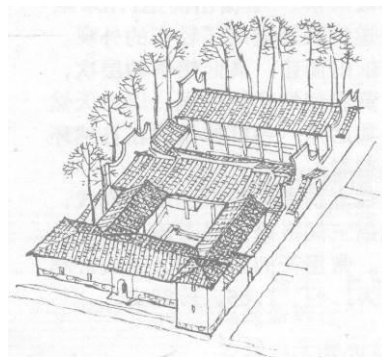
出典：王乃香『福建民居』中国建築工業出版社、1987、第 275 頁

黄為隼『閩粵民宅』天津科学技術出版社、1992、第 192 頁

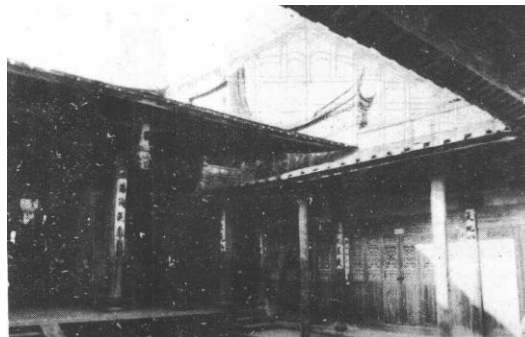
閩清県塔庄村に位置する、詳しい説明はない。



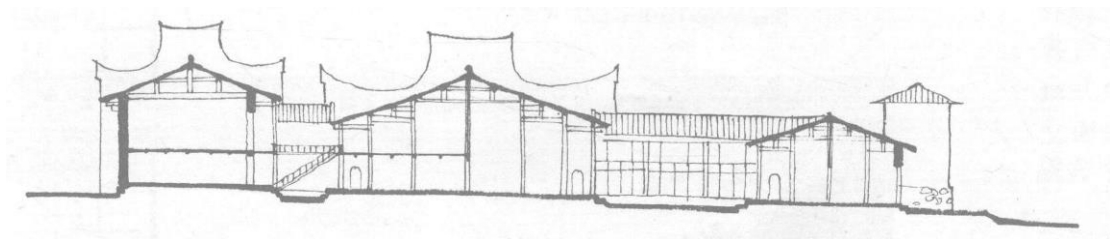
平面図



鳥瞰



中庭

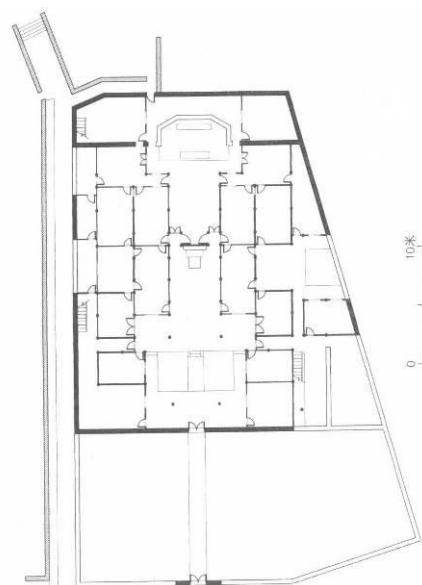


断面図

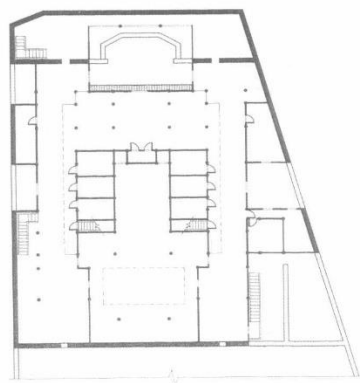
015 福安楼下保合太和宅

出典：李秋香『福建民居』 清华大学出版社、2010、第 261-265 頁

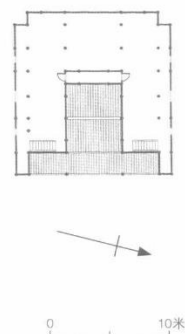
福安市楼下村に位置し、楼下村は福建省历史文化名村である。18 世紀後半に建造し、今の住宅として利用する。



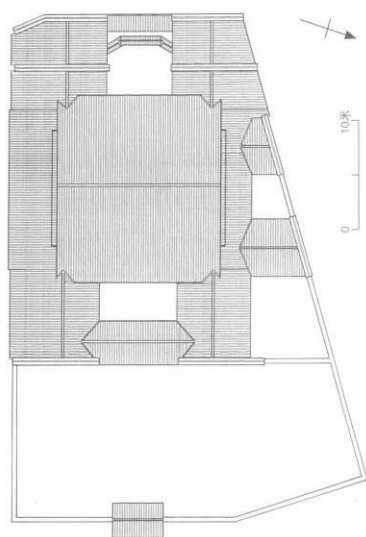
一階平面図



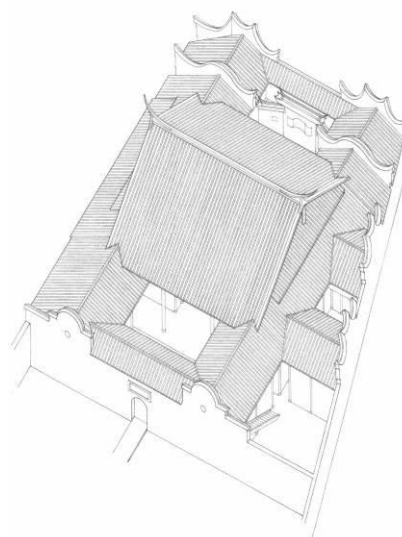
二階平面図



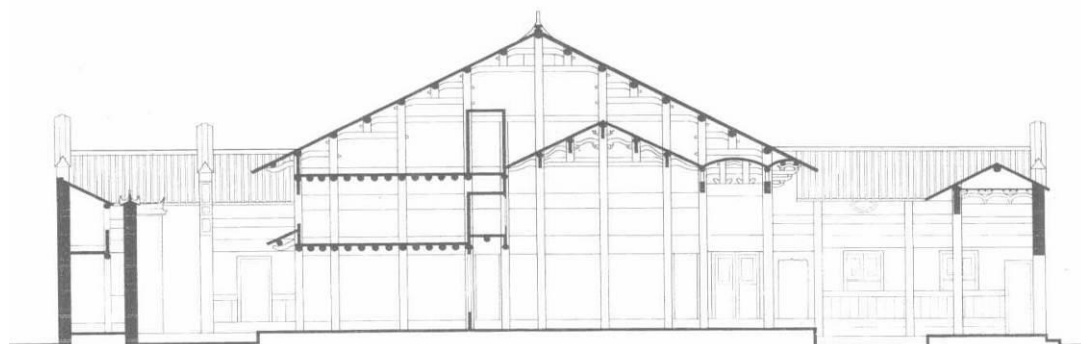
三階平面図



屋上平面図



軸測

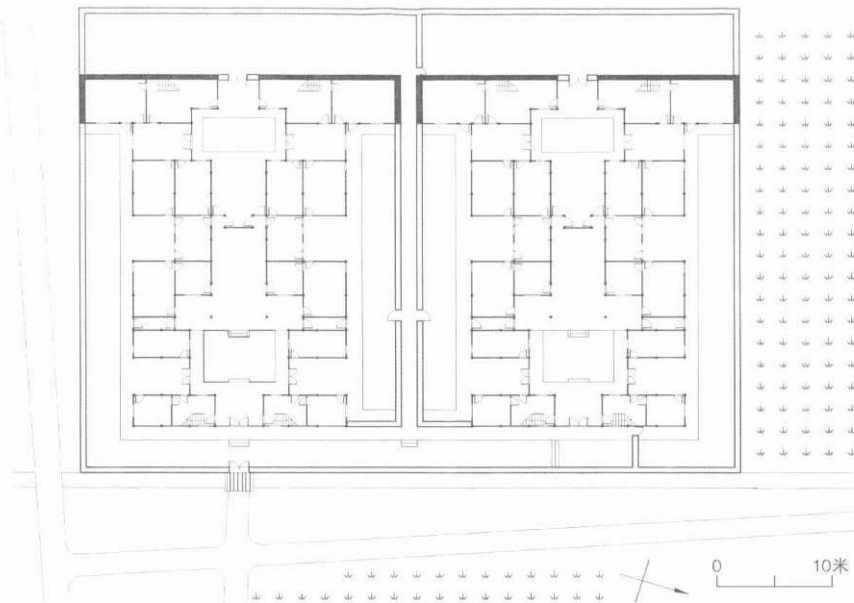


断面図

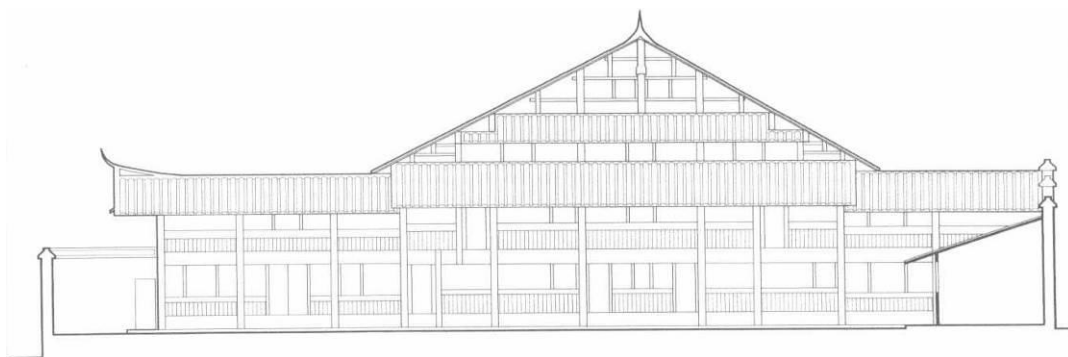
016 福安楼下両兄弟宅

出典：李秋香『福建民居』 清華大学出版社、2010、第 269 頁

福安市楼下村に位置し、18 世紀後半に建造する。当初は両兄弟のために建造したので、同じ形式の住宅並列する形になった。今も住宅として利用する。



平面図



断面図

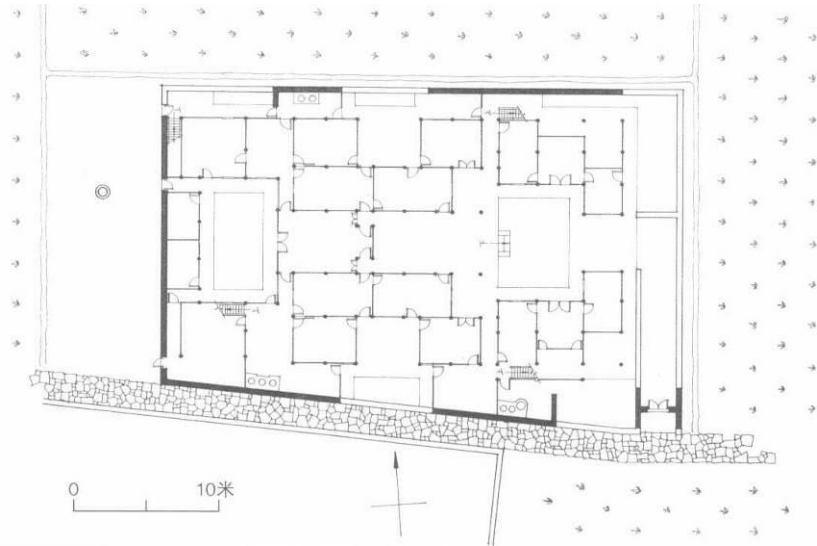
017 福安楼下王炳忠宅

出典：李秋香『福建民居』 清華大学出版社、2010、第 279 頁

福安市楼下村に位置し、18 世紀後半に建造する。今も住宅として利用する。

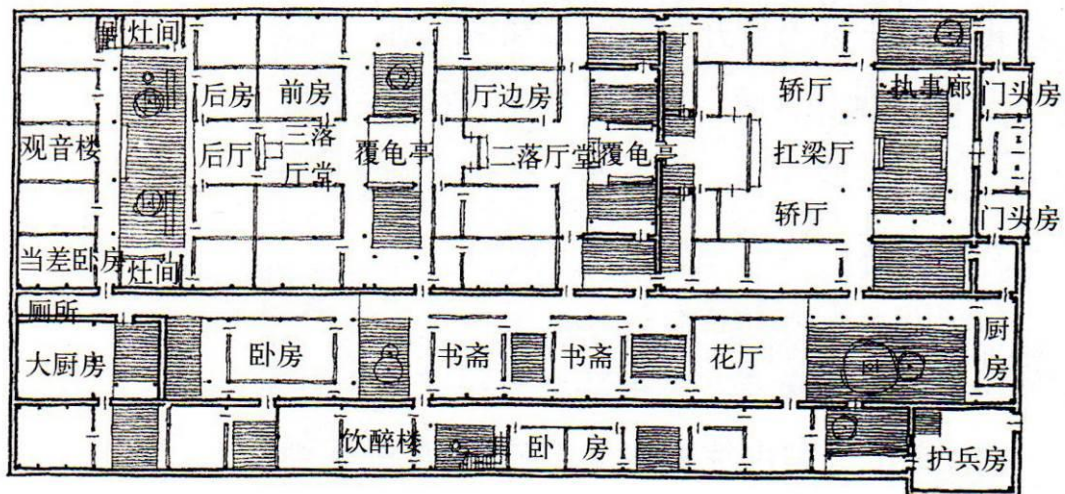
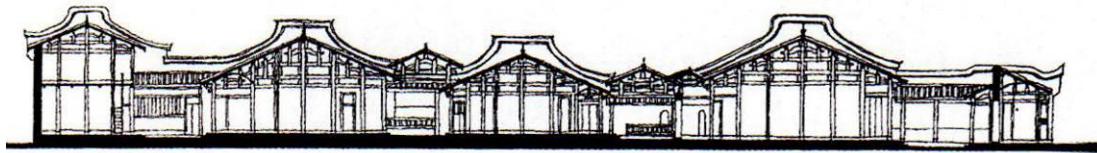


断面図

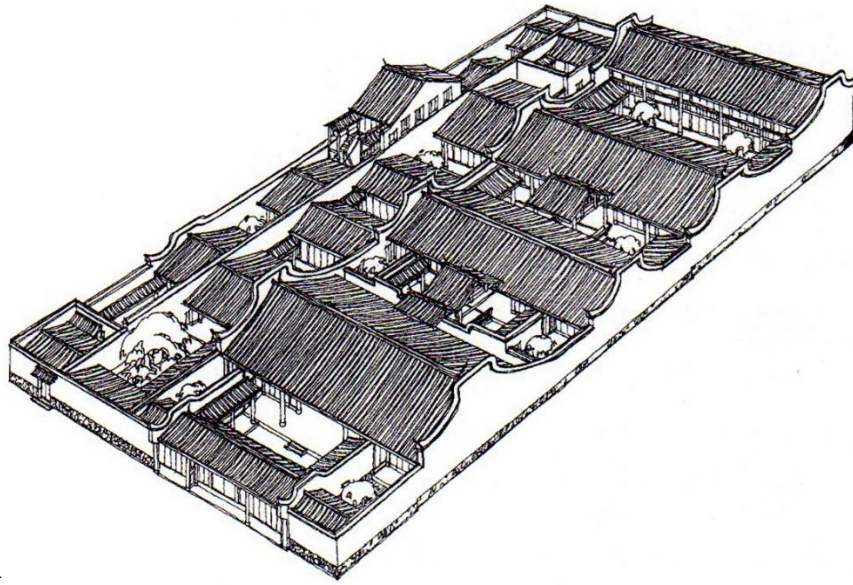


平面図

018 福州宮巷沈宅 出典：戴志堅『福建民居』 中国建築工業出版社、2009、第 182 頁
 福州市三坊七巷歴史町並み内、宮巷 26 号、全国重点文物保护单位である。明天啓年間（1621～1627 年）建造し、清同治年間（1862～1874 年）から沈氏が所有する。建築面積約 2300 平米、今は、沈氏の末裔が住んでいる。

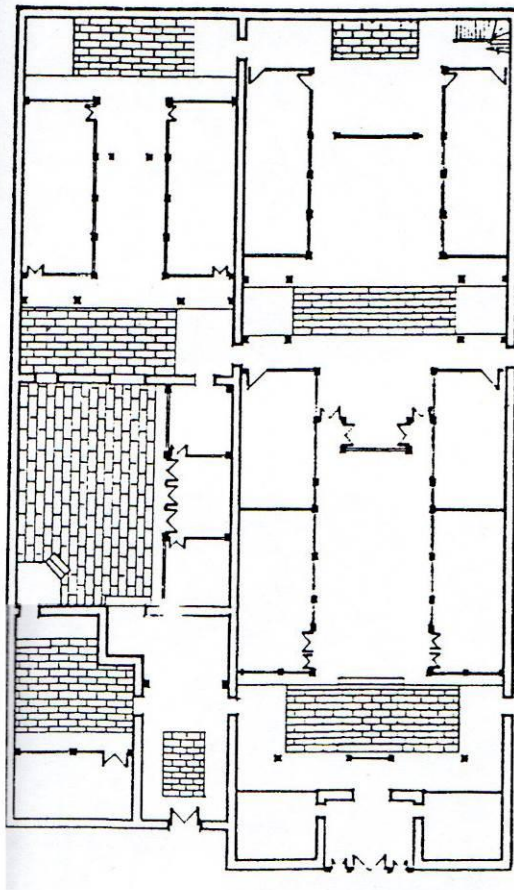


断面図と平面図



鳥瞰

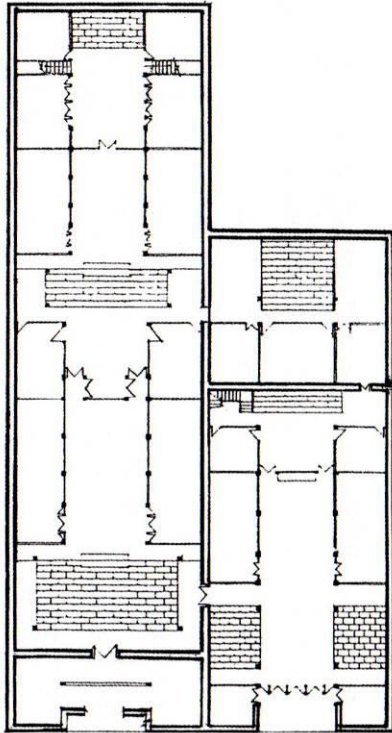
019 福州文儒坊陳宅 出典：戴志堅『福建民居』 中国建築工業出版社、2009、第 183 頁
 福州市三坊七巷歴史町並み内、文儒坊 61-62 号、全国重点文物保护单位である。清の時代に建造し、建築面積は約 1100 平米である。今も住宅として利用する。



平面図

020 福州衣錦坊欧陽宅

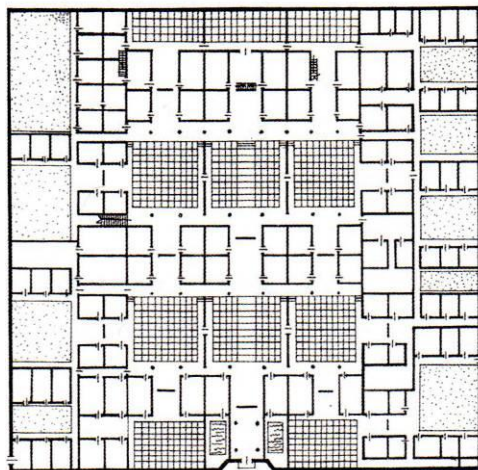
出典：戴志堅『福建民居』 中国建築工業出版社、2009、第 184 頁
福州市三坊七巷歴史町並み内、衣錦坊 54 号、全国重点文物保护单位である。清乾隆時（1736-1795 年）に建造し始め、光緒十六年（1890 年）建て直し、建築面積は約 1200 平米である。当初は塩商人の家で、1948 年から欧陽氏が住んでいる。



平面図

021 福鼎白琳洋里大厝

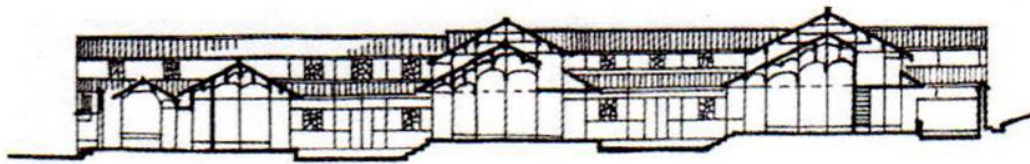
出典：戴志堅『福建民居』 中国建築工業出版社、2009、第 184 頁
福鼎市白琳鎮翠郊村に位置し、福建省文物保护单位である。清乾隆十年（1745 年）から 13 年をかかって建造した。敷地面積は 10560 平米、庁は 6 間、部屋は 192 間ある。今は民家博物館として活用する。



平面図



外観（福鼎市政府公式サイトより）

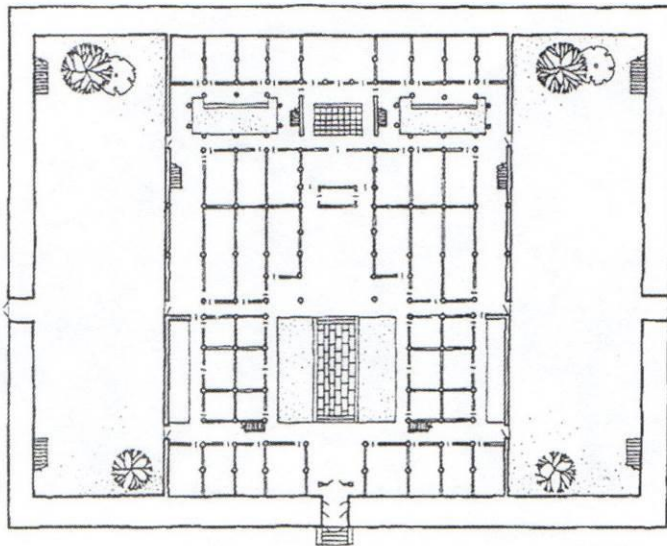


断面図

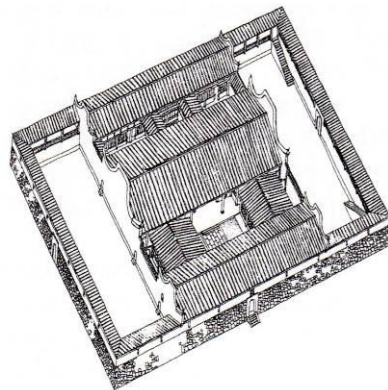
022 閩清坂東岐廬

出典：戴志堅『福建民居』 中国建築工業出版社、2009、第 186 頁

閩清県坂東鎮仁溪村に位置する。清咸豊三年（1853 年）から八年（1858 年）まで建造した。当初の所有者は進士張鳴岐、後の清同治年間江西九江の知府（市長）を務める。建築長さ 75.4 メートル、深さ 59 メートル、建築面積 4448.6 平米である。



平面図

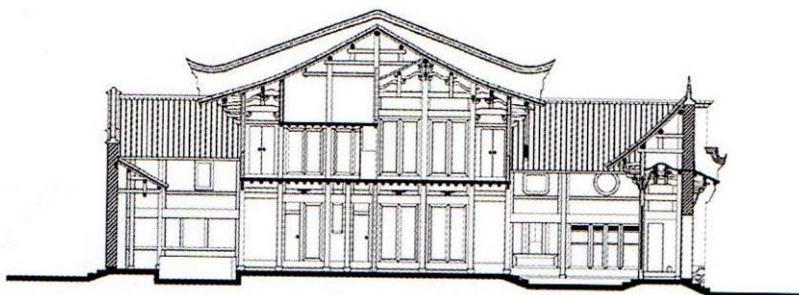


外観

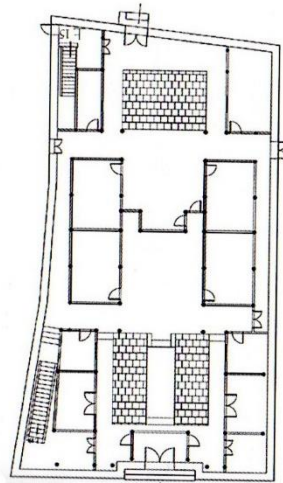
023 寧徳霍童下街陳宅

出典：戴志堅『福建民居』 中国建築工業出版社、2009、第 187 頁

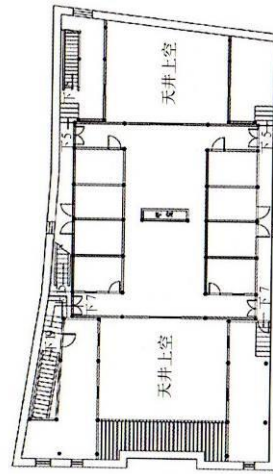
寧徳市蕉城区霍童鎮下街 99 号に位置する。建造年代は清の中期。現在、3 世帯が住んでいる。



断面図



一階平面図

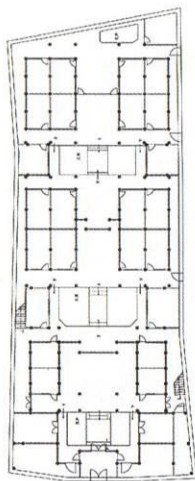


二階平面図

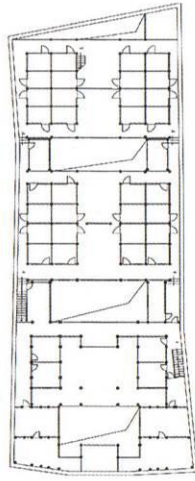
024 寧徳霍童黄宅

出典：戴志堅『福建民居』中国建築工業出版社、2009、第 187 頁

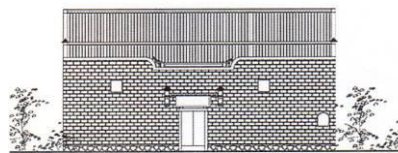
寧徳市蕉城区霍童鎮三叉路 99 号に位置する。建造年代は清の乾隆年間（1736-1795 年）。現在、11 世帯が住んでいる。



一階平面図



二階平面図



立面図



厅堂

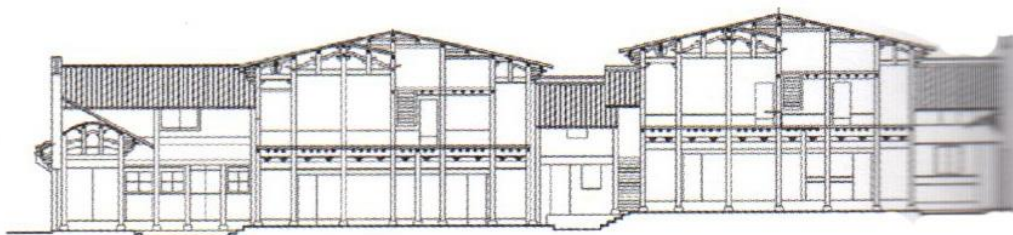


断面図

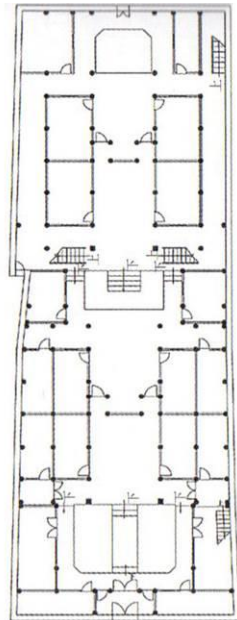
025 寧徳霍童下街 72 号

出典：戴志堅『福建民居』中国建築工業出版社、2009、第 188 頁

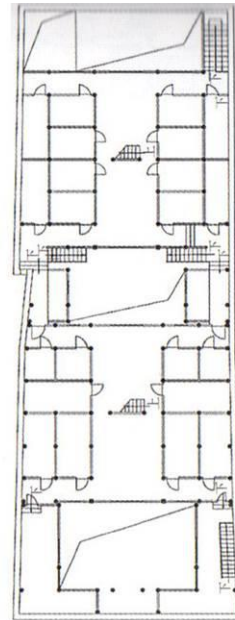
寧徳市蕉城区霍童鎮下街 72 号に位置する。建造年代は清の乾隆年間（1736-1795 年）。現在は陳氏の家族 15 世帯が住んでいる。



断面図



一階平面図



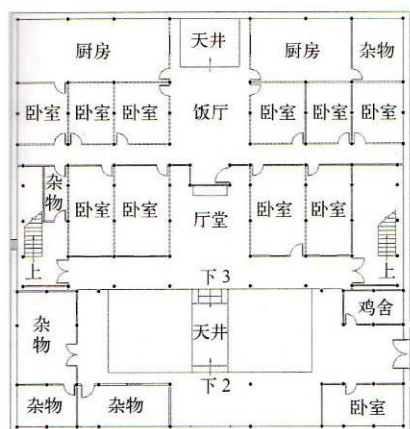
二階平面図

026 霞浦半月里雷世儒宅

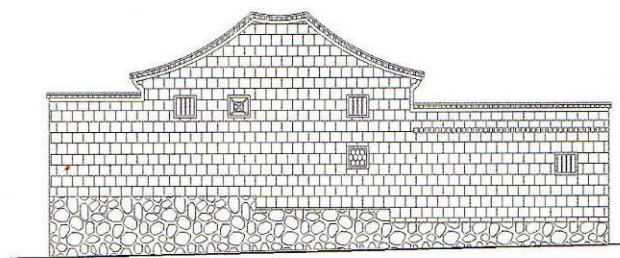
出典：戴志堅『福建民居』中国建築工業出版社、2009、第189頁

実地調査がある

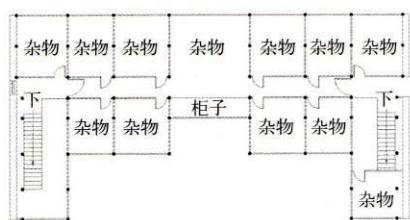
寧徳市霞浦県溪南鎮半月里村 27 号に位置する。建造年代は清の道光二十八年（1848 年）。建造者雷世儒は雷位進の息子、武挙人である。建築面積 701 平米。現在は雷氏の家族 5 世帯が住んでいる。



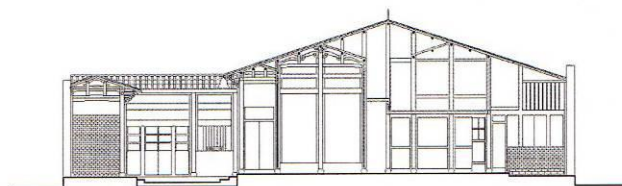
一階平面図



側面図



二階平面図



断面図



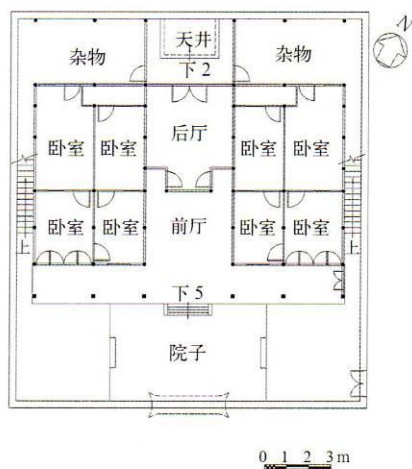
外觀と厅堂（本人撮影）

027 霞浦半月里雷位進宅

出典：戴志堅『福建民居』 中国建築工業出版社、2009、第 190 頁

実地調査がある

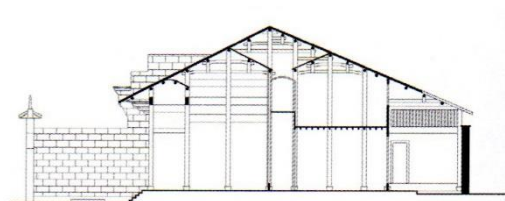
寧徳市霞浦県溪南鎮半月里村 31 号に位置する。建造年代は清の雍正年間 (1723-1735 年)。建造者雷位進は当地の郷紳である。建築面積 322 平米。現在の西側が空家として、東側が 1 世帯が住んでいる。



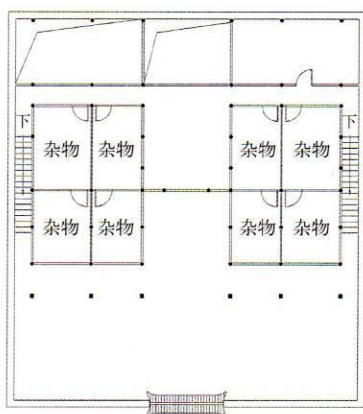
一階平面図



立面図



断面図



二階平面図

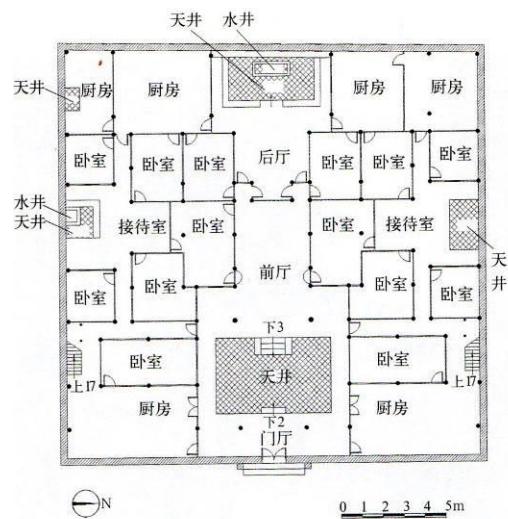


厅堂（本人撮影）

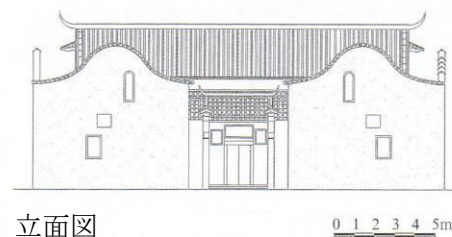
028 福安坦洋王宅

出典：戴志堅『福建民居』 中国建築工業出版社、2009、第 191 頁

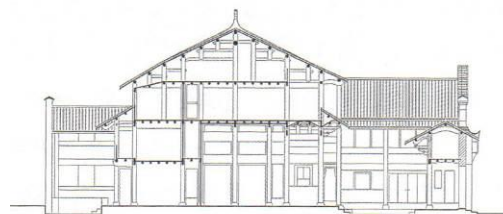
福安市社口镇坦洋村上街 25 号に位置する。建造年代は清の道光・咸豊年間（1821-1861 年）。現在は王氏の家族 6 世帯が住んでいる。



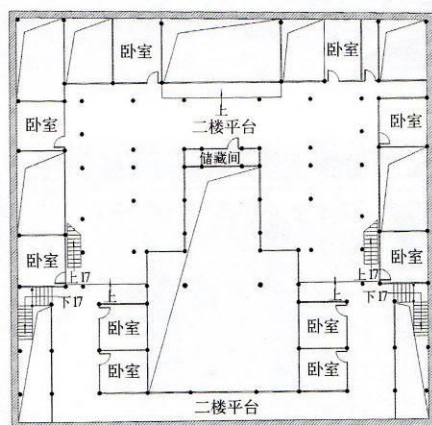
一階平面図



立面図



断面図



二階平面図

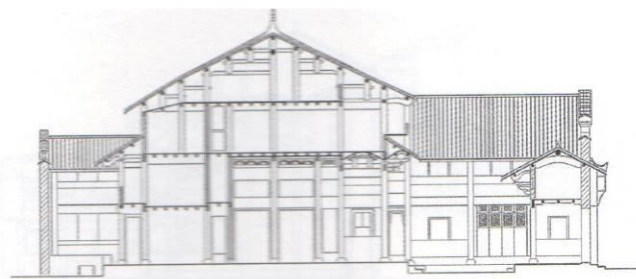
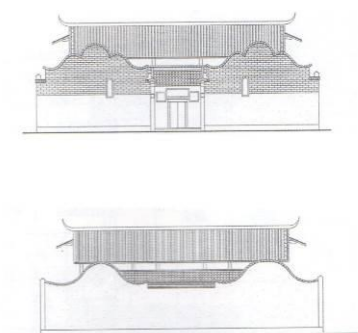


外観

029 福安坦洋郭宅

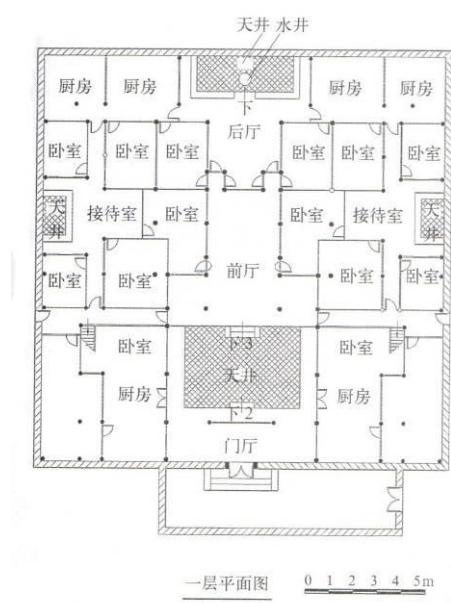
出典：戴志堅『福建民居』 中国建築工業出版社、2009、第 193 頁

福安市社口镇坦洋村上街 28 号に位置する。建造年代は清の光緒年間（1871-1908 年）。現在は郭氏の家族 8 世帯が住んでいる。

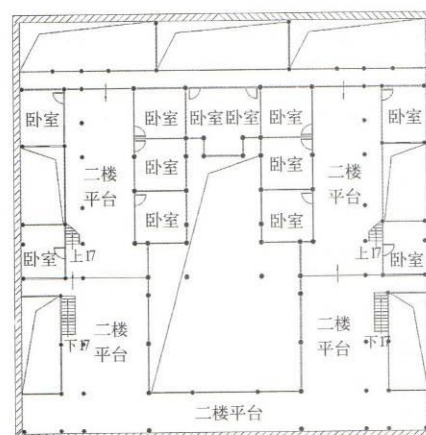


立面图

断面图



一階平面图

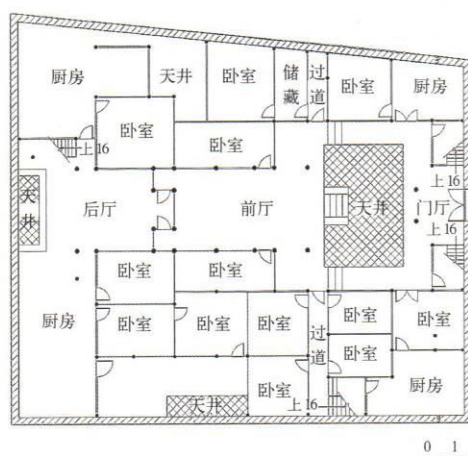


二階平面图

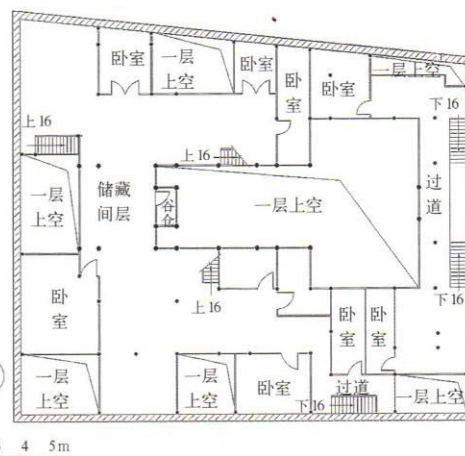
030 福安坦洋胡宅

出典：戴志堅『福建民居』 中国建築工業出版社、2009、第 194 頁

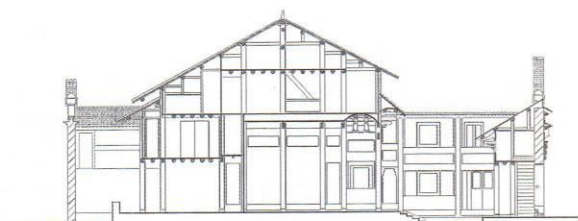
福安市社口镇坦洋村上街 118 号に位置する。建造年代は約 130 年前の清末である。現在は胡氏の家族 2 世帯が住んでいる。



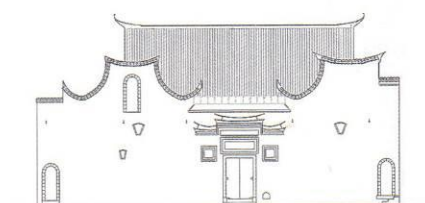
一階平面图



二階平面图



断面图

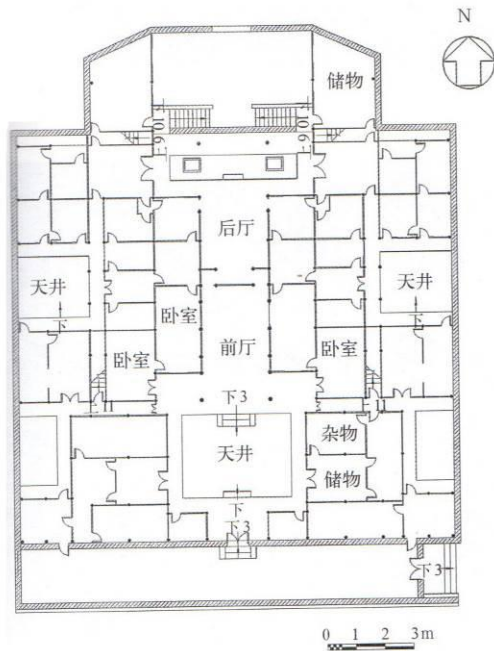


立面图

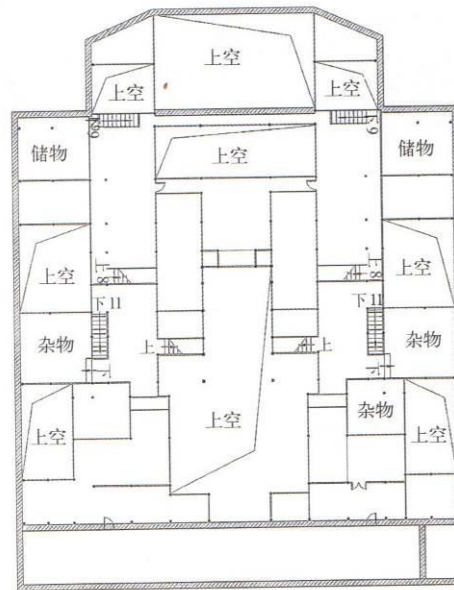
031 福安廉村就日瞻雲宅

出典：戴志堅『福建民居』 中国建築工業出版社、2009、第 195 頁

福安市溪潭鎮廉村下角路 9 号に位置する。建造年代は清の嘉慶年間（1796-1820 年）で、一族は 5 位の進士があった。現在は陳氏の家族 10 世帯が住んでいる。



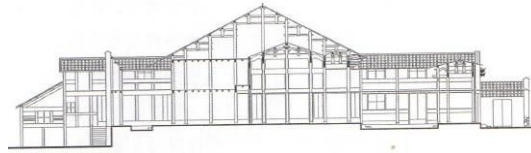
一階平面図



二階平面図



側面図

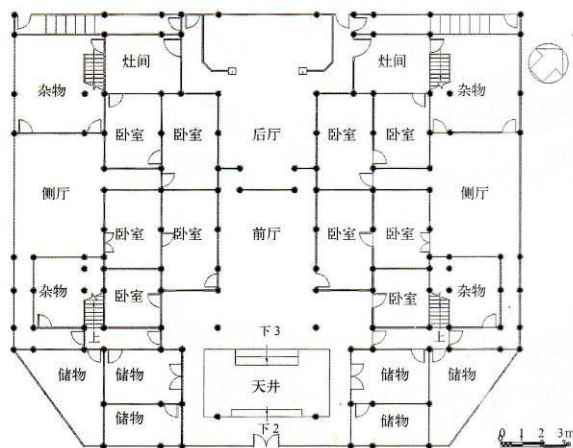


断面図

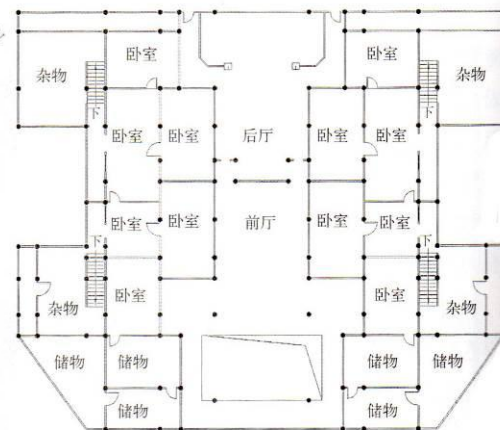
032 福安廉村甲算延齡宅

出典：戴志堅『福建民居』 中国建築工業出版社、2009、第 196 頁

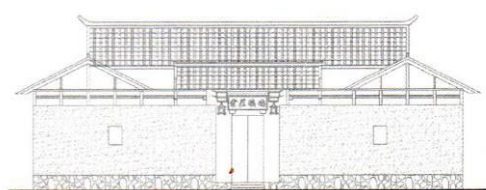
福安市溪潭鎮廉村に位置する。建造年代は清の咸豐年間（1850-1861 年）。現在 2 世帯が住んでいる。



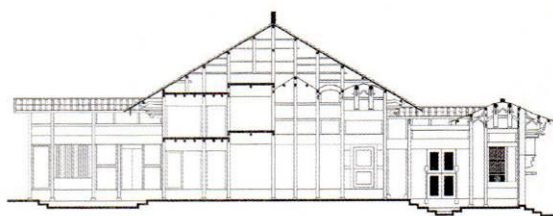
一階平面図



二階平面図



立面図



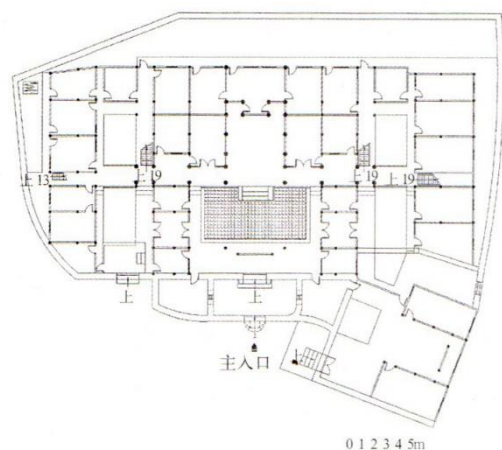
断面図

033 尤溪桂峰楼坪厅大厝

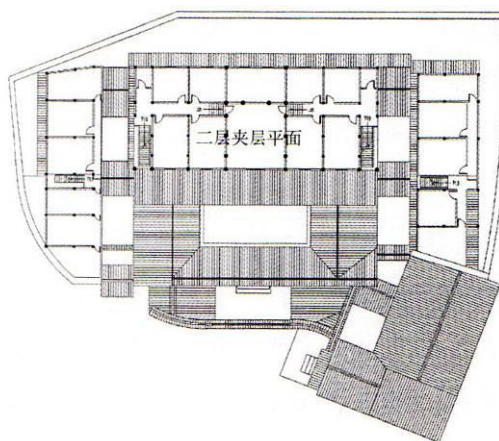
出典：戴志堅『福建民居』中国建築工業出版社、2009、第197頁

実地調査がある

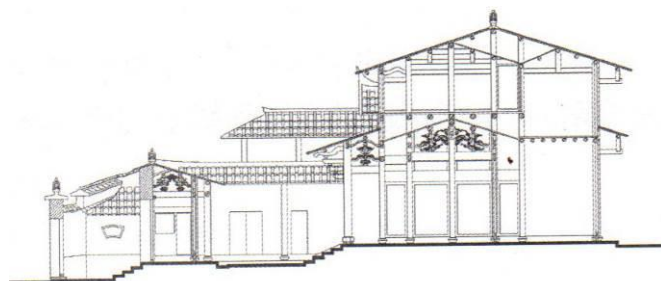
尤溪县洋中鎮桂峰村24号に位置する。建造年代は清順治年間（1644-1661年）。敷地面積594平米、建築面積520平米。今も住宅として利用する。桂峰村は明嘉靖三十九年から清乾隆三十年（1560-1760年）の間に、尤溪から福州への官道が村に通過したのため、宿場として盛んでいた。宿場に得た商売の情報をもって、桂峰村人は外出行商し、金持ちになった人は多い。清乾隆三十年以降官道が変更して、桂峰村も衰退した。



一階平面図



二階平面図



断面図



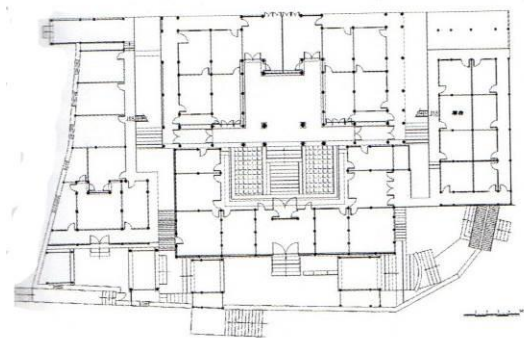
厅堂

034 尤溪桂峰後門山大厝

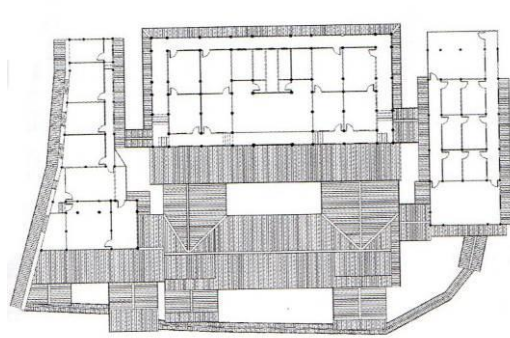
出典：戴志堅『福建民居』中国建築工業出版社、2009、第199頁

実地調査がある

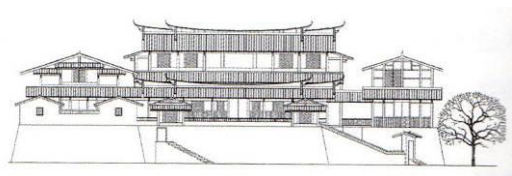
尤溪县洋中鎮桂峰村に位置し、明末に建造される。敷地面積3000平米、建築面積1400平米。建造が十数年かかり、白銀一万三千両がかかる。今も住宅として利用する



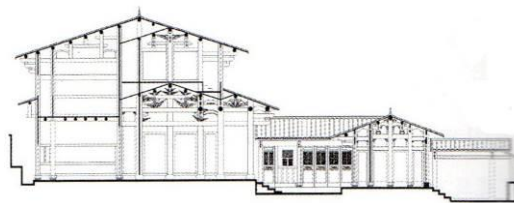
一階平面図



二階平面図



立面図



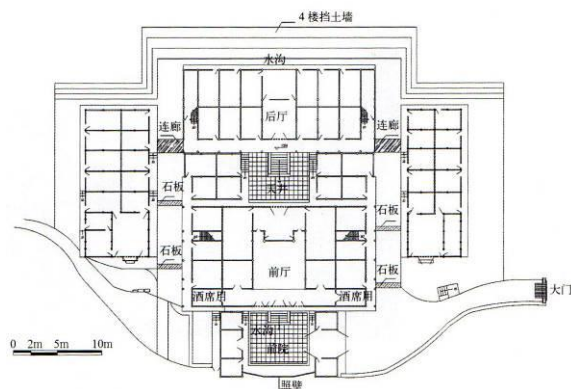
断面図

035 尤溪桂峰後門嶺大厝

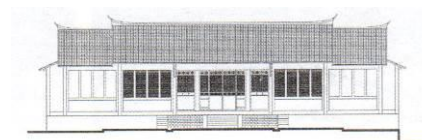
出典：戴志堅『福建民居』中国建築工業出版社、2009、第199頁

実地調査がある

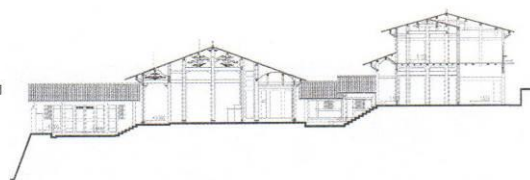
尤溪县洋中鎮桂峰村37号に位置する。建造年代は清乾隆十二年（1747年）。敷地面積1026平米、建築面積893.75平米。今も住宅として利用する



一階平面図



門厅立面図



断面図

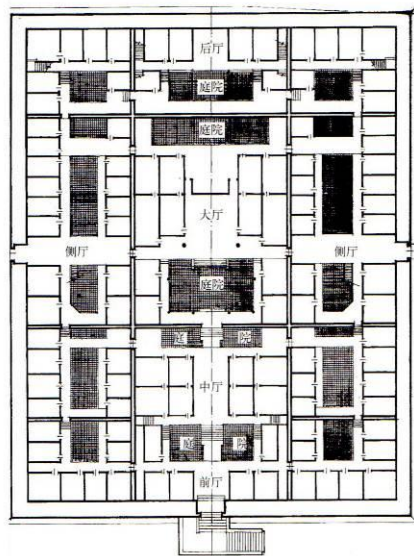


外觀（本人撮影）

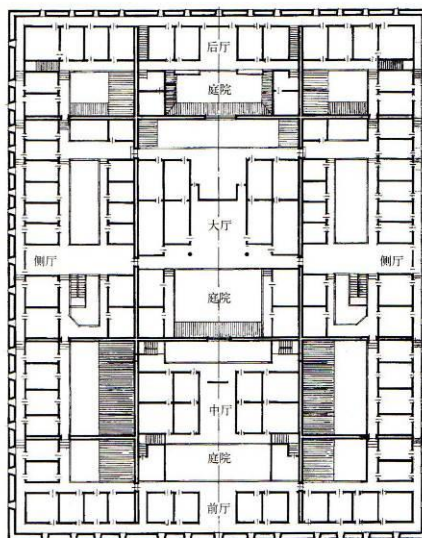
036 福清一都東関砦

出典：戴志堅『福建民居』中国建築工業出版社、2009、第 201 頁

福清市一都鎮東山村に位置する。清乾隆元年（1736 年）何氏一族が盗賊を防御するため、資金を集めて建造した砦式住宅である。長さ 55 メートル、奥行き 76 メートル。今も住宅として利用し、福建省文物保護単位である。



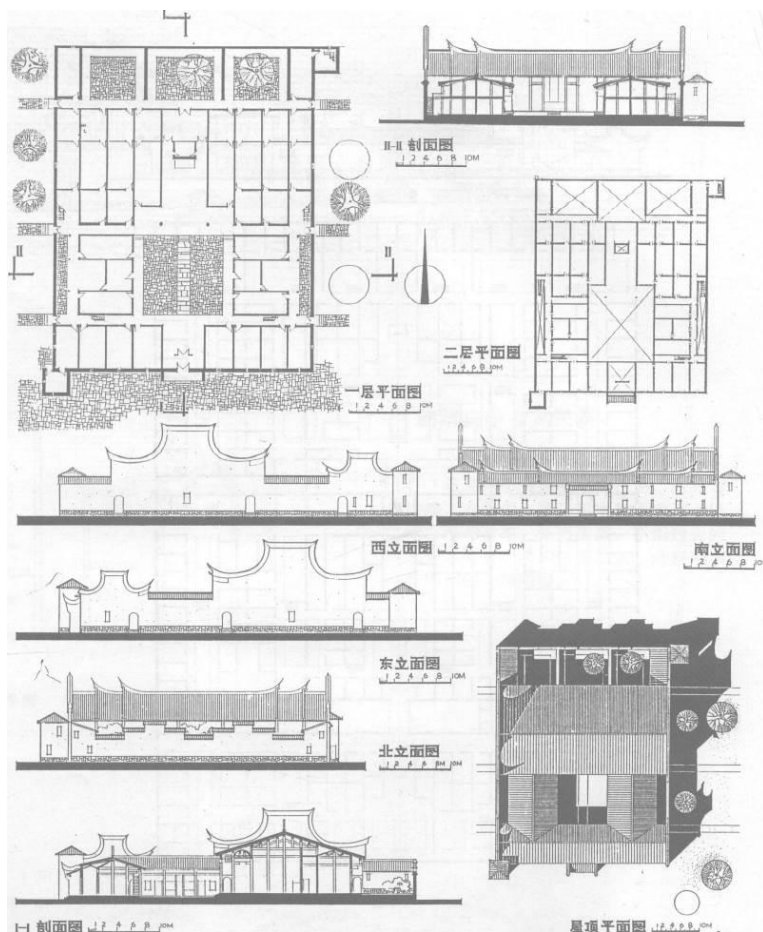
一階平面図



二階平面図

037 閩清ある住宅

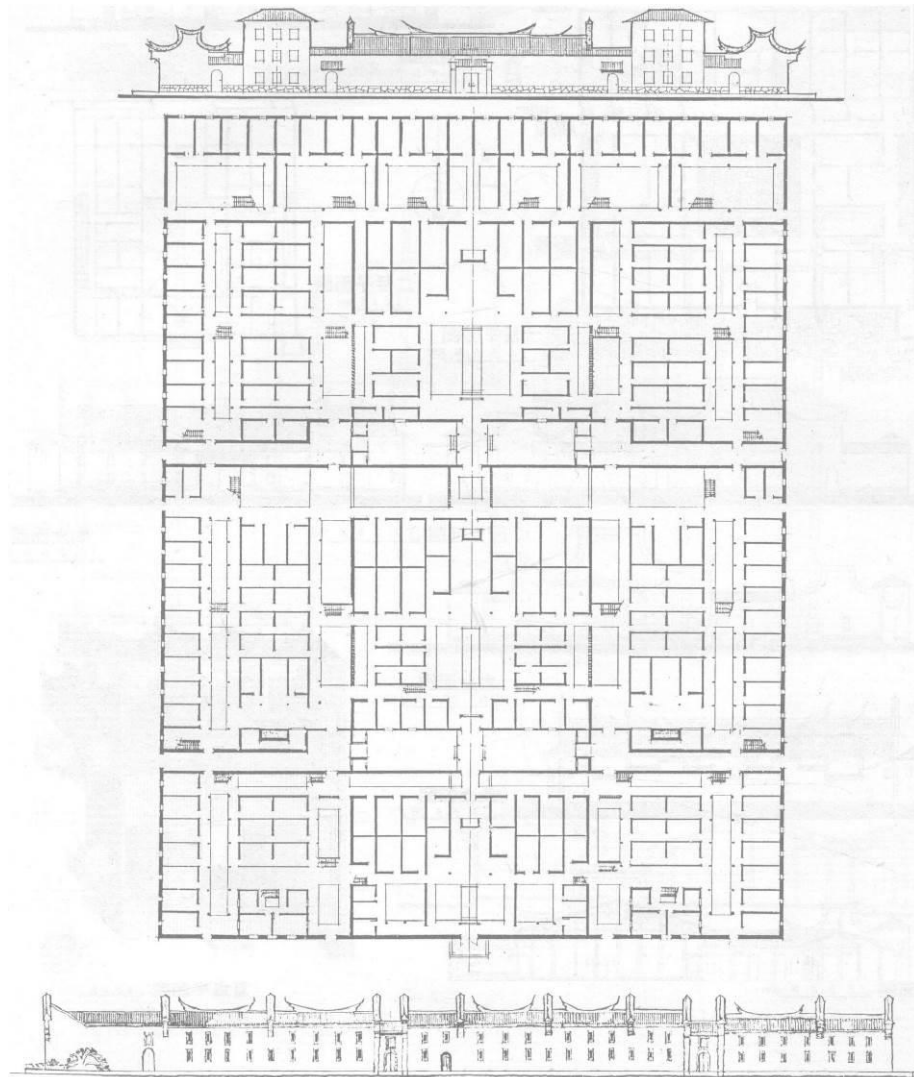
出典：黄為隽『閩粵民宅』天津科学技術出版社、1992、第 193 頁



038 閩清宏琳厝

出典：黄為雋『閩粵民宅』天津科学技術出版社、1992、第 194 頁

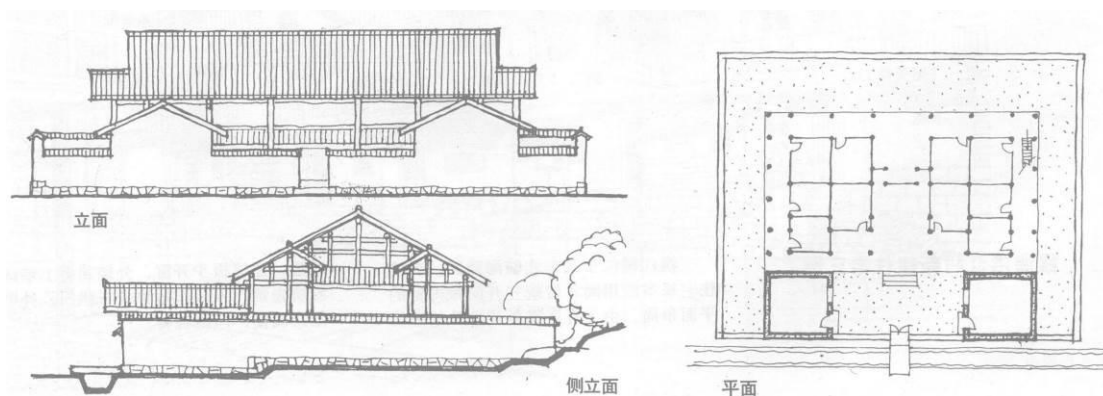
福州市閩清県坂東鎮新壺村に位置する。薬商人黄祖嘉（1755-1815）が清乾隆六十年（1795 年）から建造し始め、28 年後息子の黄宏琳によって竣工した。敷地面積 17832.28 平米、最盛期は約百世代、千人以上が住んでいる。今は住宅であるが、部分的に資料館として活用する。福建省文物保护单位である。



039 尤溪ある農家

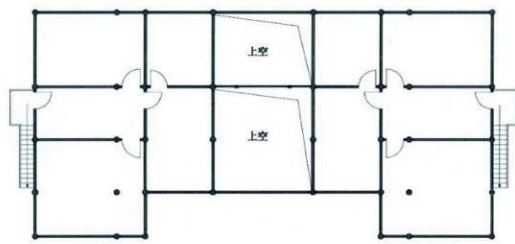
出典：黄為雋『閩粵民宅』天津科学技術出版社、1992、第 231 頁

独立農家である。詳しい説明はない。



040 羅源梧桐五魚厝

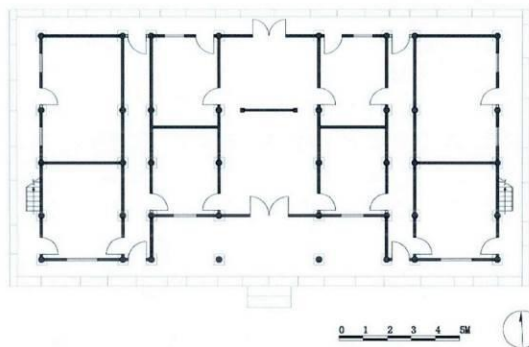
出典：黄曉雲『閩東傳統民居大木作研究』中央美術学院博士論文、2013、第 16 頁
 福州市羅源縣梧桐村に位置する。清初期に黄能勇が建造した。今も住宅として利用する。



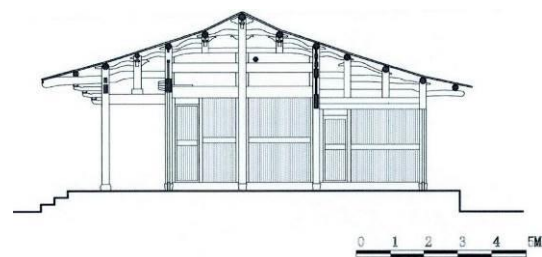
二階平面図



外観



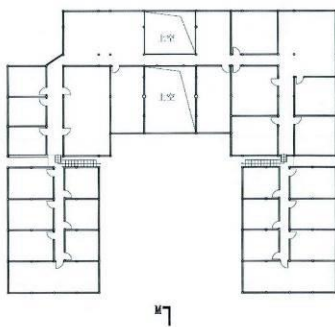
一階平面図



断面図

041 羅源梧桐水仙閣

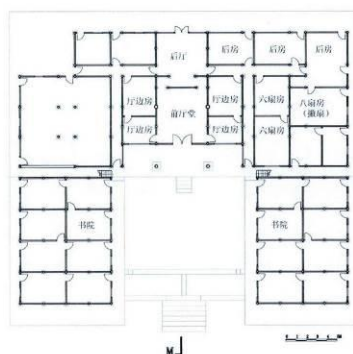
出典：黄曉雲『閩東傳統民居大木作研究』中央美術学院博士論文、2013、第 20 頁
 福州市羅源縣梧桐村上梧桐 44 号に位置する。清乾隆年間（1736-1795 年）黄良珠が建造した。今も住宅として使用する。



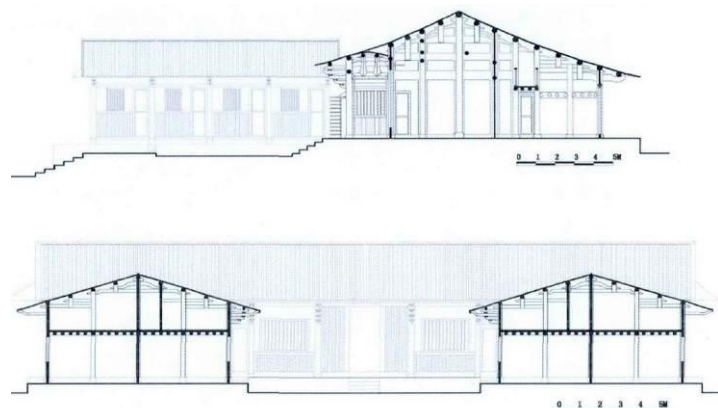
外観



厅堂



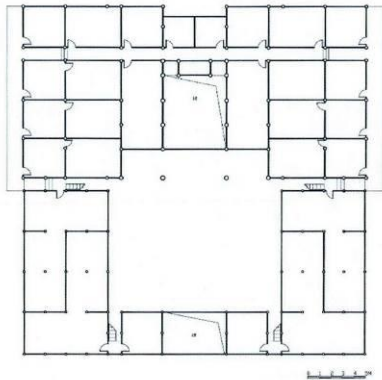
平面図



断面図

042 羅源梧桐孔照厝

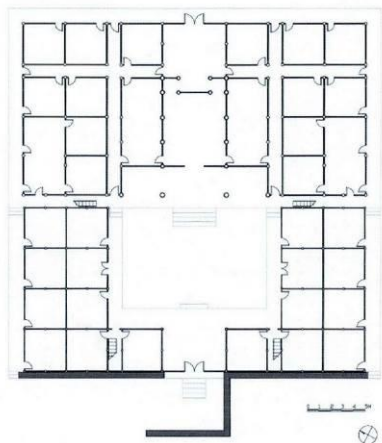
出典：黄晓雲『閩東伝統民居大木作研究』中央美术学院博士論文、2013、第 26 頁
福州市羅源県梧桐村上梧桐 11 号に位置する。18 世紀中期に建造された。今も住宅として使用する。



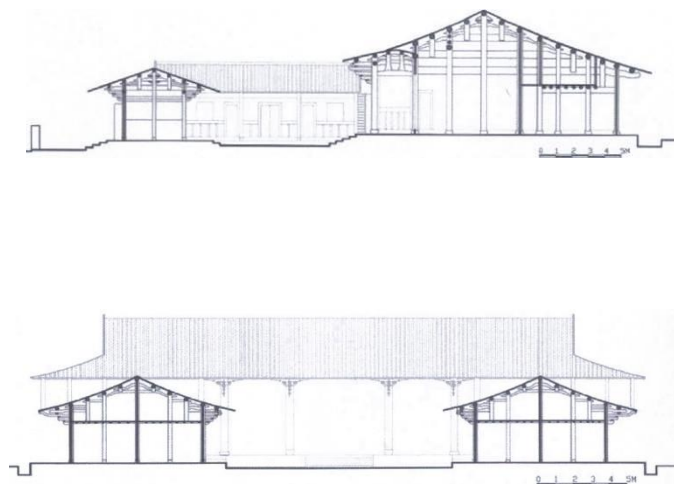
外観



厅堂



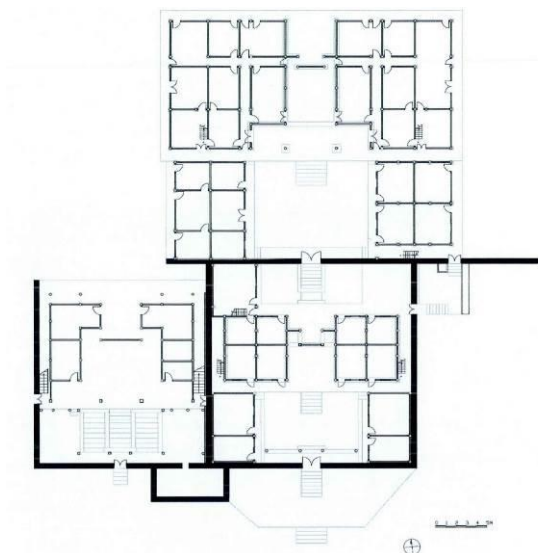
平面図



断面図

043 羅源梧桐旗竿里

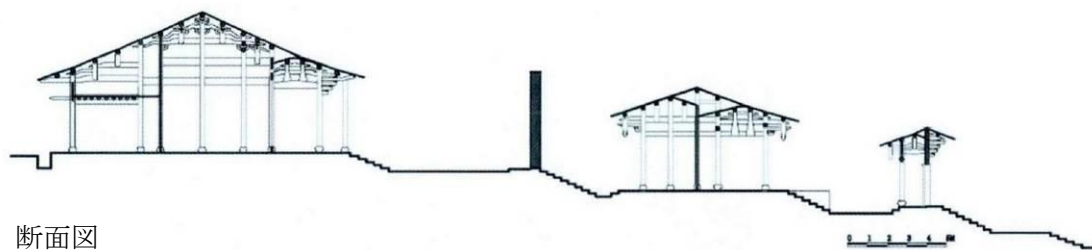
出典：黄晓雲『閩東伝統民居大木作研究』中央美术学院博士論文、2013、第 31 頁
福州市羅源県梧桐村に位置する。清末に建造された。今も住宅として使用する。



平面図



外観

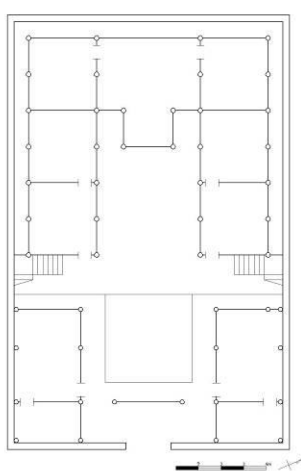


断面図

044 周寧浦源鄭宅

実地調査

寧徳市周寧県浦源鎮浦源村に位置する。清代に建造された。今は一階に民家資料館として利用し、二階は住宅として利用する。



平面図



庁堂



中庭

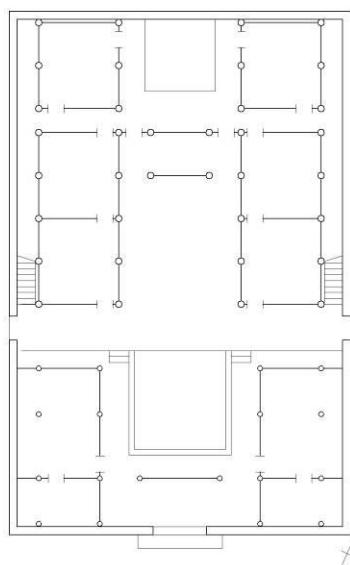


外観

045 屏南漈頭張宅

実地調査

寧徳市屏南県棠口郷漈頭村に位置する。清代に建造された。いまは1世帯が住んでいる。



一階平面図



庁堂



入口

046 屏南瀲下甘宅

実地調査

寧徳市屏南県甘棠郷瀲下村に位置する。家の人から 400 年以上の建物だと聞き取った



中庭



正房前軒



門庁

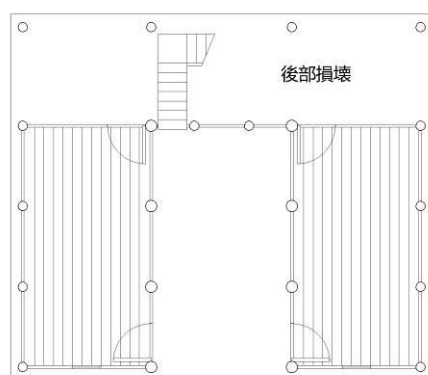


後部庭

047 屏南瀲下ある住宅

実地調査

寧徳市屏南県甘棠郷瀲下村に位置する。の人から明代に建造され、村の中一番歴史がある建物の一つだと聞き取った。今は空き家として、廃棄された。



一階平面図



正面

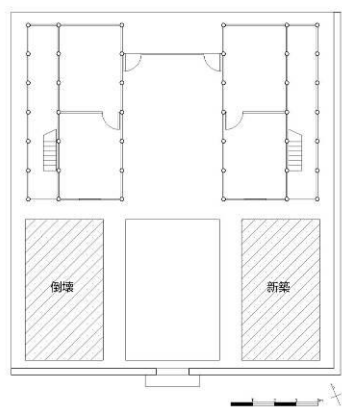


背面

048 尤溪桂峰蔡宅

実地調査

尤溪県洋中鎮桂峰村 37 号に位置する。清末桂峰村が衰退した時建造された小さな住宅である。正房と大門しか残されない。いまは蔡氏 1 世帯が住んでいる。



一階平面図



厅堂

049 永泰嵩口ある住宅

実地調査

福州市永泰県嵩口鎮に位置する。宋代初建、明万暦時（1593）、清康熙時（1768）二度再建、永泰県県級文物保護単位である。二つの三合院が並列配置で、今は4世帯が住んでいる。



外観



後門からの外観



正房



厅堂



厅堂

050 福鼎西陽陳宅

鄭婷氏の提供

寧徳市福鼎市管陽鎮西陽村に位置する。友たちの鄭婷氏の外祖母の家である。三合院住宅で、正房五間、東西廂房各三間。清代に建造された。今は鄭氏の外祖母陳氏と別の2世帯が住んでいる。（写真も鄭婷氏の提供である）



正房



正房と廂房



正房挿肘木



正房側柱



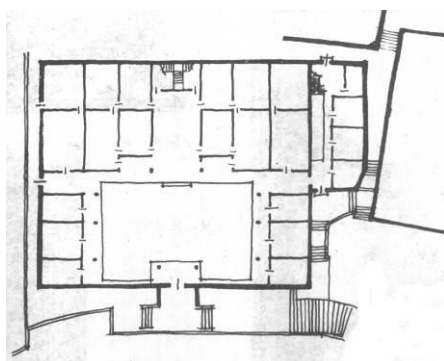
大門

051 涵江林宅

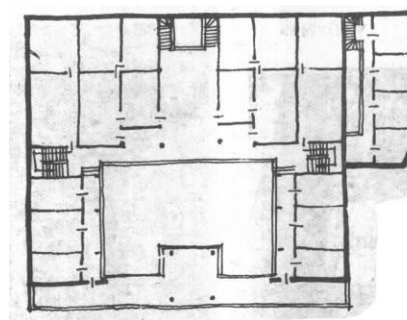
出典：王乃香『福建民居』中国建築工業出版社、1987、第 144 頁

出典：戴志堅『福建民居』中国建築工業出版社、2009、第 169 頁

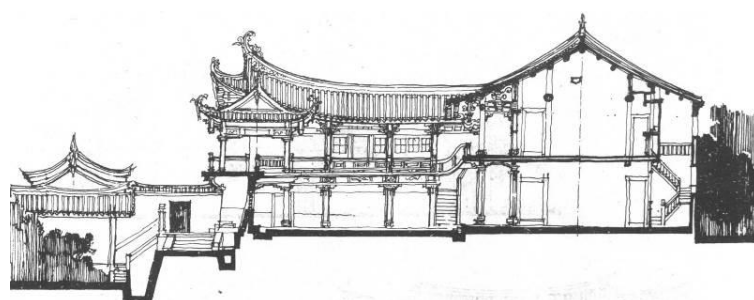
莆田市涵江区涵西新橋頭 27 号に位置する。1940 年に建造され、建造者は民国時期上海へ砂糖・布などの商販をするの行商人林海秋である。今も住宅として使用する。



一階平面図



二階平面図

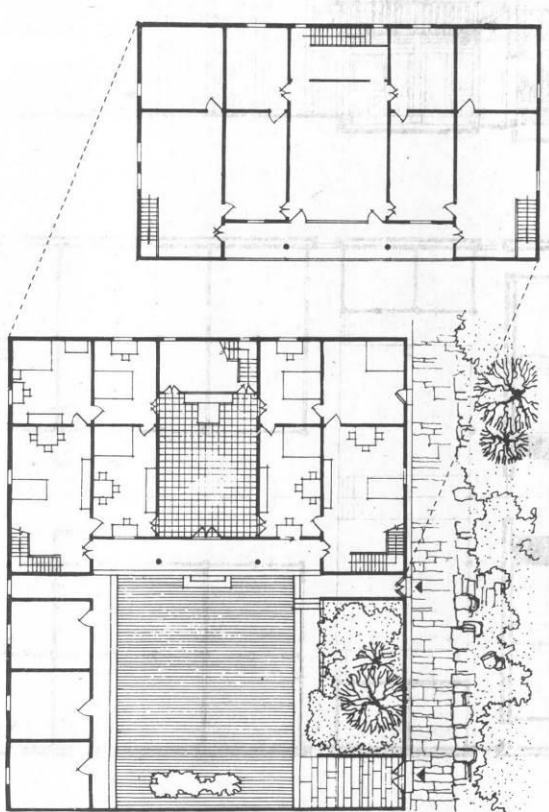


断面図

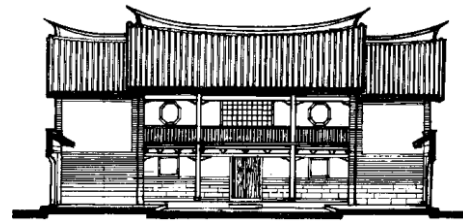
052 莆田江口ある住宅

出典：王乃香『福建民居』中国建築工業出版社、1987、第 146 頁

莆田市涵江区江口镇に位置する。少し洋風の要素が入る住宅である。詳しい説明はない。



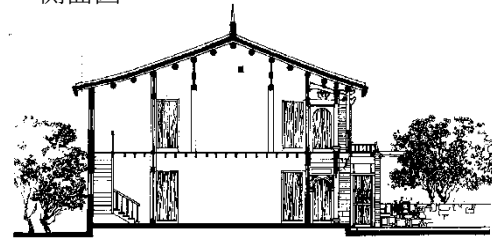
平面図



立面図



側面図

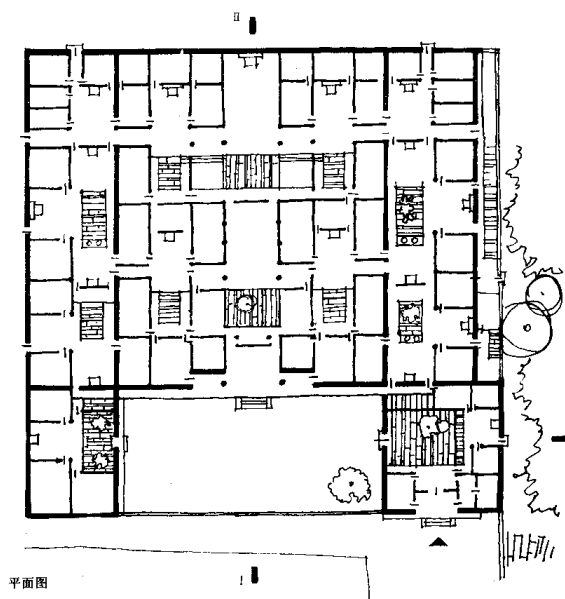


断面図

053 仙遊陳宅

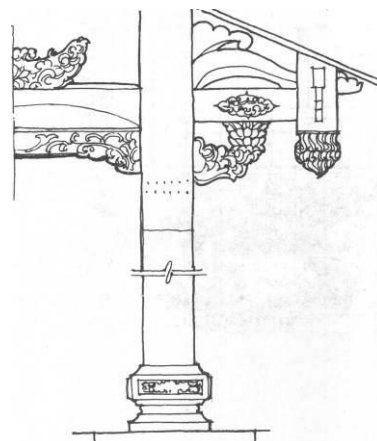
出典：王乃香『福建民居』中国建築工業出版社、1987、第 150 頁

明末に建造された。詳しい説明はない。

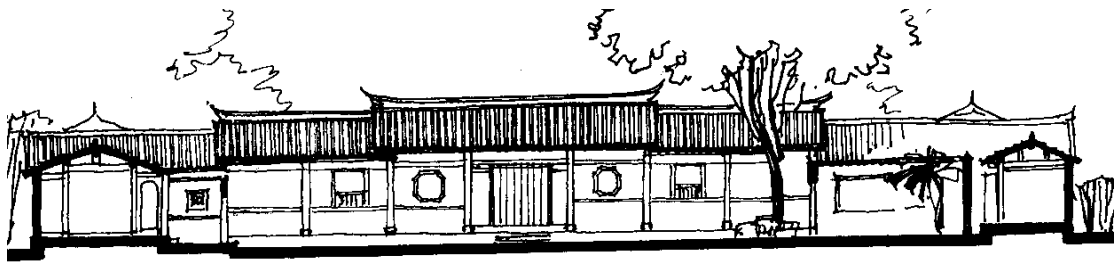


平面図

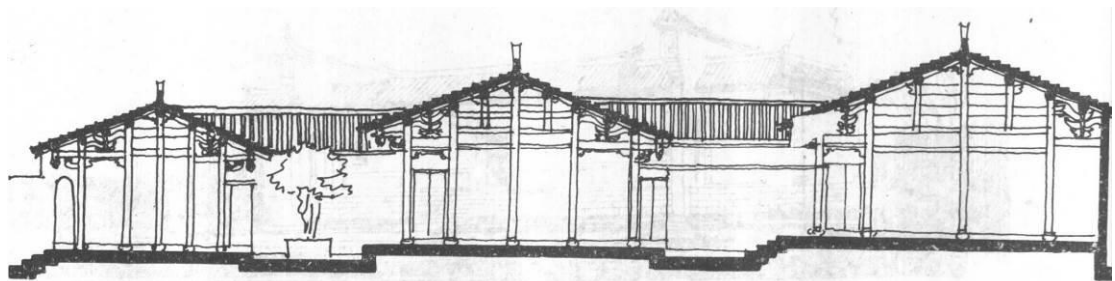
平面図



門庁軒部



I - I 断面図

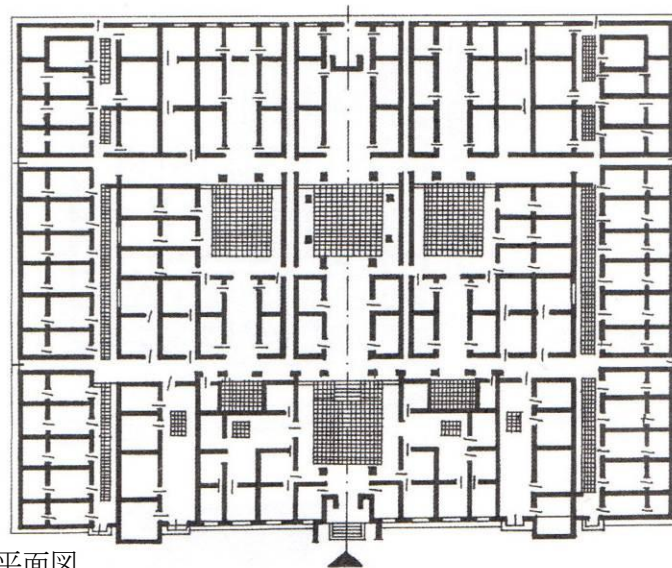


II - II 断面図

054 仙遊榜頭仙水大庁

出典：戴志堅『福建民居』中国建築工業出版社、2009、第162頁

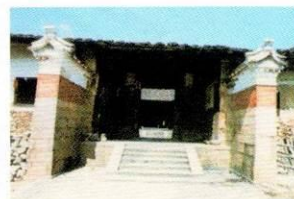
莆田市仙遊県榜頭鎮仙水村に位置する。明正統十一年（1446年）に建造された。当初の持ち主は明正統四年進士の郷紳陳昇である。建築面積8820平米。現在は住宅として使用する。仙遊県文物保護単位である。



平面図



外観

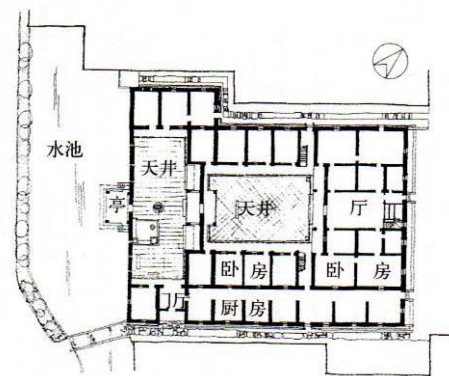


大門

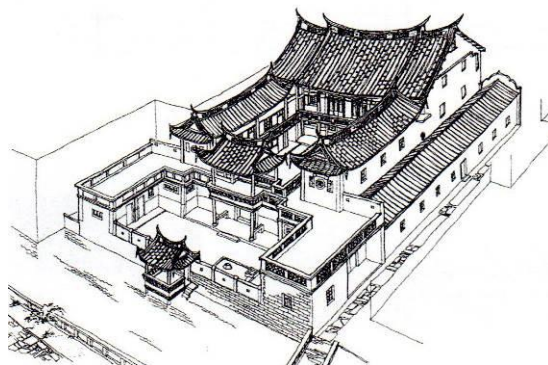
055 涵江江口余宅

出典：戴志堅『福建民居』 中国建築工業出版社、2009、第 163 頁

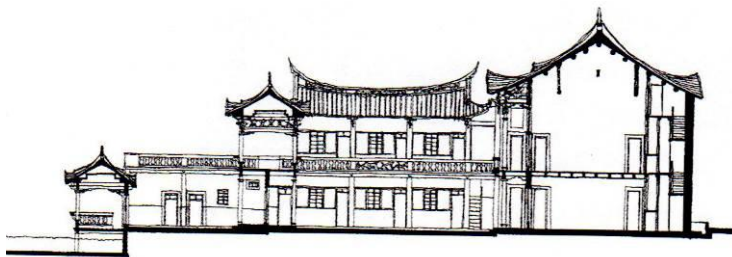
莆田市涵江区江口镇港後村に位置する。帰国華僑が建造した住宅で、洋風とマレーシアの建築要素が混ざる。



一階平面図



鳥瞰

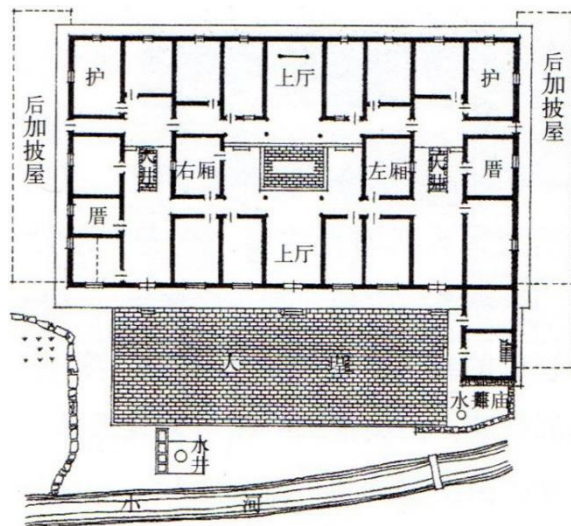


断面図

056 仙遊仙華陳宅

出典：戴志堅『福建民居』 中国建築工業出版社、2009、第 165 頁

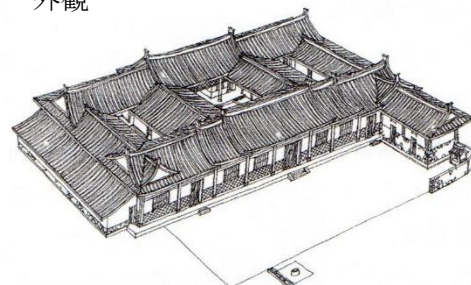
莆田市仙遊県蓋尾郷仙華村に位置する。詳しい情報はない。



平面図



外観

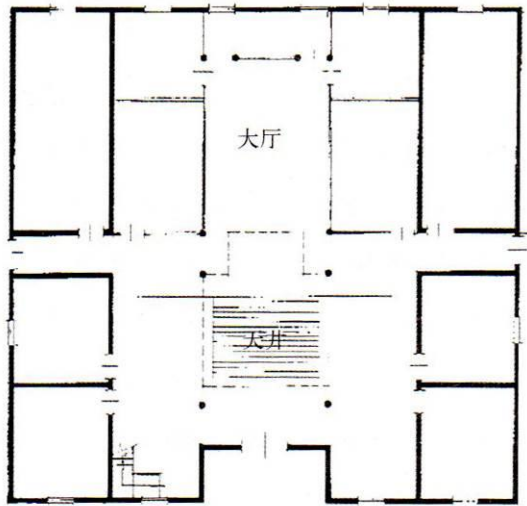


鳥瞰

057 仙遊楓亭陳和發宅

出典：戴志堅『福建民居』 中国建築工業出版社、2009、第 166 頁

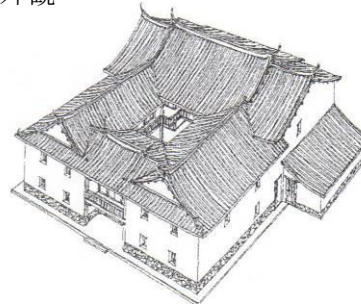
莆田市仙遊県楓亭郷に位置する。独立農家である。詳しい情報はない。



一階平面図



外観



鳥瞰

058 仙遊坂頭鴛鴦大厝

出典：戴志堅『福建民居』 中国建築工業出版社、2009、第 168 頁

莆田市仙遊県頼店鎮坂頭村に位置する。1911 年にインドネシアから帰国した商人楊芳平、楊芳静兄弟が建造した住宅である。長さ 160 メートル、奥行き 80 メートル、二つの平面同じの七間二進建物が並列配置する住宅である。



外観



大門

059 莆田大宗伯邸

出典：戴志堅『福建民居』 中国建築工業出版社、2009、第 169 頁

莆田市城廂区長寿街廟前路に位置する。明萬歴二十年（1592 年）に建造された。福建省文物保护单位で、今も住宅として使用する。



鳥瞰

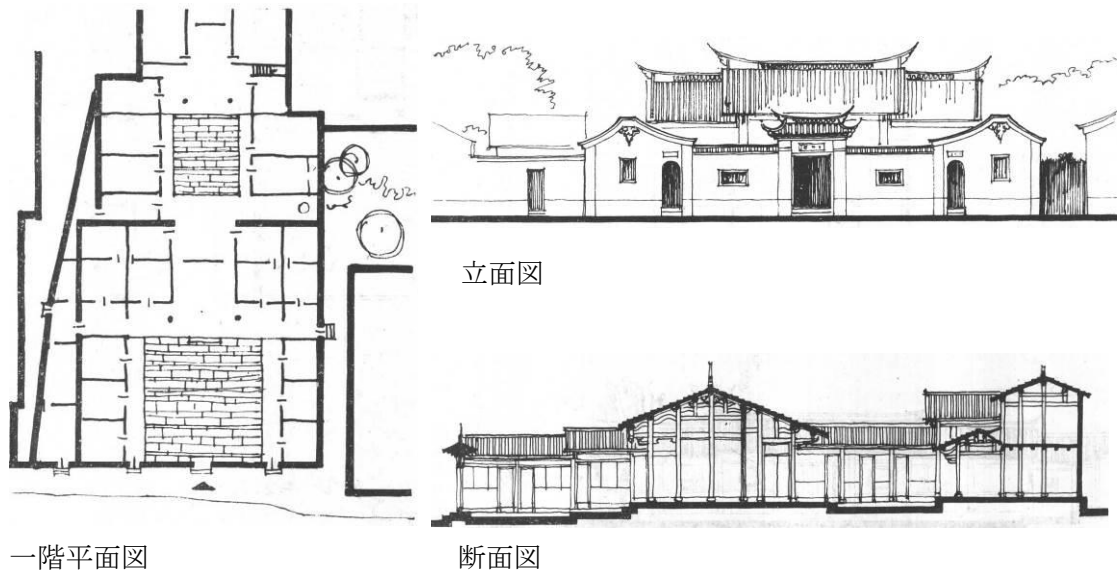


入口細部

060 永春鄭宅

出典：王乃香『福建民居』中国建築工業出版社、1987、第 149 頁

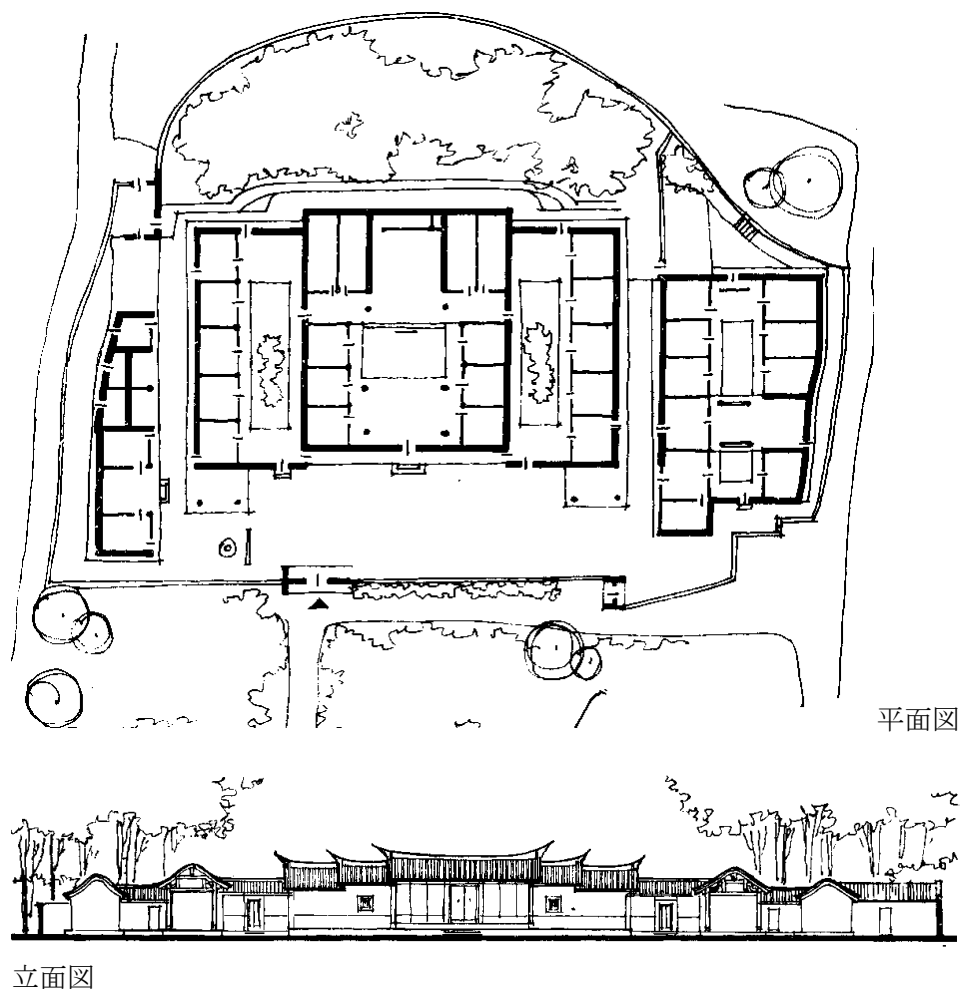
宣統二年（1910 年）に建造された住宅である。詳しい説明はない。

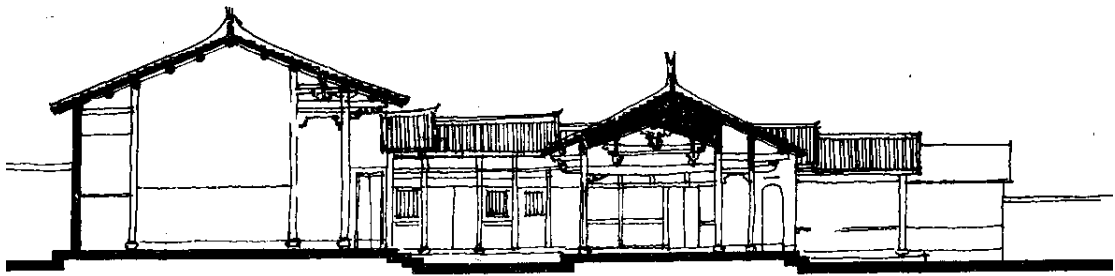


061 漳平上桂林黃宅

出典：王乃香『福建民居』中国建築工業出版社、1987、第 153 頁

清乾隆年間（1736-1795 年）に建造された住宅である。詳しい説明はない。

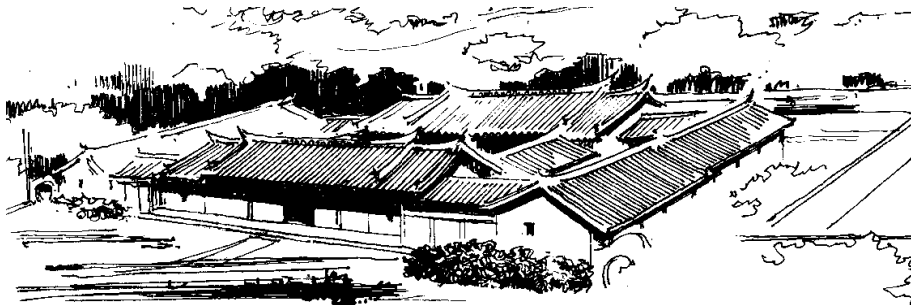




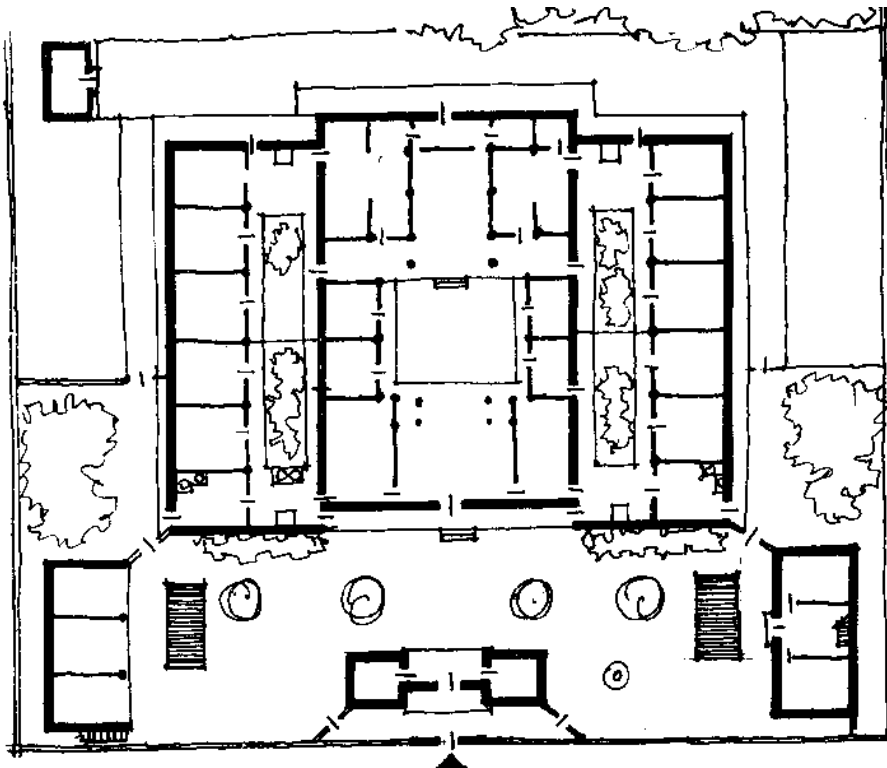
断面図

062 漳平下桂林劉宅

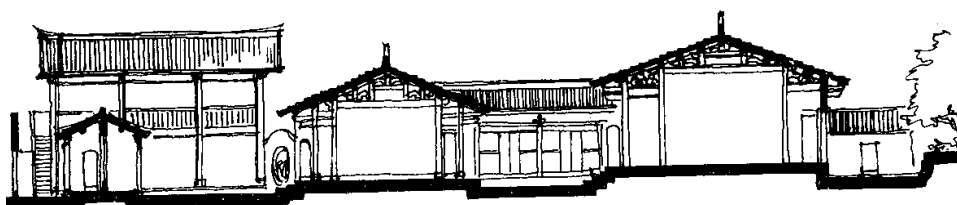
出典：王乃香『福建民居』中国建築工業出版社、1987、第154頁
清代に建造された住宅で、洋風的大门を持っている。詳しい説明はない。



鳥瞰



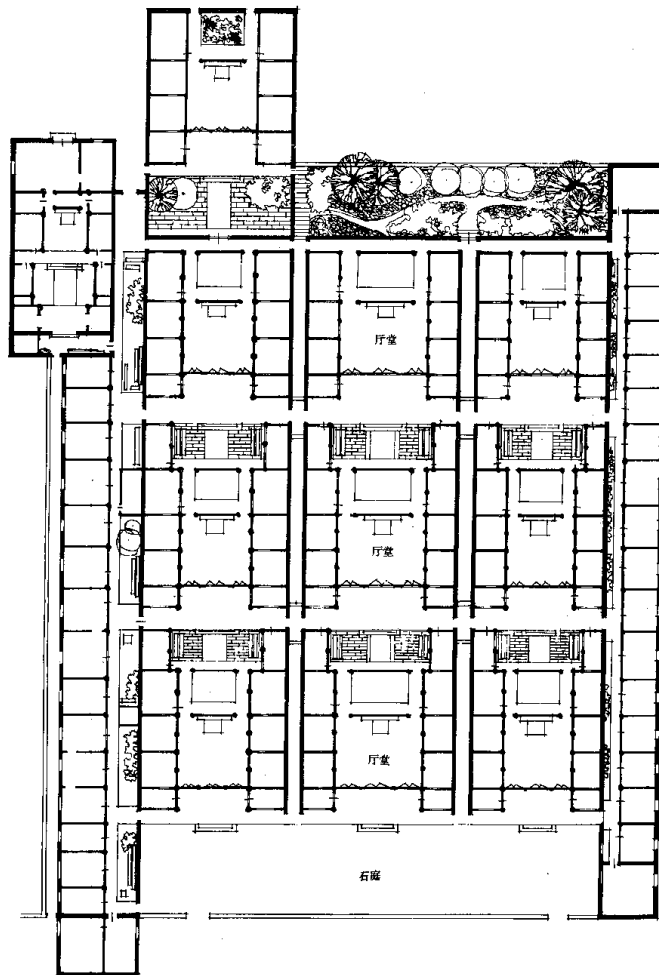
平面図



断面図

063 泉州呉宅

出典：王乃香『福建民居』中国建築工業出版社、1987、第 155 頁
清乾隆年間（1736-1795 年）に建造された住宅である。長さ 63 メートル、奥行き 105 メー



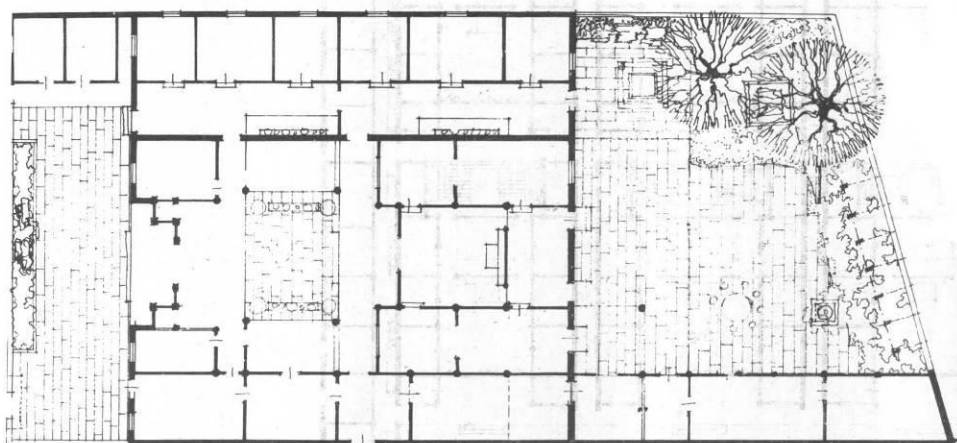
平面図

064 泉州蔡宅

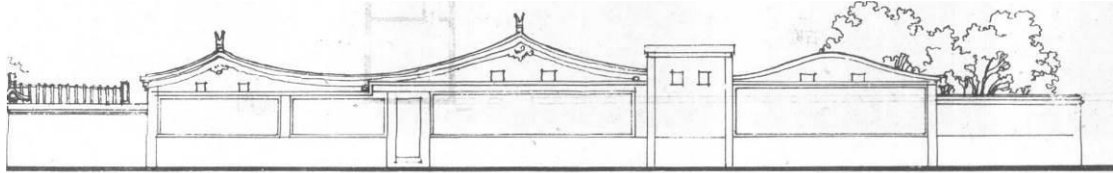
出典：王乃香『福建民居』中国建築工業出版社、1987、第 156 頁

出典：戴志堅『福建民居』中国建築工業出版社、2009、第 141 頁

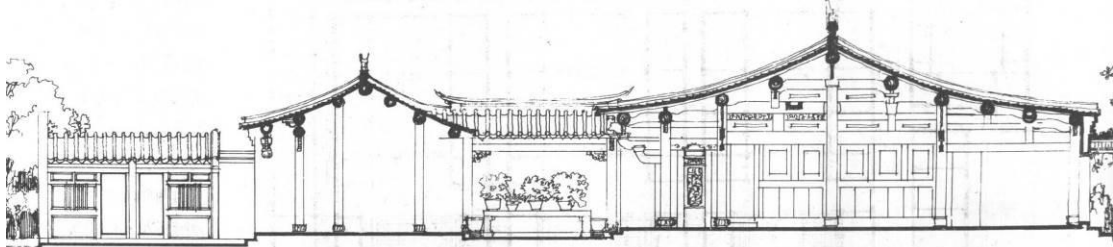
泉州市鯉城区後城に位置する。フィリピンから帰国した商人蔡徳燥が光緒三十年（1904 年）に建造された住宅である。敷地面積約 1000 平米、建築面積約 500 平米。今も住宅として使用する。



平面図



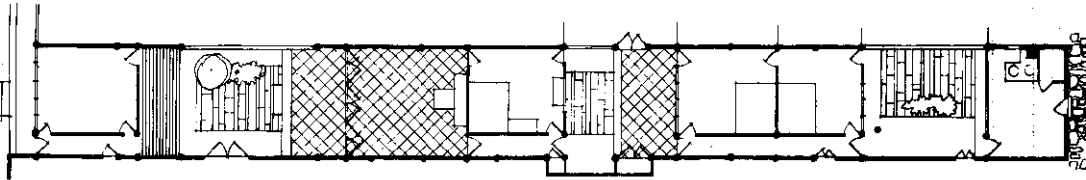
側面図



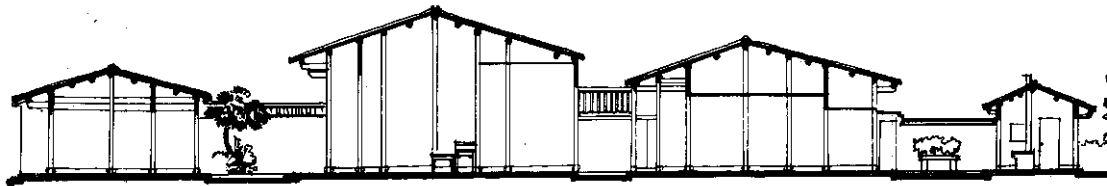
断面図

065 泉州ある住宅

出典：王乃香『福建民居』中国建築工業出版社、1987、第 157 頁
都会の小さな町家である。詳しい説明はない。



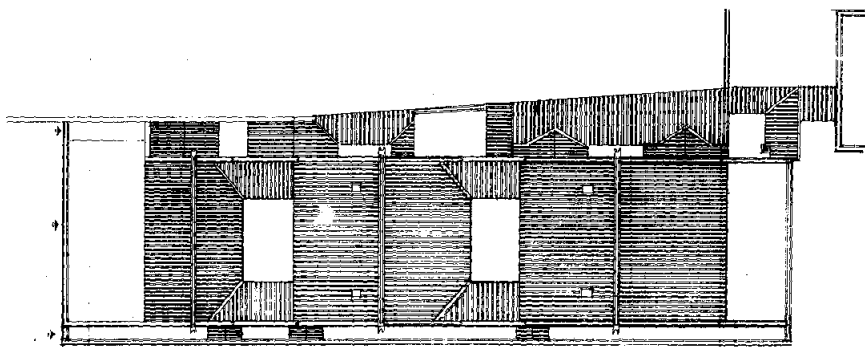
平面図



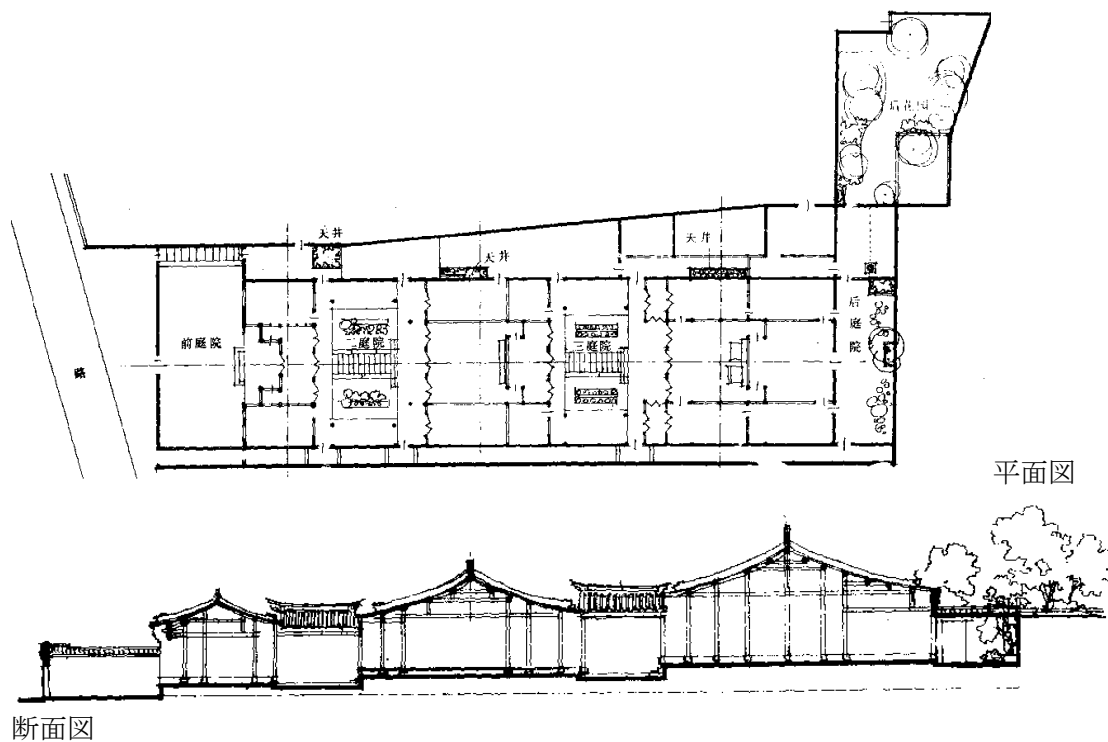
断面図

066 泉州黄宅

出典：王乃香『福建民居』中国建築工業出版社、1987、第 163 頁
詳しい説明はない。



屋上平面図

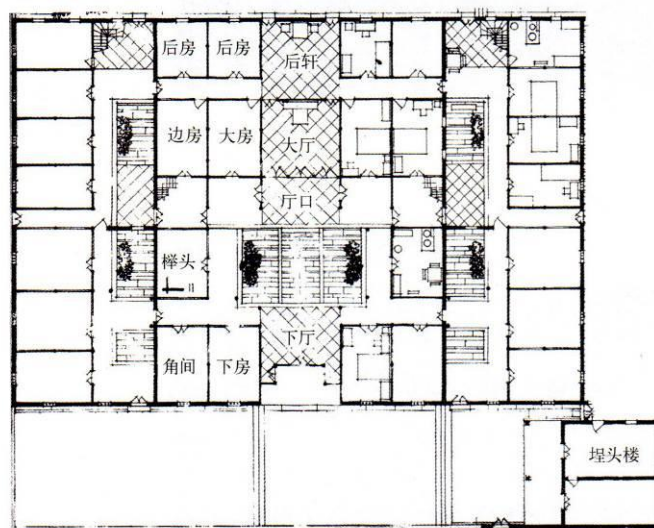


067 晋江青陽庄宅

出典：王乃香『福建民居』中国建築工業出版社、1987、第 167 頁

出典：戴志堅『福建民居』中国建築工業出版社、2009、第 141 頁

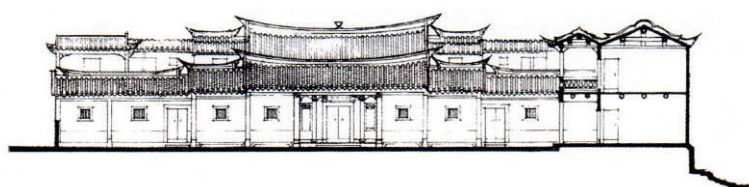
泉州市晋江市青陽鎮に位置する。1934 年にフィリピンから帰国した商人庄銘真が建造した住宅である。



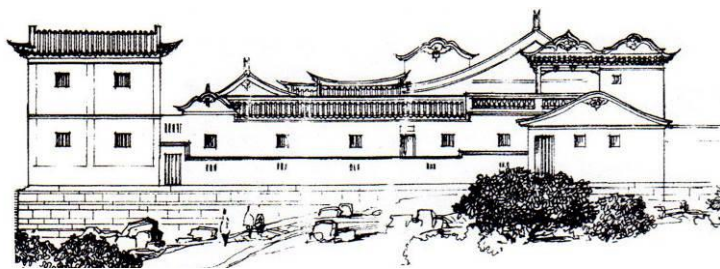
一階平面图



鳥瞰



立面图

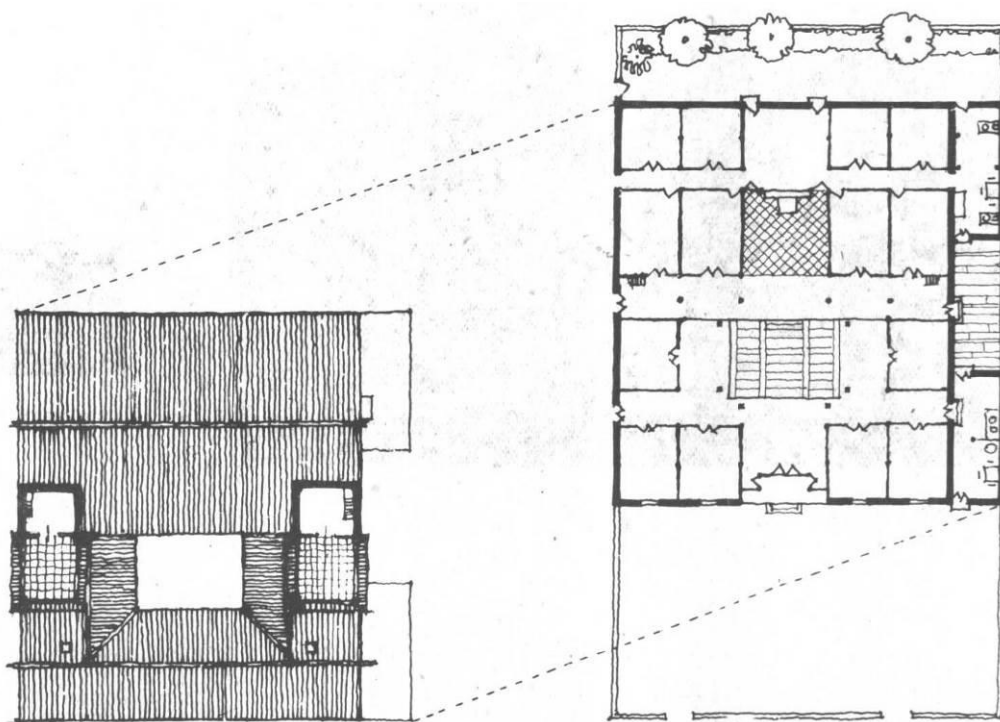


側面図

068 晉江ある住宅

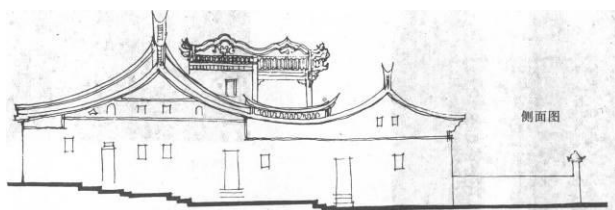
出典：王乃香『福建民居』中国建築工業出版社、1987、第 172 頁

小さな農家である。詳しい説明はない。

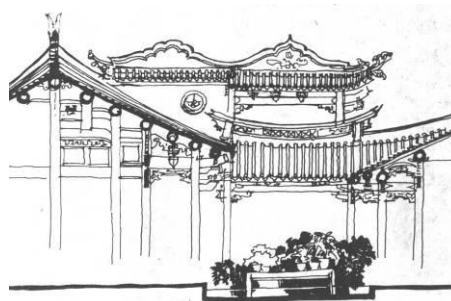


二階平面図

一階平面図



側面図

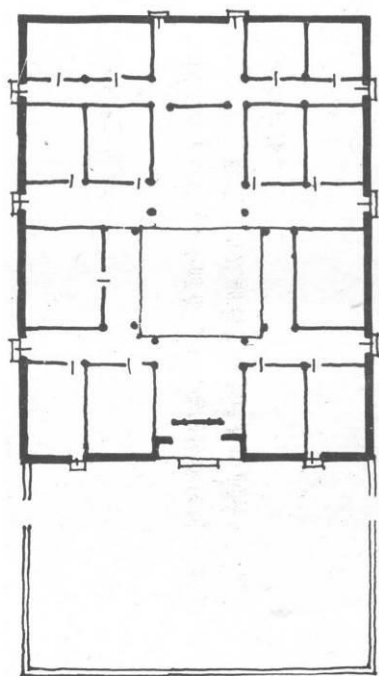


一部の断面

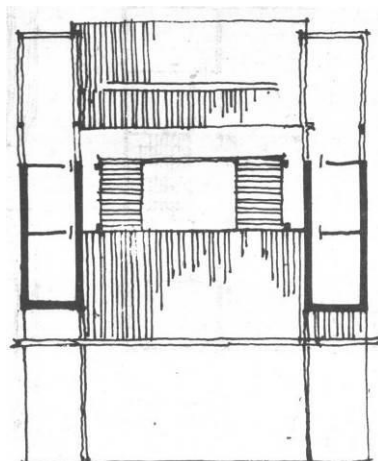
069 晉江大倫蔡宅

出典：王乃香『福建民居』中国建築工業出版社、1987、第 176 頁

詳しい説明はない。



一階平面図



二階平面図



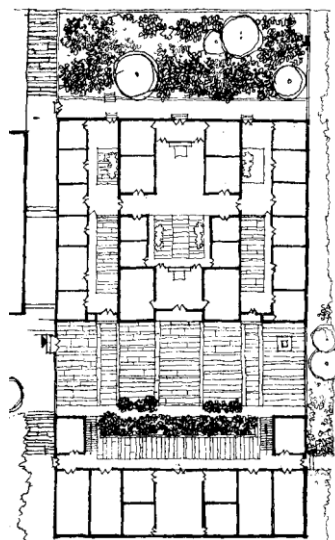
立面図



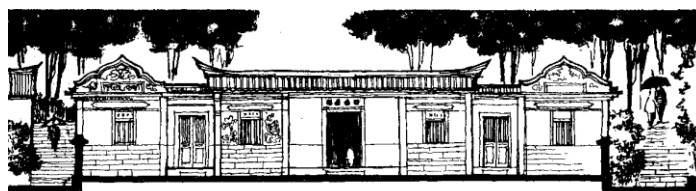
外觀

070 集美陳宅

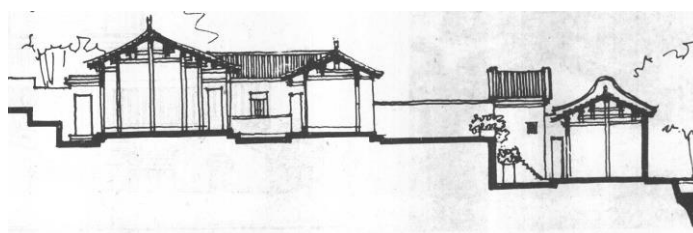
出典：王乃香『福建民居』中国建築工業出版社、1987、第 182 頁
 帰国華僑が建造した住宅で、洋風要素がある。



平面図



立面図

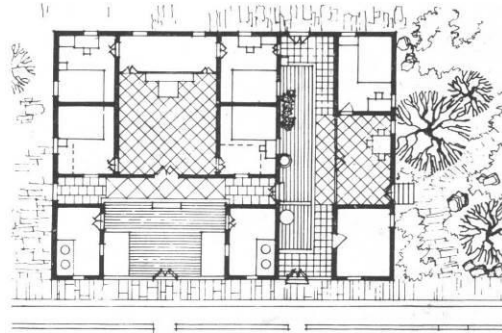


断面図

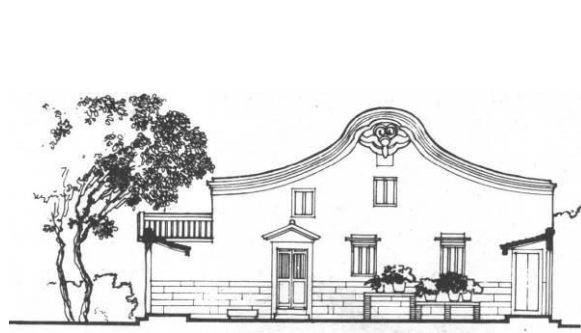
071 集美陳氏住宅

出典：王乃香『福建民居』中国建築工業出版社、1987、第 185 頁

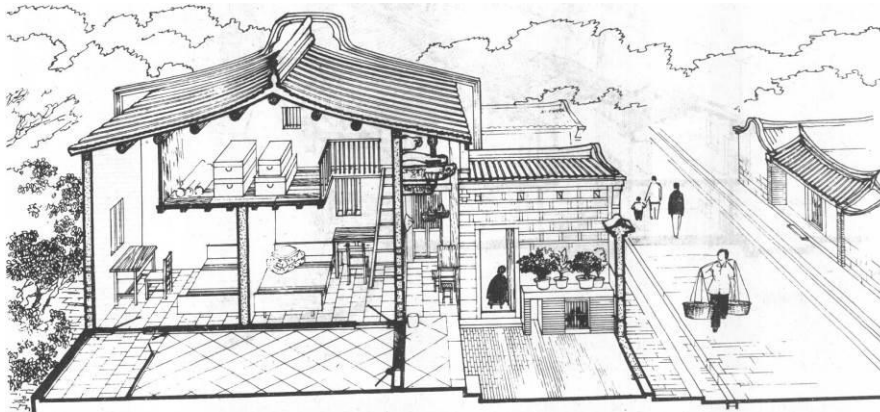
詳しい説明はない。



平面図



立面図

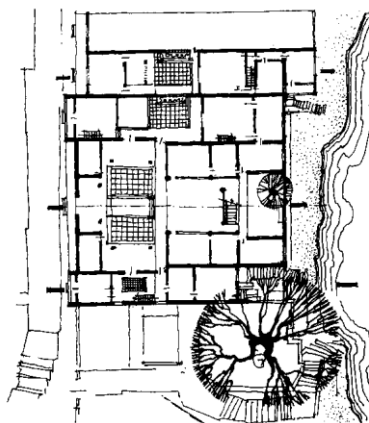


断面

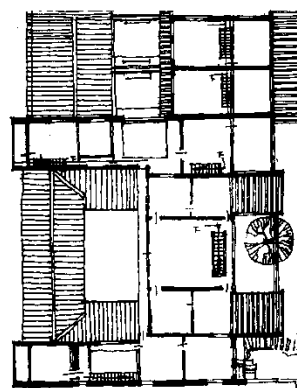
072 漳州南門ある住宅

出典：王乃香『福建民居』中国建築工業出版社、1987、第 186 頁

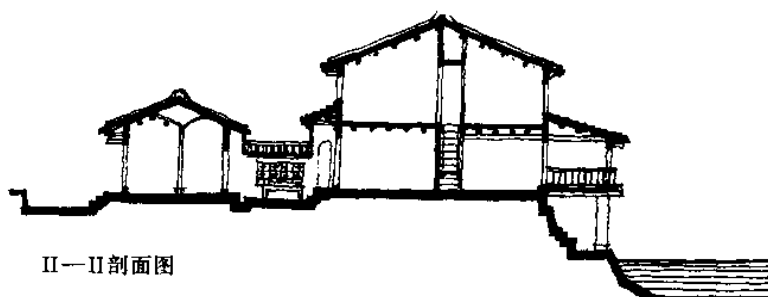
川辺の住宅である。詳しい説明はない。



一階平面図



二階平面図



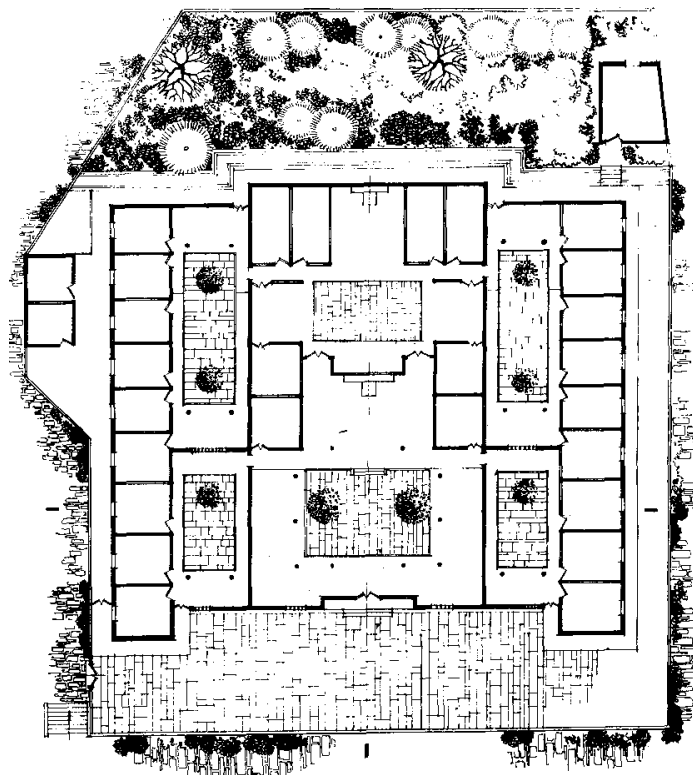
II-II 剖面図

断面図

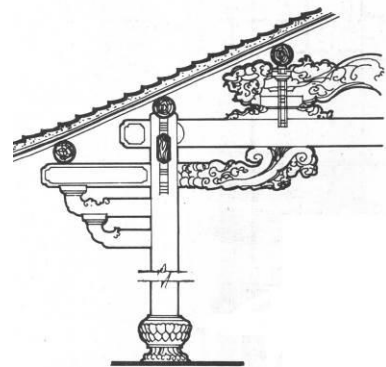
073 龍岩新邱厝

出典：王乃香『福建民居』中国建築工業出版社、1987、第 188 頁

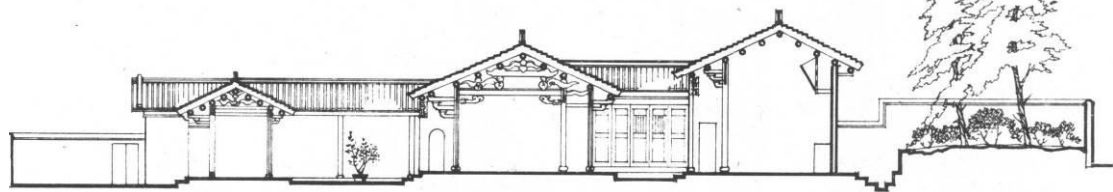
清光緒十四年（1888 年）に建て替えされた。敷地面積 1742 平米。今は博物館として利用する。福建省文物保護単位である。



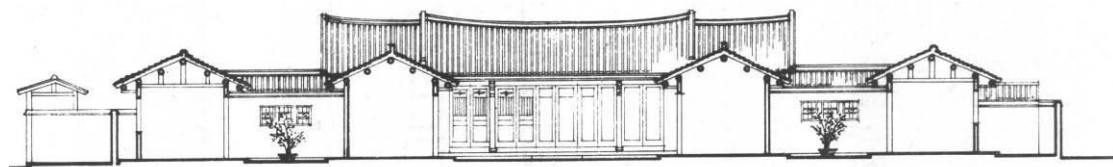
平面図



軒細部



断面図



断面図

074 泉州亭店楊阿苗宅

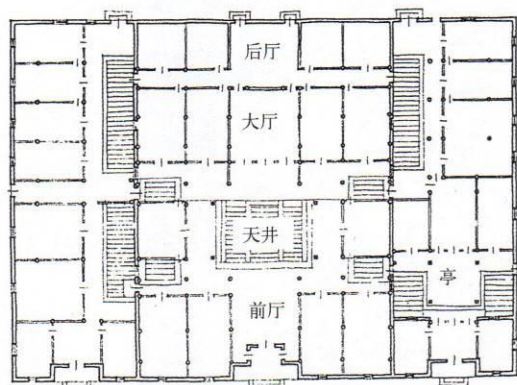
出典：王乃香『福建民居』中国建築工業出版社、1987、第 159 頁

出典：戴志堅『福建民居』中国建築工業出版社、2009、第 134 頁

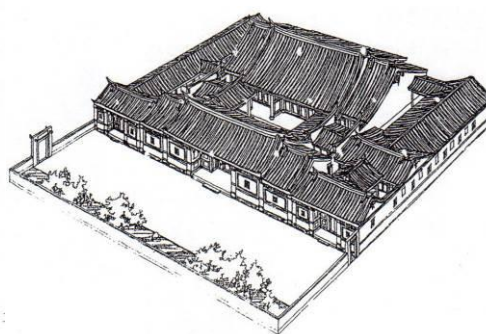
泉州市鯉城区江南鎮亭店村に位置する。持ち主楊阿苗はフィリピン華僑で、清光緒二十年（1894 年）から十三年かかってこの住宅を建造した。敷地面積 1349 平米。今は民家資料館として利用する。国家重点文物保護単位である。



立面図



一階平面図



鳥瞰



大門

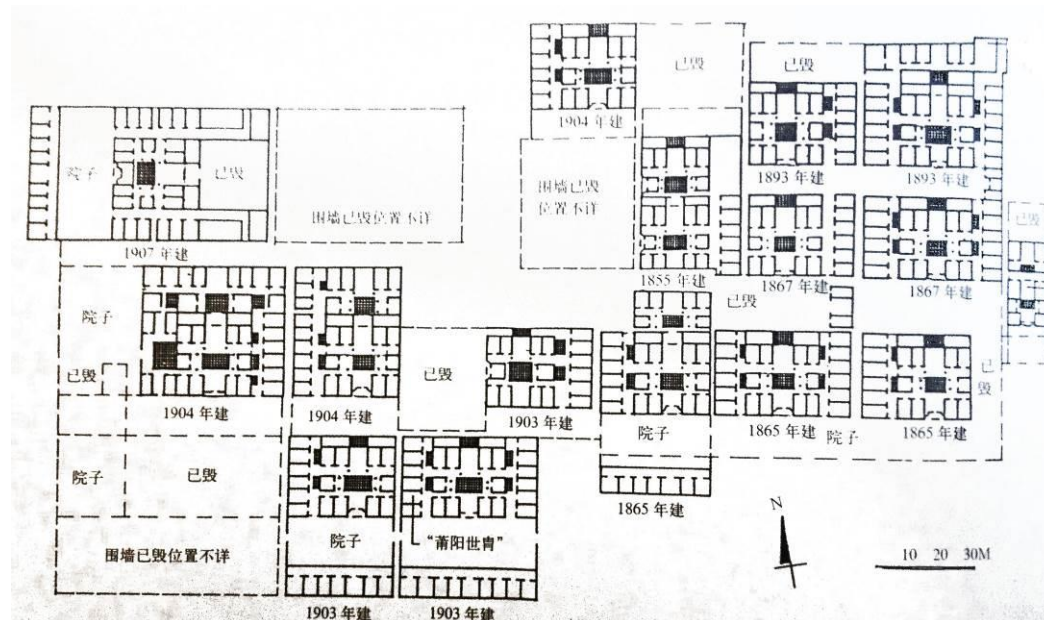


外觀

075 南安官橋蔡資深宅

出典：戴志堅『福建民居』中国建築工業出版社、2009、第 135 頁

泉州市南安市官橋鎮漳里村に位置する。フィリピンから帰国商人橋蔡資から始め 56 年をかけて建造した住宅群である（1855-1911）。建築総面積 16300 平米。国家重点文物保護単位である。

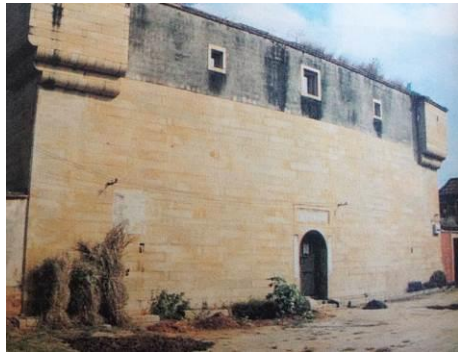


平面図

076 泉州泉港黄素石楼

出典：戴志堅『福建民居』中国建築工業出版社、2009、第 138 頁

泉州市泉港区前黄鎮塗楼村に位置する。黄素・黄堂官父子より清乾隆六年（1741 年）に建造した土楼である。敷地面積 4147.5 平米。福建省文物保护单位である。

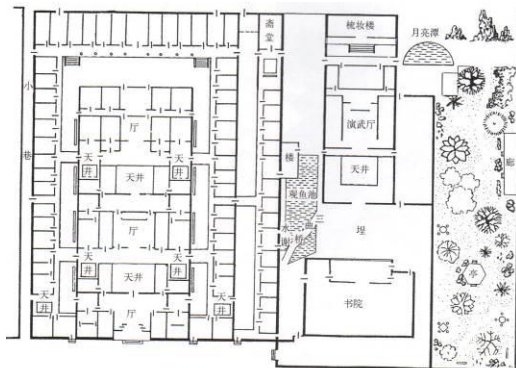


外観

077 南安石井中憲邸

出典：戴志堅『福建民居』中国建築工業出版社、2009、第 139 頁

泉州市南安市石井鎮延平東路に位置する。南安大商人鄭運錦より清雍正六年（1728 年）から建造し始め、三代かかって今の規模になる。敷地面積 13986 平米、建築面積 7780 平米。福建省文物保护单位である。



平面図

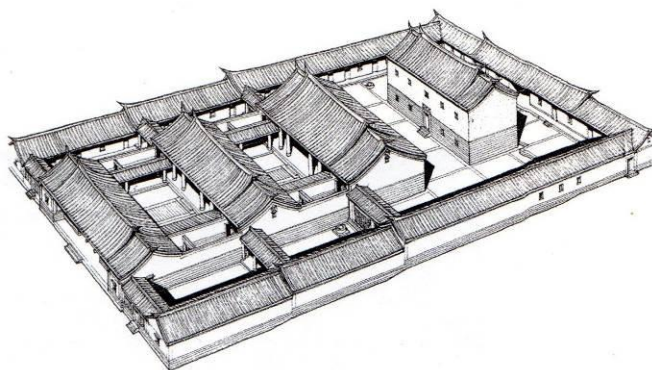


鳥瞰

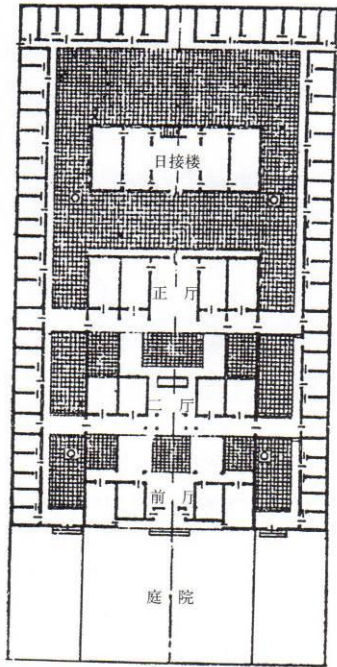
078 漳浦湖西藍廷珍宅

出典：戴志堅『福建民居』中国建築工業出版社、2009、第 143 頁

漳州市漳浦県湖西郷頂壇村に位置する。清雍正初年（1720 年代）に建造された。当初の持ち主藍廷珍は軍人で、澎湖副将・福建水師提督などの官職に務めた。敷地面積約 4400 平米。福建省文物保护单位である。



鳥瞰



一階平面図



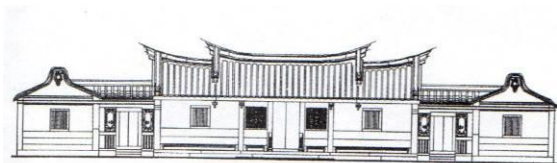
入口細部



外觀

079 漳州官園蔡竹禅宅

出典：戴志堅『福建民居』中国建築工業出版社、2009、第 145 頁
漳州市薌城区官園大学甲 37 号に位置する。清乾隆年間（1736-1795 年）に建造された住宅で、1940 年代商人蔡竹禅が購入し、修復した。敷地面積 2865 平米。今も住宅として使用する。福建省文物保护单位である。



立面図



鳥瞰

080 アモイコロンス大夫邸

出典：戴志堅『福建民居』中国建築工業出版社、2009、第 146 頁
アモイ市コロンス海壇路 58 号に位置する。同安人黄旭斋より清嘉慶元年（1796 年）に建造された。

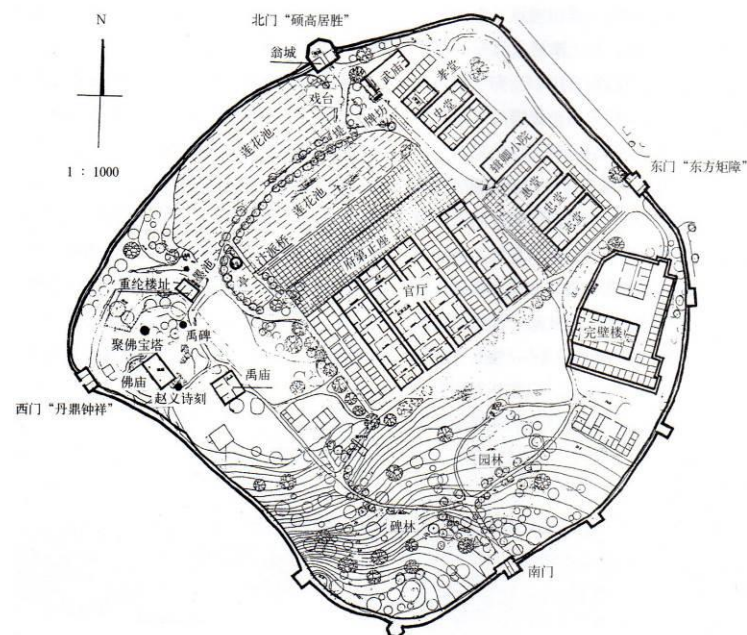


鳥瞰

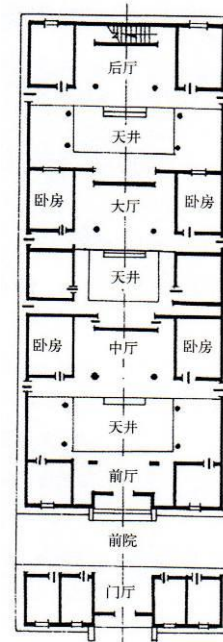
081 漳浦湖西趙家堡

出典：戴志堅『福建民居』中国建築工業出版社、2009、第 147 頁

漳州市漳浦県湖西郷趙家城村に位置する。明萬歴二十八年（1600 年）から建造し始め、宋皇室の末裔が集住する場所である。今も趙氏一族が集住する。国家重点文物保護単位である。



配置図

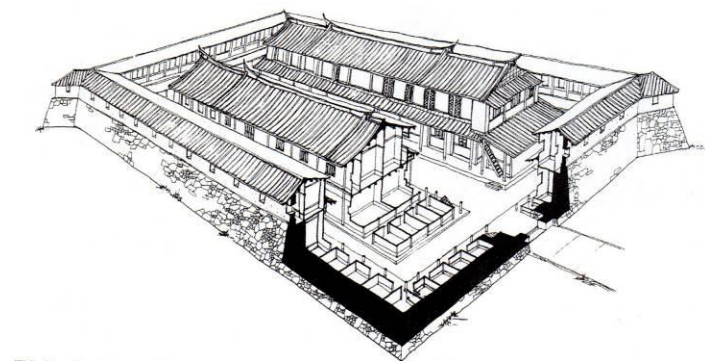


官厅平面图

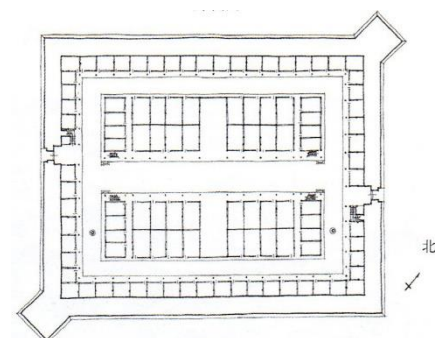
082 德化碩傑大興堡

出典：戴志堅『福建民居』中国建築工業出版社、2009、第 150 頁

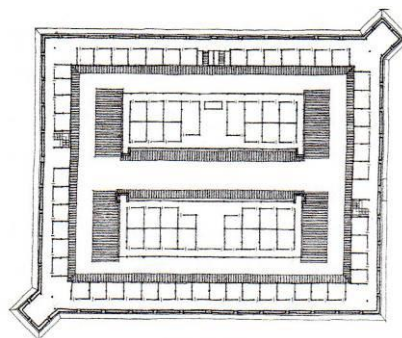
泉州市德化県三班鎮碩傑村に位置する。当地の富商鄭晟より清康熙六十一年（1722 年）に建造された。敷地面積 3673 平米。今わずか 3 世帯が住んでいる。德化県文物保護単位である。



鳥瞰



一階平面

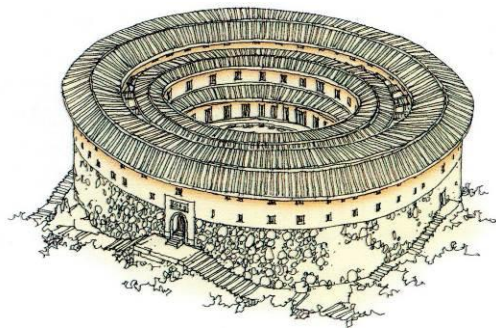


二階平面

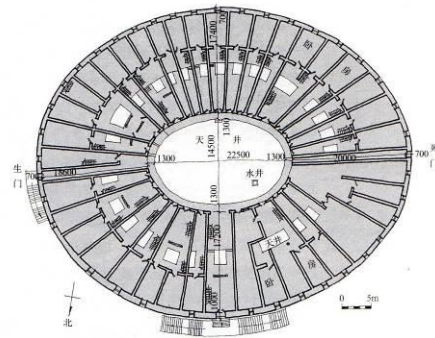
083 華安岱山齊雲樓

出典：戴志堅『福建民居』中国建築工業出版社、2009、第 151 頁

漳州市華安縣沙建鎮岱山村に位置する。明萬曆十八年（1590 年）に建造し始め、清同治元年（1862 年）に建て替える。福建省文物保護單位である。



鳥瞰

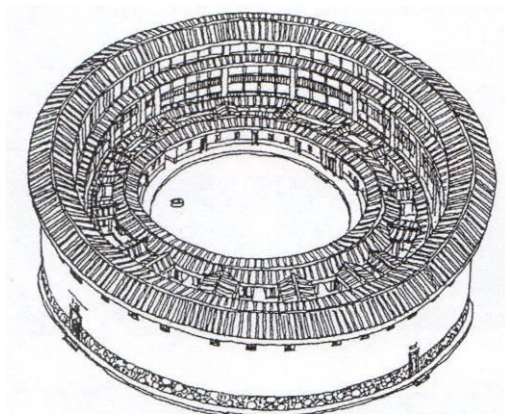


一階平面図

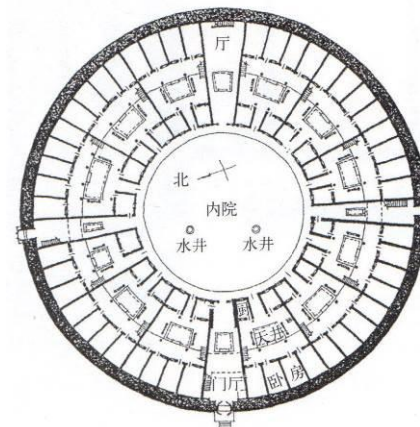
084 華安大地二宜樓

出典：戴志堅『福建民居』中国建築工業出版社、2009、第 153 頁

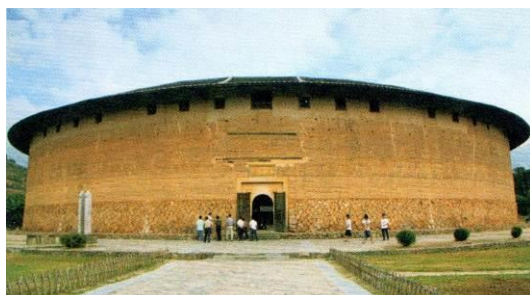
漳州市華安縣仙都鎮大地村に位置する。清乾隆五年（1740 年）蔣士熊より建造し始め、乾隆三十五年（1770 年）、息子たちより竣工する。敷地面積約 9300 平米。直径 73.4 メートル、高さ 18 メートル。現在は 36 世帯約 220 人が住んでいる。世界遺産と指定された福建土楼で、国家重点文物保護單位である。



鳥瞰



一階平面図



外観

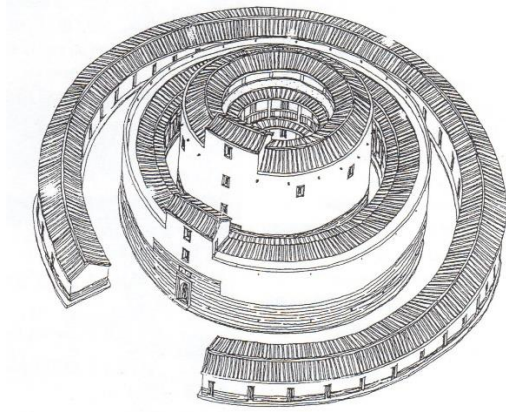


中庭

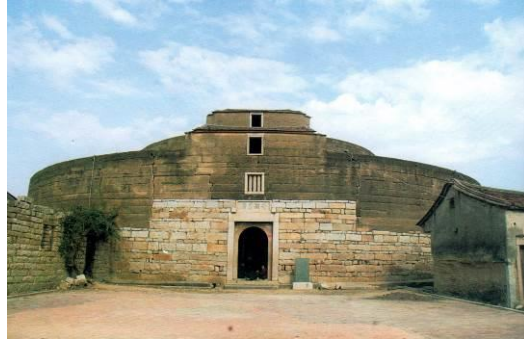
085 漳浦深土錦江楼

出典：戴志堅『福建民居』中国建築工業出版社、2009、第 155 頁

漳州市漳浦県深土鎮錦東村に位置する。当初の持ち主林澤昇より清乾隆五十六年（1791 年）に内環を建造した。中環は清嘉慶八年（1803 年）に建造し、外環はその後に建造した。内環直径 23.7 メートル、中環直径 40.5 メートル、外環直径 58.5 メートル。今林氏一族約百人が住んでいる。国家重点文物保護単位である。



鳥瞰

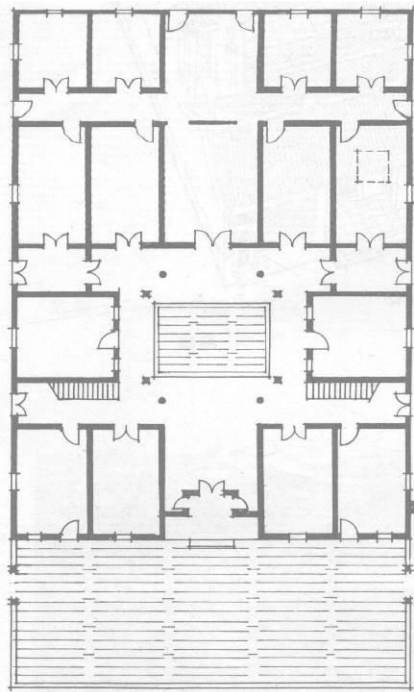


外観

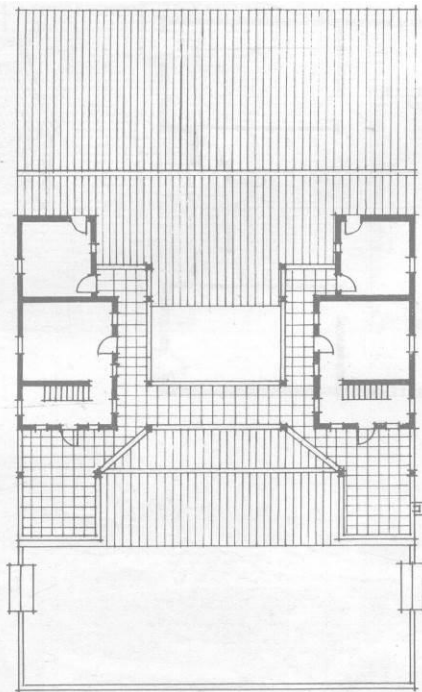
086 晉江石獅鎮ある住宅

出典：黄為雋『閩粵民宅』天津科学技術出版社、1992、第 203 頁

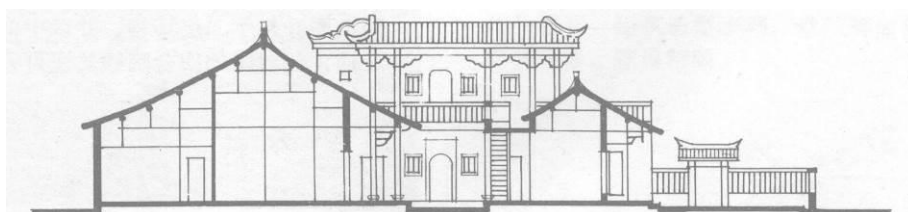
詳しい説明はない。



一階平面図



二階平面図

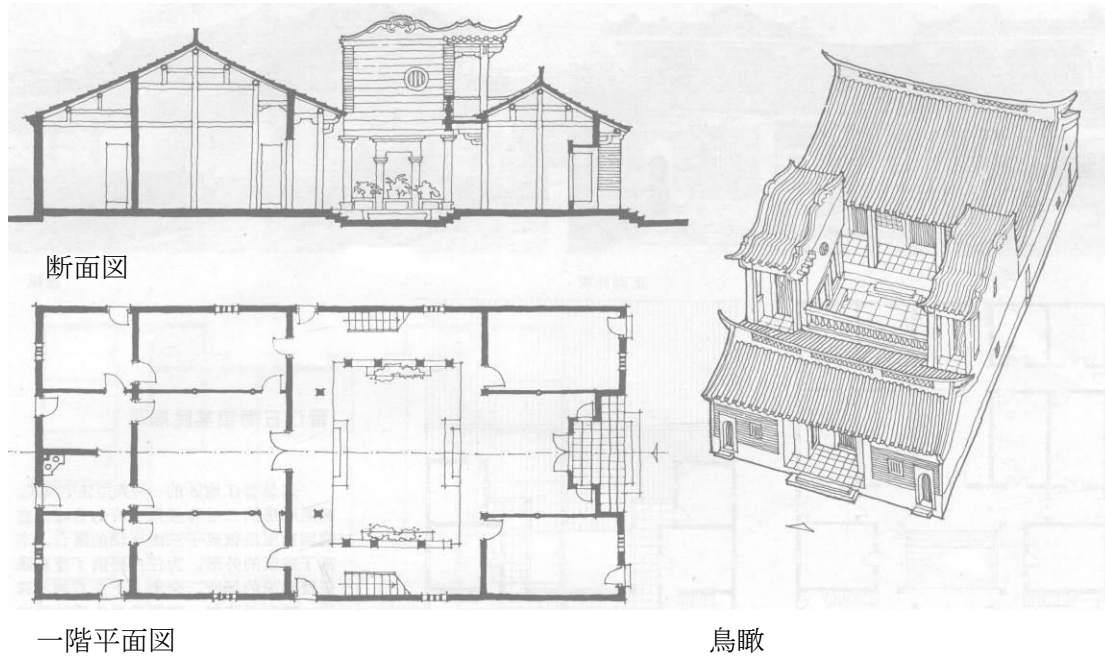


断面図

087 晉江大倫郷ある住宅

出典：黄為雋『閩粵民宅』天津科学技術出版社、1992、第 205 頁

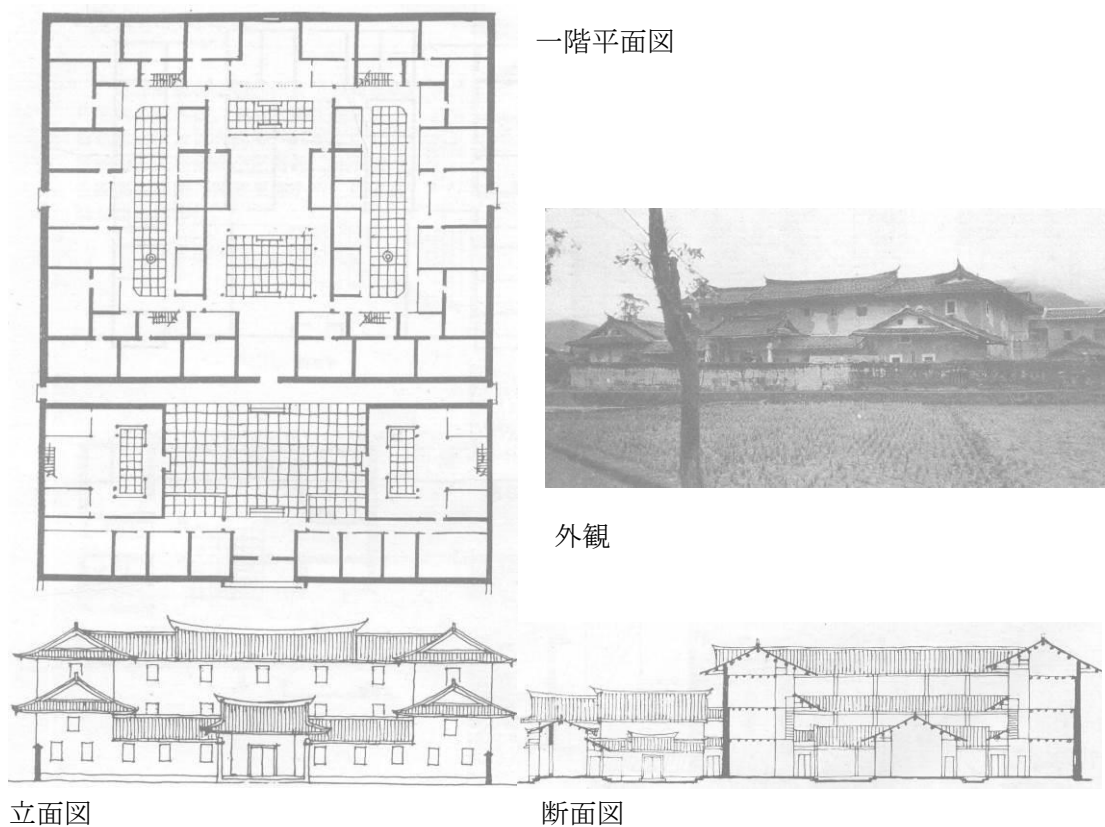
詳しい説明はない。



088 龍岩適中太和楼

出典：黄為雋『閩粵民宅』天津科学技術出版社、1992、第 227 頁

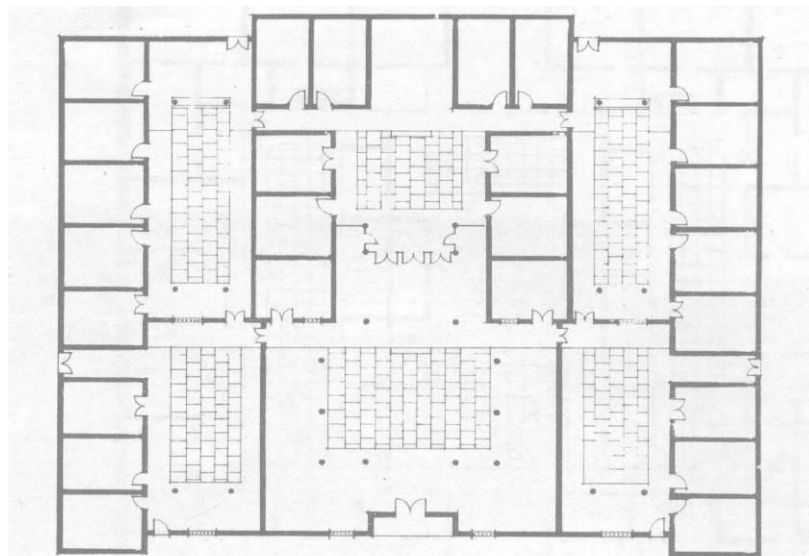
詳しい説明はない。



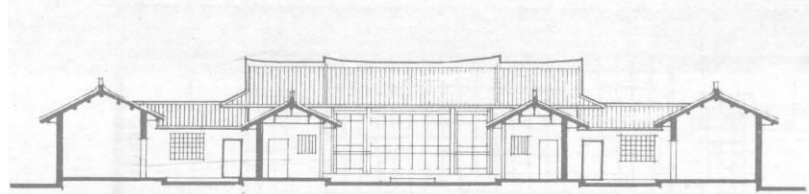
089 龍岩毛主席旧居

出典：黄為隽『閩粵民宅』天津科学技術出版社、1992、第 228 頁

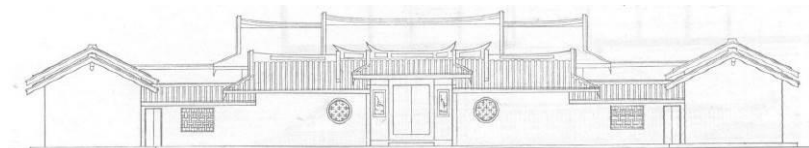
元々祖廟である。詳しい説明はない。



平面図



断面図



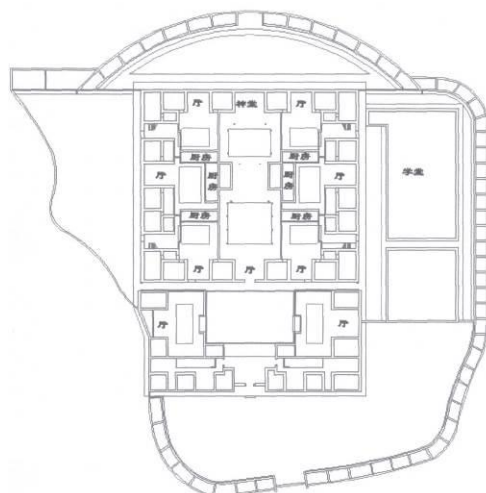
立面図

090 龍岩適中典常楼

出典：趙傑『龍岩適中典常楼初探』同濟大学修士論文、2006

龍岩市新羅区適中鎮中心村に位置する。謝氏一族より清乾隆四十九年（1784 年）に建造した。敷地面積約 7000 平米、長さ 39.25 メートル、奥行き 64.12 メートル、建築面積約 2600 平米。今は住んでいる人が少ない。国家重点文物保护单位である。

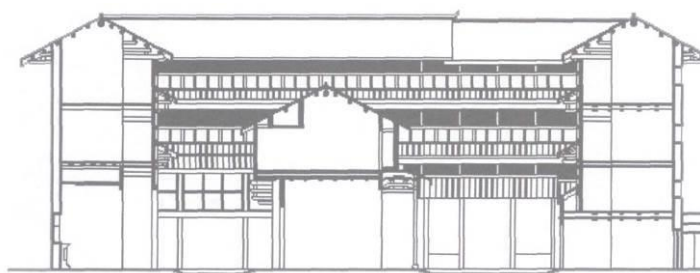
一階平面図



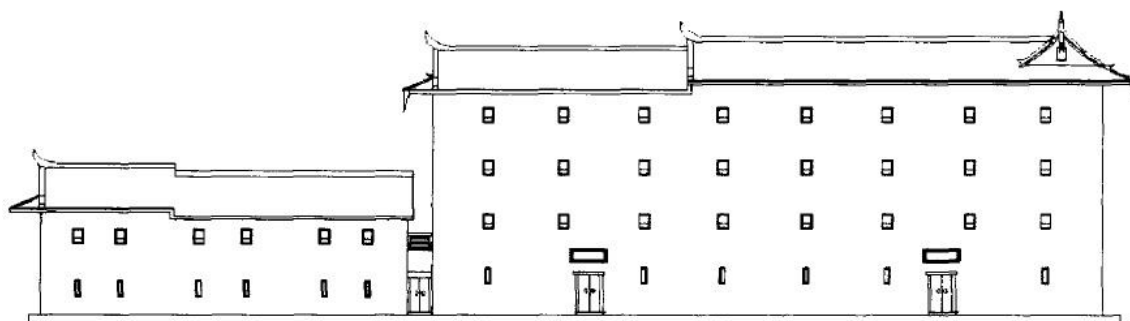
外観



主楼断面



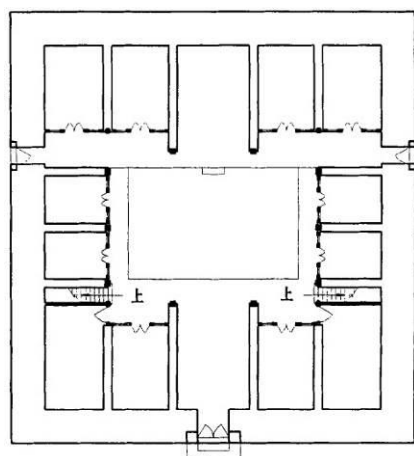
側面図



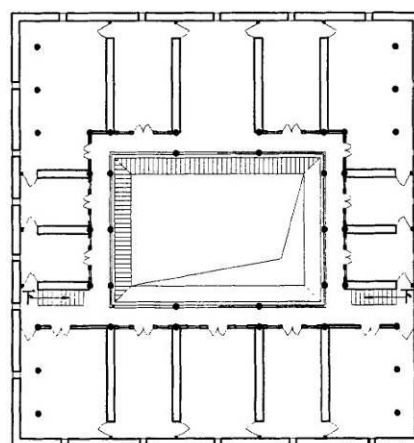
091 南太湖内村土楼

出典：洪石龍『泉州土楼及其住宅設計模式』華僑大学修士論文、2000

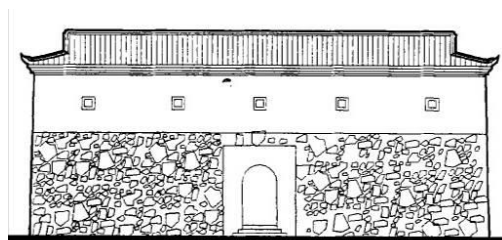
泉州市南安市羅東鎮湖内村に位置する。清咸豊年間（1850-1861 年）に建造された。長さ 23 メートル、奥行き 21.7 メートル。潘氏 1 世帯が住んでいる。



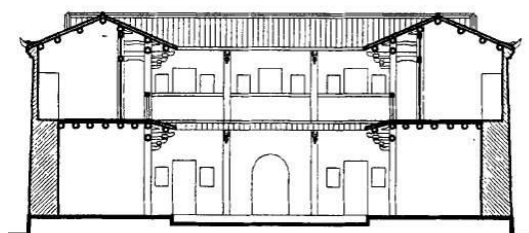
一階平面図



二階平面図



立面図

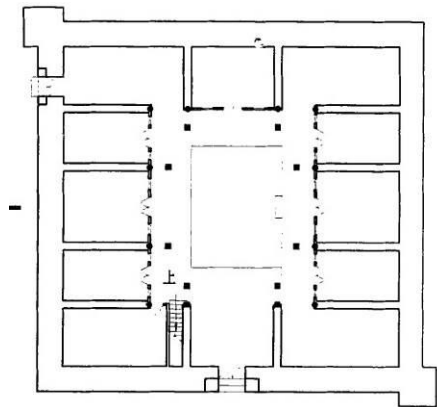


断面図

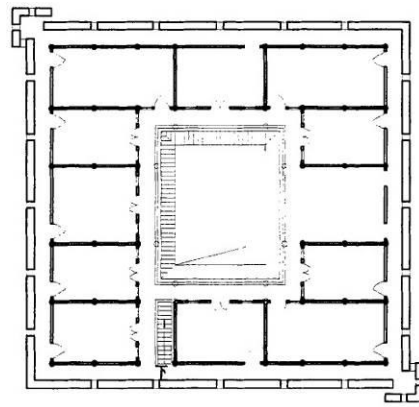
092 南安炉中村土楼

出典：洪石龍『泉州土楼及其住宅設計模式』華僑大学修士論文、2000

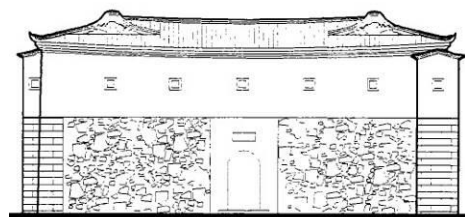
泉州市南安市樂豐鎮炉中村に位置する。清咸豐丁巳（1857 年）に建造された。長さ 21.6 メートル、奥行き 21.3 メートル。空き家である。



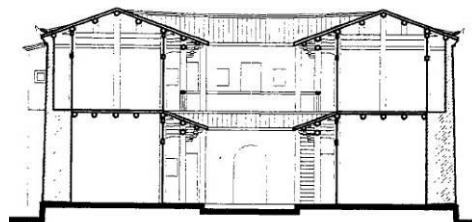
一階平面図



二階平面図



立面図

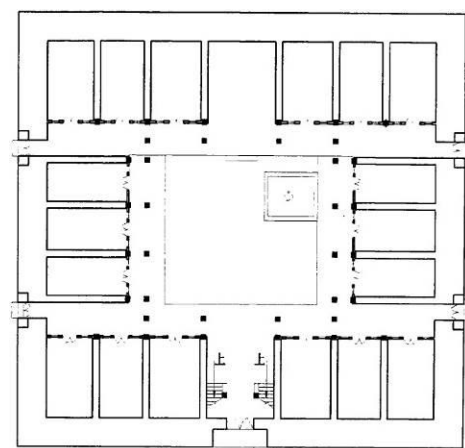


断面図

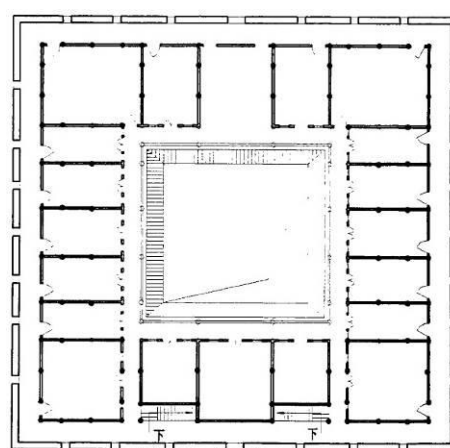
093 南安南片映峰楼

出典：洪石龍『泉州土楼及其住宅設計模式』華僑大学修士論文、2000

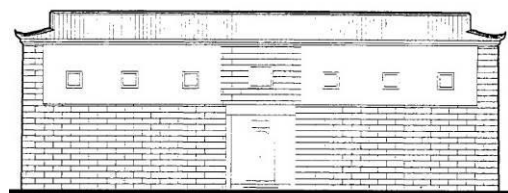
泉州市南安市省新鎮南片村に位置する。明末に建造された。長さ 28.3 メートル、奥行き 27.2 メートル林氏 1 世帯が住んでいる。



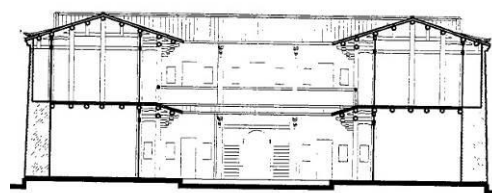
一階平面図



二階平面図



立面図

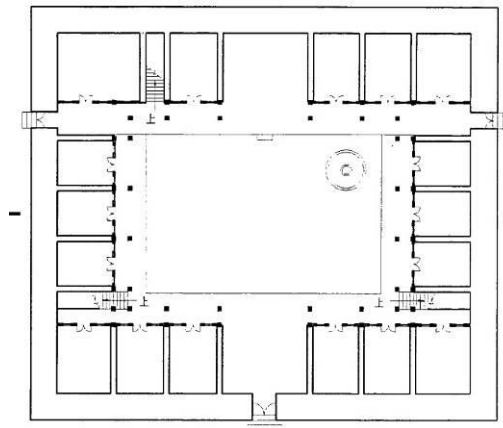


断面図

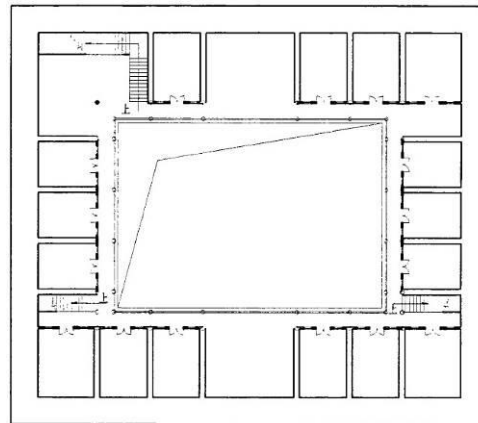
094 南安ト橋聚奎楼

出典：洪石龍『泉州土楼及其住宅設計模式』華僑大学修士論文、2000

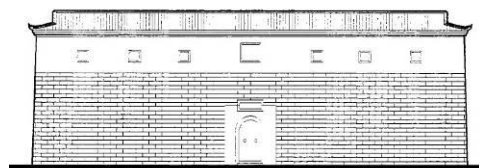
泉州市南安市金淘鎮ト橋（朵桥）村に位置する。清乾隆年間（1736-1795 年）に建造された。長さ 37 メートル、奥行き 35 メートル。今 1 世帯が住んで、村の養老公共施設として使用する。



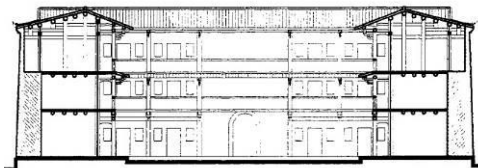
一階平面図



二階平面図



立面図

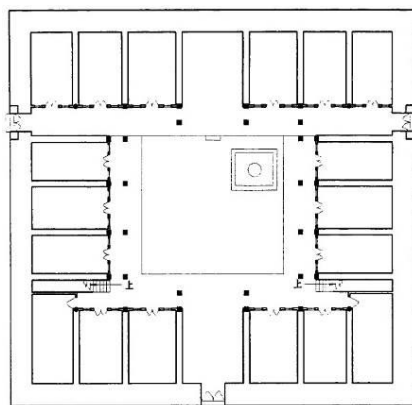


断面図

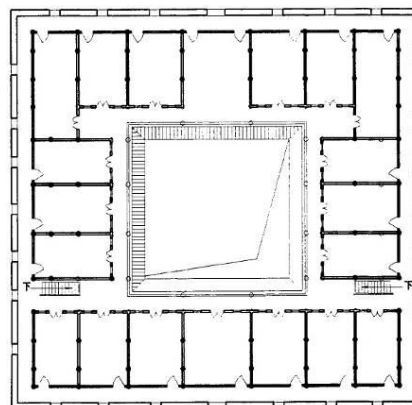
095 南安舗前慶原楼

出典：洪石龍『泉州土楼及其住宅設計模式』華僑大学修士論文、2000

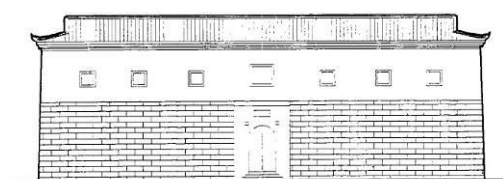
泉州市南安市金淘鎮舗前村に位置する。清代に建造された。長さ 28 メートル、奥行き 27 メートル。空き家である。



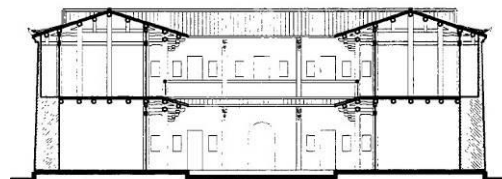
一階平面図



二階平面図



立面図

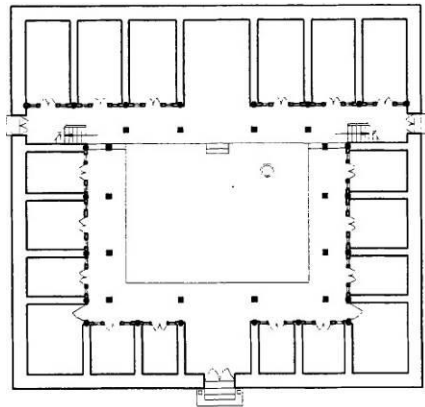


断面図

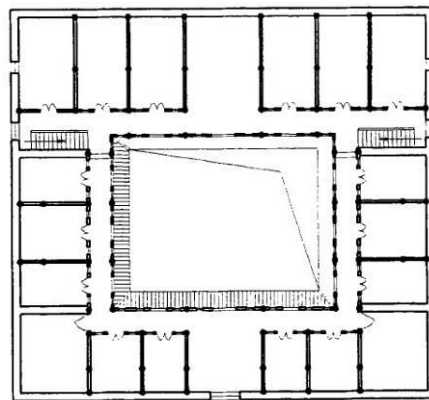
096 安溪玳瑁德美楼

出典：洪石龍『泉州土楼及其住宅設計模式』華僑大学修士論文、2000

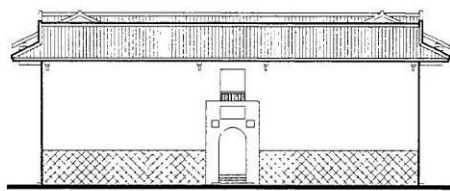
泉州市安溪縣龍涓鎮玳瑁村に位置する。民国六年（1916 年）に建造された。長さ 21.5 メートル、奥行き 20 メートル。今は李氏一族が集住する。



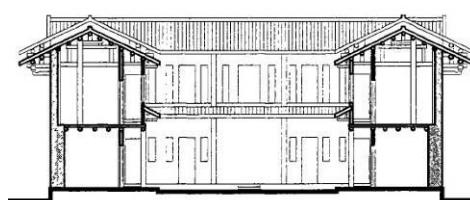
一階平面図



二階平面図



立面図

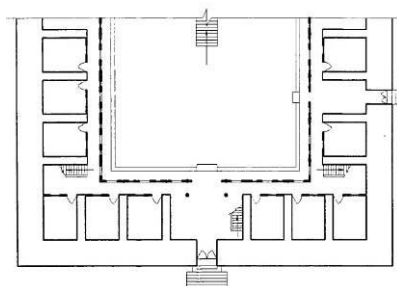


断面図

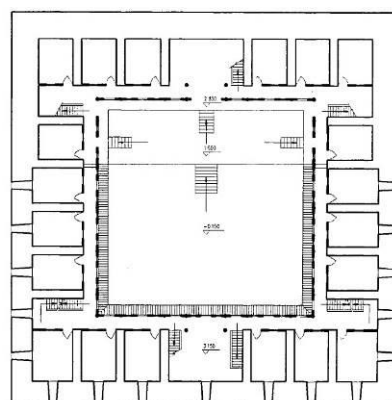
097 安溪山後村土楼

出典：洪石龍『泉州土楼及其住宅設計模式』華僑大学修士論文、2000

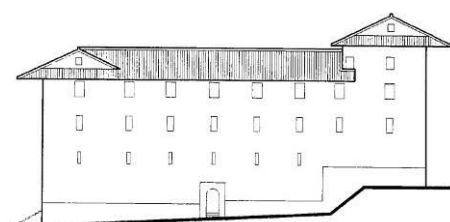
泉州市安溪縣龍涓鎮山後村に位置する。清代に建造された。長さ 33 メートル、奥行き 33 メートル。空き家である。



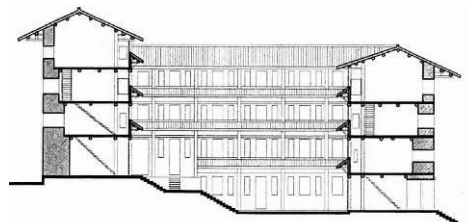
一階平面図



二階平面図



立面図

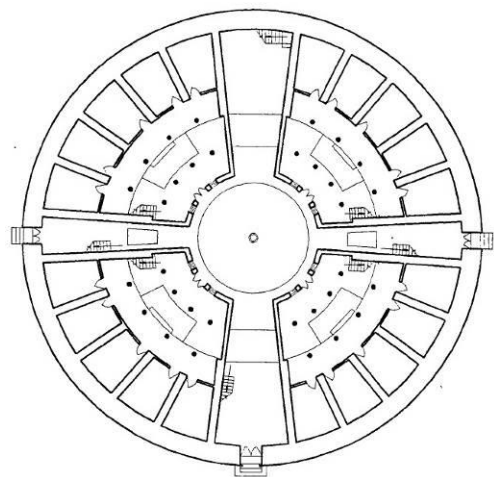


断面図

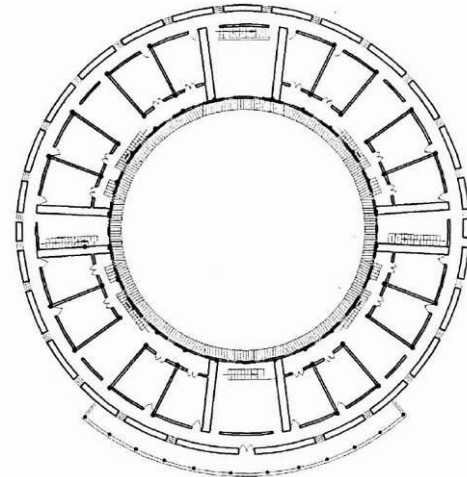
098 安溪玳瑁聯芳樓

出典：洪石龍『泉州土樓及其住宅設計模式』華僑大学修士論文、2000

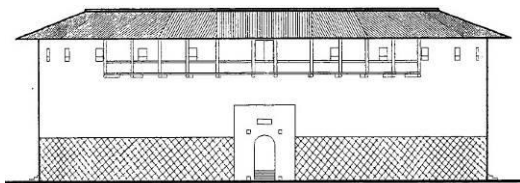
泉州市安溪縣龍涓鎮玳瑁村に位置する。清末に建造された。直径は 33.6 メートル。空き家である。



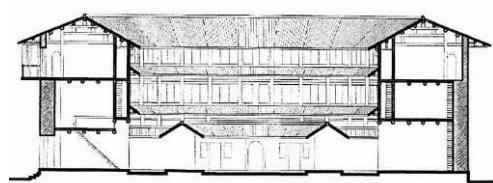
一階平面図



三階平面図



立面図

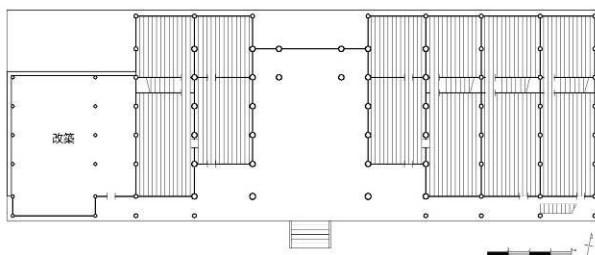


断面図

099 德化承澤黃宅

実地調査

泉州市德化縣水口鎮承澤村に位置する。「中舍堂」の屋号をもって、民国初年（1910s）に建造された。今は黃氏 2 世帯が住んでいる。



一階平面図



外観



挿肘木

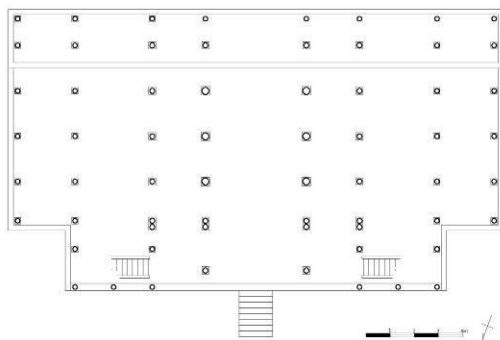


庁堂

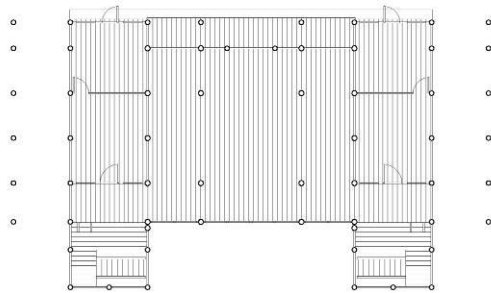
100 徳化格頭連氏祖厝

実地調査

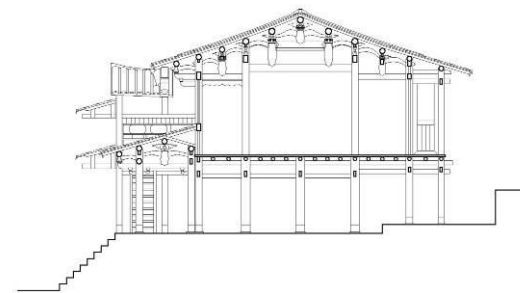
泉州市徳化県国宝郷格頭村山後に位置する。明正徳初年（1508 年）に建造された。建築面積 585 平米。今は連氏一族の祖廟として利用する。福建省文物保护单位である。



床下平面図



床上平面図



断面図

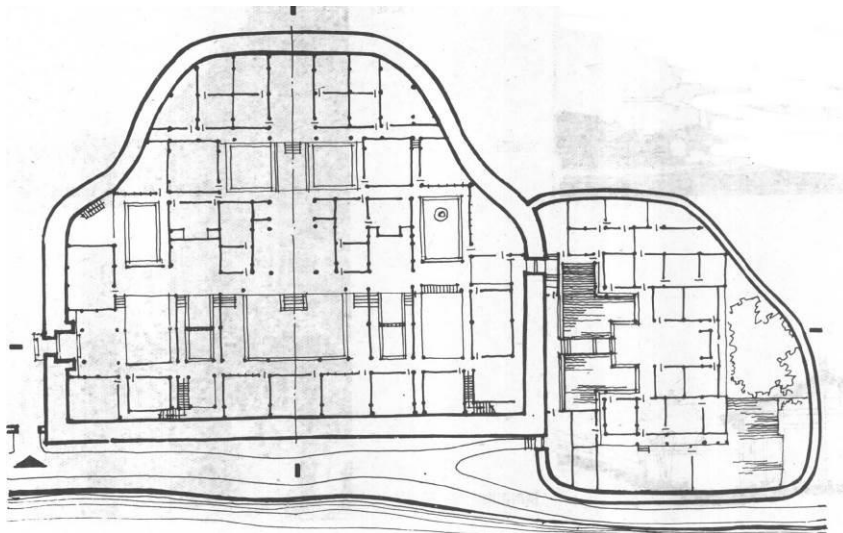


外観

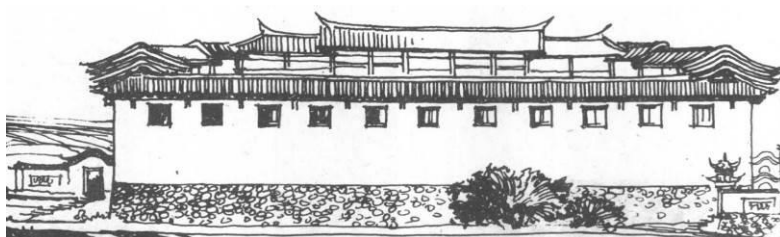
101 永安西洋邢宅

出典：王乃香『福建民居』中国建築工業出版社、1987、第 216 頁

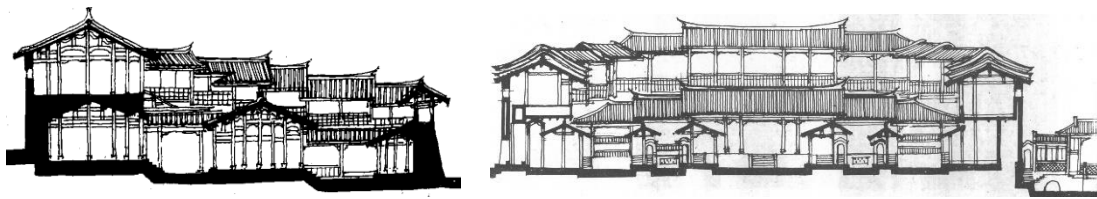
三明市永安市西洋鎮に位置する。詳しい説明はない。



平面图



立面图

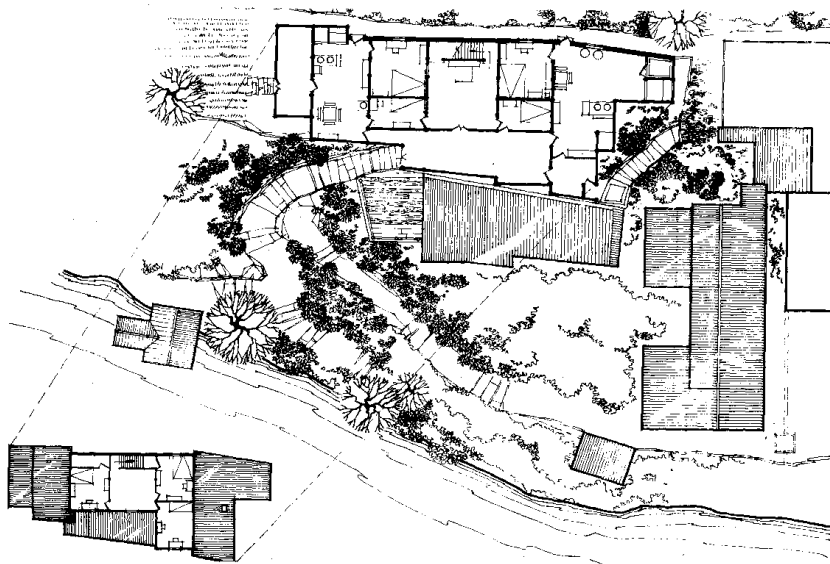


断面図

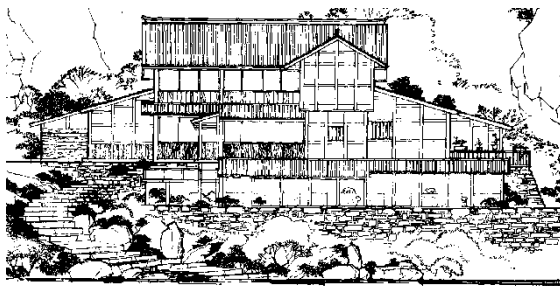
102 三明莘口陳宅

出典：王乃香『福建民居』中国建築工業出版社、1987、第 242 頁

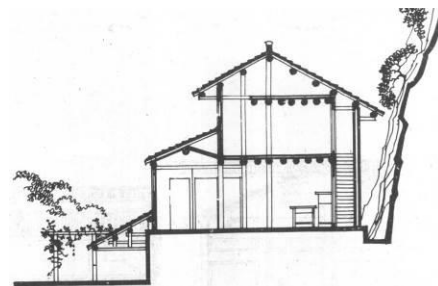
川沿い農家である。詳しい説明はない。



平面図



立面図



断面図

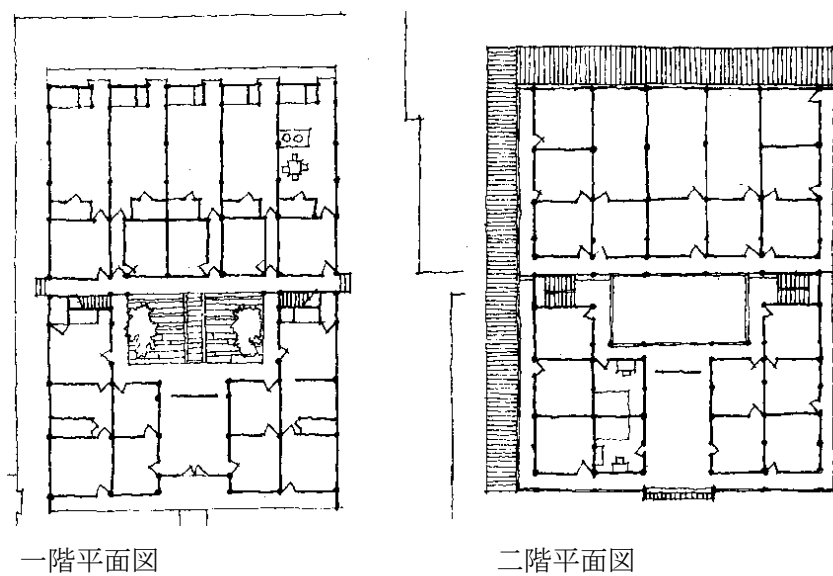
103 三明魏宅

出典：王乃香『福建民居』中国建築工業出版社、1987、第 244 頁

民国晚期建造された住宅である。詳しい説明はない。

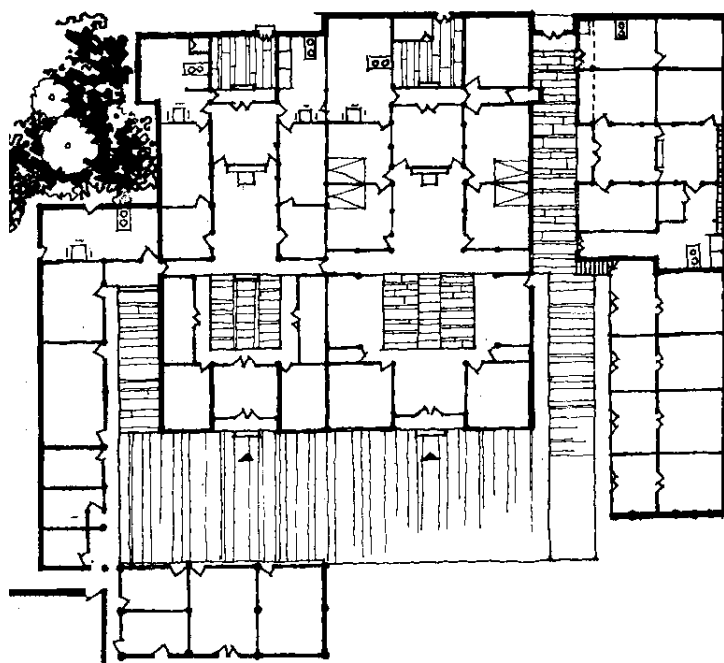


外観

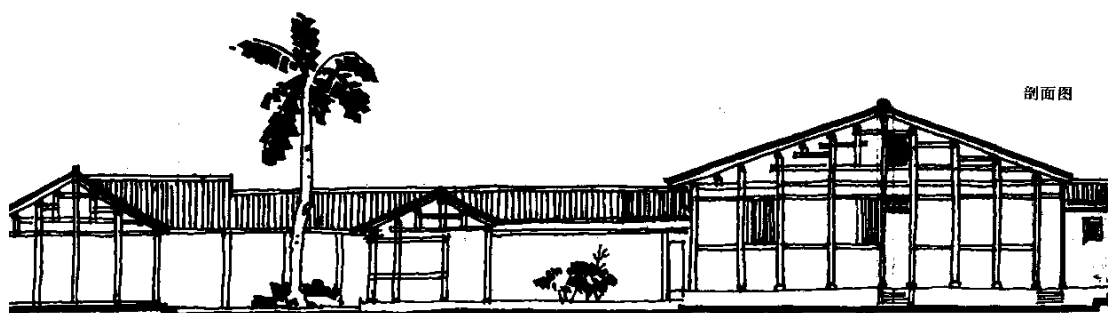


104 三明列西羅宅
詳しい説明はない。

出典：王乃香『福建民居』中国建築工業出版社、1987、第 245 頁



平面図



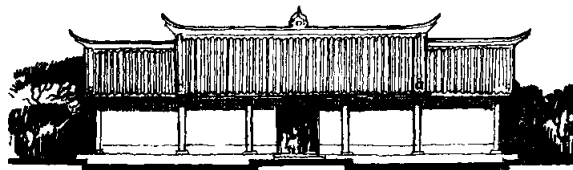
断面図

断面図

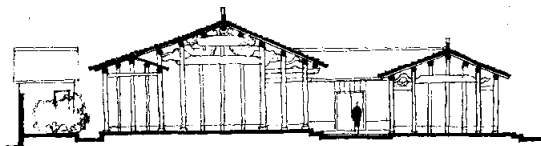
105 三明列西呉宅

出典：王乃香『福建民居』中国建築工業出版社、1987、第 246 頁

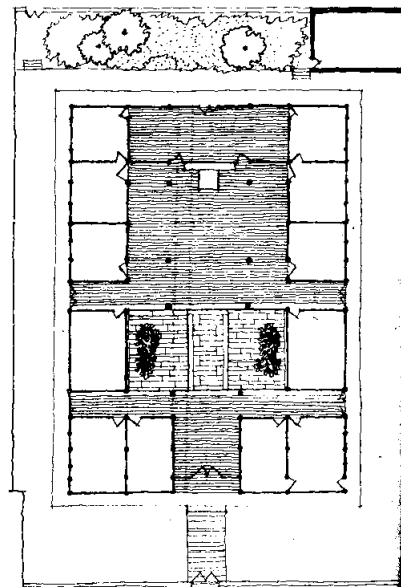
詳しい説明はない。



立面図



断面図

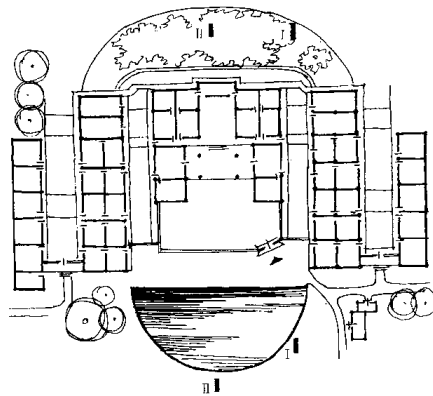


平面図

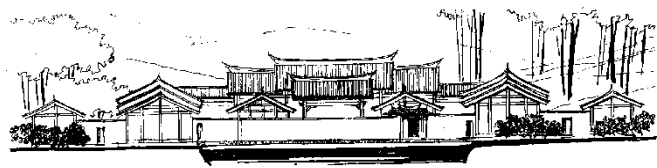
106 永安小陶ある住宅

出典：王乃香『福建民居』中国建築工業出版社、1987、第 276 頁

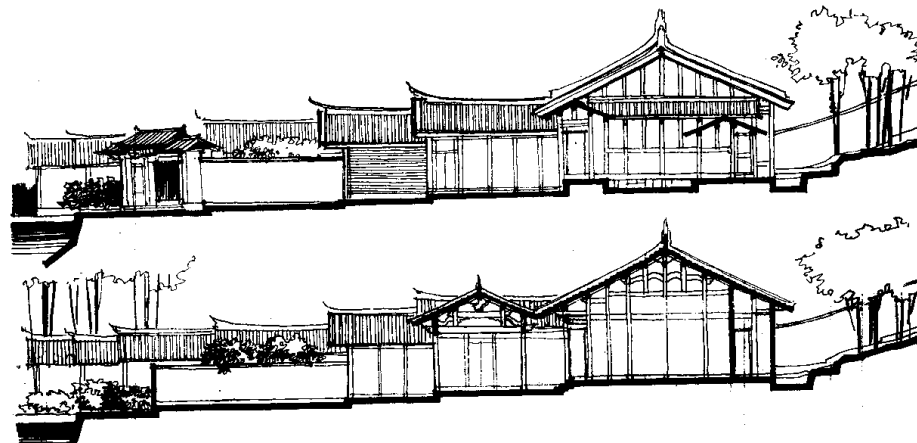
詳しい説明はない。



平面図



立面図



I - I 断面図

II - II 断面図

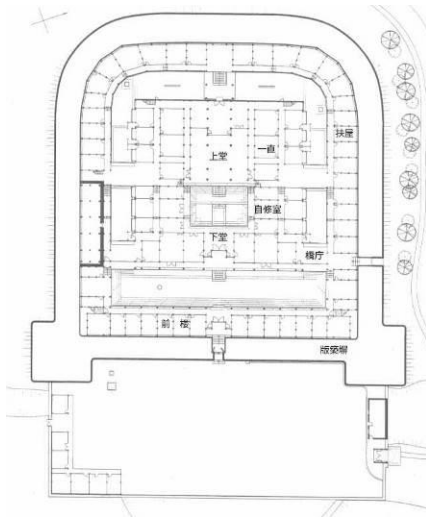
107 永安安貞堡

出典：李秋香『福建民居』 清華大学出版社、2010、第 178-255 頁

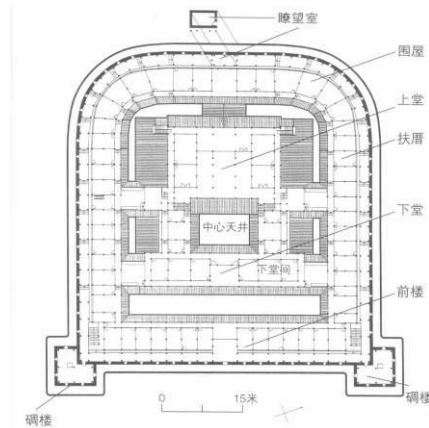
出典：戴志堅『福建民居』中國建築工業出版社、2009、第221頁

実地調査ある

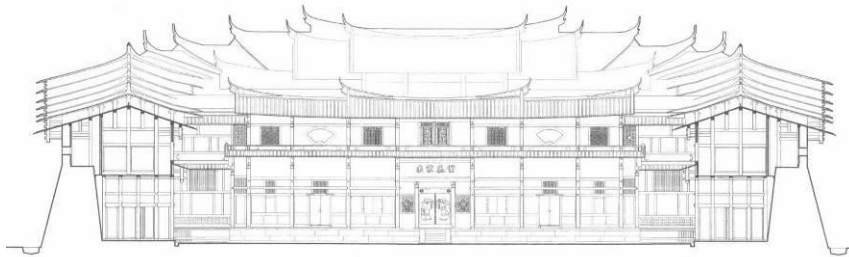
三門市永安市槐南郷洋頭村に位置する。清光緒十一年（1885 年）から 14 年をかけて、当地の富商池占瑞・池連貫父子が出資建造した。池氏一族は「萬金」と呼ばれ池占瑞・池連貫父子が政府へ金を出し、官職を買った。安貞堡長さ 88 メートル、奥行き 90 メートル、敷地面積約 7500 平米。今は民家資料館として利用する。国家重点文物保護単位である。



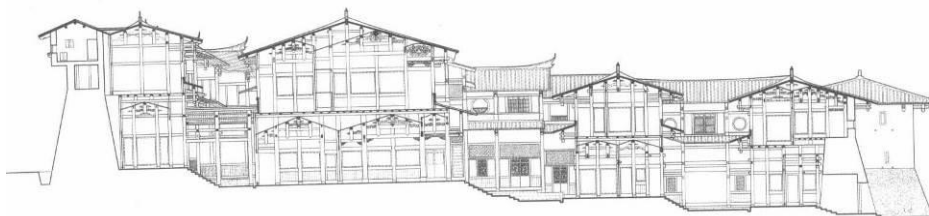
一階平面図



二階平面図



断面図



一 断面図



外觀（本人撮影）



第一進中庭 (本人撮影)

108 沙県茶豊峽孝子坊

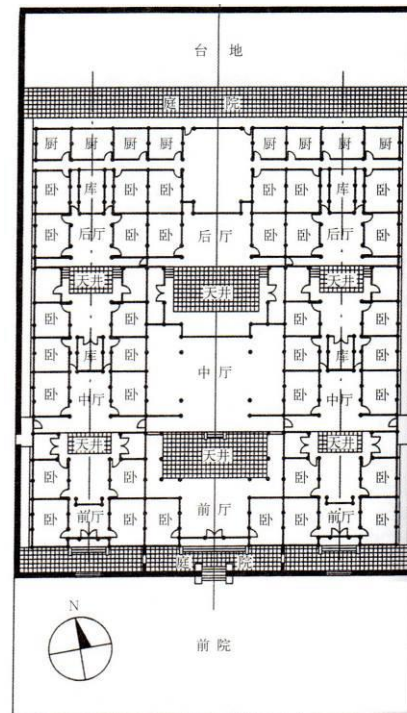
出典：戴志堅『福建民居』中国建築工業出版社、2009、第 224 頁

三明市沙県琅口郷茶豊峽村に位置する。清道光九年（1829 年）に建造された。当初の持ち主陳宗浩は儒学・親孝行へのこだわりがあつて、清政府は「孝子石坊」を下賜する。敷地面積 8980 平米。沙県文物保護単位である。

外観



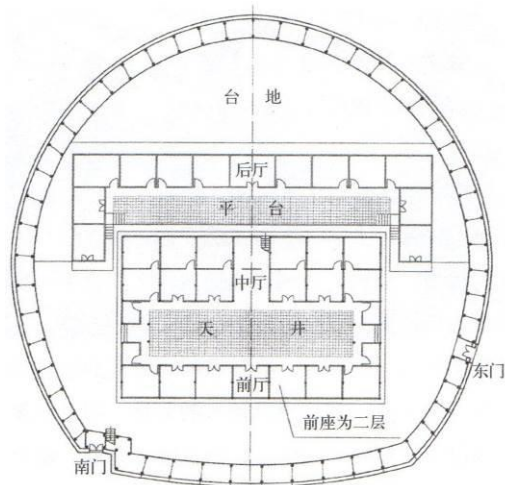
平面図



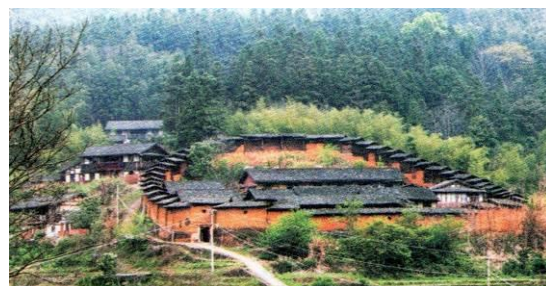
109 三元シンロ松慶堡

出典：戴志堅『福建民居』中国建築工業出版社、2009、第 225 頁

三明市三元区シンロ（莘口）鎮曹源村に位置する。清嘉慶年間（1796-1820 年）に建造された。敷地面積約 2000 平米。



平面図

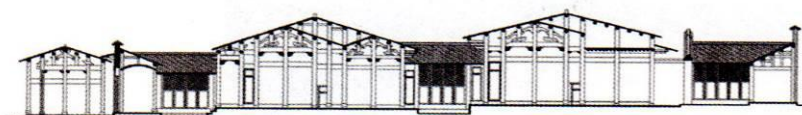


外観

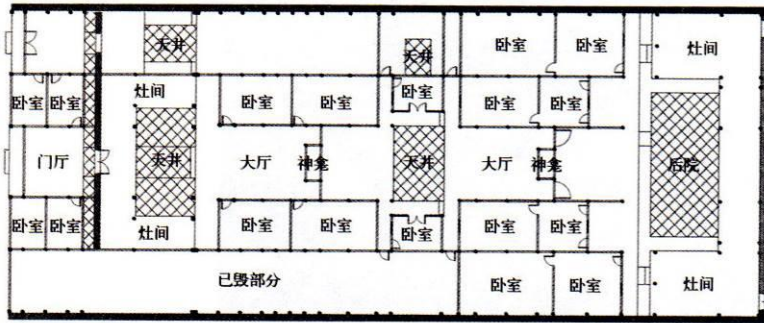
110 沙県建国路東巷 29 号

出典：戴志堅『福建民居』中国建築工業出版社、2009、第 226 頁

三明市沙県城関建国路東巷 29 号に位置する。清光緒年間（1871-1908 年）に建造された。詳しい説明はない。



断面図

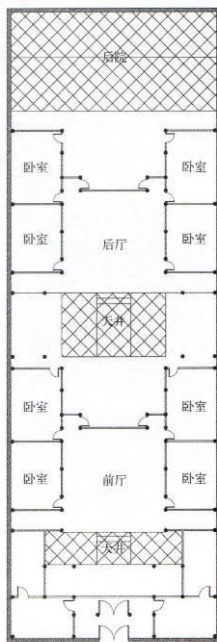


平面図

111 沙県東大路 72 号

出典：戴志堅『福建民居』中国建築工業出版社、2009、第 227 頁

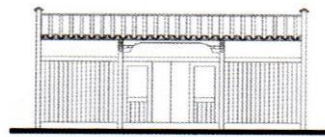
三明市沙县城關東大路 72 号に位置する。清末に建造された。詳しい説明はない。



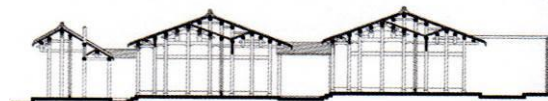
平面図



后厅



立面図

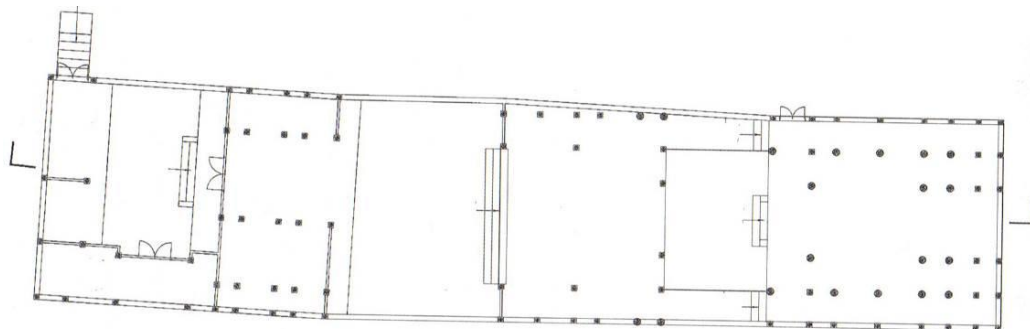


断面図

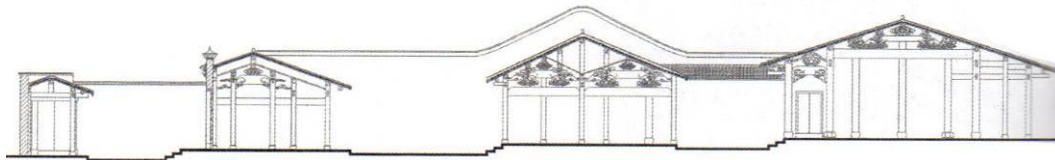
112 永安貢川機垣楊公祠

出典：戴志堅『福建民居』中国建築工業出版社、2009、第 228 頁

三明市永安市貢川鎮延城路 96 号に位置する。清乾隆四十三年（1778 年）に建造された。詳しい説明はない。



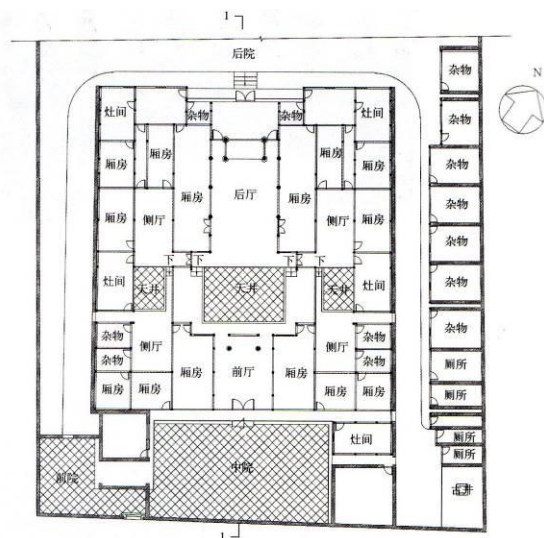
平面図



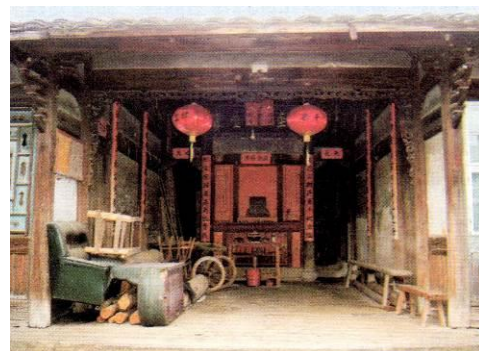
断面図

113 永安貢川金魚堂

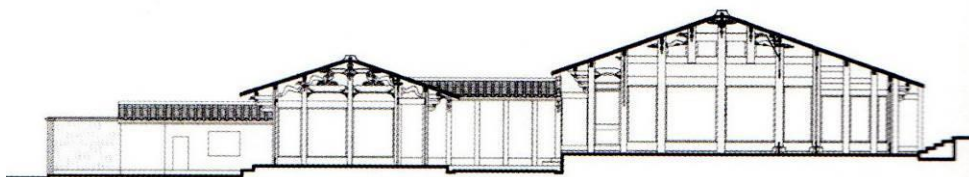
出典：戴志堅『福建民居』中国建築工業出版社、2009、第 229 頁
 三明市永安市貢川鎮禾鱔巷 7 号に位置する。明天啓四年（1624 年）に建造された。敷地面積 1577 平米。



平面図



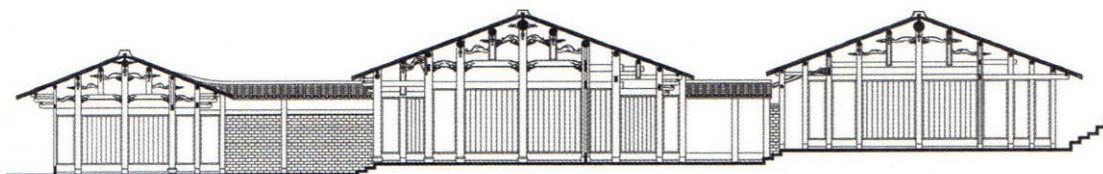
厅堂



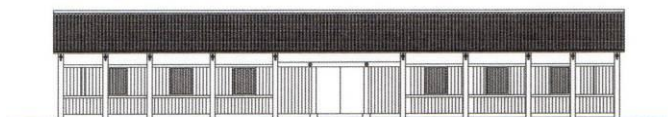
断面図

114 永安貢川嚴進士宅

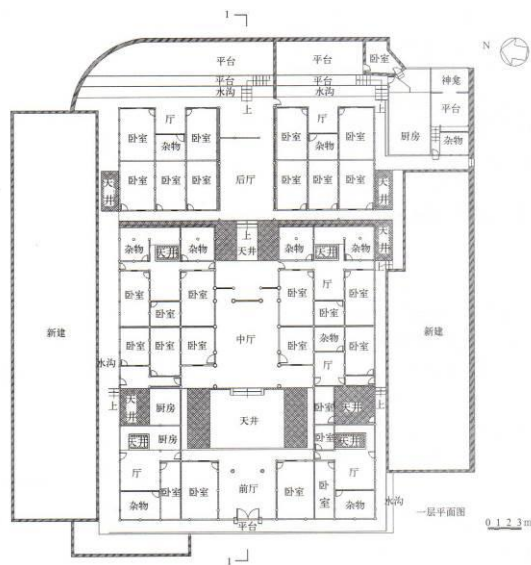
出典：戴志堅『福建民居』中国建築工業出版社、2009、第 230 頁
 三明市永安市貢川鎮四橋路 26 号に位置する。明天啓年間（1621-1627 年）に建造された。明代進士嚴九岳の邸宅であった。



断面図



立面図



平面図

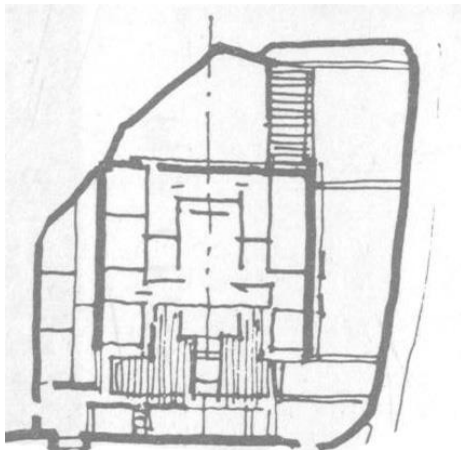


厅堂

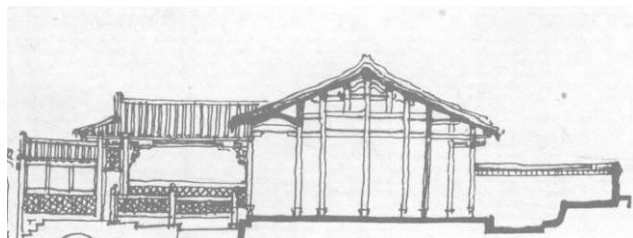
115 永安福庄ある住宅

出典：黄為隽『閩粵民宅』天津科学技术出版社、1992、第 224 頁

詳しい説明はない。



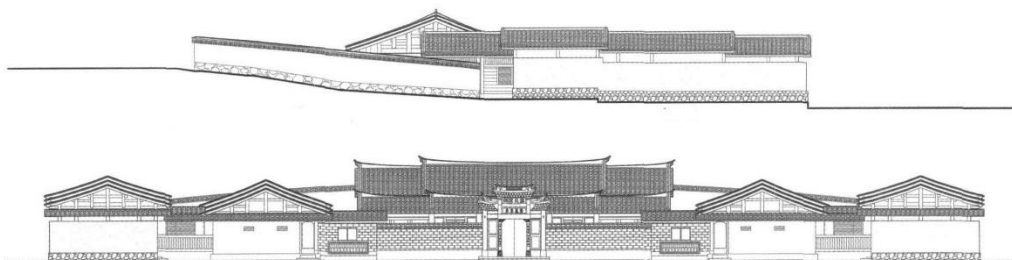
平面図



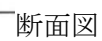
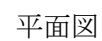
断面図

116 永安青水東興堂

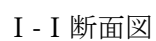
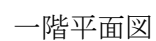
出典：薛立「福建永安青水民居東興堂初探」『建築学報・学術論文専門刊』、2011、第 112-118 頁
 三明市永安市青水郷龍呉村に位置する。清嘉慶十五年（1810 年）当地の蔡氏一族より建造された。建築面積約 900 平米。8-9 世帯が住んでいる。



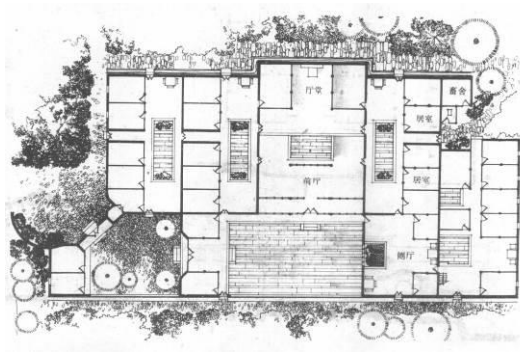
立面図



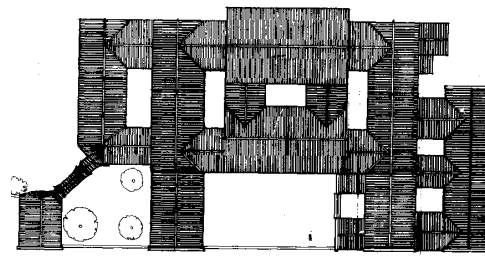
117 上杭古田八甲廖宅 出典：王乃香『福建民居』中国建築工業出版社、1987、第 222 頁
小規模住宅である。詳しい説明はない。



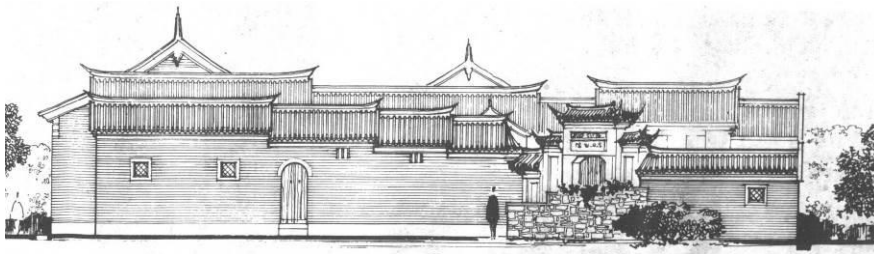
118 新泉張宅 出典：王乃香『福建民居』中国建築工業出版社、1987、第 228 頁
独立農家である。詳しい説明はない。



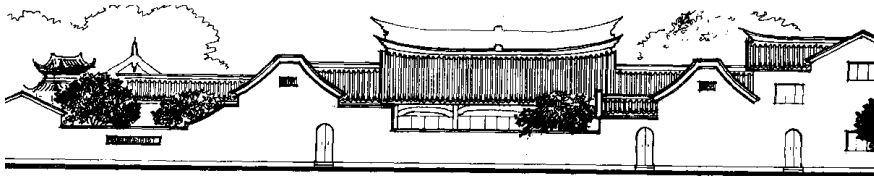
平面図



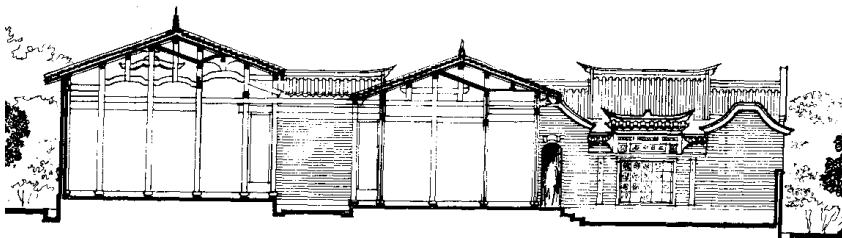
屋上平面図



西立面図



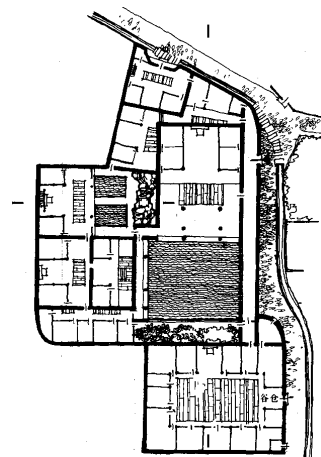
南立面図



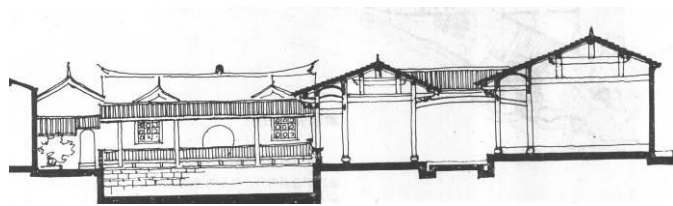
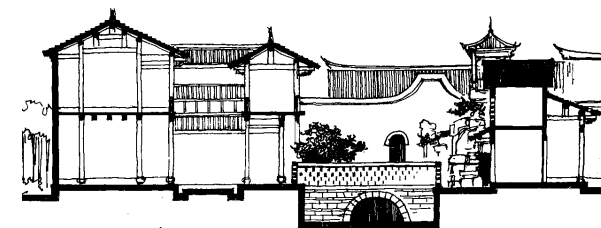
断面図

119 新泉芷溪黄宅

出典：王乃香『福建民居』中国建築工業出版社、1987、第 230 頁
川沿い民家である。詳しい説明はない。



一階平面図

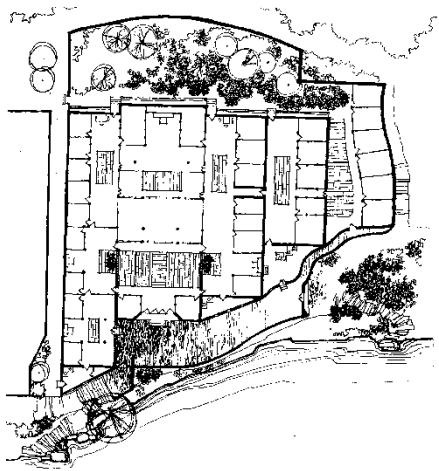


断面図

120 新泉張氏住宅

出典：王乃香『福建民居』中国建築工業出版社、1987、第 232 頁

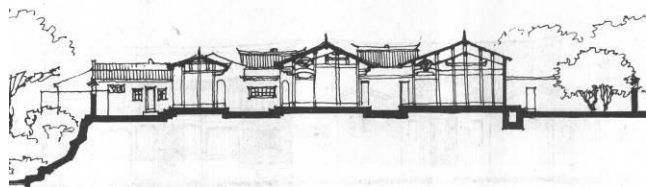
川沿い民家である。詳しい説明はない。



一階平面図



立面図

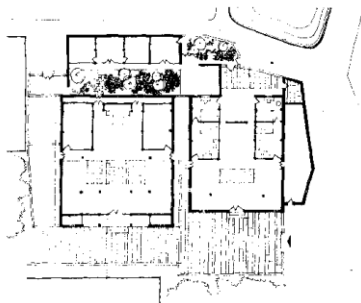


断面図

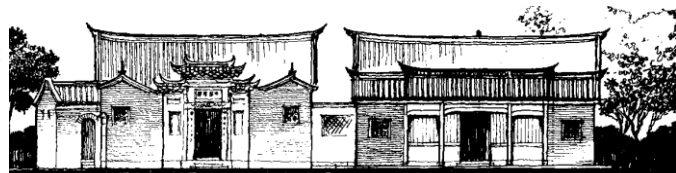
121 新泉望雲草堂

出典：王乃香『福建民居』中国建築工業出版社、1987、第 234 頁

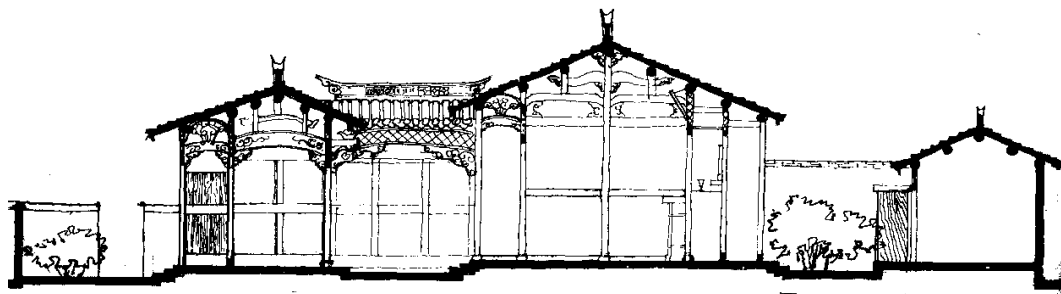
元は祖廟である。詳しい説明はない。



一階平面図



立面図

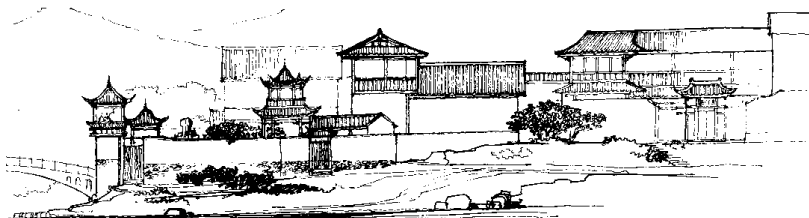


断面図

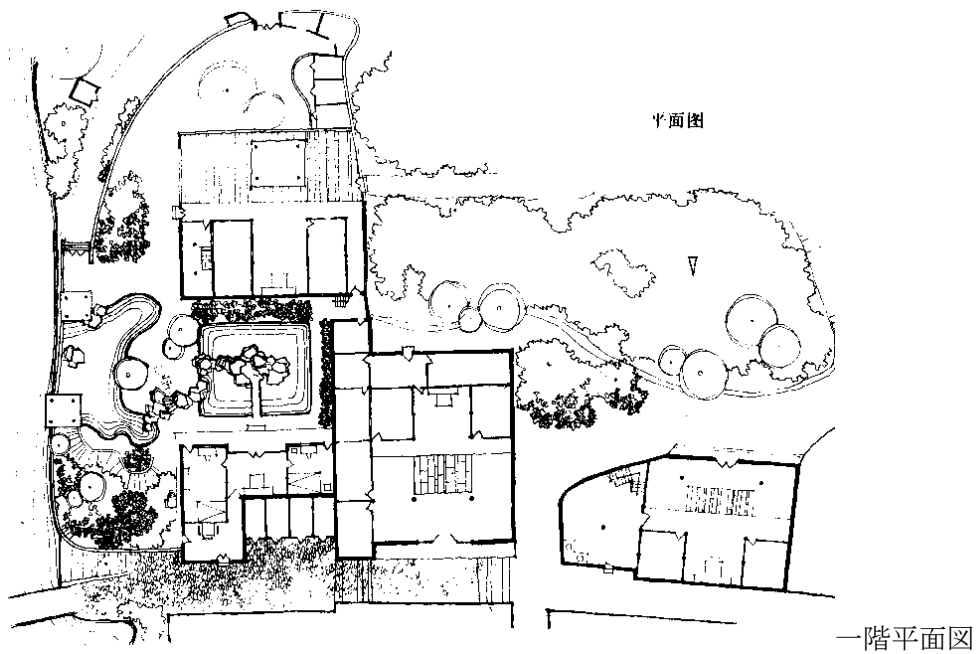
122 連城チュ溪羅宅

出典：王乃香『福建民居』中国建築工業出版社、1987、第 235 頁

詳しい説明はない。

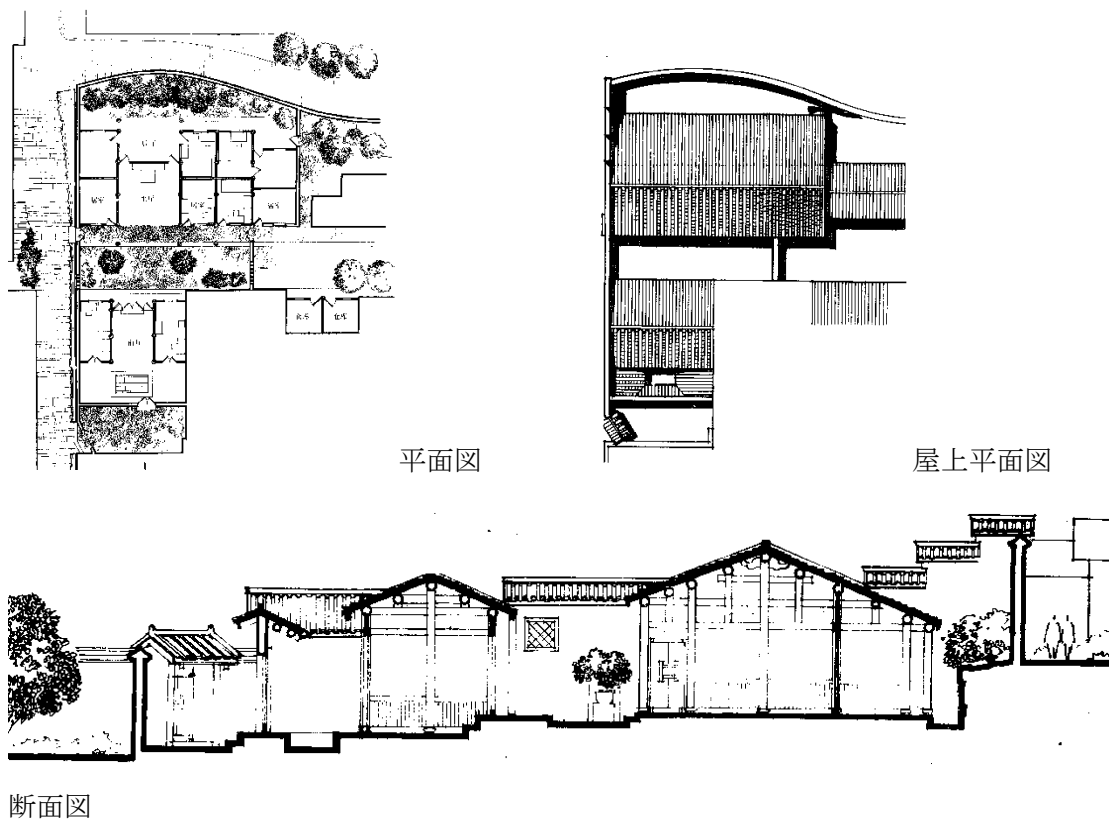


側面図



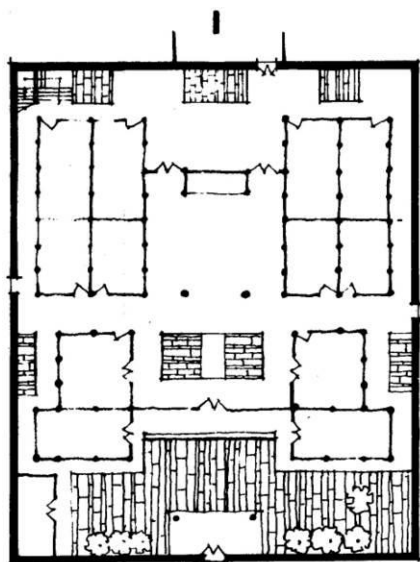
123 長汀洪家巷羅宅
詳しい説明はない。

出典：王乃香『福建民居』中国建築工業出版社、1987、第 236 頁

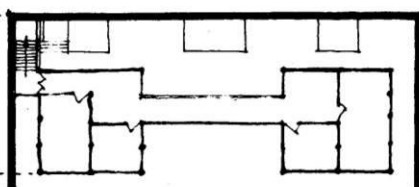


124 長汀新耕別荘
詳しい説明はない。

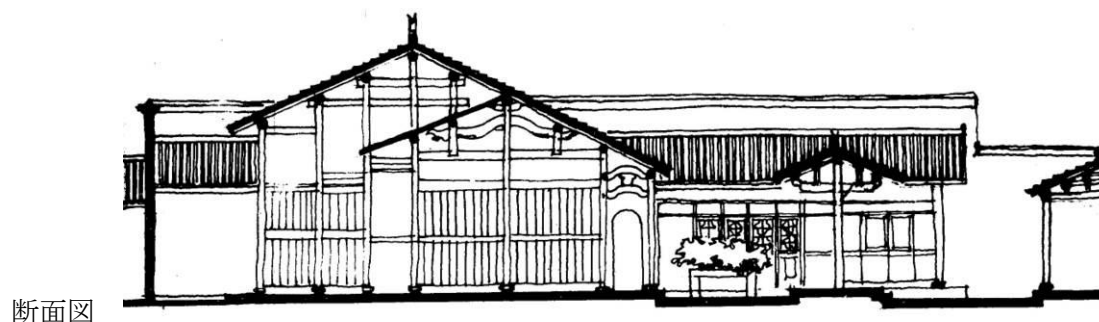
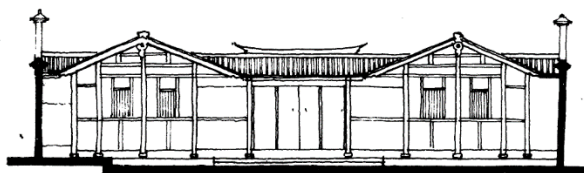
出典：王乃香『福建民居』中国建築工業出版社、1987、第 238 頁



平面図



立面図

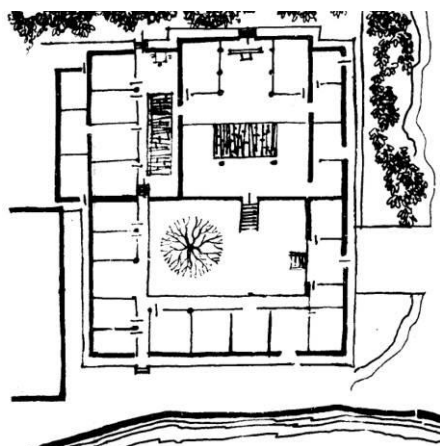


断面図

125 上杭古田張宅

出典：王乃香『福建民居』中国建築工業出版社、1987、第247頁

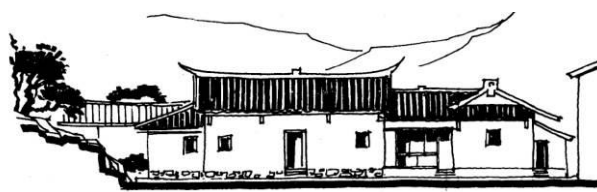
斜面地に位置する住宅である。詳しい説明はない。



平面図



断面図

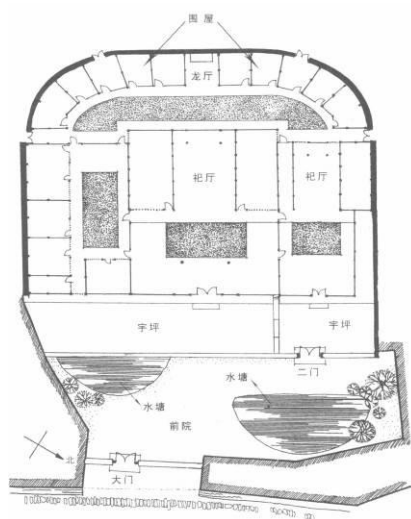


立面図

126 連城培田双善堂

出典：李秋香『福建民居』清華大学出版社、2010、第9-11頁

龍岩市連城県宣和郷培田村に位置する。富商呉純熙より清乾隆年間（1736-1795年）に建造された。



平面図



外観

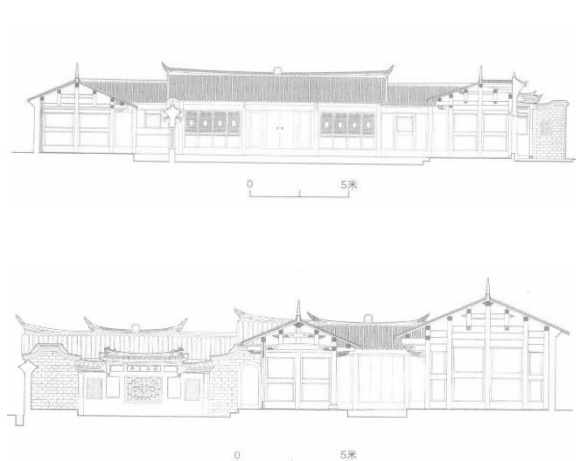
127 連城培田敦樸堂

出典：李秋香『福建民居』 清華大学出版社、2010、第 35 頁

龍岩市連城縣宣和鄉培田村に位置する。詳しい説明はない。



平面図



断面図

128 連城培田双灼堂

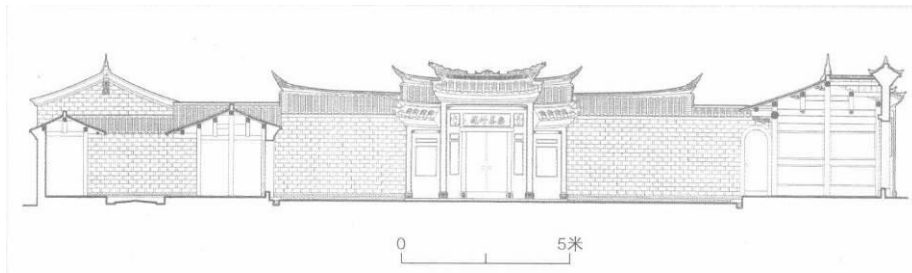
出典：李秋香『福建民居』 清華大学出版社、2010、第 12-14 頁

出典：戴志堅『福建民居』 中国建築工業出版社、2009、第 259 頁

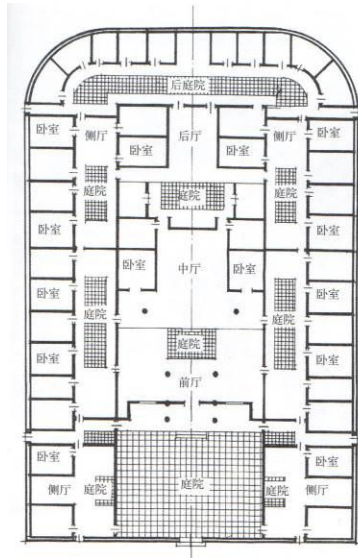
龍岩市連城縣宣和鄉培田村に位置する。富商吳華年より清末（1890s）に建造された。敷地面積約 3600 平米。今も住宅として使用する。



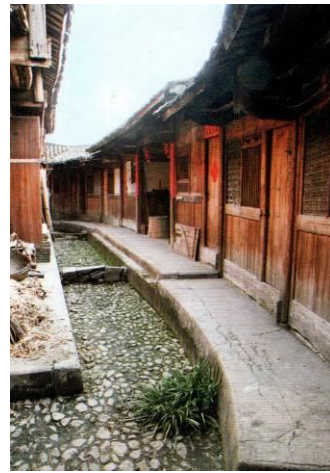
断面図



前庭断面図



一階平面図



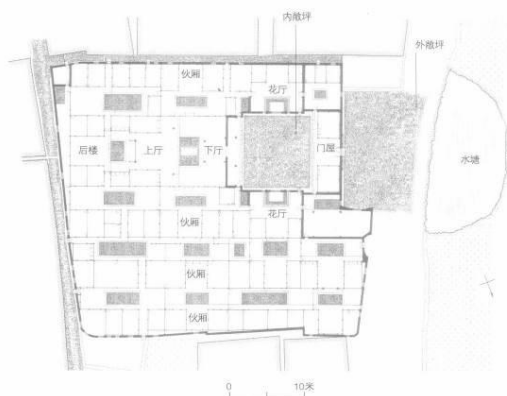
後ろ庭

129 連城培田繼述堂

出典：李秋香『福建民居』 清華大学出版社、2010、第 22-26 頁

出典：戴志堅『福建民居』 中国建築工業出版社、2009、第 255 頁

龍岩市連城縣宣和鄉培田村に位置する。富商吳昌同は十数家の資金を集めて、清道光九年（1829 年）から 11 年かかって建造した。敷地面積 6900 平米。今も住宅として使用する。



一階平面図

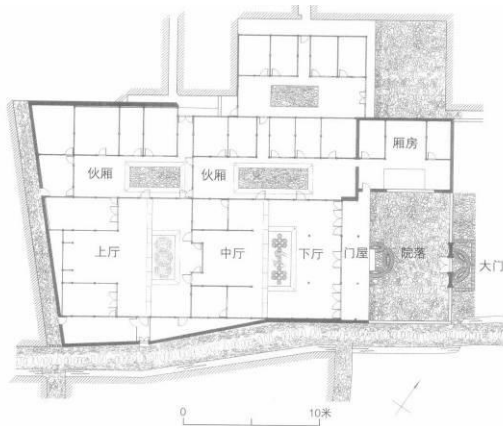


中厅

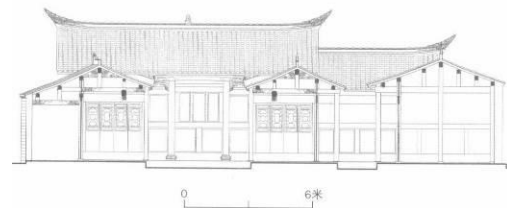
130 連城培田濟美堂

出典：李秋香『福建民居』 清華大学出版社、2010、第 53-54 頁

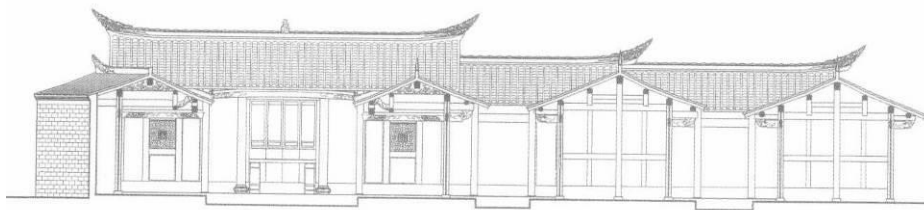
龍岩市連城縣宣和鄉培田村に位置する。富商吳昌同が清末に建造した住宅である。



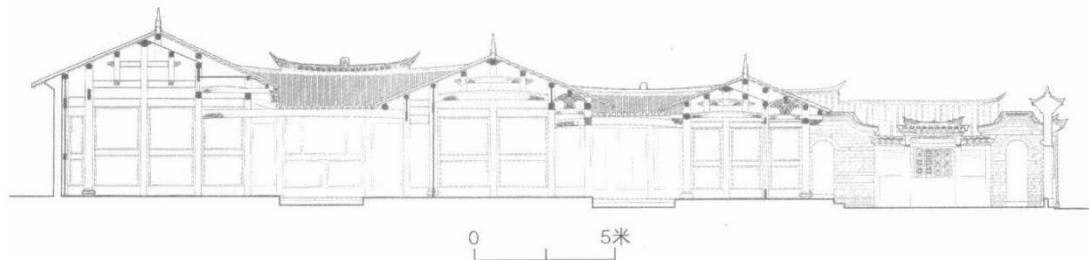
平面図



上厅横断面図



横断面図

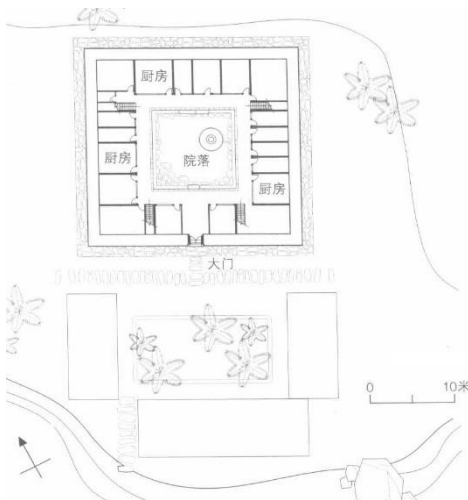


縦断面図

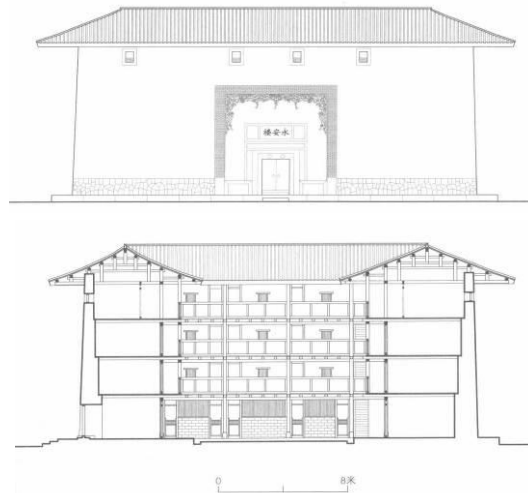
131 南靖石橋村永安楼

出典：李秋香『福建民居』 清華大学出版社、2010、第 73-75 頁

龍岩市南靖県書洋鎮石橋村に位置する。16 世紀の方形土楼である。今も住宅として使用する。



一階平面図

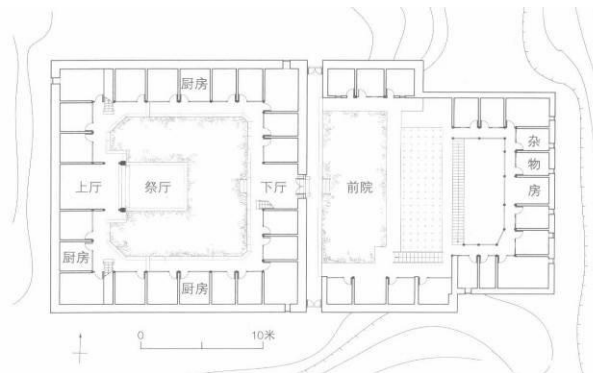


立面図と断面図

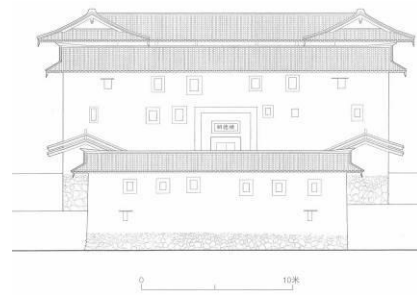
132 南靖石橋村昭德樓

出典：李秋香『福建民居』 清華大学出版社、2010、第 76-81 頁

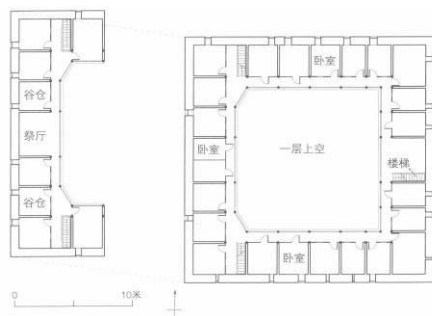
龍岩市南靖県書洋鎮石橋村に位置する。今も住宅として使用する。詳しい説明はない。



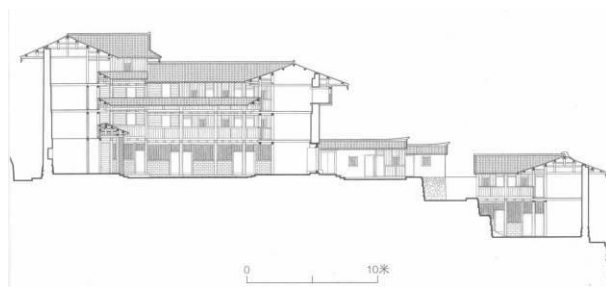
一階平面図



立面図



二階と三階平面図

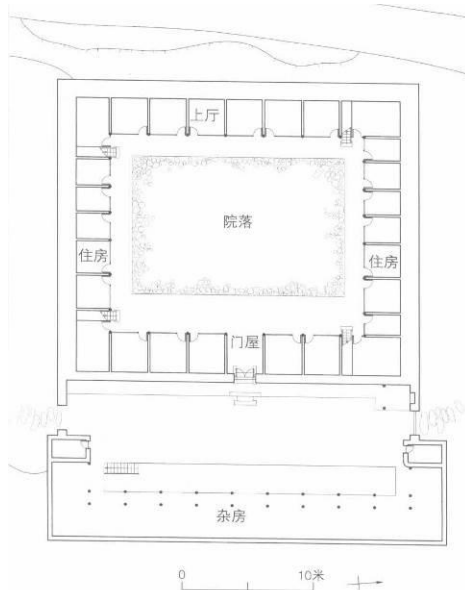


断面図

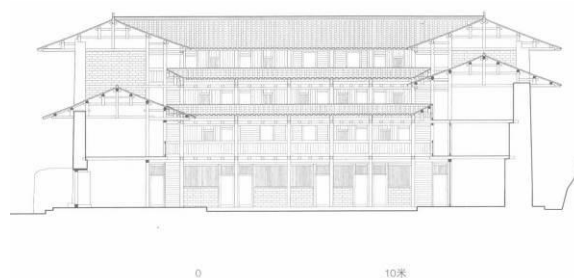
133 南靖石橋村長藍樓

出典：李秋香『福建民居』 清華大学出版社、2010、第 90 頁

龍岩市南靖県書洋鎮石橋村に位置する。清代中期の建物で、最盛期に約 200 人が住んでいる。今も住宅として使用する。



一階平面図

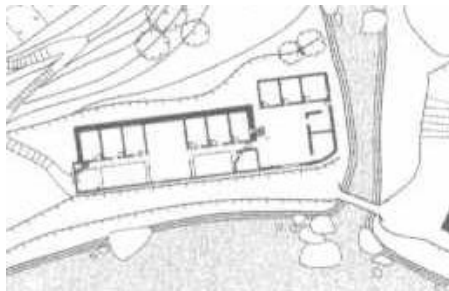


断面図

134 南靖石橋村逢源樓

出典：李秋香『福建民居』 清華大学出版社、2010、第 92 頁

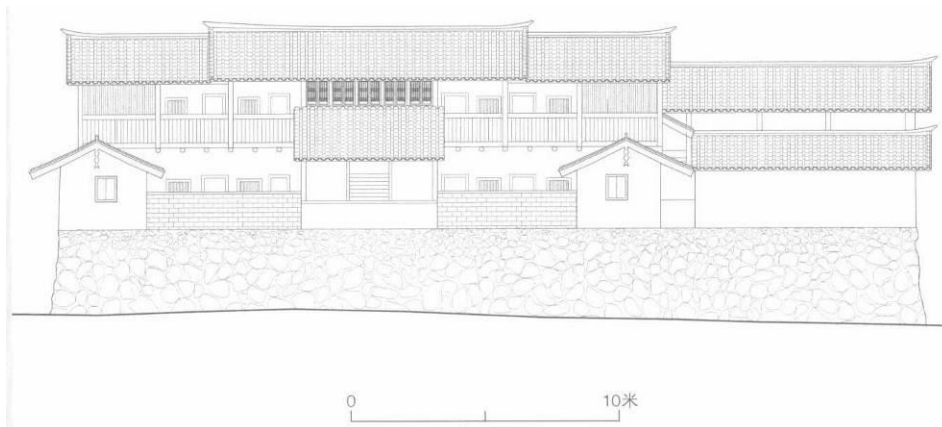
龍岩市南靖縣書洋鎮石橋村に位置する。最初は学校として子供教育のために建造した。今は住宅として使用する。



一階平面図



断面図

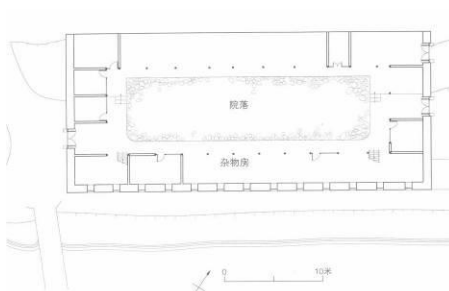


立面図

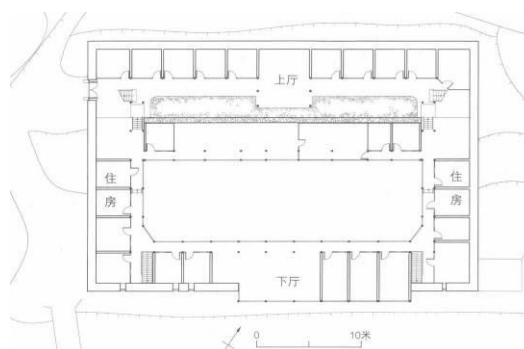
135 南靖石橋村振德樓

出典：李秋香『福建民居』 清華大学出版社、2010、第 93-97 頁

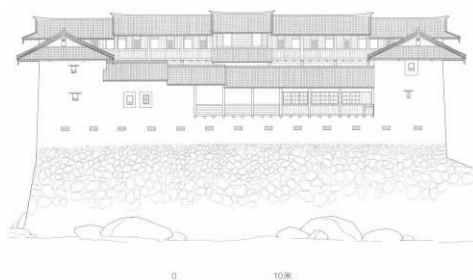
龍岩市南靖縣書洋鎮石橋村に位置する。今も住宅として使用する。



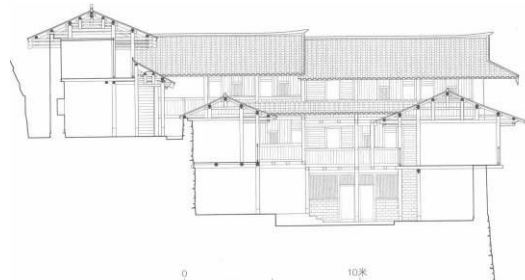
一階平面図



二階平面図



立面図

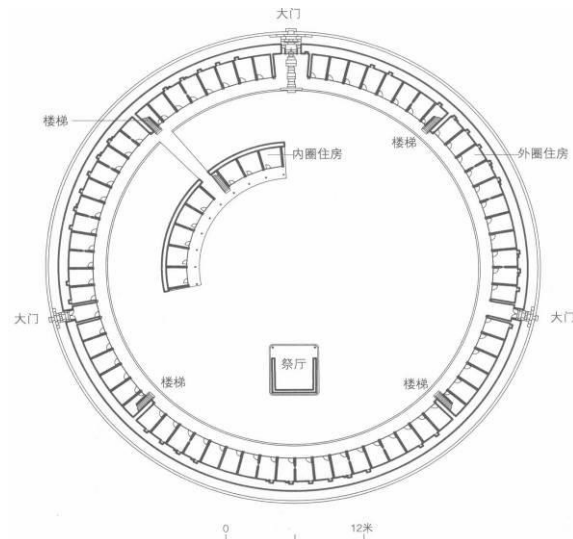


断面図

136 南靖石橋村順裕樓

出典：李秋香『福建民居』 清華大学出版社、2010、第 105 頁

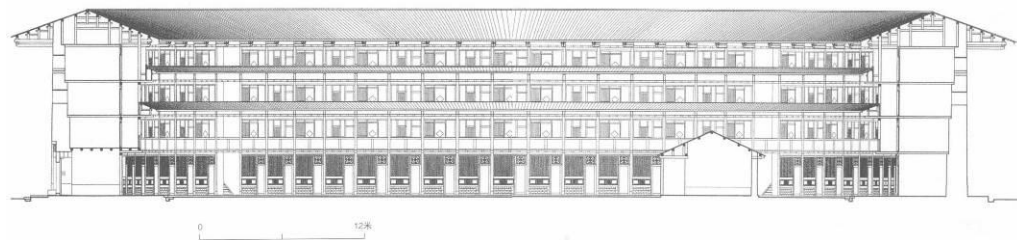
龍岩市南靖県書洋鎮石橋村に位置する。張啓根など外国へ行商する村人が資金集めて 1927 年に建造した土楼である。直径 74 メートル。今も住宅として使用する。



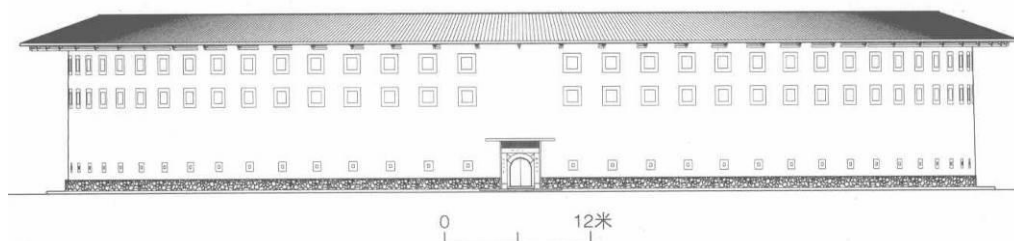
一階平面図



中環住宅



断面図

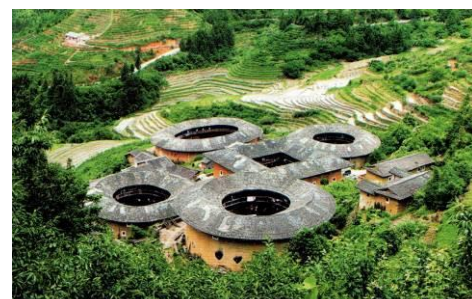
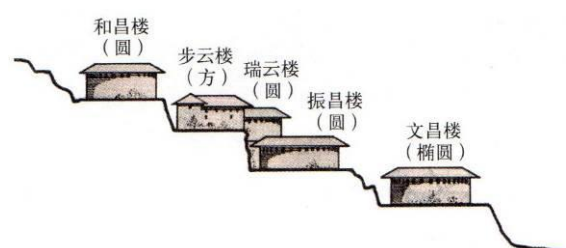


立面図

137 南靖田螺坑步雲樓

出典：戴志堅『福建民居』 中国建築工業出版社、2009、第 239 頁

龍岩市南靖県書洋鎮上坂村に位置する。黄氏一族が清康熙年間（1662-1722）に建造した。敷地面積 1050 平米、建築面積 1393 平米。世界遺産と指定された福建土楼で、国家重点文物保护单位である。

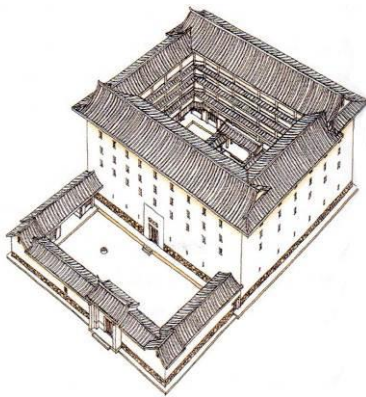




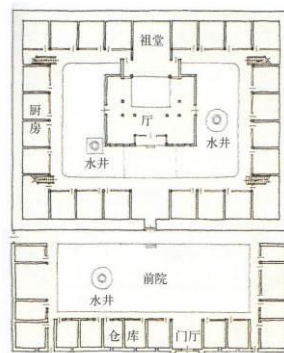
平面配置

138 南靖梅林和貴樓

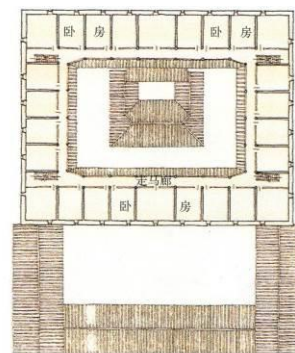
出典：戴志堅『福建民居』中国建築工業出版社、2009、第 240 頁
 龍岩市南靖県梅林鎮璞山村に位置する。清雍正十年（1732 年）から建造し始め、1926 年
 火事で焼失した後再建した。敷地面積 1547 平米、建築面積 3574 平米。世界遺産と指定さ
 れた福建土楼で、国家重点文物保护单位である。



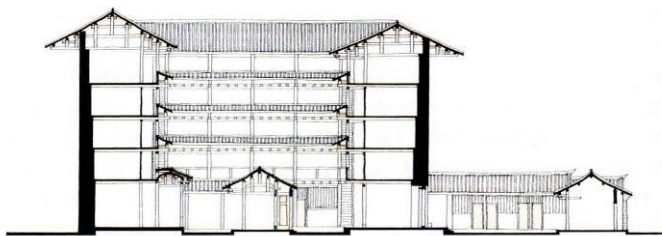
鳥瞰



一階平面図



二階平面図



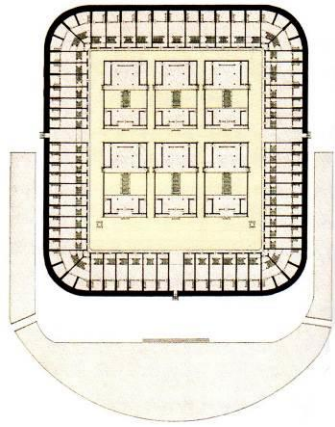
断面図



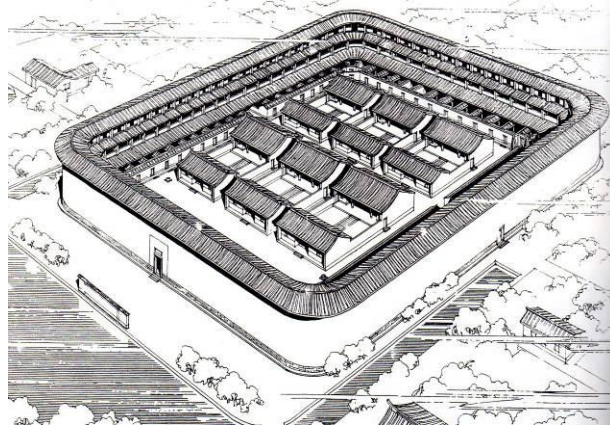
外観

139 平和西安西爽楼

出典：戴志堅『福建民居』中国建築工業出版社、2009、第 242 頁
 龍岩市平和県霞寨鎮西安村に位置する。黃氏一族が清康熙十八年（1679 年）から建造し
 た。



一階平面図

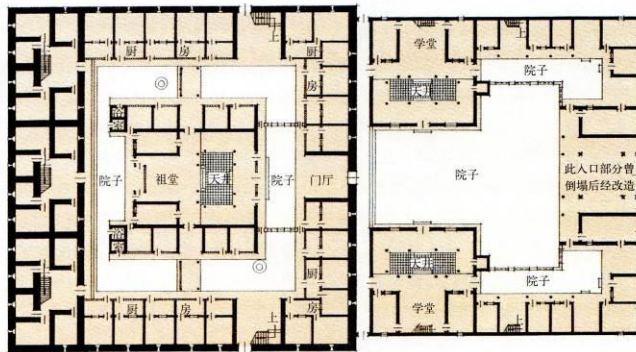


鳥瞰

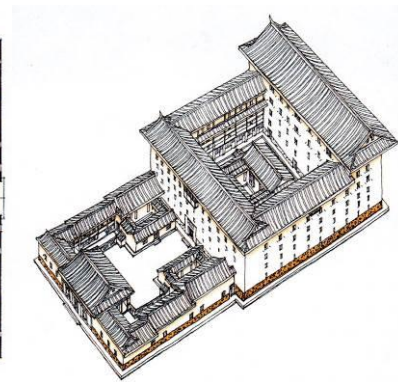
140 永定高陂遺經樓

出典：戴志堅『福建民居』中国建築工業出版社、2009、第 244 頁

龍岩市永定県高陂鎮上洋村に位置する。陳昇華より清嘉慶十一年（1806 年）から三代 70 年をかけて建造した。敷地面積 3660 平米。今も住宅として使用する。



一階平面図



鳥瞰

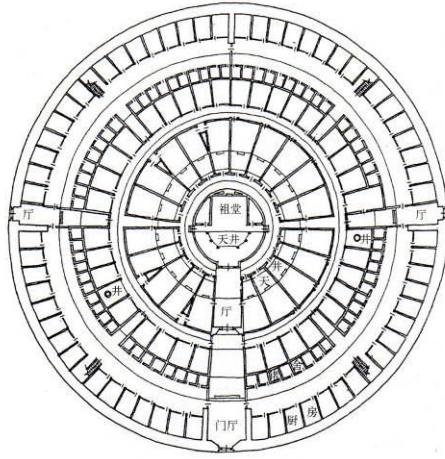


断面図

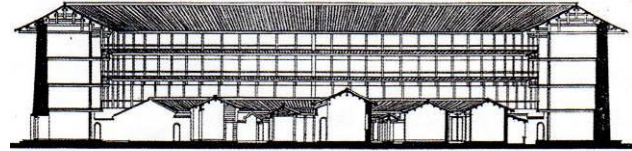
141 永定高北承啓樓

出典：戴志堅『福建民居』中国建築工業出版社、2009、第 246 頁

龍岩市永定県高陂鎮高北村に位置する。江氏の一族が明末に内環を建造し、第二・第三・第四環は清康熙四十八年（1709 年）に建造した。敷地面積 5371 平米。直径 73 メートル。今も住宅として使用する。世界遺産と指定された福建土楼で、国家重点文物保护单位である。



一階平面図

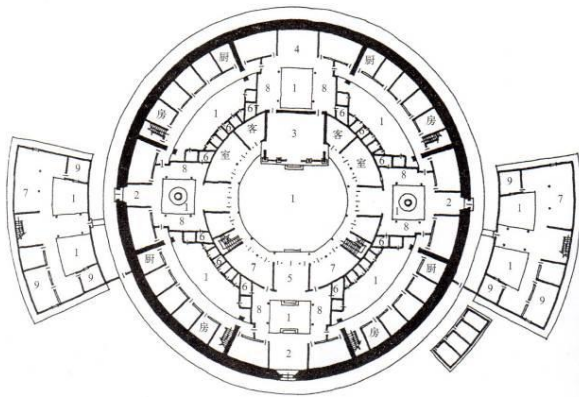


断面図

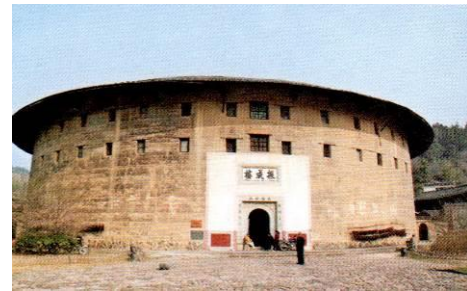
142 永定湖坑振成楼

出典：戴志堅『福建民居』中国建築工業出版社、2009、第 248 頁

龍岩市永定県湖坑鎮洪坑村に位置する。林鴻超兄弟たちより 1912 年から 5 年かかって建造した。敷地面積約 5000 平米。今も住宅として使用する。世界遺産と指定された福建土楼で、国家重点文物保护单位である。



一階平面図

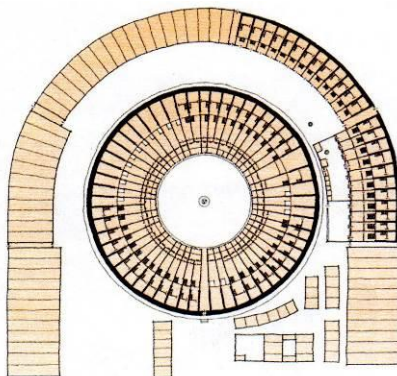


外観

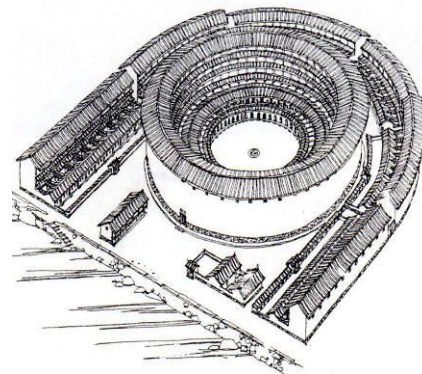
143 平和蘆溪厥寧楼

出典：戴志堅『福建民居』中国建築工業出版社、2009、第 250 頁

龍岩市平和県蘆溪鎮蘆豊村に位置する。葉氏一族より清康熙五十九年（1720 年）から 40 年をかかって建造した。直径 77 メートル今も 200 人ぐらいが住んでいる。



一階平面図

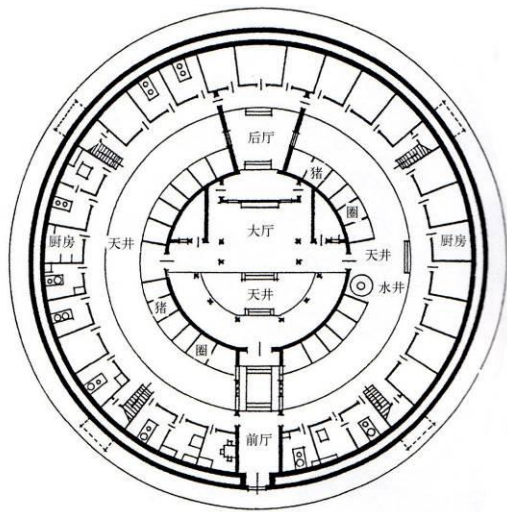


鳥瞰

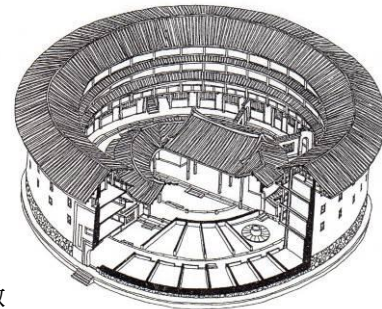
144 南靖梅林懷遠樓

出典：戴志堅『福建民居』中国建築工業出版社、2009、第 251 頁

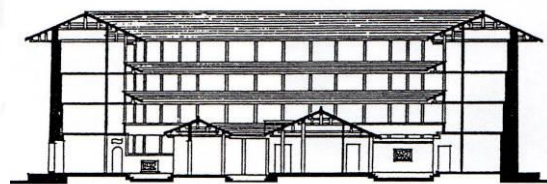
龍岩市南靖県梅林鎮坎下村に位置する。簡新喜がミャンマーに行商する兄弟かあ資金をもって、清宣統元年（1909 年）に建成した。敷地面積 1384.7 平米、建築面積 3468 平米、直径 42 メートル。今も住宅として使用する。世界遺産と指定された福建土楼で、国家重点文物保護単位である。



一階平面図



鳥瞰

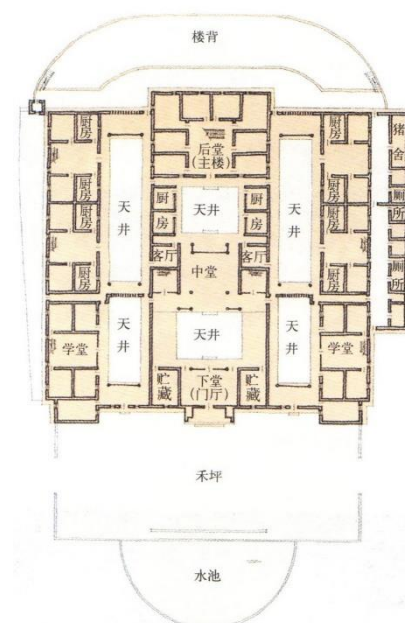


断面図

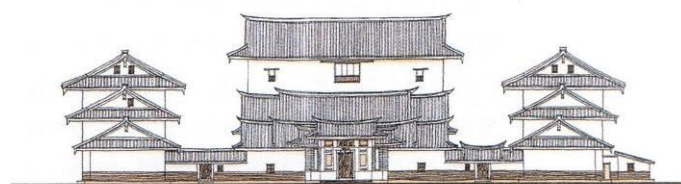
145 永定高陂大夫邸

出典：戴志堅『福建民居』中国建築工業出版社、2009、第 253 頁

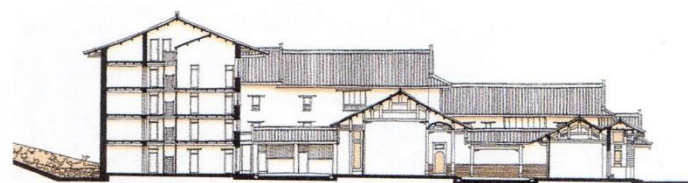
龍岩市永定県高陂鎮大塘角村に位置する。王氏の一族より清道光八年（1828 年）から 6 年をかかって建造した。長さ 52 メートル。奥行き 53 メートル。



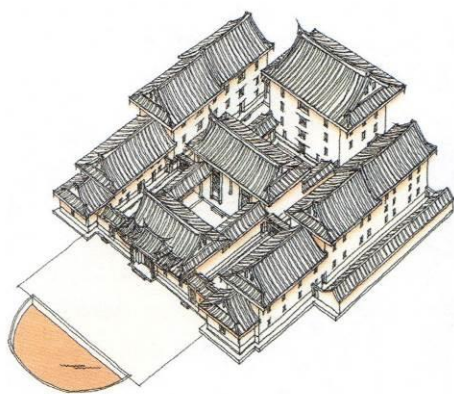
一階平面図



立面図



断面図



鳥瞰

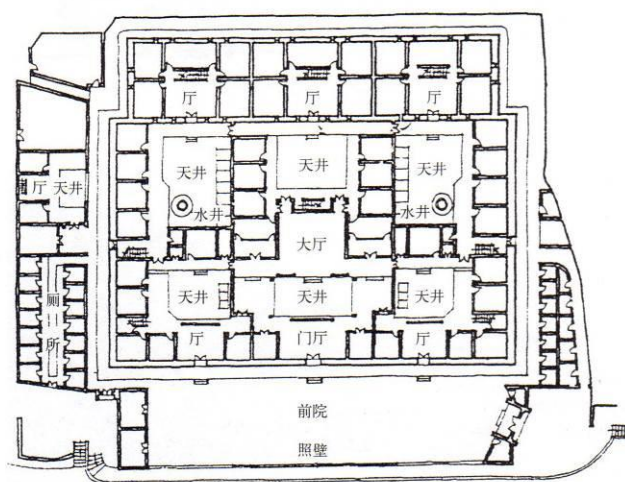


外観

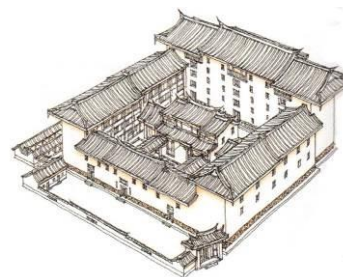
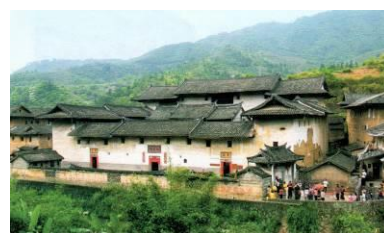
146 永定洪坑福裕楼

出典：戴志堅『福建民居』中国建築工業出版社、2009、第 254 頁

龍岩市永定県湖坑鎮洪坑村に位置する。清光緒六年（1880 年）に建造した。敷地面積約 4000 平米。今も住宅として使用する。世界遺産と指定された福建土楼で、国家重点文物保护单位である。



一階平面図



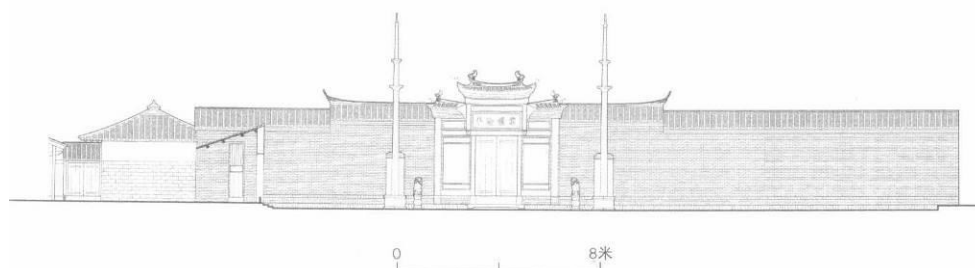
外観

147 連城培田官厅

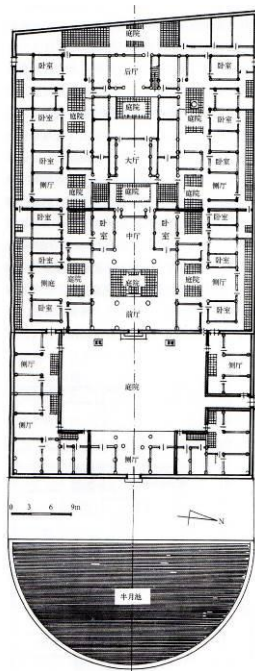
出典：戴志堅『福建民居』中国建築工業出版社、2009、第 257 頁

李秋香『福建民居』 清華大学出版社、2010、第 17 頁

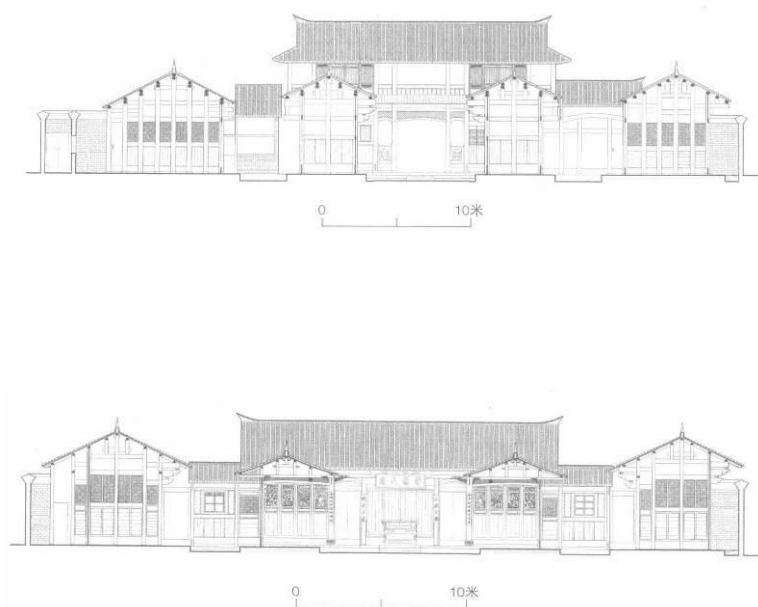
龍岩市連城県宣和郷培田村に位置する。明末に建造した。呉氏の一族より官僚・商客を接待する場所である。敷地面積約 5900 平米。今は住宅として使用する。



立面図



一階平面図

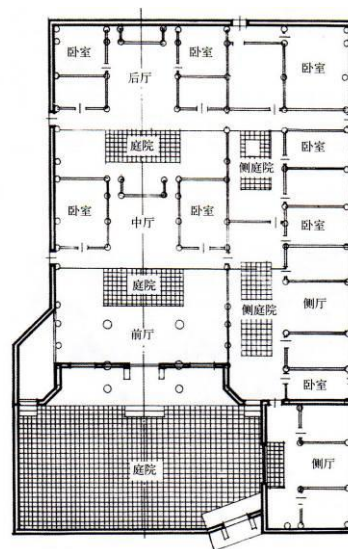


断面図

148 連城培田都クン府

出典：戴志堅『福建民居』中国建築工業出版社、2009、第 258 頁

龍岩市連城県宣和郷培田村に位置する。小規模住宅。1994 年焼失、現存しない。

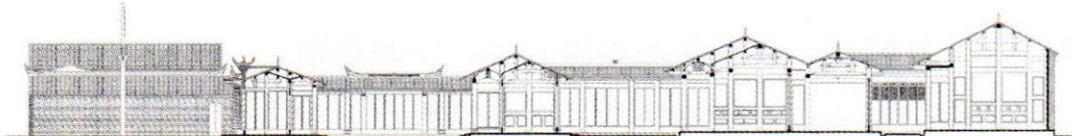


平面図

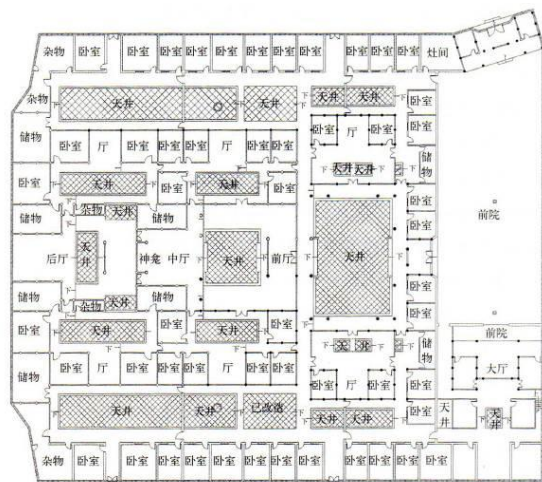
149 連城芷溪集鱸堂

出典：戴志堅『福建民居』中国建築工業出版社、2009、第 259 頁

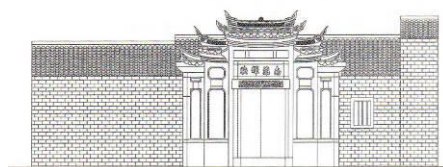
龍岩市連城県芷溪村に位置する。清康熙年間（1662-1722）に建造した。敷地面積約 13000 平米。



断面図



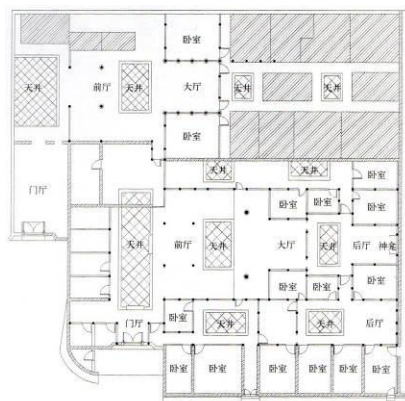
平面図



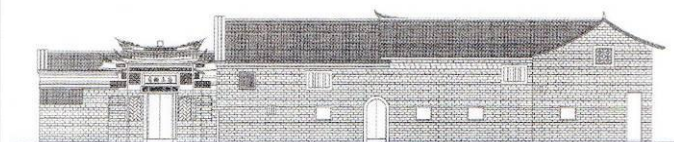
大門

150 連城芷溪凝禧堂

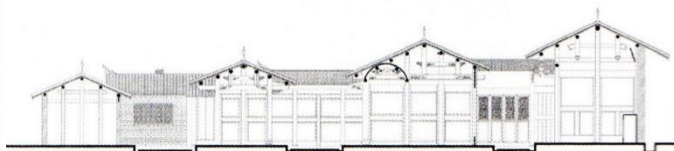
出典：戴志堅『福建民居』中国建築工業出版社、2009、第 261 頁
龍岩市連城縣芷溪村に位置する。清光緒年間（1871-1908 年）に建造された。



一階平面図



立面図



断面図

151 連城芷溪紹徳堂

出典：戴志堅『福建民居』中国建築工業出版社、2009、第 262 頁
龍岩市連城縣芷溪村に位置する。清嘉慶年間（1796-1820 年）に建造された。



平面図



側面図

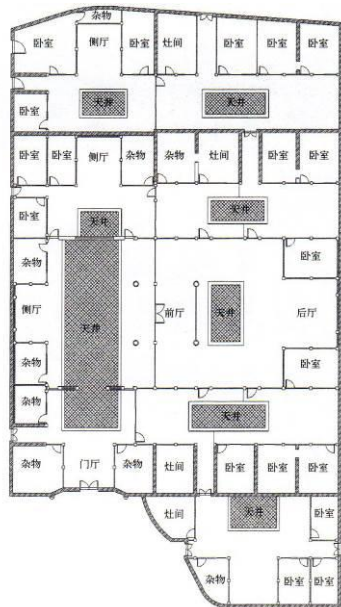


断面図

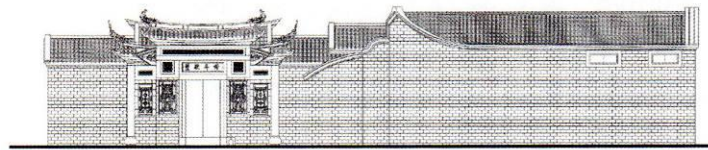
152 連城芷溪培蘭堂

出典：戴志堅『福建民居』中国建築工業出版社、2009、第 264 頁

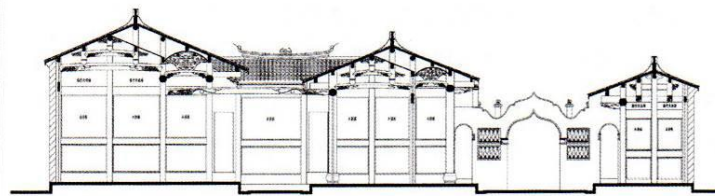
龍岩市連城縣芷溪村に位置する。清光緒年間（1871-1908 年）に建造された。



平面図



立面図

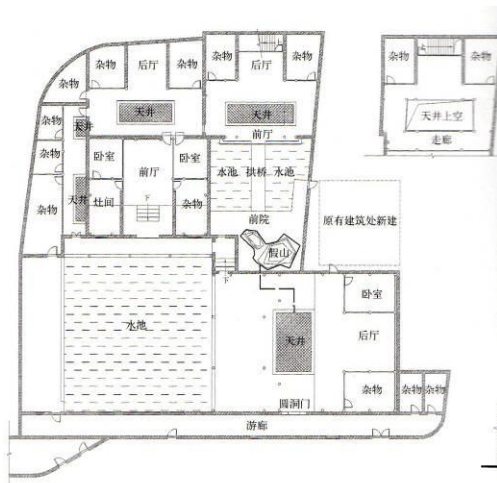


断面図

153 連城芷溪雲山房

出典：戴志堅『福建民居』中国建築工業出版社、2009、第 265 頁

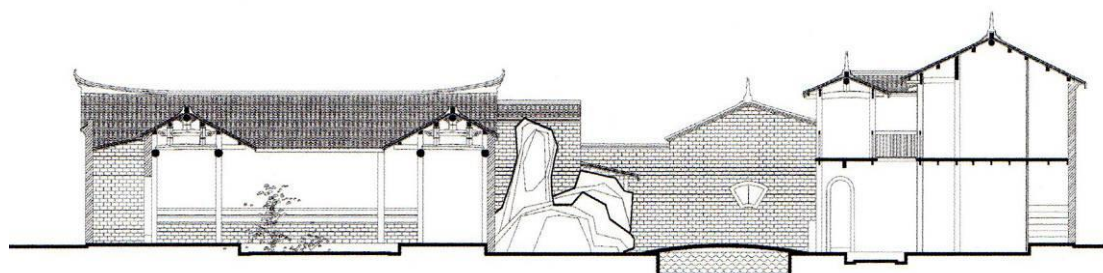
龍岩市連城縣芷溪村に位置する。清同治年間（1862-1870 年）に建造された。



一階平面図



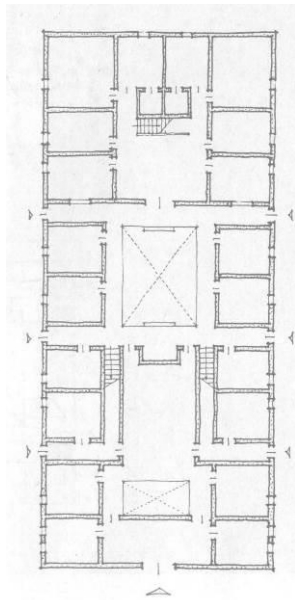
立面図



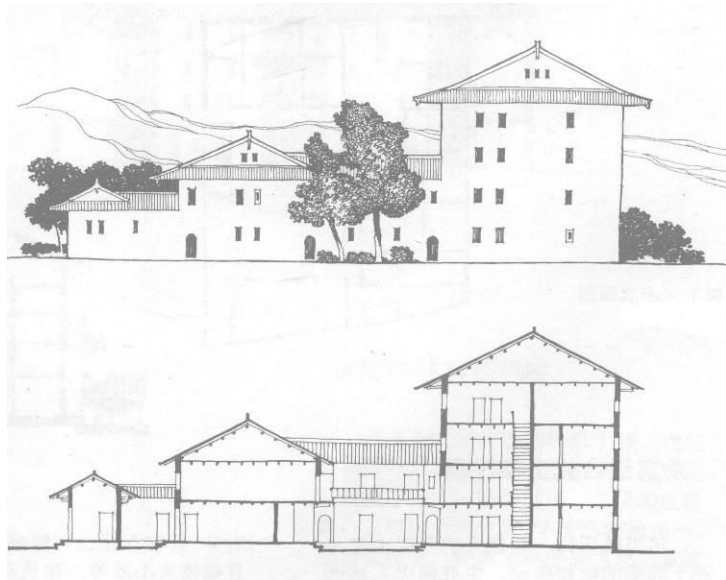
断面図

154 永定撫市ある住宅
詳しい説明はない。

出典：黄為雋『閩粵民宅』天津科学技術出版社、1992、第 213 頁



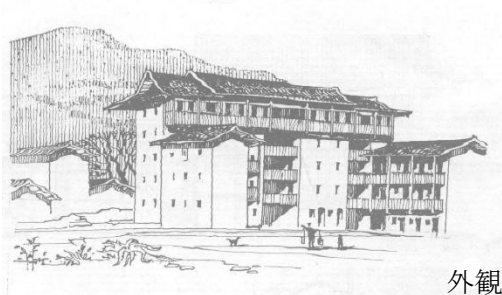
一階平面図



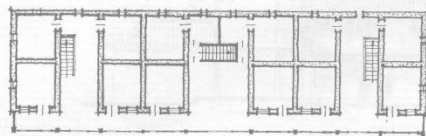
側面図と断面図

155 永定鵲嶺村長福楼
1920 年代に建造した。12 世帯が住んでいる。

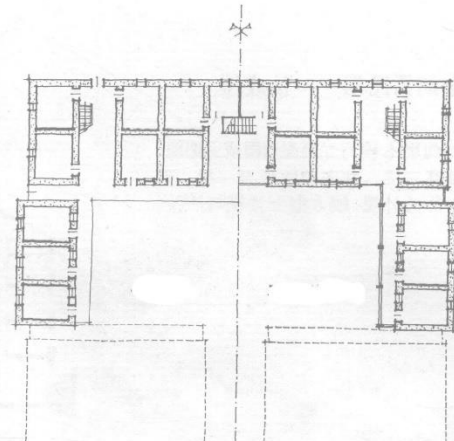
出典：黄為雋『閩粵民宅』天津科学技術出版社、1992、第 215 頁



外観

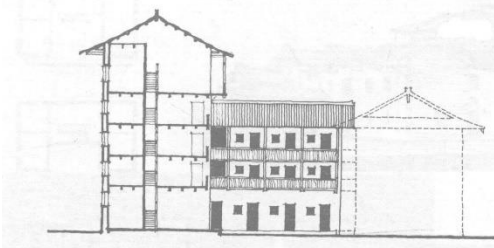


五階平面図

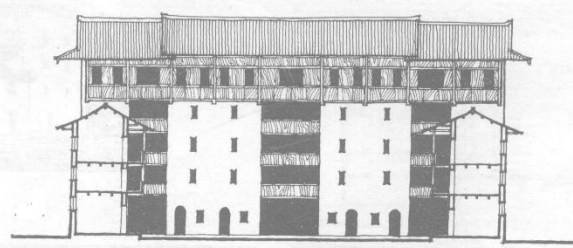


一階平面図

二 - 四階平面図



断面図

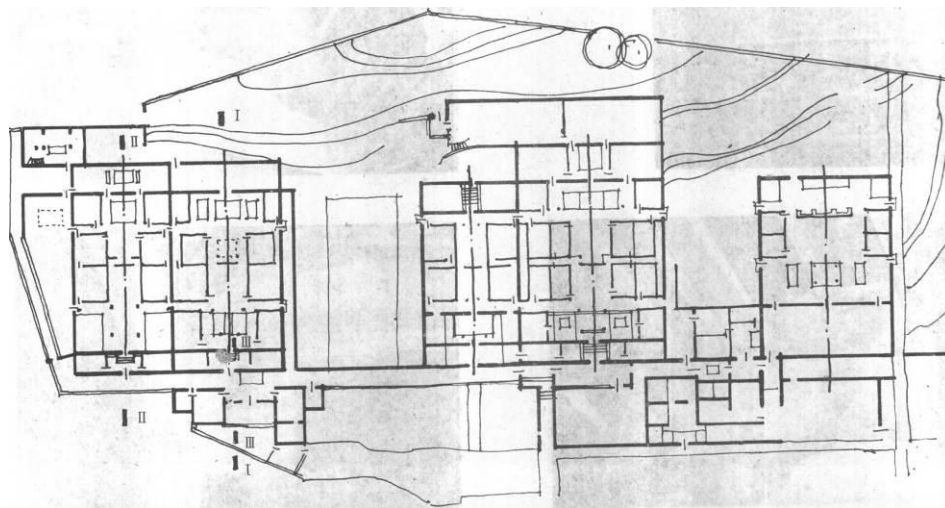


立面図

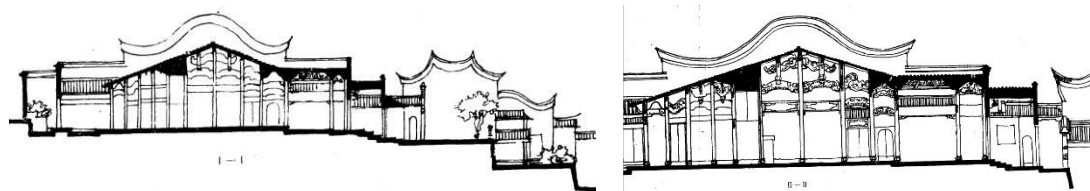
156 建瓯伍石村馮宅

出典：王乃香『福建民居』中国建築工業出版社、1987、第 248 頁

茶農家の住宅。詳しい説明はない。



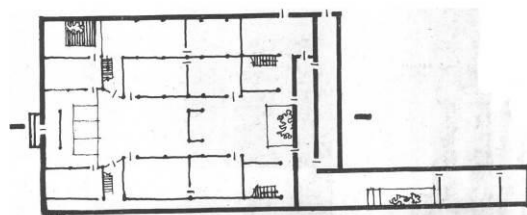
平面図



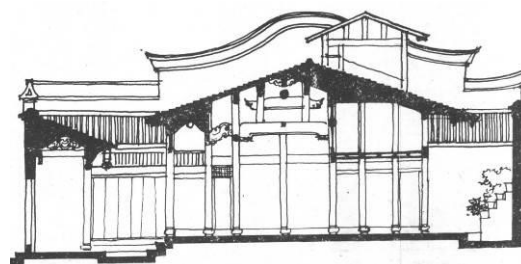
157 建瓯朱宅

出典：王乃香『福建民居』中国建築工業出版社、1987、第 252 頁

詳しい説明はない。



一階平面図

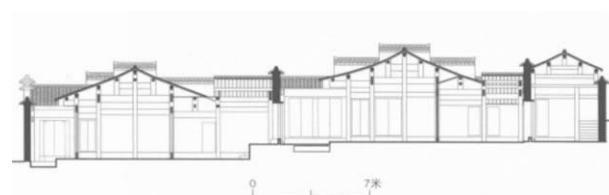


断面図

158 浦城中坊葉氏住宅

出典：李秋香『福建民居』 清華大学出版社、2010、第 156 頁

南平市浦城県水北街鎮觀前村中坊に位置する。詳しい説明はない。



断面図

一階平面図

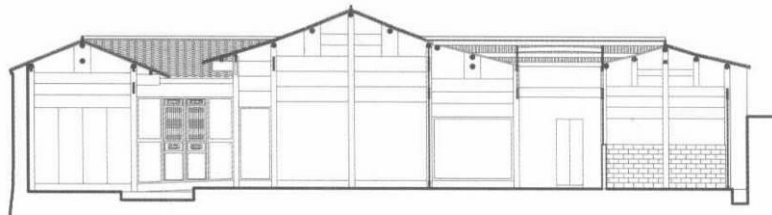
159 浦城上坊葉氏大厝

出典：李秋香『福建民居』 清華大学出版社、2010、第 156 頁

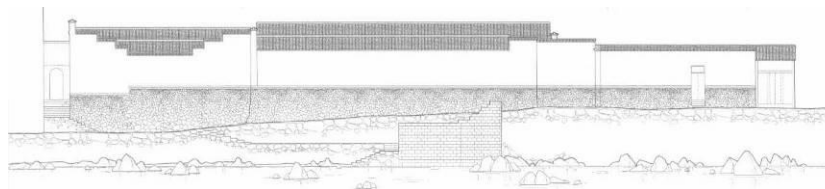
南平市浦城縣水北街鎮觀前村上坊に位置する。清代に建造した。詳しい説明はない。



一階平面図



断面図



川沿い立面図

160 浦城觀前饒加年宅

出典：李秋香『福建民居』 清華大学出版社、2010、第 165 頁

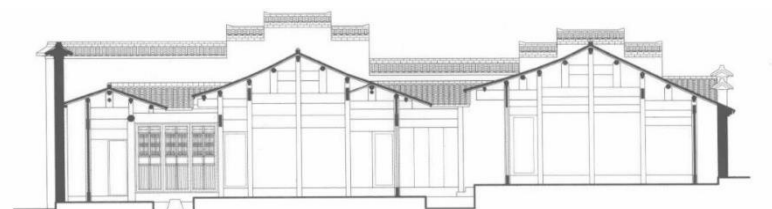
南平市浦城縣水北街鎮觀前村に位置する。詳しい説明はない。



一階平面図



天井空間

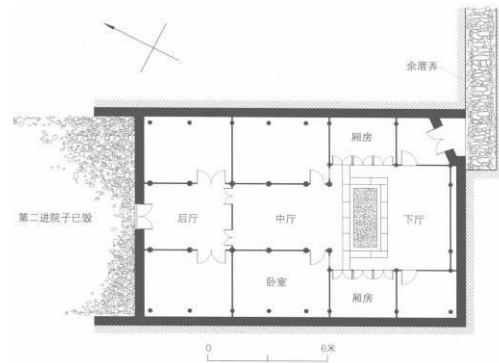


断面図

161 浦城觀前余天孫宅

出典：李秋香『福建民居』 清華大学出版社、2010、第 167 頁

南平市浦城縣水北街鎮觀前村に位置する。敷地面積 180 平米。



平面図



断面図

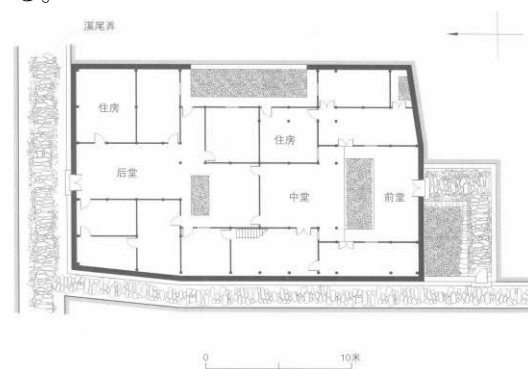


断面図

162 浦城觀前余有蓮宅

出典：李秋香『福建民居』 清華大学出版社、2010、第 171 頁

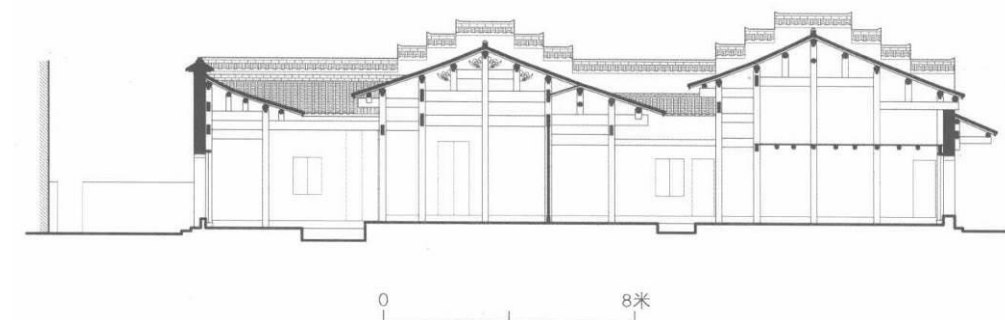
南平市浦城縣水北街鎮觀前村に位置する。敷地面積 340 平米。現在余有蓮夫婦が住んでいる。



一階平面図



外觀

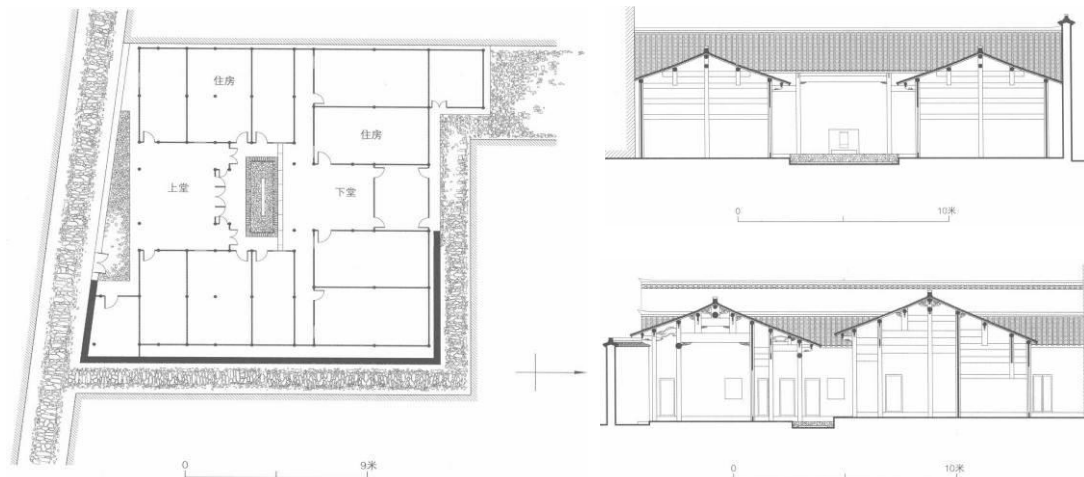


断面図

163 浦城觀前張宅

出典：李秋香『福建民居』 清華大学出版社、2010、第 173 頁

南平市浦城県水北街鎮觀前村に位置する。敷地面積 435 平米。



一階平面図

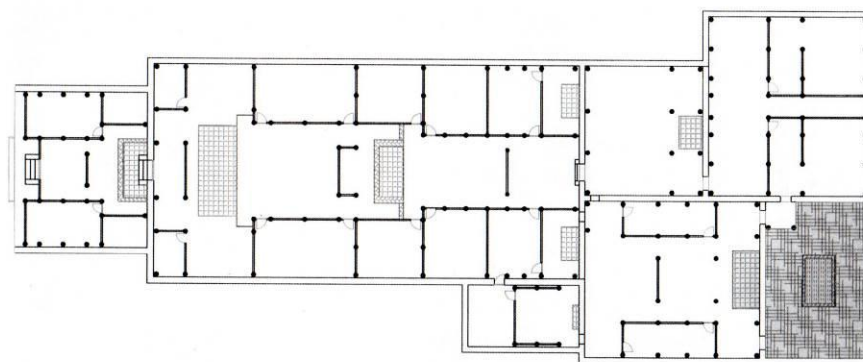
断面図

164 武夷山下梅鄒邸

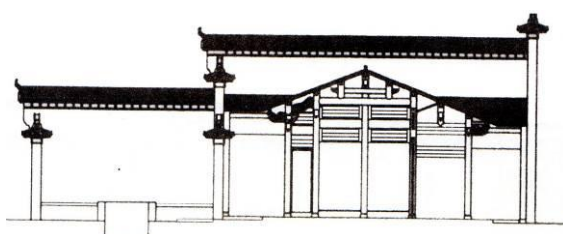
出典：戴志堅『福建民居』 中国建築工業出版社、2009、第 209 頁

実地調査ある

南平市武夷山市武夷鎮下梅村に位置する。清乾隆十九年（1754 年）に建造された。茶葉商売をする鄒氏一族の家である。建築面積 3423 平米。現在は住宅として使用しながら、民家資料館として公開する。福建省文物保护单位である。



一階平面図



断面図



入口外観

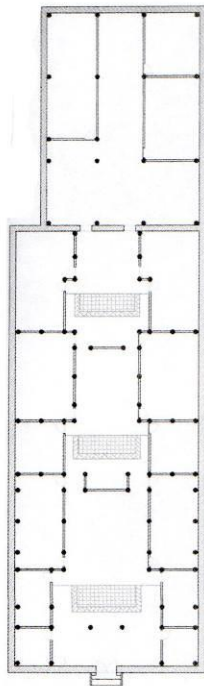
165 武夷山下梅儒学正堂

出典：戴志堅『福建民居』 中国建築工業出版社、2009、第 213 頁

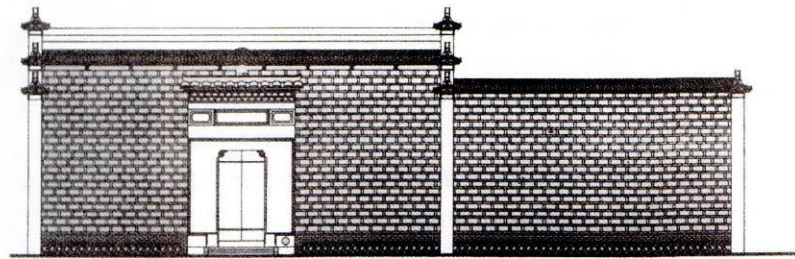
実地調査ある

南平市武夷山市武夷鎮下梅村に位置する。清乾隆年間（1736-1795 年）に建造された住宅

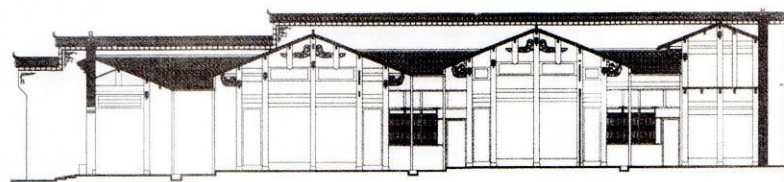
である。当初の持ち主陳鏞は科举郷試第一名で、この家は「儒学正堂」と呼ばれる。今も住宅として使用する。



平面図



立面図



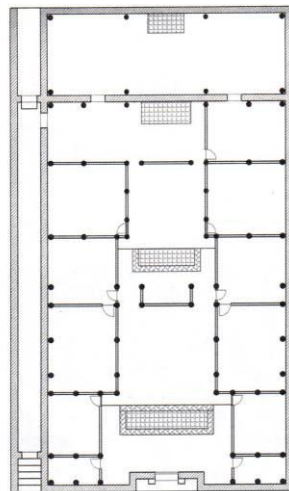
断面図

166 武夷山下梅参軍邸

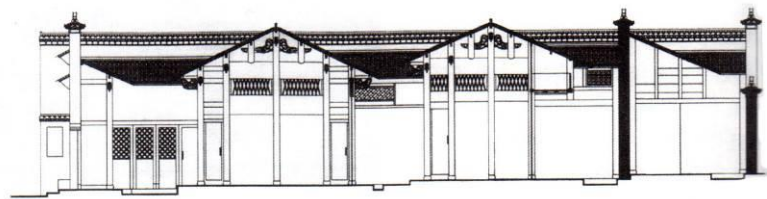
出典：戴志堅『福建民居』中国建築工業出版社、2009、第 214 頁

実地調査ある

南平市武夷山市武夷鎮下梅村に位置する。清乾隆年間（1736-1795 年）に建造された住宅である。今も住宅として使用する。



一階平面図

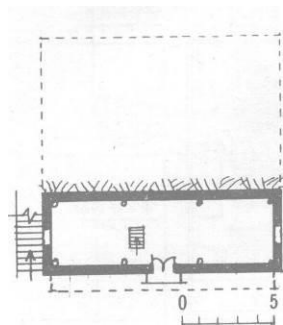


断面図

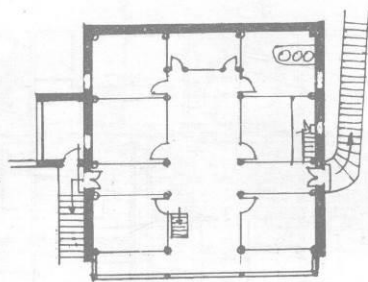
167 崇安郊区藍湯応宅

出典：黄為隼『閩粵民宅』天津科学技術出版社、1992、第 182 頁

詳しい説明はない。



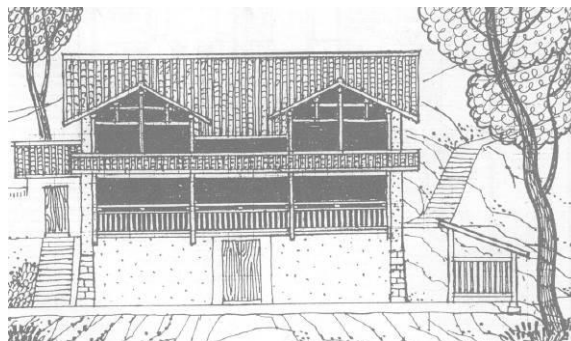
一階平面図



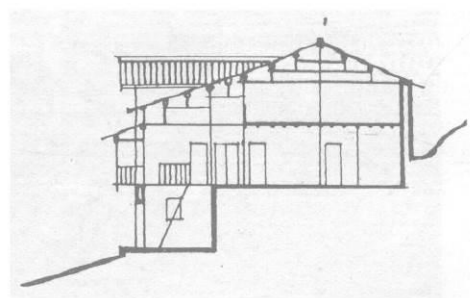
二階平面図



外観

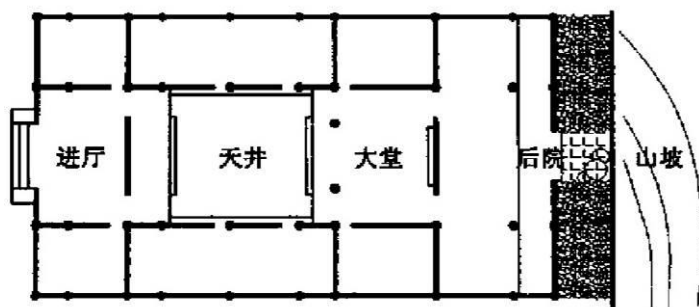


立面図



断面図

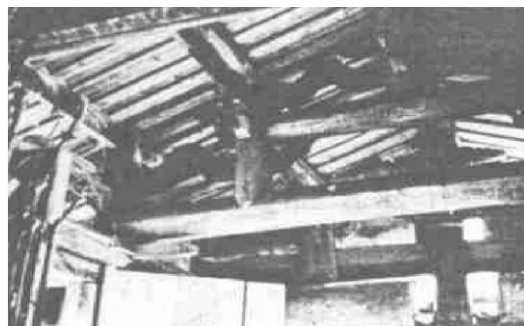
168 南平洛洋村ある住宅 出典：鄭偉鋒「南平洛洋村伝統民居研究」『福建建築』2001.4、第 19-21 頁



一階平面図



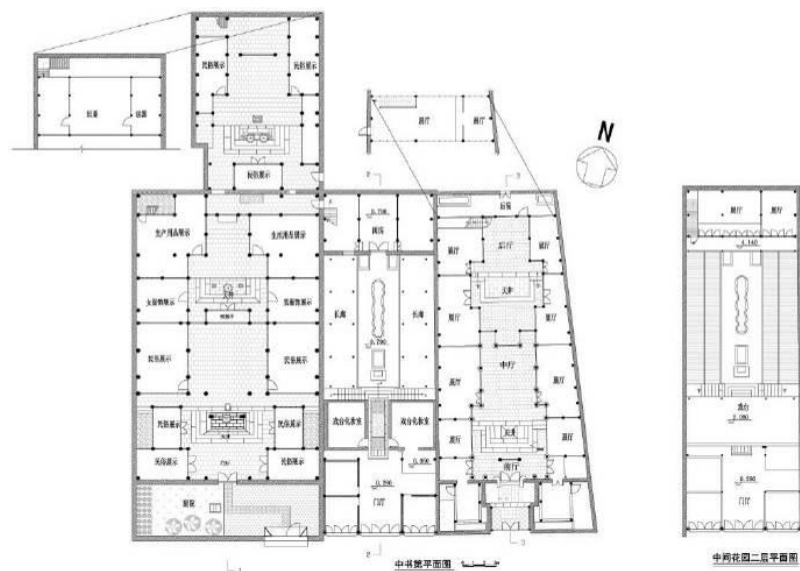
軒部



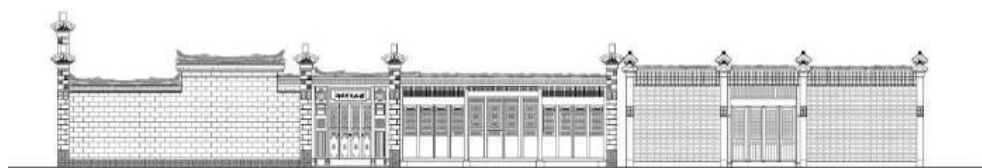
梁構造

169 邵武中書邸

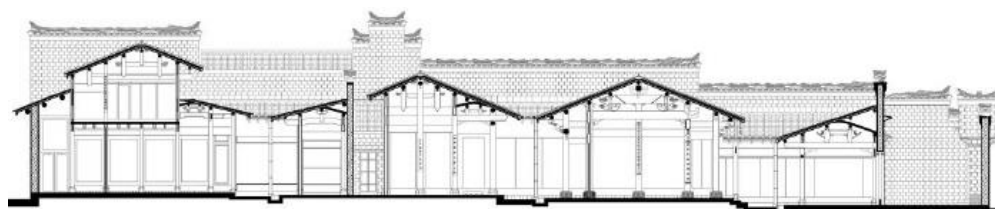
出典：陳楠『邵武伝統建築形態与文化研究』華僑大学修士論文、2012
南平市邵武市五四路に位置する。明末に建造された。敷地面積約 2900 平米。今は邵武市民俗博物館として使用する。福建省文物保护单位である。



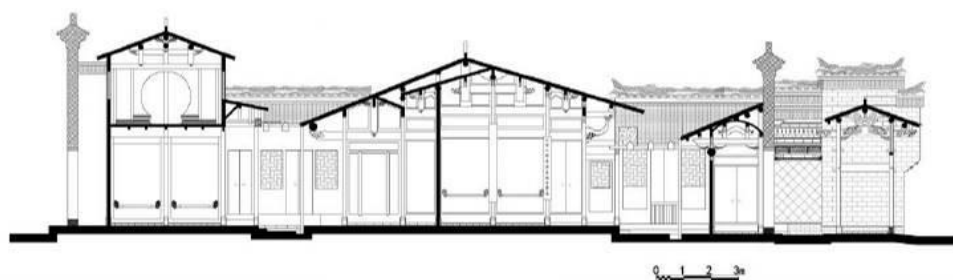
平面図



立面図



断面図



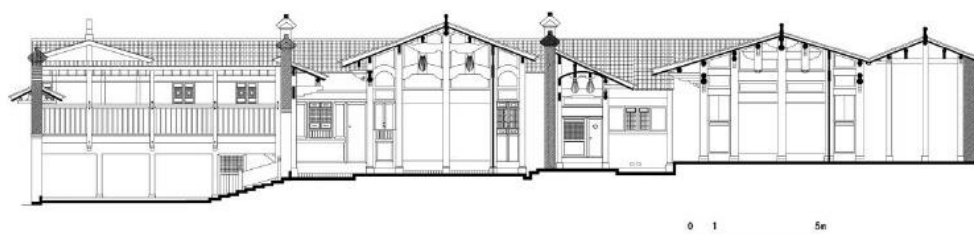
断面図

170 邵武和平廖氏大夫邸

出典：陳楠『邵武伝統建築形態与文化研究』華僑大学修士論文、2012

実地調査ある

南平市邵武市和平鎮に位置する。清同治年間（1862-1870 年）に建造された。当時は官僚廖伝珍の住宅である。今も住宅として使用する。



断面図



平面図

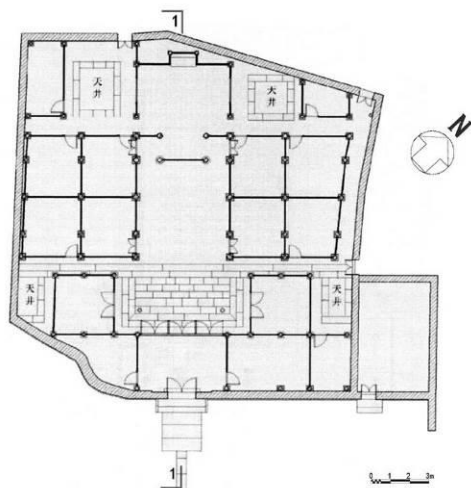


外観 (本人撮影)

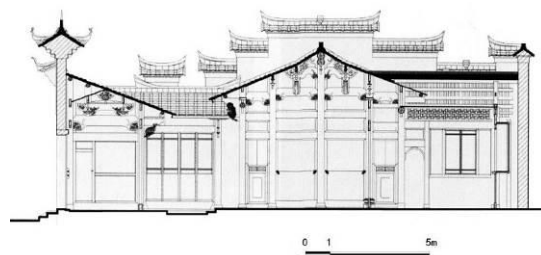
171 邵武金坑儒林郎邸

出典：陳楠『邵武伝統建築形態与文化研究』華僑大学修士論文、2012

南平市邵武市金坑郷金坑村に位置する。明崇禎五年（1632 年）に建造された官僚の家である。



一階平面図

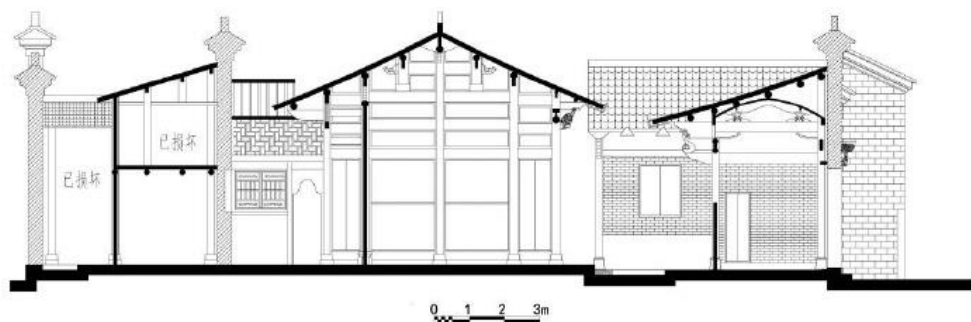


断面図

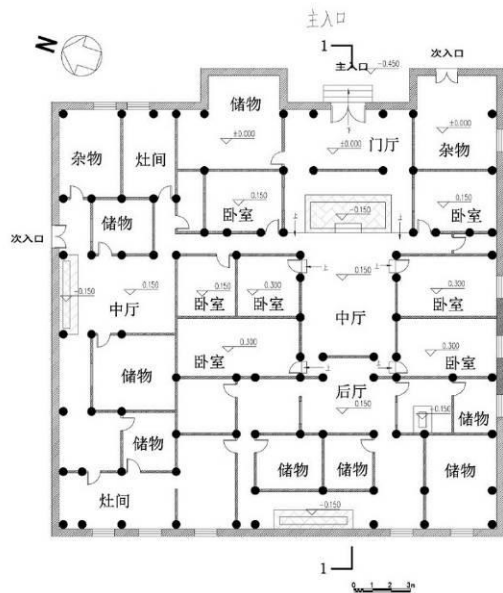
172 邵武金坑 16 号李宅

出典：陳楠『邵武伝統建築形態与文化研究』華僑大学修士論文、2012

南平市邵武市金坑郷金坑村 16 号に位置する。詳しい説明はない。



断面図

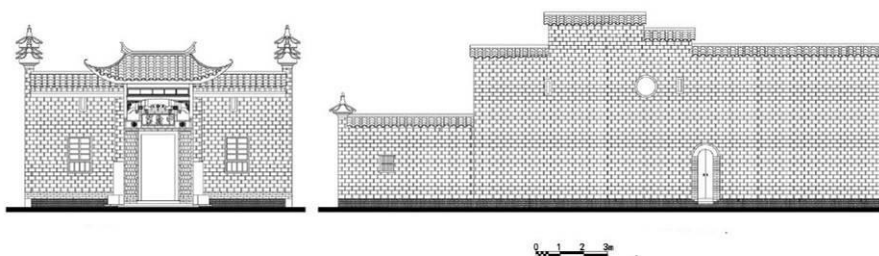


平面図

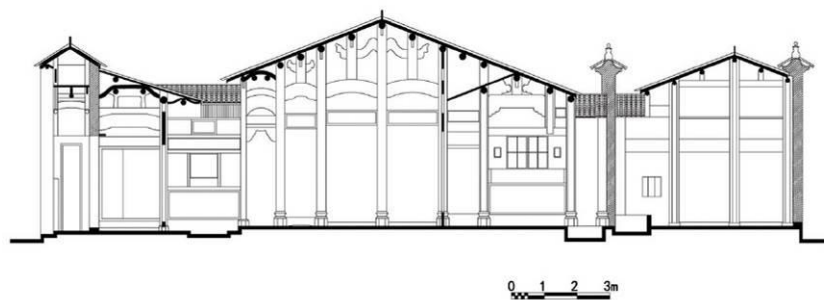
173 邵武金坑中翰邸

出典：陳楠『邵武伝統建築形態与文化研究』華僑大学修士論文、2012

南平市邵武市金坑郷金坑村に位置する。詳しい説明はない。



立面図

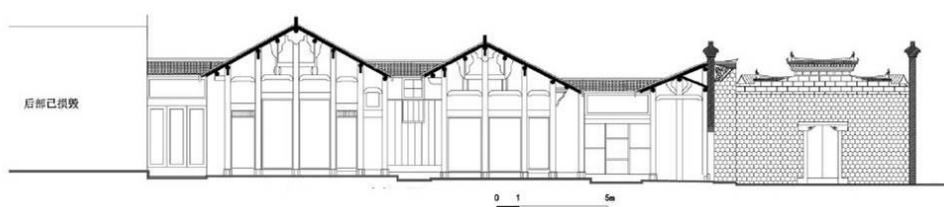


断面図

174 邵武大埠岡中翰邸

出典：陳楠『邵武伝統建築形態与文化研究』華僑大学修士論文、2012

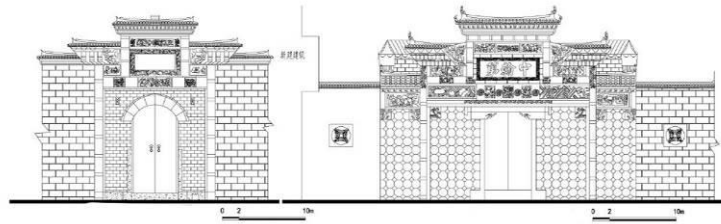
南平市邵武市大埠岡鎮大埠岡村に位置する。官僚の家である。



断面図



一階平面図



裏門立面図

大門立面図

175 邵武和平李氏大夫邸

実地調査ある

南平市邵武市和平鎮に位置する。清同治年間（1862-1870 年）に建造された。当時は官僚李春江の住宅である。今も住宅として使用する。



厅堂

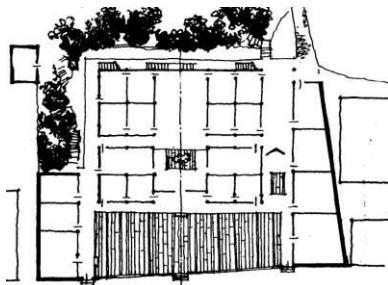


後楼

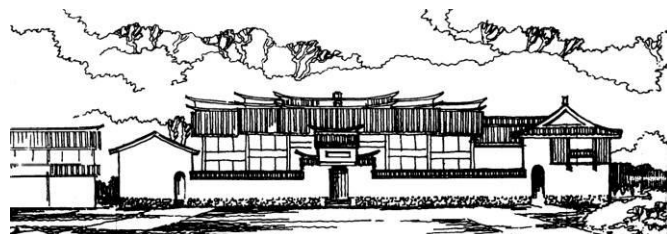
176 寧化安遠ある住宅

出典：王乃香『福建民居』中国建築工業出版社、1987、第 254 頁

詳しい説明はない。



一階平面図



立面図

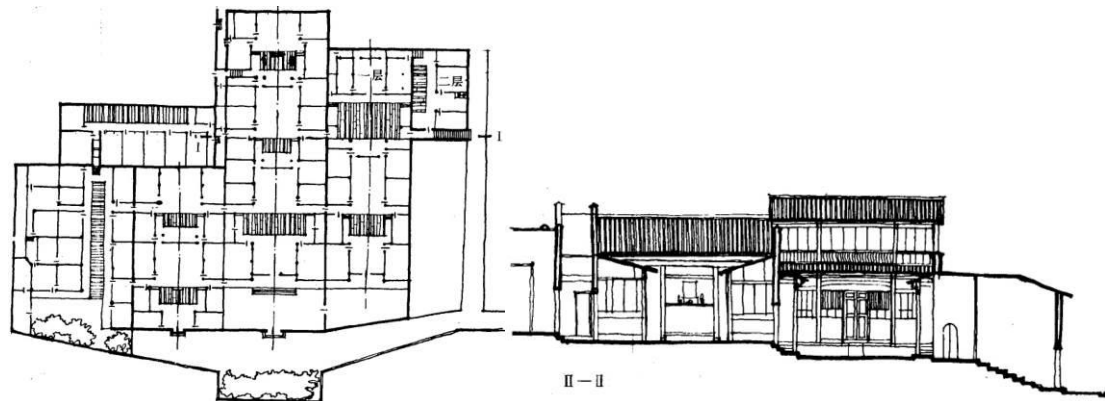


断面図

177 建寧丁宅

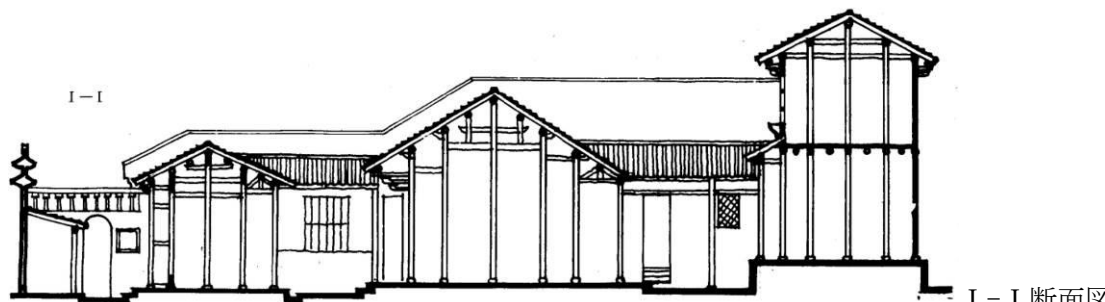
出典：王乃香『福建民居』中国建築工業出版社、1987、第 255 頁

詳しい説明はない。



一階平面図

II-II 断面図



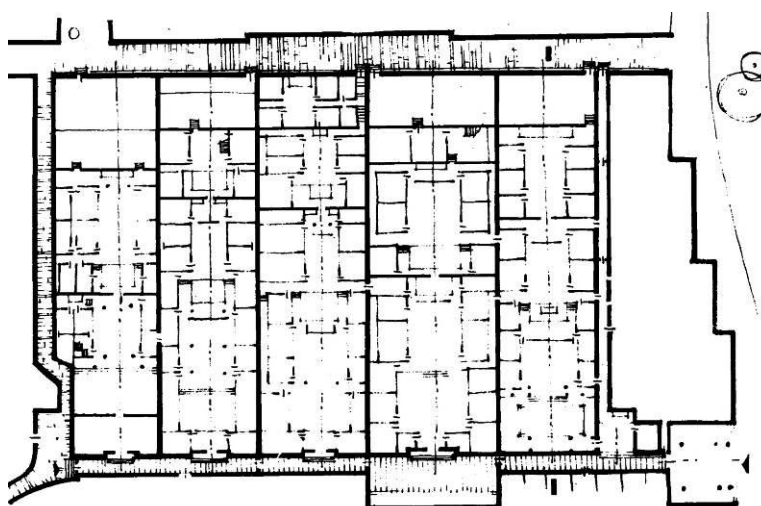
I-I 断面図

178 泰寧尚書邸

出典：王乃香『福建民居』中国建築工業出版社、1987、第 239 頁

戴志堅『福建民居』中国建築工業出版社、2009、第 207 頁

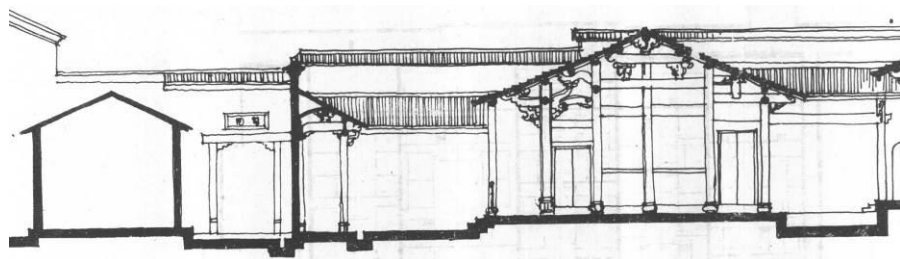
南平市泰寧県杉城鎮尚書街 8 号に位置する。明天啓年間（1621-1627 年）に建造された。進士・兵部尚書李春燁 5 兄弟の住宅であった。敷地面積 5220 平米。今は泰寧県博物館として使用する。国家重点文物保护单位である。



平面図



軒部

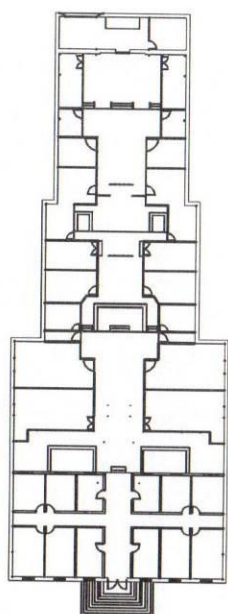


断面図

179 光澤崇仁裘宅

出典：戴志堅『福建民居』中国建築工業出版社、2009、第 215 頁

南平市光澤県崇仁郷政府院内に位置する。明末に建造された。



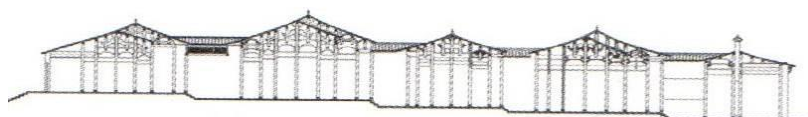
平面図



庁堂



外観

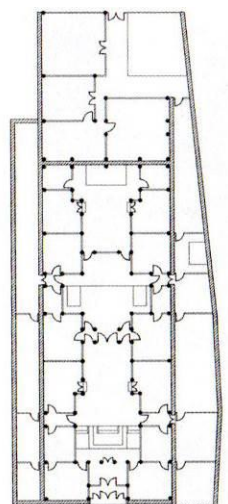


断面図

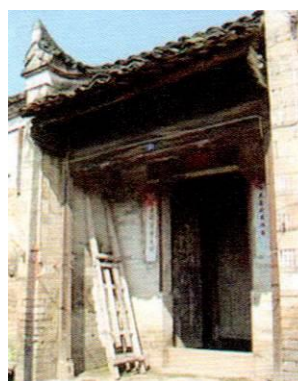
180 光澤崇仁ゴン氏宅

出典：戴志堅『福建民居』中国建築工業出版社、2009、第 216 頁

南平市光澤県崇仁郷崇仁村崇仁街 12 号。明末に建造された。



一階平面図



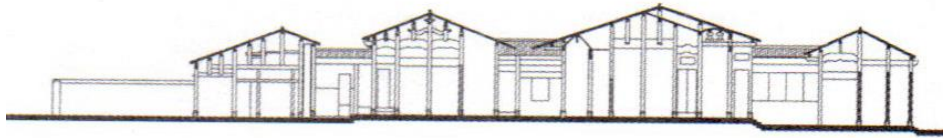
入口外観



庁堂



側面図



断面図

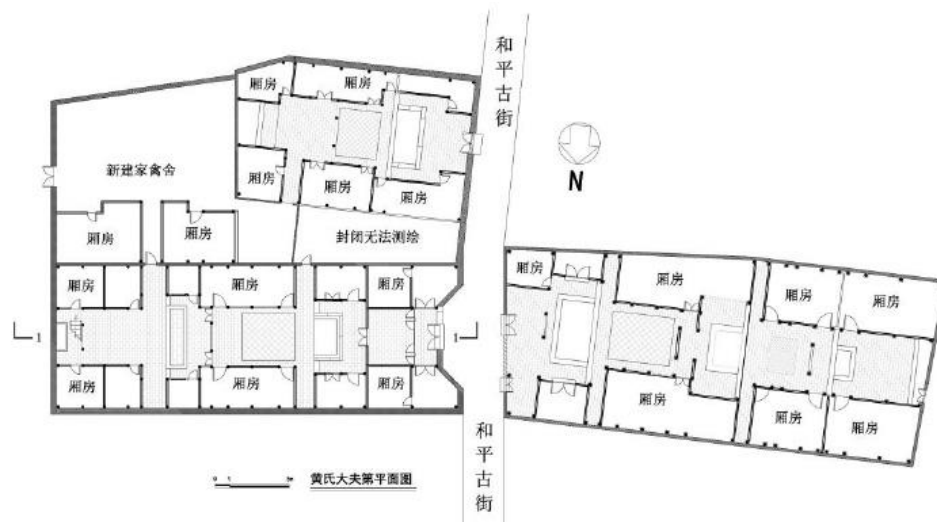
181 邵武和平黄氏大夫邸

出典：戴志堅『福建民居』中国建築工業出版社、2009、第 216 頁

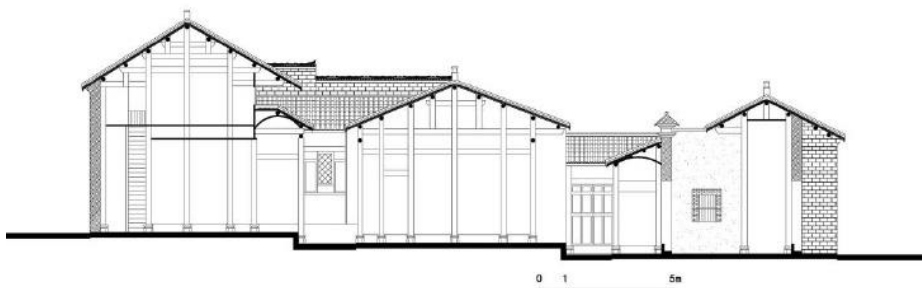
出典：陳楠『邵武伝統建築形態与文化研究』華僑大学修士論文、2012

実地調査ある

南平市邵武市和平鎮に位置する。第二・第三進は明末に建造され、第一進は清嘉慶年間（1796-1820 年）に建造された。今は老婆さん一人で住んでいる。



一階平面図

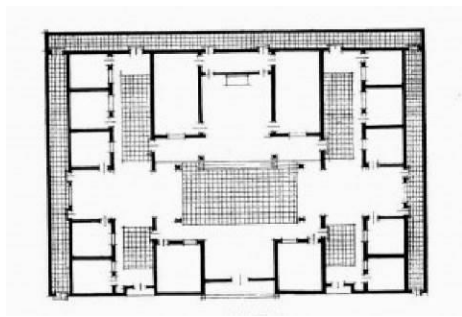


断面図

182 潮州弘農旧家

出典：陸琦『広東民居』中国建築工業出版社、2009、第 105 頁

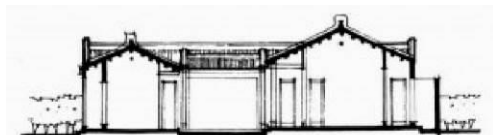
潮州市内に位置する。詳しい説明はない。



平面図



鳥瞰



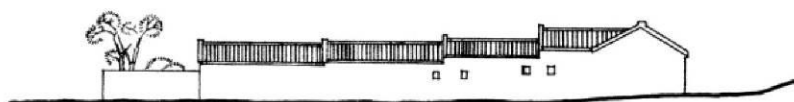
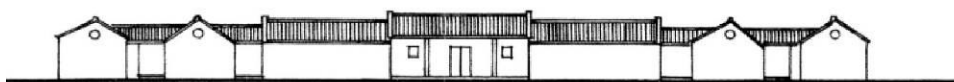
断面図



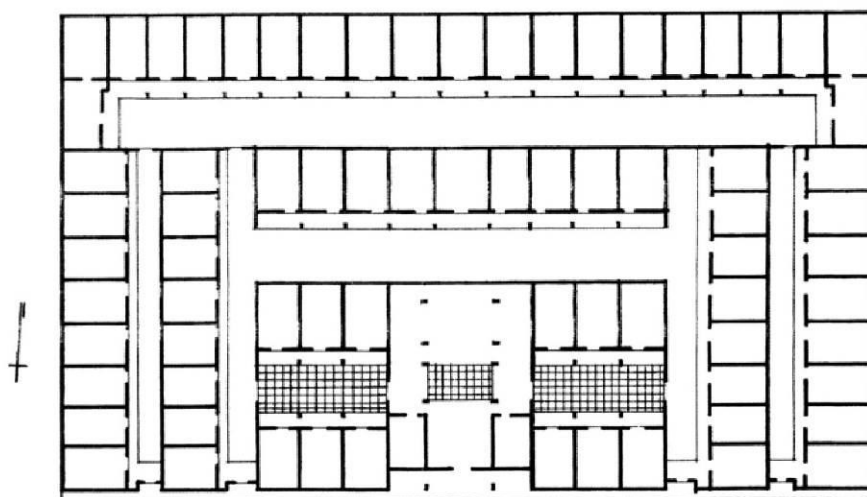
立面図

183 揭陽新亨北良ある住宅
詳しい説明はない。

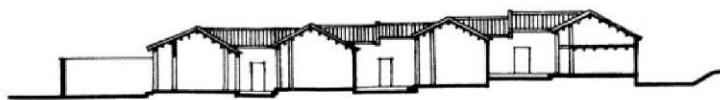
出典：陸琦『広東民居』中国建築工業出版社、2009、第106頁



立面図



一階平面図

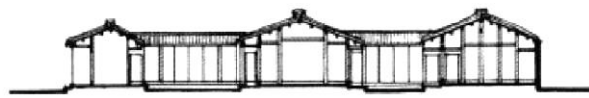


断面図

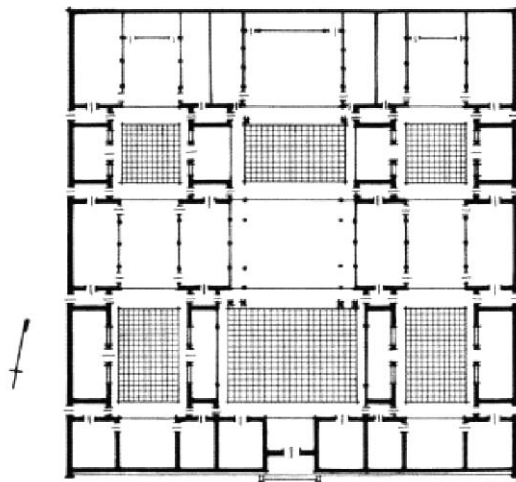
184 潮陽棉城ある住宅

出典：陸琦『広東民居』中国建築工業出版社、2009、第 106 頁

詳しい説明はない。



断面図

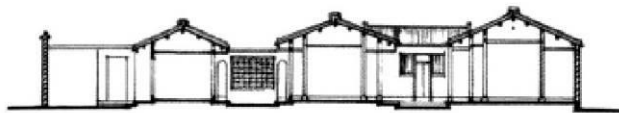


一階平面図

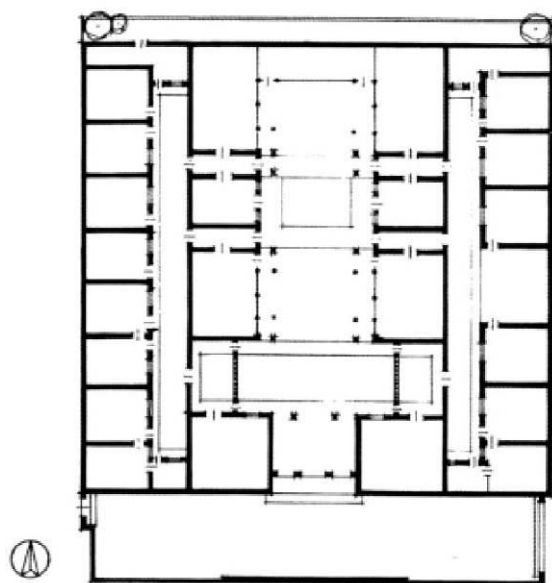
185 棉城義立庁ある住宅

出典：陸琦『広東民居』中国建築工業出版社、2009、第 107 頁

詳しい説明はない。



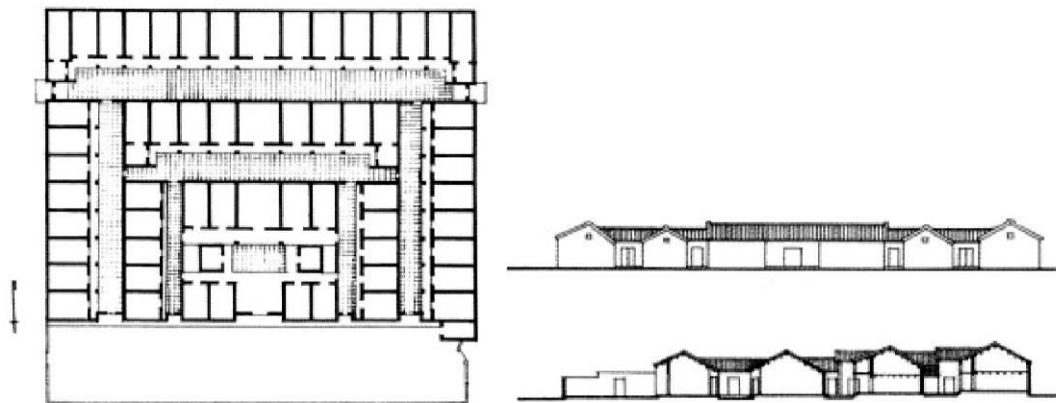
断面図



一階平面図

186 揭陽錫西郷ある住宅
詳しい説明はない。

出典：陸琦『広東民居』中国建築工業出版社、2009、第 108 頁



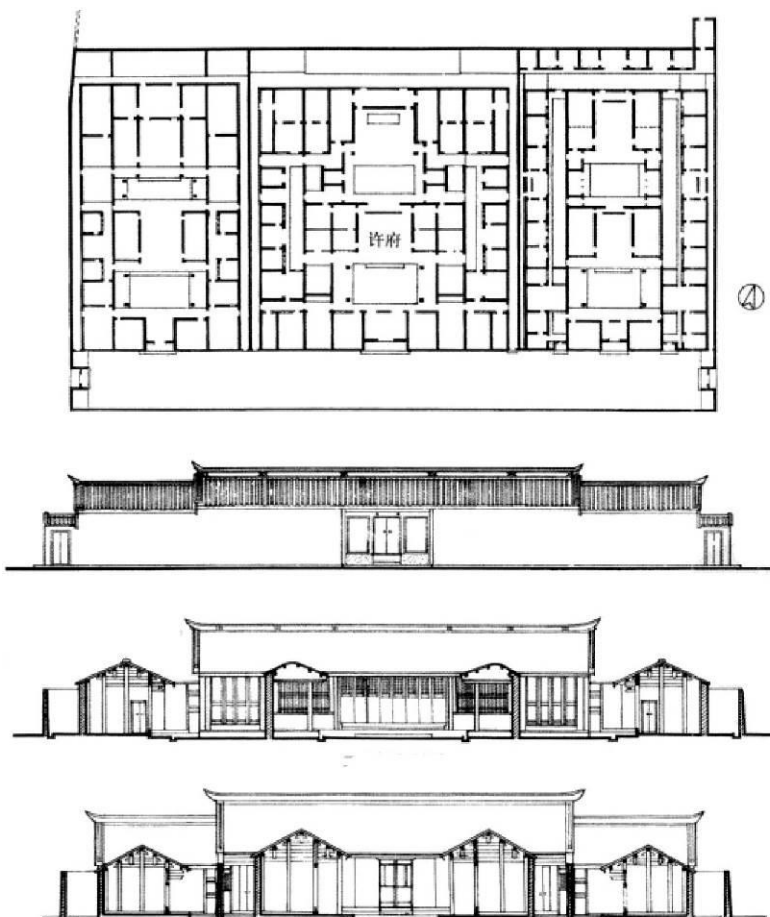
一階平面図

立面図と断面図

187 潮州許氏邸

出典：陸琦『広東民居』中国建築工業出版社、2009、第 109 頁

潮州市市区中山路葡萄巷東府埕 4 号に位置する。宋代に建造された伝承がある。敷地面積 2450 平米。今は民家資料館として利用する。



一階平面図

立面図

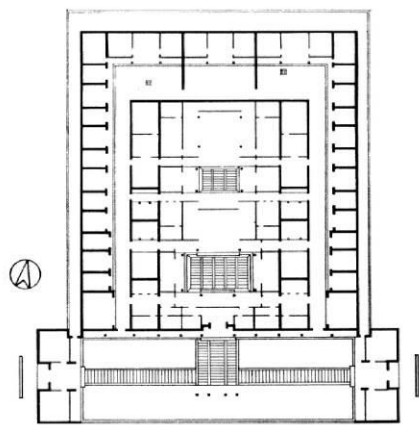
二進断面図

三進断面図

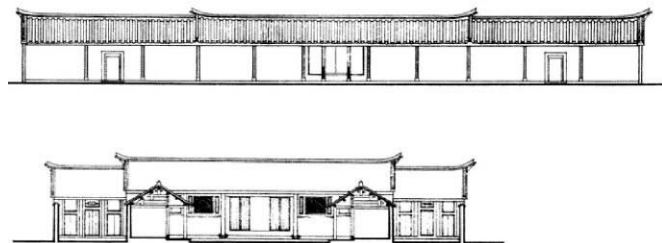
188 潮州三達尊黃府

出典：陸琦『廣東民居』中国建築工業出版社、2009、第 110 頁

潮州市市区西平路に位置する。明末に建造された。天啓二年進士・明南京礼部尚書・南明吏部尚書に務めた黄錦が退職後建造した住宅である。今も住宅として使用する。



一階平面図

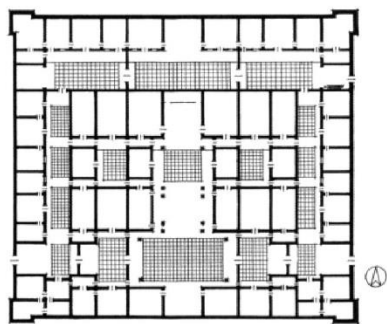


立面図と断面図

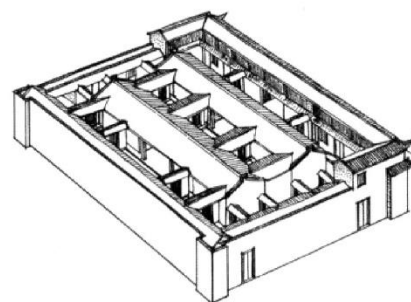
189 潮陽桃溪図庫

出典：陸琦『廣東民居』中国建築工業出版社、2009、第 111 頁

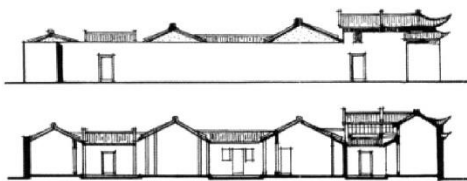
図庫は砦の意味である。



一階平面図



鳥瞰



側面図と縦断面図



横断面図

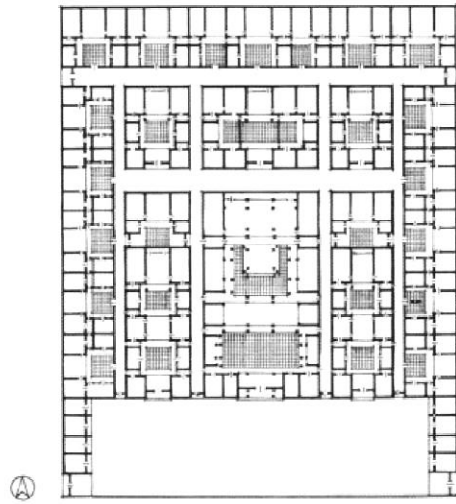
190 普寧洪陽新砦

出典：陸琦『廣東民居』中国建築工業出版社、2009、第 111 頁

詳しい説明はない。



立面図



一階平面図

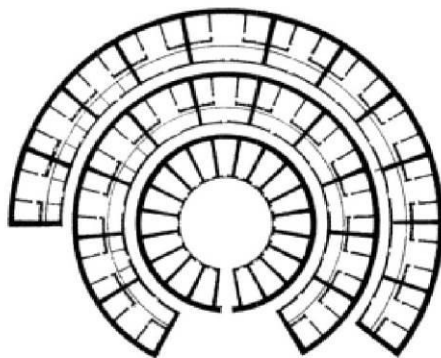
191 潮安坑門鄉楊厝厝

出典：陸琦『廣東民居』中国建築工業出版社、2009、第 114 頁

詳しい説明はない。



断面図



一階平面図

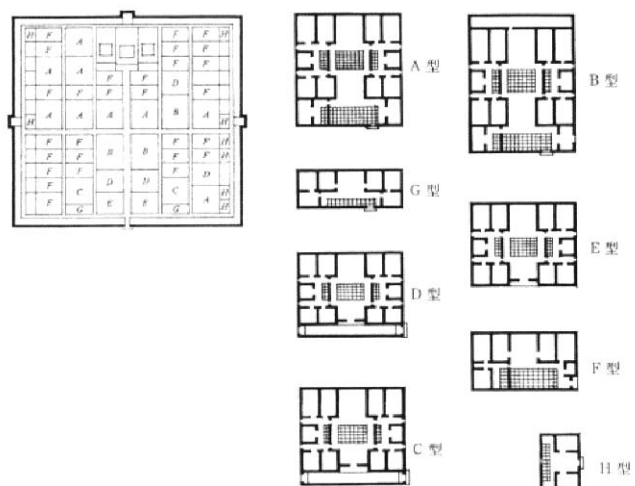
192 潮安象埔壑

出典：陸琦『廣東民居』中国建築工業出版社、2009、第 116 頁

潮州市潮安縣古巷鎮古一村に位置する。南宋景定三年（1262 年）創建。貿易のための住宅群である。長さ 162.40 メートル、奥行き 154.40 メートル、建築面積 25074.56 平米。陳氏一族が集住する。潮州市文物保護単位である。



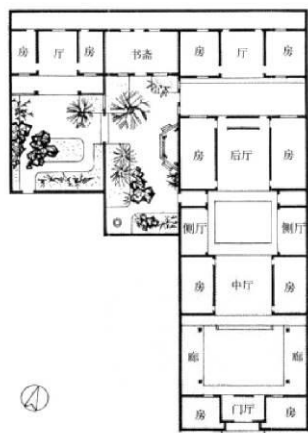
鳥瞰



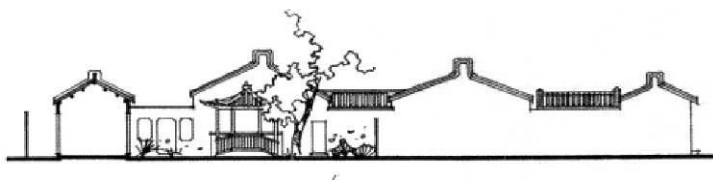
平面配置

193 潮州辜厝巷王宅
詳しい説明はない。

出典：陸琦『広東民居』中国建築工業出版社、2009、第 119 頁



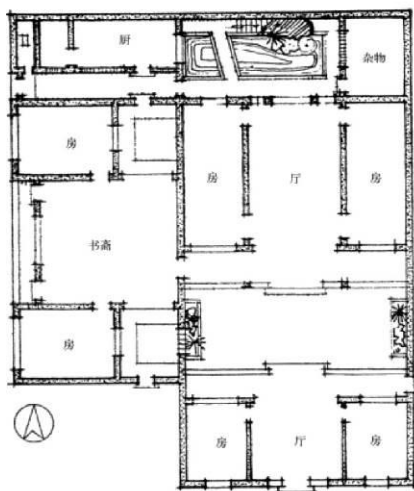
一階平面図



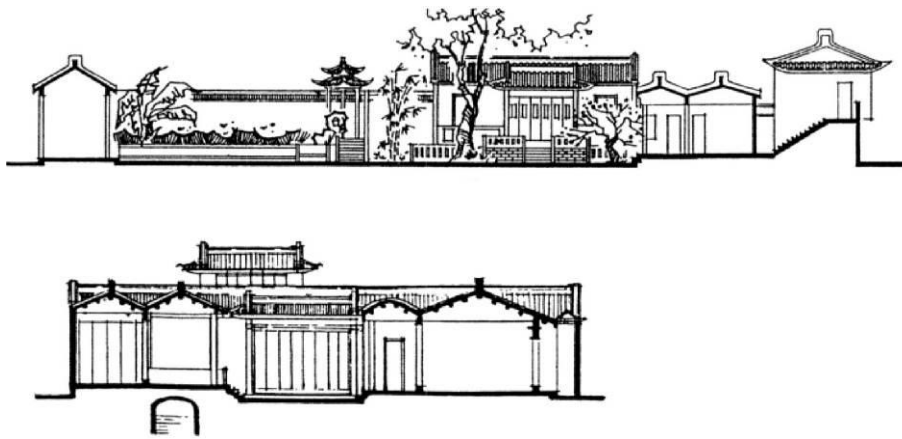
断面図

194 潮州王厝饒宅
詳しい説明はない。

出典：陸琦『広東民居』中国建築工業出版社、2009、第 119 頁



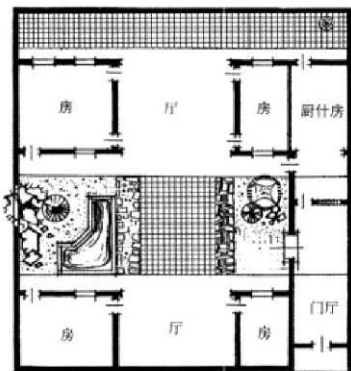
平面図



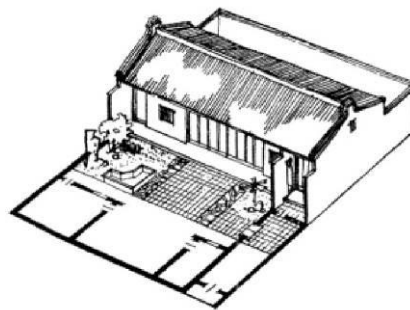
断面図

198 澄海樟林ある住宅
詳しい説明はない。

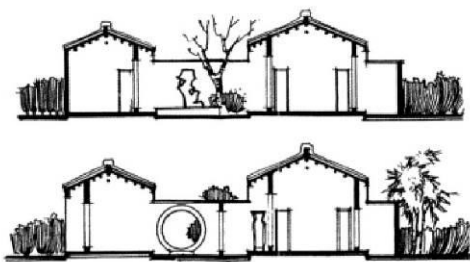
出典：陸琦『広東民居』中国建築工業出版社、2009、第 123 頁



平面図



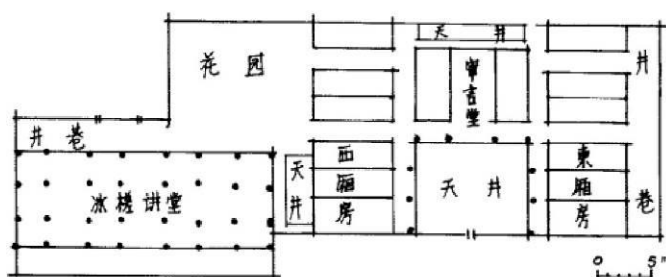
鳥瞰



断面図

199 寧波張煌言旧居
寧波市内に位置する。

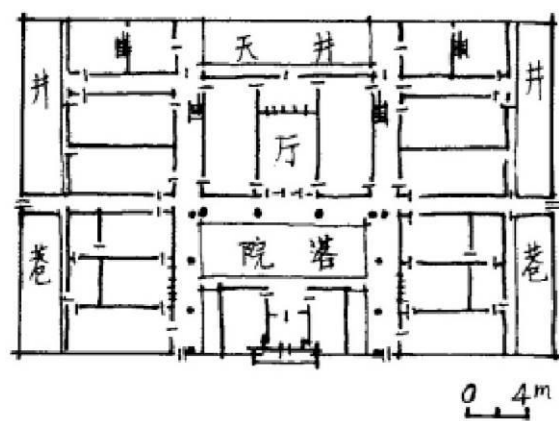
出典：丁俊清『浙江民居』中国建築工業出版社、2009、第 147 頁



一階平面図

200 寧波庄市鎮葛宅

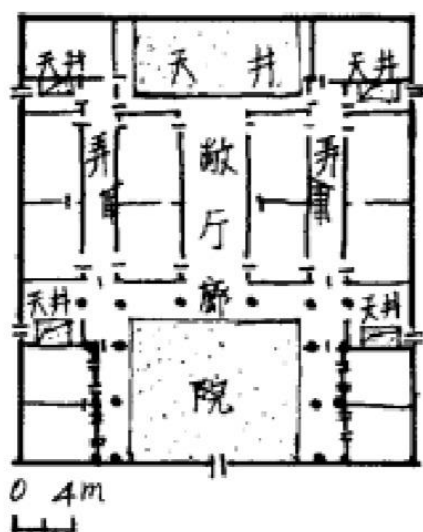
出典：丁俊清『浙江民居』中国建築工業出版社、2009、第 147 頁



一階平面図

201 庄市鎮大樹下ある住宅

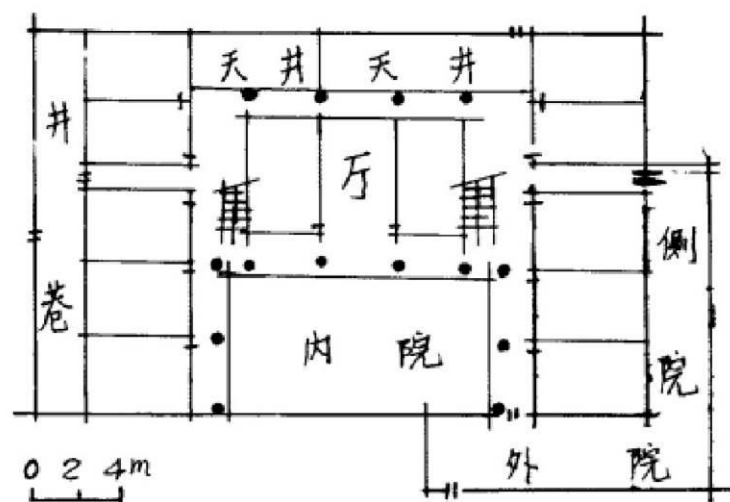
出典：丁俊清『浙江民居』中国建築工業出版社、2009、第 147 頁



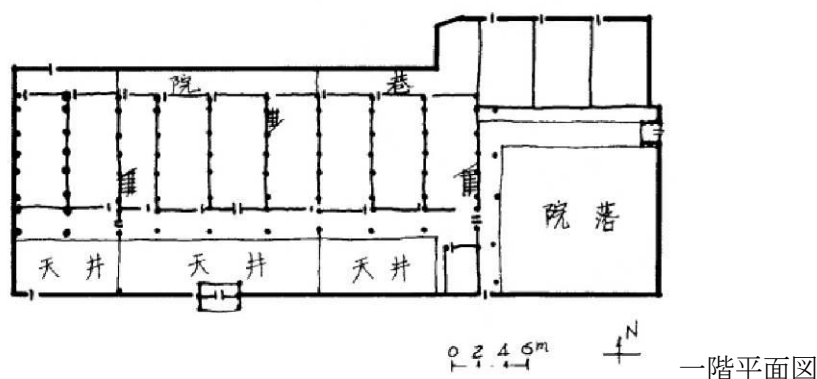
一階平面図

202 奉化岩頭毛氏旧居

出典：丁俊清『浙江民居』中国建築工業出版社、2009、第 147 頁



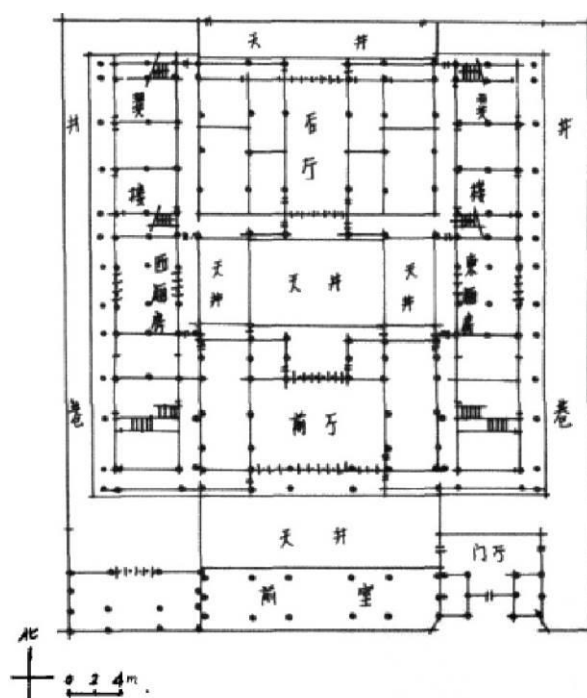
一階平面図



204 慈城甲第世家

出典：丁俊清『浙江民居』中国建築工業出版社、2009、第 153 頁

寧波市江北区慈城鎮に位置する。明代に建造された。明代嘉靖年間（1522-1566 年）進士錢照の住宅であった。現在は民家資料館として利用する。国家重点文物保护单位である。



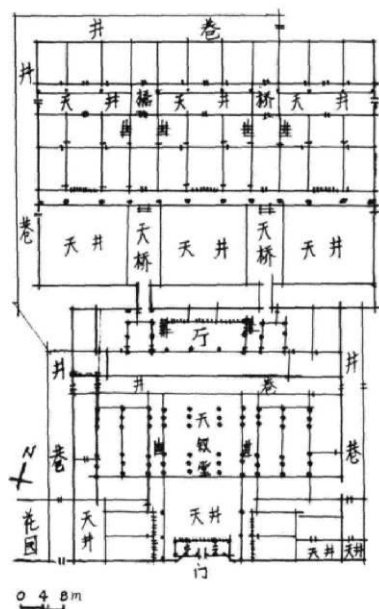
205 慈溪龍山鎮天叙堂

出典：丁俊清『浙江民居』中国建築工業出版社、2009、第 154 頁

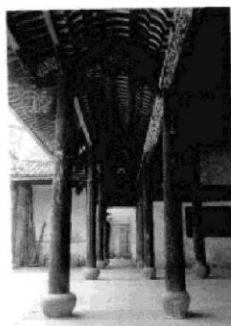
寧波市慈溪市龍山鎮に位置する。上海の銀行に務めた虞洽卿より 1916-1926 年に建造した。国家重点文物保护单位である。



中庭と大門のレンガ彫刻



一階平面図

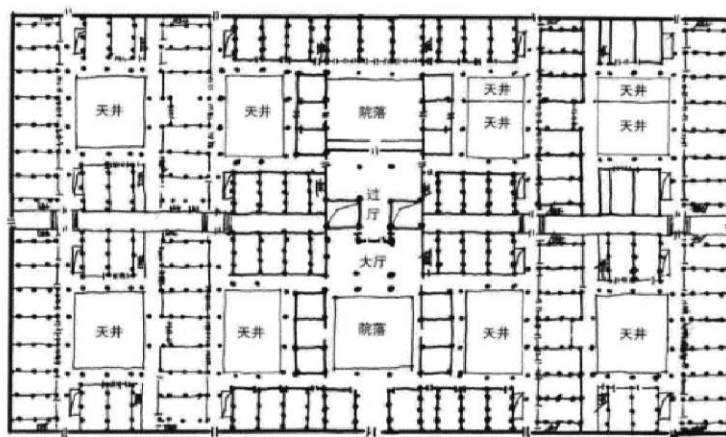


外観



206 諸暨斯宅斯盛居

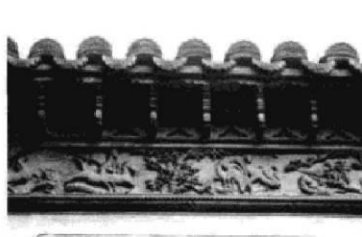
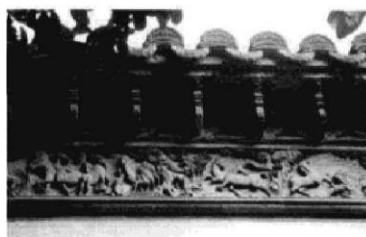
出典：丁俊清『浙江民居』中国建築工業出版社、2009、第 163 頁
紹興市諸暨市白湖鎮斯宅村に位置する。富商斯元儒より清乾隆年間（1736-1795 年）に建造された住宅である。敷地面積約 6900 平米。国家重点文物保护单位である。



平面



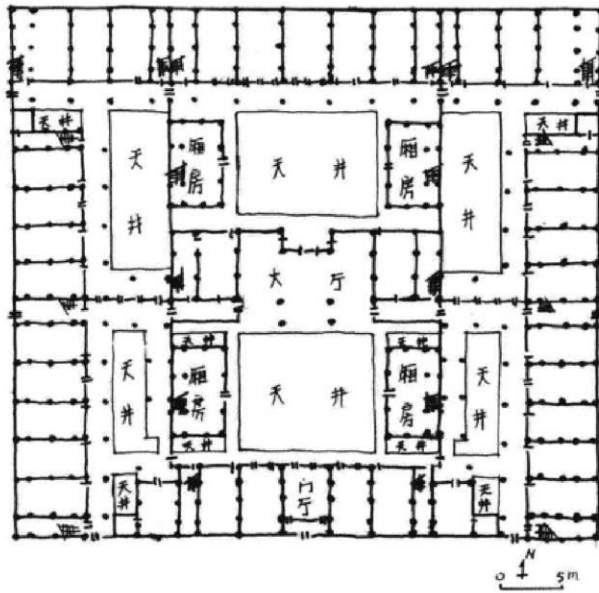
“於斯為盛”大門



207 諸暨斯宅發祥居

出典：丁俊清『浙江民居』中国建築工業出版社、2009、第 164 頁
紹興市諸暨市白湖鎮斯宅村に位置する。1790 年に建造された住宅である。国家重点文物

保護単位である。



一階平面図

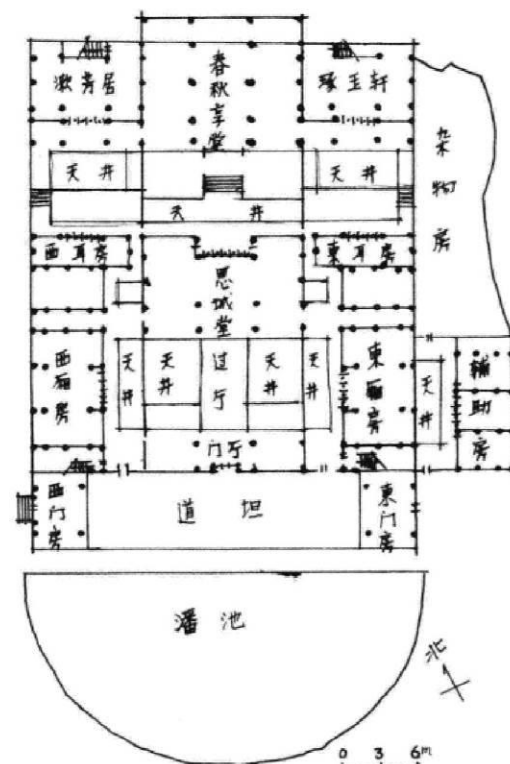


側門

208 諸暨斯宅華公別荘

出典：丁俊清『浙江民居』中国建築工業出版社、2009、第 164 頁

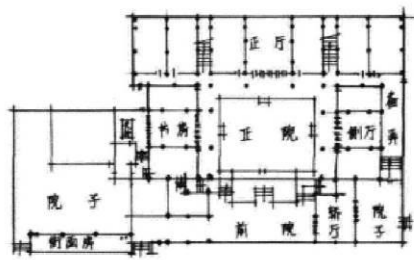
紹興市諸暨市白湖鎮斯宅村に位置する。敷地面積 2800 平米。詳しい説明はない。



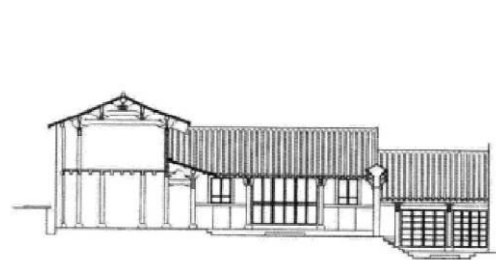
一階平面図

209 天台妙山巷懷德樓

出典：丁俊清『浙江民居』中国建築工業出版社、2009、第 165 頁



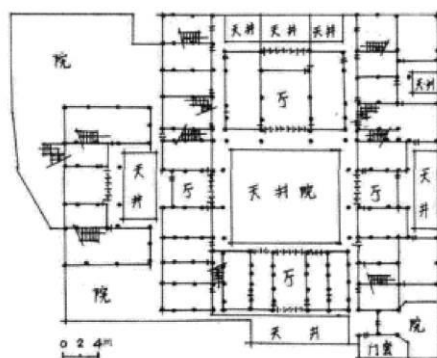
一階平面図



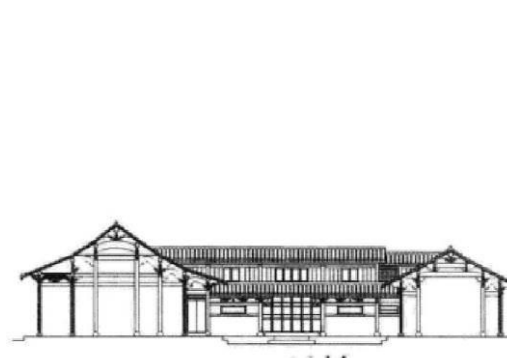
断面図

210 天台城関茂宝堂

出典：丁俊清『浙江民居』中国建築工業出版社、2009、第 165 頁



一階平面図

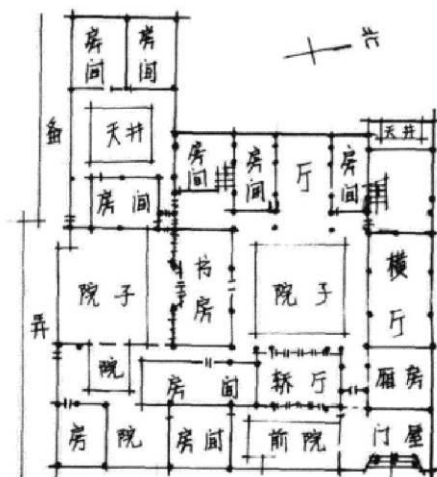


断面図

211 天台城関張文郁宅

出典：丁俊清『浙江民居』中国建築工業出版社、2009、第 168 頁

台州市天台县城関鎮赤城街道の華光巷に位置する。明末の工部侍郎張文郁（1578-1655 年）退職後に建造された。今も住宅として使用する。浙江省文物保護単位である。



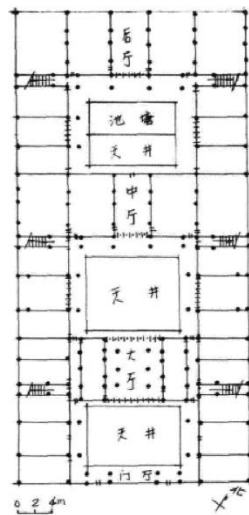
一階平面図



中庭

212 天台街頭余氏住宅

出典：丁俊清『浙江民居』中国建築工業出版社、2009、第 167 頁



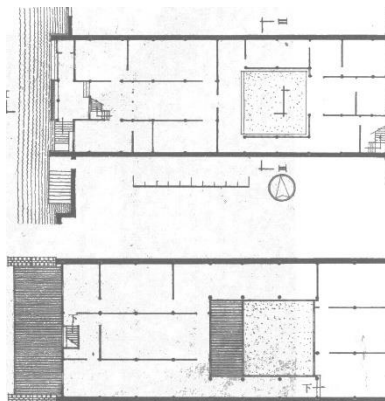
一階平面図



中庭

213 紹興倉橋直街施宅

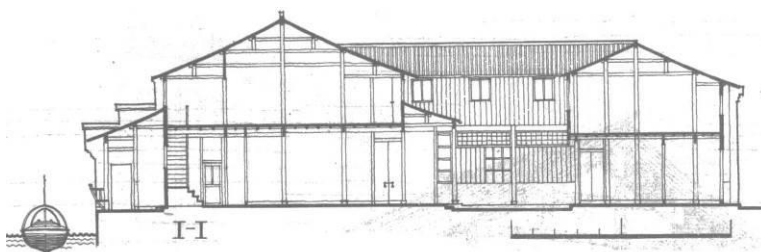
出典：中国建築技術発展中心歴史研究所『浙江民居』中国建築工業出版社、1984、第 248 頁
紹興市内の水辺住宅、詳しい説明はない。



平面図



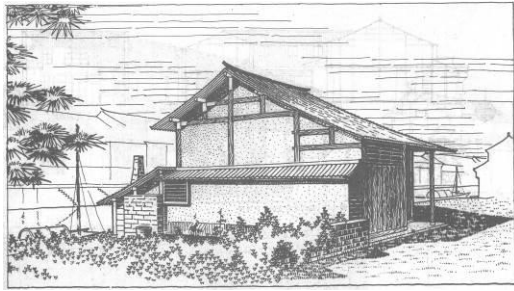
外観



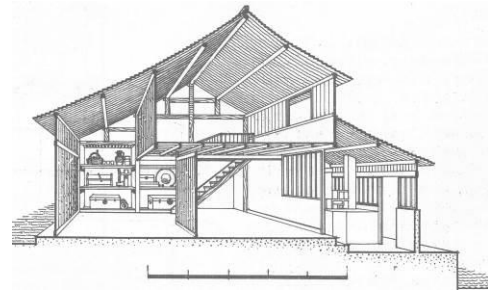
断面図

214 紹興題扇橋ある住宅

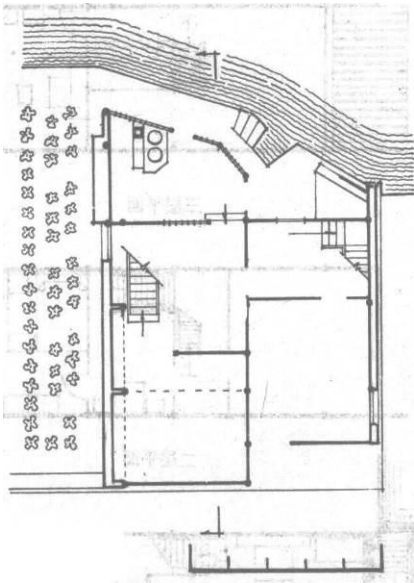
出典：中国建築技術発展中心歴史研究所『浙江民居』中国建築工業出版社、1984、第 250 頁
紹興市内に位置する。手工業者の住宅である。



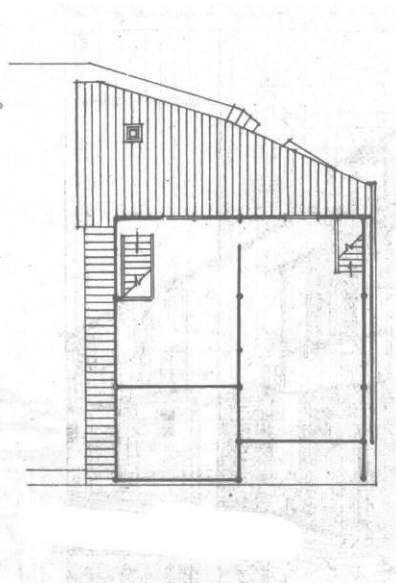
外觀



断面



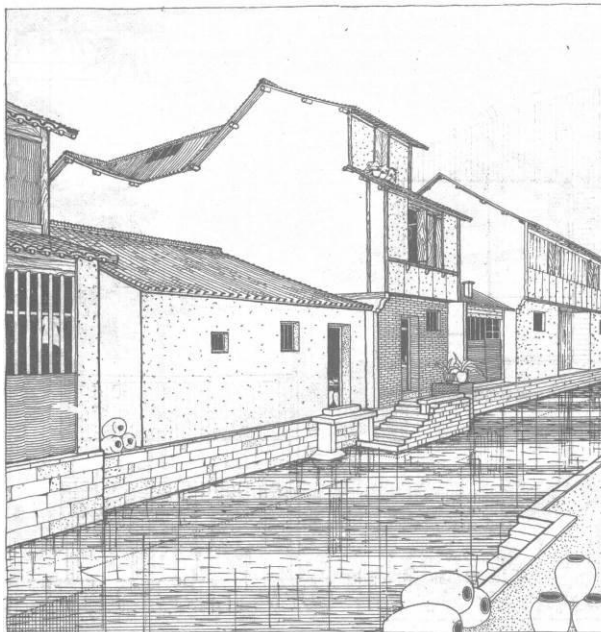
一階平面図



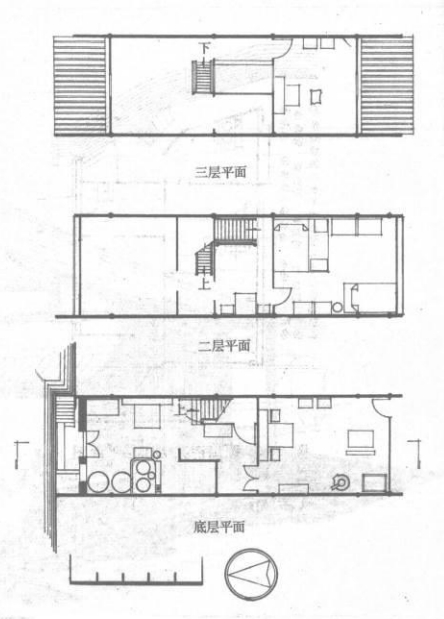
二階平面図

215 紹興下大路陳宅

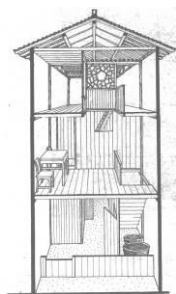
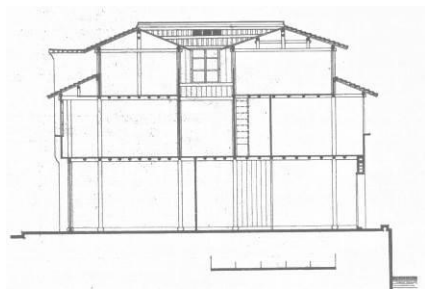
出典：中国建築技術發展中心歴史研究所『浙江民居』中国建築工業出版社、1984、第 252 頁



外觀



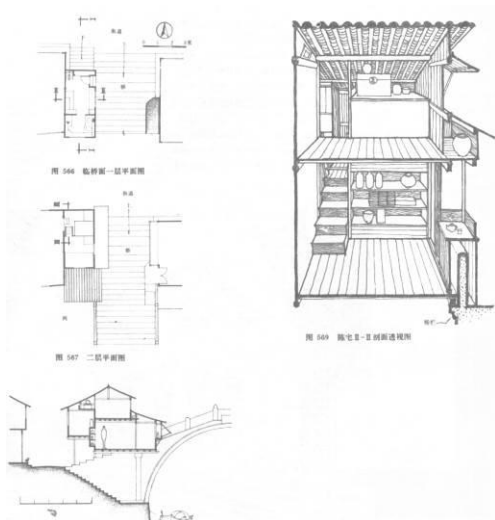
平面図



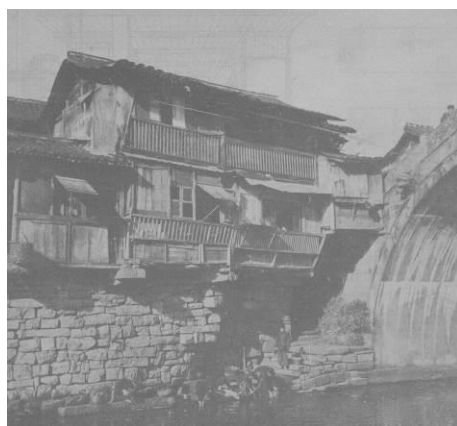
断面

216 鄞県鄞江鎮陳宅

出典：中国建築技術發展中心歴史研究所『浙江民居』中国建築工業出版社、1984、第 252 頁



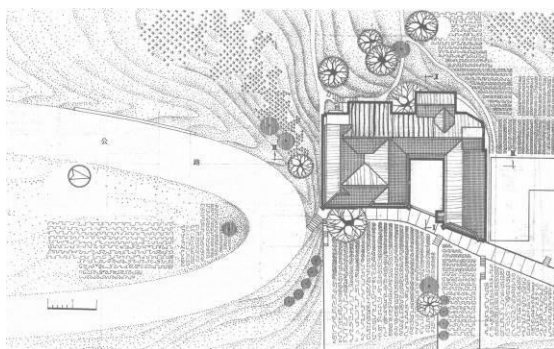
平面図と断面図



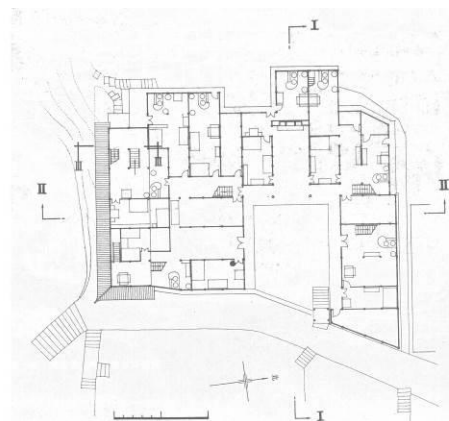
外観

217 黄岩黄土鎮虞宅

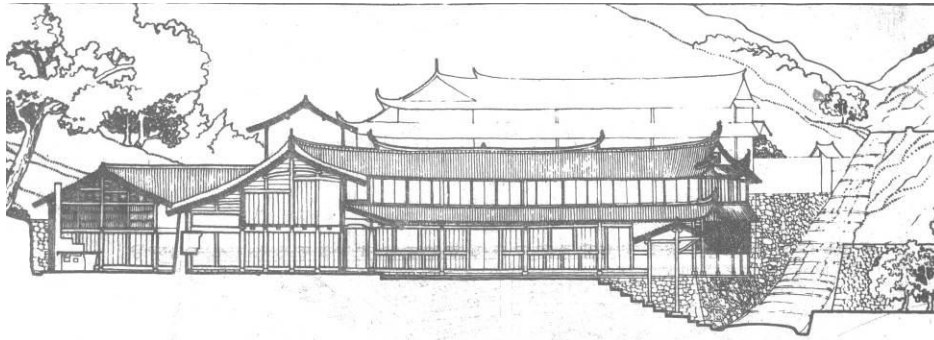
出典：中国建築技術發展中心歴史研究所『浙江民居』中国建築工業出版社、1984、第 270 頁
11 世帯が住んでいる（1980 年代の時）



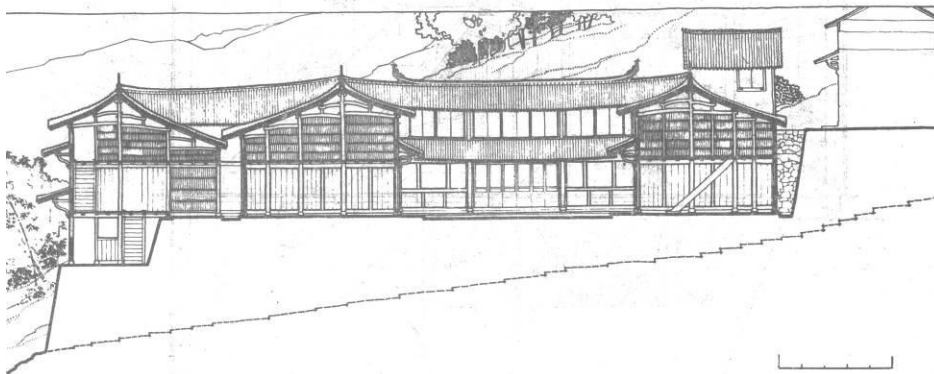
配置図



一階平面図



I - I 断面図



II - II 断面図 1



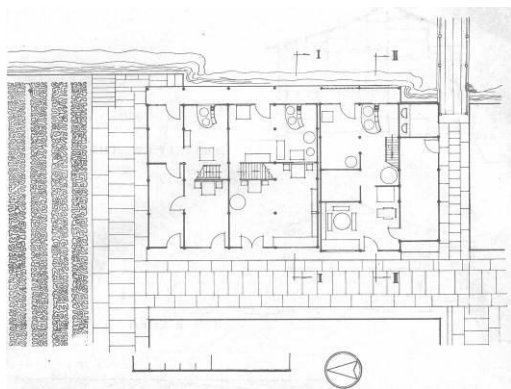
外観

218 黄岩天長街ある住宅

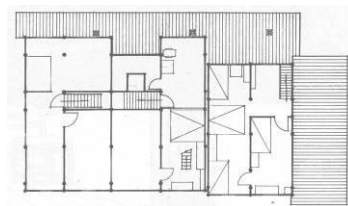
出典：中国建築技術発展中心歴史研究所『浙江民居』中国建築工業出版社、1984、第 279 頁
3 世帯が住んでいる（1980 年代の時）



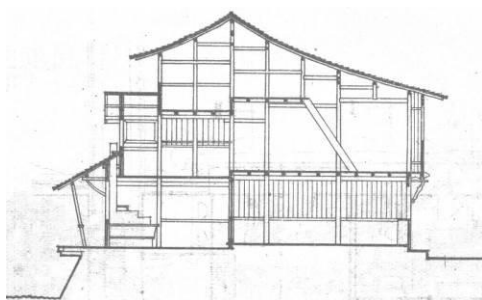
外観



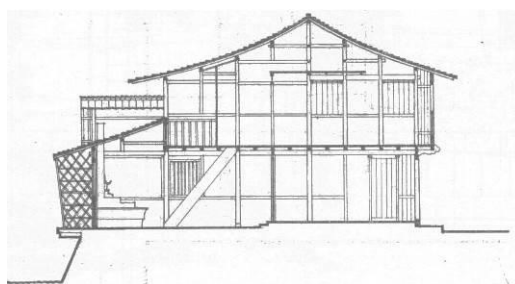
一階平面図



二階平面図



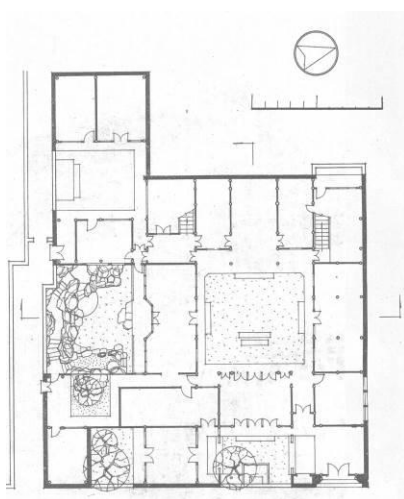
I - I 断面図



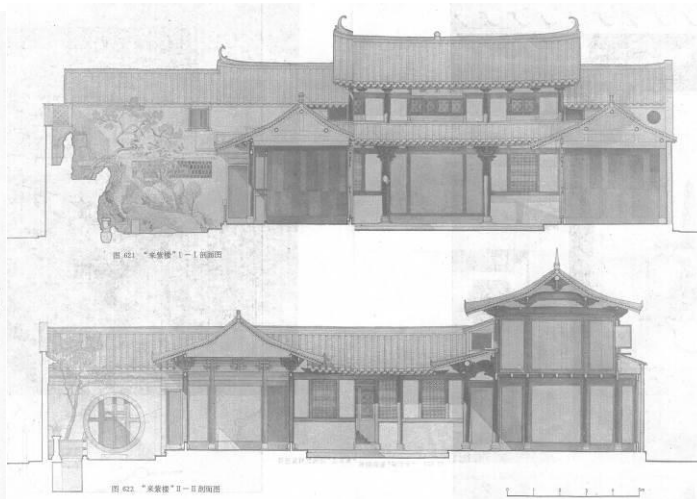
II - II 断面図

219 天台来紫楼

出典：中国建築技術発展中心歴史研究所『浙江民居』中国建築工業出版社、1984、第 286 頁
清代に建造された。



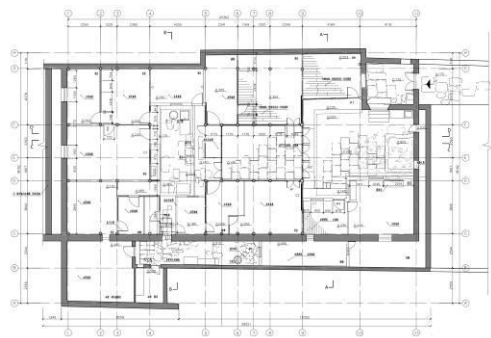
一階平面図



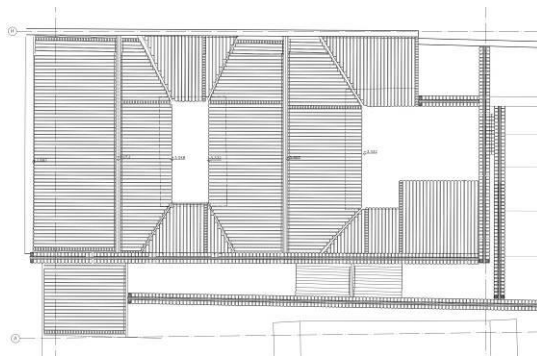
断面図

220 寧波月湖中營巷張宅

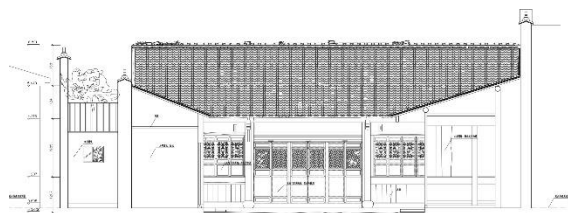
出典：同済大学建築系『寧波月湖歴史街区調査』未公開
寧波市海曙区月湖街道中營巷 20 号に位置する。清代に建造された。今は政府より再開発中。



一階平面図



屋上平面図

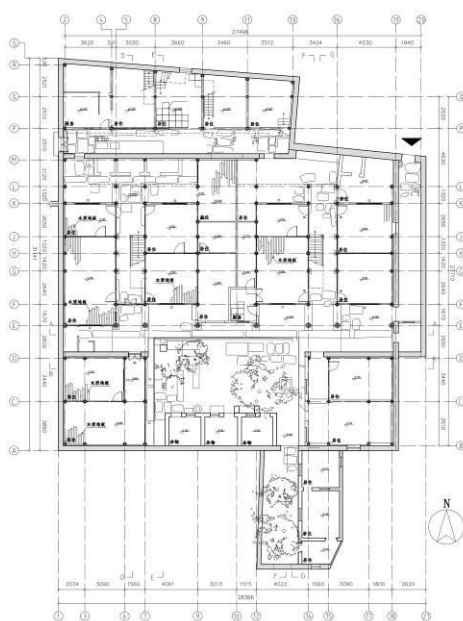


断面図

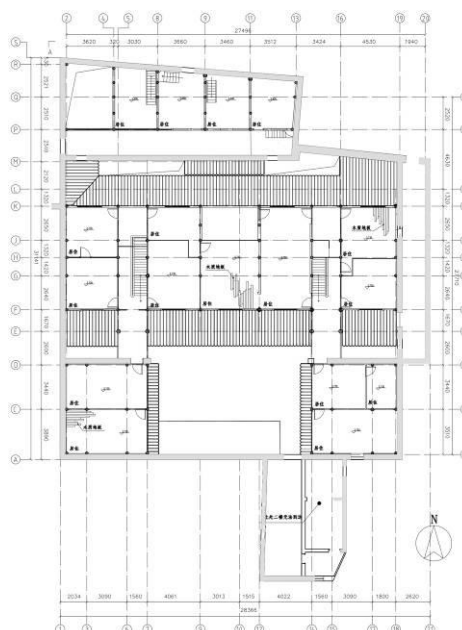
221 寧波月湖天一巷劉宅

出典：同済大学建築系『寧波月湖歴史街区調査』未公開

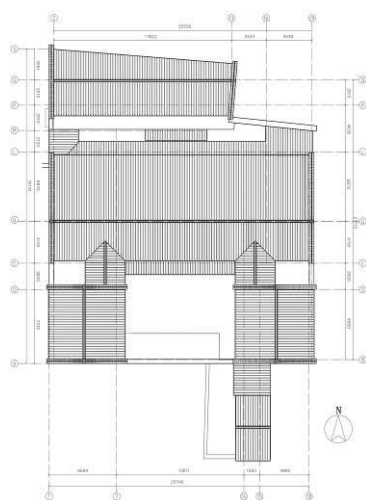
寧波市海曙区月湖街道天一巷 24 号に位置する。民国に建造された。敷地面積 962.6 平米、建築面積 1157.9 平米。今は政府より再開発中。



一階平面図



二階平面図



屋上平面図

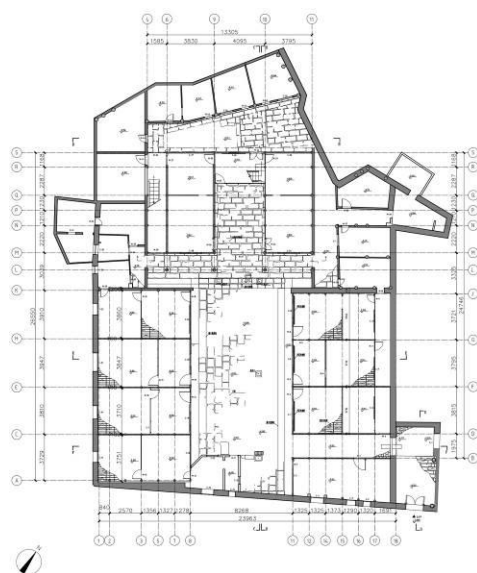


断面図

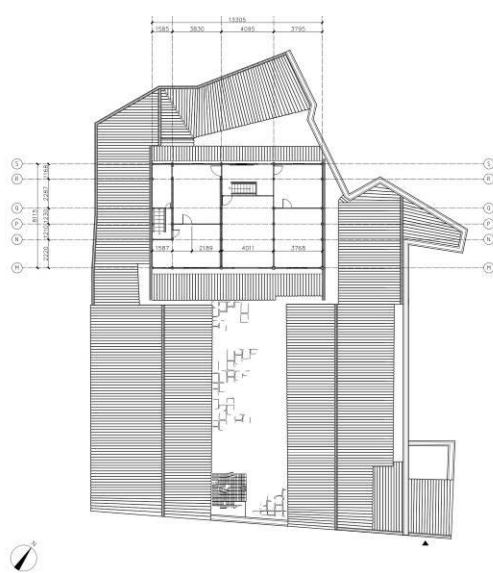
222 寧波月湖青石街聞宅

出典：同済大学建築系『寧波月湖歴史街区調査』未公開

寧波市海曙区月湖街道青石街 14 号に位置する。寧波の豪族張氏より清代に建造された。後は聞氏に購入した。敷地面積 1204 平米、建築面積 328.8 平米。今は政府より再開発中。



一階平面図



二階平面図

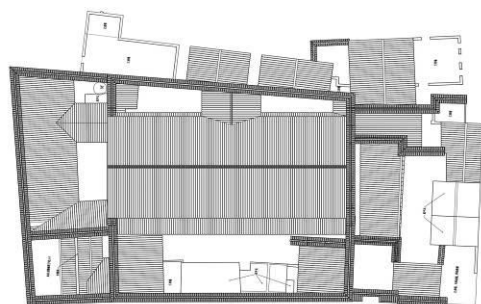


断面図

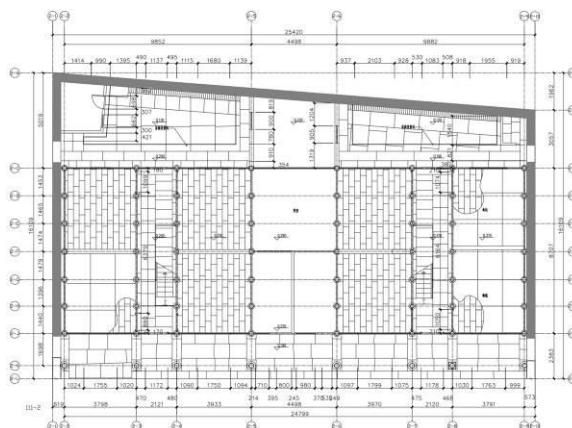
223 寧波月湖青石街張宅

出典：同濟大学建築系『寧波月湖歴史街区調査』未公開

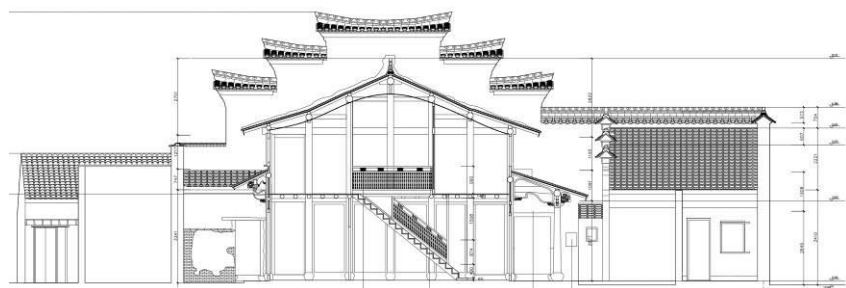
寧波市海曙区月湖街道青石街に位置する。寧波の豪族張氏より清代に建造された。敷地面積 932 平米、建築面積 796.5 平米。今は政府より再開発中。



屋上平面図



主屋平面図

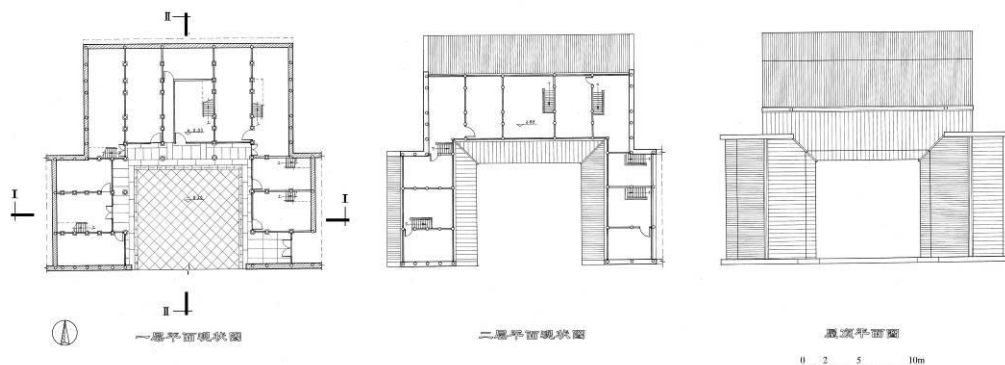


断面図

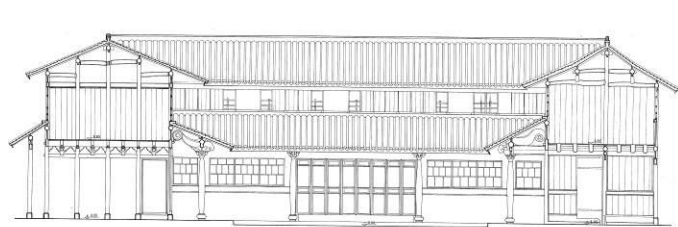
224 黄岩司庁巷汪宅

出典：同濟大学建築系『黄岩老街建築遺産』未公開

台州市黄岩区東城街道司庁巷 3-5 号に位置する。民国に建造された。



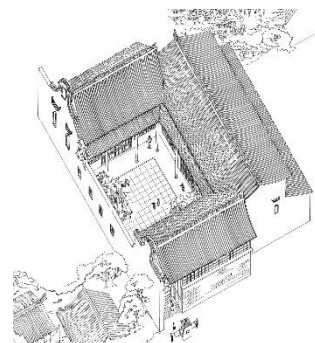
平面図



I - I 断面図

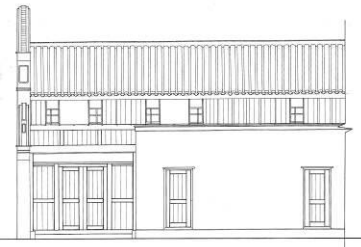
I-I 断面図
0 1 2m

鳥瞰



II - II 断面図

II-II 断面図



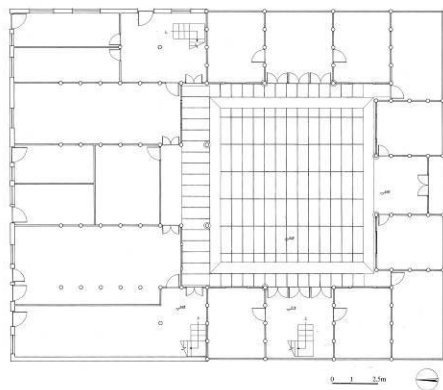
立面図

立面図
0 0.5 1 2m

225 黄岩司厅巷 16 号張宅

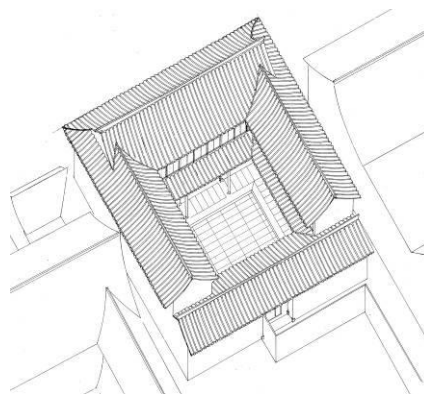
出典：同済大学建築系『黄岩老街建築遺産』未公刊

台州市黄岩区東城街道司厅巷 16 号に位置する。清末に建造された。

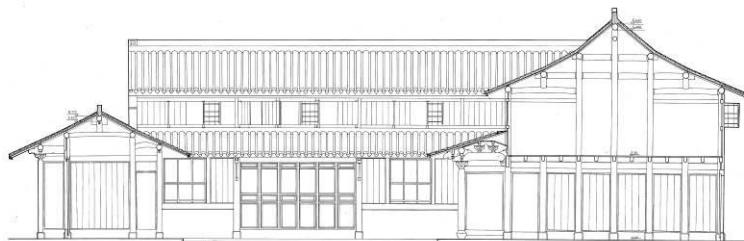
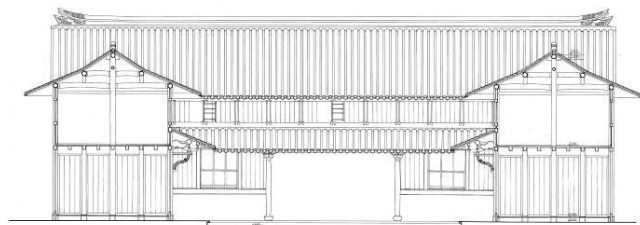


一階平面図

0 1 2m



鳥瞰

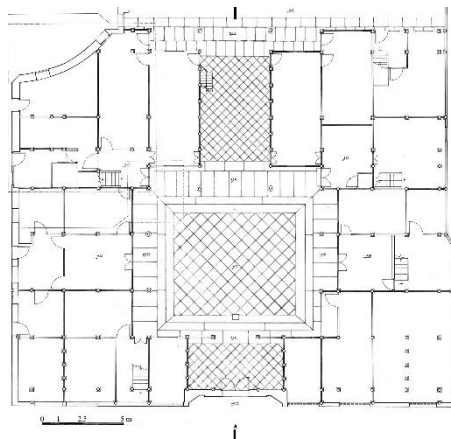


断面図

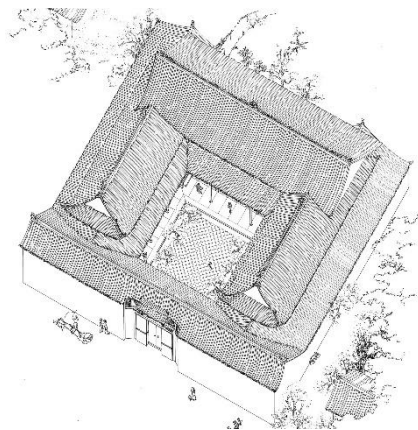
226 黄岩司庁巷 32 号洪宅

出典：同濟大学建築系『黄岩老街建築遺産』未公開

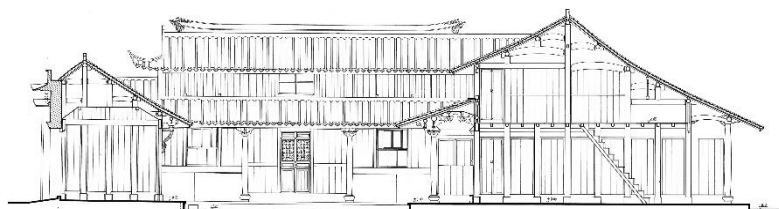
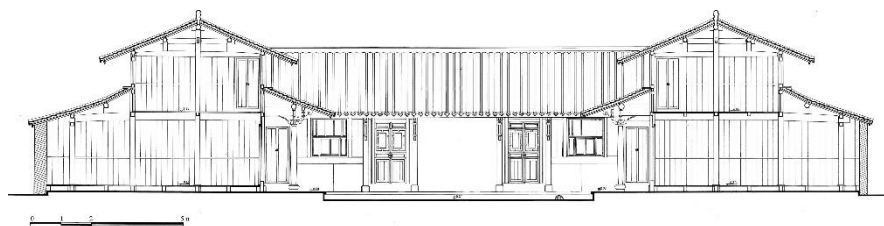
台州市黄岩区東城街道司庁巷 32 号に位置する。清代に建造された。



一階平面図



鳥瞰



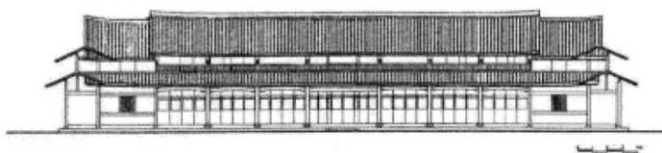
断面図

227 永嘉ダイ頭陳宅

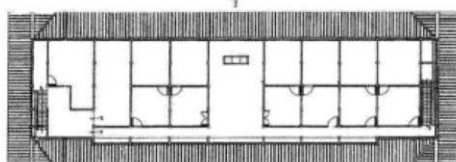
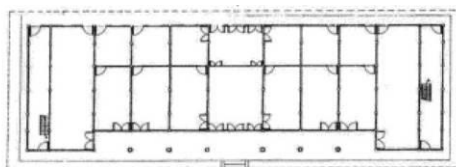
出典：丁俊清『浙江民居』中国建築工業出版社、2009、第 219 頁

実地調査ある

温州市永嘉県大若岩鎮ダイ（埭）頭村に位置する。清末に建造された。今も住宅として使用する。



立面図



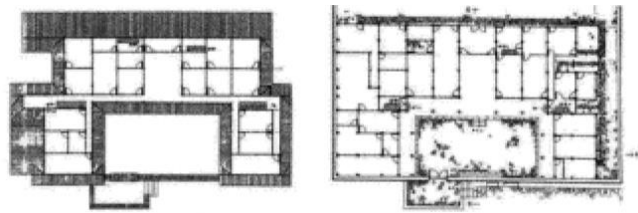
平面図



外観（本人撮影）

228 泰順上洪黃宅

出典：丁俊清『浙江民居』中国建築工業出版社、2009、第 219 頁



平面図

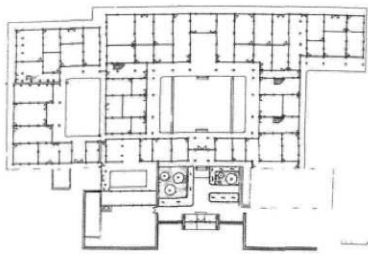


断面図

229 平陽順溪侯邸

出典：丁俊清『浙江民居』中国建築工業出版社、2009、第 221 頁

清代に建造された。国家重点文物保護単位である。



一階平面図



立面図

230 平陽騰蛟蘇宅

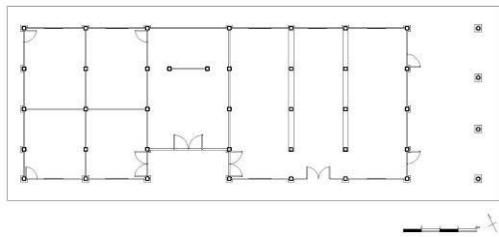
出典：丁俊清『浙江民居』中国建築工業出版社、2009、第 221 頁

実地調査ある

温州市平陽県騰蛟鎮に位置する。民国に建造された。数学者蘇歩青の住宅であった。今は蘇歩青の記念館として利用する。



外観（本人撮影）



平面図（本人作図）

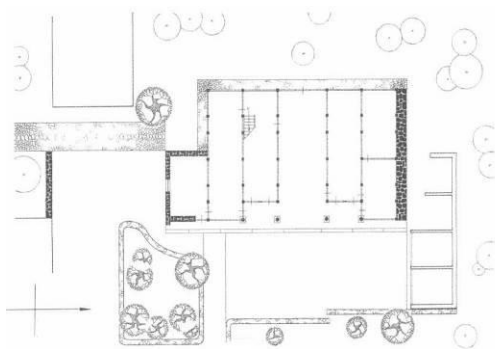


立面図と断面図

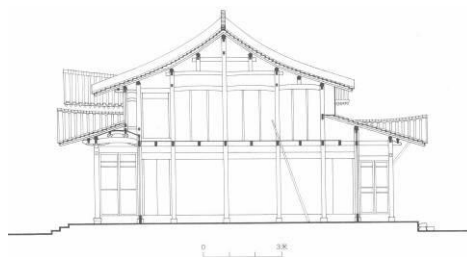
231 永嘉芙蓉村北甲宅

出典：李秋香『浙江民居』清華大学出版社、2010、第 11 頁

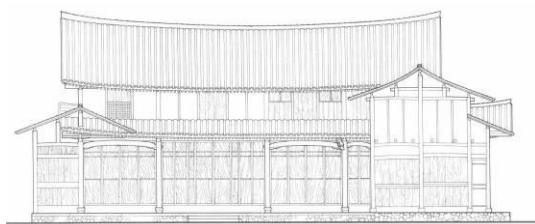
温州市永嘉県岩頭鎮芙蓉村に位置する。詳しい説明はない。



一階平面図



断面図

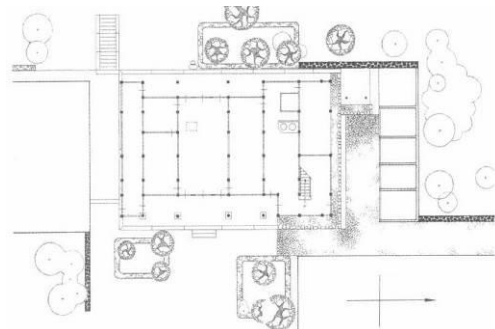


立面図

232 永嘉芙蓉村北乙宅

出典：李秋香『浙江民居』清華大学出版社、2010、第 12 頁

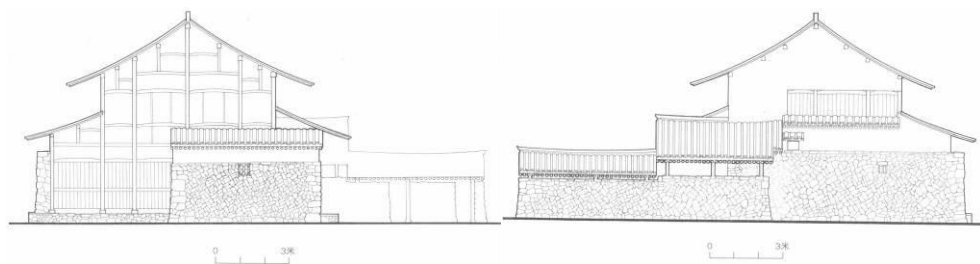
温州市永嘉県岩頭鎮芙蓉村に位置する。詳しい説明はない。



一階平面図



立面図

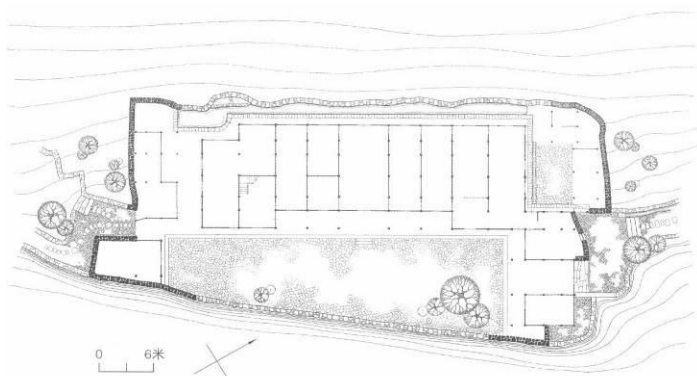


側面図

233 永嘉水雲十五間宅

出典：李秋香『浙江民居』清華大学出版社、2010、第 20 頁

温州市永嘉県大若岩鎮水雲村に位置する。建造年代は清の咸豊年間（1850-1861 年）。当初の持ち主は貢生（科挙身分の一種）陳福であった。



一階平面図

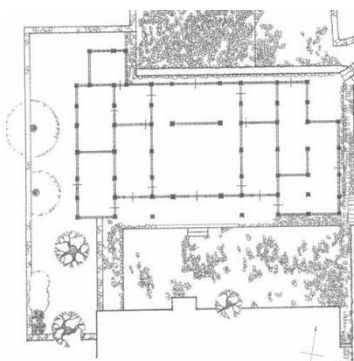


側面図

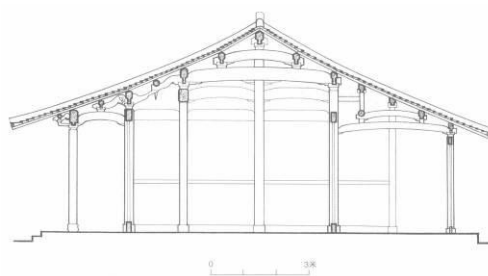
234 永嘉花壇「宋宅」

出典：李秋香『浙江民居』清華大学出版社、2010、第 23 頁

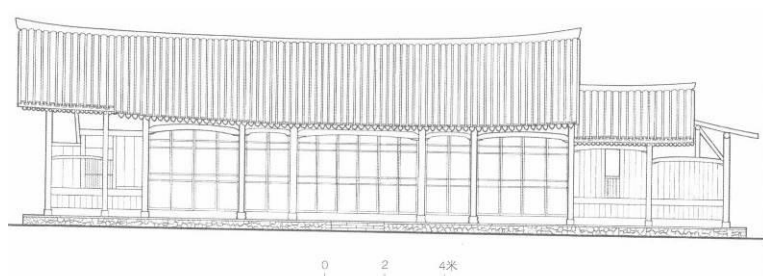
温州市永嘉県花壇郷花壇村に位置する。宋代に建造された伝説がある。



平面図



断面図



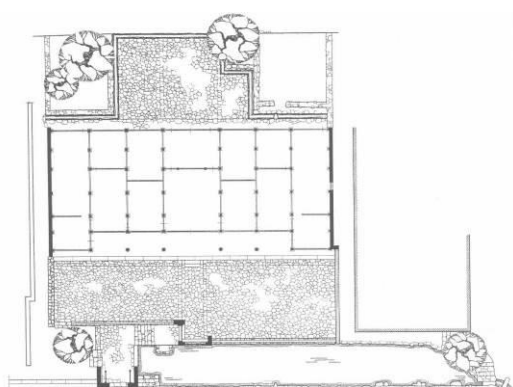
立面図

235 永嘉ダイ頭松風水月宅

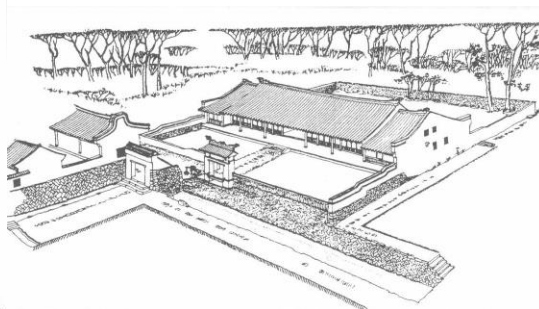
出典：李秋香『浙江民居』清華大学出版社、2010、第 25 頁

実地調査ある

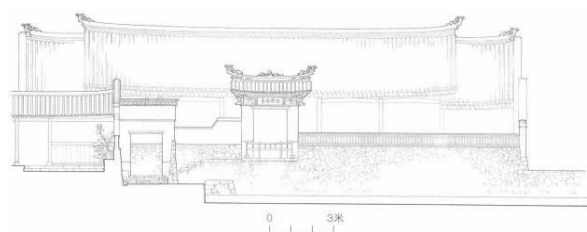
温州市永嘉県大若岩鎮ダイ（埭）頭村に位置する。清代に建造された。今も住宅として使用し、お婆さん一人で住んでいる。



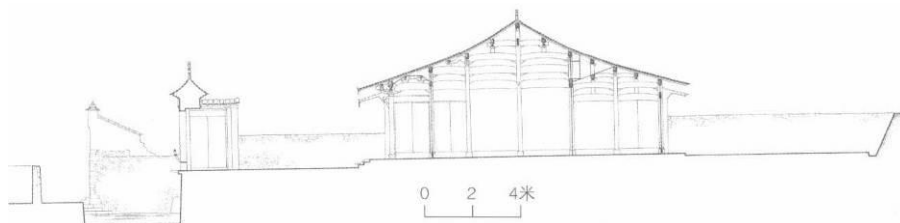
平面図



鳥瞰



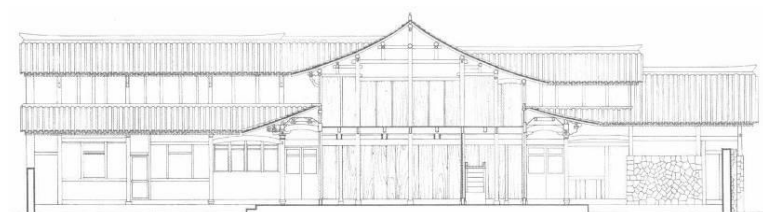
立面図



断面図

236 永嘉蓬溪村謝宅

出典：李秋香『浙江民居』清華大学出版社、2010、第 35 頁



立面図



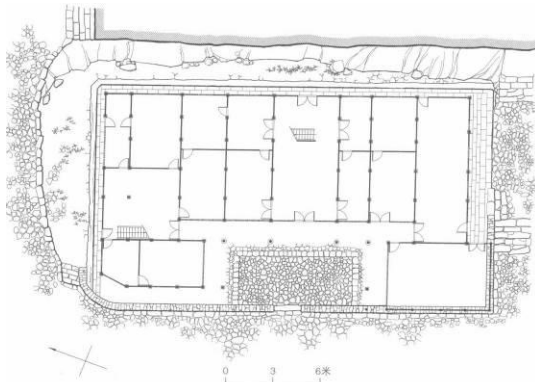
一階平面図

237 永嘉林坑毛步松宅

出典：李秋香『浙江民居』清華大学出版社、2010、第 37 頁

実地調査ある

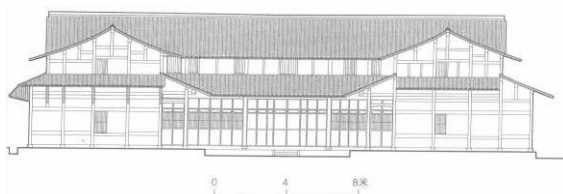
温州市永嘉県張溪郷林坑村に位置する。近年に修復をした、扉・窓・内装を新しくなった。今は民宿旅館として利用する。



一階平面図



外観（本人撮影）



立面図



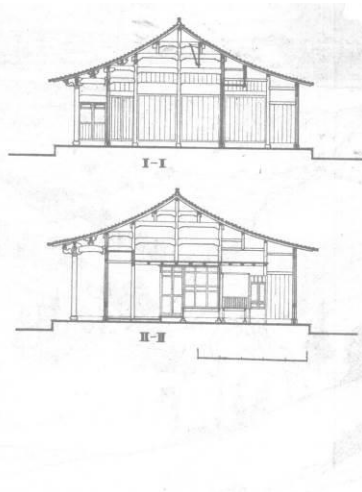
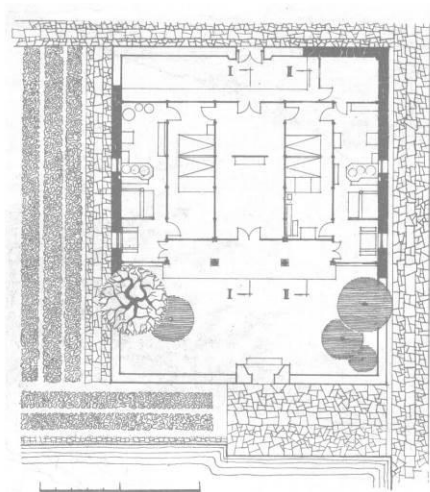
断面図

238 永嘉東占塢黄宅

出典：中国建築技術発展中心歴史研究所『浙江民居』中国建築工業出版社、1984、第 268 頁
2 世帯が住んでいる（1980 年代）詳しい説明はない。



外観

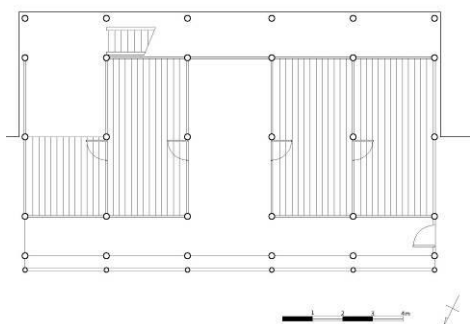


平面図と断面図

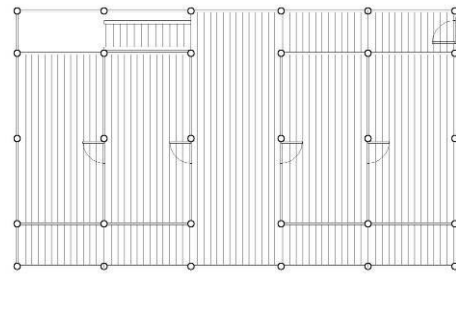
239 景寧小佐巖宅

実地調査

麗水市景寧シエ族自治県大漈郷小佐村に位置する。民国末に建造された。斜面地に位置する2階建ての住宅で、今は巖氏1世帯が住んでいる。



一階平面図



二階平面図



外観



二階軒

240 景寧桃源ある住宅

実地調査

麗水市景寧シエ族自治県大漈郷桃源村に位置する。調査の時修復工事中で、大工によると、200年以上の歴史お持っている住宅である。二階建ての三合院である。



外観



二階側面回廊



入口

241 文成梧溪富宅

実地調査

温州市文成県西坑鎮梧溪村に位置する。清末に建造された。文成県文物保護単位である。規模が大きいで、今は富氏一族が集住する。



第一進正房



大門



第二進



第一進

242 永嘉林坑ある住宅

実地調査

温州市永嘉県張溪郷林坑村に位置する。二階建ての一字式長屋で、廃棄された空き家である。



外観



前軒

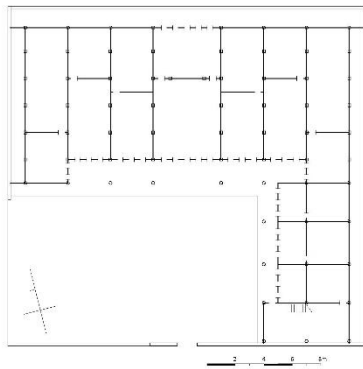


側面

243 永嘉ダイ頭陳賢楼宅

実地調査

温州市永嘉県大若岩鎮ダイ（埭）頭村に位置する。清代に建造された。今も住宅として使用し、陳氏と母親二人で住んでいる。



一階平面図



外観



梁構造



庁堂



244 樂清黄檀洞ある住宅

実地調査

温州市樂清市城北郷黄檀洞村に位置する。一階建ての三合院住宅である。



外観



梁構造

245 平陽坡南黄宅

実地調査

温州市平陽県昆陽陳坡南街 647-655 号に位置する。一階建ての一字式長屋である。清代に建造された。敷地面積 330 平米。

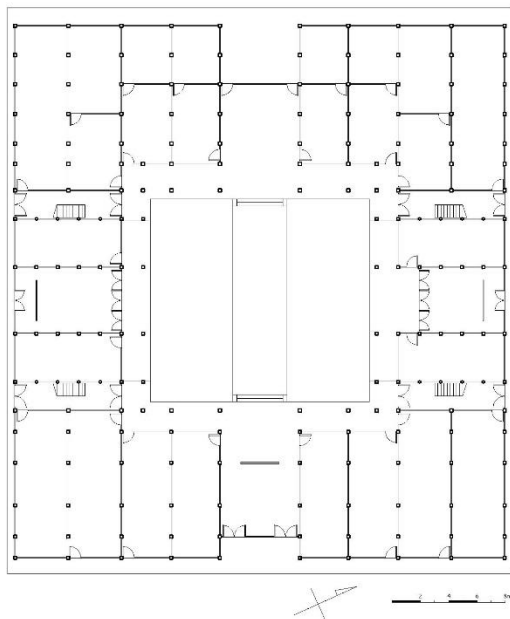


外観

246 平陽青街李宅

実地調査

温州市平陽県青街鎮に位置する。李氏一族の分家で、「李氏二分大屋」と称す。清乾隆年間（1736-1795 年）に建造された。四面庁の四合院である。今も李氏一族が集住している。



一階平面図



中庭



外観



側面



梁構造

247 蒼南碗窯朱宅

実地調査

温州市蒼南県橋墩鎮碗窯村に位置する。村は焼き物製造業として盛んでいた。清代に建造された。一字式長屋である。



外観

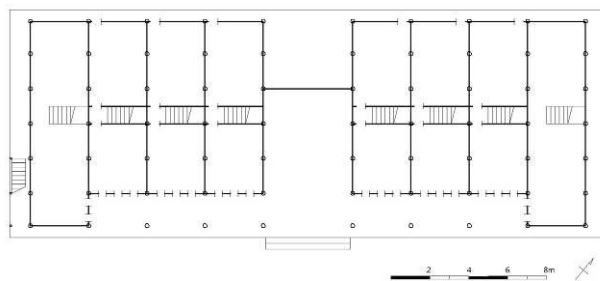


序堂

248 泰順百福岩周宅

実地調査

温州市泰順県雅陽鎮百福岩村に位置する。家の人によると 160～180 年の歴史を持っている一字式住宅である。今は老婆さん一人で住んでいる。



一階平面図



外観



一階序堂



二階祖堂

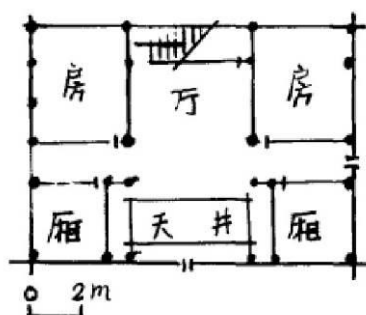


一階前軒

249 龍遊丁家ある住宅

出典：丁俊清『浙江民居』中国建築工業出版社、2009、第 198 頁

詳しい説明はない。

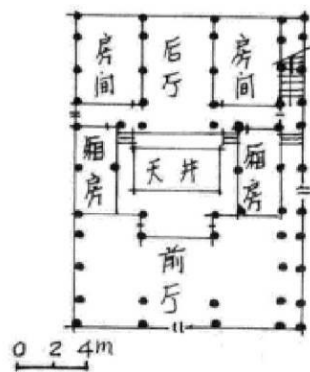


一階平面図

250 龍遊若塘丁宅

詳しい説明はない。

出典：丁俊清『浙江民居』中国建築工業出版社、2009、第 199 頁

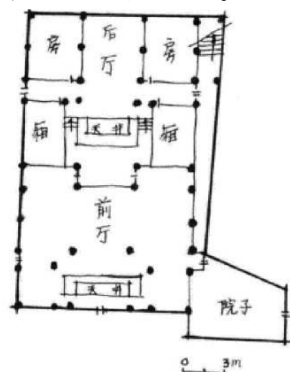


一階平面図

251 龍遊脈元ゴン宅

詳しい説明はない。

出典：丁俊清『浙江民居』中国建築工業出版社、2009、第 200 頁



一階平面図

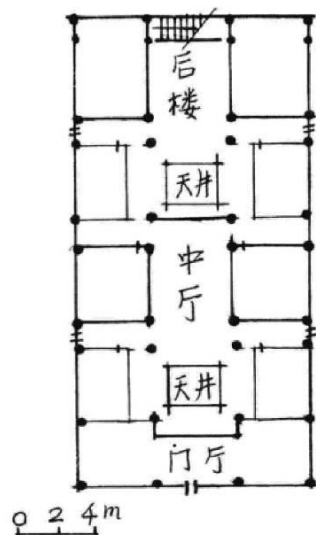


外観

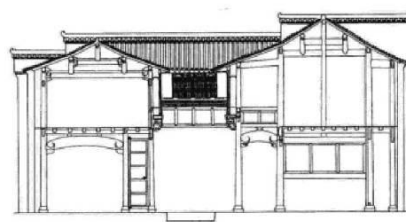
252 蘭溪長楽村望雲楼

明代に建造された。詳しい説明はない。

出典：丁俊清『浙江民居』中国建築工業出版社、2009、第 200 頁



一階平面図



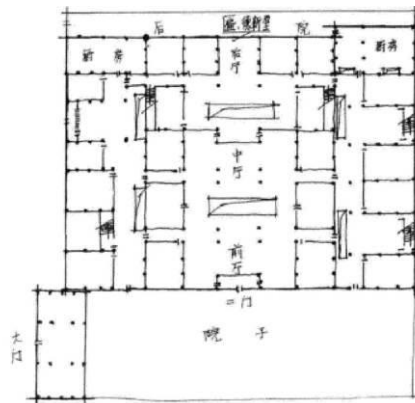
断面図

253 龍遊溪口傅家大院

出典：丁俊清『浙江民居』中国建築工業出版社、2009、第 201 頁

敷地面積 1070 平米。

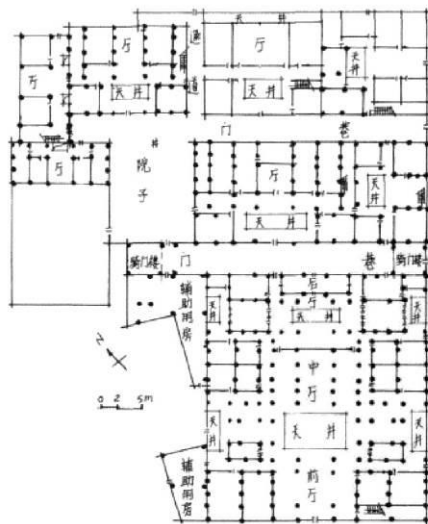
一階平面図



254 松陽望松黃家大院

出典：丁俊清『浙江民居』中国建築工業出版社、2009、第 201 頁

長さ 52.5 メートル、奥行き 70 メートル。建築面積約 1 万平米である。



一階平面図

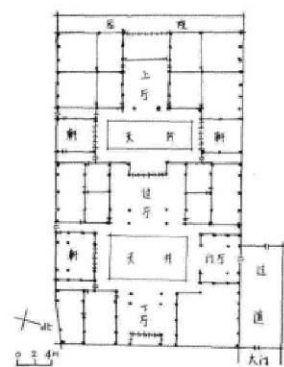


門巷

255 江山廿八都丁家大院

出典：丁俊清『浙江民居』中国建築工業出版社、2009、第 202 頁

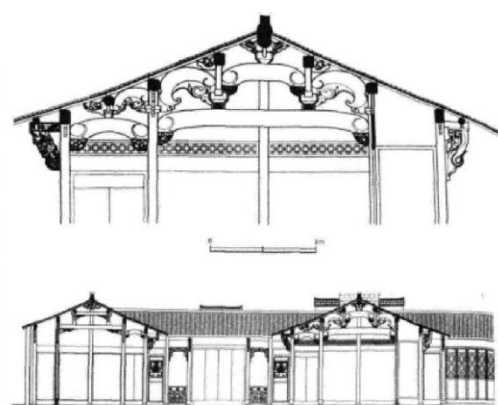
実地調査ある



一階平面図



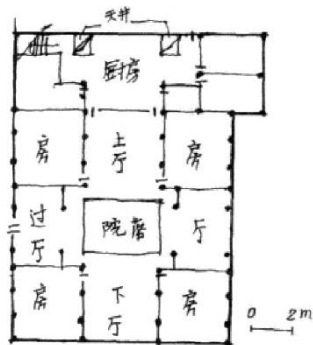
外觀



断面図

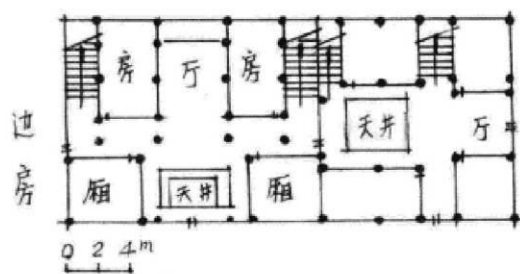
256 江山廿八都楊宅

出典：丁俊清『浙江民居』中国建築工業出版社、2009、第 202 頁
実地調査ある



257 松陽李坑村 46 号

出典：丁俊清『浙江民居』中国建築工業出版社、2009、第 205 頁



一階平面図



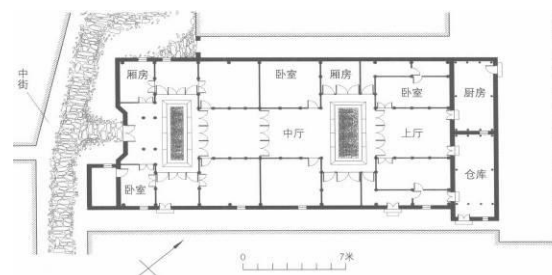
中庭



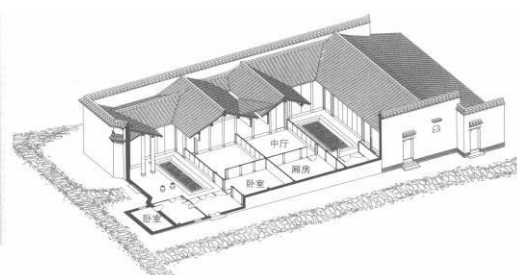
外観

258 衢州峡口徐開校宅

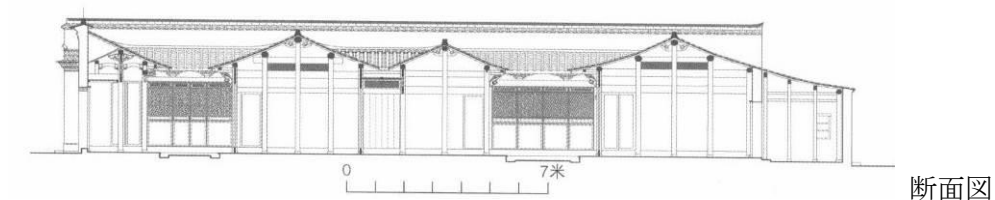
出典：李秋香『浙江民居』清華大学出版社、2010、第 246 頁
衢州市江山市峡口鎮中街 13 号に位置する。建造年代は 1910 年である。敷地面積 340 平米。現在は徐氏一族が住んでいます。今も住宅として使用する。



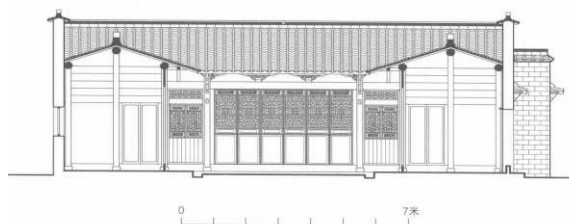
平面図



鳥瞰



断面図

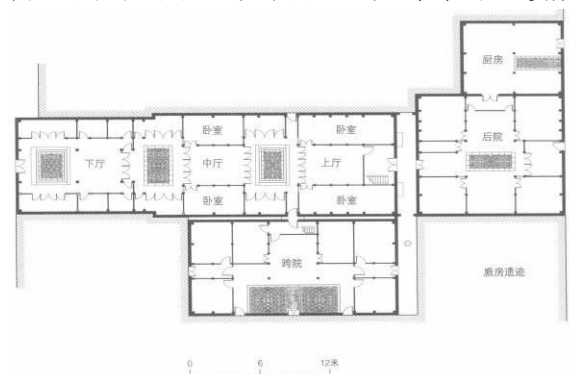


断面図

259 衢州峡口徐瑞陽宅

出典：李秋香『浙江民居』清華大学出版社、2010、第 252 頁

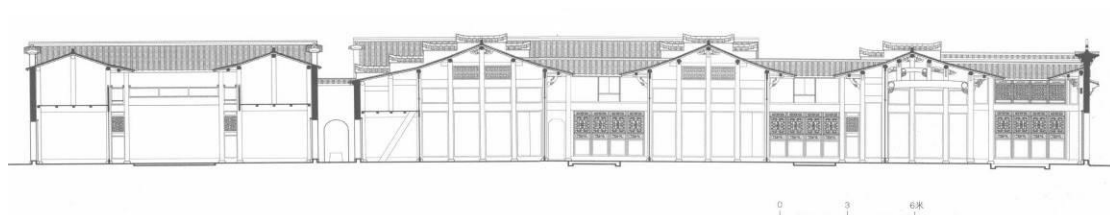
衢州市江山市峡口鎮中街 25 号に位置する。清末に建造された。今も住宅として使用する。



一階平面図



断面図

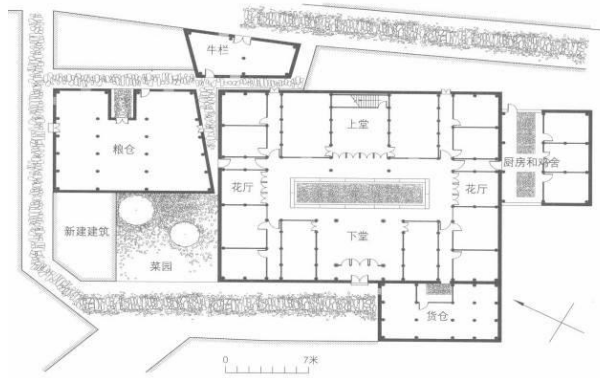


主軸線断面図

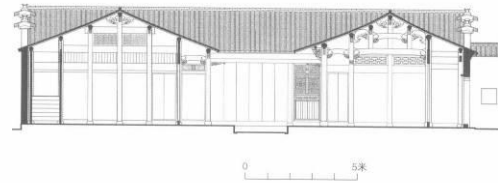
260 衢州峡口徐文金宅

出典：李秋香『浙江民居』清華大学出版社、2010、第 257 頁

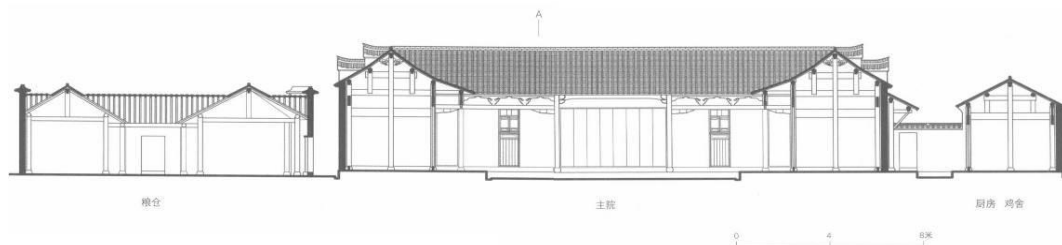
衢州市江山市峡口鎮文昌閣巷 1-4 号に位置する。敷地面積約 750 平米。2007 年焼失した。現存しない。



一階平面図



断面図

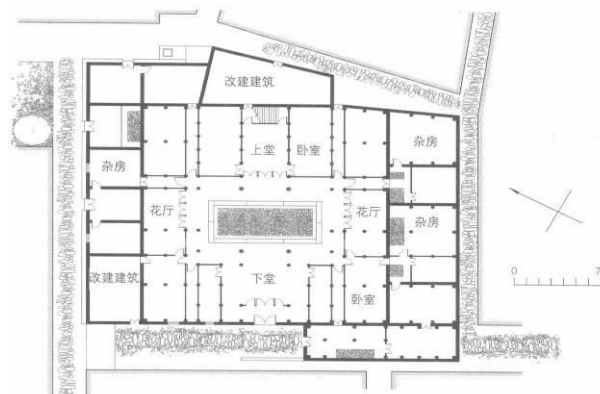


横断面図

261 衢州峡口鄭百万宅

出典：李秋香『浙江民居』清華大学出版社、2010、第 264 頁

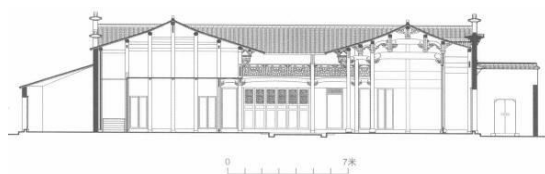
衢州市江山市峡口镇文四方田 1 号に位置する。敷地面積約 730 平米。鄭百万より清代に建造された。鄭百万は峡口へ官僚を就任し、退職後峡口に土地を購入し、家を建造した。今も住宅として使用する。



一階平面図



鳥瞰



断面図



立面図

262 衢州峡口劉文貴宅

出典：李秋香『浙江民居』清華大学出版社、2010、第 269 頁

衢州市江山市峡口镇文皆書巷 9 号に位置する。敷地面積約 840 平米。清代に建造された。

元は鄭百万の財産、後は劉氏が購入した。今も住宅として使用する。

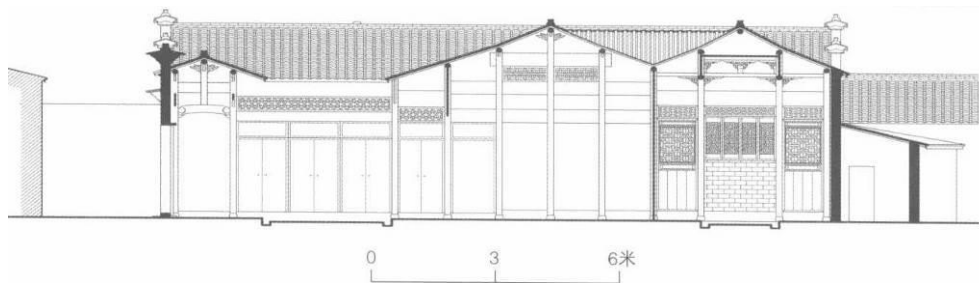


一階平面図

鳥瞰



立面図

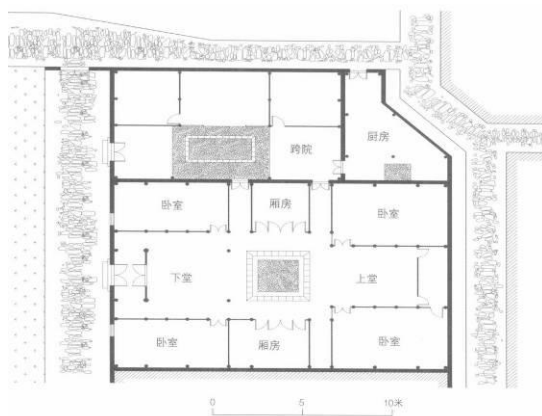


断面図

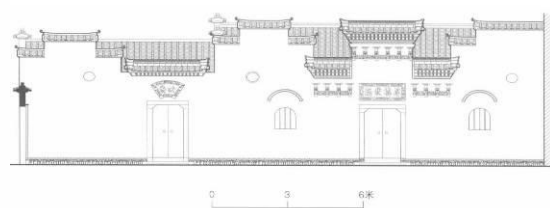
263 衢州峡口周樹根宅

出典：李秋香『浙江民居』清華大学出版社、2010、第 277 頁

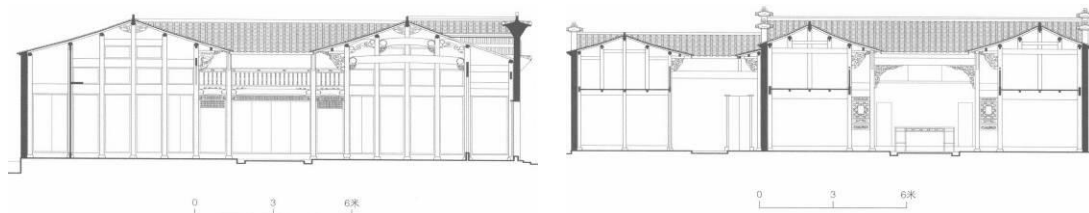
衢州市江山市峡口鎮中橫街三弄 11 号に位置する。敷地面積約 380 平米。民国に建造された。今も住宅として使用する。



一階平面図



立面図

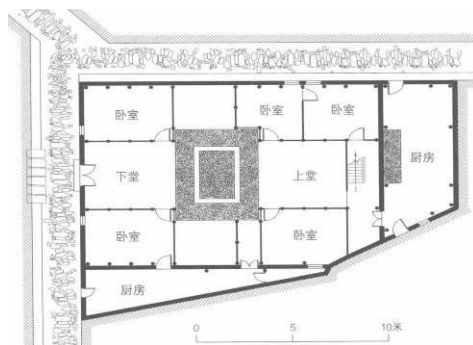


断面図

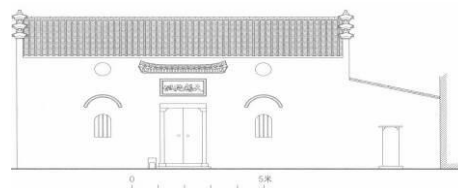
264 衢州峡口周朝柱宅

出典：李秋香『浙江民居』清華大学出版社、2010、第 283 頁

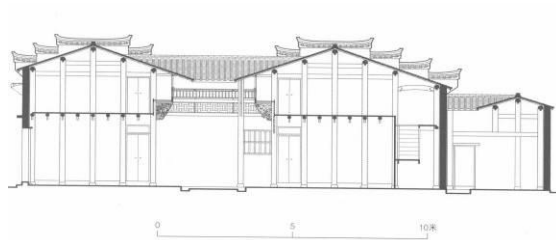
衢州市江山市峡口鎮中横街三弄 9 号に位置する。敷地面積約 250 平米。民国に建造された。今も住宅として使用する。



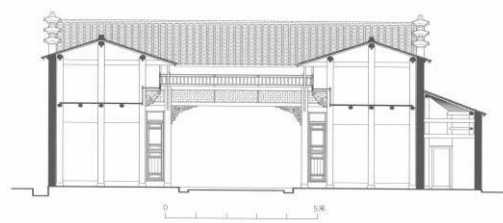
一階平面図



立面図



断面図



265 遂昌王村口ある住宅

実地調査

麗水市遂昌県王村口鎮に位置する。水辺の住宅である。



道沿い外観



川沿い外観

266 東陽白坦郷務本堂

出典：丁俊清『浙江民居』中国建築工業出版社、2009、第 176 頁

金華市東阳市巍山鎮白坦村に位置する。清道光年間（1821-1850 年）に建造された。進士吳品珩和貢生吳品瑀兄弟の住宅であった。今も住宅として使用する。浙江省文物保護單位である。



一階平面図

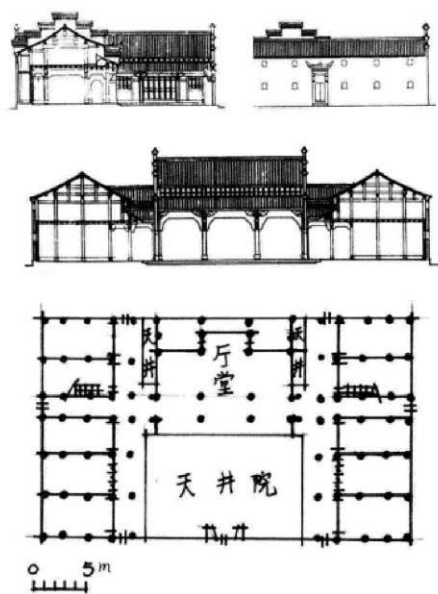


細部

267 東陽史家庄花厅

出典：丁俊清『浙江民居』中国建築工業出版社、2009、第 178 頁

浙江省文物保護單位である。詳しい説明はない。

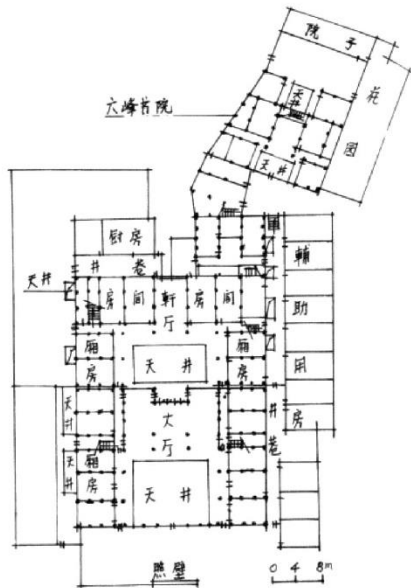


268 武義ユ源声遠堂

出典：丁俊清『浙江民居』中国建築工業出版社、2009、第 178 頁

李秋香『浙江民居』清華大学出版社、2010、第 137 頁

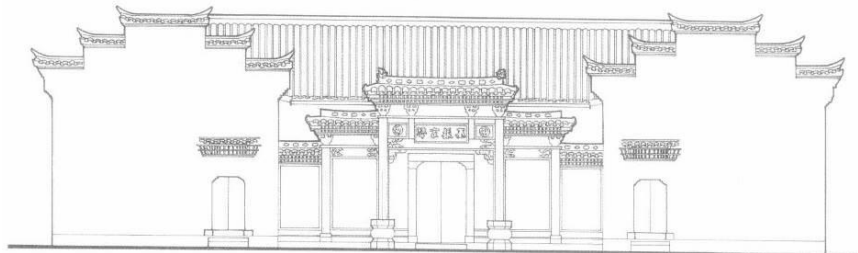
金華市武義県ユ（俞）源郷ユ源村に位置する。明末に建造された。今も住宅として使用する。国家重点文物保護單位である。



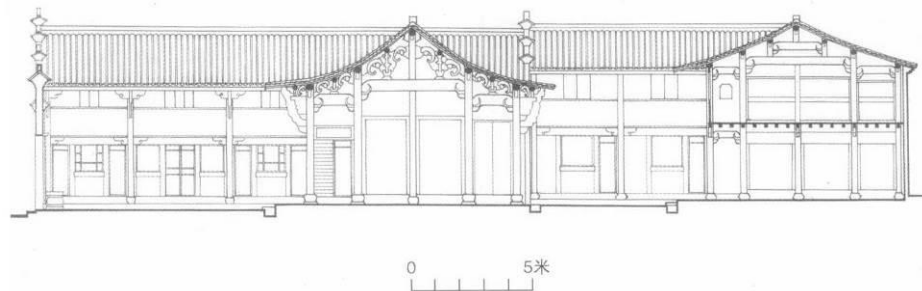
一階平面図



外観



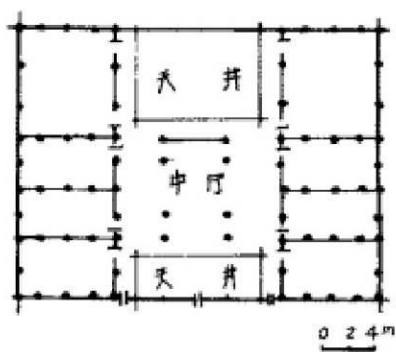
立面図



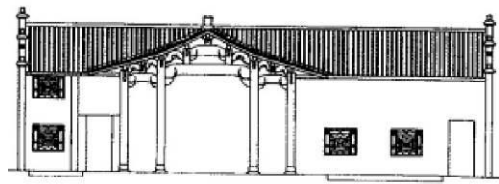
断面図

269 武義郭洞燕翼堂
詳しい説明はない。

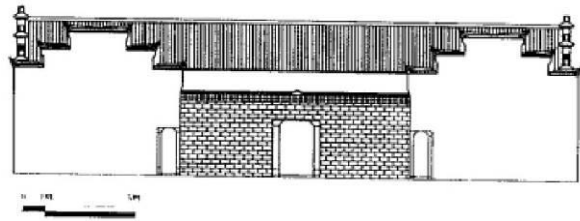
出典：丁俊清『浙江民居』中国建築工業出版社、2009、第179頁



平面图



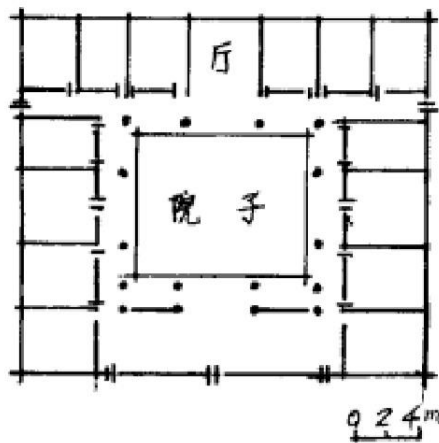
断面図



立面図

270 磐安樺溪余慶堂
詳しい説明はない。

出典：丁俊清『浙江民居』中国建築工業出版社、2009、第 179 頁



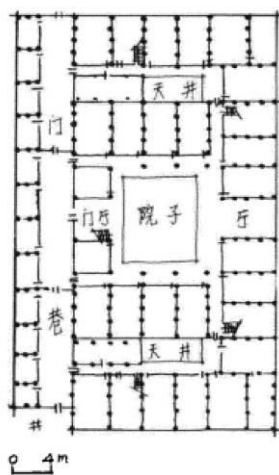
一階平面図

271 縉雲河陽循規映月宅

出典：丁俊清『浙江民居』中国建築工業出版社、2009、第 180 頁

実地調査ある

麗水市縉雲県新建鎮河陽村に位置する。国家重点文物保護単位である。



一階平面図



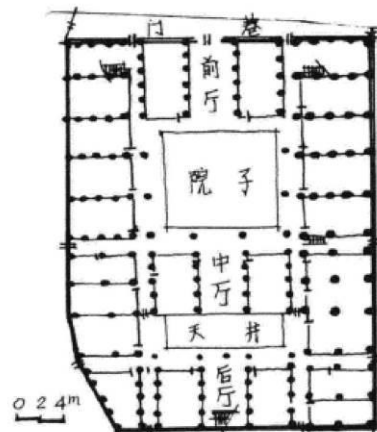
門巷（本人撮影）

272 縉雲河陽廉讓之間宅

出典：丁俊清『浙江民居』中国建築工業出版社、2009、第 180 頁

実地調査ある

麗水市縉雲県新建鎮河陽村に位置する。国家重点文物保護単位である。



一階平面図

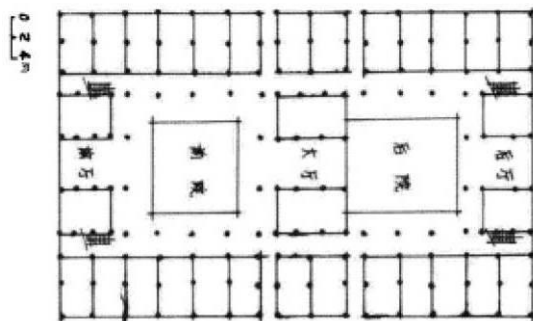


中庭（本人撮影）

273 東陽黃田ハン前台門

出典：丁俊清『浙江民居』中国建築工業出版社、2009、第 180 頁

詳しい説明はない。

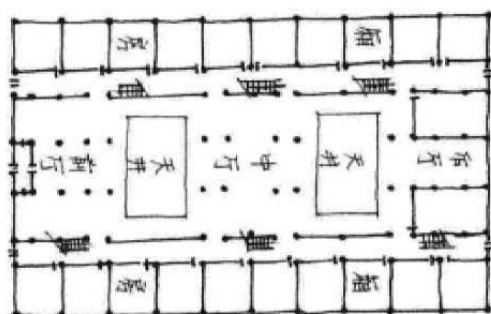


一階平面図

274 義烏雅端容安堂

出典：丁俊清『浙江民居』中国建築工業出版社、2009、第 180 頁

詳しい説明はない。

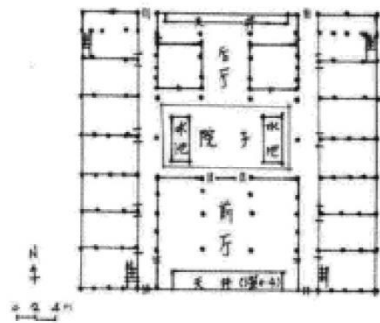


一階平面図

275 金華雅ハシ七家庁

出典：丁俊清『浙江民居』中国建築工業出版社、2009、第181頁

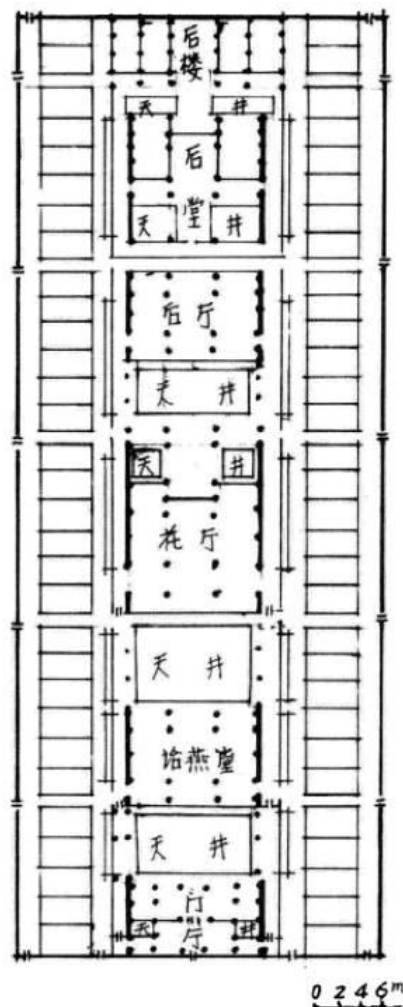
明代に建造された。国家重点文物保护单位である。



276 東陽紫薇山尚書邸

出典：丁俊清『浙江民居』中国建築工業出版社、2009、第 182 頁

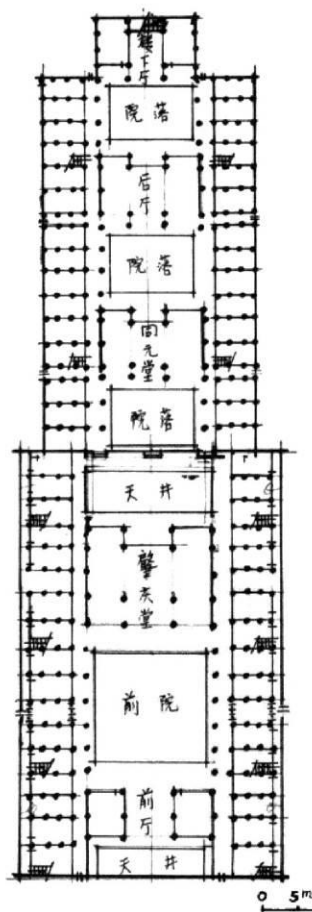
明末に建造された。詳しい説明はない。浙江省文物保護単位である。



277 東陽六石鎮肇慶堂

出典：丁俊清『浙江民居』中国建築工業出版社、2009、第 182 頁

明代に建造された。詳しい説明はない。



一階平面図



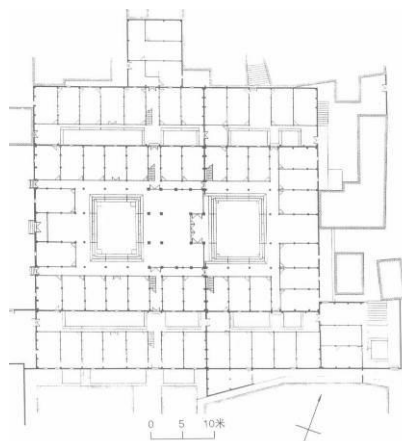
中庭

278 武義ユ源裕後堂

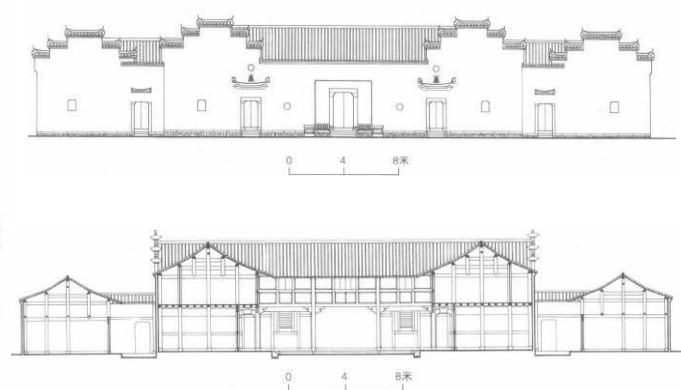
出典：丁俊清『浙江民居』中国建築工業出版社、2009、第 183 頁

李秋香『浙江民居』清華大学出版社、2010、第 151 頁

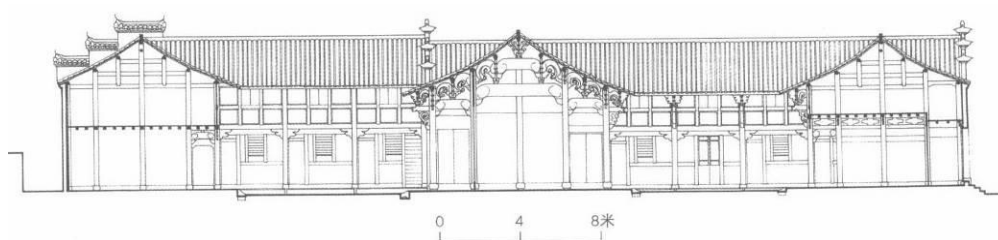
金華市武義県ユ（俞）源郷ユ源村に位置する。清乾隆五十年（1785 年）に建造された。敷地面積 2560 平米。今も住宅として使用する。国家重点文物保护单位である。



一階平面図



立面図と断面図



断面図

279 武義ユ源上万春堂

出典：丁俊清『浙江民居』中国建築工業出版社、2009、第 183 頁
金華市武義県ユ（俞）源郷ユ源村に位置する。詳しい説明はない。国家重点文物保護単位である。



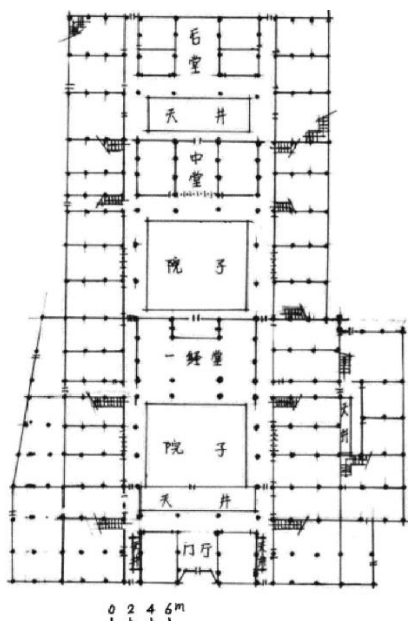
一階平面図



外観

280 東陽湖溪鎮馬上橋花庁

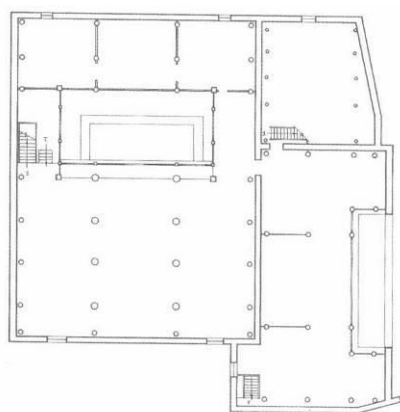
出典：丁俊清『浙江民居』中国建築工業出版社、2009、第 184 頁
金華市陽阳市湖溪鎮馬上橋村に位置する。清道光十七年（1837 年）に建造された。国家重点文物保護単位である。



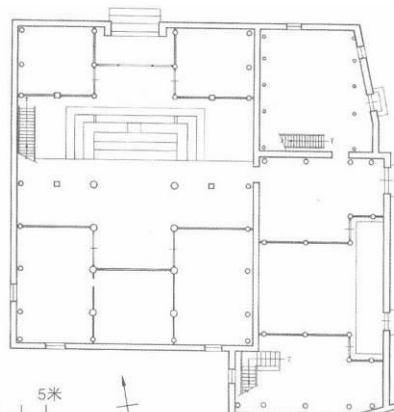
一階平面図



大門



一階平面図



二階平面図

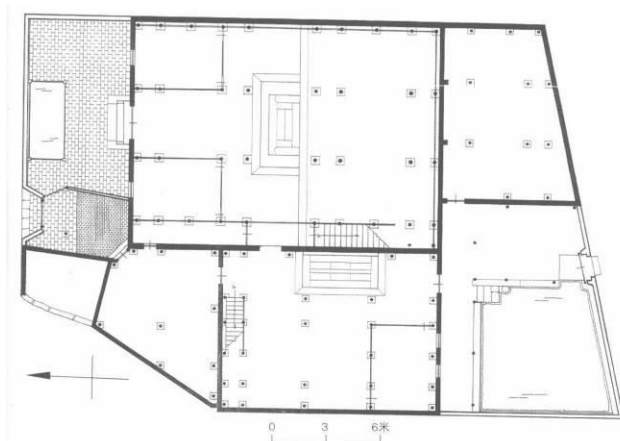


断面図

284 建徳新葉種徳堂

出典：李秋香『浙江民居』清華大学出版社、2010、第 76 頁

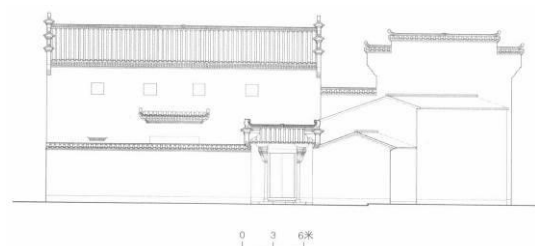
民国初年に建造された。詳しい説明はない。



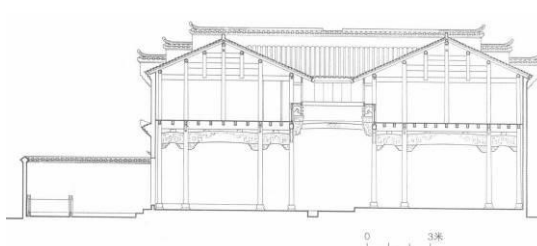
一階平面図



コーベル



立面図

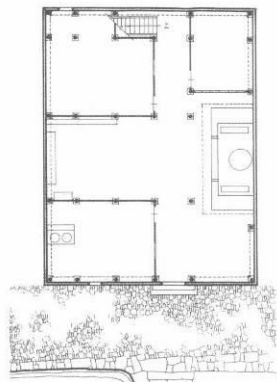


断面図

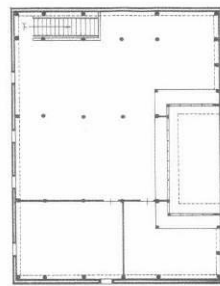
285 建徳新葉是亦居

出典：李秋香『浙江民居』清華大学出版社、2010、第 85 頁

民国初年に建造された。詳しい説明はない。



一階平面図



二階平面図

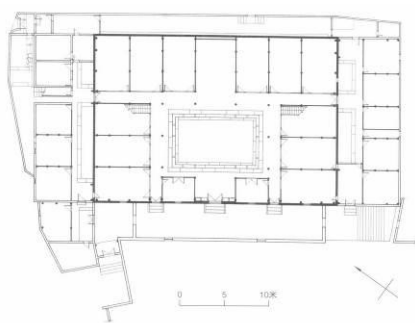


廂房

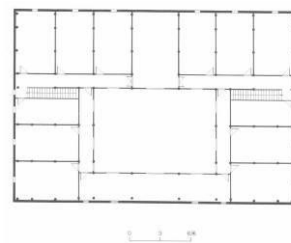
286 武義ユ源玉潤珠輝宅

出典：李秋香『浙江民居』清華大学出版社、2010、第 144 頁

金華市武義県ユ（俞）源郷ユ源村に位置する。詳しい説明はない。国家重点文物保護単位である。



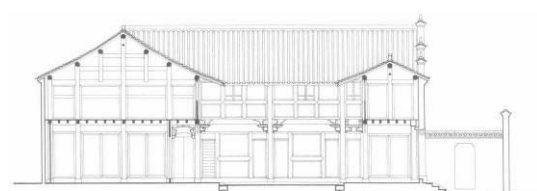
一階平面図



二階平面図



立面図

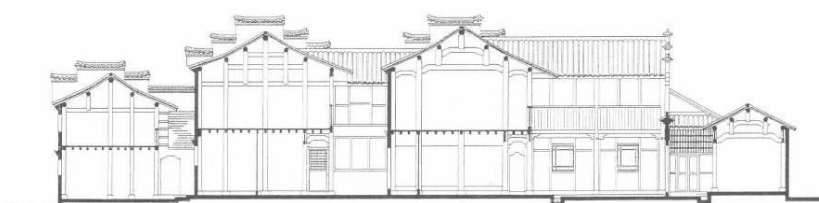


断面図

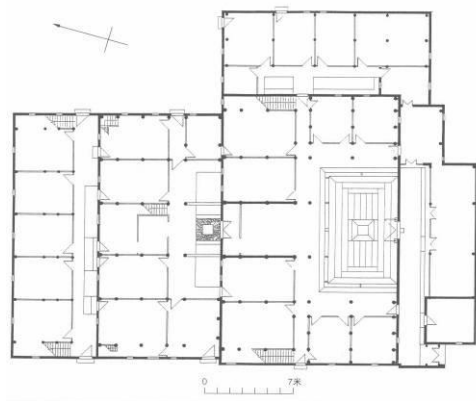
287 武義郭洞新屋里宅

出典：李秋香『浙江民居』清華大学出版社、2010、第 188 頁

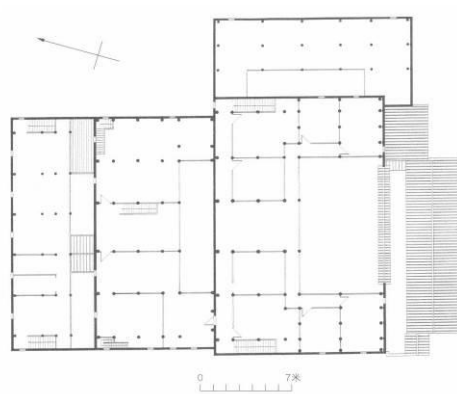
金華市武義県武陽鎮郭洞村に位置する。何士珩より明末に建造された。何氏一族後世が衰え、住宅を売って、今は多くの家族が集住する。



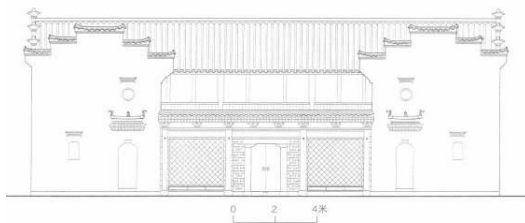
断面図



一階平面図



二階平面図

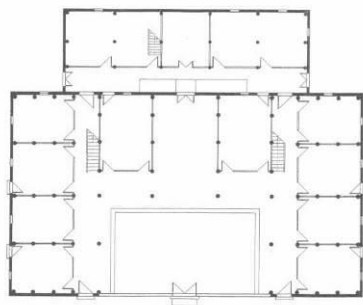


立面図

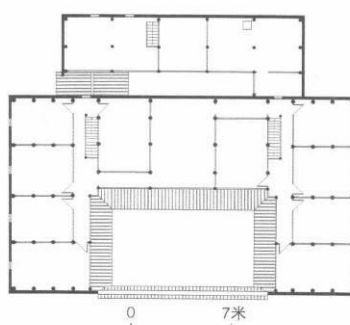
288 武義郭上萃華堂

出典：李秋香『浙江民居』清華大学出版社、2010、第 191 頁

金華市武義県武陽鎮郭洞村に位置する。詳しい説明はない。



一階平面図

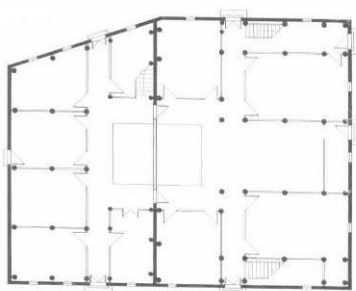


二階平面図

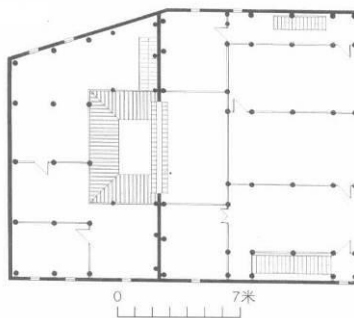
289 武義郭下慎徳堂

出典：李秋香『浙江民居』清華大学出版社、2010、第 193 頁

金華市武義県武陽鎮郭洞村に位置する。詳しい説明はない。



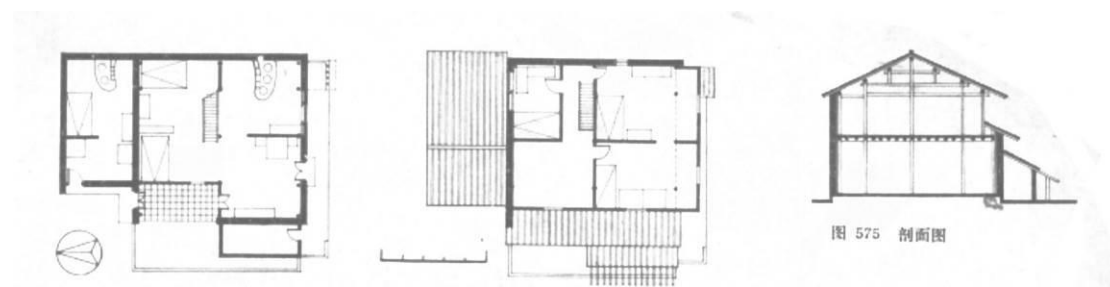
一階平面図



二階平面図

290 東陽巍山鎮趙宅

出典：中国建築技術發展中心歴史研究所『浙江民居』中国建築工業出版社、1984、第 259 頁
詳しい説明はない。



一階平面図

二階平面図

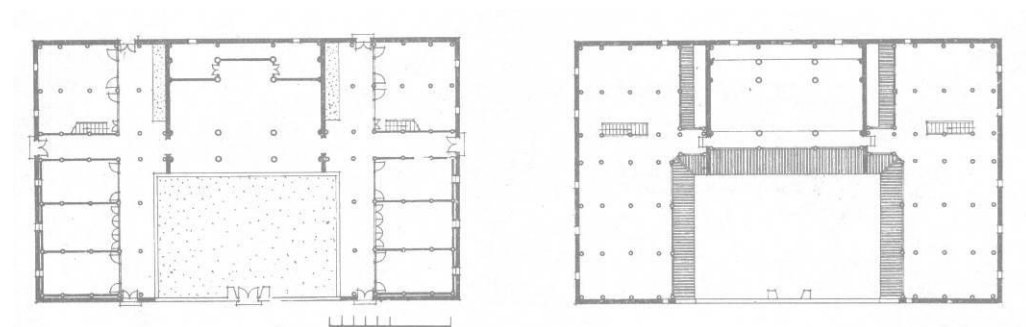
断面図



外観

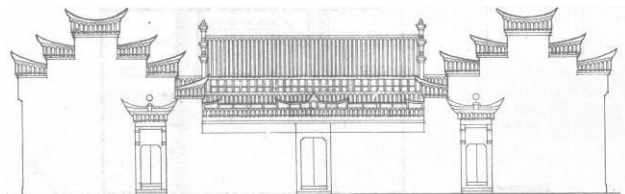
291 東陽水閣庄葉宅

出典：中国建築技術發展中心歴史研究所『浙江民居』中国建築工業出版社、1984、第 261 頁
詳しい説明はない。

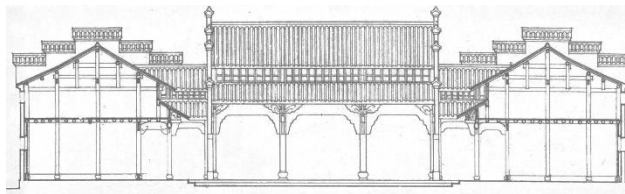


一階平面図

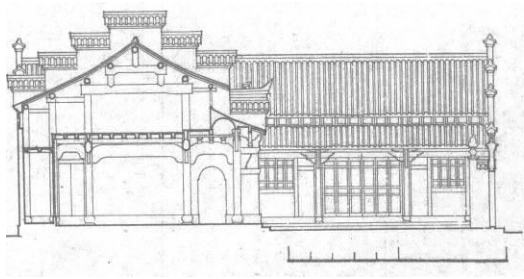
二階平面図



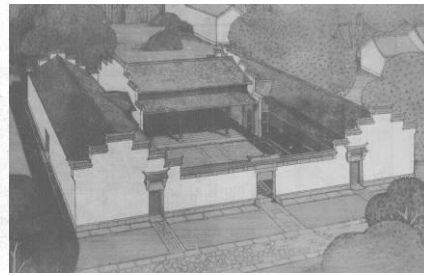
立面図



断面図



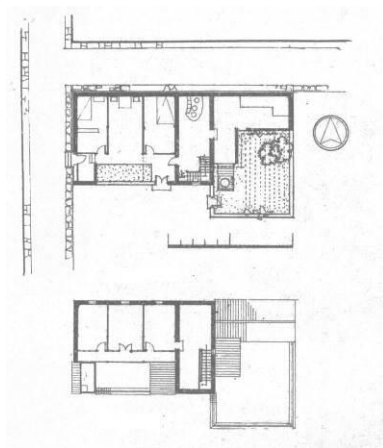
断面図



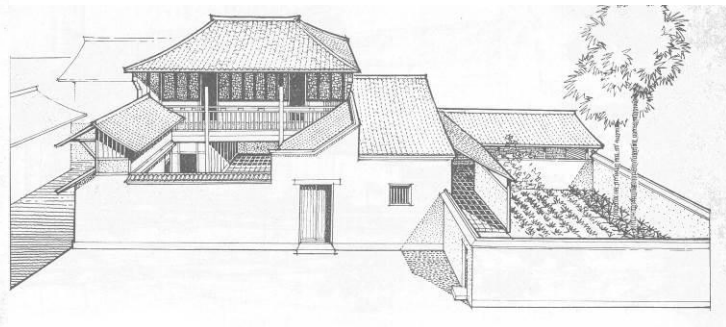
鳥瞰

292 東陽城西街杜宅

出典：中国建築技術発展中心歴史研究所『浙江民居』中国建築工業出版社、1984、第 263 頁
詳しい説明はない。



平面図

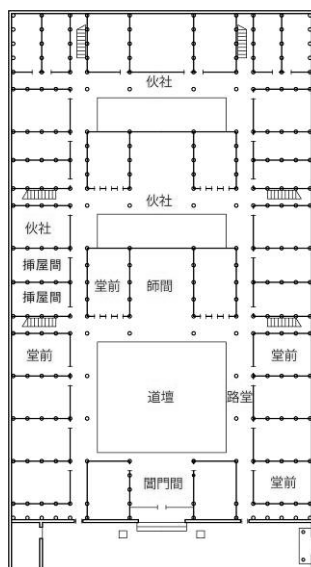


外観

293 縉雲河陽朱宅

実地調査

麗水市縉雲県新建鎮河陽村に位置する。清代に建造された。今は朱氏一族が集住する。国家重点文物保护单位である。



一階平面図



道壇（中庭）